
御注文は？～魔法使いで！～

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

御注文は？〜魔法使いで！〜

【Nコード】

N6009B

【作者名】

雨月

【あらすじ】

魔法使い・・・そんなものに興味のないこの話の主人公は親友とともに無事、高校二年へと進級できたので記念と称して隣町に遊びに行く。だが、そんな彼は日頃の行いが悪かったとしか思えないことに遭遇したのであった。

第一章 とあるレストランの騒動（前書き）

皆様のおかげで連載になりました。話がちょっと変わっていきなり、登場人物に若干の違いが出たりしていますが、気にせず、読んでください。まだ、第一話ですが、アドバイスをくださる方はお願いします。

第一章 とあるレストランの騒動

一、

人はそれぞれ、自分の世界というものを持っている。俺？俺の描く世界には人間は少ない。何故かって？俺は人間よりもネジとかに興味があるからだ！！

俺の名前は剣山つるぎやま 零時れいじ。最近、高校二年生になった世間知らずのがきんちよです。

今日はお隣で腐れ縁、そして親友の後鳥河ごとりがわ 瑞樹みずきと共にちよつと家から遠い町（隣町）に来て高校進級記念をしているところだ。

今は瑞樹の趣味の萌々なショップを行ったりきたりしている。俺はネジでも眺めていればいいのだが、中にいるのは綺麗な美少女たちだ。ううむ、なんだか俺が異端児、もしくはSFに飛び込んだ魔法使いのような感じを受けるな。

「なあ、瑞樹・・・まだ終わらないのか？」

俺の親友は美少年と太鼓判を押してもいいだろうという感じの少年で、眼鏡をかけており、頭もよく、更に！眼鏡のくせして運動神経まで良いのだ！だが、今のところ現実の女の子に興味を持っていないらしく、過去一度、不思議に思った俺が奴に尋ねてみると、奴は夕日をバックに言ったものさ・・・

「彼女？ああ、僕には心に決めた人たちが居るからね・・・彼女たちを手に入れるのなら、なんでもしてみせるよ。」

彼女・・・奴にとっての彼女は二次元の世界の住人なんだろうかと察しがつく。そのとき、俺も奴から質問された気がする・・・勿論、夕日をバックに・・・

「零時、君こそ彼女を作るべきだと思うね。技能の全てにおいてノーマルな能力しか持って居ないが、君の顔は美男子といっても過言ではないだろう？僕としては君の毒牙にかかる女の子が少々気の毒であるが、まあ、それは目をつぶっておこう。まさか、人間をサイボーグとかにはしないだろうね？」

そのとき初めて、俺は奴に対していいようのない・・・少なくとも負の感情を抱いたのは間違いない。全く、そういうことを真面目に言ってもらっては困る。瑞樹はいつも真面目だからな・・・奴が嘘をついたことは過去一度も無い。ゆえに、ここまで真剣にこんなところに居れるのだろうか。

そんな事を頭の中で考えている間、奴は黙って慎重に何かを吟味しながら何かをぶつぶつ呟いていた。だが、こちらを見て何かを言い出した。

「それならさあ、零時、君が決めてくれよ。僕にはこのどちらかまでは決めれるんだが、どっちかを選ぶなんて無理だ!!」

俺の目の前に二体の人形を差し出してきた。俺はそれを見ないで瑞樹を見る。

「おいおい、こんなのどっちとも買えばいいじゃないか？別に金がないってわけじゃないだろ？お前の家は金持ちじゃないか。それに、自分で決めるもんだろ？」

だが奴は首を振ってまじめに俺に答えてきた。

「甘い、甘いぞ、零時!! いいかい、この二つの選択は大事なんだ。それに、二つあっては意味が無いんだ。いいものって物は両方あつ

てはならない・・・一つだからこそ、初めてそれは意味を成すんだ。太陽が二つあってはいけないんだ!!そして、輝くものは美しいんだ!!」

ああ、そうですかい・・・全く、理解できない頭の持ち主だな？仕方ないので俺は瑞樹がどっちでもよさそうだったので右腕に持っていたほうを指差した。

「零時、その子を選んだ理由は？」

理由？・・・そんなもんまで考えないといけないのか？さて、俺にはそんな知識はあんまり無いのだが・・・困ったな。こいつの真剣な顔は怖いぞ。もしも、適当に選んだなんてばれたらどんなことをされるか・・・過去一度、似たようなことをして仕返しかどうかは分からないが、俺の部屋のものが全てこのような人形になっていたことを思い出す。急いで奴につき返したな・・・。

「・・・いや、ちょっと待った。どっちかというところのほうがいいかもしれない。いやいや・・・やっぱり初めのほうだ。うん、なんだかこっちは機械っぽい感じがするからな。」

これぞ、俺の編み出した技、『焦らして、やっぱりこっち!』だ!それに、最後には俺っぽいことも含まれているからこれならば奴にはばれまい。

「さすが、機械フェチの零時だね。」

うんうん、こいつは見事に引っかかってくれたな。

「この子がロボットであることを気付くなんてね。流石だ・・・。」

「あ・・・あはははっ、それより、さっさと次行くぞ！！もう昼だ。」

まあ、何とかこの場をしのぐことが出来た。ううむ、俺としてはどちらでも良かったのだが、まあ、良かったということにしておこう。

買った人形が入っている箱を大事そうに持って瑞樹は俺に提案してきた。

「零時、ここいらに新しいレストランが出来てるの知ってる？人気なんだよ！！」

確か、出来たのは一年ぐらい前だったか？結構噂になっていたが新しいのか？それに、噂に聞いたところじゃ他のレストランと違ってらしいな。

「そうかい、お前が言うってことは普通のレストランじゃないってことか？」

よくぞ気づいたというような顔で俺を見る瑞樹。ああ、やっぱり普通じゃないんだな。まあ、俺もここいらにいったことのあるレストランがあるんだがな。

「ウェイトレスさんの制服が凄いいんだよ！！パンツがちらって見えたりするかもよ！！僕、まだ行ったこと無いんだ。」

一度言い始めたらなかなか諦めてくれないこいつの事だ。だが、俺も腹が減っているので条件は提示させてもらおう。だが、もしかしたら・・・。

「瑞樹、その店の料理はうまいのか？高いか？」

それにも頷く瑞樹。ああ、これじゃ、否定することも出来んな。

「・・・わかった。そこでいいからさっさと案内してくれないか？」

「流石、僕の親友だね。やっぱり君も行きたいんだね？」

さあな、俺としてはウェイトレスさんがロボ○ップもしくは、ドラ○もんだったらいいな。うむ、早くロボットの技術でも進まんな？

たどり着いたファミレスには当然のように俺の期待通りのウェイトレスさんは一人もおらず、美少女といってもいい方々が働いていた。

「いらっしやいませ〜何名様ですか？」

「二名です!!」

「か、かしこまりました・・・こちらへどうぞ・・・」

おいおい、瑞樹・・・そんなにきらきらした目線をウェイトレスさんに送るんじゃない！ものすごく引かれてるぞ？汗かいてるみたいだし・・・。

「ご、ご注文が決まったらお呼びくださいね？」

出来れば呼び出して欲しくないような顔でそんなことを言われたらどうだろうね。俺は手元にあった呼び鈴のようなものを瑞樹に取

られないようにした。何故か？簡単だ、奴がウェイトレスさんと呼んで話し込んでしまうからだ。一緒にやってきた俺までこの店のブラックリストに載りたくないからな。

来て見て初めて分かったのだが、意外としゃれたつくりの店内は清潔で、まあ、ウェイトレスさんでも眺めていれば少なくとも退屈はしないだろう。俺としてはネジを眺めていたほうが気が安らぐんだからな。ま、瑞樹には悪いが・・・

物思いにふけていた俺に瑞樹が話しかけてきた。

「ねえ、そういえば零時ってどんな女の子が趣味なんだい？」

「・・・・ドラ○ちゃん。」

「真面目に答えてくれよ！」

俺は大真面目に答えたつもりだ。奥さんにするならやっぱりドラ○ちゃんだろうよ。まあ、奴が言っていることは大体分かるさ・・・これは奴なりの作戦、話に巻き込まみたいのだ！よし、いいだろう、その作戦に乗ってやろうじゃねえか！！

「・・・物静かな人で、俺が間違ったときに後方から支援してくれそうな人だな。」

「へえ、そうなんだ・・・」

そう、ここからだ・・・さて、覚悟を決めるしかないな・・・。

「僕はね、まず・・・（以下略）」

奴の話は凄い長い。まずはこちらの話を少しだけさせ、その後は

終了時間までずっと話している。未だに運ばれてきている注文の品はお冷のみだ。当然だ、まだ何も頼んじやいないし、メニューも見えてないぞ。

「・・・で、夏の水着はやっぱり・・・」

「ちょっと待った！おい、まずは昼食を頼むぞ。後、なるだけ小さな声で話してくれないか？さっきからかなり店内の連中がこっちを見ている。」

ここで怖いと思ったのは店内の連中の客がこっちを見て瑞樹に共感しているに違いないという事実だ。くそ、この中にドラ○ちゃん派は俺一人なのか？

「ま、そうだね、とりあえずメニューを見て頼もうか？うふふ・・・とうとう、僕のこの手である子達を動かせるんだね？僕がスイッチさえ押せば、きてくれるんだろ？うなあ・・・。」

確かにそうだろうが、残念だがその役割は俺がやらせてもらおう。うん、ウェイトレスさんがかわいそうだ。俺だってずっとこんな奴のきらきら目線を直視できる自信は全く無いからな。自分が嫌がることを他人に押し付けてはいけない。

「さて、僕は前から決めてたよ。零時は？」

お冷を全て飲み干し、俺はスイッチを押した。

「俺も決まったぞ。このお手ごろハンバーグだ。お前はどれだ？」

「これ！この親子丼！あれ？ボタンが無いけど、零時知らない？」

くくく、まんまと引つかかったな？俺はやってきたウェイトレスさんにさっさと注文を告げ、お冷のお変わりを要求・・・何も言えなかった奴のあの顔は面白かったな。

「零時、酷いよ！！スイッチ隠し持ってたなんて！！」

「たまたまだ。たまたま手元にあっただけだ。それ以外の事なんて考えてもいないぞ。」

へへへ、まあ、奴がウェイトレスさんに話しかけている間は永遠、俺の元に頼んだものは来ないだろうな。

「ところで、零時・・・この店の噂知ってる？」

噂？怪談か何かかな？それとも、実は店員が全てロボットとか？知らないな。

「なんだそれ？」

「やっぱり知らないんだね？実はさ・・・この店にはとある噂があるんだよ！ここの女の子に・・・。」

そのときちょうど、お冷を持ってきてくれたウェイトレスさんがこっちに来た。颯爽と歩いているような感じの気の強そうな美少女だ。その美少女がなんと、こけて俺の頭に冷水を引っ掛けやがった。おいおい、まだこの時期（春）は早いぞ？

第一章 とあるレストランの騒動（後書き）

さてさて、どうだったでしょうか？実は、この小説はもうちょっただけ遅らせて出そうと思っていたのですが・・・メッセージをくださった方がいたので連載することにしました。これから先、どのくらいのお付き合いになるのかわかりませんが、よろしくお願いします。前書きでも書いたとおり、おかしいところはご指摘お願いします！今のところ、ちよつとした物語も書いていく予定です。

店員：いらっしゃいませ、何名様ですか？

二、

俺に頭から水をぶっ掛けやがったウェイトレスは頭をぺこぺこ下げていた。

「すいません！！すいません！！すいません！！」

別に謝ってもらわなくて結構なので、さつさとタオルなんかを持ってきてもらいたい。ほら、春先だって言っても風邪を引く可能性だってあるだろ？今のところ皆勤の俺が休んでしまったらさぞかし職員方が悲しむに違いない。

「・・・いいですよ、出来れば早くタオルかなんか貸してもらえませんか？濡れてるんで・・・。」

「気がつきませんでした！！す、すいませんっ！！」

あたふたと走っていった女の子の後姿を見送っていたら別のウェイトレスがこちらへとやってきた。

「・・・どうぞ、タオルです。すみません、ご迷惑をおかけしてしまつて・・・。」

なんとも無機質な声なのだろうか？この人、ロボットじゃね？え、違うかな？

そんなことを考えながらさつさとタオルで水を拭いた。

「助かりました、これで風邪はひきそうにありませんよ。ありがとう

うございます。」

「……………いえ、こちらの不手際ですみませんでした。あなた方の注文したものは全て、無料で結構です。」

「結構ですよ、ね、零時？こんな可愛い女の子に話しかけられたんだからさ？」

ニヤニヤしながらこちらを見ている瑞樹。おいおい、何がそんなに嬉しいんだ？

「確かにそこまでしてもらわなくて結構です。水がかかったぐらいだし……………」

「……………そうですか。それでは、失礼します。」

幽霊のように姿を消し、そのウェイトレスさんは去っていった。辺りからはひそひそ声のようなものが聞こえてくる。

「……………さっきの子、この前もドジしてなかったか？」

「ああ、してたな……………確か、水ぶっ掛けた拳句に客の頭からシチュートかをぶっ掛けられてたっていったな。見たかったなあ……………」

「そうだな、掛けられた女は『こんな店、つぶれておしまいっ!!』って言ったらしいな？しかし、ある意味羨ましい奴だな。」

「ああ、その姿を写真でとっているやつもいたらしいなあ……………」

どうやら、俺が初めての犠牲者ではないようだ。まあ、終わったことだし、いちいち水をぶっかけられただけで怒ってはいられない。

「ぶぷっ、零時、まるでお漏らしたみたいにズボンが濡れてるよ？」

「けっ、そんなのわかってらあ！！ちょっとトイレに行ってくる！！」

「ぶぷ、もしかして本当にちびったとか？」

なんて親友だ！！今すぐに奴の残っているお冷を頭からぶっ掛けてやろうか？そうすりゃ、こいつに馬鹿にされるのだけは終わるかな……。

「零時、帰ってきたらこのお店に噂があるって話しをするよ。いつものように、話は長くなると思うから大きいほうもしてきなよ。」

「……噂って、さっきみたいな目つきの悪い女の子が他人に水をぶっ掛けたり運ばれてきた料理を頭からかぶせたりするもんじゃないよな？」

当然、違うとばかりに頭を振る瑞樹。やれやれ、俺は立ち上がったトイレへと向かったのであった。飯食うところで下ネタはやめとけよ？睨まれるぜ？

用を足し、お漏らししたようになっていたズボンを拭いて外に出ようとする……あのタオルを渡してくれたウェイトレスが入ってきた。男子トイレに……。

「・・・同僚が本当に申し訳ありませんでした。」

成程、この子はあのドジの代わりにきちんと謝りに来たのか・・・
ドジの友達はいいい人なんだな。ところで、ここは『覗きだ!』と叫ぶべきか?

「いえ、もう気にしてませんから・・・。」

「・・・恥ずかしながら、頼みたいことがあるのですが・・・。」

「頼み? 何ですか、それ? (男子トイレに入ってきたことだろうか?)」

「・・・ええ、あの子は・・・残念ながら、今度このようなことをしたらウェイトレスの仕事を降ろされてしまうのです。今のところ誰にもばれていませんので、できましたら店長などには訴えないでもらいたいです。」

ううむ、それは流石に虫が良すぎると思うのだが・・・まあ、今ここで俺が店長に文句を言っても時すでに遅しだな。しかし、他の客も知ってなかったか?

「ええ、別にそれはいいですよ。友達が待ってるんで、それでは・・・。」

「・・・ありがとうございます。」

俺は男子トイレにその静かなウェイトレスを残して扉を開けた。
遠くに店長らしき人が出ているが、たまたまだろう・・・ニコニコしているところには何処にも部下の失態を怒っているような顔では

ない。多分、何か他に用があったのではないかと思われる。誰も何も言っていないみたいだしな。

「あ……。」

「・・・？」

男子トイレの近くにあのウェイトレスが居た！俺と目が合った瞬間、持っていたお冷を持って何処かに行ってしまったと思われたが・・・俺の右足に躓いて、こけた。盛大に・・・だが、一見すると俺が襲い掛かっているようにも見える。

「ぎゃあああ！！」

彼女の手から放り出された冷水の入ったコップは一步を踏み出した俺の脚にかかり・・・更に、コップは割れずに俺の足と床の間に入り込む。ううむ、この短い間にここまで状況把握が出来るようになってるなんて、意外と俺って凄い？まあ、状況把握が出来たところで何が出来るってわけじゃない。分かるだけじゃ駄目なんだろうなあ・・・結果、俺はそのコップを踏んで滑った。

「うわああ！！」

俺は無様にこけそうになったので、何か、何かつかまるものはないかと瞬時に手を振り回した。そして、俺は手に触れたものを藁にも縋る思いで掴んだ！！

「「「「おおっ！！」」」」

お客が歓喜の声を上げる。きっと、瑞樹の声も入っていたんだろ

うなあと俺は思うね。いや、後から思った話だ。掴んだものはそのまま滑った。

まあ、結局・・・俺は無様にこけたんだがな・・・ああ、水が尻に染み渡って冷たいなあ・・・ああ、ああ、何で俺はこんな目に遭うのだ？あれか？今日、瑞樹のお買い物を適当に決めちゃったからなのか？あれが原因なのか？

「あいたたた・・・。」

「・・・お客様、すみませんが・・・ちょっとお話があるので来てもらえませんかね？」

状況把握をしてみよう。

今、証拠となりうるコップは俺が盛大にこけたときにどこかに吹き飛んでしまった。

そして、次に・・・俺が掴んだものはあのドジのスカートだった。そして、あのドジはこけなかったのだが掴まれたスカートは俺が重力に引っ張られる力で一緒に、地面に落ちた。ふ、重力に惹かれた男とは俺のことさ・・・。スカートズリ下げられたドジは何があったのか全く持って理解できていない。ああ、俺だって何が起きたのかわからないさ。目の前に恐ろしい顔した店長らしき男がいるぐらいしかな・・・。

「え、なんですか・・・？」

有無言わさず、俺は店長に引きずられるようにしてその場から退場を余儀なくされた。くそ、何でこんなことになってんだ！？俺を変質者とも思ったか？

「ちょ、何で呼ばれるんですか？」

「・・・お客さん、このお店の噂を知ってますか？」

「・・・ドジなウェイトレスがお客に襲い掛かる話ですか？」

「・・・いえ、違います。このお店では、ウェイトレスにおいたをするような悪者をお仕置きする部屋があるんですよ。そこで、貴方をお仕置きします。」

ああ、成程・・・そんなうわさだったんだあ・・・じゃ、ないっ！！

「じゃ、俺は！」

「・・・今のところ、これまで一度もそのようなことはありませんでした。しかし、今日一人目の悪者が出たのです！さて、お仕置きを見れないように残念ですが、貴方には眠ってもらいましょう。」

店長は俺の目の前まで掴んでいるほうとは違う手を持ってきて指をぱちんと鳴らした。その瞬間、俺の意識が遠のいていくのを感じた。グンナイ、俺！

「ふぁ・・・？」

「・・・ちょっとした謎のお風呂にはいってもらっただけですよ、その後はお店で雑用係として働いてもらいます。」

最後に店長のそんな声を聞き、俺は意識が完璧になくなったのでどうなったか知らない、自分の事なのに・・・ま、しょうがないかな？

あれから、何分ぐらいの時間が過ぎたのだろうか？意識が覚醒していくのが分かった。

「・・・っ・・・長！」

「・・・にっ！！・・・じゃ・・・」

誰かが言い争っているようで、何を言っているのかわからないが、誰かが俺の近くに居るらしい・・・俺は目を開けた。

「・・・店長、目を開けましたよ。」

「なにっ！！そ、そうか・・・」

俺は自分の身に何があったのか考えたが、思いつかない。気がついたことといえば、体の上ののっているのは白い布だけだ。なにに！！下着も何も無いぞ！！

俺の元に店長がやってきた。先程の物凄く怖い顔ではない。どちらかというとかなりばつが悪そうだ。そして、その隣にはあのドジとその友人のウェイトレスが居る。どの人も間違った判決を下した裁判長みたいだ。

「「「・・・お客様、申し訳ありませんでした！！」」」

いっせいに頭を下げて、俺に謝ってくる三人。はて、俺が何かしたのかな？いや、逆にあっちがしたんだろうなあ・・・それで、俺に謝ってるのかもしれないな。

「・・・俺の体に何かしたんですか？それとも、何かする前に事情が分かって連れてきてすいませんといってるんですか？え、何でそ

んなに首振ってるんですか？あのう、めっちゃ、不安なんですけど・
・・？目を伏せないでくださいよ！」

店員：いらっしやいませ、何名様ですか？（後書き）

さて、二回目となりました。ここから・・・短編版とはちよつと違った感じになっていくと思います。以後、よろしくお願いします。

客：見てわかりませんか？一人です。（前書き）

久方ぶりの更新のような気がします。

客…見てわかりませんか？一人です。

三、

三人の真ん中に居た店長らしき男が前に出て再び、俺に頭を下げた。そして、更に後ろの二人も頭を下げる。うん、さすが営業してるだけあって謝り方も板についてるね？って、そんなこと言ってる場合じゃない！！

「・・・お客様、私の勘違いで取り返しをつかないことを・・・」

「ぶえ、ま、まさか・・・。」

あれを切断してしまったのではあるまいな？ああ、だから店長は雑用係をさせるって言ったのか・・・成程、俺はウェイトレスとなるのか・・・？それは却下だ！！そんなの誰が許しても俺がゆるさねえ！！俺はそれが無くても男だ！！

確認してみたところ、きちんとくつついていた。よかった、これなかったら語尾に

「うふん。」とか

「ねえ。」とかつけないといけなくなるところだったぜ。

「・・・あの、俺の体に何かする前ですか？それで、気がついてやめたとか？」

「・・・残念ながら・・・既に終わっています。」

しかし、どこにも体の異常は無いぞ？あれだってきちんとついてるし、髪の毛だって抜けてない。なくなっているのは俺の衣服だけだと思っただけきちんとハンガーに吊るされているではないか？無く

なったものは何も無いみたいだぞ？

「・・・貴方をあの、大鍋の中に放り込みました。」

指差すほうには魔女が使用するであろう、鍋というよりも大釜があった。なにやら虹色の怪しい煙を発している。な、なんじゃありや？

「・・・あれ、なんですか？」

「古より使われていたお仕置道具の一つです。はっきり言って、使えるのは一回だけだったのですが・・・まあ、それはいいとして、私どもはあの中に貴方を放り込みました。その後、直にこの・・・」

ドジとその友人を指差して店長は続けた。

「・・・二人が事情を全て私に話してくれました。しかし、既にお仕置マシーンは終わっており、完了を告げるあの虹色の煙が吹き出していたのです。」

「じゃ、俺はどうなったんですか？どこも悪くなっているところは見当たらないようですが？」

「・・・信じられないかもしれないが、君は普通の人間じゃなくなっただんです。」

な、何だって・・・それは・・・どういふことなのでございましょうか？

「エースパイロットになったんですか？」

「・・・残念ながら、魔法使いです。ほら、魔法使いぐらい知ってるでしょう？」

なあーんだ、今更って話だな。うん、魔法使いなんて全く持って一般的だろうよ？もっとマイナーな職業みたいなのこいよ・・・って！

「なんで！何で魔法使いなんだ！！」

「・・・それは、私たちが魔法使いだからです。我々、魔法使いの種族は黙ってこれまで生きてきたのです。まあ、先立つものが無いと大変だから一般人のように働いているんですが・・・」

嘘だと思う。いや、嘘だ！！嘘に決まってる！！俺が決めた！！

「魔法使いなら、魔法使ってくださいよ。ええとですね・・・例えるなら魔法っぽいもので・・・。」

さて、伝わったのか分からないが、店長が右腕を俺に突き出した。ぽんっ！！クルックー！クルックー！！

「・・・あの、鳩じゃ魔法というよりもマジックなのでは？」

クルックーと鳴いている鳩がパタパタ飛び出した。ばつが悪そうに俺を見る店長。これは・・・魔法じゃないだろうと俺は思った。

「すみません、とっさに言われたらこんなものか・・・セレネ、悪いがお前の一番得意なものを見せてあげなさい。」

突如名前を呼ばれてあのドジ娘さんが返事をする。セレネという名前か……。

「は、はいっ!! セレネ、いきまあす!!」

ゴオオオオオ!!

「あちちちちっ!!」

右腕を俺に向け、炎を召喚。飛んできた炎が俺の髪の毛を燃やす。・あぁ、先っちょが焦げてしまった。この髪型、少しばかり気に入ってたんだが……。

「……貴方たちが一般人じゃないことがよくわかりました。魔法使って非常識な人が多いんですね? まず、人に向かって放っているんですか?」

店長は更にばつが悪そうに立っており、俺を危うくローストにしようとした魔法使いのドジは真っ赤になって後ろに下がった。デンジャラスだな。

「それで、俺はどうしたら戻れるんですか?」

「……残念ながら、それは無理なんですよ。このお仕置道具はそのために作られたのですから……」

「そうですか、なら……家に帰りますんで悪いですが服とつもらえませんか?」

俺は吊るされていた自分の服に視線を動かす。そこには消し炭となった俺の元、服が天寿を全うして昇天してしまっていた。さよなら、短い付き合いだった。

「・・・重ね重ね、すみません。」

「・・・いえ、もういいですよ・・・諦めますから・・・それより、すみませんが何か服を貸してもらえませんか？このさい、何でも構いません。」

「それより、ご提案があるのですが、少々いいですか？」

ご提案？一体全体何のご提案でしょうか？これ以上は流石にめんどくさがりやの俺でも場合によっては本気で怒りますけども・・・？

「実のところ、貴方が魔法使いになってしまったのは予定外でした。魔法を使えるようになってしまった貴方にはぜひとも、魔法の知識と技術を魔力が暴走しない程度に習得してもらいたいです。」

「え、暴走するんですか？」

「ええ、ひょんなことから魔法を使っしまえばそうですね、素質にもよりますが・・・暴発した場合は他人に迷惑がかかってしまいます。」

ううむ、それは困る・・・寝ているときに暴発なんてされてしまったら俺の部屋にある・・・せつかく、親の言うことを聞き、親の要求を全て叶えてきた俺の大きな部屋の所有権が消えてしまう。もしくは、家ごと吹き飛ばすかも・・・。

「・・・で、ここで働いて覚えろってことですか？それとも駅前まで魔法を習いに行けばいいんですか？」

どっちにしたってろくなことが無いだろうが、暴走されちゃたま
んないからな。

「いえ、貴方の家で十分です。我々魔法使いは基本的に三人で一組のチームを組んでおります。これは、ウェイトレスの制度にも我々は使っております。一人が失敗すれば失敗した一人がお客様の相手をし、残った二人がそのうちに状況を改善する・・・といった感じです。」

あ、成程・・・だからあの時、直にタオルをあの子が持ってきたのか！

「我々の中から、貴方に魔法を教える人を派遣します。ええとですね・・・」

「待って下さい！！！」

いきなり後ろのほうに居たセレネと呼ばれた目つきの悪く、ドジな・・・ウェイトレスが声を張り上げた。

「その仕事、私にやらせてください！！！」

その目には真剣な表情を宿しており、これは・・・これは物凄くやる気のある顔だ。目の置くには燃え盛る何かが見える。

店長はそれを黙って見ていたが・・・何かを諦めたような顔になった。

「・・・いや、お前じゃ無理だ！うん、君にウェイトレスをやらしていた私が馬鹿だったな。お客様、こんなドジを貴方の師匠にすることは出来ません。」

まあ、そうだろうな・・・先程の火災をもう一度ぶつけられた場合は運よくとは行かないだろうね。美少女だからって全てが許されるわけじゃないのさ！それが通用するのはあくまで美少女に興味がある連中だけであって、機械好きの俺には通用しないね。まあ、そちのほうที่色々氣を使わなくていいだろうがな。

「・・・待って下さい、店長。」

今度は今まで黙っていたあのドジの友達が前に進み出た。

「・・・私が念のために着いて行きます。そうしたほうが、零時君にもいいと思いますし、セレネのフォローにも回れます。」

「そうか、本当なら君だけに行ってもらったほうがいいのだが・・・かなり不安だが、君が居るなら大丈夫だろう。」

店長、それはちょっとおかしいでしょうよ、かなり不安ならやめてください。危険です。俺の今後が懸かってますし、俺もあの子一人のほうがいいです。

「・・・で、零時君だったかな？この二人でいいかね？」

「もう、諦めますから、構いません。彼女が居るなら安心できると思いますから。」

「そうか、なら二人とも・・・がんばってくれ。特にセレネ！」

「「わかりました。」」

さて、これからどうなるのだろうか？俺は魔法の練習中に俺の服みたいになりたくないぞ。天国であの服を着たいとは思わないからな。

「君のお母さんには既に事情を話しているからこの二人が来ても大丈夫だろう。」

こうして俺はコックの服を着て（店長がお古を貸してくれるといったが、ふんどし付きだったために遠慮した。）出来るだけ人に見つからないように家に帰ることにしたのであった。忘れていたが、瑞樹はどこに行ったのかと店長に聞いたら先に帰らせたといっていた。それに、母さんにはもう一度電話するそうだ。

そして、見慣れた公園まで美少女といっぺい二人とともに戻ってくる事が出来た。

「れ、零時さん、自己紹介がしたいんだけど・・・じゃなかった、したいのですけど？」

「・・・あんたは零時と呼んでもらって構わないよ。後、敬語になってないし、今はお店の客でもなんでもないからあんたはあんたの話し方で構わないよ。」

「そ、そう？なら、零時・・・ちょっとそこの公園で私たちの自己紹介をさせてもらえない？」

客：見てわかりませんか？一人です。（後書き）

みなさまどうも、こんにちは。ええとですね、非常に困ったことが起こってしまいました。左腕を不注意にて、怪我してしまいました。ちよつとばかり更新が遅くなりそうなのですが、よろしく願いますね？それと、今のうちに見直しなんかをしたいので、誤字や脱字をもしも作者が見つけるよりも早く見つけた場合は教えてくださるとうれしいです。

店員：（ムカッ！）どうぞ、こちらへ・・・（前書き）

久しぶりの更新です。

店員：（ムカッ!）どうぞ、こちらへ・・・

四、

俺としてはさっさと家に帰って魔法を覚えてもらい、一人立ちできるほどに上達したい。そうすればこの二人ともお別れできるだろう。円満に終わるだろうな。

「・・・わかった。」

「さ、ソーラも行こう?」

三人で公園の中に入り、俺はブランコに座った。二人は俺の前に立った。

「・・・ええと、私の名前はセレネ・ルーン。十六歳で・・・得意な魔法は基本的な奴かな? 趣味は・・・教えない! 知りたいなら教えるけどね?」

「いや、そこまで言わなくていいぞ。別にそのうち分かるだろうからな。」

「そ、そう・・・?」

興をそがれたような感じでセレネといった女の子はしゅんとなった。まあ、ちょっと悪いことしたかもしれないが、ここで油をうつてるほど俺たちは暇なのか?

「・・・名前はソーラ・プロミネンス。同じく十六歳。以上。」

ううむ、こっちの女の子は表情がなかなか読めんな。

「じゃ、帰るか？」

「ちょっと、私たちが説明したのに貴方が自分の紹介しないなんておかしくない？」

指差して俺を睨んでくる。おいおい、全く・・・面倒なことをしてくれる奴だな。だが、俺は説明をしなくて良かった。何故か？説明してくれた人がいたのだ。

「・・・名前は剣山 零時。徒築地高校二年生、部活は帰宅部。趣味は機械関係の事で・・・嫌いなものは不明。好きなものはネジである。彼は人間よりも機械に興味があり、その趣味のために女の子の知り合いは少ない。根は意外と優しい。」

そんな、そんな・・・辞書を読んでいるみたいに言わなくても良くないか？もつとさあ、なんかこう・・・まともな説明をお願いしたいね、動物の説明欄みたいじゃなくてさ！さしずめ、『チンパンジーの親戚』といった感じだろうな。

「ま、まあ・・・そういうことだ。ソーラちゃん、説明してくれてありがとう。」

「・・・礼にはおよびません。零時君。」

隣のセレネはびっくりしたような顔をしている。そりゃそうだ、俺だっぴっくりしている。何故、知っているのか・・・かなり気になる。ストーリーか？

「ソーラ、なんでそこまで知ってるの？」

無機質な顔に初めて表情が表れた。その表情はちょっと幼い女の子が恥らっているような感じだ。きっと瑞樹だったら喜んでいだろうよ。

「……昔、零時君に会ったことがあります。……そうですね、小学四年の頃でしょうか……。そのときは名前を知っただけです。ほかの事は彼の親友だといっていた方に情報を提供してもらいました。それ以降、話した事はありません。」

親友Ⅱ瑞樹。ああ、そういう事か……。納得……。全く、人の個人情報教えやがったな、あの野郎！！しかも、なんか失礼なことを言われたような感じだ。

一人納得していた俺だったが、セレネが口を開いたので視線を向けなければならなかった。ほら、人と話をするときは目を見て話さないといけないだろう？

「零時、今日は本当にごめんなさい！！私の不注意で……。」

「……重ね重ね、すみません。」

二人して頭を下げられたら俺はどうすればよろしいのでしょうか？そこまで何かをされたってわけでもないし、面倒だ、さっさと頭を上げさせて皆で帰ろう。

「そう思うのなら、俺に早く魔法を教えてください。後、魔法が暴発しなくなったら帰ってもらって結構だ。そのほうが二人にとってもいいだろう？」

だが、間違っていたようだ。何故かって？顔を上げた二人は悲しい顔をしていたからだ。他人が悲しい顔をしていると俺はなんだか無性に自分が悪いのではないかと思ってしまう。ううむ、なんだか存した気分だ。

「・・・残念ながら、それはできません。私たちが帰れるのは一番早くて一年。それまでずっと零時君の元に居ないといけません。おいそれと帰っては私達の身に危険が出てきますから。」

「それに、『古代魔法振興会』の事も詳しく話しておかないと・・・。」

『古代魔法振興会』？なんじゃ、そりゃ？きつと名前のまんまなんだろうな。

「セレネ、何だそれ？」

「それはね・・・。」

セレネが言おうとして、口を開きかけたのだが・・・何かが、いや、誰かが公園にやってきた。

「おほほほっ！！このドジウェイトレス！！この前の仕返しをしに来たわよっ！！（ああ、この話し方恥ずかしい・・・）」

黒フードを被っており、顔が良く見えない。だが、声から考えて女の子のようだ。まあ、黒は日光を吸収するだろうね。きつと、暖かいんだろうね。

「・・・あんなのが、『古代魔法振興会』なのよ。黒いフードを着

てて・・・それ以外はちよつと私は分からないわ。でも、敵対する魔法使いを襲ってるって師匠が言ってた。」

「ふうん、冷え性？なんで黒いフード被ってるの？」

「きつと、夜に活動してるからよ。ほら、色が黒いと奇襲しやすいじゃない？」

二人で話していたら飛んできた謎の紐によって体の自由が奪われる。うおっ！

「・・・全く、敵である私を無視して彼氏と話なんて余裕ね、セレネ。」

「・・・すみませんが、あいつは俺の彼女でも何でもありませんが？それに、彼女たちとは今日初めて会ったのですが？因みに言うなら貴女も初めて。」

意外と力持ちのようだ。俺を小脇に抱えているのに体重が片方に傾いてるってわけでもないようだし・・・いや、俺の体重はどちらかというと軽いな。

「セレネ、この彼氏を返して欲しいのなら・・・午後十時にまたここに来なさい。それじゃあね？あ、きちんと来てなかったらそのときは覚悟してね？」

こうして俺はあっさりと捕獲され、連れて行かれたのであった。以下の会話は俺の誘拐現場に居合わせながら呆然としていた二人の会話である。

「……セレネ、『古代振興会』に知り合いが居たの？」

「いや……この前お店に来て私が間違ってシチューをぶっ掛けた相手だったわ。」

「……じゃ、何で零時君を助けてあげなかったの？彼、慌てたわよ。」

「それは……いや、あんまりあいつがあっさり捕まってしまったから呆然としてただけよ。それに、同行するって分けないはずよ……次は何とかするわよ。」

次、何とかじゃなくて連れ攫われる前にどうにかして欲しかった。まあ、こんな話があったことを書いておこう。念のためだ。

そして、連れさらわれた俺は小さな事務所のようなところでロープで縛られていた。ああ、ロープで縛られたといってもかなり緩められていたがな。

「ねえ、貴方、どこの高校通ってるの？」

「……何で、誘拐犯にそんなことを教えないといけないだ？」

「暇だから。それに私は静かなのは嫌いなよ。」

ああ、確かに暇だな……この悪のアジトっぽいところに来たとき、中に居た人達（三人）は皆夕飯の買出しに行くところの少女に告げて黒フードを脱いで出て行ってしまった。残された俺たちは別にすることもなく、座ったまんま確かに暇だ、暇すぎる……。魔法の使い方ぐらい教えてもらえばよかったな。

「俺か？俺は近所の高校に通っている一般人だ。」

ここいらで近所といえはあそこしかないのだから。

「ああ、あそこね・・・なら、学年は？」

「今度で二年生。」

「あのドジウエイトレスとの関係は？」

「関係？ああ、俺か？俺は・・・あいつに水をぶっ掛けられたんだよ。二回。」

「へえ・・・私とお仲間？」

「じゃ、あんたもか？水を掛けられたのか？」

首を振る謎の黒フード。いや、もうフードはずしているから顔は見える。うん、可愛いんじゃない？パツチリしているし、元気娘な感じがするな。

「私はシチューを掛けられた。いやあ、あの時は頭にきてお嬢様口調になったなあ。だけど、私はあんたって名前じゃないわよ？いい、女の子を呼ぶときにそんな代名詞をつかったら駄目なのよ？嫌われると思うわ。」

「そうかい、俺には女友達なんてほとんど居ないから知らないね。まあ、名前を教えてくださいなかったあんたにも責任があるんだろうけどさ？」

「私の名前？あぁ、ノワル・ダーク。古代の魔法を信仰している会の下っ端ね。まぁ、主に雑用とかしてるんだけど、いかんせん、古代魔法の腕が駄目なのよねえ・・・ふふ、一般人から見たら頭がおかしな連中だっと思ってるでしょうねえ？剣山もそう思うでしょ？いい年して魔法だとか叫んでんだもん。」

いや、残念ながら俺は自分の身をもってして魔法は存在するものだと思ってしまったからな・・・否定したいのだが、否定できないな・・・まさか、ロボットよりも魔法に遭遇してしまったとは俺自身、信じられん。そして、今度は誘拐と来た。俺が去年まで通っていた中学にて、変質者が声をかけてきて女子中学生が誘拐されそうになったという話は聞いたことがあるが・・・まさか、男の俺が捕獲され、謎の事務所にロープでぐるぐる巻きにされるなんてね。

「いや、魔法は存在するんじゃないか？」

意外そうな顔をしてノワルは俺を見る。おいおい、今度は珍獣扱いか？

「・・・へえ、剣山ってファンタジーな頭してんだ？」

「いや、どっちかというところSFとか機械にしか興味ないんだけどな。しかし・・・俺は誘拐犯と何を喋ってたんだ？全く、誘拐犯は誘拐犯らしく怖い顔をして俺を見張ってた方がいいと思うぞ？誘拐された俺がこういうのもおかしいがな。」

だが、ノワルは金髪を揺らし、首を振った。その顔は嬉しそうだった。

「そりゃ無理だよ。だって、私も剣山と同じ高校に通ってたもん。」

モニタージュとか書かれたら一発で正体ばれちゃうし、そんなことになったら警察に行かないと……。え、何そんな面白い顔してんの？あゝ言ってなかったかな？私、剣山と同じ高校で、確か二年から同じ教室だよ？よろしく、剣山！」

店員：（ムカッ！）どうぞ、こちらへ・・・（後書き）

今回の話はどうかだったでしょうか？短編のほうでは微妙に登場して
いなかった『古代魔法振興会』を初登場させてみました。話に本格的
に影響してくるのはもうちょっと先になると思いますが、よろしく
お願いします。

客::てくてくてく・・・(前書き)

今回は前回の続きですね。ここでようやく、セレネ、零時の実力がはつきりします。

客…てくてくてく……

五、

信じられないな。まさか、俺の新しいクラスにこの誘拐犯こと、ノワル・ダークがいるなんてな……。いや、誘拐犯じゃなかったら話もしなかった単なる女子生徒だな。きっと、俺は平穩に日常を過ごせてただろうよ。

「なあ、何で俺を攫って来たんだ？あの時も彼氏じゃないといったが？」

「なんとなく！その場でそんな雰囲気が出たから！私、PKOは大事にするほうなんだ。えへへ、まあ・・衝動的かな。たまたまだよ。もうしないよ。」

本当だろうか？本当に信じていいのだろうか？今後下校中に失踪扱いはイヤだ。

「ただいま」

陽気なおじさんたちの声が聞こえる。どうやら、買い物を終えたようだ。

「おや、ノワルの友達さんはまだ居たのかい？なんなら、夕食を食べていくか？」

気前がいいおじさんたちだ。だが、この人たちの目は間違いなく、節穴だ。どこの世界に友達をロープで縛り付ける人間が居るんだ？居るのなら、俺にぜひとも教えて欲しいね。そのときは同情してや

ろう、ロープで縛られた奴にな。

それから・・・約束の時間になり俺はロープを握られたままその場を後にした。

「零時君、また遊びに来いよ？まあ、俺たちの仲間が今日は少ないが、多いときにくれればまた何か発見があるかも知れんからな。頭も柔らかいようだしね。」

「はあ、夕食、ごちそうさまでした。」

俺はノワルに背負われるような感じで彼らに挨拶をし、ノワルと俺は公園へと向かったのであった。途中から、靴に羽を生やしてノワルは飛び始めた。そして、黒いフードをかぶった。

「これで、『古代魔法振興会』の一員ってわけ。さ、飛ぶよ、零時。準備はいい？」

「ああ、好きにしてくれ・・・。（ま、そんなこつたろうとは思ったださ。）」

本当に何がしたいのか分からんな、魔法使いとやらは・・・きつと、頭の作りが根本的に違うに違いない。さすがにこの時間に外に居る人間は少ないだろうな。まあ、未だにお星様をウォッチングしている夢見る方々が居ることを否定できないが、そんな連中に宇宙人扱いされたら俺もたまらん。写真なんて取られてTVに出たらそれはそれで嬉しいが、宇宙人として扱われるのはなんだかなあ。

「よいしょっと！！着地成功！零時、大丈夫？」

あっという間に目的地に降り立った。公園内には数箇所、電灯が

つけられており、その電灯が輝いており、砂場で砂の小山を作っている二人組を不気味に照らしていた。こんな時間帯に砂の小山を作っているのは確かに怖いな。

一人がこちらを向いた。セレネだ。

「・・・零時、怪我は無かった？」

「ああ、まあな・・・。」

心配してくれているのかとても心配だが、一応、返事はしておく。

「約束どおり来てあげたんだから、さっさと零時を開放しなさいよ！！！」

いや、言ったところで開放してくれないだろうなあと思っていたが、あっさりとノワルは俺を縛っていた縄を解く。利用できるだけ利用したら捨て駒か？

「・・・さ、これで零ちゃんは自由だよ。」

「あ、すまん。（おいおい、とってもフレンドリーな呼び名だな？）」

俺は巻き込まれないようなところに腰掛けた。その隣にソーラも腰を下ろす。

「・・・零時君、何かされませんでした？その、人には言えないこととか？」

「……いや、何もされなかったが？」

ほっとしたのか溜息を漏らすソーラ。まあ、心配されてたのは嬉しいな。

「セレネ、いつでもどうぞ？ 私は貴女に負ける自身は無いわ。」

「ふん、今に土下座して謝りたくなっても知らないわよ？ 覚悟はい？」

右腕を掲げ、セレネの周りに大きな炎が姿を現す。その炎は間違はなく、ノワルを狙って……発射された。そして、俺はその光景をただボーっと見ているのではなく、隣のソーラに質問した。まあ、とてつもなく大きな火の玉だこと。

「なあ、間違いなく……炎はセレネの腕を包んでいたが、あいつ、熱くないのか？ もしくはやせ我慢か？ 腕が直火で炭になるぞ？」

ソーラはこちらに首を動かし、どこからかメモを取り出した。更に、伊達眼鏡をはめて自作メモを眺める。そのメモは達筆で文字が書かれており、詳しく書かれていた。ううむ、見た目が真面目だからなのか？ それとも、眼鏡をかけるとそうなるのか？ 今度、瑞樹に聞いてみよう。いや、何……興味だ。

俺がどうでもいいことを考えているとソーラは俺の質問に対して答えを言い始めた。

「……魔法を使う際、自分が生み出した魔法は自分には聞かない。これは、よくわからないことだが……この現象をわれわれの中では『アンチ・（例…セレネ）』と呼ばれている。簡単に言うなら、同じものなので、相対せず、安心だそうですね。つまり、自

分で作り出した毒は自分には効かないって事です。」

「ふうん、とりあえず・・・自分の攻撃だから大丈夫ってことなのか？」

「・・・うん。」

再び俺はソーラから視線を動かし、華麗に炎を避けたノワルのほうに向けた。彼女はセレネの実力を試すかのように右に左にたまに上空に逃げている。

再び、俺はソーラに頭の隅から沸きあがった質問を聞いてみた。

「なあ、根本的にセレネは強いのか？ドジでも大丈夫なのか？」

「・・・気は強いけど、実力は・・・魔法使いの中でも下のほう。でも、初心者ってわけじゃなくて、魔法は基本的なものしか使えない。威力はあるけど、応用は出来ない。つまり、初心者を一歩進ませたような感じの実力ですね。」

ふうむ、それってかなり弱いほうなのではないだろうか？大丈夫か？

「相手の実力はわかるか？」

「・・・ぱつと見て若手NO1の実力。私と戦って同じくらいだと思いますが？」

じゃ、強いってことじゃないのだろうか？現に、俺の目の前では避けるのにも飽きたのか素手で・・・素手で雷や激流、炎をはじいているノワルが居た。

段々とセレネに近付いていつている。セレネのほうは焦りの色が濃くなってきている。そりゃそうだろうよ、当然の結果だ・・・せいぜい、LV2でさしも能力が高くも無い魔法使いが確実に両手感覚ぐらい離れている相手に勝てるはずが無い。普通、諦めるだろうよ。何故あいつは諦めて距離をとって相手の隙を狙わないんだ？

「なあ、なんでソーラは加勢しようとしなんだ？ チームなんだろ？」

「・・・・どこまで進歩したのか見てる。セレネは私に手を出さなって言った。だから、私は見てるだけ。正確に言うと、手を出すなどというよりも、開放された零時君を守れて言われた。その提案に私は賛成したのでこっちにいます。」

「そうかい、なら・・・俺が加勢しよう。ノワルには悪いが・・・俺は『古代魔法振興会』のメンバーじゃないからな。ところで、魔法ってどうやって使うんだ？」

魔法の使い方知らないなんて本当に魔法使って俺は言えるのか？ まあ、誰だって始めは苦戦するだろうし、失敗もあるだろうよ。つまり、よくよく考えてみたら俺が手を出しても意味が無いんじゃないだろうか？ 諦めるか？ だが・・・

「・・・零時君が思っていることを集中し、叶えればいい。それを呼び出すような感じで出せば、出すことが出来る。零時君ならできると私達は信じてる。」

ううむ、じゃあ・・・何回ぐらい使えるのだろうか？ ほら、よく・MPとかあるじゃん？ あれが切れたら使えないだろ？ おれはあいつよりも間違いなく弱いだろう俺はどのくらい魔法を使えるんだ？

もしかして、使えないとか？

「なあ、俺は魔法を何回使えるんだ？」

「……基本的には魔法の使用回数は無尽蔵。制限は無い。その為……魔法には使用する魔法には制限が課せられているけど……今はそれどころじゃない。」

ソーラが視線を動かした先には突き飛ばされて砂場の小山を壊して倒れこんだセレネが映った。あらら、砂がスカートの中に入ってパンツが見えてるぞ？

「……安全のために作っておいた小山が役に立ちました。」

「……（本当なのだろうか？）」

「くう、まだまだ、負けたわけじゃないわよっ!!」

「そう？ 私から見たらどう考えても負けって感じがするけど？ 諦めたら？」

俺は今がチャンスだと思ったので……集中した。そして、自分の中で議論を交わし、激闘の末……どのようなものを作り出すか決めた。

「……いけえ!!」

俺はその力を一気に放出。途端、俺の思い描いたものは右腕を掲げたノワルと目をつぶっていたセレネを捕まえる。不意打ちのようで悪いが、勘弁してくれ。

「……………」

お互い、黙った。そりゃそうだろう、誰だっていきなり羽交い絞めされりゃ、黙ってしまおう。更に、もう一工夫……。セレネのほうにな。

「な、な、なにこれ!!」

セレネが何かを言っているが、俺が気にする場合ではない。俺はセレネをソーラの元に送り届け、俺は同じように啞然としているノワルのほうへと視線を動かした。そりゃそうだ、誰だって目の前の敵が高速で移動すりゃ驚くだろうよ。

「なあ、ノワル……。今日のところはセレネを見逃してやってくれないか？俺と知り合った相手には傷ついてもらいたくないんだ。不意打ちとはいえ、こんなことも出来る奴がこっちには居るんだからな。俺の後ろに居るソーラって言う切り札が居るし……。俺はお前にもできれば怪我してもらいたくねえんだ。他人が怪我して苦しんでいる顔見るとき、俺……。気分悪くなるからな。」

「……。わかった、零ちゃんの頼みだし……。今日は見逃してあげるよ、セレネ。だけど、この前のシチューのお礼は今度、きっちり返すからね?」

俺は出来るだけノワルに見られないようにして右腕を動かし、彼女の束縛を解いた。因みに、俺が彼女たちを縛ったのは砂鉄の鎖だ。砂場が近くにあったし、まだ良く魔法を操作できないに違いないと思った俺はとりあえず想像できるものよりもその場にあるものを使ったというわけだ。一か八かでやるのは俺の性格上、無理だろうか

らな。それに、拘束するには縛るのが一番だろうよ。

やはり、さっぱりした性格だろうと踏んでいたノワルはあっさりといなくなった。まあ、根はいい奴みたいだから俺みたいの不意打ちはしないだろう。まあ、誰かに無視された場合は別だろうがな。きつと、話に加わりたいたんだろうな。

「ちょっと、ソーラ、手伝わなくてもいいって言ったじゃない！私の実力で・・・」

「・・・私は手伝ってない。あそこまで完璧に動かしてセレネを助けたのは零時君。零時君は・・・もはや、何も実践では教えなくてもいいほど、強い。はっきりいって、セレネよりも、私よりも・・・そして誰よりも強い。」

客：てくてくてく・・・（後書き）

どうも、お久しぶりです、皆さん。これからの展開は・・・いや、一章の話はプロローグみたいな感じですよ。二章から、この物語がはつきりと始まると思います。これからよろしくお願いしますね。ご意見がある方はどうぞ、なんなりと言ってくださいね。

店員：どうぞ、こちらへ・・・特別ルームです。（前書き）

久しぶりの更新となりました。

店員：どうぞ、こちらへ・・・特別ルームです。

六、

その発言に俺とセレネは固まった。いやいや、そんなことあるわけ無いな。

「嘘よ！！そんな・・・素人があんなの出来るわけないじゃない！！あれは、もう・・・古代魔法の領域だったわ！！それに・・・」

「・・・彼なら、簡単。彼は間違いなく、私が知っている中では誰よりも・・・」

なにやら言い争っているようだが、どうかしたのだろうか？てか、俺がその責任のようだ。いやいや、何度も言うが俺がそんなことを出来るはずがない。

「なあ、俺が使った魔法はおかしかったのか？それとか、やばいものだったとか？もしくは、迷惑な魔法だったとかか？縛ったのが色々まずかったか？」

「・・・零時君、その魔法は基本的に問題は発生しない。だけど、貴方は類まれなる素質と言えそこまでだけど、もっと何かを秘めている気がする。零時君、魔法というものは大体、単発しか発動できない。つまり、目標は一人に絞って、発射・・・といった感じ。だけど、零時君は異なる標的を定めそして見事、当てた。それは凄いことで、こんなことを出来るのは古代魔法しかない。」

残念だが・・・よく理解できん。え？簡単な事だって？いやいや、俺には難しいね。大体、魔法を真剣に覚えようとは思ってない

んだから、覚えようとしていないものを覚えることなんて無理さ。
まあ、俺は凄いのだろうがどうでもいい。

「・・・実際にやってみればわかる。今ここで、私とセレネが貴方に襲い掛かるから、貴方は私たちを捕らえてみて。いくよ、セレネ！」

「う、うん！！覚悟して、零時！！」

問答無用で、右腕を掲げ、セレネは炎を俺にぶつけてくる。そして、ソーラは月光のような光り輝く美しい・・・光線？って、ビームかよっ！！ひどっ！！

「時代は光なのか？ぐわあああ！！しぬううう！！」

「ちょ、ソーラ！零時が・・・あれをまともに喰らっちゃったわよ！！私、本気で炎を出したんだけど？人間相手の威力は遥かに超えてるわ！」

「・・・私も本気でやった。だけど・・・あれを見て？」

「・・・助かったのか？・・・おいおい、素人には手加減してくれよ・・・。」

とっさに守るような盾を想像したので俺は助かったようだ。更に盾は無傷だ。

目の前に現れた二人のうちの片方は信じられない、こんな人間じゃないわという失礼な顔をして俺を見ている。む、なんて失礼な野郎だ。それならこうだ！

「……………えいや!!」

俺は仕返しとばかりにロープでセレネをぐるぐる巻きにし、ソーラには……………捕まえたとかかかっているフラフープを首に巻いた。いい子には手加減する派です。

「……………間違いない、零時君は強い。いや、無駄に強すぎる!」

「はあ?俺は強くて弱くても別に構わないんだが?ほら、一般人だし……………」

「零時!さっさと縄を解きなさいよ!!解かないと警察に訴えるわよ!!!」

俺は右腕をはらい、ロープを消した。やれやれ、俺は一体全体、何になっちまったんだろうね?最強の魔法使い?俺としてはどうでもいいのだが?

「……………零時君、貴方はとても強い。だけど、魔法の使い方を知らない。それに、貴方が使ってるのが古代魔法だとばれたら色々大変。古代魔法は何でも出来る。それ故、使う際には色々と注意が必要。私たちがいるから大丈夫ですよ?」

「……………いや、そういわれてもわからんのだが?」

俺はよく、空気を読めないといわれている。そりゃそうだ、どうやって空気を読むんだ?まず、英語みたいに訳し方を教えてもらいたいね。はんっ!!

「……………そのために、私たちがいる。今日のところはこれで終わ

り。明日も零時君が休みなら、魔法を私が教える。」

「私は・・・？」

セレネが面白くなさそうに俺を見ながらソーラに質問する。かすかに、恐い。

「・・・セレネは・・・（どうしようかしら？）」

ここにきて、初めて言いよんだ。何だか、俺を見ている気がする。その目は、俺に・・・『言い出すことが出来ない。何か、彼女にとって意味あるものを告げて欲しい。』といているように見える。いや、実際に言っているのだろう・・・。

「あゝ、セレネはソーラだけじゃカバーできない部分を俺に教えてくれないか？ほら、お前さん方はウェイトレスの仕事があるだろう？居ないときもあるだろう？」

「あ、そうだった。じゃ、私はソーラが教えてないときに零時を教えるわ。私の教え方はソーラと違って厳しいから、覚悟しておきなさいよ？零時。」

「へいへい、覚悟は決めさせてもらいますよ。きちんと教えてくれないかな？」

なんだろうか、まだ・・・会ってそこまで経っていないのにここまですぐで親しくなれるようなものなんだろうか？いや、俺としては親しくなった気がしないようなするよう・・・。。それとも、俺が率先して仲良くなろうとしてるのか？

俺が悩んでいると、セレネは顔を真っ赤にしていた。何か言お

うとしている。

「それと一応言っておくけど、た、助けてくれてありがとう。」

「？はて、俺はお前を助けたか？」

「……だ、だって……私が倒されそうになったとき、ノワルっていう敵も押さえてくれたし、私をソーラのところに送ってくれたじゃない？」

いや、あれは……まあ、あの時ノワルに言った事は嘘じゃないし、実際俺は他人の苦しむ姿が蜜の味だとは思えない。本当のところは蜜の味だと思っていたのだが、自分に嘘をつけないのだ。もう一度言うが、俺としては、蜜の味を楽しみたいのだ。それが出来る人間を少しばかりは尊敬するね。俺には無理だから。

「ま、まあ……その場の空気を読んだだけだ。うん、俺だって空気が読めるぞ？」

「へえ、そうなの……？実際のところはどうかの？もう一度私を助けてくれる？」

強気に出てきたセレネは俺に向かってきている。ぐう、ここは……
・先程救援したソーラに助け舟を濃く出来てもらいたいの……
・リーダーSOSを出すしかない！！助けて、頼れる文武両道のドジの親友さん！！

「……零時君、私があのような状況に陥ったら助けてくれますか？」

「・・・は？」

思わぬところからの奇襲攻撃。

仲間だと思って信じた俺が馬鹿だった・・・今のソーラの顔に浮かんでいるのは面白い虫を発見したような無邪気で、明るく、俺がはじめてみる表情の一つだ。俺としてはまあ、ドラ○ちゃん的笑顔を見れたような感じた。うお、人間相手にここまでぐっところれたのはこれまで・・・右手内で事足りると思っていたが、そうはいかないようだ。調子が狂うな。

「ねえ、零時！教えてよ。あんた、いつもそんなに優しいの？」

「零時君。どうなんですか？助けてくれるんですよね？」

全く、これだから女の子って言うのは嫌なんだ。そうだな、俺としては・・・まあ、他人からよくかっこいいだの言われるからできれば、不細工な顔で生まれてきて欲しかった。そうすれば、誰も俺に関心を持たないだろうし、こんなことにもならなかったはずだ。俺は機械さえあれば、それで構わない。

「だーっ！！そのときになってみないと分からん！！事と場所、気分によって変わる！！俺はどっちかというとクールに、機械的に、事を収めたいんだよ！！」

疲れた。そろそろ、母が決めた門限だ・・・今の俺に守るものは門限だけだ。可愛い彼女なんていらん。機械は・・・まあ、守らなくとも自分で助かるだろうよ。守るべきものは親が定めた門限だけ・・・なんだか、寂しい気がするかもしれないが、それはそれで・・・いいだろうよ。今の内だけだな・・・。

「・・・さ、二人とも帰るぞ？もうちょつとで門限だからな。（調子狂うな。）」

「何よ、私たちはあれからずっとここで待ってたのよ？お礼の一つぐらい、してくれてもいいんじゃない？」

お礼？何のことだ？と言おうとして、二人の腹が鳴った。

「・・・・・・・・」

ああ、俺は『古代魔法振興会』の事務所でチキン南蛮を四つぐらいご馳走になったから忘れていた。そうだな・・・そこまでして俺を待っていたのなら、何か買ってやるか。ま、コンビニのおにぎりぐらいでいいだろうよ？

「・・・零時、コンビニのおにぎりとかじゃ、嫌よ？」

「・・・私は・・・ええと・・・自分たちのお店の料理が食べたいです。まだ、食べてない料理がありますから・・・。」

はつきり言おう、あそこの料理はうまいが、高いと評判だ。いや、俺は実のところ・・・何回か行ったことがあるんだよ。

うん、瑞樹と一緒にいるときは余計なことを考えているとろくなことがないからな・・・。一度、考えていることがマジであいつにばれ、それを教室にいた連中にばらされたことがあったんだ。一般的に平穏というものをこよなく愛する俺としては二度と、そんな状況になって欲しくないと思って生活している。その為には無理でも自分に嘘をつくさ！

「・・・わかった、わかった。じゃ、二人とも・・・最後にレスト

ランに着いた奴が全員の分をはらうってことだ。ふふっ！負ける気がしねえ！！」

俺はよーいどんとも言わずに走り出す。体力に自信のある俺ではないが、女の子二人に負けるほどやわじゃない。くっくっく、勝ちもらったあ

「あ、ずるいわよっ、零時！！」

「・・・甘いですよ、零時君。」

こうして、俺VSセレネVSソーラの三つ巴、『第一回 誰が一番先に目的地までいけるかな』君の涙は喜び？それとも悲しみ？』が開催されたのであった。

「・・・負けてたまるかあ！！」

「へっ、何よ、その走り方は？魔法は出来ても駄目駄目ね！」

「・・・これは、魔法以外にも色々教ええないといけないみたいですね。」

俺は、圧倒的な差を広げられ・・・連中に敗北を喫した。どうも、この屈辱をばねにして成長することは俺には無理のようだ。そういうえば、これまで・・・かけっこ関係はほとんど中くらいってところだったか？無理なことはやめよう。

「・・・ぜえ・・・」

息が続かない。足が動かない。やる気がおきない。そりゃ、最後

まで走ればの話であつたが、俺が負けを喫したと思つたところはレストランから結構遠く離れている場所であつた。俺は手持ちの身を確認する。うお、少ない……。

「ううむ、財布はトイレに落としていたのをソーラに見つけてもらったからいいとして、財布の中身は全て飛んでいくだろうな。ちよつと食い逃げするかな？」

こうして俺は……。俺の一般人卒業の日は慌ただしくも、面倒に始まつたのであつた。まあ、途中で諦めたくなつたときは辞退しよう。それに限る。

客：あの、ここが特別ルーム？（前書き）

一日に二回更新できました。奇跡ですね。

客：あの、ここが特別ルーム？

七、

けるっくーけるっくー！！

俺はいつも朝、俺を不快感とともに起こしてくれる目覚まし時計の不快な音で目を覚ました。ああ、そろそろ買い換えようかな？気分は最悪だし……。

「……学校か……いや、まだそういえば春休みだったな……。」

俺は寝返りをうとうとして……目の前に誰かの背中があるのに気がついた。誰だ？俺の小さなベッドに寝ている奴は……？いや、幽霊か？

いつもより動かない頭で誰かを考えていると、昨夜の事が思い出された。

あれから、財布の中身をほとんど空っぽにして帰ってきた俺と二人は母親に見つかった。まあ、門限を破ってしまったから当然だ。仁王立ちで待ってた。

「零時、こんな遅くに帰ってきたら駄目じゃない？言い訳を聞こうかしら？」

「……違うんだ、母さん。これには事情があるんだ！！」

俺は帰ろうって二人に言ったんだよ。だが、あの二人はよほど腹が減っていたらしく、まるで魔法を使うようにして注文している食べ物をつまみ食いから食べていったんだ。そのせいで、俺は見るだけで

目を回しそうになったんだあ！！

「なにがどう、違うのかしら・・・？・・・あら、セレネちゃんにソーラちゃんも一緒だったの？全く、貴方たちまで遅くなるなんて？」

・・・おいおい、どうなってんだ、こりゃ？母さんが全く不自然だとこの二人の事を思っていないぞ？どういことだ？俺は二人に視線を送った。

「・・・すいません、ちょっと・・・外食をしましたから・・・」

「零時、私たちはこの家に下宿してるってことになってるようなの。いい、何か不都合なことを聞かれたら曖昧に頷いておいて。（小声だからばれないよね？）」

成程、そういうことになってるのか？しかし、母親が既に知っているとすることは俺がさらわれている間にこっちに来たのか？ううむ、それでもこの二人は公園ですっと待ってたって言ってたしなあ？あ、店長か！店長さんか？

「母さん、この二人がこの家に来て何日になるっけ？」

俺はお咎めも済んだといったばかりに退こうとしていた母親に尋ねた。母はこちらを見ないで答えた。少しは怒っているオーラが混じっている。恐い。

「春休みからよ。そうね、それだから・・・二日前。じゃ、おやすみ。」

「きつと、店長が記憶を改竄したんだよ。零時、余計なこととか聞かないでね？」

「わあってるって、全く、面倒なことになりそうだ。」

完璧に姿が消えた母親を確認すると、俺たちは二階の俺の部屋へと入った。はあ、全く……俺の大事な部屋にこの二人を入れるなんてな……。

「わあ、マニアックだな。かっこいいロボットが居る！ガンダ○？エヴ○？」

「……機械マニア、小さい頃から変わってないみたいですね。」

それぞれがそれぞれ同じようなことを口走る。

へん、今ではなんと言われようが別に構わんさ。ここは俺の部屋であって、俺以外の誰からけちをつけられることは無いはずだ。部屋だって清潔にしているし、機械マニアだと言っているが、俺は大切なものは一つしか飾っていない。まあ、それは断面が見えているとあるロボットの模型だけだな。これは大事な人からもらったものだ。

「……零時、悪いけど……貴方の家族の事を詳しく教えてくれないかな？できれば、好みの話とかも……ほら、聞かれたときが大変じゃない？」

「……そうですね、知っておいたほうがよさそうです。私としては実務上、そこまで知らなくてもいいと思いますが……まあ、個人的に知りたいですから。」

やれやれ、今度は家族構成と来たか？いいだろう、乗りかかった船は自分で沈めるか終わりを目指して進んでやろうじゃないか！！もしくは、降りるか？

「さっきの俺の母さんだ。名前は剣山（けんざん） 早紀（はやき）だ。年齢は・・・不明だ。この前聞いたら二十代といていた気がする。好みは・・・知らんよ。」

「じゃ、他の家族は？兄弟、姉妹とかは？もしくは、可愛がってるペットとか？」

「・・・母さんで終わりだ。それ以外、俺の家に住んでいるのは屋根裏部屋に居るねずみかゴキブリぐらいだな。もしくは、この前発見された野良猫か？」

驚いたのは一人。驚いた一人であるセレネ興味がありそうに話しかけてきた。

「ねえ、じゃあ・・・お父さんは？」

「・・・セレネ、ちょっと、それは・・・。」

どうやら、ソーラのほうは知ってるようだな。まあ、瑞樹の奴から過去に聞いたのだろうが・・・。ま、知られてどうって事もないがな。俺も知らないし。

「・・・俺の父さんは母さんと離婚した。俺は父さんの顔を知らないし、他に兄弟がいるのかも知らないな。生まれて直に離婚したと聞いたことがある。それ以降、俺と母さんでこの家に住んでいる。」

兄弟は良く知らないな。居ないと思う。」

「そ、そうなんだ・・二人で寂しくないの？」

「別に元から居なかったからな。静かな日々を送ってきたぞ？騒音は無かった。」

ちょっと話が暗くなっちゃったな。うん、今日はもう遅いから寝ることにしよう。今の時間、母さんが怒ってお風呂の栓を抜いていなければいいんだがな。

「二人とも、さっさと風呂にはいつてきたらどうだ？冷えただろうに？」

「そ、そう？零時がそう言うのなら・・・・・。」

「・・・感謝します。零時君、お先しますよ？」

二人はそのまま俺の部屋を出て行き、残った俺は机の引き出しを開け、日記帳を取り出した。この日記帳を使うのは俺の日課だ。まあ、久々の日課だな。

『今日、生まれて初めて誘拐された。いや、それ以前に俺は一般人では無くなったらしく、ついていないと思う。まあ、俺は一般人だと自分の事を思っているので一般人だろうと思う。面倒なことが起きたときは逃げよう。』

俺は日記帳を閉じ、今日あったことを頭の中で思い出していた。それから、うつらうつらしていたらあの二人が上がってきた。あまり時間がかかっていないと思っていたら既に三十分は経過していた。

どうやら、寝ていたようだ。

「零時、まさか覗かなかったよね？ 私たちがお風呂にはいつてたとき……。」

「ああ？ 何言ってるんだ、お前？ 俺はずっとこの部屋に居たぞ？ てか、寝てた。」

「……セレネ、零時君は・覗かないの。そういう人じゃない。」

着替えていることに異議は無いのだが、どこからそんなパジャマを取り出したのだろうか？ どこにも荷物らしきものは持っていないかったと思っただが……。

「じゃ、先に寝ててくれ。俺は風呂はいつてくるからさ？ どこでも構わないぞ。」

「え、ええ。じゃ、お休み……。」

俺は一人で風呂に入り、風呂からあがって、自分の部屋に入って、暗かったから電気をつけずにそのままベッドに寝たんだったな。長い回想だったな。

「……ああ、思い出した。なら、あの二人のどっちかだな。うん、邪魔だな。」

俺は立ち上がっていつの間にかでかくなっていたベッドから降りた。どうやら、あの二人は未だに寝ているようだ。全く、ここで寝なくてもいいだろうによ。暑苦しいんじゃないか？ ベッドがでか

くなったのは驚いたな。

俺は二人を残して一階へと降りたのであった。

既に、時刻は十時をまわっており、普段は八時ぐらゐに起きている俺から見たらこれはちよつとばかりの寝坊だ。

母さんもうやら仕事に行っているようだ。

さて、これからどうするかな？ 春休みの宿題も終わらせないといけないし、色々やらないといけないことはあるが・・・お腹がすいたので腹ごしらえをしようかな？ しかし、俺にはそこまで高等なものを作れるほど料理のスキルというものは存在しない。そうだなあ、作れるとしたら・・・一番難しくてシチューかな？ そりゃ、夕食だな。

「・・・・しょうがない、目玉焼きにするか・・・。」

こうして、俺は目玉焼きを作るために卵を探したのだが、卵はなかった。

冷蔵庫の中はほとんど何もなく、これは・・・ご飯に何かを掛けるしかないと思ったのだが、ふりかけ類も無かった。昨日の残りのおかずも母さんが食べてしまったようだ。ううむ、これは由々しき事態だ。てか、このままでは白いご飯と味噌汁だけになってしまうな。しかも、味噌汁は・・・具が無いぞ？ なんだ、この茶色い汁は？ 絵の具でも入れたのか？ これは味噌汁じゃないだろうよ。

「・・・まあ、いいや・・・午前中ぐらゐ、このくらいで何とかかなるさ。それまでに、買い物行って・・・なんか、適当に買ってきとくかな？」

ご飯を食べていると、二階からばたんがたんと何かが暴れているような音が聞こえてきた。おいおい、俺の大事にしている唯一のコレクションを壊さないでくれよ？ あれは大事なものなんだ。大体だ

な、あそこまで作るの……。

俺が何とか間とか考えていると、セレネが慌てた顔で降りてきた。

「零時！何で起こしてくれなかったのよ？」

「いや、俺もさつき起きたんだが？昨日は疲れてたからな。寝かせてたんだよ。」

「ええい、何か食べ物は何んでもいいからない？」

「すまん、どうやら品切れのようで、ご飯しかない。もしくは、冷えたおにぎりがあるが？ちょっと温まっているようだ。どうやら、母さんが忘れたんだろう。」

「それでいいから、ちょうだい！！昼ごろには仕事、終わるから！！」

俺からおにぎりを奪い取って、セレネはさつさと家を後にしてしまった。大変だねえ、働いている人はさ？じゃ、そろそろソーラでも起こしてくるかな？

俺は二階へと上がり、部屋の扉を開けるとそこには肩が見えてるソーラがいた。

「……………」

思ったとおり、辺りに衣服は散らかり……俺の大事なコレクションの近くに布団が着弾していた。あ、危ねえ……もう少しで被弾するところだったな。

「…………おはようございます、零時君。」

「ああ、おはよう、ソーラ。悪いが、朝食はご飯と具の無い味噌汁だけのようだ。すまん。」

「……いえ、構いませんよ。ところで、昨日はここで寝たのでしょうか？」

そういつて俺のベッドを指差す。この人は何が言いたいんだろうね？

「ああ、だって俺のベッドじゃん？」

「……そうですね。零時君なら大丈夫でしょうし、零時君、午前中の予定は？」

特に無いな。俺としては新学期が始まる頃まで暇だからな。

「大丈夫だ。」

「なら、早速……魔法の基礎知識から覚えてもらいます。これはとても大事なことになるので忘れないでくださいね？」

客：あの、ここが特別ルーム？（後書き）

どうだったでしょうか？何気にたまっているので一挙に出したいのですが、それもどうかと思ひまして・・・たまたま今回は二回ほど連続して出すことが出来ました。もしかしたもう一度だけ出すかもしれないですが・・・まあ、そのときはよろしく願ひします。それでは、何かご意見などがあれば感想に書いてくれると嬉しく思います。

店員：ええ、このトイレが貴方にぴったりの場所です。どうぞ、ごゆっくり。

さて、そろそろ第一章も終わりを迎えそうになって着ました。たまには評価していただけると嬉しいです。

店員：ええ、このトイレが貴方にぴったりの場所です。どうぞ、ごゆっくり。

八、

俺は今、机に座ってノートにソーラが教えていてくれるものを書いて覚えている。書けばよく覚えるのだよ、君。基本中の基本さ。

「・・・反復しますが、まず・・・魔法は何回でも使用できる。そして、使用するときの注意は集中することです。次に、思ったことをそのままで表現することです。余計なものを想像すると失敗するので気をつけてください。特に、召喚系の魔法は制限がかかっているので使用するには注意が必要です。まちがっても他世界の人物とかを召喚してしまったら大変なので気をつけてください。わかりましたか？」

「はぁーい、わかりました。ところで先生、質問です。」

「なんですか、零時君？」

「休憩に入ってもいいでしょうか？」

既に、朝飯を食べてから約四時間が経過している。腹減ったな。

セレネもまだ帰ってきてないし・・・。

俺の提案に先生こと、ソーラは頷いた。

「・・・そうですね、セレネも帰りが遅いようなので・・・先にお昼にしますか？」

ちょっとお昼は過ぎているが、しょうがないだろうよ。お腹が減ったんだ。もしかしたらセレネはあっちで食べてるかもしれないし。

「じゃ、何を食べるだ？」

「・・・材料は何も無いんでしたよね？」

「ああ、そうだな。まずは買い物に行くか？もしかしたらセレネと街中で合うかもしれないし・・・。」

「・・・そうですね。そうしましょう。」

こうして俺はソーラと二人でお昼の買い物に行くことにした。昨日の出費でかなり財布が軽くなったが、昼ごはんの材料を買う金ぐらいは入っている。

二人して町を歩いていると・・・奴に出会った。

「おや、零時じゃないか？」

「み、瑞樹！！お前何してるんだ？」

「まあ、いつもの通りだよ。ところで、零時が女の子と歩いているなんて珍しいね？ん？何処かであったような気が・・・。」

俺を見ないで隣にいるソーラをまじまじ、じつくり、嘗め回すように見ていると思うのは俺の錯覚か？ま、まあ・・・見られているほうのソーラがとても冷静な感じをしているんで良かった。

「・・・お久しぶりです、瑞樹さん。」

「おひさし？ああ、君はあのときの子かぁ・・・成程、通りで見たことがあると思ったよ。うん、我ながら記憶力がいいね。」

ソーラは顔を真っ赤にしながらも俺をちらちらと見ている。おや、珍しいな・・・ソーラがこんな顔をするなんて・・・

「・・・零時君、あのう、水木さんと一緒にお話しをしてきてもよろしいでしょうか？少々、彼に聴きたいことがあるのですが・・・」

成程、彼女は瑞樹が好きなのだ。

「ああ、構わないぞ。うん、俺はこれから家に帰っておくから、瑞樹、ソーラに昼飯でもおごってやれよ？」

「勿論だよ、零時。じゃ、行こうか。」

「・・・はい。」

そういつて俺とソーラは別れたのであった。

まあ、あれがソーラの好きな性格かどうか知らないが、少なくともソーラならば・・・瑞樹の趣味に同調できる数少ない女の子かもしれない。いやいや、女子の中にもそういうのが趣味って言う人もいるのは知っているが、どうやら、瑞樹と考えていることは似ていても全く違うものらしい。彼はよく言ったものだ。

「零時、僕は他人と同じものを美学とは認めない。美学というものは自分自身で探求するものであって、他人から押し付けられるものではない。最も、僕の言っていることも他人から見ればおかしいものかもしれないが、僕は自分に嘘はつきたくないと思っているんだ。」

なんだかとてもいいことを言われたような感じがしたが、俺にとってはどうでもよさそうな話だったので適当な相槌を打ってその場を終わりにした気がする。ほら、あんまり奴と話していると日が暮れちまうからな。

俺はとりあえず、腕の立つウェイトレスさんがいなくなってしまったので・・・卵とその他ちょこっとしたものを買って家に帰ってきた。

「あ、セレネ・・・。」

家の前にはセレネが座っていた。その目鼻にか俺とは別のものを見ているように虚無感漂う危ない人の眼だ。

「おい？」

「・・・。」

無反応だ。も、もしかして・・・誰かに何かされたのだろうか？

俺がそんなことを考えてどうするべきかと迷ったのだが・・・どうやら、俺の存在をようやく確認したらしい。

「クビ。」

「は？」

「・・・ウェイトレス、クビになった。」

ああ、そうなんだ・・・。

「ど、どうしてそうなったんだ？それと今日はソーラがレストランに行かなかったのは何でだ？」

「今日、テストがあったの。私の給料を上げるのか下げるのかのね・・・。そこで私は見事失敗。それで・・・減給どころかそのまま・・・足を引っ張るだけということになってしまったわ。」

何故だろう、俺はそのときの様子がありありと頭の中に想像できてしまった。これも魔法のおかげだろうか？いや、多分・・・その光景を一度は見た（実際に体験した。）から分かるに違いない。だが、このままこうしておくのもご近所に迷惑に違いない。

「ほら、昼飯食べるのなら中に入ってくれ。ウェイトレスだが料理は作れるのか？」

「え、ま、まあ・・・簡単な料理なら出来るけど？」

それはありがたい。俺は料理はほとんど出来ないからな。まあ、お菓子作りなんか意外と得意だ。だが、お菓子だけ食っても生活できんからな。いつか、誰かに教えてもらわないといけないな。それがいつかはわからんがな。

「じゃ、早速作ってくれ。」

「ソーラのほうが上手だと思うけど？」

「そのソーラがいないからな。ほれ、材料はこれだから・・・頼んだぞ？」

「・・・わかったわよ。」

セレネが昼食を作っている間、俺はテレビをつけ、テーブルを片付け、皿などを並べ・・・

「それとって。」

「はいはい・・・。」

セレネの雑用をこなしたのであった。無論、おいしい昼食を食べるためだ。決して・・・そう、決して・・・セレネが失敗しないようにしたわけではない。

「・・・できたわね？」

「ああ、思ったよりうまいもんだな？ ウェイトレスじゃなくてコックになったらどうだ？」

俺は出来上がったチャーハンを二人分の皿について、テーブルに座った。真正面にセレネが座ったので当然のように話すような格好となってしまう。

「まあ、クビになったのかもしれないんじゃないか？ ほら、お前がクビになったら俺に専属的に魔法を教えられるんじゃないのか？ それとも、クビになったから・・・そのレストランの店長の言いつけで俺に魔法を教えているはずだが、それも放棄するのか？」

どうなんだろうか？ 俺は相手の目を見て話すことにした。これは目を離れたほうの負けだ。

「放棄するわけじゃない！！ 私のせいであんたが魔法使いにな

ったんだしさ！それに、クビになったからって別のレストランがあるの！！そこに行って雇ってもらえれば別に構わないのよ！それに・・・もう連絡しているし・・・。」

ならなんで、セレネは玄関先に蹲っていたのだろうか？

「なら・・・なんで泣いてたんだ？」

「それは・・・あのレストランで私はこれまで育ってきたのよ！まあ、正確に言うなら今の師匠・・・に拾われて育ったの！」

ああ、成程・・・我が家から追い出されたような心境か。ま、俺がわかるわけがないがな。

「明日に・・・その採用試験があるのよ。」

「ふうん？がんばってこいよ？一応、同居人として応援してやるよ。」

俺なりにセレネが悲しんでいる顔を見て痛くはないと思ったので・・・応援することにした。それに、ソーラの奴も心配するだろうからな。だが、予想は大きく違ったようだ。そう言った俺にセレネはおどおどしながら話しかけてきた。

「零時、お願いがあるの・・・魔法使いの基本チームは何人か分かるわよね？」

「ああ、それなら真っ先に習ったような気がするぞ？レストランで言ってたような・・・確か、三人だろ？」

「正解。それでさ・・・私だけじゃその試験受けれないんだ。これ
まで言えば分かるよね？お願い、私とソーラと一緒に明日試験にい
ってくれないかな？」

ほほう、それはそれは・・・とても無茶そうな話で・・・さて、
却下するかな？

「・・・わかったよ、行けばいいんだろ？それで、明日の何時集合
だ？ああ、わかってるって！努力するからそんなに泣きそうな顔す
るな！！（結局、こうなってしまうんだな。ま、金がないからつい
でに働いておこう。）」

客：最悪のレストランだね♪（前書き）

さてまあ、次でようやく十話目です。ここまでこれたのも皆さんのおかげです。評価してくださった方ありがとうございます。この小説を書く前にメッセージをくれた人、そして、この小説を見てくれた人に感謝します。これからもよろしく願いしますね？

客：最悪のレストランだね♪

九、

その採用試験を母さんはあっさりと承諾してくれた。理解のある・
・母親だな。目が金マークになってるぞ？そこまでしてお金が欲しいのだろうか？

「ま、しっかり働いてきなさいよ？勉強にも励んで、両立させるの！いやあ、これで小遣いを与えなくて良くなったわ。いい、お金は計画的に使うのよ？」

まあ、本心は俺に対する嫌がらせだろうよ。ふん、それで別に構わんさ。

その話を終えた後、俺は風呂に入って自分の部屋に上がった。今頃部屋ではセレネがソーラにその話をしているに違いない。まあ、彼女なら承諾するだろうな。

音質は悪そうだが、ちよつと立ち聞きしてみるか。犯罪ではないはずだ。

「・・・・わか・・・・。ところで・・・・瑞樹さ・・・・時君の過・の・
」

「嘘！あの・・・・零・が！」

音質悪くて何を言ってるかさっぱり分からんので入室させてもらうか。

「おい、話はまとまったか？おい、二人とも何してるんだ？」

セレネとソーラはそれぞれ・・・机の下とベッドの中に姿を消していた。おいおい、俺を化け物とでも思ってるのか？もしくは変質者？

俺に気がついた二人は気まずそうに出てきた。

「あ、零時・・・もう話がついたんだ？どうだった？やっぱ、反対された？」

「いや、二つ返事で話は決まった。履歴書とかも用意されていたぞ？」

「・・・そうですか・・・零時君はすでに魔法使いなんでレストランの従業員になるための裏の試験で受けてもらおうと思います。これには・・・ちょっと手順がありますので覚えておいてくださいね？」

俺はその後、二人にその試験の方法を教えてもらった。それは、実力試験（魔法を使い、店長を倒せばいいらしい。だが、時として変わるそうだ。）でどう考えてもウェイトレス（俺は因みに会計係らしい。）には関係ないだろうと思われる。

「じゃ、今日は明日に備えて早く寝ましょう？」

「そうだな。今日もいつもより無駄に疲れたからなあ。ねじでも眺めたいな。」

「・・・では、おやすみなさい。」

誰かが魔法で大きくしてくれたベッドに三人で寝る。明日も早いからさっさと寝るか。夢の中ではガンダ○の整備士、もしくはパイロ

ツトになりたいものだ。

「・・・って、なんで零時がこの部屋で寝るのよ？早くあっちで寝なさいよ！！」

真っ暗になった部屋でセレネが大声をあげだした。うっさいな、タコ！！

「おい、うるさいぞ？大体ここは俺の部屋なんだから俺が寝たって構わないだろ？それに、ベッドは十分大きいんだから、場所は大丈夫だろう？」

「そういうことじゃなくて！何で私たちと零時がここで寝てるのよ？お馬鹿？」

セレネは肩で息をしている。はて、俺は何か間違ったことをしたのだろうか？ううむ、理解できんな。教えてもらいたいものだ。そして、誰がお馬鹿だって？

「なあ、何でいけないんだ？あ、わかった！お前は寝相が悪いのか？」

「違う！私は寝相はいいほうなの！！やっぱりあんたは馬鹿よ！！」

俺たちの話を聞いていて退屈していたのだろう。ソーラが助け舟を出してきた。

「・・・零時君、悪いけど・・・あっちで寝よう？」

「ああ、やっぱりセレネは寝相が悪いんだな？うん、それじゃあ・・・

・あっちで寝るか？ソーラ？ちよつと埃っぽいかもしれないが、布団は綺麗だと思う。」

俺とソーラが並んで隣の部屋の扉（過去に誰かのために準備されていたらしい。）を開けて中に入ろうとすると・・・セレネが大声で叫んできた。

「な、なんでソーラと零時が一緒に寝るのよ？それもおかしいでしょ！」

「？いや、だってお前が寝相が悪いんなら普通はセレネの事を考えて俺たちがあっちで寝たほうが良いんじゃないのか？お前、一人で寝るのは嫌なのか？」

「そうじゃないでしょ！大体、年頃の男と女が寝るのはおかしいことなの！！」

暗がりなので分からないがよほど、怒っているのだろうな。その声には憤怒と驚き、その他もろもろが混ざっている。ちよつとばかり、悲しそうだ。

俺の結論、これ以上・・・長引いてしまったら体力が持たん。

「一人で寝るのが怖いんだろ？ならやっぱ・・・」

「・・・零時君、先に寝てて。私がセレネに話をつけておくからさ・・・。」

「ソーラ、何を・・・」

ソーラに押され、俺は部屋に入ってしまった。この部屋は防音対

策されているらしく、中の音は外に漏れないし、外からの音も中には聞こえない。

「・・・何故セレネはあそこまで怒っているんだ？」

俺は一人呟き、どうしたものだろうと窓から見える満月を眺める。一人、ロマンチックに浸るのもいいのだが・・・まあ、月明かりで部屋が幻想的になっているところなんてたまにはいいものだ。満月には騎士がいるかもしれん。冗談だ。

一人でかっこいいことを考えていると、どうやらソーラが戻ってきたようだ。

「お、ソーラか？結局セレネは何で怒ってたかわかるか？」

「ただ単に、零時が信用できないだけよ。」

入ってきたのはソーラではなく、不貞腐れたようなセレネであった。なにやら、服を着替えているようで、Yシャツだけを纏っているようだ。セレネはそのままこれまでほとんど使われることのなかったベッドに寝転がる。寒くないのか？

「・・・どう？何か感想は？」

「はあ？何言っただ、セレネ？お前、やっぱりクビになったのがそんなにショックだったのか？頭の中のねじは足りているか？頭の中の整備不良か？」

俺の返事に対してセレネはさらに不機嫌になったようだ。何故だ？

「零時、あんた私のこの格好を見てもなんとも思わないの？」

「ああ、確かに・・・Yシャツ一枚だな。・・・寒そうだな？」

「そういうことじゃないでしょ!!」

なんだ、こいつ？何をそんなに怒ってるのだろうか？俺が間違っているのか？

「ああ、もう!!！良くも悪くも、ソーラの言うとおりだわ!!！もう寝るわっ!!！」

「まあ、夜だから寝るのは当然だ。それと、やっぱりお前も疲れてるんだな。」

俺もセレネの隣に寝転がり、目を閉じる。比較的、簡単に夢の世界へ俺は進行を開始。だが、俺の作戦、『夢の世界掌握作戦…指揮…剣山 零時』はあっけなく阻止されてしまった。

阻止したのは近くにいた一人である。こちらを向いて恥ずかしそうにしている。

「・・・ねえ、何で零時は他の男と違うの？もしかして、女に興味がないとか？」

「はあ？何言ってるんだ、セレネは？俺だってドラ○ちゃんは好きだぞ？」

「いや、ロボットじゃなくてさ!!！ソーラが言うにはどんなことをしても・・・振り向かないっていったよ？本当に興味ないの？」

む、そいつは失礼な思い込みだな。俺はちゃんとした目標という

ものを持っているぞ？大体だな、俺だってその昔はまともな神経をしていたと思うさ。

「ソーラが言ってたけどさ、中学一年までは普通に女の子と話してたっていったけど本当？それに、中学のときの事件が問題でそうなったって……」

「ああ、そうだな。それであってる。……その話はまた今度だ。俺はもう寝るからな。じゃ、おやすみ……もう、話しかけるなよ。」

俺は耳を塞ぎ、相手に邪魔されないように……頭の中に広大な土地を買って何万頭という羊の群れを一匹一匹数え始めたのであった。そして俺は眠った。

次の日、俺は朝日とともに目を覚ました。隣の部屋から不快な音が聞こえない。

「ああ、眠いな。まあ、あの不快な音に起こされないだけましかな。」

目をこすりながら隣に寝ているセレネを起こそうとする。昨日怒られたからだ。

「……ちよつと寒そうだな。全く、そんな格好で寝るからだろうがよ。とりあえず、ソーラを起こしてくるか。ソーラならセレネを怒らせないだろうからな。」

俺はソーラを起こしてきて、そのまま一階に降りていった。いつかのように二回からがたと音がしたのであった。そして、階段を誰かが落ちてくるような感じでどたばたと音がしている。はて、

特殊部隊でも家に不法侵入したか？

寝ぼけた頭でそんなことを考えていたら部屋の扉が勢いよく開いた。びびった。

「れ、零時！私に何かしなかった？その、具体的には表現できないけど……。」

「いや、起こそうとは考えたが……俺が起こしたらなんとなく怒るだろうと思ったからやめておいたぞ？俺が起こしたほうが良かったか？」

セレネの後ろにはソーラが立っている。はて、何か……考えているようだ。

「……ほらね、零時君がセレネに何かするわけないよ。」

「な、何でソーラにそんなことが分かるのよ？」

「……いつか、零時君と仲良くなって見て彼に聞くといい。」

「そんなことより、早くしないとおいで行っちゃまうぞ？今日なんだろう？」

俺は無駄話に花を咲かせ、話し合っている二人に文句を言った。時間を守らないとだなあ、色々と大変なことになるんだぞ？うん、俺はいいこといった！！

「俺ひとりで言っても意味ないんだし、セレネがいないとお話にもならないからな。」

「わかったわよ。」

「・・・わかりました。」

今日はきちんと朝食が用意されていたのでそれぞれが自分の分と思しきものを前にして手を合わせて朝食が開始された。

「・・・零時君、昨日のセレネの格好はどうでしたか？」

「ああ、寒そうだったな。」

「・・・そうではなくて、可愛かったでしょうか？」

「いや、普通じゃないか？」

こういった俺に対して・・・何と、セレネは未だに湯気が出ている熱々の味噌汁を俺に向かって掛けてきやがった！！まあ、何とか避けれたがな・・・。

店員：お客さんに言われたくはありませんよ♪（前書き）

皆さんのおかげで十話目になりました。これからよろしくおねがいします。なお、今回で第一章は終わりです。とても区切りが良かった？のですが、次回からは第二章となります。第二章の中身はあとがきで少しばかり書いています。

店員：お客さんに言われたくはありませんよ♪

十、

俺とセレネ、ソーラは意外と近くにあったファミレスの関係者以外立ち入り禁止と書かれている扉のほうから中に入った。

「ええと、十六号店から紹介してもらった者ですけど？」

部屋の中には他にも三組の人たちがおり、パイプ椅子に座っていた。男の俺が場違いのようでも悲しいぐらい、美少女たちが座っていた。

精神が安定していなかったので・・・セレネとソーラに話しかけようとしたのだが、場所が場所だったので・・・（こっちを誰かが見ているのだ。誰だろう、この鋭い視線は？）黙っておいた。だって、セレネの目が怖いんだもん♪

部屋の奥にある扉が開き、このファミレスの従業員であろう、女の子の人だ。

「では、一組目の人たち、入ってきてください。」

呼ばれた人たちが入っていき、再びこの部屋に沈黙が訪れる。その沈黙も数分後に崩れ、中に入っていた一組目が出てきて、入れ替わりとして二組目の少女たちが中に入っていた。顔が明るかったので合格したのだろうか？

「次が俺たちだな？ だけどまあ、服がなんだか焦げてないか？」

「そうね、基本的に・・・あの人たちを見ていれば分かるけど、服は覚悟しておいてね。自分の周りを気をつけるべきね。仲間に魔法

を当てたら大変よ。」

出てきた一組目のチームの服はどれも黒焦げになっていたり、水でぬれていたりにしている。この扉の先には何が待っているのだろうか？

そして、二組目が出てきたのだが・・・ほとんど、真っ黒だといってもいいぐらいにこげていた。俺の視線に気がついたのか、お返しに睨んでくる。

「・・・零時君、あまり見ないでくださいね。」

「それどころじゃないだろうよ、もしかしたら・・・こうなるのは俺たちかもしれないんだろ？ 気を引き締めていくぞ。」

「ええ。零時にしてはいい事を言ったと思うわ。」

「チームリーダーセレネさんに従って中に入ってください。」

俺はかなりの緊張感に襲われながら入室した。テストをするらしい場所は地下にあるらしく、階段を下りて地下室への扉を開けた。てか、リーダーはセレネ？

「ようこそ、三組目・・・最後から二番目の試験を受ける人たちですね？ 試験内容は簡単、ここにいる相手を全員倒せば終了です。」

「「「・・・。」」」

全員・・・その数に驚愕した。目の前にいる男の人を入れてざっと百人はいるのではないだろうか？ そして、天井辺りに設置されている時計。それには、残り二分と書かれている。（店長を倒せば

終わりではなかったのだろうか？)

「それでは、始めますよ。ああ、勿論・・・彼らも攻撃をしてくるので、気をつけてくださいね。」

ちよつとまでやああああ！という俺の心の叫びもむなしく響き、多勢に無勢な試験は始まったのであった。さてさて、俺たちはどうなるのだろうか？

そして、俺たちが戦っている場所に近いとある部屋ではこの部屋を覗き込んでいる二人がいた。

「店長、このテストって素人などは合格できないんじゃないんですか？」

「ん？ いや違うぞ？ このテストは敵を倒すことではなくて、仲間との連携が鍵を握るんだ。勿論、敵を倒しても構わないが・・・その場合だって仲間との連携が出来ていなければ意味が無い。それを見せってもらうテストだ。」

「へえ、それなら・・・あの少年は合格ではないのですか？ 先程からやられそうになっている仲間の二人をフォローしてますし、ほら、また・・・片方の人は結構強いようですが、もう片方を特にがんばってフォローしていますよ？」

「うむ、きっと・・・凄腕の実力者だろうな。私だってこの店に配属されたときは五十人ぐらいしか倒せなかったがな。お、怒鳴られながらがんばってるな。」

「あ、時間内に倒しきったようですね。ふらふらになった片方を支えていますよ。」

「うむ、合格だな。今回唯一の男の子が一番だな。」

まあ、こういう会話が繰り返られていたのであった。

そして、俺はセレネを支えながら監視員みたいな人（先程、誤って攻撃してしまった。俺がやったのではない、セレネだ。）に尋ねた。

「戻っていいのでしょうか？」

「・・・え、ええ・・・どうぞご自由・・・に・・・がくつ。」

俺は奥のほうを見て、ソーラに尋ねた。

「なあ、全力を出してやってみたのだが、これでよかったのか？」

「・・・構わないと思う。私だって途中までは手加減してたけど、後のほうでは無理。とりあえず、ここは言われたとおりに戻ることにしよう。」

ソーラにそう言われたのもといった部屋に戻っていった。俺がセレネの手を持ち、ソーラが足を持った。半ば引きずるようにして階段を昇り、もといた部屋に戻ってくる。それを見て先輩になるかもしれないウェイトレスが口を開いた。

「どうやら、終わったようですね？皆さん、今から約一時間ほど後に合格不合格を言い渡しますので、各自・・・自由にしてもらって結構です。一時間後に再びここへ戻ってきてくださいね。」

俺とソーラ、セレネは一旦公園に行くことにした。公園への道中

はセレネを俺が背負ってソーラが俺たちの荷物を持ってくれた。

「……零時君、この荷物の中は何が入っているの？」

「ああ？それは……開けてみれば分かるぞ。ま、ソーラだったら分かるかもしれないがな。いや、わかるわけないだろうな。公園に着いたら見ていいぞ。」

公園についてベンチにセレネを寝かせると、ソーラは早速俺の荷物に手を出した。中には今日の朝に詰め込んだ、機械の本に、俺の日記、絆創膏などが少々ばかり詰め込まれている救急セットが入っているだけだ。

「……あの、日記を読んでも構わないかな？」

「……ああ、別段面白いことは書いてないがな。ソーラ、救急セットを取ってくれ、セレネがひざ小僧をすりむいているからな。」

俺はセレネのひざを消毒してから絆創膏を貼ってやった。その間、ソーラは日記を読んでいる。あの日記は誰かにもらったものだ。もしかしたら、瑞樹からのプレゼントだったかもしれないな。

「……あの、ここは？」

ソーラは早速俺に日記の内容を見せてきた。俺は一度も過去の部分を見たことが無い。だが、最初に書いたことは……多分、覚えていと思う。

「ふむふむ、これは……瑞樹と一緒にいた女の子と一緒に遊んだって書いてあるな。」

記憶はおぼろげだ。確定ではないが、瑞樹が女の子を見つけたと俺に言ってきたのだったかな？何でも、引越しをするといってきたと思う。

「・・・女の子が最後に思い出を作りたいから、一緒に遊んでくれて瑞樹に言ってたかな？それで、三人で・・・いや、もう一人いた気がするんだが・・・もう一人も混ぜて、怖い話をしたのかな？」

我ながら、馬鹿だったと思うよ。何が面白くて四人で昼間から怖い話をしたかったのだろうか？そして、事件は起こった・・・なんてことはなく、怖がる二人の女の子と俺を残して瑞樹は語り部の能力を最大限に発揮し、泣き出そうとしている二人に迫りながら喋っていたのだったな。

「片方は気絶したな。うん、気の毒だった・・・もう一人は混乱していたような気がしたのだが・・・そうだ、俺たち三人で引っ付いてたな。」

「・・・零時君、それは・・・たぶん私。」

「・・・本当か？それはまあ、凄い偶然だな。」

だが、ソーラは首を振った。セレネがそろそろ起きようとしている。くくく、この好きに悪戯でもしてやるかな？

「・・・あの頃、私と遊んでくれたのはセレネだけだった。一般人だって、私の正体を知れば嘔吐き、ペテン師、頭のねじがとれた不良品って言っていた。」

それはまあ、酷い連中だな。そして、なんともまあ・・・夢の無いがきどもだ？少年時代の頃は夢の一つぐらい、昼間から見るべきだろう。

「・・・そのせいで、未だに・・・あまり知らない相手と話すときは緊張したりする。詰まったような話し方しか出来なくて、今もあまり友達が出来ない。今も、本当の友達はセレネだけだと思っている。」

「俺は？」

「・・・いい意味で特別。零時君は信用できるから。だから、あの時・・・正体を瑞樹さんに話すのが怖かったけど、実は・・・私が魔法を使ったところを見られた。」

一般人に魔法を見せるのはいいことなのだろうか？いや、多分・・・いけないことなのだろうな。色々と面倒がおきそうだし。

「・・・瑞樹さんは私の正体を知って話しかけてきたけど、見られた以上・・・普通に接することは出来なかったと思う。だから、零時君を連れてくるって言って、嘘について私のもとへと連れてきた。」

嘘にまんまとひっかかってのこのことしゃやり出てきた俺は無駄に怖い思いをしたというわけか？奴の怖い話を聞いた後は夢の中に化け物が毎日訪問してきたぞ？あれは正直、遠慮願いたかった。

「・・・その後、零時君が帰った後に・・・私は水貴君に零時君の名前を聞いた。いつか、あの日のお礼をしたくて・・・自信を

持って正体を明かせるように努力して、トップを取るまで努力した。だから、今の力があるのも零時君のおかげ。」

それは・・・違うだろうな。その実力はソーラのものだ。俺の力ではない。

「・・・・現実には・・・ちょっと厳しい。本当はあのレストランのトイレで・・・・本当のことを話したかった。だけど、いつかのように・・・・拒絶されるのは怖かった。だから、言い出せなくて・・・・結局、言い出す前に、他の人によって私の正体がばれるようになった。」

ここで、セレネが起きた。目をぼちくりとして俺とソーラを見ている。

「・・・・そうか、今日は面白いことを聞かせてもらった。ソーラ、セレネ・・・・は、まあ・・・・覚えてないから別にいいかな。」

その言葉に敏感に反応したセレネは俺に食って掛かった。

「む、どういう意味よ？私だけ除け者？」

「いや、そうじゃなくてだな・・・・。」

俺たちのやり取りを見ていてソーラは楽しそうに笑ったのであった。

店員：お客さんに言われたくはありませんよ♪（後書き）

さて、今回の話ではいよいよ？題名っぽいことが出来ました。まあ、まだまだなのですが・・・。さて、次回からは前書きに書いたとおり第二章に入ります。第二章ではちよつとばかり怪談話になると思います。何処かで聞いたことがありそうな感じの人っぽい人がです。では皆さん、また今度・・・。

第二章 ロマンチックな怪談話? (前書き)

これから学校での話になっていきます。今後とも、よろしくお願いします。

第二章 ロマンチックな怪談話？

十一、

あれから、一カ月後・・・俺は今では会計係ではなく、雑用係として働いている。仕事は主に皿洗いだ。それ以外は特にない。

「おら、新人！皿追加だ。」

「はい。（くそ、面倒だな。）今すぐにも洗ってみせますよ。」

そのおかげで今では俺が自宅の食器を洗っている。どんな皿でも俺にかかれぱびかぴかだ。まさか、一ヶ月以内にここまで皿洗いが上達するとは全く思っていなかったがな。ううむ、俺はもしかして魔法使いよりもこっちの方がいいのかも？

そろそろ俺のバイト時間も終わりを告げる。強いては俺以外の人もだ。

「よし、今日はもう帰っていいぞ。ご苦労だったな。」

「はい、おつかれさまです。じゃ、お先に失礼しますね。」

既に学校も始まっており、色々と大変だ。さて、まずは・・・ちよっと俺が二年生にあがったときの話をしよう。回想が少しばかり長いが付き合ってくれ。

俺ともとうとう二年に進級し、今日も瑞樹が俺を学校に誘いにやってきた。

「ほら、早くしないとおいて言っちゃうよ。」

「わかってるよ。今行くから・・・じゃ、学校行ってくる。」

「零時、行ってるっしょい。」

「・・・零時君、行ってるっしょい。」

わざわざ玄関から出て俺を見送ってくれる二人にありがたいとおもいつつ、俺は瑞樹のほうに向き直る。そこにあったのは瑞樹のニヤニヤした笑いだった。

「僕というものがあらながら浮気？」

「・・・俺は男だ。お前に興味など無い。俺が興味があるのは機械だけだ。」

「へえ、まあ、僕はあの子達可愛いと思うけど？あの子たちには興味ない？」

「・・・可愛いと思うが、それ以上の感情は無いだろ、お前も？」

「勿論だよ。僕が視線を交わす相手は僕のハニーたちさ。」

できれば、一緒になりたくなかった。また同じ教室かと思うと周りの視線がいたいぜ。うん、こいつ以外の友達がなかなか出来ないんだよなあ。

そんなことを考えながら学校への道を目指す。学校に近づくにつれて人は多くなっていき、中には緊張しているような表情・・・きつと一年生に違いない、そんな顔が学校へと吸い込まれていく。ここだけだといつもの日常だ。

新しく俺のクラスの友達となる（俺としてはどうでもいいが）連

中の面を眺めていると、ふと、後ろから声を掛けられた。振り向けば黒髪の美少女だ。誰？

「おいっす、零ちゃん。元気だったかな？私はずっと通りだったよ。」

「・・・どなた？」

俺の目の前に現れたのは、黒髪を腰まで伸ばしている女の子であった。隣の席の瑞樹が茶化す。ニヤニヤの表情の中に共学が浮かんでいる。

「おいおい、それは何でも・・・浮気のしすぎじゃないか？モテオ君？」

「だから、何でそうなるんだ？現に、俺の目の前にいる女子を俺は知らないぞ？」

俺がそういうと目の前の女の子は怒ったようだ。この表情、何処かで見た気がしないでもない。さて、どこでこのやんちゃそうな表情を見たのかな？

「零ちゃんって酷いんだあ？ちょっと髪の毛の色を変えただけで私の事を忘れるなんてさ。どうせそのかばちゃみたいな頭の中にはあの二人の事しかないんだ？」

「・・・その口調・・・ノワルか？」

「あったりい！！さすが零ちゃん！！忘れないで覚えていてくれたんだ。」

俺を見て今度はニコニコしてくる。だが、この席の持ち主は……名前が違はずだが？ノワル・ダークなんて名前はこのクラスにいないぞ？スパイ？

「ノワル、その席の持ち主は黒道こくど 暗菜あんなという人だぞ？」

俺がそういうと、彼女は笑いながら俺に告げた。全く、健康そうな笑い方だ。

「黒道 暗菜っていうのはね、私の偽名。」

「偽名で……。俺はお前の事をなんて呼べばいいんだ？」

「ま、零ちゃんが私をなんて呼ぶかは任せるよ。じゃ、一年間よろしくね。」

「あ、ああ……。」

俺たちのそんなやり取りを見ていた瑞樹だが、うんうんと頷いていた。おい、何が言いたいんだ、我が親友よ？その意味ありげな微笑みも気になるぞ？

「とうとう、零時にも春が来たんだね？しかも、春一番は三つほど……いや、後一つも出てくるかも……。」

「瑞樹、何が言いたい？返答によってはお前の頭の中を冬にしてやろうか？」

「さあね？たまには考えたほうがいいんじゃないかな？ふふふ……」

」。

はぁ、と俺はひとりでため息をつき・・・担任の先生が入ってきたのでおしゃべりはそこまでとなった。まあ、面倒なことになりそうにないからいいか。

今日は始業式なのでやることも特になく、午前中には放課後となってしまう。持ってきていた筆記用具などをかばんの中に入れ込み、瑞樹とともに帰ろうとしたのだが、ノワルが再び俺たちに話しかけてきた。何だ、その微笑みは？

「零ちゃん、瑞樹君、何処か行こうよ？」

「そうだね、何処か行こうか？」

面倒だね、全く持って面倒だ。俺としてはさっさとかえって魔法のお勉強でもしたいのだが？ノワルは信じられるが『古代魔法振興会』は信じられん。

「あゝ俺はちよつと用事が・・・」

「勿論、零ちゃんも行くよね？」

満面の笑みでそう言われ、俺が答えた返事は・・・・ふ、決まってるぜ。

「あ、そうだな・・・三人で何処か行こうか？」

すまん、セレネ、ソーラ。今日はお土産を買って帰るから、許してくれ。

俺が心の中で二人に頭を下げていると、瑞樹が話しだした。どう

やら、教室の一角を指差しているところを見ると俺に何かをしても
らいたいらしい。

「零時、三人だったら二人が話していると一人が余るから、あの
誘おうよ？」

教室の一番隅のほう、そこには眼鏡をかけ、みつあみの見るから
にがり勉タイプの女の子が一人、座っていた。時折、眼鏡を人差し
指で上げている。

その女の子を見てノワルが呟いた。珍しく真剣そうな顔だ。

「あの子、確か……学年主席の……」

「そ、学年主席で二年になった双三ふたみ 稲穂いなほだよ。彼女とお友達にな
れば、勉強を教えてくれるかもしれないからね。」

瑞樹が何かを企んでいるのは目に見えて分かっている。ノワルは
何も疑っていないようだが、俺は知っている……瑞樹は学年次席
だ。トップとの差はわずか、十点。そんな頭の持ち主が何を教えて
もらおうってんだ？みつあみの仕方か？

「というわけで、零時、彼女を誘ってきてくれ。」

ほら来た、ほら来た。絶対来るって思ってたさ。第六感って奴だ。

「却下だ。」

「零時、君は誰かに勉強を教えてもらったほうがいいんじゃない
のか？」

それは・・・たしかにそうだろうな。これからはバイトとか魔法の勉強とか色々頭の中に入れなきゃいけないし、ここは・・・妥協するのも一つの手かもしれないな。まあ、別に友達が出来てもかまわないだろう。

「わかった、ちょっと行ってくる。」

「君の交渉術をとくと拝見させてもらうよ。まあ、素人さんだろうからね。」

「がんばって、零ちゃん!! 応援してるよ!!」

あの二人がそこまで言う相手なのだから、きっと・・・只者ではないに違いない。何だか、ノワルが彼女を見たときの反応も気になるし・・・。

俺は意を決して彼女に話しかけた。そのとき、彼女は既に二年の授業を範囲の教科書を広げ、ノートに問題を解いている。なんて、努力家なのだろう。

「ええと、双三・・・俺たちと一緒に何処に行かないか？」

俺をちらりと見て、こういった。鋭い眼光が俺の目玉にささってぬけない。

「何処かにいこうかって？ 貴方、勉強をなめているのね？」

「い、いやそういうことじゃなくてだな・・・。息抜きて奴だ。」

ここで、俺の後ろにやってきた瑞樹にボタンタッチ。瑞樹の背中に隠れ、ノワルに目で訴える。あいつはやばい。向かってくるもの

は全て倒す性格だ。

「……零ちゃんかっこ悪い。」

「いや、あの体中から発せられるオーラには勝てない。ぶっちゃけ、俺がこれまで生きていた中で最も苦手とするオーラだ。言い訳じゃないぞ?」

俺とノワルが話していると、瑞樹が相手に話しかけた。奴ならできるかも……?

「やあ、双三さん……どうかな、僕の使いの零時が君を誘ったんだけど?」

おいおい、いつから俺はお前のパシリになったんだ? そしてお前、何そんなさわやか系で話しかけているんだ? いつものように正しい感じを全面的に出せ。

話しかけられた相手は今まで見えなかった幽霊が見えてしまったって驚いたような勢いで瑞樹を見た。そして、かけている眼鏡を上げ下げ……相手を確認し、手元の手帳(真っ黒だ。)を眺める。その手帳も気になる。

「……あんたが、後鳥河 瑞樹ね? ふん、なめた真似をしてくれたわね?」

なめた真似? 何かこの子にしたのだろうか、瑞樹は……意外とスケベ?

「ノワル、なんだかさつきより剣呑な感じがするんだけど?」

「そうだね、なんだか・・・稲穂ちゃんが一方的に瑞樹君を嫌っているようだけど？ほら、瑞樹君はさわやかに笑ってるよ？」

ここに、後鳥河 瑞樹と双三 稲穂の因縁の決着が始まったのであった・・・・いや、別に始まらないけどな。ただ言ってみただけだ。

瑞樹を睨みつけ、双三は次のように述べたのであった。目には炎が・・・・。

「全く、進級学力テストのときにわざと一問飛ばすなんてあんたも勉強ってものをなめてるでしょ？何、そのにへらっしてしている笑みは？」

第二章 ロマンチックな怪談話？（後書き）

今回の話であらたな登場人物が姿を現しましたね。まあ、本格的に食い込んでくるのはもうちょつと後になりそうですが・・・この場を借りて申し上げますが、もしかしたら新しい作品を書くかもしれません。そのときはまた、よろしく願います。

男・・・夜の学校にひとり来るのは怖いもんだな。(前書き)

さてさて、新しく出てきた登場人物なのですがまだ本格的に始動しません。もうちょっと時間がかかります。

男……夜の学校にひとりで来るのは怖いもんだな。

十二、

学年主席VS学年次席がにらみ合っているようにもみえなくもない。

「……調べさせてもらったけど、あんた、隣の男子と一緒にそのテストを受ける前に遊びまくってるわね？ 一夜漬けでそこまで普通取れる？」

「おやまあ、ここまで調べ上げられているとは……だけど、今日は純粹に同じクラスメートとして仲良くしてもらいたいだけなんだよ。」

彼女の猛攻をさらりとかわして瑞樹はにこりとして答えた。その笑顔はほとんどの女子の心を鋭く射抜く。だが、相手の心は単なる心じゃないらしい。

「だから、あんたたちと遊ぶぐらいなら勉強をしていたほうがいいわよ。いい、私に話しかけないでくれる？」

もう話は終わったとばかりに再びノートを見始める双三であったが、瑞樹がポケットから何かを取り出した。何かの写真のようだ。相手に見せるような感じなので瑞樹の背中からは見ることが出来ない。

「じゃ、この君とは思えない写真を他人に見せてもいいんだね？」

その写真を見ると双三は血相を変えた。脅迫とは……。

「!何であんたがそんな写真を持ってるのよ!」

瑞樹はノワルとともに状況を見守っていた俺を指差して言い放った。

「彼が、手に入れたんだよ。どうだい、僕たちと一緒に遊んでくれないかな?」

俺は濡れ衣だとばかりに相手に目で言葉を伝えようとしたのだが、逆に睨まれた。そして、瑞樹に尋ねる。今度の声は何かを恐れているような感じでもある。

「・・・本当の用件は何なの?今ここで言いなさいよ。」

「いや、普通に僕たちと遊んで欲しいだけだよ。ね、零時?」

「あ、ああ・・・(いや、俺としてはここまでしなくていいのだが。)」。

彼女もようやく頷き、勉強道具を片付けて・・・俺たちの後ろに立った。

「・・・ついて行ってあげるわよ。ほら、さっさと貴方たちも準備しなさいよ。」

こ、こいつ・・・絶対、学級委員長になるだろうな。そう思いながら俺たち三人は自分のかばんを持って彼女とともに学校を出たのであった。ははは・・・。

女子二人が前で話している間、俺は先程の写真がどのようなもの

なのか、法律的に違法である隠し撮りではないのか等など、瑞樹に尋ねてみた。

「ああ、大丈夫・・・ほら、この写真だよ。零時も見ただことあると思うけど？」

瑞樹に渡された写真の中ではひまわり畑で遊んでいる可愛げな少女がにこりと笑っている写真であった。うむ？本当にこれは俺が撮ったものなのか？

「・・・誰、これ？この・・・麦藁帽子を楽しそうに花を眺めている人・・・。」

「あの人だよ。あ・の・ひ・と。」

目の前を歩いている片方（一方的に相槌を打っている）を指差す。双三だ。

「でも、俺はこんな写真を取った覚えはないぞ？」

そう答えた俺だったが、瑞樹は指を左右に振りながらこういった。

「もう忘れたの、零時？ほら、去年の夏にひまわり畑に行っただろ？そのとき、零時が風景の写真を何枚か撮ったろ？その時、モデルも欲しいって言った僕の意見に君が彼女に黙ってひまわり畑で遊んでいる彼女を撮ったんだよ。」

つまり、隠し撮りをしてしまったのは俺のほうか？だが、まさか・・・今こうして再利用されるとは思わなかったな。しかし・・・写真を渡してないぞ俺は？

「じゃ、なんで彼女はあそこまでこの写真が怖いんだ？」

「自分の中をさらけ出していた写真だからじゃないかな？ 彼女は嚴格な自分が半分好きで半分嫌いなんだよ。零時だったら彼女の一般的イメージはどう感じる？」

硬い、堅い、固い。俺が頭に浮かんだ言葉はこんなもんだ。それ以外で浮かんでくるものはがり勉、三つ編み、学級委員長。そして、似合っている場所は図書館、もしくは会議室だな。

「あまり柔らかそうなイメージはもてないだろう？ 彼女自身、他人に妥協したり自分に妥協したりするのは嫌いなんだよ。つまり、他人にはココロを見せたく無いってことだよ。」

俺は思いついた最大の疑問を瑞樹に聞いてみた。これはとても重要なことだ。

「なあ、何でお前がそこまで知ってるんだ？ ちょっと詳しくやしないか？」

「・・・なあに、たまたま帰る道が一緒だったときに好奇心でここまで調べ上げたんだよ。ほら、なんていうのかなあ・・・うん、死ぬまで勉強って奴。」

こいつ、恐ろしい野郎だな。いや、犯罪者かもしれないが・・・まあ、俺だって隠し撮りの件があるし、人の事を言えたたちではないだろうが・・・。

それから話し相手は変わり、俺の隣にはあの堅物眼鏡女がいる。俺らの後ろでは瑞樹が俺の無いことを面白おかしく、語っ

ている。なんと和やかな一場面？だ。それに比べ、俺たちの間に流れる空気は相手の腹を探るようなくらい雰囲気で疑心暗鬼にかかっているとする主人公のようなものだ。

相手から仕掛けてきた。うん、声は先程よりも陰しいものではない。

「・・・貴方があの写真を撮ったらしいわね？意外だったわ。」

「あ、ああ・・・そうだな、ちよつと・・・まあ、・・・写真にモデルが欲しいって親友が言^{あのお婆か}ってな、その・・・可愛いくてひまわりにあっていると思ったから撮っただけだ。別に、あんたと知って撮ったわけじゃない。」

俺の口調はたどたどしい。何も悪いことはしていないつもりなのに、びびってしまう。俺、この人苦手だ。なんだか心の中まで見透かされている感じ。

「・・・普通、そんなことを言っ^て私が信じ^ると思う？」

はつきりいって信じるとは思えません。彼女の疑心暗鬼は相当なものだろう、俺を睨みつけている。だが、何かを諦めたように俺に話しかけてきた。

「・・・で、本当の目的は何？」

「はあ？」

「だから、本当の目的は何よ？その写真で私を脅そうって魂胆でしょ？何、私に学年最後から一位をとれって言いたいの？それとも、貴方の彼女にでもなれ^て？それとも・・・」

はて、この人は何を言っているのだろうか？俺にはさっぱり理解できなかった。途中でやめさせることにした。うむ、周りの視線が痛い。

「いや、今回は瑞樹が言ったとおりに純粹に遊ぼうと思ったただけだ。それと、これを機会に・・・勉強を俺に教えてほしいんだ。」

「はあ？それだけ？」

相手の驚いた顔はそれなりにおもしろかった。カメラで撮って後で本人に見せたかったな。まあ、そんなことをしたらまた何かたくらんでいるんだろうとか、根も葉もないことを言われるだろうがな。瑞樹が脅したのは間違いないのだがな。

「・・・駄目か？」

「まあ、いいんじゃない。意外とまともなお願いで私は安心したわ。」

狐に包まれたような感じで俺を見て、彼女は前を向いて歩き出した。そして、目の前の電柱にぶつかりそうになった。更に、どぶに落ちそうになったり、医師を踏んでしまいそうになったり、最後に・・・小石に躓いておもいきりこけた。意外とどじなのかもしれないな、この人は・・・どこかセレネっぽい。

「・・・零ちゃん、この人どうしたの？」

「知らんな。急にこけた。」

「きつと、零時が甘い言葉を耳元でささやいてたにしちゃったんだよ。」

「おいおい、骨抜きになったとか思ってる場合じゃないぞ？元に戻そうにもどうかしてしまってるし……。」

三人で悩んでいると、はっとしたようになり……不思議そうに見ている俺たちを見て立ち上がった。

「ほ、ほら、さっさと目的の場所に行くわよ？」

彼女の行ったことに頷きながら俺はふと疑問に思ったことを聞いてみることにした。

「なあ、双三って友達いないのか？」

その質問に彼女は馬鹿にしているのかという視線を俺に向けながら答えたのだった。

「……あのねえ、私にだって友達はあるわよ。近所の犬とか、猫とか……。」

「そ、後は……今ここにいる連中がこの人の友達さ。」

双三の方を見ながら瑞樹は言ったのであった。だが、双三はその答えに不満なのか、首をすくめて言った。しかし、どこか嬉しそうに楽しそうだった。

「たまたま付いて来てあげてるのよ。そうね、これも私の目標を達成するための伏線って奴よ。勘違いしないでね、私は貴方たちとは

友達になった覚えはないからさ。」

「そうかなあ？俺は瑞樹と話している君が幸せそうに見えるんだが？」

俺の腹部にけりを入れ、つんとそっぽを向いて先に行ってしまった。その隣には瑞樹が話しながら歩いている。俺はノワルと一緒に歩くことにした。

「零ちゃん、大丈夫？あざとか出来てない？」

「あ、ああ・・・意外といいけりしてくるじゃねえか？いいねえ、実にいい。」

「・・・零ちゃんって、変態？」

「・・・素質があるってことだ。ノワル、お前にも聞きたいことがあったんだが・・・ちよつといいか？お前たちの『古代魔法振興会』ってやっぱり魔法使いみたいに三人一組でチームを組んで動いているのか？」

ふと、思った疑問だったので俺は何とはなしに聞いたのだった。

「うん、そうだよ？だけど私はちょうど人数余ってるから・・・今のところは一人だよ。」

セレネたちのチームは一人足りなくて俺がピンチヒッターのような感じで入っているのだが、これは・・・もしかしたらチャンスかもしれない。このノワルを説得してセレネたちのチームに入れてしまえば俺ははれて自由になるかもしれない。とりあえず、それを可

能にするにはノワルとセレネの仲を解消したほうがいいかもしれないな。

その後、四人で町の中を色々と歩き回り、いたって平和な日常を送ったのであった。そして、俺は頭の中で考えた計画をその夜、試すことにしたのであった。

男……夜の学校にひとり来るのは怖いもんだな。（後書き）

今回も読んでくれたかたがた、ありがとうございました。更新する前に自分で再び読んでみたところ……なんともまあ・悲惨な感じでした。誤字があったり・・零時がいつもと違ったことを口走っていたりと・・大変でした。だけでもまあ、零時の心境が変わっていくこともあると思いますので、そこらへんも見てくださいます。

幽霊：いないいない！ばぁ♪

十三、

月が天空に輝いている夜は基本的に公園で魔法を操る？勉強をすることになっていた。無論、監督をしているのはソーラのほうだ。セレネは今頃家で何かをしているに違いない。明るいときはセレネで暗くなったらソーラが教えている。

「……今日は魔法を使った肉弾戦の練習をしてみたいと思います。」

「……魔法で肉弾戦？魔法で遠距離先方が取れるのならそっちを鍛えたほうがいいんじゃないのか？しかも、誰と戦うんだ？」

「……確かに、魔法の最大の利点は『離れて攻撃できる』ことです。あまりにすばやい相手には全く威力を発揮できません。それと、護身用です。」

ソーラは俺に何かを教えてくれるときは丁寧な口調になる。まあ、普段は寡黙で冷静なのだが、教えてくれるときは嬉しそうで楽しそうで……とても人間くさいところがありそうなのだ。そういうのもいいのかもしれない。

「へえ、でも近付いた敵に思いつき強い魔法を使えばいいんじゃないのか？自分には魔法は効かないんだろ？」

「……零時君、それでは、近くにいる仲間に当たったりしますよ。魔法使いは基本的に三人で一組です。それに、衝撃なんかは普通を受けてしまうんですよ。」

そうなのか、全然知らなかったな。まあ、魔法使いが三人で人組なのは知っていたが。それならそれでさっさと教えてもらうかな。俺もソーラに話をしたいし。

「じゃ、そういうときの対処の為にそれをするのか？」

「……ええ、この技術を覚えれば素人の魔法使いにはほとんど勝てるでしょうね。同じ肉弾戦の練習をしている方々にも五分の戦いを約束できると思います。それに、この肉弾戦は……どちらかというと古代魔法を使う人たちのほうが得意なんですよ。近距離と遠距離の魔法を一度に使えますからね。」

「じゃ、ちゃちゃつと教えてくれ。」

それから……さまざまな失敗を経て、俺は……必要なのか知らないが、対魔法使用のための武器を作り終えたのであった。基本的な剣の形だ。

「……はい、なかなか……いいですね。その剣の作り方を覚えておけば、小さくしたり更に大きく出来ます。それを作り出して振り回す場合はその剣の形のイメージを強く持つてくださいね。イメージが消えたりしたらその剣も姿を消しますから。あとは近くに電線など危険物が無いことを確認してください。」

「ああ、わかった。（それ、風揚げのときに注意すべきことなのでは？）」

そしてこのとき、俺はソーラにノワルの事を話し始めたのであった。それから……俺の苦労は再び始まったのだろう。いやいや、

人生は苦勞の連続だ。

「なあ、この前戦った奴を俺の代わりにこのチームの中に入れたらどうだろうか？ 実力だって結構良かったんだろ？ それに、意外といい奴だと思っぞ？」

「……あの方をですか？ 何でまた？ 零時君、事情を事細かに教えてください。」

俺は彼女の事を事細かに説明し、そこまで悪い奴でもないと伝えておいた。俺が言ったことを信用してくれたのかどうかは分からないが、ブランコに座ってソーラは考え、答えを出した。考えたのは一こぎの間だけだ。

「……そうですね、仮にもチームリーダーはセレネなのですからそのセレネがどうかまでは分かりませんね。セレネに対して彼女は結構怒っていましたから……まあ、実力はとても素晴らしいですし、最下級の私たちのチームに入ってくれば、仕事の能率もよくなると思います。まあ、彼女もセレネの事を嫌っていますからどうなるかまではわかりませんがね。」

「じゃ、ソーラは賛成か？」

「……ええ、私は賛成ですが、その方をチームに入れると零時君はどうするんですか？ 余ってしまいますよ。」

俺の事は既に考えている。そのことを俺なりに伝えてみた。簡潔に……。

「補欠要因。」

「……なるほど、私たちの誰かに問題が出来たとしても零時君が代わりに何とかできるということですね。でも、セレネにどうやって伝えるんですか？それに、あの方にはまだ説明してませんよね？」

そうだった、俺はまだ……ノワルに自分が魔法使いでセレネたちのチームに入っていることを伝えていない。そして、彼女にそのチームに入らないかともまだ伝えていないのだ。え？無計画で無責任？しょうがないじゃん。

「……今日のところはいったん家に帰りましょう。とりあえず、この話はセレネに話しておいたがほうがいいでしょうね。」

そういつてソーラは眼鏡をはずした。そして、手に持っていた手帳をしまい、先に歩き出した。俺もその後を追うことにした。

「そういえば、ソーラって今のところ若手NO1なんだよな？」

「……うん、そうらしい。だけど今の若手は零時君。」

「でも、何で最下級のチームなんだ？」

「……処罰が多い。減給される事、二、三回。」

「なるほど、それもセレネのせいだな。ソーラがそんなことをすると考えにくい。」

「……一人の責任はチームの責任。彼女のフォローが出来なかった私のせい。」

厳しい世の中だと思いながら俺たちは綺麗な月を眺めながら自宅に帰りついたのであった。玄関を開けるとセレネが俺たちを待っていたようだ。

「ソーラ、零時……今日は遅くなかった？怪我でもした？」

「……零時君と話しをした。セレネ、零時君から話があるって。」

ソーラにそういわれ、俺は不思議そうに視線を向けてくるセレネに先に俺の部屋に行ってもらうことにしてソーラと再び話を始めた。

「なあ、今から言っても大丈夫かな？でも、俺よりソーラのほうが……。」

「……私が思うに、セレネに話すのはあなたが一番の適任者。それに、今言っても後で言ってもあまり変わらないと思う。それに、私はセレネに話すことよりやらなくてはいけないことがある。悪いけど、お願い。」

「……そうだな、俺が先にソーラにいったんだし……分かった。がんばってみるよ。」

「……がんばって、零時君。私、応援してくるから……。」

ソーラに見送られて、俺は自室の扉を勢い良く開けた。今日の夜は母さんがいないので……彼女たちがいなかったらとてもさびしい夜になっていたのかもしれない。それに関しては騒がしくなっ

た我が家にはお礼を言っておかなくてはいけないだろうな。」

「どうしたの？ 気合はいつてるけどさ？・・・で、話ってのは何、零時？」

「あ、ああ・・・実はな、ある魔法使いをこのチームに入れたいんだが？」

「ふうん、その子はきちんと実力が備わってるんでしょね？」

お前が言えるのかと思ったが、一生懸命やっているその姿に俺は近頃応援してやりたくなっていた。実際、応援もしているのだがな。まあ、セレネはまだ成長途中だし、ソーラが言うには前よりは（ちよつとだけ）よくなったそうだ。

「まあ、実力はあるだろうな。それに、セレネが知ってる奴だぞ？」

「へえ、私が知ってる子でまだチームに入っていないそんな子、いたっけ？ もう一度言うけど私の知り合いのほとんどは実力のあるチームを組んでるわよ？」

不思議顔でそんなことを言っているが、確かにそうだろうな。まさか、あのノワルが今から言う相手とは一ミクロンも思っていない。さて、話を切り出してみるかな。セレネの顔は犯人を推理している名探偵のようだ。

「実は、この前・・・俺を誘拐していったノワルだ。」

「・・・却下。なんで、私があの女と仲良くしないといけないのよ？」

やはり、そう来たか・・・頬つぺた膨らましているセレネを見ながら俺は心の中でため息をついた。おいおい、子どもじゃないんだから・・・。

「いやまあ・・・いいだろう？ そうすればこのチームの実力も上がるわけだし・・・。チームの人数は一人余っちゃまうが・・・」

「どうせ、外されるのは私でしょ？ 零時も見てたわよね？ あの無様な戦い方・・・それで、ソーラの首を絞めているのは私って思ってたんでしょ？ そう・・・なんでしょ？ うう・・・」

急に泣き出してしまったセレネ・・・おやおやこいつも泣くことがあるなんてな。てつきり血も涙も流れていないような非常な奴と思っていたんだが・・・いや、冗談だ。ソーラが言うにはいつも影で泣いていたそうだからな。意外だ。

「いや、セレネは上達しているからな。このチームから外れるのは俺だ。素人の俺が配属されるのはちょっと的を外れた意見だからな。」

「え？ で、でも・・・私は零時の能力は誰よりも強いと思うけど？」

涙を流すのは止まったのだが、困惑している顔に俺は理解してもらうために事情を告げた。強がりな奴には真実を告げ、合理的に解決する方法がお勧めだ。

「・・・確かに、俺は誰よりも強いらしいが、理由はそれだけじゃない。お前がクビになったとき、お前の悲しそうな顔を見たから

な。俺は・・・悪いが同居人の暗い部分ではできるだけ見たくないんだよ。明るい奴なら、そのままで・・・そして、暗い奴は静かでもいいから見た目は暗くてもいいが、心の中は明るくなってもいいんだよ。例え、それが誰であろうとな・・・。」

俺の話にセレネはぽかんとしていた。いかんな、どこかこいつは頭がおかしくなったのかと思われているようだ。まあ、俺としては真面目な考えをしているつもりなのだが・・・。セレネには笑顔が・ソーラには真面目な顔が似合うし。

「と、とにかく！俺に魔法を教えてもらっているのだから、俺がセレネたちに恩返しをするのは当然だと思っているんだ。だからさ、どうだ？俺がノワルをなんとしてでも説得するからさ？そうすれば二人とも給料上がるんだろ？」

俺はセレネの喉元を掴むような勢いでセレネの目を見たのであった。迫力に押されたであろう、セレネが俺の質問に頷いた。

「う、うん・・・わかった。ありがと、零時。」

「いや、何・・・当然の事をしたまでだ。これで、俺の話は終わりだ。じゃな、俺は風呂に入ってくる。」

「あ、ちょっと待って。零時、何であのノワルに説得できるの？」

「ん？それは・・・ノワルが俺のクラスにいるからだか？」

「って、嘘！あの子、学校行ってるの！」

「あ、ああ・・・」

そして次の日・・・俺はちよつと驚くことになる。そして、後悔もする。

幽霊：いないいない！ばぁ♪（後書き）

いやぁ、どうもどうも・・・作者の雨月です。久しぶりにここに投稿したなかで一番古いやつを感慨深げに眺めていたのですが・・・まぁ、微妙なものですね。その後もそのシリーズにいたっては色々とした気がしますが・・・さて、その話題は置いて、今回の話はどうだったでしょうか？まだまだこの章に入ったばかりなのですが・・・まぁ、比較的はこの話はちよっとしたおまけのようなものです。じゃ、皆さんまた今度。

男..ぎゃあああああああ!!

十四、

人生、何が起こるかさっぱりわからないものだ。

隣には誰も寝ておらず、隣の部屋で寝ているはずのソーラの姿も無い。

俺が一人で朝起きるのは俺が魔法使いになった次の日であって欲しかった。そうすれば、今までの出来事が夢であったと思ったに違いない。まあ、部屋にはセレネとソーラの衣服が散らばっていたり、いつの間にか俺のたんすのほかにも俺の所有している以外の物が増えており、意外とすっきりしている俺の部屋は散らかっていた。俺、いつか追い出される？

「.....あの二人、どこに行ったんだろ？珍しく部屋を汚くして
いって.....」

1階に降りてみると、我が母親が食器を洗っていた。起きた時間
はいつもどおりなのだが？どうかしたのだろうか？嬉しそうなのだ。

「母さん、もう食器を洗ったの？いつもより早くない？」

「ええ、セレネちゃんとソーラちゃんの食器よ。あの子達、ちよつ
と用事が出来たから朝早くに出て行ったわよ。うふふ、面白いわね。」

「ふうん？ま、いずれ戻ってくるかな？」

「朝は帰ってこないわよ。それより、さっさと朝食を食べ終えなさい。
ほら、いつまでもぼさっとしていると遅刻するわよ。」

そんな会話が続き、俺は朝食を食べ終えて・・・瑞樹がやってきたことを告げる声で外に出たのであった。なにやら、もめている声が聞こえてくる。

「あれ？双三も瑞樹と一緒に登校か？」

瑞樹の隣には学年主席がいたのであった。そして俺を睨みつけてくる。怖いな。

「うるさいわね！私だって願い下げよ。だけど、家を出たらこの男がニコニコしながら待ってたの！で、予習の話をしながら貴方の家に来たまでよ！」

そしてそっぽを向いて先に歩き始めたのであった。ふうむ、どうやら俺はお邪魔虫のようだ。なかなかいい雰囲気と見える。なら、エスケープするか・・・。

「瑞樹、ちょっと忘れ物したから・・・先に双三と一緒に行ってくれ。」

「そうかい？珍しいね・・・置き勉派の君が忘れ物なんて・・・」

「・・・ハンカチと、燃える情熱を机の中に忘れてきたんだよ。とりあえず、先に行ってくれ。後、途中で止まらなくて結構だ。気合も忘れたからな。」

そういつて俺は瑞樹を双三の元に走らせたのであった。うん、朝から我ながらいいことをしたものだ。きっと神様は俺を高く評価し

てくれるに違いない。

だが、現実には神様というものは気まぐれということを俺はこの後知ったのであった……。つまり、神様なんて信じられないものだ。

「零ちゃん、おはよう！」

「あ、ノワルか……。おはよう。いつにも増して元気だな。」

「そだよお！毎日零ちゃんに会えるんだもん。元気になれるよ。」

「はは、それは嬉しいな。」

そんな会話をしていると先生がやってきた。そして、そのときになって気がついたのだが俺たちの近くの机には誰も座っていない新しい机が二つあった。

「なあ、ノワル……。あの場所は誰が座ってたっけ？」

「ううん、まだ……。私もまだ覚えてないからなあ？」

ノワルと話していると先生が黒板にチョークで何かを書き始めた。

「ええ……。今日、この学校に二人の仲間が増えました。皆さん、お願いしますね。彼女たちは遠い場所からお父さんの転勤で引っ越してきました。」

ほお、転校生か？珍しいな、この時期に……。二人も転校生が来るなんて？。何々、明美、月子と耀、陽というのか？まあ、珍しいこともあるんだな。名前も取ってつけたような感じだな。

「では、二人とも・・・入ってきてください。」

「はい。」

「・・・はい。」

俺の目の前に、お約束なのか知らないが・・・黒髪になって顔見知りである二人が姿を現した。どちらも、何かの冗談だといったいぐらい似合っているこの学校の制服を着ている。なあ・・・誰かなんでこんなことになったのか教えて。

「・・・零ちゃん、あの子達・・・ここに転校してきたの？」

「・・・いや、正直・・・知らなかったな。」

困惑気味に俺に尋ねてくるノワルであったが、一番困惑していたのは俺だ。頭の中のパソコンが煙をふきあげ始めている。意外と悪い夢という奴かもしれない。

「自己紹介などは時間が無いので省くから、友達になりたい人たちは積極的に彼女たちに話しかけなさい。では、これで朝のHRを終わります。」

先生はそのまま去っていった。そして、徐々にあの二人の元に人だかりが出来始める。ううむ、この前このクラスが出来たとは思えないぐらいの人だかりだ。

「・・・ノワル、話したいことがあるんだが、ちょっといいか？」

「? いいよ。でも、零ちゃんはその二人のところに行かなくていいの?」

「ああ、それより重要な話があるんだ。」

「何々? 金塊の在り処とか知ってるかって? 残念ながら私は知らないなあ。」

「いや、実は・・・ノワルにセレネたちのチームに入ってもらいたいんだ。ちょうど、セレネたちのチームが一人沸くがあまってるんだよ。・・・駄目か?」

俺がノワルに尋ねると彼女は唸った。肩眉を微妙に上げている。

「ううん、どうしようかなあ? あの子が私に対してシチューをかけたのもまだどうにもしてくれてないからな。それにあの子、危険だし・・・。」

「なあ、『古代魔法振興会』と魔法使いつて争っている状態なのかな?」

「・・・いや、争っては無いよ。小康状態ってところかな? 裏では不意打ちをしたり、されたり・・・ま、喧嘩するほど仲がいいってね♪」

「じゃ、そういうところに問題はないんだな? 別に今すぐ答えなくて言っているわけじゃないから、返事が出来るときに答えをくれないか?」

「うん、いいよ。考えとくね♪」

思ったよりうまくいってよかったな。まあ、やはりそこはセレネよりも人が出来ているんだろうな。よかった、ノワルがセレネみたいな頑固者じゃなくて……。

「なあ、零時……あの子達はお前んちにいるセレネちゃんとソーラちゃんじゃないか？これは僕が疲れているからかな？」

「いや、気のせいだろ？はは、瑞樹は疲れているんだ。うん、まちがいない。」

奴が更に何かを言う前に俺は瑞樹の口を塞ぎ、黙らせた。はは、クラスの連中に聞かれてあらぬ誤解を受けて集団リンチを受けたくないぞ。

「へえ、セレネたちって零ちゃんの家に住んでいるの？それ、本当？」

ほら見ろ、ノワルにばれちゃったじゃないか。いいか、こういうのは後で誤解を解くのが大変なんだぞ？面白おかしく笑っていられる連中はいいが、俺の家に遊びに来て俺の大切なコレクションを破壊されたらたまらんのだよ、君。

「はは、ノワルも何を言ってるんだ？ここでそんな話をするわけにもいかないだろ？だからさ……詳しくは……昼休みに屋上で話そう、な？」

クラスの連中（男子のみ）がこちらを見ている。どうやら、この二人はクラスの連中（男子）の心を驚&am p; #25681;みしてしまっただけ。なんとも、面倒なことを引き起こしてくれる

二人組みだ。極力、学校ではあの二人と話さないでおこう。闇討ちを食らう可能性がある。まあ、見てくれはいいいからな。ソーラは中身もいいが。

そして、ノワルとともに逃げるようにして屋上にやってきた。

屋上にはなかなか人が来ない。とても日当たりが良く、風も気持ちいいと思うのだが、なにやら事情があると誰かに教えられた気がする。まあ、後ろめたい連中がたまっていたりすることもあるんだが、その連中が血相を変えてこの屋上から降りてくる姿を見たことがあるんだが・・・何があったんだろうな？先生でもいたのか？

「さて、言い訳は聞かせてもらおうよ、零ちゃん？」

「い、言い訳って・・・言い訳する話も持ってないぞ？」

「・・・じゃ、セレネとあの子は零ちゃん家に住んでいるの？住んでないの？これだけははっきりさせてよ。」

睨みをきかせ、俺に飛び掛らんばかりの同級生。もうやだ、こんな連中が俺の近くにすぎだ。友達は考えて作らないといけないな。機械の人はいませんか？

「いや、二人とも下宿しているだけだ。」

「・・・本当にそれだけ？」

「・・・あ、ああ・・・」

「・・・まさかと思うけど、部屋は違うよね？」

「え？部屋は・・・一緒だが？」

俺のその答えにセレネを泣かせる実力を持つノワルは固まった。そして、その場の空気も固まったように思える。だが、固まること数十秒、保健室に連れて行ったほうがいいかと思った俺であったが、その甲斐無く、背後に黒い炎を纏って復活した。ノワル、その眼差しは怖い……。

「零ちゃん!! ということしちや駄目なんだよ!」

「え、そうなのか?」

「まさかとは思うけど、寝る場所も一緒とか?」

ほぼ、何かに縋る様に俺に悲しそうな視線を向けてくる若手NO1の実力を持っている魔法使い。そこには俺がはじめてあったときの自信満々で元気満々の夏の太陽を浴びまくった向日葵の姿は全く無かった。しおれていて暗い。

「ああ、寝てるが?」

「……零ちゃんのほかあ!!」

ばきっ!!

俺の頬が鈍い音を立てて叩かれた。その右腕にはなにやら……エフェクト効果か知らないが、黒く燃える炎が移っていた気がする。普通、頬つぺた叩いたぐらいでこんな音するだろうか? 普通は『ぺち』とかだろ? え、違う?

だが、これくらいですむのなら……それでよかったのだろう。俺に後姿を見せて逃げ出し始めたノワルだったが……屋上から校

内に続いているはずの扉が開かず、勢いあまった彼女は扉にぶつかって後ろに倒れた。そして、その直後・・・空は先程まで澄み切っていたのに急に雨が降り出したのであった。俺は慌ててノワルを起こしたまではよかったのだが・・・有り得ない者を見てしまった。

男..ぎゃあああああああ!! (後書き)

いやまあ、近頃平和なものですな。まあ、そんなことを言っている場合なのではないのですが・・・。さて、零時が見たものとは？ここから本命となっていきます。

幽霊…ふ、他愛の無い青二才だな……。 (前書き)

たまには感想をいただけると嬉しいです。いや、幸せです。

幽霊…ふ、他愛の無い青二才だな…。

十五、

さて、良い子の皆はお化けって知ってるかなあ？簡単に説明するけど、幽霊は人間で・・・お化けは妖怪の事を指すんだよ。じゃ、人影のようなものはどっちに入ると思う？俺としてはどっちでもいいんだけどね。似たようなもんだし。

「れ、零ちゃん・・・あれって・・・何？ま、まさか・・・」

「さ、さあな？お前のお友達じゃないのか？俺には黒いフードを被っているように見えるぞ？魔法使いか？」

そう、俺たちの前に姿を現したのは黒い・・・フードを被っているように見える幽霊だかお化けだか知らないが・・・そのどっちかだ。雨が散々降っているのではっきりと姿を確認することは出来ない。だが、その腕に持つものだけは確認できる。光り輝いてその部分だけは明るい。

「おいおい、近頃のお化けは人を呪い殺すだけじゃ飽き足らず、惨殺趣味でも出来たのか？」

「し、知らないよ!!」

そのお化けが手に持っていたものは長く、鋭い・・・幅広の細剣だった。そして、その顔がついにこちらを向き始めた。どきどきするね、この感触……。

「・・・なあ、魔法ってあの化け物に通用すると思うか？」

「ふえ？れ、零ちゃんまさか・・・やめときなよ！この学校に伝わってる噂、知らないの？七不思議のひとつなんだよ！！」

そんなもの、俺が知るわけ無いだろう・・・部活動にも何も入っていないから、先輩とかと話していかないのだ。これまでひとりで学校生活をほとんど送ってこれたし、先輩友達は必要ないと思っていたからだ。べ、別に友達が出来ないってわけじゃないぞ！！俺の趣味に理解を示す奴が一人もいなかったただけだ。

「その噂、後で聞かせてくれ。今聞いても笑い飛ばせる自信が無い！じゃあな！」

「ちょ、零ちゃん！！おばか？」

先日、ソーラから教えてもらった方法で剣を作成！俺の今の気分はブルーなので水で構成されている。まあ、これだけ雨がふっていれば俺のイメージだけでなく、簡単に作ることが出来るわけなのだが・・・。基本的に固めるだけ。

「アアアアアアアア！！」

「ま、マジでこえええええ！！」

虚無感漂うその目つきに心底ビビリながら俺は一步一步を踏み出して一刀両断にしてみた。その化け物を・・・あっさりと・・・。

「アアアアアアア！！」

「うわあああ！！まじこえええええ！！」

剣の重さはほとんど無い。重さはきつと、ひよこ三匹分ってところか？まあ、それだったら軽くていいがな。

「零ちゃん！後ろ！！」

「アアアアアア！！」

落とされた剣を無様に避けて俺は近くにしりもちをついてそのまま相手に剣を突き立てる。くそ、こいつには何が有効なんだ？お経か？不意打ちはだめだな。

「そして、いつから・・・ホラーになったんだ？」

「零ちゃん、今助けるよ！！」

そういつてノワルは鏢迫り合いを行っている俺と化け物（一方的に俺が押されている。）に圧縮されて威力を増している高密度の雷をぶつけた。

「ぎゃあああああ！！」

「ご、御免！！」

その一撃は見事俺に直撃。盾を作るのが遅かったため・・・からだが感電したような感じを受ける。だが、これで・・・相手も多少のダメージは追ったはずだ。

気がついたら空は明るくなっており、雨なんてどこにも振っていなかった。濡れているはずの俺たちの服もどこにも雨の後など残っておらず。これは・・・学校の七不思議って奴なのだろうな。学

校で死ななくてよかった。

「ふう、零ちゃん・・・大丈夫？」

「あ、ああ・・・ところで、さっきの奴は何なんだ？あいつ、かなり強いぞ？そもそも、化け物なら・・・俺たちをさっさと呪い殺しているだろうからな。どうやら、仮面をつけてボイスチェンジャーまでしているようだったから、ただの化け物じゃないと思うぞ？だけど・・・斬っても手ごたえ無いからなあ。」

不思議な化け物だった。それに剣は・・・心なしか、黄金に輝きを放っていたような感じがする。単なる怨霊じゃなさそうだ。

「実はね、この高校に言い伝えられていることなんだけど・・・満月の日・・・あ、これは満月が出ている間じゃなくて、お昼でもいいけど・・・屋上で暗い雰囲気を出しているときっきの化け物が姿を現すんだって。」

「へえ、それで？その後はそのお化けに憑かれたりするのか？」

その答えにノワルは首をぶんぶん振った。どうやら違うようだ。

「その場で逃げることなく・・・生き残ったら何もしてこないそうだよ。何でも、ここの生徒だった人がそうだったんだって。その人自体も幽霊に憑かれていたって先輩が言ってたよ。あ、結構前の話らしいよ。」

「ふうん？その人も呪われてそうだったのかな？まあ、いいや。そろそろ・・・教室に戻ったほうがいいじゃないのか？時間だろ？」

そこまでたっていないと思われていた時間は既にお昼休みを終わらせるチャイムがなる数分前だった。高校生は常に時間をチェックせねばならないのさ。

「あ、そうだね。で・・・さっきの怪談の名前なんだけど、教えて欲しい？」

「ああ、念のために聞いておこう。」

「えっとね、確か『満月の時雨』だったかな？この学校にも他にいくつか怪談があるんだってさ。今度、一緒に肝試ししよう？」

俺は別に構わないが：と言おうとしたら再びノワルが口を開いた。目を見せないようにして俺を見ている。

「・・・ねえ、零ちゃん・・・私、セレネのチームに入るのに条件があるんだ。」

「ん？何だ？」

そう尋ねたが、ノワルは黙ったままだ。そして、昼休みを終わらせるチャイムがその場に鳴り響く。そして、暗くなる雰囲気を感じたのか・・・空が曇ってきている。まさかとは思うが・・・さっきの化け物がもう一度姿を現そうとしているのだろうか？

「・・・零ちゃん家に私も住んでいい？勿論、下宿代はきちんと払うからさ？駄目かな？」

「・・・ああ、俺が別に構わないが？一応、母さんに聞いておくぞ。良かったら連絡するから、連絡先を教えてくださいませんか？」

「うん、いいよ……私の番号はね……」

気のせいかな、俺の後ろに誰かいるような気がする。そして……その人物は俺たちを穴が開くような感じで見ている気がする……。ここで振り返ってしまえば何かが再び起きそうだな。俺は耐えられなくなつてノワルを押し倒すような感じで扉を閉めて校内の階段の踊り場にノワルと二人でその場に伏せたのであった。

「ど、どうしちゃったの、零ちゃん!」

「いる、奴が……。出てきたんだよ。とりあえず、教室に戻ろう。」

こうして俺は自分の学校の怪談を一つ知り、いつもより恐怖感を多く手に入れてその場を顔を真っ赤にしたノワルとともに後にしたのだった。勿論、授業を遅れて出席したのでノワルとそろって放課後、罰を受けることになったのだが……。そこで、ノワルとともに罰である補修を受けているとノワルが話しかけてきた。

「で、あの黒い影……。なんだと思う?」

「ううん、正直、わかんないなあ?俺たちに敵意を向けているような感じを受けなかったし、只者じゃないってのは分かったけど……。今日の夜、確かめに行ってみるか?」

「そうだね!! 勿論、二人で行くんだよね?」

そのノワルの提案に俺はちょっと考えたのだが……。考えていた途中で先生に再び怒られてしまい、家に帰れるようになったのは既に満月がお空にぽっかり浮かんでいる状態であつたのだった。

補習室から二人して出てくると・・・校内には一人も残っていません。かろうじて、校庭から人の姿がちらほらと確認できる。

「零ちゃん、他の怪談も教えてあげようか？この学校には七つあってね、さっきの一つだね。」

俺は思うのだが、どこの学校にも確かに、七不思議はあるだろうな。だが、高校にもあるものだろうか？トイレの○○さんとか二宮金次郎の像が動くとか・・・そういうのはどうかと思うぞ？それに深夜の学校に行ったら誰もいないはずの音楽室からピアノを弾く音が聞こえるとか・・・全部数えたら七つ超えているのではないかと思うぞ？

「なあ、七つ目って何だ？」

「え？七つ目は知らないよ。七つ目知ったら幽霊に連れて行かれるって放し知らないの？」

俺は前々から思っていたのだが、それ自体が七つ目なのではないだろうか？そして、何故・・・俺はこのような話をしながら怪談スポットに行かなくてはいけないのだろうか、目の前（既に屋上の扉）を気にしながら思うのだった。

「じゃ、開けるぞ？覚悟はいいな？」

「う、うん！！」

ガチャリ！！

ドアノブをひねってみたが、開かない。内に引くタイプの扉なの

だが、一向に開かない。外から嗅ぎでもかかっているのかと思ったが、それは無いだろうな。第一、この扉に鍵はかけられないはずだ。

「……ねえ、屋上から何か聞こえない？」

「あ、ああ……何か聞こえてくるな。」

『……ドーナツ！ドーナツ！ドーナツツツ！！』

「……ノワル、帰ろうか？」

「そ、そうだね……それが一番だと私も思うよ。ええとね、零ちゃん……今日ここに行ったことは二人だけの秘密だよ？じゃ、帰ろう、手をつないでさ？」

幽霊…ふ、他愛の無い青二才だな・・・。（後書き）

あゝ二章は比較的短いのでそろそろ終わりが近付いてきました。早いですね・・・。まあ、それは置いといて、お化けっぽいものが出てきてしまったのはまあ、ご愛嬌。読み直してみるとめちゃくちゃホラーな話になっていました。慌てて書き直しましたが・・・。とりあえず怖いところは特に無いですね。これからもよろしくお願いします。

男…だ、断崖絶壁のチチナシおぼけだぁ

十六、

満月の夜に家に何事も無く家に帰り着いた俺は風呂に入るよりも先に二人にノワルと話しをしてきたと告げた。勿論、彼女との約束を破ったりはしていない。俺はこう見えても意志は硬いほうだ。まあ、そのぶん口が軽いがな。

「へえ、あの子をよく説得できたわね？何か魔法でも使ったの？」

「……さすが、零時君。意外と説得にも長けているんですね。」

二人とも俺を尊敬しているようだ。まあ、こんなものは粘ったほうが勝つものさ。本当のところは全然違うんだけどな……。

「じゃ、俺はちょっと母さんに話しておかなきゃいけないことがあるから、ちよつと行ってくる。二人とも、先に風呂に入っていていいぞ？」

俺がごく普通に（そのときセレネは俺の本棚からとあるロボットの内部設定資料を読みあさっており、ソーラはなにやら……紙に自分で考えたらしいロボットを設計していた。）扉を開けようとする。と学校の屋上での出来事を思い出してぶるっとした。追い討ちを掛けるようにいきなりセレネが話しかけてきた。

「……ねえ、帰りが遅かったけど……何してたの？魔法の勉強、さぼって誰かとデートしてたってわけじゃないよね？夕食だっ
て待ってたのに……。」

「デート？俺の愛しのドラ○ちゃんとか？あいにくだが、俺は未来に行く術を知らないぞ？それにだ、他に誰とデートするんだ？」

「そうじゃなくて、あの子とよ？」

「あの子？どの子だ？」

「ノワルよ、ノワル・ダーク！！あの子と何か無かった？」

はて、何かあったかな？俺は考えてみたのだが・・・特に何も思い浮かばなかった。さすが、ノワルというのだろうか？帰り道も俺を誘拐することなく、無事に過ごせたのだが？もしかして、屋上に行ったことがばれたのか？

「いや、特に俺が危惧するような状況にはならなかったな。それがどうかしたか？」

俺の問いかけにセレネは何事も無かったように資料を再び読み始めた。

「ふうん、別に何も無かったのならいいけど？ちょっと、胸騒ぎがしたの。お昼に急に学校近辺だけに雨が降ってきたし、零時に良く似た生徒が屋上に向かったってソーラが言ってたし・・・先生だっって言ってたわよ。」

「そ、そうか？まあ、俺は特に何も無かったぞ。じゃ、俺はもう行くわ。」

ちらりとこちらを見たあの二人の視線が痛い。その視線は俺の全てを見透かしたような目をしており、隠し事も出来ないような雰囲気

気がその場に流れた。

俺は慌てて心の安定をとることにした。久しぶりにねじを眺めてみる。

「・・・はあ、怖かったなあ、あの二人・・・何か俺が悪いことしたのか？」

俺は一階に降り、母親にセレネとソーラのほかにもう一人下宿したい人がいるのだが、良いだろうかと尋ねてみた。さすがに既に二人がいるので半ば無理ではないかと思ったのだが、母親は寛大なお人であった。顔がにやけている。

「ええ、いいわよ。ただし、条件があるけどよろしくて？ 零時？」

「何？」

「あんたが調子に乗らないことよ。女の子が三人もいるのですからね。」

「俺がそんなことで調子に乗るわけ無いだろ？ 何を考えているんだ、母さん？」

こうして、俺は教えられた番号を自宅の電話でプッシュ。複数回の呼び出し音の後にノワルが出てきた。俺は内心他の人が出てくるって思ったんだけどな。

『あ・・・零ちゃん？ 本当に電話してくれたんだ？』

「ああ、母さんがいいって言ったぞ。明日には来ていいってさ。」

その後はくだらない話をしたのだが・・・途中でセレネとソーラが俺の右と左にじとっとした目でこっちを見ていた。うう、いつもより怖い。

「・・・じ、じゃ、またな。」

そして俺は未だに恨めしそうに見てくる二人のほうを向いた。勿論、ビビッていることを態度であらわしては駄目なので、震える足は思い切り角に小指をぶつけて我慢する。怖さよりも痛みで我慢するのだ、零時！！

「ぐう、俺に何か用か？」

「別に、ただ・・・とても楽しそうに話をしてるなって思っただけよ。」

「・・・零時君、どうして・・・今日は私たちに話しかけてくれなかったの？それに、帰ってきててもその話に触れてもくれない。折角転校してきたのに・・・もしかしないでも頭の中にはあの子の事でいっぱい？」

「そりゃまあ、現に電話してたんだから・・・」

ばきゅっ！！ぐしゅっ！！！！

「「零時のばかっ！！」」

再びほっぺを叩かれ・・・（おいおい、ほっぺをたたいてもそんな痛そうな音はしないぞ？魔法使いはどうなってんだ？）俺はその場に唾然となったのであった。そして、何も出来ない俺に母さん

の呆れたような声が聞こえた。二人は既に夜の街に出て行っている。そして俺の顔には紅葉マークが……。

「……ほらね、調子に乗ってるところなのよ。零時、あの二人が大事なら……今すぐ追いかけてあげなさい。それが一番の特効薬よ。急がないと、あの二人……風をひくわ。外は大雨なのよ。何でかは知らないけどね。」

開け放たれた扉の外は確かに雨が降っていた。さっきまでは満月が俺たちを見ていてくれたはずなのだが……これもあの屋上の謎の儀式のせいかな？

「……わかった。俺……なんであんな音がするびんたがでさるのか気になるから追いかけてくる！それ以外にはないからな！」

そう言った俺の背中に母さんの呆れた声が最後に聞こえてきた。

「……素直じゃないのね。そういうところは父親に似ちゃったか……。」

その夜、俺は考えなしに歩き回り……気付けば俺は学校に舞い戻ってきていた。町はほとんど探したし、レストランにも彼女は来ていないと店長さんに言われた。なら、学校にいるかもしれないと思ったので学校にやってきたのだった。雨はまだまだ……やみそうに無い。しかも、屋上に誰かいるような気が……

「……今日、ノワルに怪談を聞いたのが間違いだったな。」

そんなことを考えながら校舎内へと足を踏み入れる。校舎が開いていなければそのまま帰ろうと思ったのだが……何故か、開い

ていたので入ることにした。

「・・・何もいないよな？ いやいや、セレネとソーラがいてくれたらしいのだが。」

誰かに見られているような視線（こういうものはどちらかというと被害妄想って奴だろうな。）を背中にびんびんと感じながら一階確認していく。

「・・・あとはこの屋上だけか。うう、一人はさすがに・・・。」

再び戻ってきた俺は屋上の扉を開けようとして・・・後ろに気配を感じた。

「わっ!!」

誰かに後ろから肩を叩かれた。喉はからから・・・体は全く動かない。冷や汗は流れまくりだ。こ、ここまでののだろうか、俺の人生は？

「・・・零時、こんな時間に学校で何をしてるの？」

「・・・零時君、この時間帯は生徒が学校に忍び込んではいけない時間帯ですよ。何か忘れ物でもしたんですか、屋上に？」

勇気を持って振り返ってみたらセレネとソーラであつた。はあ？ どうなってんだ、これは？ 実は俺が探していなかった場所にも隠れていたのだろうか？

「セレネ、ソーラ・・・今までどこにいたんだ？もしくは消えていたのか？」

「いや・・・ちょっと外に出ただけだよ？ええっとね・・・家を出した後・・・」

「・・・裏庭に回っていただけです。そこには私たちが零時君に黙って作成した『恨みを聞く寡黙の箱』がありますので・・・そこで零時君の不満な点を述べていたら血相変えた零時君が走っていくのが見えたんです。何事かと思って慌てて私たちも追いかけていったんですが・・・この前と違って零時君の足が速かったので追いつくのに時間がかかったんです。意外ですね。」

セレネの説明に全く理解できなかった俺の代わりにソーラが詳しく説明してくれた。ああ、なるほど・・・俺の努力は無駄だったわけだな？

「二人とも雨に降られなかったのか？大雨が降っていたんだが？」

「「雨？」」

二人ともきょとんとしている。怪談の踊り場から見える窓の外には綺麗な満月が姿を見せている。あれれ？どうなっているのだろうか？俺の幻覚？

「零時、顔色悪いけどどうかしたの？」

「・・・大丈夫ですか、零時君？」

て、てっきり屋上にいるのがこの二人だと思っていたのだが、そ

れはどうやら違うようだ。うん、これってあれだよね？もしもこの二人がここで俺を止めなかったら俺はこの屋上の扉を開けていたに違いない。そして、どうなってたんだ？

「・・・ちょ、ちよっと走りまくって疲れちまってな。帰ろう、二人とも。」

「零時、大丈夫なの？顔色かなり悪いよ。土色だし・・・。」

「・・・無理はしないでくださいね？健康が一番ですよ？」

「あ、ああ・・・それは分かっているんだが・・・。」

俺は屋上の扉から180度回転して後ろ髪をなんとなく引かれているような感じを受けながら情けないことに俺を中心に二人の手を握らせてもらった。

「零時？」

「・・・零時君？」

不思議そうな顔をしているセレネとソーラに苦し紛れに微笑を返事とし、二人に引きずられるような感じで家に帰りついたのであった。

俺は断じてひとりで寝るのが怖いわけではないのだが、夢にお化けやら何やらが出てくるのだけは遠慮してもらいたい。ほら、安眠を妨害されるのは誰だっていやだろう？

「零時、何かあったの？急に三人で寝ようなんて言い出して・・・？」

「・・・いや、ちょっとな・・・。」

勿論、他の二人にはこのことは話していない。だって、信じてくれないだろう？

幽霊：誰がじゃ、こらあ？ ああ？ ぶらさがっとるもの消すぞ？

十七、

さて、長い長い回想も終わり、セレネのチームの補欠要因となった俺は日々、皿洗いを行っている。鞆になったらどうしよう？

近頃は代わったことも無く、俺の家にやってきたノ瓦尔も今ではすっかり家の一員となっており、セレネとたまに対立するぐらいで平和である。まあ、家の中で魔法を使っているわけではないので別にいいのだが・・・。

そして、学校生活でもさりげない教室の生徒Aとして俺はこの二人に友達と話すようなことも話しているのだが・・・未だにこの二人の人気は衰えておらず、俺が話をする機会はほとんどない。専ら、あちらのほうから俺に話しかけてくる。

そして、俺がそんな平和な日々を送っていると、瑞樹がある学校の話をしてくれた。久しぶりに二人だけでの昼飯のときである。

「零時、『満月の時雨』って怪談知ってる？ この前小耳に挟んでさあゝ。」

それがほぼ、トラウマとなっている俺は渋い顔をしながら瑞樹を見た。

近頃奴は頻繁に図書館に出入りをしているらしくそれ以外にもこの学校の長である校長ともタメ語で話しているところが目撃されている。噂ではこの学校を侵略し・・・学校名を『草木萌高等学校』などにするといわれている。まあ、ほんとかどうかは知らないがな。俺が気にしていることはそんなことではなく、その話だ。

「・・・ああ、あらすじぐらいなら知ってるぞ？ それがどうかしたか？」

「じゃあさ、実はその話しに続きがあるの知ってる？」

さてと、ここでこの高校に言い伝えられている怪談『満月の時雨』のおさらいといってみようか？ノ瓦尔曰く『実はね、この高校に言い伝えられていることなんだけど・・・満月の日・・・あ、これは満月が出ている間じゃなくて、お昼でもいいんだけど・・・屋上で暗い感じを出しているときさっきの化け物が姿を現すんだって。』ということだった。

「で、続きはどうなってんだ？化け物にストーカーされるのか？」

「ううん、違うよ。その相手を見たものはね、夜中に学校に行くと雨が降り出した挙句に校舎内の窓から見える月は必ず満月になるんだって。雨が月に恋をしたって校長先生が言ってたよ。はは、面白い話だよねえ。」

「ふうん？なんだかファンタジーなお話だな。で、それが続きてわけじゃないだろ？全然話がつながっていないと思うぞ？」

瑞樹が言ったのはただ単に補足のような話だ。

「・・・本当に満月の日にその場所に行くとな、恋人か何かを失ったこの高校の元生徒が姿を現すって言うんだ。勿論、実体は持っていないらしいんだけど・・・誰かに頼りたいってところじゃないかな？だからさ、その男子生徒に頼られた場合は満月の夜の日に必ず彼と戦うことになるんだって。」

「なんで戦うんだ？一般市民がろくに化け物とたたけるとは思えないが？」

「さあ？校長先生は教えてくれなかったからわからなかったよ。うん、でもそこまでそのお化けか幽霊が悪いつて話は聞いていないんだって。」

さて、何故このような平和な世界でそのようなことをしなくてはいけないのだろうかと思いつながら俺はこの話をどうやら他の三人に詳しく話しておいたほうがいいのではないかと思いつ始めていたのである。

だってさ、この前の満月の日に屋上まで行ったのは良かったけど・・・俺はあいつと戦っていないぞ？それに、俺が冗談で言ったとおり、ストーカーになられたら色々困るのではないかと思うのだ。別に俺に同行できるものではないと思うのだが、それでも俺は魔法使いらしい。つまり、俺もその幽霊と同じように非常識な存在なのだ。早速俺は昼休みにソーラ（他の二人は弁当の批評を行っている。）と一緒に弁当を食べながら俺の身に起こったことを詳しく話した。

「・・・なるほど、だからあの時帰ってくるのが遅かったり・・・震えていたりしていたんですね。そんなに怖かったんですか？」

「ああ、今でもあれはトラウマだ。今度の満月まで結構時間があるから・・・魔法の力で何とかできないかな？後さ、この前ソーラに教えてもらった肉弾戦が役にたったんだ。ぜひとも、もっと教えてもらいたい。お願いできるか？」

俺の頼みにソーラはふうむと唸った後に頷いた。

「・・・いいですけど、零時君に条件がありますね。」

「条件？一体全体それは・・・？」

「……ええ、満月は簡単に出すことができますよ。だけどそれはセレネに頼んでください。そして、肉弾戦を教えるのも構いません。私は零時君の師匠ですからね。ですが、その相手に対して油断は絶対にしないでください。そして、最後……これが一番大変です……」

さて、一番大変な条件とはなんだろうか？ノーダメージで勝てか？それとも、三分以内に相手を倒せとか？とりあえず俺が戦うのにある程度つらい条件がつくことは間違いないようだ。ははは、平和な世の中じゃねえな。

「……零時君の剣では誰一人として傷つけないでください。」

「はあ？それはどういうことでしょうか？」

「……その言葉、そのままの意味ですよ、決して相手に怪我を負わせてはいけません。そして、ついでに言っておきますが零時君も絶対に怪我をしないでください。あなたが傷つくと私たちが……・悲しくなりますからね。」

微笑んだソーラに力強く頷こうとしてやめた。自惚れるのはよくない。

「……だけどさ、あの化け物はめっちゃ強かったぞ？絶対怪我する。」

「……ええ、彼と同等に戦うことは不可能ですよ。そんなのはわかります。」

じゃ、駄目じゃん？そう思った俺の考えを見透かしたのだろう、ソーラはこう言ってくれた。その顔は誰が見ても安心できるような静かな微笑顔だった。

「……大丈夫ですよ、私は無理ですが、私のかわりにセレネが零時君をあなたが理想としている戦い方ができるようになんてしてもサポートします。」

微妙に不安を覚えながらも……その後、その他の二人に事情を説明し、俺はその夜……早速挑戦しに行こうとしたのだが、セレネが止めた。

「待った、たった一日近接戦闘を習っただけでそんな相手に勝てるわけ無いじゃない。私だってサポートできるか不安なんだから……」

「だけどよお、こういうものはさっさと終わらせたほうがいいんじゃないのか？ほら、そしたら他人に迷惑掛けなくていいだろ？」

現に彼女たちと俺はバイトをサボっている。まあ、店長さんにはソーラが話してくれたらしい。（正直に話したらがんばってこいといわれたそうだ。）これ以上誰かに迷惑を掛けるのもどうかと思うね。俺だって迷惑を受けている。

「じゃ、あと一時間だけ練習して……」

「だから、それが意味ないって言うの。まあ、確かに迷惑はかかっているから……しょうがないわ、私が気合を入れてついてあげてあげる。」

セレネは三日月であつたはずの月に向かつて人差し指を向けた。すると、月は徐々に満月となつていった。これはまた、凄いマジックなこと。お月見だな。

そして、そのまま四人で校門前へと向かつていった。特に途中で変わったことはなく、これがまた・・・不気味なことでもあつた。(途中、知り合いに会つて茶化された。) 黒猫も見なかったな。

「・・・・零時君、ここから先はセレネと行くといいですよ。」

「・・・・俺としては出来るだけ人数がいたほうが安心できていいんだが?」

「零ちゃん、私たちがまわりにいたら大剣を振り回せないよ? 零ちゃんが剣を短くしても相手が持つてた剣は長かつたんだしさ? 内輪もめは見苦しいよ。」

「あ、なるほど・・・・。確かにそうだな。」

とても悲しいがここで二人とはお別れなのだろうか? いやいや、人生たまにはいいこともあるさ! そして、逆もまた然りなのだ! (どちらかという俺は逆のほうが多いと思う。) 悪いことがおきませんようにとお祈りしておこう。

「ま、セレネと一緒に行かせるのはとても不安で不満なんだけど・・・私も一度零ちゃんと一緒に行ったんだから今回は見逃してあげよう。」

「・・・・零時君、今度は私の番ですから。セレネ・・・がんばつてきてね。」

「う、うん！私に任せておいて！！絶対に零時には世話をかけさせないから！」

「さてさて、師匠方のお話も終わったから・・・それじゃ、ま、行きますかね？」

校門のところ（校舎内にはたまに見回りがいるのだ。）で別れ、俺とセレネは二人で校舎の中に侵入（この高校の決まりでは深夜に学校に入ったものは一回目は厳重注意で二回目は校長先生を裁判官として裁判に掛けられるらしい。）したのだった。誰もいませんようにと祈るばかりだ。

校舎内はとても怖く、俺はセレネの裾の辺りを力強く握っていた。そんな俺にセレネはあきれたような視線を向ける。む、なんだその顔は？

「・・・零時、もしかして怖いのか？」

「ち、違うぞ。俺が怖いものは一番がセレネで時点が母さんとソーラとノワル、後は・・・追試と補修、掃除当番に・・・あとはちょっと幽霊が苦手だ。」

真面目に答えたつもりだったが、セレネは更に呆れたような表情の中にも何か聞きたいような感じを受ける。顔が幽霊よりも怖い。

「・・・ねえ、何で私が零時の中で一番怖い対象なの？」

いつの間に俺の手を掴んでいたのか知らないが、俺の右腕が煙を上げており・・・セレネのつかんでいるほうの手からは炎が出ている。

こういうときは取り乱してはだめだ。相手を刺激するだけだから。うん、心の中にはソーラを浮かべて・・・残りの半分はお茶目で気楽なノワルを思い浮かべてみよう。彼女たちの口調を真似てこの場を丸く治めなければ・・・。

「失礼、ちよっと違った。訂正しよう、セレネの一部分が怖い。」

俺を掴んでいたほうの煙が消えた。セレネは今度は心配そうに俺の顔を覗き込んできた。ふむ、今のところは大丈夫だな。ここが正念場だ。

「ええっと、それって・・・どこかな？知らないうちに零時を馬鹿にしていた？」

「いや、はっきり言うが・・・お前の間近で見る寝顔が怖いのだ。」

俺の右手が真っ赤に燃える！！お水をかけてと必死に叫ぶ！！

「じよ、冗談だセレネエー！！お前の寝顔は意外と可愛いから・・・ぐああっ！！！」

「き、きえてしまええええ！！後、人の寝顔をじっくり干渉するなあ！！！」

どう考えても深夜の校舎の中でこのようなことをするととてもじゃないが、色々と心配になってくる。今頃見回りのおじさんがこっちに走ってきているに違いない。だって窓ガラスが一枚ばかり溶けてしまったからな。

「す、すまん、セレネ。今はふざけてないで屋上へ向かおう。」

「ふん、ふざけているのは零時の頭の中よ！全く、こういうときに限って……。」

そりゃごもつともだと思いつながらまた俺はセレネに隠れるようにして階段を上り始めたのであった。ああ、興奮醒めたらまた闇が怖くなつたわな。

「いやあ、セレネが先に歩いてくれるおかげで俺はセレネの背中を見るだけですむ。うん、意外とセレネはたくましいな？え、何で褒めてるのに睨むんだ？」

男..さよなら、僕の魂よ.....ぐふう。(前書き)

今回で第二章は終わりです。

男：さよなら、僕の魂よ・・・ぐふう。

十八、

なんだかんだで屋上へとやってこれた俺たち（何故か知らないが、今日はやたらと見回りの人が多かった。）は屋上への扉を開けてみる。暗いだけ・・・だ？

「・・・零時、校舎内で満月は確認できたよね？」

「ああ、綺麗な満月だったぞ？」

「通り雨かな？もしくは私の目がおかしくなったのかなあ？」

俺たちの目の前に広がっている状況は大雨警報を出したほうがいいのではないかと問いたいぐらいのスコールだ。だが、いまさら気がついたのだが・・・俺たちはぬれているが床はぬれてはいない。座って確認までしたのだ。

「・・・それに、不思議と視界は良好だし、誰かがいるみたいだな。」

「！あれが零時がいった奴？」

俺とセレネの目の前に姿を現したのはあのときの黒い影だ。そしてその手には細くて世界で一番輝いているような剣が握られている。相手は剣をこちらに向ける。やる気満々？僕たち、一般市民でえーす！！そんなの向けないで！

「零時、がんばって！！私は応援^{サポート}してるから！！」

「……セレネ、ちょっと試して欲しいことがあるんだが？いいか？」

相手は待っていてくれるようだったので俺はとあることをセレネに話した。それを聞いたセレネは頷き、もう一度だけ俺に激励の言葉を投げかけてくれた。

「零時、それなら出来るだけ時間をかせいでくれる？」

「わかった。頼んだぞ、セレネ？応援なんてしなくていいからな。」

俺は水の大剣をその手に握って相手の出方を伺っていた。正直、この均衡がセレネが俺が頼んだことを終わらせるまで続いてくれたら俺的には嬉しいなあ。ほら、相手が俺の実力を測っていたりするならちよつとは様子を見るだろ？

「………。」

そんな考えをしていた俺は相手がいきなりいきり立って剣を振り落としてきたのを見て慌てて防御。そして俺は思い出した。

「ああ、そういや俺って以前こいつと戦ってたんだな。うん、これは油断していた。」

「………。」

剣をはじき、相手に激流を飛ばす。それを相手は一閃のもとにあっさりと撃破。見ているこっちもすっきりするような感じだ。うん、自分がこうなったら大変だね。すっきりと二つばかりにおろされる

かもしれない……。

「……ちっ、それならこれだ!!」

相手に剣を飛ばし、更に避けたほうからも無数のナイフの形をした水を飛ばす。これを相手はそれって盾って見えるのって言うぐらい細い盾で攻撃を防いだとあるガンダ○みたいに細い剣で全部防ぎやがった。ナイフは全て霧消。

「まだまだ!! 俺のねたは切れないぜ？」

俺を打つ雨を収束させて相手に向かわせる。結果は先と同じく、あつという間に空気中に霧散。うん、俺の目の前にいる相手は化け物だね。強すぎるよ。

「……………」

「くそっ!!」

振り落とすスピードもほとんど分かりませう。あんなの剣で防いだら俺の剣があつという間に折られた拳句に校舎もついでに切ってしまいうような勢いでうす。ぶっちゃけ、逃げたいね。いやいや、既に足は震えてます。

罅迫り合いなんて馬鹿らしい。いや、俺としてはドラマのような見せ場を作ってみたいのだが、この相手は恐ろしいほど強い。そんなことしたら相手の見せ場。

「……………」

「しまった!!」

雨のせいで剣が滑ってしまった。結果、相手の鋭い剣が俺の肩を捕らえようとしたとき……突如として雨は降り止み、月光が俺たちを包み込んだ。

「ぐはっ!!」

奴の剣は俺の右肩辺りを直撃。見事貫通してしまった。めっちゃ痛いねん。

「零時、間に合った?」

既に相手は戦う気力が失われたのだろう。俺の肩から剣を引き抜き（もっと優しく抜いて欲しい。）夜空に現れた満月を眺めている。黒い影ではなかった。

「……はつきりいうが、遅い。肩に剣が刺さったぞ? 血が出てるし……。」

「か、かすり傷だよ!! 零時が避けないのが悪いの!! 私が遅かったわけじゃ……」

あんなスピードの突きをかわせる連中がどこにいるんだ? 俺の肩からは血が流れ出し……責任転化したセレネは俺に近付いてきて肩を触ろうとした。

「……まず、興味深そうに触ろうとするな。俺は痛くて涙も出ないんだぞ?」

「う、ごめん……大丈夫?」

「大丈夫だと思うならセレネは鈍感だな。魔法で治癒とか出来ないのか？」

「ええと、私はちよつと・・・そういうのは苦手かな・・・あはは」

この人、本当に何も出来ないんですねというのをこらえて俺は痛みを忘れるために満月に魅入っているお化けのほうに視線を動かす。その顔は幸せそうだ。

「・・・月さ・・・。」

何かお化けが喋った気がしたのだが、さて、なんと言ったのだろうか？俺にはよく聞こえなかった。そして、満月のほうからドレスを着たかなりの美少女が屋上に降り立った。二人の仲はとてもいいに違いないと俺とセレネはしみりと眺めていたのだが・・・なんと、やってきた女の子は先程の影（既に形は人間に戻っており、この高校の制服を着た男子となっていた）に延髄蹴りを喰らわした。

「・・・セレネ、お化けって延髄蹴りが出来るだな？ほら、あいつ苦しんでる。」

「そ、そうみたいだね。あとさ、あの男の子・・・あの人に頭上がないのかな？」

「さあな？俺が思うに意外といい奴かもしれないな。未だに苦しんでるからな。」

ここからは話をほとんど聞くことが出来ないのだが・・・なにやら話している。男子のほうはドレスの女の子に頭を下げて（土下

座)ばかりだ。そして、そのドレスの女の子がこちらに歩いてきた。いや、飛んできた。

「いやあ、うちのおばかが迷惑を掛けてすみません。謝りますね?」

見た目は外国人?なのだが、とても日本語がうまい幽霊だ。きっとこちらでの生活が長いに違いない。俺とセレネはどちらともなしに首を振った。

「いえ、たまたまこうなっただけです。あの、失礼ですが・・・あいつ・・・じゃなかった、あの人は一体全体何なんですか?」

俺の質問にその女の子は軽々と答えた。微妙に笑っている。

「私のナイトですよ。普段は頼りがいのあるお節介なのですがね。彼の生前、色々ありましてね・・・魂が縛られていたんでしょ?」

途中でちょっとばかり悲しそうな顔をしたのだが、直に明るい顔に戻った。そして、今度はセレネのほうを見てこういった。その目は何かを見ている。

「私と同じ心の持ち主ですね。」

「え?」

満月のお姫様のような人はそういった後にこちらに頭を下げて影の男子生徒とともに姿を消した。そして、俺たちに残ったものは俺の怪我だけであった。

「・・・静かな月のような人だったな？セレネもあんな人と同じ心の持ち主って事はないだろうな。うん、『五月蠅い月』って異名でも自称でつけたらどうだ？」

「どういう意味よ？それより、ほら、怪我した肩を見せてよ。」

そういつてセレネは強引に俺の負傷した部分を消毒したあとに絆創膏、包帯をしていた。意外と手さばきがいいのは自分がドジした時のための練習か？

「さ、これで充分でしょ？さて、ここにいる理由もなくなったわね。」

「ああ、そうだな。じゃ、ソーラたちのところに帰るか？」

空に浮かんでいる満月ではない月を見ながら俺たちは屋上を後にしたのであった。二人は校門前でなにやらニヤニヤしていたのであった・・・。

そして、次の日のことである。時間帯は朝だ。

「ねえねえ、零時！！面白い話を用務員の人に面白い話を聞いたんだ！！」

怪我した部分をさすりながら俺は机を枕にして寝ていたら瑞樹が俺の元にやってきた。朝っぱらから五月蠅い野郎だな。朝というものは静かに、そして優雅に過ごすものだ俺は信じているのである。静寂なる朝をこのような感じにぶち壊されてしまったのは朝のコーヒーがまずくなってしまうだろう？因みに俺はコーヒーなどは飲んでいない。飲んでるのはでがらしだ。

「何があった？また怪談か？」

「うん、これが面白いんだよお？僕に話してくれた人も昨日、その怪奇を知ったんだってさ。何でも、満月の夜に屋上に続く階段を寄り添うような格好で男女の幽霊がいちゃいちゃしながら歩いていくんだって。そしてさ、窓の外をふと見てみると女の子の幽霊が他にも二人いて用務員さんの視線に気がつくと思えたんだってさ！！」

その話を聞いて俺はピシリと固まった。

「へ、へえ、そのどこが怪談って言うんだ？ほら、何か崇りとかがあったりするだろ？実害あったのか？」

実害が無ければその話は直に忘れられるに違いない。俺はそう思っ
てその階段に出てくる化け物の今後を考えてみた。自分的にはさ
っさと忘れてもらいたいものだ。

「それがさ、その用務員さんは窓から見ていた女の子の幽霊に追いか
けられたらしいよ。」

「・・・・・・・・。」

「何でも、『見ているのなら、仲を引き裂いてください！！』とか
『おじさん、さっさと追いかけていきなよ！！』って言いながら追
いかけてきたんだって。」

それを聞いて俺は仲良く話しているソーラとノワルの元へと無言
で近付いていった。その後、学校に用事があったが無断で校内に入っ
たことをその用務員さんに全員で話に行ったのであった。

用務員さんはいいいひとで、俺たちにトイレ掃除で許してくれた。

男..さよなら、僕の魂よ.....ぐふう。(後書き)

今回で第二章が終わってしまいましたね。いやあ、意外とあっさりしていたような・・・まあ、途中で出てきたあの二人が幸せになったことを祈りましょう。さて、次回からはちよっとした波乱の話になります。そうですね、ある意味次の章は休憩みたいなものでしょうね。

第三章 発端は機械＞人間？（前書き）

新しい章に入りました。いやあ、これも皆さんのおかげですね。この章は微妙に長いです。あと、メッセージをくれた方、ありがとうございます。そのことにつきましてはあとがきのほうに詳しく書いておきます。では、第三章の始まりをどうぞ・・・。

第三章 発端は機械＞人間？

十九、

今日は休日だ。家には俺以外の人間が人っ子一人いない。母さんはデパートへ、他の三人組は職業であるウェイトレスを行っているに違いない。平和だ。

出て行くときの三人の言葉はこうだった。

「零時、きちんと魔法を使う復習をしておいてね？」

「……零時君、近頃は魔法使い同士の仲がとても芳しくないの
で奇襲などに気をつけておいてください。戸締りを怠らないでくだ
さいね？」

「零ちゃんなら大丈夫だと思うけど……『古代魔法振興会』にも
気をつけておいてね？近頃なにやらあわただしい様子だったから・
・。」

それぞれがそれぞれ、自分なりの忠告を残していった。何気に過
激だ。

「……寝るか？いやいや……久しぶりの静かな休日だ。寝る
のは惜しい。」

こういうときはどうしたものだろうか？じゃ、散歩にでも行くか？
こうして俺は散歩に行くことにした。だが、これまた……面
倒なことに巻き込まれてしまうのであった。無論、ここからまたも
や……面倒なことになろうとはこのとき俺は思ってもみなかっ
た。世の中平和だと思っていたのだ。

春の陽気に身を任せながらふらふらと夢遊病患者のごとく俺は公園などを歩き回っていた。辺りに人はあまりいない。いや、誰もいないな。

そのまま公園のベンチに倒れこむ。このベンチの寝心地は最高ののだ。

「……………ちょっと疲れたな。日差しも適度にいいし……………まさにお昼ね（困みに今の時間は午前十時だ。）にちょうどいいな。」

今のご時勢、外で寝ると碌な事が無いのは確かだ。だが……………俺はそのまま目を瞑ってしまい……………人生二度目の誘拐にあうのであった。（いや、魔法使いになったときを含めると三回目か？）それでも、相手は見知らぬ人だった。

「……………おい、起きろ。」

「ん？」

目を覚ますと……………何処かの丸太小屋ではないのかと思われる光景がそこにはあった。そして、俺の近くに誰かが立っている。その姿はノワルがもっている『古代魔法振興会』の黒い服であることが分かった。ただ、相手が男なのか女なのかまでは分からん。声で判断しようにもその声は無機質そのもので姿も上から下まで真っ黒なのだ。まるで機械みたいな人物だった。

「……………お前、古代魔法が使えるうえに強いんだって？何でも、今の魔法使いの中では一番だそうじゃないか？」

「……………。（どこことなく声が強がっているような気が……………）」

」
腕を動かそうとしたが全く動かなかった。ロープで縛られているようだ。さて、どうしたものだろうか？それに、俺が魔法使いだって知っているのならこのようなことをしても無意味だと知らないんだろうか？

俺はあっさりと魔法を使って縄を解き、相手の鼻面（黒いからどこが鼻かよくわからん。）に一撃、へたれの拳を食らわしてやった。相手は凄く固い。

「残念だが、それは間違いだ。一番強いのは俺に魔法を教えてくださいている三人だ。師匠を差し置いて弟子が強いわけないだろ？」

「くう！暴力をふるうなんて……。」

電気がつき、相手の顔を拝めると思ったのだが・・・黒いフードが顔のほとんどを覆っていたので無意味であった。いやいや、何であいつは俺の姿を確認できるのだろうか？透視って奴か？それはもう、魔法使いじゃなくて超能力使いではないのだろうか？あと、俺のパンチを痛がっているだど……？

「最後だけど、あなたも『新古代魔法振興会』にはいらない？」

それは新しいのだろうか、それとも古いのだろうかという俺の疑問だったんだが、それは後で考えるとして相手に答えを返した。勿論……。

「やめとこう。俺はこれ以上面倒なことに首を突っ込みたくはないんでね。それにだ、俺にはやらなくてはいけないこと（ねじを眺めることなど）があるんで、これで失礼させてもらおう。」

案外近くにあった扉を開け、クールに出て行こうと決心した俺だったのだが、たまには熱く萌えるのもいいのではないかと思いがら扉をくぐったのであった。だが、相手が後ろから何かを言ってきた。

「ここで、待ってる。」

そんな相手に返す言葉は熱く燃えていなければなるまい！！

「あかんべー！顔も見せないシャイなお前のところに誰が再び来るかっていうんだ！ここまで来てみろってんだ！お尻ペンペーン！！」

そして俺は扉を閉めて走り去ったのであった。

飛び出た場所は俺の知らないところだったのだが、遠くに俺が通っている高校がかすかに見えるって事は地球の裏側とかそういう遠いところではないのはわかっている。場所は山の中だ。山の中にログハウスのような感じの小屋があり、そこで俺は監禁されていたようだ。まあ、俺を攫った相手が男好きではなかったのが唯一の幸運だったと思う。

しかし、そんなことを考えていた俺の後ろから何かが壊れたような音が聞こえてきた。先程思い切り閉めた扉のドアノブが俺の頭にあたる。

「な・・・・・・・・。」

振り返った俺の目に映ったのは俺の二倍ぐらいの大きさを持つ・・・竜だった。え？もうちょっと説明して欲しいって？わかったわかった、詳しく説明してあげるからせかさないせかさない。じゃ、詳しくいきまーす！！

見た目は全体的に黒く輝いており、『黒竜』ってやつだろうな。頭には角が生えており、その口からのぞいている牙は鋭く、そして全てのものを噛み砕こうとしているようにも見える。注目するべき点は鱗だろう。

黒く輝いており、毎日のお手入れを欠かしていないと思われる。しなやかな尻尾は優美な感じを強調しており、うろこに続くプラスポイントだ。唯一のマイナスポイントはここまで美しさがきわまっているのに目つきが悪い。鋭いつてわけでもないし、ただ単に……悪い。威厳のある目つきではなく、細いだけだ。視力もそこまで無いと思われる。

「……さて、ここで朽ち果てるのと『新古代魔法振興会』に入るのとどちらがましかな？ あなたに本当に最後の選択肢をあげよう。」

いやいや、俺としてはどちらも好むべき選択ではないね。

「両方却下だ。」

「そうか、ならばここで消えてもらおう。君が強いといってもそれは人間の中でのことだろう？ 私は人間ではない。」

見れば分かります。ええ、俺の両眼はビー玉でも節穴ではありません。見た目人型なら人間と思うかもしれませんが、自分よりもでかくて背中から羽が生えていて四足の生物を人間だという人はこの世に一人もいませんよ、おばかさん♪

俺が一人心中でぶつくさ文句を垂れていると相手は襲い掛かってきた。そうだねえ、相手としてはさっさと終わらせたかったのだろう……その巨体を羽ではなく、見えざる手で動かし……俺の真上に来てその見えざる手を消したのであった。いや、あの巨体であの羽はちょっと小さいだろうからね。

巨体から繰り出されるのしかかり。俺がとっさに避けなければ今頃俺は満員電車に乗っているサラリーマンたちよりもっと悲惨な状況になってしまっていたに違いない。無論、モザイクが俺を覆っており、食事時にはとても登場できないような感じだろうな。イチゴジャムを辺りにぶちまけたような感じ？

「ほお、意外とすばしっこいんだな？」

「へ、言ってる！！はつきり言うがあんたのほうが遅いだけだろう？」

相手がどの程度の強度を保っているのか試しに水流をぶつけてみる。消防車から発せられる水流よりも強くやったつもりなのだが、効かなかった。

「どうした？それで終わり？これじゃ、シャワーの代わりにもならないよ。」

「なあに、小手調べだ。どのくらいの強度を保っているのかなあ？」

奴は体が大きく、見た目どおり移動は遅いようだ。相手がたかをくくっている間に俺の全力を持って倒すしかない！いや、いつだって俺は全力だ。

まあ、見せ場のようなシーンではない（見せ場？今の俺には造ることが出来ないね。）のは明確なのでここは地味にダメージを与えていこう。チクチクと・・・。

今度はドラゴンが一番得意としているだろう、炎を試しに放ってみた。勿論、ダメージはない。どうやら、意外性というものが無いらしい。

「なら、次は……こいつでどうだ!!」

電気を纏わせ、直接その頭に雷の剣を振り落とす……というより、突き刺す。一昔前にはやったプラグインって奴ですよ。

「ギャアアアア!!」

相手は見事感電したようだ。おやおや、軽口叩いた割には意外と弱いなあ? さて、これからどうやって料理してやろうかな? くくく、お楽しみだねえ。

「とどめだ!! 天国いって幸せにくらしな!!」

「くうう、形態移行! 変形! 人型!!」

俺が雷で吹き飛ばそうとしたら相手は煙を噴出した。俺は目標を見失い……とりあえず煙の外に出て様子を伺う。あんなのが突進してきたらぺちゃんこだ。

煙も消え、俺の目の前に……一人の人間らしき物体が目映ってきた。

「!!」

「ふふ、驚いた? これが私の本当の姿よ。そうね、俗に言う半人型竜形態ってところかしら?」

俺の目の前に現れたのは……体が二足歩行のドラゴンなのだが、顔は女の子。

ぱっとみて鎧を着たような感じなのだ。

そして、背中から生えているのは先程の黒い羽なのだが、これはも

う、機械の感じをB A R I B A R Iにかもちだしており、バーニアもつけられている。薄い羽の部分はレーザーを出しており、近未来を想像させる。そして、右腕内部の部分を見てもコードなんかがちらりと見て、そういうところを見るととても興奮してしまう。機械がきしむ音が最高。

「ふふ、これが私の本気・・・かかっておいで？ 零時ちゃん？」

ああ、そしてこの機械の感じをとともかもちだしているこの両の足・・・生唾を飲み込むのをやめることが出来ない。

触ってみたがこの感触は癖になるに違いない。すべすべしており、機械の感じは完璧。吐き出される少量の煙もかたくそこはぐつとくる。そして、なにより左肩に書かれている番号。番号があるということはこの期待のほかにもシリーズが存在するということで、俺の夢は膨らむばかりだ。ぜひとも、一家に一機・・・いや、俺だけに十機は欲しい。

「つて、触るなあ！！ひゃああ・・・どこ触ってるの！」

「ああ、これぞ・・・まさしく人の叡智！！すばらしい、エクセレントだ！！俺はこれまで生きていた中でここまでのものを見たことが無い！！ビューティフル。」

「ちょ、そ・・・そこはって・・・ええい！！離れろ！！触るなあ・・・」

「いいや、離すものか！！俺は今、猛烈に感動している！！たまんねえ！」

「こ、こら！！警察呼ぶわよ！！うわあ、や、やめてって・・・」

「いやいや!! 俺を止めることは誰にもできない!! 最高だ!! 最高だ!!」

必死に逃げようとする半人型竜機械を俺は魔法の紐で縛り付ける。相手はがんじがらめになり、動くことが出来なくなっていた。くくく・・・。

さあて、これからは俺の探究心が火を噴くぜ? 燃える心を持つてるからな。

俺はドライバーを取り出して震える機械に近付いていったのであった。

第三章 発端は機械＞人間？（後書き）

えー、前書きで書いていた通り、メッセージを書いてくれた方にお答えします。はつきり言いますが、彼らはまた出てきます。もうちょっと遅くなりますが・・・とりあえず必ず出てきますので待っててください。それが終わったらまた、あのシリーズが始まる予定です。勿論、この『御注文は？』魔法使いで！』も続けていく予定です。じゃ、今回の章のおおまかな話をしておきたいと思います。今回、初めのほうだけですが零時が待ち望んでいた物が登場します。いや、もう登場してますね。ですが、それが発端でまたもや零時は面倒に巻き込まれていきます。更に、それがきっかけでさらに面倒なことにならずれまた巻き込まれます。これからよろしく願います。後、たまに評価もしくは感想をくれると嬉しい限りです。では皆様・・・また今度。

零時：しかしまあ、二十回目か……。結構続いたもんだな。（前書き）

皆さんのおかげで二十話になりました。感謝感謝ですね。

零時：..しかしまあ、二十回目か.....結構続いたもんだな。

二十、

俺はにやける顔を抑えることが出来ず、右腕に持ったドライバーを奇怪に動かしながら今では動くことが出来なくなった相手にゆっくりと近付いていった。

「い、嫌！やめて！！近寄らないでえ！」

「くくく.....俺がやめるとでも思ったか？さあて、その内部はどうなってるのかなあ？俺に見せてくれないかなあ？なあに、ちょっと眺めるだけだから.....」

「.....おのれは変態か！剣山 零時！！」

「ぐはああ！！！」

俺は後ろから飛んできた激流（なにやら服の一部が溶けているような気がする。）に襲われて目の前に迫っていた機械の角に頭を打ってしまった！いてえ！！

「だれじゃああああ！！俺の浪漫を邪魔する不埒で無粋な野郎は？」

振り返ったところにはセレネ、ソーラ、ノワルが立っていた。俺は慌てて立ち上がって機械を隠すような感じで後ずさる。な、何も無いですよ？

「零時！せっかく助けに来たのに何やってるの！」

「う・・・別に何も俺はしてないぞ？別に誰かに誘拐されたただけだ！それにただ俺は襲い掛かってきたとても変な機械を捕まえて倒そうとしただけだ！」

納得したのだろう、セレネはどうやら言葉に詰まったようだ。俺は満足して後ろの機械を更にかんじがらめにして（勿論、叫ばれては困るのでガムテープで口は防いだ。）足で後ろに追いやった。あ、勿論丁寧に足でそっと押した。

しかし、今度はソーラが口を開いた。目が引きつっている。

「・・・零時君、確かに貴方を誘拐したのはその機械だけど・・・それ以前にそのこ、女の子だよ？女の子に暴力をふるうのは零時君じゃないよ。」

「勿論だ、俺はこんなに可愛い女の子に暴力をふるうことなんて絶対にしない。ちょっと中身を覗かしてもらっただけだ。ちょーとだけだからな。覗くだけだ。」

俺がそういうとソーラは少し低い声で俺に話しかけてきた。その声には怒りが含まれているのは誰でもわかるだろう。空気を読めない人物は誰もいなかった。

「・・・零時君は・・・女の子に暴力をふるうわけないよね？」

ごめん、俺はどうやら今まで追いかけてきた夢を捨てなきゃいけないみたい。だって、ソーラが怖いんだもん。セレネは悔しそうな顔してるし、ノワルは泣きそうな顔をしているのだ。これ以上、彼女たちの機嫌をよくないほうに持っていくのはさすがに・・・片方の天秤が落ちるばかりだ。それはよくないことだ。

「……ごめんなさい、俺が悪うございました!! お代官様、お許しくださいませ!!」

「……ん、よろしい。零時君、今すぐその人の口を塞いでいるガムテープを取ってあげて。ノワル、仮に彼女が襲い掛かってきたときのために零時君の近くに行行ってあげて。絶対に油断しないでね? 勿論、零時君の行動にも気をつけて。」

「わかったよ。さあ零ちゃん、大人しくしてなさいな。」

俺は未練残りまくりだったのだが、ゆっくりと痛くないように傷をつけないようにガムテープを取り、相手に謝った。土下座する勢いなのは気持ちの問題だ。

「いたいけない貴方に暴力を働いてすみません。そんな俺を許してください。」

「零時、その機械の女の子にまだ……何もしてないよね?」

セレネの質問に俺は頷く。むう、悔しいが認めざるおえんな。

「ああ、これからしようとしたときにセレネたちが来たからな。いやあ、もうちょっと俺が早く意識が戻ってたら分らなかったけどな。悔しいな。」

「……零時君、家に帰って覚悟しておいてね? 立てないようにしてあげる。」

「冗談です、ソーラ師匠。俺はその場の空気を和ませようとしただけですよ。」

縄を完璧に外し、俺は後ろから突き刺さるような視線を背中に浴びながら・・・相手を立たせた。勿論、今のうちに体の見た目の構造を頭の中に叩き込むことを忘れない。いつか、俺の手で似たようなものを作って見せるさ。それまで我慢。

そんな俺の隣にソーラが立った。そして、立ち上がった相手を睨みつける。

「・・・聞かせてもらいましょう。何故、零時君をさらった挙句に零時君に襲いかったのかを・・・答えによってはスクラップになってもらいますよ？」

「なあ、そこまでしないでいいんじゃないか？ほら、俺はこの通りぴんぴんしてるし・・・いや、なんでもないです。俺が悪かったです、はい。」

そういった俺をソーラは睨みつけて黙らせた。そ、そこまでしてくれなくてもいいのだが？こいつをスクラップにしたら俺がとても悲しむのだが？

その眼光に相手もびびったのだろう、怯えながら話を始めた。まあ、この状況（俺の師匠たちはとても実力派だからな。まあ、一人・・・成長途中の魔法使いがいるのだが）どうやら俺と話していたときの口調は強がっていただけらしい。

「そ、それは・・・マスターの命令なのですよ。うう、私は従っただけです。」

「ほお？そのマスターとは誰ですか？今すぐここで名前を言ってください。ついでに、住所と電話番号、携帯のメールアドレス・・・他の個人情報も病院にいきたくないなら教えてください。おっと病

院ではなくリサイクルBOXですね。」

この人怖いですよと言わんばかりの目を俺に向けてくる謎の機械・
・いや、俺を襲っておきながら俺に助けを求めるなんて図々しい
にもほどがある。俺が助けるなんて思ったか？そんな甘い考えを・
・ええい、そんな目で俺を見るな！

「・・・ソーラ、相手が怖がってるからちょっとは優しく言ってあげたらどうだ？ほら、こんなに怯えてるだろ？さすがに・・・女の子が怯えているの見てると俺としても寝覚めが・・・」

「・・・うるさいですね、零時君は・・・いいですか、この人は機械です。女の子ではなく、単なる機械です。女の子の前に奇怪な機械なんです。」

何処かの誰かは種族の先に来るのは性別だといっていたのではないのだろうか？あの、そのところはどうかなのでしょう？気になるなあ・・・。

「ま、まあ、今回は許してあげたらどうだろうか？な、一回だけは許してやろうぜ？ほら、俺たちもそろそろバイトの時間だろ？遅れたらまずいし・・・。」

そういつて俺は時計を見せた。これは本当のことだ。

「・・・わかりました。今回だけは見逃してあげますよ。・・・一応聞いておきますが、貴女の名前は何ですか？それぐらいは答えられますよね？」

再び睨みつけられた謎の機械がびくりと震え、がたがたしながら

答える。

「ええと、私の名前はですねえ……『P-X001』でしゅ・
い、いえ……通称は『ローザ』と呼ばれています。どうぞ、お
見知りおきを……。」

途中ソーラの睨むような視線に更に怯え、言葉を嚙んだ。そして、
ソーラは名前を聞き終えるとふんと鼻を鳴らして俺に告げた。他の
二人は固まっている。

「……零時君、帰りましょう。ほら、行きますよ。」

「あ、ああ……。」

俺は名残惜しげに相手を見ていたのだが、ソーラに首根っこを押
さえつけられて引きずられていったのであった。そして、ソーラは
背中から羽を生やして去っていった。他の二人がようやく固まりを
解いたのであった。

「あ、ちょっと待って……零時、ソーラ!!」

「零ちゃん! 私たちを忘れてるって!! ソーラもさあ……置いて
かないで!」

「いや……それはソーラに言ってくれ……って、ソーラ!! 危
ないぞ!!」

「……零時君、落ちそうなら私に抱きついておいってください。」

言われたとおり、俺はソーラに抱きついた。だって、首しか持っ

てないぞ。

「零時！何ソーラに抱きついてるの！！」

「え、だって……。」

「零ちゃん、だっては言い訳なんだよ？」

二人に今度は責められてしまった。うん、責められたではなく、攻められたのだ。だって、俺たちの後ろからやってくるセレネとノワルはそれぞれ……水の弾と黒い弾を持ってるんだもん。あれ、当たったら痛いので済まされないような気がするのだが？それも俺の気のせいだろうか？

「……ソーラ、今日はどうかしたのか？具合、悪いのか？」

「……零時君、私は本当に心配したんですよ？それなのに……この責任は取ってもらいます！！明日の午前十時、公園に必ず来てください。」

有無言わずに俺にそう告げたソーラの泣きそうな声は俺に唸らせる様に肯定の声を上げさせたのであった。え、なんだか今回のソーラ、おかしくない？

零時：しかしまあ、二十回目か……。結構続いたもんだな。（後書き）

二十回目記念として何かをしようと思いましたが、特に思いつきませんでした。すみません。だけど、まあ……。いいですね。今は三十回目に到達できることを祈りましょう。これからよろしくお願ひしますね？

零時：今回はまあ、『』の存在意義』って題名かな。

二十一、

次の日、俺は約束どおりといっては何だが・・・時間通りに公園にやってきた。今日はいい天気だ・・・まあ、いい天気なのが・・・それが必ずしも、いい結果を出すとは限らないんだがな。天晴れって奴ですか？

「・・・零時君、きちんと来てくれたんですね？」

「ああ、ソーラが言ったからな。それに、今日は別に用事なんて無いから。」

「・・・そうですか。」

「・・・あ、ああ。」

お互い、話が続かない気がする。ソーラは元から話が得意といった感じじゃないからな。うん、これかもしれないことなんだろうなあ。しかし、今日は何処かに行くのだろうか？いつもよりソーラの表情が厳しい気がするな。

「ソーラ、今日は何処かに行くのか？」

俺の質問にソーラは頷き、俺の目をしっかりと、じっくり、くつきり眺め・・・口を開いた。うう、そんなに睨まれると少しばかり、びびります。

「・・・昨日零時君を襲った不埒な輩を操っていた黒幕を退治に

行きます。」

おやおや、なんともまあ……物騒な話なこと。ん？それにし
ては気になることがあるんだが……これはまあ、他の二人に言
われたことだ。

「……なあ、なんであの二人を連れてこなかったんだ？」

俺の素朴な質問にソーラは台本を読みながら答えるような感じで
口を開いた。心なしかその目はまぶたの中の大海を泳いでいる気が
する。これも気のせいかな？

「……あ、あの二人が傷ついたら零時君は悲しみますよね？私な
んかより……。」

「……いや、俺はソーラが怪我しても同等に悲しむぞ？それに、
あの二人……いや、セレネは確かに来たらソーラが心配するだろ
うから、やっぱり連れてこなかったほうがいいのか？とりあえず、
ソーラが怪我をしても俺は心配する。」

俺がそういうとソーラは微笑んだ。まあ、その微笑みは冬に間違
って咲いてしまったタンポポのような小さな微笑だった。だが、俺
の心が安らいでいくのを感じる。おっと、とち狂ったことを言うて
る場合じゃないな。

「……ありがとう、零時君。じゃ、そろそろ行きましょう？」

「ああ、そうだな。じゃ、さっさと俺を狙っているという変人の顔
を拝んでいつも通りの人生を歩みますかね？しかしまあ、このご時
勢に黒幕なんてなあ……。」

そして俺たちは二人並んでその場を後にしたのであった。

「……ノワル、目標が移動を始めたわよ。ちゃんと確認できた？」

「分かってるよ！見てれば分かるって！！で、あの二人がどこに行くか分かってんのセレネ？」

「さあ？それを確かめるために私たちが動いてるの！！ほら、行くわよ。」

「あ、待ってよ……。別にいいんじゃないかな？」

俺とソーラが電車に乗り、隣町へについて……。この昨日の場所へと再びやってきた。昨日は空を飛んできたので電車代などいらなかったのだが……

「なあ、なんで昨日みたいに空を飛んでこなかったんだ？魔法使いならそんなこと余裕だろう？」

「……今日はスカートをはいてるから無理ですよ。」

「ああ、なるほど。確かに飛んだら見えちゃうな。」

そんなものなのだろう。俺は納得してソーラにしたがってログハウスへの中へと足を踏み出したのであった。無用心だと思われてもしょうがないが、俺として箱の中に捕らわれていた猫の身なのでここがどのような構造なのかは分かっているつもりだ。それにソーラが言うには辺りに敵の姿は無いらしい。

「・・・彼女たちはこの時間・・・ここにはいませんからね。調査済みです。」

「そうなのか？ しかしまあ、いつの間に調査したんだ？」

ログハウスの中は昨日と特に変わりが無かった。生活感がまったくないといってもいいくらいに室内は綺麗だし、水道などはひねっても水が出てくることは無い。家具だって置かれていないのだ。埃も一部分を除いてきちんと積もっている。

「なあ、本当にここが敵の拠点なのか？ 全く生活感が無いぞ？」

「・・・ほら、このテーブルの下を良く見てください。開きますよ。」

ソーラがテーブルの下に入って色々といじくっていた。すると、テーブルの下に扉が現れる。ありがちだけど、意外と分からないものだなあ。そして俺たちの前に姿を現したのは階段だった。面白いことに足元が淡い光で照らされている。

「・・・行きましょう、零時君？ きっとこの先に面白い人がいますよ。」

「ああ・・・そうだな。できればまともな人間がいて欲しいな。」

下にいるのは竜か鬼か・・・もしくは天使か・・・とりあえず一般常識に考えてまともなものはいないと考えていいだろう。俺の望みは薄い。

階段を下りていったのだが・・・そこにはとてつもなく広い空

間が広がっていた。そして、俺たちが下りてきた階段に防火用のシヤッターらしきものが下りる。あっさりと閉じ込められちまったな・・・俺たち。

『ようこそ、零時。』

閉じ込められた俺たちの耳に放送が入る。ううむ、声が変わっていないのはありがたいのだが、知り合いの声ではないな。まあ、知り合いの中に俺を誘拐しようなんて考える奴はいないからな・・・いや、そういえばノワルがいたっけ？

「誰だ？」

俺の問いかけに応じたものなのか知らないが暗闇だけを覆っていた空間に明かりが与えられる。そして、俺たちの前にいたのは三人の美少女を前にして立っている男だった。おっさんだ。まあ、かっこいいワイルド系のおっさんだ。

「・・・いやあ、最後に顔を見たのはいつのときだったかな？ 久しぶりだな、我が息子よ。お父さんの顔を覚えているかな？」

「・・・！」

む、息子？ それはもしかして・・・

「・・・ソーラ、お前実は男だったのか！」

「・・・違います！ 今ここで言っているのは零時君の事です！」

そんなこと知ってるさ。ただちよつとだけ場の雰囲気と和ませよ

うとしてみただけ。だって、ここの雰囲気は殺伐としているんだからな。

「って、その前にいる美少女たちは誰だ？俺の親父はそこまでスケベ心満載なのか？」

俺の問いかけに俺の親父だと名のつた者は不適に笑った。そして、ろくに顔も見えていなかった美少女の一人が前に出てくる。

「お、お前は・・・ローザ！！くくく、久しぶりだなあ・・・。」

「お、お久しぶりです。」

「・・・零時君、機械の名前は覚えることが出来るんですね？私が学校で名のっている偽名を覚えてますか？」

「い、いや・・・このローザとは昨日会ったばかりだし、ソーラの偽名よりも本名のほうを大事にだな・・・。」

たじたじとなっていたら俺を船に乗って助けにやってきてくれた人がいた。

「あゝ、悪いが時間が無いので話を進めさせてもらおう。零時、お前もこっちに来い。」

「へ、誰がそんなことでそっちにいくものかってんだ！」

俺の意思是意外と強固なものだ。それに、セレネたちにも申し訳ないからな。色々と助けてもらったりもしたし・・・。

「こつちにすればこいつらをいくらでもいじらせてやるぞ。」

「わかりました。お父様・・・今そちらへ向かいまーす!! へっへっへっへ!!」

俺が彼らのところに行こうとすると・・・突然俺の上にあった天井が落ちてきた。俺はあっさりと下敷きになってしまった。ぐはあ!

「ちよつとまったあああああ!!」

「そんなこと零ちゃんが許しても私が許さないからね!」

瓦礫の下から這い出てみると二人の見知った顔がそこにいた。そして、相手に向かって人差し指を向けて高らかに宣言している。ついでにもう一人の人影も相手に向かって叫んでいる。

「わ、私がいるからそんな機械なんて要らないのよ!!」

「・・・いえいえ、私がいるから零時君にはそのようなものは無用なんです。」

「ちがうよお! 私がいるからだよ! そんなの不必要。」

そんな勝手なことを言ってくれている三人の足元に這っていき・・・俺は立ち上がった。うう、今のは本気で死ぬかと思ったぞ、二人とも。

そんな俺を見て親父と名乗った人物は俺を哀れむように見てこういった。

「息子よ、お前も色々と苦勞しているのだな？」

「うるせいや！！あんたが俺の親父ってわけでもないだろ！いいか、俺はその女の子の機械じゃない、その機械を絶対に諦めないからな！！こうなったらここであんたを倒してでもその三人は絶対に手に入れてみせる！！覚悟しやがれ！！」

「……まるで悪役だな？」

そんな哀れみを俺に向けたのだが俺は既に魔法を相手に放っていた。あの三人が俺の所有物になるまでさほど時間は要らないだろう。うわははははは。

だが、親父？は悲しそうに首を振っただけで……それだけだったのだが俺の攻撃（火球、水流、電撃）をすべて右腕で防いで見せた。うお、化け物？

「ふ、お前は機械を物として見ているのか？……そして、その三人の事もそう見てはいないだろうか？そんな風に見ているのなら……お前は間違っている。」

親父？の言葉にその場が凍りついた。俺側にいる三人が俺に何かを聞いたような表情を向けている。誤解を解くには正直に真実を告げるまでさ。俺は機械の事を物としては見ていない……そして、この三人の事も……。

「……俺はセレネ、ソーラ、ノワルの事をそんな物としては認識していない。何事にもかけがいの無い存在だ。例えるなら月、太陽、暗闇だな。どれも必要だ。俺の頭の中では俺を見守ってくれている存在だって思っている。それに、だ！！これがあんたが誤解していることだが……俺は機械の事を物だとは思っていない！！一

つの存在！一つの意味！！それで、一つの命だと考えている！！」

更に辺りが凍りついた。あれ？何か俺は間違ったことをいったのだろうか？その沈黙を破ってセレネが俺の前に立った。

「……機械と私たち……どちらが大事？」

今はそんなことを言っている場合ではないと思う。

「セレネ、今はそんなことをいっている場合じゃないと思うが？いか、目の前にいる敵はあいつだ。俺ではないぞ。」

「答えてよ。」

「そんなのあれを倒した後でも話せるだろう？いいか、出現率の低いモンスターを前にしたときの気持ちってわからないか？そんなときは間違いないとめるだろう？それが今なんだよ。で、あんたに聞きたいことがあるんだが本当にあんたが俺の親父なのか？」

俺の質問に親父？は威厳たっぷりに頷いた。

「勿論だ。今でも母さんには悪いと思って家を出ている。というより、夫婦喧嘩がおきてしまった。あれは凄かった……まさか釘バットをもつてくるとは私も分からなかった。あいつときたら手加減なしで私を叩いてくるのだからな。」

体中の傷（男の勲章）を見せながら俺たちに泣きながら話してくる。

「……因みに聞くが何故だ？」

「私の趣味をやめさせようとしたからな。おっと、話をしすぎたよ
うだ。最後に・・・教えてやるが私が所属しているこの組織の統領
は私ではない。ふふ、いつかは彼女がお前に会ってくれるさ。じゃ
あな。」

「あ、ちょっと待て!!」

追いかけてようとしたのだが俺はセレネ、ソーラ、ノワルに囲まれ
てしまった。どの人の顔も俺を睨んできている。そして、俺に向か
って・・・

「ふんっ!!」とそれぞれいつて何処かに言ってしまったのであつ
た・・・何がしたいのだろう、この人たちは・・・。

立ち去る三人の後姿をぼさとした感じで俺は眺めていた。

零時：今回はまあ、『』の存在意義』って題名かな。（後書き）

どうも、皆さん、お久しぶりです。まあ、そこまで経っていませんが……。今のところ一応、次の章の冒頭までは書いているのですが、いかんせん、時間が無いので更新が毎日出来ていない状況です。それと、皆さんの反応を見てます。まあ、アクセス数なのですが……。それはおいといて、今回以降の話をしたいと思います。ちょっとばかり心の動きというものがあつたと思いますが……。まだまだですね。次は零時の心の整理です。応援などがあれば動くスピードが速くなるかもしれません。角が生えて、赤くなって、3倍のスピードで……。動きたいなあ。

零時：相談！！（前書き）

えー緊急事態が起きてしまいました！！とても更新が遅れた？理由が今、明らかに・・・後書きにて説明します。

零時…相談!!

二十二、

あれから、数日がたったのだが一向に誰も俺の部屋にはいなかった。学校に行っても彼女たちは俺と目を合わせることはあれ、話しかけてくることなどまったくなくなっていた。とても、寂しい。

悩んだ挙句に瑞樹と双三に相談することにして、俺はあるとき二人を屋上に誘った。時間帯はお弁当の時間帯だ。

まだ二人にはセレネたちとの不仲を相談していなかったのだが、あっさりとあっちから指摘してきた。

「・・・零時、近頃彼女たちとはまったく話しをしていないみたいだね?」

「・・・やっぱ、わかるか?」

「どうしたの? けんかでもしたのかしら?」

むう、俺としてはけんかしたりするのは嫌いなのだが・・・困ったものだ。どうすれば一番いい方向にことが運べるものかと二人に尋ねてみた。だが、尋ね方はちょっとだけ質問形式にさせてもらった。

「・・・なあ、二人は・・・そうだな、瑞樹^{ハニ}だったらお前の彼女たちと友達、どっちを大切にする? 双三だったら勉強と友達、どっちを取る?」

俺の質問に二人は箸を進めていた手を休め、それぞれが考えるような仕草（瑞樹は人差し指でこめかみを押さえるように、双三は親

指と人差し指をあごに当てて）を数秒だけしてから瑞樹から口を開いた。

「……僕だったら、間違いなく僕のハニーを大切にするね。何でかって？僕の趣味を邪魔するものは友達ではなく、理解者ではない。僕の友達であるためには僕の時間を大切にしてくれる人物ではないと務める事ができない。勿論、場合によっては友達のほうが大事だとおもうときがあるかもしれないけどそれはまず、こないだろうね。」

「……できればもっと詳しく、俺にもわかるように簡単に説明してくれないか？」

悪いがよくわからない。俺が頭が悪いのかこいつの頭の中がH A P P Y！！なのかしらないがな。

「ようするに、趣味はまちがいなく自分を裏切らないだろうね。友達っていうのは自分とは違う人間だ。相手の心を見ることがなんてできないだろうね。だからさ、人間関係って言うのは大変なんだよ。相手のことを考えて動かないといけない。良かれとおもってやったことが最終的に、もしくは半ばで相手を傷つけることになりかねないんだからね。零時、君が彼女たちに何をしたのか知らないけど……そういうことになったんじゃないかな？」

眼鏡をついとこれ見よがしに俺に見せつけ、再び箸を動かし始めた。俺はため息をついて双三のほうに向き直った。双三はちよつとだけ首をすくめて面白そうに俺たちのやり取りを見ていたようだ。

「……面白いのね、あなたたち……。」

「そりゃ、どうも。じゃ、双三の答えを聞かせてくれないか？」

双三は座りなおして俺と先ほどから高速で箸を動かしている瑞樹を見た。

「・・・私としては残念な結果としてその瑞樹と同じ結果よ。私も友達よりも勉強のほうをとるとおもうわ。」

当然のように俺は理由を尋ねる。うう、友達が大事だっていういやつは俺の友達の中にはいないのか！

「理由？瑞樹が言ってたってわけじゃないんだけどね・・・勉強してれば社会に認められるって言うけどさ・・・その社会も人の成り立ち・・・そうでしょ？」

「まあ、頭の双三が言うならまちがいないんだろうな・・・。」

「だからさ、私としては・・・人付き合いよりも机に向かったほうが気が楽なのよ。零時、そういうことをたずねるぐらいなら自分の心の中で決着、つけたほうがいいわよ？ここでいっそのことだから彼女達のことを無視したら？意外とあっちが寂しくなって話しかけてくるかもよ？彼女たちもやっぱり零時のことを気にしていたみたいだし、なにかを期待しているように感じられたわ。」

不適に微笑む双三にちょっとだけ恐怖を感じたがそれはそれだ。今回は俺が悪いのだろう・・・。

「でもさあ、なんでお前たちは趣味のほうを選ぶんだよ？納得いかないからもっと詳しく教えてくれよ。」

俺が憤慨して二人に尋ねると二人はやれやれといった感じで俺を見てきた。

「……いいかい、君は自分が傷つくのが怖くはないみたいだけど誰かに背中を押してもらいたいみたいだね？君の背中を押して上げられる人たちは誰もいないんだよ？そう、親友の僕たちでもね。」

「そうよ、私たちができることは話を聞くことだけね。零時、ここからさきはあなたが決めることだとおもうわ。」

意外と……人ができている親友たちなのかもしれない。いや、もしかしたらこの二人……何気に面白がって俺を見ていないか？

「ま、はっきりいうけど零時がとるべき行動は決まっているよ。零時は仲直りしたいんだよね？」

「……もちろんだ。」

「それなら、そうだね……君が全員を集めて一挙に説明することは不可能だともうから一人一人に話をしていったほうがいいんじゃないかな？間違っても……下手なことをいわないほうがいいんじゃないかな？」

「それはわかってる。」

決意を胸に静かに瞳を燃やしている俺に双三はボソツと告げた。

「…………自分で気がつかないで相手を傷つけたりするんじゃないの?」

「……………」

「自信がないのねえ……………」

俺の静かに燃えていた瞳は静かに沈下…………再び燃え上がることはなかなか難しそうだ。

「双三、どうすれば零時にも楽に一人を呼び出すほうほうってないかな？」

「下駄箱の中に手紙を入れるのは？」

「ラブレター作戦かい？」

「いや、果たし状作戦。」

適当に笑いながら話しているのでとても不安なのだが…………俺も何かを考えたほうがいいのだろうか？ソーラとノワルは話がわかるような人物だから大丈夫だとはおもうが…………問題はセレネだな。何故怒ったのかはよくわからないのだがあいつのこころはまっすぐだ。

「とりあえず零時がもつとも仲直りが難しそうだとおもう人からあたってみたらどうかかな？」

おお、さすが我が親友ではなく心友…………瑞樹だ。俺の心の中もきっちりわかっていないか…………。

「それはいいとして、やっぱりどうやって呼び出すのが問題じゃない？」

「……一人になったところを後ろから……」

「瑞樹、それは犯罪だ。」

「そうね、さすがにそれはちょっと……やっぱり夕焼けで殴り合っているのはどう？」

「そこまで俺は熱血ではないのだが……大体、殴り合ってどうするのだろうか？」

「やっぱり、普通に話しかけるのが一番だとおもうんだが……」

「それじゃ、いつものように無視されるんじゃない？ 今日だって三人に話しかけようとしていて零時、めっちゃくちや無視されてたわよ？ これ以上クラスの雰囲気悪くしてもらいたくないわね？」

「うう、そうなっちゃうのか……俺だってできれば静かに暮らしたかったさ。」

「黙っていた瑞樹が再び口を開いた。」

「……彼女たちがよくいる場所とかわかるかな？ そこさえわかれば一人になったときに……」

「後ろから襲ったりしたらだめだろ？」

「いや、そこで彼女の手をつかんで話をしたらどうかな？」

「ああ、それならいいんじゃない？ よくありそうで面白くないけど」

それだけ世の中に普及しているってことじゃない？」

うんうんとうなずいている二人にちょっとばかり不安を感じたのだが……まあ、それでいくしかないのだろう……。

「わかった。それでいってみるよ。」

「零時、がんばってね？」

「そうよ、せっかく昼休みをつぶしてまであなたに付き合ってくれたあげたんだからね？」

「ああ、わかった。二人とも、ありがとうな。」

俺は素直に頭を下げて礼を言った。

「……ところでさ、零時に聞きたいことがあるんだけど……あの三人のそれぞれが一人でいるような場所を知ってるの？」

「……。」

俺、そんなこと知らない……。

「……零時、やっぱり一人一人の後ろを追いかけて一人になったときに捕まえたほうがいいよ。」

ほ、本当にそうするしかないのだろうか？

零時：相談！！（後書き）

どうも、お久しぶりですね。いやあ、書いていた小説のデータがすべて、消えてしまいました・・・ぐすっ、四十近くまで書いていたのに・・・くよくよしてたら結構間が開いちゃいましたね。これからもおそくなったりするかもしれませんが、よろしくお願いします・・・。

零時：小さき泣き虫

二十三、

放課後、俺はサングラスをつけて一人で帰宅していた。五十メートル先にはセレネとソーラが帰っている。ノワルの姿は見えない。

「……うう、あの二人もてっきりついてきてくれるとおもったんだが……。」

瑞樹と双三は全くの傍観者で俺に親指を立てて

「がんばれ！」といって送り出してくれた。サングラスも二人からのプレゼントだ。しかし、これはどう見ても怪しい人物だ。周りの視線が痛い。

「……しかしまあ、考えによってはいい作戦かもしれないなあ……でも、セレネとソーラが別々に行動してるっていうのが考えられないんだけど……。」

俺がよく行くプラモ屋の前でセレネとソーラは別れた。ソーラはそのままプラモ屋へと入っていき、セレネはそのまま帰り始めた。

「……とりあえずセレネの後でも追いかけるかな？」

ばれないように電柱の陰に隠れたりゴミ箱の中に入ったりほかの帰宅している人物の後ろに隠れたり……警察に追いかけられたりしながら俺はセレネを追いかけた。お花屋さんの前でとまって花を見ていたりもしており……そのときだけは笑っていたりもした。

「……ううむ、今のうちに話しかけたほうがいいかもしれないな・

「・・・」

こそこそと俺はセレネの後ろに回りこんで・・・口をあけ・・・

「あ、すみませーん、この花、ほしいんですけど・・・。」

セレネが店員に話しかけて俺は潔く退散した。俺、何やってんだろ・・・。

そして再びセレネが動き出し始めて当然のように俺はセレネの後を追いかけていった。もうちょっとで俺の家なのだが近所の公園の中にセレネが入っていった。俺も匍匐前進のような格好で追いかける。後ろからほえてくる犬がともうるさい。

「・・・零時、何か用？」

俺のほうを見ていないのにセレネはそう答えた。

「・・・う、気づいてたのか？」

「・・・零時、おぼか？」

セレネはくると振り返っていた。その手に握られていた花は白い薔薇だった。俺の顔をちょっとだけ見てからセレネは再び俺に背中を見せた。なんとなく、面白がっているような感じでもある。

「・・・用があるのなら聞いてあげるわよ？」

もったいぶったように俺に話しかけてきた。今、セレネがどのような表情をして俺の話を聞いてくれるのか・・・それはわからない

かった。

「……セレネ、すまん……。」

「……なあに？それじゃ……よくわからないよ。」

どことなくセレネが増長している様な感じがしてならないが……
・（きつと今の表情は人を見下したような感じだろうなあ。）悪いのは俺なのだろう……。」

「……俺がセレネたちを怒らせてしまってすみません。」

「……本当にそう思ってる？」

「おもってます。」

「……じゃ、質問……機械と私……達、どっちが大事？」

「……。」

いまだにこちらを見ておらず、何を考えているのかもよくわからない俺にとってこの答えが今後、完璧に分かれ道となっていていとおもえなかった。

「……機械……い、いや……きまってるって！セレネたちが大事だ！！」

決して機械と言おうとしたわけではない。そして、いつの間にか俺の目の前に顔を近づけてセレネが睨んでいたからでもない。だ、断じて私は見えない暴力に屈したわけでは……。

「あっそ、ちょっとは安心したわ。零時、先に私は・・・いや、ちよっと行きたい所があるの。付き合ってくれない？」

「・・・もちろんOKだ。」

目をつぶってくれと言われたので素直に目をつぶるとセレネが俺に体を預けてきた。俺はちょっと驚いたのだが素直にセレネの体を支えた。

「・・・目を開けてよし。」

再び目を開けるとそこに広がっていた光景はいつかのレストランの地下室であった。

「零時、隣の部屋から誰かの泣き声がしない？」

「・・・ああ、さっきからうるさいぐらい聞こえてるんだが？」

「泣くのやめさせてくれないかな？」

そういったセレネの顔はいつもと違って湿っていた。もしかしたらセレネの妹さんとかだろうか？まあ、それはおいといて俺は素直に再び従った。相手を怒らせた人が一番悪いのだ。

「・・・じゃ、行ってくる。」

「うん、行ってらっしゃい。」

俺が扉を開けて泣いている本人を見つけた。

「……………」

「うえーん……………」

隣の部屋にいるセレネにそっくり……いや、セレネをそのまま小さくしたような少女が泣いていた。床は彼女の涙でぬれていた。しかし……非常にうるさいな。

「お、おい、何で泣いているんだ？」

「うえ？うえーん！！」

ちよっただけこっちを見たのだが再び泣き出した。ううむ、ここは何か面白い芸当をしたほうが良いに違いない。

「…………そうだなあ、ほら、これを見てな！この右腕には何も仕掛けがありません……ですが、この右腕を……さて、これからどうしたものだろうか？」

「ぐすっ、何か見せてくれるんじゃないの？」

「何、ちよっと待ってろ……今、何するか考えてるからな……」

「無計画だよ。」

「……よっしゃ、できた……この右腕をお前の目の前に持っていくと……ほらっ……」

ぽんっ！！

「し、白い薔薇が出てきた・・・。」

ちなみにこの薔薇は先ほどセレネが持っていたものだ。ちょっと、頂いてきた。もちろん、黙って。

「なあ、何で泣いてたんだ？その薔薇あげるから教えてくれないか？教えてくれるだけで良いんだ。」

「・・・あのね、私ががんばってもいつも失敗ばかりやって今日も私の代わりに友達がかばって怒られてるの・・・私いい加減・・・どうしたら良いのかわからなくて・・・誰にも認めてもらえないの。」

そういうと再び顔を伏せようとしたので俺は両手で女の子の頭を固定した。

「・・・いいかい、君が誰かは俺は知らない。君はがんばってるんだろ？」

「・・・うん。」

「だったら・・・だったら君がするべきことはひとつだ。これからもそのがんばりを続けることだな。」

「で、でも・・・これまでずっとやってきたのに・・・だめだったよ？」

「大丈夫だ。自分のためなところをほかの人に尋ねろ。心の支えをもってがんばれよ？」

「……うそつかないよね？」

「当然だ。誰にも認められないっていうのなら今度あったとき俺がお前を認めてやるよ。」

俺の答えに満足したのだろう……。彼女はうなずいて俺がやってきたところとは違う扉から出て行った。よくよく見てみたら俺がやってきたほうの扉はロッカーの扉だった。そのロッカーの中からセレネが出てきた。ロッカーの中はとても広い空間につながっている。

「……セレネ、ここは……」

「零時、帰ろう？ 私、もう疲れちゃったからさ。」

俺の言葉をさえぎってセレネはいつもよりあせったような声でそういった。俺も黙ってうなずいてセレネが出てきたところへ戻っていった。

「零時、また目をつぶってくれない？」

「わかった。」

俺が目をつぶると今度は後ろからセレネが俺の背中に乗ってきた。俺は黙ってセレネをおんぶして目をつぶったままであった。

どのくらいおんぶしていたのだろう……。一向にセレネが何も言ってくれないのでいい加減足が疲れてきた。覚悟を決めて目を開けると公園に戻っており、背中のセレネが寝息を立てていることによろやく気がついたのであった……。

零時：小さき泣き虫（後書き）

いやあ、慌てて復元しようにももう、頭の中にしか残っていないデ
ータは頭の中の消しゴムが消していつてますね。今のところはもう
前書いていたものと全くの別物となってますが・・・。。ま
た更新が遅くなるかもしれないですがよろしくお願いします。

零時：小さき高飛車

二十四、

そのまま立っておくのも馬鹿らしいのでそのままセレネを背中に乗せて俺は家に帰った。所有品は誰にも盗られないように公園の遊具のひとつに隠しておいた。家に着いた俺はとりあえず眠っているセレネを俺の部屋のベッドに寝かせ、再び公園へと向かった。しかし・・・

「・・・・ソ、ソーラ・・・・どうしてここに・・・・。」

公園内へと足を踏み入れるとそこにいたのはソーラであった。儚げな印象を受ける少女だったのだが、今はいつもより力強く・・・・いや、とても恐ろしげな魔王のオーラがなんとなく見える。目なんて俺の両目をしっかりロックオン。目をそらすことなんてできず、そらした瞬間に野生動物よろしく襲ってきそうだった。

「・・・・ソーラ、俺が悪かった。」

「・・・・他に何か言うことはありませんか？」

すでに夕日がほとんど沈んでおり・・・・辺りはだんだんと暗くなってきたのだがソーラの顔はしっかり見えた。怒っているが少し、悲しそうだった。

「・・・・ええと、ううん・・・・（な、何を言えればいいんだ？）」

とりあえずソーラの近くに一步一步近づいてみた。その間に時間を稼いで俺の頭の中で何を言うべきかという天使と悪魔の争いが始

まった。頼んだぞ、わが心よ・・・。

天使

「・・・俺と一緒にいてくれて言うべきです。ソーラがそれを望んでいるんですよ？」

悪魔

「馬鹿野郎、そんなことしたら他の二人と話すとき間違いなく微妙な雰囲気がまとわりつくぞ？ソーラエンドにはまだ早い。」

天使

「だが、彼女が望んでいます。ここで終わらせても良いのではないのでしょうか？」

悪魔

「だめだ。とりあえず今回は帰ってくれと言うだけで充分じゃないのか？」

天使

「・・・そうですね、今回はそれで行きましょう。他の方とのエンドもありますから。」

俺の中でとりあえず議論に決着がついた。俺の足は先ほどよりも早くなった。

「・・・帰ってきてくれないか？また、俺に魔法を教えてほしいんだ。」

俺は右腕をソーラに差し伸べた。ソーラは俺の目をずっと眺めていた。き、際どい。

「…………それはもちろんですよ、零時君。ですが、頼みたいことがあるんです。目を、つぶってくださいませんか？」

黙って頷いて俺は目を閉じた。セレネのときと同じようにソーラは俺に体を預けてきたので体重を支えたのであった。余談だが……ソーラの方がセレネより軽かった。

「…………もういいですよ。眼を開けてください。」

目を開けるとそこは雨が降っている公園だった。俺のよく知っている公園で先ほどまでいたところだ。だが、今ではなくなっている遊具もある。

「…………私ちょっとだけ用事があるので行ってきます。零時君、悪いけど濡れないようにあの遊具の下に行って私を待っていてください。少ししたらもどりますから……………」

俺がよく行っている公園の中に屋根のついた遊具が一つだけある。それは唐突に雨が降ってきても子どもが濡れないように作られたものでその遊具の下に避難すれば確かに濡れないだろう。ソーラがいなくなったので俺は言われたとおりに遊具の下へと走っていった。しかし、そこには先客がすでにいた。腕を組んで俺を睨んできている。

「……………」

「…………誰、あんた？」

遊具の下にいたのはソーラにそっくりの少女であった。その目は

ソーラとそっくりなのだが目が釣りあがっている。ま、子どもがにらんできても別に怖くもなともないけどな。

俺は黙ってその子の対極側に座ってできるだけそのこを見ないようにした。目の前からは無視されたことでさらに目つきが悪くなっている幼女が俺をにらんできている。

「・・・私を無視しないでくれる？」

「・・・あゝさっさと雨やまないかなあ・・・。」

俺は独り言をぶつぶつとひとりでつぶやいていた。すると、何か音がたてて千切れた。

「無視しないでって言うてるでしょう！！私を誰とおもってるの！！私は最高の魔法使いなのよ！！」

魔法使って本当にどこでもいるんだなあ・・・。

のんきなことを言っていると俺の目の前の女の子は俺を遊具の外に出そうと俺に何かをぶつけようとしたらしい。だが、俺はあっさりとそれをよけた。そして、呟く。

「・・・へたっぴ。」

「・・・許さない！！」

俺は遊具の外に出た。女の子も俺を追いかけてきた。そして、公園での果し合いが始まったのであった。雨がかすかに降っており、俺の視界を少し遮っている。

「・・・あんだ、私を馬鹿にするなんていい度胸してるじゃない

い？」

「は！よく言うぜ・・・可愛くないがきなんて相手しても面白くないからな。俺としちゃあ、その態度自体が気に食わないね。もうちょつと素直になれないのか？」

返事には恐ろしいほどの速さで俺に向かってくる水の槍だった。どんなに速くたって別に対処のしようはある。俺は俺を包み込むようにして水の盾を作った。

「・・・く、あんたも魔法使いだったの？」

「さあな？お前が素直になったら教えてやるよ。」

「・・・言ってなさい！！病院に送ってあげるわ！！」

それから約一時間ぐらいの間俺は手加減をして遊んであげた。すでに三十分のところで敵は息切れしており、俺は一方的に敵を追いかけていた。

「ほらほら、どうした？俺がタッチしたら今度はお前が俺にタッチするんだぞ？」

「きゃー！！」

とても楽しそうに俺から逃げている。ううむ、やっぱり子どもだな。俺としてはさっさと帰って着替えたいんだが・・・まあ、たまにはこういうのもいいかもしれないな。

「きゃっ！！」

さすがに疲れていたのだろう・・・ぬかるみに足をはまらせて女の子はこけそうになった。俺はすでに彼女の後ろにいたのであっさりそこけるのを阻止することができた。

「さ、これでタッチでお前が鬼といたいんだが・・・今日はここまでだ。今日は帰りな。お前はずぶぬれだから・・・。」

「何よ、せっかく私が遊んであげてるのに・・・もうちょっと遊んだって大丈夫よ。」

俺は目の前の女の子の頭を叩いて告げた。

「・・・一人で遊ぶのも良いがたまには他の連中とも遊べよ？あとな・・・帰らないんなら今度は気絶するまで攻撃して警察に連れて行くぞ？」

俺の本気が伝わったのだろう・・・あっさりと相手は身を引いた。

「・・・わ、わかったわよ・・・と、ところで明日もここに来るの？」

「・・・さあな？ま、いつかはまた会えるさ。じゃ、気をつけて帰れよ？」

一瞬だけ暗い顔した幼い魔法使いだったが俺が右腕を差し出すとちよつと意外な顔をした。不思議そうに握っている俺の右腕を注意しているようにも見える。

「……今度会えたときにこれを返してくれよ？俺にとって大事なもんだからな……。」

それは俺がいつも大事にしている機械のねじだった。そうだなあ、自慢の？一品だ。

「……わかったわ。また、会いましょうね？約束よ？」

そういつて俺の前から姿を消したのであった。

俺は再びあの遊具の下に向かい、とりあえず濡れた学生服を脱いで水を飛ばしていたらソーラが戻ってきた。全く濡れていないのが不思議だ。

「……零時君、ありがとう。」

「いえいえ、こんなことぐらいお手の物ですよ。」

「……目、つぶって。」

俺は目をつぶった。俺の耳にソーラの疲れたような声が聞こえてきた。

「……悪いけど……お姫様抱っこ……お願いできるかしら？」

体重を俺に預けてきて、ソーラは静かになった。俺はソーラを抱え、耳元で少しばかり他人がいたら言えない台詞を言ったのであった。

「・・・仰せのままに、お姫様？」

気取って言ってみたのは良いが・・・疲れているときにやるべきことじゃないね。目を開ければあたりは真っ暗。すでに俺が住んでいる町は暗闇の支配下が変わっていた。あれからどのくらい時間がたったのか知らないが公園の外灯がその存在意義を思う存分に発揮していたのである。よいこは帰る時間だった。

「・・・さすがにお姫様抱っこはやめといたほうがよかったかな？」

鞆をそのままにしておいて再び俺は家へと帰る道に足を踏み出す。しかし、その時間帯は人がよく通る時間帯なので俺はある程度人にばれないように家へと向かったのであった。勿論、俺が抱えているお姫様が目を覚まさないように・・・

「・・・現行犯で逮捕だ！！その少年！！」

あ、先ほどのおまわりさんだ・・・今のご時世には珍しい熱血タイプだね・・・俺は明日のことを考えずに走り出した。明日の朝の太ももの具合がとても心配だ・・・とは言っていられないので俺は走る。

その間ソーラは一度もおきずに幸せそうに眠っていた。しかし、俺にはまだ・・・

零時：小さき高飛車（後書き）

どうも、近頃誰かに追われているような気がしている（きっと中間テスト）気がする雨月です。さて、冗談はさておき今回の話はどうかだったでしょうか？データが消えてしまいう前とは大体同じようになったのですが思い出せない部分もあったのでこんな形になりました。ええと、もうひとつ伝えたいことがあります、評価、感想をしてくれたりメッセージをくれたりした方々、非常にうれしいです。特にうれしいのは短編のものから応援してくれている方です。まだまだ文章などが雑だったりよくわからなかったりするところもありますが、そういう時は突っ込んでもらって結構です。でこれからよろしくお願いしたいと思います。では、また今度……。

零時：小さき病弱者

二十五、

警官を振り切り俺は自宅へと戻ってくる事ができた。さて、今度こそ鞆を取りに向かおう。俺はソーラをセレネの隣に静かに置いて部屋を出た。

「母さん、ちょっと鞆を取ってくる。」

母さんは右手を上げただけで答え、俺は夜の闇に包まれた公園へと方向を定めたのであった。しかしまあ、今日は結構公園に向かっているなあ・・・。

警官がいないことを何度も確認しながら俺は猛禽類から逃げ延びるかわいいうサギさんのような心境で公園へたどり着いた。先程までついていた外灯が何故か消えていたので真っ暗なのだが目が慣れれば大丈夫だろう。俺は遊具にぶつかりながらも強引に進んだ。

鞆が置かれていた場所を思い出しながら俺は鞆を置いていた場所に手を伸ばしたのだが・・・鞆がなかった。もしかしたらもうちよっと奥にあるかもしれない。手を伸ばす。

「・・・・？」

その代わりに何か柔らかいもの・・・それは人間の手に似ていた・・・に触れた。

「・・・・！！」

正直、これには驚いた。俺の心臓が一気に悲鳴を上げ、ばくんばくんと警報を鳴り響かせて更に同時進行で俺の脳内では既に怖い話

「夜の公園で触った手」が始まっていた。

題名

「夜の公園で触った手」 話し手 剣山 零時

夜の公園に俺は忘れ物をした。慌てて忘れ物を捜して忘れ物がおいてあると思われる場所に手を伸ばしたところ……俺の手に触れたものは何かの手だった……

冒頭はこんなものだろう……と、そこまで頭の中で完成したところで俺は手を引っ込めようとした。だが、俺がまちがって触れた手を相手は離してくれなかった。俺の心臓は一気に高鳴っていく。あ、あわわわわわ……。失神、五秒前……。

「零ちゃんこんな暗い公園で何してるの？」

俺はしりもちついて俺の手を握っているノワルを見上げた。黒い服を纏って黒いフードまでつけている。俺は目をぱちくりしながら足をかくかくさせてとりあえず立ち上がった。

「……び、びっくりした……。ノワルかよ……。」

「むう、女の子に会ってそんなこと普通は言わないでしょ？それより、私に何か言うことあるんじゃないのかな？零ちゃんが一人にいるから追いかけてきたのに。」

握った手を離さずに俺に問いかけてくるノワルの顔はいまだによく見えない。とりあえずその声質からは怒っていることだけがはっきりと伝わってくる。ま、まあ……。謝らないといけない相手だし、一応謝っておいて損はないというか……。悪いのは俺だからな。

「……すみませんでした。もうしません。」

「ん、よろしい……ってその前に聞きたいことがあるんだけど？」

「……？」

「友達と機械どっちが大事？」

「……友達」

「友達と私は？」

「……私。」

「……ノワルでしょ？」

俺の右腕を掴んで放さない温かいノワルの手。そして、呆れた感じのノワルの声……。

「さ、行こう？」

「……。」

ノワルのその声に俺は静かに目を閉じた。暗闇だったのだがノワルも気づいたらしい。

「さすが、零ちゃんだね。よくわかってるよ。」

さてさて、俺は今度はどこに行くのかなぁというお楽しみの心を

大きくしながらノワルからの返事を待った。いや、不安のほうが大きいのは秘密だ。

「・・・目、あけて大丈夫だよ。」

目を開けるとそこに広がっていたのは大きな洋館だった。俺たちがいるのはその裏側に当たる部分なのだが正面玄関などは全く見えず、見えるのは一つの部屋だけであった。窓が開いており、ベッドに誰かが寝ているのがわかる。時間帯は昼だった。

「・・・零ちゃん、がんばってね？」

「・・・俺は何をすればいいんだ？」

「・・・零ちゃんが今から会うその子に聞けば何をして欲しいのか・・・わかるよ。」

セレネ、ソーラと同じようにノワルはついてきてくれなかった。俺は一人で窓からお屋敷に侵入したのであった。途端に館内の警報らしきものが鳴り響く・・・。

「やべっ！！俺何もしないのに・・・。」

不法侵入はしているのだが・・・。そんな俺を驚いたように見上げる一人の少女。やはり・・・そのこはノワルに似ていた。大きな目がこちらを先ほどよりも驚いたように見ている。顔は色白で病気のような感じがする。

「・・・あなた・・・ごほっ・・・誰？」

「俺？俺は君が望むことをするようにと外にいる人から頼まれたものだよ。何がしたい？」

その問いに彼女は口を開いた。右手を手に当てながら……

「……じゃあ……ごほっ……外につれてって？」

「了解！」

俺がその子の手を取り……屋敷を出たところで彼女の部屋の扉が大きく開かれるような音が背中に聞こえた。外に出たのはよかったのだが外にはノワルはすでにおらず、とりあえずここから出て行くことにした。目指すところは……

「近くに公園があるんだ……ごほっ……そこにつれてって私にお話してくれないかな？」

静かにそう告げる少女を背負って俺は公園へとかけだした。

公園に着くと俺は背負っていた少女を下ろしてベンチに座らせて疲れた俺もベンチに座った。空からは雪が降ってきていた。どうやらここでは冬らしい。空は曇っている。

「……しかしまあ、ここら辺にも昔は屋敷なんてあったんだな。」

「……？」

「いや、なんでもない。単なる独り言だ。ところで何を話したいんだ？」

俺の問いに彼女はまるで儚いカゲロウのように首を振った。少し、悲しそうだった。

「……お話、聞かせて？あなたのお話……。」

「そういわれてもなあ……何を話せば良いのか……。」

とりあえず俺のこれまでの生活を適当に話した。

別に面白くともななともないと思ったのだが彼女は笑ってくれたのであった。

そして、俺が魔法使いとなってしまったところまで話していると……彼女は辛そうに咳をした。なんとなく、その咳が俺がいつもしている咳と根本的に違っているような気がしたので俺は彼女に尋ねようとしたのだが……彼女の目は俺の話の先を聞きたがっていたようだったので俺は黙ってこう告げた。

「……それで、俺は魔法使いになったんだ。でもな、普段は魔法なんて使っていないんだ。何でかって？そりゃ、簡単だ……魔法なんて使うもんじゃない。とりあえず俺は普段は使わないんだがな……今日は特別に魔法を見せてあげるよ。その目に焼き付けなよ？」

「う、うん!!」

俺は少女に右腕を掲げて祈りを込める様にして右腕を振り下ろしたのであった。

「……何も……おきないよ……？」

「……ははっ、失敗したかな？ま、こういうこともあるって。」

遠くから誰かの声がしてきた。

「あ、執事さんが呼んでる・・・行かなきゃ・・・」

「ああ、気をつけてな？」

「うん！！じゃあまたね？また会えるよね？」

俺は頷き彼女は先ほど見たときよりも元気そうに駆けていった。
苦しそうな咳は申しておらず、ほっとした俺の後ろから声が聞こえてくる。

「・・・零ちゃんやさしいね？彼女魔法使いになるかもよ？彼女の病氣、治したんでしょ？」

「・・・なあに、魔法が不発になったんだから代わりに祈ったって誰からも咎められないだろうよ。じゃ、帰るか？」

「そうだね、私もそろそろ限界かな・・・。」

俺は目を閉じた。ノワルは俺の右手を再び握って力を込める。

「・・・もう、いいよ。」

言われて俺は目を開けた。ノワルはそのまま俺に体重を掛けてきたのだが眠るようなことはなかった。

「・・・へへ、タフでしょ？この魔法は意外と疲れるんだよ。」

「ああ、だれどかなり疲れたような顔してるぞ？無理しないほうが良いんじゃないか？」

「そういわれるとうれしいよ。それなら悪いけど、おんぶしてくれない？」

「わかった。できれば俺たちのかばんを持っててくれないかな？」

俺は鞆を持ってくれているノワルと一緒に帰ったのであった。これで終わったな。

零時：小さき病弱者（後書き）

なんだか久しぶりのような気がします。ちょっと気が早い感じがしますが次の章は番外編的扱いの話にしたいと思います。ええと、メインキャラクターは零時でいきたいと思います。そして、あの人物も・・・なんとなく魔法使いの癖してあんまりそんなことをしていないような気がしてならないので今回はそれで行きたいと思います。

第四章 機械の機会 俺とローザ（前書き）

さて、本章は微妙に短いですが題名どおりあのローザが出てきます。
覚えているかわかりませんがよろしくお願いします。

第四章 機械の機会 俺とローザ

二十六、

ある日、俺がバイト（皿洗い）をしていると店長さんがやってきた。

「零時君、今日バイトが終わったら話があるので残っていてくれな
いかな？ なぁに、すぐ終わる話だから大丈夫だよ。」

とうとう、クビにされるときがやってきたかと心の中でマイナス
方向に考えていたんだがそれでもないらしい。

「いやいや、クビではないよ。人並みには仕事ができているからね。
そうだね、今は忙しいだろうからはっきり言わないけど君個人につ
いてだよ。頼みたいことがあるんだ。」

つまり俺が直接的に話の中心になってきそうなのだ。俺は頷いて
仕事（皿洗い）に再び復帰したのであった。たまには皿洗い以外の
ことがやりたいなぁ。

バイトも終わり、先輩方同輩の人たちも帰り支度を始めた。後は
次のシフトの人たちがやってくれるので後片付けなどはしていかな
かった。

「零時、早く帰るわよ？」

「ああ、ちょっと店長に用事があるっていわれてさ……先に二
人と帰っててくれ。」

「零時君、ついにクビですか？」

「いや、クビの話じゃないって。」

「そうだねえ、クビになるなら一番初めはセレネよね？ 零ちゃん、先に帰ってるから。」

「それってどういう意味よ！！私はまじめにやってるしどじなんてしてないわよっ！」

ノワルが走り去ってその後を追いかけてセレネも姿を消した。駐車場がうるさくなる。

「あまりいい感じの話ではない気がしますので気をつけてくださいね？」

「ありがとうソーラ。じゃあな。」

ソーラも二人を追いかけて（駐車場にて私闘が始まった。観客たちも集まっている。）俺の前から姿を消した。

「さて、行くかな？」

誰に声を掛けるでもなく俺はとりあえず着替えて店長室へと足を踏み出したのであった。店長室があるのは地下なのでちょっとばかり怖い。

ノックを試してみる。

「どうぞ、入ってかまわないよ。」

「失礼しまーす。」

礼儀正しく俺は入室し、店長が指差した椅子に腰を掛けた。

「用事とは何ですか？」

「……実はだね、大変なことが起きたんだよ……いや、君たちのチームがいろいろやってきているのは知っている。勿論、それはすべて悪い方向でのことだからね。」

うわ、俺たちって知らないうちにそんなに悪いことをしていたのか……って、何かしたっけ？ううん、俺が悪いことをしていないのは神様が知っているだろう。

「夜の屋上での危険な行為、そして、術者本体に相当な負担が掛かってしまう『カキカエ』の魔法……これは自分の過去を改ざんしたりする魔法だよ。」

こ、この前行ったところは過去だったのか……じゃ、やつぱりあっちで会った三人は……あの三人の過去のことなのか？

「さて、今日もまたやってはいけない魔法を使用していたそうだね？君たちについての情報が入っているよ？毎度派手にやっているから通報者が絶えない。」

「きよ、今日ですか？ええと、俺は何もしてないと……。」

「ああ、放課後君たちが屋上で魔法を唱えていたのを偶然、君のお父さんが見ていたそうだ。」

それは、数時間前のことだ。俺はセレネ、ソーラ、ノワルに放課

後屋上に来るようにといい残されて屋上へと向かっていた。何でも用事があるとかないとかで先に姿を消してしまっていたのだ。

「どうやら仲直りできたようだね?」

「そうだなあ、まあ、瑞樹と双三のおかげだな。」

「感謝してね?」

ろくに何も考えていなかったような二人が俺の声にさも当然のように胸をそらしている。まあ、ちょっとぐらいは役に立ったさ。サングラスは要らなかったけどな。

「で、これから屋上に呼び出しだって?」

「ああ、あまりいい予感がしないんだけどな……。」

「告白にはおかしいわね? なにかしら……。」

「きっと、自分の趣味について零時に同意を求めるのではないのかい?」

「いや、きっと明日の勉強の予習についてだと思うわよ?」

十人十色……まあ、人の考えはそれぞれ違うものだろう。俺は途中で二人と別れて屋上の階段を最後まで駆け上がった。しかしまあ、あの満月の夜に出てきた化け物以降、屋上に来るのが怖くて怖くて仕方がないぜ。

「おーい、セレネ、ソーラ、ノワル?」

屋上の扉を開けても誰かがいるような雰囲気はなかった。俺はそのまま屋上の中ほどに歩いていった。すると……唐突に床が光りだした。

「うわっ!!」

あまりのまぶしさと衝撃に俺は気絶してしまった。感じ的には頭が輝く校長のはげ頭から発射される

「輝・ビーム」をまともに食らってしまったようだな。

そして、目が覚めたのはバイトが始まる一時間前ぐらいだ。

「あたたた……」

眼を覚ますと目の前にはセレネとソーラ、ノワルが屋上に座り込んで俺を見ていた。

「零時、どうかな？」

「どうって？何が？」

セレネが立ち上がって俺の目の前でくるとスカートを広げながら一回転。パンチラなんて俺に見せても何もならんぞ？もしかしてセレネがどこおかしくなってしまったのかとちょっとだけ思ったのだが……。

「いや、元からだな。」

そう俺は納得してなんとなく鼻に手を添えた。濡れたような感じがしたからである……。

「鼻血？」

俺の手についたのは紅い、液体だった。はて、倒れたときに鼻を強く打ってしまったのか？ううん、どうしたもんだろうか？

「あ、ところで俺に用事があるって言うのはなんだったんだ？」

俺が三人のほうを見ると落胆したような表情をしていた。

「……はあ、失敗でしたか。」

「なにが？」

「……失敗したからきょうはとりあえずバイトに行こうよ。今度また試してみればいいと思うからね……。」

「ちえ、零時の反応に期待してたのに……。」

三人とも俺を批判するような表情を見せて俺をおいてバイト先へと向かったのである。

「ああ、そのことだったんですか？俺はよくわからないんですけど……。」

再び戻って店長室。俺は小首をかしげながらも店長さんに事情を説明した。店長さんはやれやれといったような幹事のため息をついた。

「……さすがにセレネがいたから失敗してしまったのか……厄

介なことになったな。」

「厄介って？」

「零時君、今の君はとても危険だ。そうだなあ、鼻血で死んでしま
うかもしれないんだ……。」

「……どういふことですか？」

俺は店長さんから詳しく説明してもらった。店長が言うには俺は
魔法をあの人三人に掛けられており、その魔法が失敗し、残念なこと
に失敗した魔法が俺に掛かってしまったらしい。

「……君が異性に触れられれば間違いなく鼻血を出すようにな
ってしまっているんだ。」

「はは、そんな……。」

そういう俺をちらりとだけ見て店長は指を鳴らした。すると、店
長の後ろの扉から一人の少女が出てきた。そして、俺に引っ付いた。
その瞬間……

「うわああ!!！」

俺の手に鼻血がついてしまった。どうやら本当のことらしい。

「……他の三人の埋め合わせは彼女たちに直接伝えるから君
はそのこと一緒にいってもらいたところがある。詳しくはそのこ
に聞いてくれないかな？」

そして、俺はやってきた知っている少女、ローザを見て驚いたの
であった。

第四章 機械の機会 俺とローザ（後書き）

どうだったでしょうか？わからないことがあったらぜひともメッセージをいただけると喜んでお答えしたいと思います。なにぶん、まだまだひよっこですのでわかりづらいところがあるかもしれません。さて、データが消えてちよつと時が経ちましたが・・・多分、第六章で零時の物語は終わってしまうと思います。終わるそのときまで・・・お付き合いいただけるとうれしいです。

ローザ…マスターなんて駄目人間ですね。

二十七、

啞然としている俺に（先ほどから鼻血が止まらない。面白いぐらい出ている。）店長がティッシュを渡して告げた。俺は服に掛かっている鼻血を拭くことにした。

「・・・零時君、ローザ君とは知り合いだろうか？」

「あ、はい。そいつは機械です。」

鼻血が唐突に止まった。とりあえず詰められるだけ鼻にティッシュを詰め込んで話しかけた。今度は口の中がかすかに血の味がしていたりこれだけの量の鉄分はつらい。

「あとう、それで俺はどこに行けばいいんですか？」

「・・・ちょっとした偵察をかねて出張サービスをしてもらいたいんだ。」

俺は首をかしげたのだが話はこれまでだという風に店長は立ち上がった。

「さて、後はローザ君にでも聞いてくれ。私は用事があるからね。」

「あ、はい。」

店長はそろそろ勤務時間が再び始まるので俺の前から姿を消した。そして、残された俺はとりあえずローザを見た。俺の視線を感じた

のかローザは部屋の端っこに逃げている。

「……お前、何でこんなところにいるんだよ？」

「も、元マスターからの最後のご命令です。なんでも、零時を手伝ってやってほしいということで私は零時さんの部下となったのですよ。ええと、よろしくお願いします。」

「じゃ、公認でばらばらにしても構わないんだな？」

「って、いつの間にドライバーとか握ってるんですか!!」

俺は右腕に取り出したドライバーでローザを追いつめる。だが、追いつめられたねずみは猫に牙を向けたりするらしい……。猫側の俺としては嫌なものだな。

「ていつ!!」

俺に引っ付き、俺は鼻血を出してしりもちをついた。返り血を浴びたローザは勝ち誇ったように眼を白黒させている俺に告げた。その表情、頭にくる。

「私を分解しようなんてするとやらしいことしますよ？マスター？」

おかしいな……。ローザのことは機械だと思ったんだが……。何故、鼻血が出てしまったのだろうか？俺の疑問に答えるようにローザはふんぞり返って俺の疑問に聞いてもないのに答えてくれた。

「えっへん、私は女の子ですが機械です。機械ですが女の子なのです！マスターの脳内では一瞬の混乱が生じ、見た目が女の子なので

言葉では理解できていても追いついていないのです!!」

とりあえず今の状態ではどうすることもできないようだ。ちつ、しょうがないな。

「ばらさないと約束しよう・・・で、俺は何をすればいいんだ？」

「ええとですね、とりあえずあなたが私の新しいマスターですので教えますがどうやら潜入調査のようですね・・・。何でも、魔法使いたちの重要書類が何者かに盗まれたらしくある程度容疑者は絞られているようなのですがはつきりとはしていないそうです。それで、その容疑者でもあるとある三人のお屋敷がお手伝いさんを募集しているそうです。そこに私たちは向かいます。」

簡単に言ってくれてはいるがそのどこが出張サービスだ？俺は惘然としながらも頷いた。

「やれやれ、どうしたもんだ？ローザ、他に何か聞いていないのか？」

「ええと、その書類を取り戻してくれたらマスターの魔法を解除してくれるそうです。」

「よっしゃ、わかった!!」

こんな不便な体では何もできん!!俺が悪いわけではないがここはちゃちゃっと終わらせてしまおう!!

「行くぞ、ローザ!!」

「了解、マスター!!」

こうして俺とローザは容疑者である人物の屋敷に向かったのだった。俺は公式に魔法使いと認められていないのでそのような書類はないらしい。ローザも魔法使いではないので潜入はちよつと時間が掛かったのだが楽に潜入することができた。

「……しかしまあ、本当に出張サービスだな。」

俺がやっていることは彼女たちが食べ終わったものの後片付け、皿洗い、洗濯、掃除、ペットのお世話……etcとさまざまだ。

「しょうがないですよ、これも任務です。マスター、お皿洗うのうまいんですね?」

俺たちが潜入を開始して約一週間がたった。

あれから三人には全く会っていない。

学校には大怪我をして意識不明の重態ということとでバイト先が手を打ってくれたのだが正直、悲しい。そして俺の格好もちよつとだけ変わっていた。エプロンにバンダナ、後は普通の学生服なのだ。女性のお手伝いさんを要求していたらしいので男の俺はだめだったのだが人手不足なので今回は許してもらったのだ。いや、全くうれしくないのだが……。

お屋敷は馬鹿みたいにでかく、お手伝いさんも他にいるにはいるのだ。何でも、このお屋敷は四つのエリアに分かれており、A、B、C、Dに分けられている。俺とローザが頼まれているのはCエリアでこのお屋敷に住んでいる三人の持ち主の部屋がある区域でもある。俺たち以外の人たちはここにはおらず、俺たち自身もまだ主の面も拝んではない。

「やれやれ、いつまでこんな生活が続くんだ？」

「マスター、誰か来ます！」

二人して車も軽く通れる広さの廊下の先を隠れるようにして眺める。Cエリア区域長だったらどやされるので姿を消さなければならぬ。

「……はじめてみる三人組ですね。」

俺とローザの眼には三人の姿が映った。一番左の少女は鏡でしきりに自分の顔を眺めており、一番右の女の子は筋力トレーニングをしながらこちらに悠然と歩いてきている。そして、真ん中の美少女はお金のセンスで仰いでこちらにやってきていたのだ。

「とりあえず隠れておくか？」

「そうですね、姿を消しておきましょう。」

わからない相手の前に姿を現すのは危険なのでここは姿を消すことにした。消すといっても扉の陰に隠れるだけなのだが……。

「……全く、あの書類をどこに隠したのかを忘れるなんてネイお姉さま、何をやっていらっしゃるの？」

ナルシストの少女が口を開いた。今度は一番右の少女が口を開いた。

「しょうがないさ、姉さんだって大変なんだからよ。それより、テイル……この屋敷にスパイが入り込んだって？」

そして、ネイと呼ばれた一番ケチそうな少女が流れ眼を口を開いた少女に注意する。

「……フォルスそのようなことをここで言ってはならないのよ。どこで聞いているのかわからないからね。」

す、鋭い……ここに二人ほど存在しています。だが、あのフォルスという名前の少女のおかげで助かった。あとはなくなった書類を捜し終えて店長に返せばそれで終わりだな。俺が頭の中でどのようにしてことを進めるかと悩んでいると三人は通り過ぎてしまった。ローザに確認してみる。

「ローザ、お前もきちんと聞いたよな？」

「ええ、彼女たちの生まれた順番はわかりました。私の予想では一番上がネイと呼ばれた守銭奴で二番目がフォルスという筋肉馬鹿で三番目がティフルのナルシストですね！」

「違うだろ！！あいつらの生まれてきた順番なんて関係ないの！」

そうですかといわんばかりに俺を見ってくるローザだったので俺はため息をつきながらもローザに説明したのであった。ようやく理解したのかああ、なるほどと頷いている。

「ローザ、失せ物探しをできる機能はついてないか？」

「いやあ、ついてないです。大体、もっと具体的な情報がないと無理だと思われます。」

たしかに漠然としすぎたなあ。まあ、今回は容疑者である三人の顔をようやく拝めたのでそれだけでも十分の収穫だ。

「ローザ、これからは攻めに入ろう。」

「ええと、マスター・・・夜中にこっそりと彼女たちの部屋に入り込んで・・・」

「違う、彼女たちがいたらだめだろ？いなくなったら掃除道具を持つてとりあえず書類を管理していたネイの部屋に侵入しよう。」

「わかりましたあ！！」

なんとなく間抜けな返事だと思わなくもないがそれは性格なのだろう・・・。相棒としてはとてつもなく不安が残るのだがここではローザだけが頼みの綱なのだ。

「しかしまあ、お前は基本的に何をするために作られたんだ？この際詳しく自己紹介してくれないか？」

「ええと、わかりました。『R-000』パーソナル・ネームは『ローザ・ローゼ』です。主に戦闘をするために作られたみたいですね・・・あと、和むためです。この前あったときよりも改造がされています、マスター！！あ、言い忘れてたけどモデルは『竜』です！！」

この世の中に戦闘という仕事などないのではないのだろうか？見た目めっちゃ弱そうだし、和むためって大体何なのだろうか？そういえば、竜の形態に移行したりできたんだったなあ・・・どうせなら蛇とかそういうのになればよかったのだが・・・。

「ま、今のところは計画立てるしかないか・・・。」

俺は笑っているローザをその部屋においてモップをもって出て行ったのであった。勿論、俺の後ろからはローザがついてきてこけていたのであった。・・・不安だ。

ローザ…マスターなんて駄目人間ですね。(後書き)

以前言ったとおり、この章はいつもより少ないです。中途半端な感じがしますが今のところはそれで我慢してもらえとうれしいと思います。お暇な方、感想を書いてもいいなあと思っている方はできましたら感想をいただけるとうれしいです。では、また次回でお会いしましょう！

ローザ…マスターなんて臆病人間

二十八、

その日の夜、俺は与えられている部屋（と言ってもトイレの隣にある物置のような部屋。）に戻って自分の時間をすごしていた。ちなみに、真面目な事をしている。

「しかしまあ、学校行かない間もきちんと勉強してないとつらいものがあるな。」

俺が休んでいる間に間違いなく授業は進んでいると思うので自分なりに授業を進めておかないといけないと思ったのだ。いつ戻る事が出来るのかわからないからな。

そんな矢先に部屋をノックする音が聞こえてきた。

「マスター、入れてください。」

「開いてるから勝手に入ってくれ・・・ってお前と同じ部屋だぞ？」

俺の返答にローザがやってきた。すでに寝る準備をしている。ここでは俺とローザは同じ部屋なのだ。お手伝い長さんには兄妹だと偽っている。剣山 ローザと名乗っているので怪しまれそうだったのだがまあ、疑われることなく今のところ安心して生活している。

「マスター、もう遅いので寝ましょうよ？顔が疲れているようですが？変ですよ？」

「へっ、疲れていないし、元からこんな顔だ。ローザが先に勝手に寝ればいいだろう？」

「……マス!……おにいちゃん、早く寝ようよ!」

「……。」

ローザが唐突に俺の呼び方を変えた。俺は何かが起こったのかと思っ
てあたりを見渡す。緊急時は呼び名を変えるらしい……そして、扉がノックされ俺は再び返事をした。

「どうぞ、あいてます。」

「失礼します。」

やってきたのはここのお手伝い長さんだった。名前は美奈^{みな}さんというらしい。

「零時さん、ローザさん、急遽あなたたちに仕事ができました。ご主人様が帰ってきたのでのお手伝いしてもらいます。それで、至急私とともにその部屋に向かってください。」

「わかりました。行くぞ、ローザ。」

「はい、おにいちゃん。」

彼女たちの前では完璧に猫をかぶっているような感じがしてならないがこれは芝居なのだ。ううむ、俺は素なのにローザ芝居として俺にべったりとくっついてきている。

「ふふ、仲がよろしいんですね? うらやましいですよ。」

「……お兄ちゃんは大事ですから。」

白々しい……。俺は気がつかれないように流し目を送ってやった。ローザは舌を出して鼻で笑いやがった。まあ、それはいいとしてお客さんなんて始めてくるからちよつとだけ不安だな。がんばってみるか……。

「では、この部屋にいますので二人ともよろしくお願いします。では、私は食事を取ってきますので。くれぐれも失礼のないようにしてくださいね?」

そういつて美奈さんは調理場のほうへ歩いていった。ローザは我慢していた俺にティッシュを渡しながらつぶやいた。俺はせっせと鼻にティッシュを詰め込んでいる。

「……おかしいですね?今日の予定に帰ってくるなんて書かれてませんでしたよ?」

俺は更に手渡されたティッシュを詰め込みながら答える。

「確かに、今日の予定表にはなかったな。でも、唐突に帰ってきてもおかしくないと思うんだが?とりあえず失礼のないようにするんだぞ?」

「わかりました、マスター!」

俺とローザは恭しくノックをして扉を開けた。俺の顔はできれば見られたくないのでローザの後ろに隠れるようにして様子を伺った。さて、はじめてみるご主人様だな……。

「・・・失礼します。」

部屋にいたのはこの前見た三人組だった。どうやらこのゲストであって持ち主ではなかったと思ったのだが違ったか。さてさて、本当にこの三人が本物かどうかそれはさすがにわからないなあ。でも、まあ・・・単純明快な問題は好きだな。

「・・・ネイ姉さま、私この別荘なんだか嫌いだわ。久しぶりに来たからかしら？」

「そういわないの。この別荘にだって意外とお金が掛かっているんだから。」

「そうだなあ、私もなんだか気に入らないところあるんだよねえ。この雰囲気とか・・・。」

「ネイ姉さま、私、『大鏡の間』に行つて来ますわ。」

「私も『厳格の間』に行つて来る。」

呆然としている俺の目の前で彼女たちはさっさといなくなつてしまった。俺たちはさっさと脇によけ、残った少女はため息をついて俺たちを招き入れた。見た目、俺とあまり歳が離れていないような感じを受ける。右手に持っているお札のセンスが目を引く。

「ごめんなさいね、見苦しいところを見せてもらつて・・・。」

「・・・。」

「私も今から用事があるのでここのお掃除をお願いできるかしら？」

あと、私たちの仲があまりよくないのは先ほどの光景を見ればわかると思うけど他言しないでもらえるかしら？お給料を上げるように管理している上のものに言うておくから。私は『黄金の間』に行ってるから何か用事があるならそこに来てもらえる？」

「わかりました。」

彼女も俺たちの前から姿を消し、俺とローザだけが残った。ローザは俺を見上げてつぶやいた。俺は鼻からティッシュを取り出してとりあえずポケットの中につっこむ。

「……あっさりと侵入できちゃいましたね？」

「……そうだな。でもまあ、ここに書類があるかはわからないからな。とりあえず……」

さて、まず俺たちがするべきことは書類の隠されていそうな場所を探すことだ。俺が中で探している間ローザは部屋の掃除を始めた。二人で探していると誰かが来たとき対応ができなくなってしまふからだ。美奈さんがまだ来ていないので好都合だ。

「マスター、何かありましたか？」

ベッドをどかして掃除をしているローザが吞気にそんなことを聞いてくる。

「いや、どこにもないなあ、一体全体、どこに隠したんだろう……。」

「ネイという人は失くしたと言っていましたから複雑奇怪なところ

に管理しているんじゃないんでしょうか？たとえば、天井裏とか心の扉にしまったとか……」

ローザの戯言につきあってはいられないので考えてみた。この部屋にある家具はベッドが三つにクローゼット、テレビ、大きなテーブルあとは化粧棚ぐらいなものだろうか？どれも物を隠せるようなスペースはないと言い切れないので念を入れて探している。

「実際、私たちが探すよりも専門の業者でも呼んで探してもらったほうが良いんじゃないんですか？ええと、電話帳はどこにあるんだろう……。」

「それができれば俺たちはこんなところにいねえよ。ま、ここにあるとは考えにくいからなあ……ローザ、今日のところはさっさと掃除して部屋に戻ろう。撤収だ。」

「そうですね、この部屋結構使われているみたいですけど……きれいですね。私たち、ここにまだ来たことありませんよね？一度でいいからこんなところにすみたいなあ。」

無駄なことをしゃべっているローザに曖昧に頷いて俺も掃除に加わった。そして、扉をノックする音が聞こえてきた。なんとなく、ベストタイミングという気がしたのだが……。

「ネイ様、おられますか？」

美奈さんの声だったので俺が代わりに返事をする。ローザは一人でぶつぶつ言っている。

「あ、零時さんでしたか。」そういう美奈さんに事情を説明した。

彼女は唸り俺に告げた。

「そうですか……すみませんが三人に食事をお持ちしたことを伝えてきてもらえませんか？一人一人がそれぞれに伝えにいけないのですね？」

「わかりました、俺はネイ様にそう伝えてきます。」

「では、私はティフル様に伝えてきます。」

「じゃ、私は筋肉馬鹿……じゃなかった、フォルス様に伝えてきます。」

俺はとりあえず先ほど聞いたこと場所のことを美奈さんに尋ね、その場所に向かうことになったのだがその場所は地下にあるそうだった。しかも、別々の場所から入らないといけないそうだ。なんか、ややっこしい屋敷だな……。それに夜中だからなあ……。

俺が向かうこととなった『黄金の間』はAの区域の地下にあるそうだ。無駄に広いので駆け足でその先へと向かっていった。既に夜の闇に包まれているので探すのにちょっとだけ手間取ったのだが入り口は伝えられていた噴水の近くにあり、地下に続く階段が口をあけて俺を待っていた。そして、この日の夜に俺のお屋敷生活にも変革が訪れた。

「ここか？」

俺はきよろきよろあたりを見渡したのだが暗闇に包まれた辺りには誰もいなかったので確かめることもできなかった。まあ、それはいいとして懐中電灯が壊れてしまってなかったのだからちょっとだけ怖かったが暗闇の中に一步を踏み出したのであった。懐中電灯は先ほ

ど落として壊してしまったのだ。それがなんとなく恨めしく思ったのだがしょうがない。

音も立てずに石で作られた階段を下りていく。途中から完璧に辺りが見えなくなってしまう俺は学校の屋上のことを思い出した。あれ以来、暗い場所はだめになってしまったのが悲しいものだ。暗いところにはあのお化けが・・・と考えてしまう。

階段もようやく終わったところで足元に明かりが見える場所へと到着した。黄金に輝いている足元のものはなんだろうと思いつながらとりあえずネイの姿を探したのだがそこにはいなかった。あるものすべて、黄金に輝いている。もしかしてお金だろうか？

「・・・・『黄金の間』ってことはどこかに部屋でもあるのかな？」

暗闇の中とても不安だったので誰かに尋ねるように足を進めた。そして、ようやく黄金に輝く扉を見つけて俺はほっとため息をついた。これはまちがいないだろう・・・。

扉をノックしようとした俺の耳に

「・・・・いち・・・・に・・・・」との声が聞こえてきたのはそのときだった・・・・。そして、俺の足が震え始めたのであった。

ローザ…マスターなんて臆病人間（後書き）

皆さん、お久しぶり？ですね。今回の章はいつもより？魔法に
しているような事を書いてみました。それと、見てわかると思いま
すがローザの登場頻度がひたすら多いですね・・・。今のところこ
の章の終わり方は曖昧にしたいと思っています。では、皆さんまた
今度お会いしましょう。

ローザ..マスターなんて鉄分不足人間ですね。(前書き)

今回は自信作・・・だと思います。

ローザ…マスターなんて鉄分不足人間ですね。

二十九、

俺のちよつと運動不足な足が震え始めた。こ、これはお約束のお皿が足りないやつか？井戸に出てくる美人の幽霊さんなのか？あ、あわわわ……。

洞窟のようなところなのでどこから聞こえてくるのかはわからない。俺はとりあえず扉をそつとだけ押してみると音もなく開いてくれたので急いで猫のように滑り込んだ。

そこにも金ぴかに光っているものがいっぱいあるところだった。カラスが見たら喜んで巣に持ち帰りそうだ。さて、これだけのものを売ったらいくらになるのだろう……。なんてことを考える余裕もなく俺は逃げそうになっている足を引きずるようにして奥へと進んでいった。足元は色々なもの（主に黄金色）が転がっていたりする。

チャリ

「……………」

俺の足が何かを踏んだようだ。音からお金のようなものだったのだが……。俺は右足をどかしてみるとそこにコインのようものが転がっているのに気がついた。

「……………」

それはナイフのようなもので傷がつけられており、そこには『7676』と削ってあった。不思議に思いながらもそのコインをポケットに忍ばせて俺は奥へと進むことにした。

奥までは一本道で奥に進むごとに両脇を占領している黄金の量が増えている。少量の光がかなりの反射をしており、普通の黄金ではない気がする。なんとなく・・・だ。

一番奥に巨大な金庫があった。その前にネイと思われる後姿が見えたので俺は声をかけようとしたのだがもしかしたらこの金庫の中に重要な書類があるのではない、黄金の脇に隠れた。隠れた黄金の仏像のモチーフはマッチョな人だったことを教えておこう。

「・・・・・・・・お金は何も言ってくれない。そう思わない・・・・・・・・？」

彼女の前にあるのは巨大な金庫だけだ。誰に話しかけているのだろうか？お皿幽霊？

「・・・・・・・・金庫だって鍵がなければすべての敵・・・・・・・・でも、金庫は金庫なの・・・・・・・・黙っていないで何か答えたらどうかしら・・・・・・・・そこに隠れている剣山 零時？」

しっかりばれていた。さすがにこのマッチョ（うれしそうな顔）では無理だったか。

「・・・・・・・・すみません、誰かと話していたと思ったので話しかけませんでした。」

「・・・・・・・・あなた、この金庫の中が気になるんじゃない？」

「ええ、気になります。」

「正直で結構だわ。でも、残念なことにこの金庫の暗証番号はなくなってしまったの。記憶を消されちゃってね・・・・・・・・その番号を残しておいたものもいま私の手元にはない・・・・・・・・。」

「地道に番号を探してみたらどうですか？」

「残念ながらこの金庫には魔法が掛かって三回間違えたら二度と開かないわ。残り、一回なの。」

がっくりと肩を落として悲しみのため息をつくネイを見て俺はなんとなくセレネがクビになったときの光景を思い出した。どうやら心の中から悲しんでいるようだ。しかし、残酷のような話だが俺が何かできるようなことはない。出来ることは皿洗いぐらいかな？

「この金庫に入っているものって何ですか？」

「重要な書類よ。それだけ。」

それだけしか言わなかった。

「それで、私に何か用事があってきたのでしょうか？」

「え？ ええ、お食事ができたので呼びました。」

「そう、それなら今から向かうわ。だけど……。」

そう彼女がそういうと右手を上げた。なにやら殺気立っているのがわかる。

「……奴らのスパイは必要ないの。悪いけどここで落ちてもらうわ。」

「！」

「さあ、お前の欲望を満たせ！！一瞬にして己の心を映し出せ！！」

『かねええええええええええ！！』

俺に向けて竜は右腕を振り落とす。慌ててよけたのだが俺がいた場所は今度は黄金に変わっている。もしもあたった場合は俺が黄金に？うわあ、あのマツチョももしかして・・・

「価値は気にしないわ。あなたは単なる黄金に変わるの。一生、私のものになるわ。」

少しばかり憂いが混じった微笑をしながら俺を見てくるネイ。じよ、冗談じゃないぞ！！体が黄金になったら絶対に売っちゃまうに決まってる！！

「剣山 零時等身大黄金ver 一個限定」そんな感じに決まってる！！もしくは

「三号続けて付いてくる付録の黄金をすべてくつつけると等身大の剣山 零時が完成する！」っていう可能性だってある。もしかしたらここは下ネタに走って

「これが本当の○玉」っていうのかもしれない。まちがはなくそのときは数量二個限定だろうな……。うう、考えただけでおぞましい。。。。

「いやだああああ！！そんなことされるならもっと別なこととして欲しいぜ！！」

こんなところで黄金にされてたまるか！！俺の価値はそこまで高くないぞ！！

「くそ、普通の魔法使いだって言うなら・・・」

かなり前の話だが普通の魔法使いは一つの魔法を使役中は別の魔法を使用することができない。つまりこの成金ドラゴンの攻撃をかくぐってネイの元へ行って一撃の元に倒せばそれで終了!!よし、それでいこう!!つまり、特攻ってことだな。

俺は走り出した。夕日ではなく黄金に向かって……ちよつとだけなら削っても文句は言われないに違いない……じゃなくて、ネイを倒すために……。

「……そこよ、お前の力を見せてあげなさい。貪欲なる心の持ち主!!」

お金 $\parallel$ 力……これは基本を忠実に守っている力関係の図式に違いない。しかし、俺的には次のような図式になる。金 $\leq$ 心 $\parallel$ 力。金っていうのは心を満たすものだ俺は信じている。つまり、金ではないものが心をしめればいいのではないのだろうか？

まあ、世の中そううまくいかないかもしれないが……気休めにはなるさ。

『かねえええええ!!』

口から黄金の液体を俺に向けて吐き出す。俺はそれを傘を差して防いだ。あつという間に傘が黄金へと変わっていく……だが、傘のおかげであつというまにネイの目の前へと着いた。後ろからは常に黄金の液体がかけられており傘を解くことはできない。

「……さて、私の前までこれたのは褒めるけどどうするの？既に魔法使ってるわよ？」

「……俺、残念ながら魔法使いじゃないんだよ。」

「ま、まさか……」

「そ、魔法が同時に複数使用できる省エネアンド時間短縮できる古代魔法の使い手なんだ。残念ながらまだ正式に魔法使いってわけじゃないらしいけどな。」

俺は驚いているネイに左腕を向けた。地面から鎖が出てきて彼女を拘束する。そして後ろの黄金の竜にも同じように鎖で拘束する。相手を油断させるために今まで使わなかったのだが努力が報われた瞬間だと思われる。出し惜しみしたまんまじゃ意味ないからな。

「……チェックメイトってやつだな。さて、これからどうする？」

「さすがマスター……やりますね。影から見てたけどこの前より強くなってます。」

いつの間にか俺の脇にはローザが来ており、うんうん頷いている。って、なんでここにいるんだ？ローザは別の場所に行っていたと思っただが……。

「何でお前がここにいるんだ？お前、他のご主人様のところに行かなかったか？」

「マスター、この姿を見てもわからないんですか？援護しに来たんです。」

メイド服ではなく黒竜の口から顔を出しており背中からは羽が生えていたり、腕にはつめのようなのがつけられている。この前見

たときよりも人間に近づいているような感じだった……ああ、なるほど……これが瑞樹がたまにつぶやいていた

「擬人化」という奴なのかもしれないな。何故、ボディーのみスク水を付けているのだろうか？防水？

「……マスター、鼻血出てますよ？この姿に萌えを感じたんですか？」

「……そんなことよりティッシュ持ってないか？近頃鉄分足りてない気がするんだ。」

「残念ながら……ティッシュは持っていません。この爪を突っ込みましょうか？」

俺はなんとなく過激な格好のローザを見ないようにして縛っているネイを見た。相手も俺を見下ろすような目つき（いや、実際に鎖で上に上げているので見下ろされている。）で見ている。しばし睨み合った結果……彼女はため息をついたのであった。

「ふ、あなたの勝ち。好きなようにするといいわ。でもさっき言った事は本当だから……。三つのコインを見つけ出さないとわからないわ。」

そう、あの暗証番号がまだわからない。そして今度は俺がため息をついたのであった。

ローザ…マスターなんて鉄分不足人間ですね。(後書き)

さて、どうだったでしょうか？前にも宣言したとおり、今回の章は短めですね。あと、気がついた方もいるかもしれませんがお手伝い長さんは別の小説に出ていた人です。まあ、どうでもいいことですね。それでは、皆さんまた今度！

ローザ..マスターはちよっとおまぬけ人間(前書き)

あ、今気がついたけど三十回目だ・・・

ローザ…マスターはちょっとおまぬけ人間

三十、

俺はネイを下ろして話を聞くことにした。勿論、彼女が再び襲い掛かってこないという保証書もないので俺の脇には戦闘態勢のローザ（戦闘能力は不明）が控えていた。

「まず、その書類のことを教えてもらえないか？できれば詳しく話して欲しい。」

「……しょうがないわ。私は負けたのだからね……あの書類の内容は『全人類の支配』についての事とそれを実行する魔方阵が書かれているらしいのよ。」

うわ、いきなりそこまで飛躍するのか……それならすごく重要な書類だな。

「それってどういうことだ？」

「そのまんまの意味。でもあの魔方阵が未完成っていうのは私以外誰も知らないわ。私がそれを知ったのはちょうどその書類がレストランの掃除をしていたときに知ったの。」

「もっと詳しく話してくれないか？」

「ええ、勿論それは構わないわ。あの日、私がお客さんからお金を払ってもらったときにあの書類を頂いたのよ。その時も魔方阵の説明をその人から教えてもらった。一種類だけだったけどね。その書類は上の人に渡してもいいけど詳しく説明まではするなって言われ

たのよ。よくわからなかったけど他にも色々魔法使いに役立つ魔
方陣が書かれていたかわ。彼が私に教えてくれたことはちよつとし
たことだったけどね。『貴女が悪いと思ったときはこの書類を隠し
ていただきたい。』そういつて彼は出て行った。その後、私は上の
人たちがこの書類を悪用するって事をたまたま聞いたのよ。だから
この書類を隠したの。』

つまり、彼女は書類を上に乗せたのだ。それで俺は非常に簡単に
思ったことを口にした。

「その書類を燃やせばよかったじゃないか？」

「・・・残念ながらそれは無理だったわ。何回も試してみたけど燃
えなかったの。」

恐ろしい書類だ。大体紙じゃないんじゃないか？燃えない書類か・
・・・

「だからこの金庫の中に書類を隠したのよ。ここなら安全だからね。
」

「ううん、でも今更になって取り出そうとした理由は？世界征服で
も始めるのか？」

「・・・違うわよ。他の二人がその魔方陣を試したいの。それが
原因で毎朝毎晩毎日けんかになってしまうのよ・・・・。あの書類
が本物かどうか確かめたいって言ってたわ。」

「ちなみにあの二人が試したい事って何だ？」

「……力と美っていったけどそれを信用できないわ。」

ごめん、聞くだけ無駄だった。まあ、本当だということにしてそれはおいといてとりあえずこの書類をこのままに金庫に入れておいたほうが良いのではないだろうか？

「なあ、ここに入れていたほうが安全じゃないのか？こうしておけば誰にもとられないわけだし……。ここ、三つのコインがないと開かないんだろう？」

「……はたしてそうかしら？もしかしたら私の思いつかないような方法で上の人たちもしくは私の姉妹が書類を手に入れてしまったらどうするの？目も当てられないわ。」

「でも、だしたところで変わらないんじゃないのか？襲われると思うぞ？」

「確かにそうだけど……返り討ちにすればいいことよ。」

ネイがそういったところでどこからか爆発音が聞こえてきた。階段のほうからだ。

「……どうやら今日が私の姉妹の書類奪取作戦の日にちだったみたいね。迂闊だったわ。」

とても冷静に呟くネイだったのだが俺としてはうかうかしてられないような状況だ。むう、俺はどうすればいいのだろうか？ネイは悪い人ではなさそうだ。

悩んでいる俺を見てネイは言った。その目は静かで冷えているみたいでもあった。

「あなた、この書類を守りたいのならあの二人をどうにかするべきよ。どうやら貴方にこの魔方陣が書かれた書類は必要ないみたいだからね。」

「まあ、たしかに俺は要らないけどな。」

「あの二人がどこから攻めてくるかはわからないわ。できれば手伝ってもらえるかしら？」

差し出された右腕に困って俺はローザのほうに視線を向かわせた。困ったな。

「マスター、今の私たちはお手伝いさんですよ。ご主人様が言うことは聞くべきではないかと思えます。ですが私のマスターは貴方です。お任せしますよ。」

「……そうだな。俺がやることはきまっているのかもしれないな？」

先にローザがネイに頭を下げ、俺もそれを真似た。不器用だったがしょうがない。

「……感謝するわ。悪いけど二人には悪役になって欲しいの。」

「どういうことだ？」

「そうね、一応この書類をもって逃げてくれないかしら？ 場所は……」

俺に書類を見せて彼女は作戦の説明をしてくれた。

簡潔に説明するならば俺とローザがネイをこの場で倒したような感じ（壁に張り付け）にしてフォルスとティフルが来たら二人を強引に倒して脱出。それ以後はネイに教えられた場所へと逃げる。勿論、彼女は残って俺たちを追ってくるそうだ。ちなみに彼女の芝居がばれてしまったら大変なので彼女は当然俺たちに本気で襲い掛かってくる……さて証明終わり。

「あの二人が来たようね……」

あらかじめ説明も終わり俺たちがネイを壁にイモリかヤモリかかべちよろのように貼り付けるとちょうど噂をしていた二人がやってきた。俺とローザは悪そうな顔をして二人に笑いかける。まあ、ローザの顔は元から怖いから大丈夫だろうな……って変な顔だな。

「……ローザ、ばれたぞ。」

「そうですね、ニヤニヤ。逃げましょう、マスター、ニヤニヤ。」

ローザの演技力がしょばいことに俺は内心呆れつつも呆然としているティフルとフォルスに向かって魔法をぶつけた。そりゃま、盗ろうとしたものを目の前で盗られたので唾然としていたのだろう……あっという間に俺とローザはその場所を駆け抜けていった。

「ローザ、一応あの扉を壊しておいてくれないか？一発大きな奴を頼むぜ？」

通りぬけてきた黄金の扉を指差して俺は隣を走っているローザに頼むが顔が怖い。

「合点承知ですぜ、マスター。ニヤニヤ。任せてください、ニヤニヤ。」

いや、何もここまでそんな変な顔しながら答えなくても構わないのだが・・・と思いつつもローザは早速行動を起こした。顔はニヤニヤ目は半分つりあがっていて完璧に悪だ。

爪を黄金の門へと向けるとローザはどこから出したのだろうか・・・ミサイルをぶっ放した。無尽蔵なのか知らないがミサイルは何発も何発も発射されている。一発？

「ストップ！！撃ち方やめえ！！」

「了解。ニヤニヤ。」

すでに黄金の門などどこにも存在していないようで・・・彼女たちは完璧に生き埋めとなってしまった。しまった、やりすぎたかもしれない。さて、責任は命令した俺だろうか？それとも思った以上に非常識だったローザのほうだろうか？ううむ？

「マスター・・・階段付近に誰かがいます。ニヤニヤ。」

ばたばた走っている俺とローザの前に人影が姿を現した。未だにやけている。

「・・・美奈さんか・・・。」

目の前にはお手伝い長さんが静かに立っていた。その目は俺たちから外れない。

「・・・零時さんローザさん、これは何の騒ぎでしょうか？」

「……すみません、言えないんです。」

「……そうですか……今回は見逃します。ですが、次回はさすがにそう見逃してあげることはできませんよ？ ローザさん、元はそのような表情ですか？」

「ありがとうございます。ええ、ローザの顔はこんなにひどいんです。」

俺はローザを見て嘆いた。俺とローザが横を通るときに彼女は俺たちに尋ねてきた。

「……零時さん気をつけておいってくださいね？ 今度は本気で行きますから……。」

「え……それって……。」

振り返るとそこには誰もいなかった。俺とローザはとりあえず地上に出ることを目標にして階段を駆け上がって行ったのであった。まだニヤニヤしている。

屋敷に鳴り響く警報から逃げるように俺とローザはネイから指定された場所へと向かってとりあえず空を飛んでいくことにした。俺はローザの背中に乗っている。

「マスター夜風が気持ちいいですね？」

「そうか？ 俺はちょっと寒いと思うぞ……って何のんきに言ってるんだよ。ローザ、とりあえず敵がいなか注意しながら飛んでくれよ？ 相手がよくわからん奴らだから処置のしようがない。お、やつ

とニヤニヤ顔が消えたか・・・心配したぞ？」

落ちたら痛いでは済まされないようだったのでローザにおんぶされるようにしがみついている。まあ、自分で空を飛べばいいのだからあまり自信がないから遠慮しておこう。

「へえ、ローザって意外とやわらかいんだな？」

「まあ、女の子ですから。でも、正直言ってさっき（ニヤニヤ）のは失礼なことですよっ」

「ぎゃっ!! 鼻血が・・・。」

「・・・マスター（ニヤニヤ）しっかりしてください!! でも自業自得ですね。」

俺とローザは思いっきり騒ぎながら夜空のつかの間の散歩を楽しんでしまったのであった。く、ローザのにやついている顔がかなりむかつく。くそつたれえ!!

そして、指定されていた山の中・・・といってもほとんど近いところだったのだからその山頂へと降り立つ。

「ええと、ここか・・・。」

公衆トイレの中に入って指定されていたとおりの扉へと入ったのであった。

ローザ…マスターはちょっとおまぬけ人間（後書き）

皆さんのお陰で三十回を突破することが出来ました。いやはや、これからもよろしくお願いしたいものです。さて、予定ではあと二話程でこの章は終わりです。不躰ですがローザファンのかたがいるなら何か一言もらいたいと思います。誰も願ってないかもしれませんが、この作品は形はどうあれ結構長続きさせたいと思ってます。それではまた今度……

ローザ…マスターは怖がり人間ですね。

三十一、

山頂にある公衆トイレにして大きいほうの部類に入るであろう、そのトイレは中に謎のレバーがあり、そのレバーをタイミングよく五回押すと水洗トイレが移動（天井に消える）を開始し、そのしたには階段が出現した。とんだ秘密基地だ。いや、忍者屋敷か？

「マスター、この中に入ればいいんですよね？はじめて真のトイレの姿を見ました。」

「ああ、俺もはじめて真のトイレの姿を見た気がするぜ。さて、指定されたとおりここに来たからな。とりあえずこの下に行けばそれでいいんだろ？間違ってはいないだろう。」

なんとなくトイレの地下に行くのは抵抗があったのだがここは目をつぶろう。

「マスター、そっちは出口ですよ。」

「だって、トイレの地下に行きたくないんだもん！きつとうん〇の化け物が……。」

「子どもじゃないんですから……。それにう〇ちの化け物ではありませんよ。」

ローザに押されるような感じで俺は渋々階段をおりていったのであった。

建物1階分の階段を下りたぐらいに広いスペースが広がっていた。

TUGと仮にしておこう。いや、さすがにちよつと臭うわ。

「うわあ、ここで人間の体から排出される老廃物が処理されるんですね。ある意味、聖地？」

「いや、違うんじゃないか？ここは単なる地下だろう？○んちの聖地はここじゃない。」

換気のダクトなどが通っていたり上のトイレは汚らしいがここは清潔感があふれている。ちよつと臭うがな。蠟燭がともっており、もしかしたら誰かがいるのかもしれない。

「壁も丈夫みたいですわね。私たちが暴れても問題ないみたいですよ？暴れます？」

「暴れてどうするんだよ？でも、兵器でも作ってんのかな？うん○爆弾？」

大きな場所に出たら待っていて欲しいとネイに言われていたので勝手に動かないことにした。何があるかよくわからないので気をつけたほうがよさそうだ。

俺とローザが雑談をしていると奥のほうから誰かがやってくるような音が聞こえてきた。

「・・・マスター、誰かきます。うん○お化けでしょうか？」

「言われなくても音を聞けばわかるさ。ネイだいいな・・・いや、うん○お化けかも？」

「そうですね。やっぱりう○ちお婆けかもしれません・・・恐ろし

いんですね。」

コツコツ・・・といった靴の音が響きそれがだんだんと近づいてきている。この音をどこかで聞いたことがあると思えばそれは俺たちが先ほどまでいた屋敷で聞かれる音だった。

「・・・どうやら美奈さんの様だな。よかった、○んちおばけじゃなくて・・・。」

俺が呟くと蠟燭の明かりが皆さんの顔を映し出した。ちゃんとした美奈さんだ。

「・・・早速ですが、零時さんとローザさんにはお仕置きです。」

肩からはどのような原理でくっついているのか知らないがミサイルが・・・そして右腕には紅く光る刀、左腕には蒼く輝く刀が握られている。サブアームという奴だろうか？背中からは機械の腕が伸びてガ○ダムのビームライフルが握られていたりもする。よくよく見たら美奈さんの目が赤く光っているような気がしないでもない。そして、彼女が俺の肩辺りを見ていたのでそこを見ると赤く光っている。レーザーポインター？

「・・・さて、お仕置きです。」

「ローザ！！（よかった、内心うん○お化けかと真剣に悩んだ俺が馬鹿だった。）」

「了解！！（よかったです・・・てっきり『鋼鉄ウン○丸』でも出てくるかと思いました。）」

彼女が飛ばしたミサイルランチャーをローザがバルカンを発射して落とした。といっても俺には目の前で

「ダダダダ・・・」

「ボカーン」といったやり取りしか見えていなかったのだが・・・俺は今のところただたっているだけだ。

とりあえず俺はローザの影に隠れるようにして後退した。ううむ、美奈さんが言っていたことを思い出すぜ。こりや本当に洒落にならない。なんで強いんだ？

そんなことを思いながら俺は美奈さんを鎖で縛り上げた。バックパックらしきものも縛り付ける。ミサイルは危ないのでつなげられている部分から切り落とした。刀も危ないので取ろうとしたのだが・・・彼女はにこりと笑って俺に告げた。

「・・・甘いですよ、零時さん。」

彼女はそう言って驚く俺の目の前で鎖を引きちぎった。・・・いやあ、ものすごい力の持ち主だ。実は毎日ジムに通ってマッチョを目指していたりするのかもしれない・・・。

「み、美奈さんって機械だったんですね？」

「ふふ、ちょっとした人形ですよ。機械じゃありません。」

俺の思い過ごしたようだ。さて、流石にぼろぼろに壊れてしまった背中のバックパックを美奈さんは自ら取り外して今度は二刀流の刀を俺に向ける。

「・・・一騎打ち、好きですか？私は大好きです。」

これは間違いなく俺に挑戦状を突きつけているに違いない。いや

あ、個人的に複数対一がお好きですが・・・まあ、ここはそんなことを言っている場合ではない。

「・・・・わかりました。（むう、この人武人か？）」

俺は右腕を振って水の剣を作り出した。念のため、左腕にも同じものを作り出す。

「美奈、参ります！！その力、私に見せてください！！」

背中の重りが外れて軽くなったのか知らないがすごいスピードで俺に突っ込んできた。振り落とされた刀を何とかしのぐ。というより、慌ててかすただけだったが・・・・。

「マスター！！今援護に参りますよ！！」

「・・・・ちょっとだけ見てろ！まだ手を出すなよ！！やられそうになったら助けてくれ！！」

既にやられそうだと思われても仕方ないが罅迫り合いとなって俺と美奈さんの視線が交差する。く、この人てつきり普通の人だったと思ったんだが・・・・。

「・・・・いやあ、平和な世の中にまさかこんな人がいるなんて・・・・。」

「私、人じゃありませんからね。ふふ、私の本当のご主人様を守るにはまだまだなんですよ。私の夢はご主人様を守ることです。彼は優しい人ですから・・・・。」

「く、こっちだって負けられないんだ!!」

はじき、はなれ、また競り合う・・・何度か繰り返していくうちにとうとう俺の頭の中が壊れ始めたのか相手の持っている刀の意思が聞こえてきたような気がした。

紅

「いやあ、結構やるね。正直あの化け物天使並の実力者がこんな平和な世の中にいるとは思わなかったよ。結構前に戦った『鋼鉄うん〇丸』といい勝負だ。」

蒼

「そうですね、まさかここまでとは・・・とりあえず今回は引き分けにしておいたほうがよさそうです。そろそろ我々の体力がレッドゾーンですからね。」

そう聞こえてきたと思うと俺からぱっと離れた。『鋼鉄うん〇丸』ってなんだろう？

「・・・残念ですがここまでのようですね。この子達の体が持たないようです。ちょっと見くびりました。すみませんが私はこれで失礼させてもらいます。」

右腕の刀で何も無い空間を縦に切り裂くと啞然としている俺たちの前から姿を消した。

「マスターあの人一体全体何者だったんでしょう？」

「さあな？とりあえず普通のメイドさんじゃないのか？いや、武人かもしれないな？」

なんとなくそこは漠然としていて必死になって相手の刀を抑えていた俺にとっては無駄に時間を削られたただだった。

「マスター、また誰かがこちらに來ているようですよ？本当に『鋼鉄うん〇丸』？」

一体全体『鋼鉄うん〇丸』ってなんだろうか？ローザの指差す方向から再び音が聞こえてきた。俺は剣を構えローザも右腕を暗闇の奥のほうへと向けていた。

「・・・何をやっているの？右手をこちらに向けて……………」

現れたのはネイだった。よかった、もうちょっとで魔法を本気でぶつけているところだったぜ。先制攻撃は卑怯ではなく兵法なのだよ。勝てばそれで結構。負けたら元も子もないからな。いやあ、正直俺もその・・・びびってます。

「今日の捜査は打ち切られているわ。今のところ安全よ。」

それなら今日はもう大丈夫だろう。俺は安堵のため息をついてローザはつまらなそうなため息をついた。そして、俺を見上げて呟いてくる。

「マスター、ランナーズハイってますか？」

「ああ、走ってたら気持ちよくなる奴だったかな？」

「そうです、私の場合だったらミサイルをぶっ放したりしていくうちに段々と気持ちよくなるんです。できたらこのまま撃ち続けたい

なつて……」

「ネイ、今日のところはもう寝ることにするがこれから俺らはどうしたらいいんだ？」

「無視しないでくださいよ。」といつてくるローザを無視して俺はネイへと問いかけた。今日はいろいろあつて疲れたのだ。特に、『鋼鉄うん〇丸』とはなんだと考えたほうだな。

「とりあえず寝込みを襲われないようにその書類をきちんと持ってきてくれないかしら？」

「偽の書類なのに？（やはり、ここにはなにやらうん〇丸の化け物が？）」

「いいかしら？その偽の書類をなくしたらいざとなったときに何もできないと思うの。」

つまり土壇場になつて交渉のために使用するということなのだろうか？さすがにいろいろと考えているんだなあ……。

「悪いけど今日は床で寝てもらうわ。明日はその書類の内容を読んでくれるかしら？中身は本物と大差は無いからね。私はあまり見る暇が無かつたから……。」

そういつて彼女は姿を消したのであつた。つまり、きちんと見たことはないのか？

「本物と変わらないなら確かに大事な書類ですね？あ、だからマスターにまかせて寝るときも盗られないようにっていったのですねえ。」

知りませんでした。」

ローザ…マスターはいい人間ですね。

三十二、

次の日の朝、俺は太陽の当たらない地下で目を覚まし凝り固まった体をぎこぎことならしていた。パンツの中に違和感があったので手を入れて見るとなんと、書類が出てきた。俺、寝るときに入れたかな？まあ、いいか……。とりあえず書類を蠟燭の光に当てて初めてその内容をじっくりと眺めることにした。

「……。しかしまあ、この書類のどこに世界を支配するような魔法陣とやらが書かれているんだろうか？ううむ、見るのなんだか面倒くさそうだな。」

数学のノートのような感じがしてならないのだが……。まあ、それはいいとしてその書類の中を読んでいくうちにあることに気がついた。

「……。この書類に記されている魔法陣はどれかを使用すればコピーされている魔法陣も二度と使えないようになります……。？これ、コピーできたのか？」

俺は引っ付いてきているローザをはがすような感じでローザの体を押していたのだが唐突にローザが目を覚ました。瞼を擦っているようだ。俺は先ほどから書類の中に視線をおとしているので気がつかない。

「マフター、ファナに指がふあふあってまふう！！」

「あ、すまん。」

ローザの鼻の穴から指を引き抜いてローザの服で拭く。汚いなあ・
・・。

「うわ、汚いじゃないですか!! 自分の服で拭いてくださいよ!!」

「そういうなよ、お前の鼻の中に指を突っ込んだ俺の身にもなってくれよ。」

俺はローザの鼻頭に人差し指をくっつけてつついてやった。

「・・・マスターどうやら魔法成功してたみたいですね? もう、鼻血でてませんよ!」

「え? 何だって?」

俺はローザの目の前で人差し指を止めて首をひねる。魔法?

「ほら、その書類の中に『失敗した魔法を解除する魔法』って書かれたのがあったじゃないんですか! ええと、寝る前に試してみようって言い出してマスターは魔法を発動したんです。それでそのままマスターは眠ってしまったんですよ? 書類は私が一番大事なところに隠しておきました。大丈夫です、見てませんから。」

なんて余計なことをしてくれるんだ・・・いや、それはおいといて・・・

「・・・ローザ、魔法が成功したってどうしてわかったんだ?」

「ほえ? だって私を触っても鼻血、出てませんよ? 前は私に触れた

だけで鼻血を出していました。今では一リットルも出てません。」

「一リットルも出たら貧血起こしそうだな・・・まあ、たしかに・・・なるほど・・・。」

「ということは・・・この書類は力を失ってしまったのか・・・でも・・・そしたら・・・」

「あ、あのう・・・なんだかマスターがとても怖くなった気がするんですけど？ええと、私何か気に障るようなことを言いましたか？」

「くくく、その逆だ。」

遂に・・・遂にこのときがきたのだ！！俺は右手にドライバーを持ってローザに笑いかけた。まあ、本心は別のところにあるとすれ、ローザは・・・

「ローザ、どうやら俺の女の子を触ると鼻血が出るのが治ったらしいからな・・・。」

ローザはぎくりとして俺から離れ始めた。

「ええと、解体ですか？」

「そうだ。これまで我慢していたが今となってはローザが色仕掛けをしてきても俺の鉄分が急激に減少することは無い。くくく、これまで流されたヘモグロビンの敵をとってやるぜ。」

「ま、マスター・・・。」

「可愛く言っても駄目だ。俺にはすでに色仕掛けなど効果は無い。」

「ええと、任務は・・・？」

「却下だ。治った今俺にするべきことはお前を解体することぐらいだな。ねじ一本にしてやろう。」

とうとうローザの背中が壁へと触れる。覚悟を決めたのかローザは目をつぶった。ふむ。

「・・・ええと、わかりました。マスターが好きなようにしてください。」

「・・・。」

「しょ、しょうがないですね。マスターにとって私は単なるお手伝いですから・・・。」

「・・・。」

「でも、マスターが望むなら・・・。」

本当に覚悟を決めたのだろう・・・。ローザは俺にこういった。

「ええと、できればもうちょっとだけ一緒にいたかったとおもいます。」

そこまでローザが言って俺はため息をついた。やれやれ、ここまでだな・・・。

「冗談だ・・・全く、さっさと逃げ出すなり何なりしてくれればよかったんだがな・・・。」

「え?」

「これを見てもいれればわかるぞ?ま、今から逃げ出しても遅くない。いや、逃げろ。」

俺は書類をローザに手渡してその場に座り込んだ。やれやれ、ローザでも責任を負わないように自分なりに(半分本気)芝居をがんばってみたんだがとんだ大根役者だったな。

「ええと、それじゃこの書類の意味は全くななくなってしまったんですか?」

「そういうことになるな。ローザ、とりあえず今から逃げても大丈夫だと思うぞ?開発者のところに行って俺に分解されそうになったとでも言って来い。」

俺はローザとは反対側に顔を動かして呟いた。まあ、少しの間だけだったが仲良くできてよかった。魔法がかかっていなかったら今頃ローザはばらばらだな。

「マスターはどうするんですか?」

「ここで籠城を決め込む。なあに、責任は一応取るつもりだ。俺が間違っつつかちまったんだからな?つかちまった俺が悪いのであってローザは悪くないはずだ。」

「でも・・・マスターがトイレの水で水攻めにあったらどうするん

ですか？」

「それは却下だ。それをしてくる奴は人間じゃない。まあ、そんなってもしようがない。」

「・・・大丈夫です、私がなんとかしてでもマスターを助けます。とりあえず・・・正直に話したらどうでしょうか？」

ローザは俺の右手をちよつとだけ握って言うてくれたのであった。

「・・・わかった。試しに籠城をやってみるか。」

振り返ってローザの頭をなでてやった。なんとなく、そうしたい気持ちになったからだ。

「・・・でも、本当にマスターに分解されてもよかったんですよ？」

ぐりぐりなでてやっているローザは泣いているようだった。どうやらあのときの俺の顔はそれなりに怖かったようだな。（半分本気。）

「悪い悪い、ちよつとしたジョークだ。俺が戻せないのに分解するわけないだろ？」

「・・・そうですね。やっぱりマスターは私が思っているような人でした。」

ローザはそういうと俺にもたれかかっていた。その体がとてつもなく震えていることに俺はさすがに罪悪感をはらえなかったのだった。

「・・・ま、マスター・・・私をいじめないでくださいよぉ・・・
うわぁぁぁん・・・」

ローザは涙を流して俺の服をぬらしていた。俺は年下が泣き出してしまったときの対処を知らない。いや、一度は瑞樹の妹が泣いているのを止めたことはあったのだ！だが、それも何年も前のことなので今では忘れてしまった。

「・・・ごめんな、ローザ。俺が悪かった。」

「・・・うえっ・・・私は・・・マスターを・・・うぐっ・・・助
けます・・・。」

やることないので俺はローザが泣き止んでくれるまで頭をなで続けていた。

それから数十分後に完全にローザは泣き止んだ。涙の筋が残っているがかまわないようだった。俺にしがみついているが目を合わせてくれようとせずそっぽを向いている。

「悪かったって。」

「・・・マスターそれは心のそこから言ってますか？」

「・・・嘘だと思ってるのか？」

「・・・マスター、芝居うまいからまた騙されたらたまりませんから・・・。」

いやあ、未来のロボットかどうかはよく知らないが俺の芝居も大根ではないのだなあとのんきに思っている場合ではない。

「本当だ。悪いと心のそこから思ってるって。わかった、これをお前にやる。」

「……………わかりました。マスターを信用します。」

あっさり信用しやがったな……因みに俺がローザに渡したものは先程芝居で使った小道具のドライバーだった。小さいころに母さんに買ってもらってずっと使ってきたものだ。自転車がちよつと壊れてきたときもこれを多用したものだ。ローザは笑い、言った。

「……………今回はこれで我慢しますが次回はもうちよつといいものじゃないと駄目ですよ？」

零時：ローザは字が雑な機械だな。

三十三、

機嫌の直ったローザとこれからどうするべきかと話し合っているとネイがやってきた。

「おはよう、いい夢は見られたかしら？当然のように書類は盗まれていないわよね？」

「ああ、このとおりここにあるぞ？」

俺は書類をネイに渡した。それでとても申し訳ないのだが……黙っていた。

「あの、この書類が使えなくなっちゃえばいいんですよ？」

「そうね、そうなれば一番いいんだけどね……。燃えない紙だし……。」

「それならマスターがもう使ったから大丈夫です。あの、ここに書かれていることを読んでくれませんか？」

ローザがネイに指摘してその間俺は黙っていた。犯人は俺だ！！

「……ふうむ、そうだったのね……。それなら適当に何かに使ってしまうばよかったのかもしれないわ。まさかとは思うけどよからぬ魔法をつかったんじゃない？」

「大丈夫だ……。ええとだな、失敗した魔法の効果を消すために使

わせてもらった。」

「これで金庫の中にある書類も意味がなくなったようね。でも、本当にこの書類に書かれている魔法は使用できないのかしら？」

書かれている呪文を呟いてネイは右腕を振った。だが、何もおきない。

「・・・どうやら書類のとおりになったみたいね。感謝するわ、剣山 零時。」

「ははっ、俺としても無条件で治ったんだからよかったぜ。」

「でも、どうやって帰るつもりなんですか？任務、失敗したことになりますか？」

「そ、そうか？ううむ、それならどうしたほうがいいんだろうか？」

「それに関して大丈夫じゃないかしら？その書類を渡せばそれで終わり。大体あなたたちは書類を持っていった容疑者を探しに来ただけだったでしょ？それなら書類の内容もしらないってことにしておいて無視を決めこんでおけば大丈夫。何かあったら私の所にきなさい。相談を聞くことぐらいなら出来ると思うからね。」

「でも、あの二人はどうするんだ？ええと、それに今あの二人はどこにいるんだ？」

「そうね、適当に嘘をついておくわ。あの二人は今頃病院じゃないかしら？黄金の門が壊れたときに気絶してしまったから書類についての記憶、消しておいたわ。」

微笑むネイを見て俺はため息をついた。はぁ、よかった。

「あ、最後に聞きたいんだが・・・お手伝い長さんの美奈さんって一体、何者なんだ？」

俺が尋ねるとネイは不思議そうな顔をした。首をかしげて考えているようだ。

「・・・？それは誰のことかしら？そのような人、いないと思うわよ？」

「ええと、それは・・・」

どんな人なのかをローザと一緒に身振り手振りで教えたり絵に描いて見せたりといろいろとやって見せたのだがネイは知らないようだった。

「・・・そんな人はいないわ。私が資産を管理しているからそういうことにもきちんとしているし、どんなお手伝いさんががんばっているかとか・・・とりあえずお手伝い長さんの顔ぐらいいは覚えているつもりだけど？私の記憶の中にはいないわね。」

ということはこういうことなのだろうか？俺とローザは首をひねるだけだった。

そして、俺とローザは地下室を壊してしまったので今回得たものは書類だけだった。その書類も見かけ上すごいものだが中身は使用不可の要らない物だ。俺としてはさらに思い出のドライバーもローザに渡してしまったのだ。疲れた体を動かすのもつらい。

「マスターなんで沈んでるんですか？」

「……人っていうのは失ったものが多ければ多いほど沈むものなんだ。ローザ、今回の俺はかなり損をしている。得たものは何も……ドライバーもローザにやったし……。」

そこまでいって思い出したのだが俺はポケットに入っているコイン。なにやらあの重さは他のコインとは一味違っていた。あれを売れば……そう思って右手を突っ込んだのだがそこには紙が入っているだけだった。なにやら電話番号が書かれている。

『このコイン、貴方が見つけてくれたのね？感謝するわ……たまに連絡してくれると嬉しいわね。初めての友達としてお屋敷に招待して差し上げる。』

俺の悲しみは再び重くなったのであった。く、いつの間に盗られたのだろう……ああ、俺の心は深海まで止まらないぜ？そのまま地球の中心へ……。

「で、でも……。」

俺の手をとってローザは笑ったのであった。く、そこまで人の不幸がおいしいか？

「人の不幸はローヤルゼリー」ってやつか？全く、ふざけてやがる！！

「……今回の出来事でマスターは私の心を得ましたよ？」

「……そんなのいない。」

「ひ、ひどーい!!」

ローザがうなりをあげて振り落としてくる腕をすんでのところで
交わしながら俺は走り出したのであった。

そして、それから数時間後・・・俺は店長に書類を渡した。

「ご苦労、この書類を誰が持っていた？やはりあの三人組だったかい？」

「いえ、三人組ではありませんでした。三人のうち二人は病院にいるそうです。」

「その情報は本当かい？」

事実だ。持っていたのはネイ。他の二人はもってもしなかった。

「ええ、本当です。」

「そうか・・・それはよかった。まだ信憑性不明の書類だからな本
物かどうかはわからんが・・・調べてみることにしよう。あ、ロー
ザ君はお迎えが来ていたぞ？店内で待たせているから行って構わな
い。零時君も行ってきたまえ。」

俺とローザは店内に座ってひとりでチョコパフェを食べているお
っさんに話しかけた。

「・・・よお、久しぶりだな零時。元気そうで何よりだ。じゃ、
ローザ、帰るぞ。」

「・・・わかりました。」

悲しそうに呟くローザ。俺はあえて何も言わない。言うべきことも無いからな。

「・・・ローザ、きちんと零時に連絡先ぐらい渡してやっておかないとさすがのこいつでもわからないと思うぞ？ほら、紙とペンをやるからさっさと渡せ。俺は先に外で待ってるからな？」

そういつてあつという間にチョコパフェを食べ終わると親父は外に出て行った。ローザは急いで渡された紙に番号を記すと俺に渡したのであった。顔が嬉しそうだった。

「・・・マスター、いつでも・・・いえ、毎日呼んでください！私、どんなときでもマスターを助けます！！それじゃあ・・・お元気で！！」

「ああ、またな・・・。」

会おうと思えば俺はいつでもローザに会えるのだろう・・・俺はローザが渡してくれた電話番号を見てうなってしまった。

「・・・何を書いているのかあんまりわかんねえな。」

ローザは非常に字が雑だったのだ・・・しょうがないな、とりあえず家に帰っているいろいろとかけてみるか・・・間違い電話になったときは素直に謝っておこう。

俺がひそかな決意をしていると後ろから声をかけられた。

「零時。」

「久しぶりだな、セレネ、ソーラ、ノワル。」

俺の後ろには微妙に顔色が悪い三人が姿を現していた。俺は口ごもってしまった。

「……今日は非常に具合が悪いので先に家に帰らせてもらいますね？皿洗いがずっと続いていたので……。」

「……お皿、見るの怖い。」

何があったのかあえて聞かないが俺は黙って三人を見送った。俺はまだ店長に聞きたいことがあったので店内に残ったのであった。とりあえず店長の営業時間が終了するのを待って俺は店長室の扉を叩いた。

「……どうぞ、入って結構だ。」

「失礼します。」

俺は扉を開けてその場で立ち止まった。

「……その書類、一体全体何なんですか？」

「……知らないのなら知らないほうが無難だ。」

「そうですか……それなら、今日は帰らせてもらいます。」

俺はそういつて店長室を後にしたのだった。これでは何も変わらない気がしないでもないがとりあえずこれで俺がやるべきことは

たしたのではないのだろうか？

一人で帰る帰り道・・・俺は鼻歌を口ずさみながら自宅へと向かっていったのであった。今思えばあのティフルとフォルスは出番がとても少なかったな・・・。

「・・・まあ、久しぶりって感じがするけど・・・いいかな？」

家に入って自室に入ろうとしたのだが・・・やめて俺は電話の受話器を手を取った。勿論、かける相手は決まっている・・・このへたくそなほうの電話番号だ。

「もしもし・・・？あ、すみません・・・佐藤さんでしたか・・・人違いでした。」

零時…ローザは字が雑な機械だな。 (後書き)

さて、近頃は安定して更新できている気がする作者の雨月です。さて、今回でこの章は終わりですがどうだったでしょうか？おもしろかったのなら幸いです。次章は平凡な？日常になっていく予定です。

第五章 日常と言う何とか。(前書き)

新しい章です。どこが新しいかと聞かれたら困ります。

第五章 日常と言う何とか。

三十四、

とある日の放課後、俺は久しぶりに一人で帰宅していた。他の三人は先生に呼び出されてしまった。(セレネ補習、ソーラ委員会、ノワル部活の事)俺は特に何も用事が無かったのでそのまま帰っていたのだがそれが問題だった。ちなみに俺の問題ではなく、あの三人の問題だった……まあ、防げるか否かと聞かれたら自信が無い。

家に帰り着き、一人でベッドに寝転がっていると玄関の扉が開く音が聞こえてきたので誰かが帰ってきたようだったのだが、母さんともうちょっと遅い時間帯に帰ってくるのでさしずめセレネたちだと思っで一階に確かめに行ったのだが扉は開いていなかった。どうやら勘違いだったようだ。もしかしたら泥棒だったかもしれない。

「マスター、遊びに来ましたよ?どこにいるんですかあ?トイレですか?ぶりぶり?」

二階から今度はローザの声が聞こえてきた。なんとなく、下ネタだ。

「……?」

ローザはいつも二階の窓から侵入しており、玄関から来たことなど一度も無い。俺は思い過ぎだったとしてローザの相手をすべく、ローザの元へと向かったのであった。

「ローザ、お前も暇なんだな?毎日俺の家に来てるし……。」

「はい！マスターのためならたとえお使いを命じられていても暇を作りますよ。」

ニコニコしながらそういうローザを見て俺はちょっとだけため息をついた。

「・・・ところで、あの三人組は今日はいないんですか？珍しいですね？」

部屋をきよろきよろしながらローザは俺に尋ねてきた。

「ああ、今日は三人とも用事があるそうだ。そうだなあ、まだ帰ってこないんじゃないかな？」

「ふーん、そうなんですか。」

自分から聞いてきたくせにどうでもよさそうな感じでローザは呟いた。

「二人きりですね♪」

「ま、そうだな。でも、それがどうかしたか？」

「・・・はあ、もういいですよ。ところで私のほかにも誰かこの家にいたのですか？この家に侵入したときにセンサーに生体反応をマスターのほかにもう一人感じ取ったのですが？」

やっぱり自分でも侵入したって自覚があるんだな・・・それはいいとして、機械のローザがそういうのならやっぱりだれかいたのだろうか？

「今、この家の中にいるか？」

「・・・いないみたいです。既にこのエリア・・・マスターの家の中にはいませんね。」

俺が持ってきたオレンジジュースを飲みながらそんなことを呟いた。ちよつと心配になった俺はローザに告げた。

「ちよつと気になるから外見てくる。」

「そうですか？まあ、泥棒さんだったら確かに大変ですからね。私も同行しますよ。」

こうして俺は形態移行したローザ（重武装）とともに階段を下りていったのであった。玄関付近でローザは砲撃姿勢をとり始めたのであった。

「・・・扉の前に何かがあります。」

「お客じゃないのか？」

「・・・わかりません。マスターがあけてお客さんじゃなければ撃ちます!!！」

そうしたらお客ではない者の前にいる俺も撃たれるのではないのだろうか・・・そう思いながらもローザを信じて俺は扉を開けた。

「・・・やあつと出てきた!! 零時、何度も扉を叩いたんだから出てきてもいいでしょ!!」

俺の目の前にいたのはセレネによく似た女の子であった。

「……ええと、君はもしかしてセレネの妹さんかな？」

俺はそのこの目の視線にあわせ、尋ねる。

「ちがうよお！！」

「マスター、妹じゃなくて従姉妹ではないのでしょうか？もしくはセレネさんの隠し子とか？」

「……へえ、そうなのか？」

「そ、そんなことあるわけ無いじゃない！！！私は……」

「ええと、マスター……今の冗談だったんですけど……本当の事を言おうとセレネさん本人です。」

「……セレネ、お前牛乳を取らなくなったのか？牛乳の仕返しかもしれない。ちなみに言っておくが牛乳だけを飲んでも大きくなるんだぞ？カルシウムは骨を硬くしたりイライラを押さえたりするんだ。俺の知識では身長が伸びるとは聞かない。」

「うんちくはいいから、助けてよお！身長が急に小さくなったんだから歩きにくい何の……」

俺はセレネをひょいと持ち上げてやった。

「これでいいか？」

「……うん。」

まるで借りてきた猫のように大人になったセレネにローザは尋ねた。

「あの、どうしてそのような文字通り幼児体型になってしまったんですか？」

「……ええとね、補習をうけてたらいきなり後ろから魔法をかけられて慌てて追いかけてたんだけどこの家の近くで見失ったのよ。」

「ふうんそれで……」

「まてーいー!!」

俺が何かを言おうとするとどこかで聞いたことのある誰かの声なのだがあまりろれつが回っていない声が聞こえてきた。ああ、ノワルの声に似てるな……。

「……今の声、ノワルにそっくりだったな？」

「……そうですね、どうやらこの付近にいるようです。」

俺の家の前で黒い衣服を纏った女の子がこけた。だが、そのこは再び立ち上がって目に闘志を燃やしていた。

「くーっ！こけたぐらいで泣かないわ！！明日、待ってなさいよ！！」

どう見たって涙を流している強がりそうに元氣そうな少女は立ち上がらなかった。俺はセレネを下ろしてそのくに近づいた。

「・・・あ、零ちゃん！」

「・・・ノワルか？」

「さすが零ちゃん！小さくなっても私とわかるんだね？それはいいとして、悪いけど起こしてくれないかな？なんだか、体があんまり言うこと聞いてくれなくて・・・。」

俺はとりあえずすりむけているノワルのひざ小僧を治療して立たせてやった。

「ふう、ありがとう。」

「ところで誰を追いかけてたんだ？」

「ええとね、部活してて先生を探しに行ったら廊下の途中で不意打ち食らっちゃって・・・」

そこまでノワルが言うとな度は空から声が聞こえてきた。

「・・・どうやら零時君は無事だったようですね。安心しました。」

上にはかばんに乗って浮いているソーラがいた。ふよふよと降りてくるとちょうど俺と同じ目線のところでとまる。

「ああ、魔法で最初から飛べばよかったんだね。」

ノワルもソーラを真似てもとの自分の身長ぐらいのところに飛び上がる。(セレネもやろうとしたが無理だったため俺が抱えてやることとなった。)とりあえず家の中に入り、緊急会議が行われた。

「ええ、議長をやらせてもらうのはこのソーラです。本日、私たちは学校に残っていたら襲われました。」

「誰に？」

「紫色の羽をもつ天使のような感じの奴です。どうやらセレネとノワルは背後からの奇襲だったようでしたが私のときはふと振り返ったときに顔が見えたので姿を見ることが出来ました。」

「ふうん？それで、知り合いだったの？」

ちなみに俺の知り合いに紫の羽を持つ天使のような奴は一人もいないことを言っておこう。

「いえ、学生服を着ていましたがこの学校のものではないようです。その後、私も小さくされてしまいました。無念です。」

そういつてソーラはため息をついた。他の二人も同様にため息をつく。

「ノワルが追いかけていたのは？」

「近所の犬。私にいたずらしようとしたから魔法で追いかけてたの・・・あれ？なんでみんながっくり来たような顔しているの？」

第五章 日常と言う何とか。(後書き)

さてさて、今回の話はどうか？小さくなった三名の未来はいかに・・・と、それはいいとして次回はいつもより次数が増えると思います。では、忙しいのでまた・・・。

零時：紫翼の天使は……小さい子が好き？

三十五、

あれからやく三十分が経った。特に事態に変化は無かったのだが・

・・・

「……マスター、とりあえず児童相談所に相談しませんか？」

「違うだろ？まずは……警察に電話してから児童相談所に相談するべきだ。」

「……それも違いますよ。」

「零時、まじめに考えてくれない？私、小さいままなんて嫌よ？」

「とりあえずその天使を探したほうがいいんじゃない？」

ノワルの意見に皆賛同し、とりあえず俺とローザ、ちび三人組でチームを組むことにした。

「うう……まさか機械にじゃんけんで負けるなんて……」

「実力ですよ。というよりセレネさんがへばいだけです。」

こうして俺とローザは彼女たちを小さくした犯人探しを始めたのであった。

「……でも、どうやって探すんだ？」

「とりあえず私のセンサーに感じた同等のものを探せばいいと思います。記録に残ってます。マスターは相手を見つけたときにすぐに捕まえることが出来るように準備をしておいてください。天使と言う者が本当に存在しているかどうかはわかりませんからね。」

それから十分後、俺は早速くたびれていた。いや、実際は面倒だ。

「ローザ、もう帰ろうぜ？」

「え、まだ十分しか経ってませんよ？」

「疲れた。というよりもいいんじゃない？別に小さくなくても誰も不便に感じてないと思うぞ？それに、俺も小さくなくてもらったってぜんぜん迷惑掛からんからな。」

俺はそういつて家のほうに歩き出した。ローザも俺の後ろを追い

かけてくる。

「マスター、本当にそのままでもいいんですか？」

「ああ、いいんじゃないか？長生きできると思うからな。」

俺は歩を遅くすることもなく家に帰り着いた。その玄関部分に人がいるようだった。

「あ、お客さんが来ているようですね？」

「そうみたいだな？」

俺は扉の前にいる人物に話しかけた。相手はこちらを振り返る。

「・・・あの、なにか用事があるんですか？」

「ん？ああ、失礼だが君はこの家の人かな？」

鋭い視線に四角のめがねをかけている人物だった。学ランを着ているのでどうやら高校生みたいだ。しかしまあ、身長高い割に体もほっそりとしてはいいない。

「あ、はい。」

「そうか・・・では、剣山 零時君という名前かね？」

「え、ええ・・・。」

「ちょうどよかった。君に用事があったきたんだよ。ところで、そちらのお嬢さんは君の妹さんかね？」

「あ、違います。私はマスターの・・・ええと、その・・・」

もじもじしているローザを無視して彼は言った。

「さて、とりあえず君とそこの君に話しておきたいことがあるんだ。零時君、ここで聞いてくれてもかまわないのだが・・・とりあえず名乗らせてもらいたいと思う。」

そういつてきざまみたいな感じで彼はメガネをついとあげた。

「僕の名前は霜崎 剣治だ。とある高校の生徒会長をさせてもらっている。剣治と呼んでくれて結構だ。」

「あ、そうなんですか・・・。」

「かしこまらなくても結構だ。僕も高校二年生だからね。」

ど、同級生だったのか・・・でもかなり相手からはプレッシャーを感じるぞ？

「マスター、固まらないでください。この人……」

「あ、ああ……ところで、その剣治は何か俺用があるんだろ？」

「実はだなあ、君が魔法使いだと噂を聞いてね……悪いけど僕の言うことを聞いてもらいたいんだ。なに、簡単なことさ……言ったらとおりに実行してもらえればね……」

彼は指を鳴らし、その音に反応するかのように空からセレネ、ソーラ、ノワルが落ちてきた。三人ともつかまっている。ロープでぐるぐる巻きにされている。

「……さて、こんな姿を見なくなったらはやく返事を聞かせてもらおうか？」

ええと、俺個人の意思としては別に三人が小さくなったままでもかまわないのだが……さて、なんと答えようか？

「え、別に小さくてもいいんじゃないか？ほら、小さいほうが可愛いから……」

「そうか、君はこのような三人が趣味なのか？お兄ちゃんと呼ばれたいのかい？いい趣味と思うが……本当にそれでいいのか？」

俺が相手から再び質問されて俺は黙ってしまった。

「れ、零時って小さい子の方が趣味だったの？」

「……おにいちちゃん、どうなの？」

「おにーちゃん！ノワルをたすけてえ！」

「……え、二人ともなに言ってるの？」

「……三人とも黙っていてくれ。話の邪魔をしてもらいたくは無いんだ。」

あいにくだが俺にはそのような趣味は無いな。

「零時、僕としては彼女たちを連れて帰りたいと思うぞ？今は我慢してる。」

「……瑞樹、いつの間に俺の隣に来たんだ？しかも、いつもより目が怖いぞ？」

「あ、本当ですね……ぎらぎらしてます……」

いつの間にか瑞樹が相手を見ていた。その手にはカメラが納まっ

ており、捕まっている三人をカメラで撮り始めた。

「……ふむ、なかなかの友達を持っているな。僕と趣味が合いそうだ。その君、理想の女性は？」

「（舞台は夕焼けで）僕を下から見つめて（さり気無く）右手を差し出してきてくれる子。もしくは朝寝ている僕の上に馬乗りになってほっぺを抑えて『朝だぞっ、お兄ちゃん！』って言ってくれる子だよ。他にも理想の女性像は……いるが秘密だ！」

「ふ、意見が合いそうだな。どうだ、今度僕の高校の近くにある喫茶店で詳しく話し合おうじゃないか？そのときはぜひとも僕のおつきものも連れてこよう。彼も喜ぶ。」

「いいねえ。実にいい。そのときは君のハニーも見せてくれないか？」

「いいだろう。ぜひともそうさせてもらう。」

ちよつと……俺が入り込むのは無理のようだ。俺は二人が友情を育んでいるところを見て固まっていた。

「……さて、零時君はどうかね？」

「うん、零時はどう思う？」

「何が？」

「『機械の擬人化した奴。』」

はもりやがった……。

「ええと、簡単に説明すると機械だよ？」

「あ、そうなのか？ううん、俺としては人型の機械が……いや、ごついのが……。」

「マスター、あの……もうちよつとまじめにやってももらえないでしょうか？」

「ええとだな……？……はっしまった！！」

危ない危ない……もうちよつとで俺もあっち側に行ってしまうところだった。

「と、とりあえず！！剣治の用件がまともなものだったら俺は条件を飲む！！」

「簡単だ。ここに召喚獣を呼び出す大きな扉を作ってくれればいいんだ。出し方はそう念じればいいだけだとおもうのだが？　どうだね？」

「だ、駄目ですよ！！お兄ちゃん！！」

そういうのは捕まっているソーラだった。

「間違っただけ物が姿を現してしまっただけ……」

「……まあ、しょうがないだろ。そうすりゃソーラたちを解放するって言うてるんだし……」

「約束しよう。もしも僕がその約束を破ってしまった場合は君の家に『とってもぷりていなお人形』を送らせてもらう。何、僕は嘘をつかないことをモットーとしている。」

「ほら、こういつてることだし……」

俺は三人に笑いかけて最後にこういった。

「なあに、出てきたら出てきただ。」

そういつて俺は右腕を振り上げた。剣治は近くでそれを見ているし、瑞樹も俺を見ている。三人は間違いなく咎めるような視線を向けてきている。ローザはなにやら考え事をしているようだった。俺は早速念じる。

「……よし、きたああ！！」

俺は右腕を振り落とす。そこに、一つの門が現れた。

「うむ、礼を言おう、剣山 零時君。これで僕は帰ることが出来るようだ。じゃ、約束どおり『ぷりていなお人形』を君に後日遅らせてもらいたいと思う。何か聞きたいことがあるのなら教えよう。」

その門のがかすかに動き始めるのを見て俺はとりあえず口を開いた。

「あんたは一体何なんだ？」

「天使だ。」

「……」

「なあに、冗談じゃないさ。ほかに聞きたいことは？」

「ええと、セレネ、ソーラ、ノワル……あ、その三人を小さく

したのは剣治か？」

「ああ、そうだ。なあに、このまま小さいままってことはない。今さっき解除したらあと一週間もたてば元の大きさに戻るんじゃないか？」

それなら安心だ。俺は口を閉じた。今度は瑞樹が俺の隣に来て剣治にたずねる。

「・・・剣治、“ハニー”と彼女、どっちをとる？」

剣治はかなりかっこいい顔になった。そして、瑞樹を見据えて答えた。

「勿論、“ハニー”だ！！瑞樹は？」

「僕も、“ハニー”だ！！」

最後に二人はしっかりと握手をして自称天使の意味不明な剣治は門をくぐっていったのであった・・・。残された俺は何故だかかなり無駄に疲れたような気がしてならない。

「・・・あの、結局あの人は何者だったのでしょうか？天使とか言っていましたけど？」

「・・・俺が知るわけ無いだろう？まあ、俺としてはあまり関わりたくないような人物だったな。瑞樹みたいな奴は一人で十分だ。」俺は捕まっていた三人を解放し、ため息をついた。

「・・・零時、全く持って今回は軽率な行動だと思うわよ？」

「そうです、私はきちんと危ないといいました。」

「零ちゃん、意外と我を通す人だったんだね？」

どうやらご立腹のようだ。三人の頭から角が生えている・・・。鬼変化？もしかしたら成長して山姥となるかもしれない。うわっ、そしたらきつと小僧を食べるんだ・・・。

「何か言うことは？」

セレネが代表して俺をにらみつけてくる。

「・・・待ってください！マスターは貴女達を助けようとしたんです！あんな意味不明で頭の中からなぞの液体を出しているような人に捕まった三人が悪いんです！謝るのはそっちじゃないんですか！」

ローザは真っ赤な目を怒りに燃やして三人を睨んでいた。

「・・・ローザ、いいんだ。」

「ま、マスター!! そんな・・・。」

「きつと、セレネが地面に仕掛けられていたロープかなんかに引っかかってこけて二人が起こそうとしたところを剣治に狙われたんじゃないのか? ほら、そうすれば一挙に捕まえることが出来るだろう?」

「・・・そうみたいです、セレネさん・・・固まっていますから・・・。」

セレネはローザが言ったとおり固まっている。俺はため息をついて三人に頭を下げた。

「言うこと聞かなくてすいませんでした。」

「・・・今回は不問にします。次回はこのようなことが無いようにしてくださいね?」

固まったセレネの代わりにソーラが答える。

「はいはい。」

「はいは一回だよ、零ちゃん?」

「はい!」

「・・・マスター・・・なんで・・・。」

「零時、ところで今度彼から何か小包らしきものが届いたらそのときはぜひとも僕の部屋で一緒に見ようじゃないか? それまであけてはいけないよ?」

瑞樹が何故だかそういつてきた。俺は不思議に思いながらも頷いた。

「わかった。何か剣治から小包がきたらお前の部屋に持ってくよ。」

「じゃ、お取り込み中みたいだから僕はこれで失礼させてもらうよ。」

飄々としている瑞樹はそのまま帰ってしまい、残った俺たちはとりあえず家に入ることにしたのだった。ソーラは固まったセレネを引っ張りながら家に入り、ノワルは体を慣らすように歩いていった。

俺も家に入ろうとしてローザが俺に尋ねてきた。

「マスター、なんで言い返さなかったんですか？ 悪くないのに……」

俺はその場で立ち止まってローザのほうを見ないで答えた。

「……お前が同じような立場になったらお前は俺に何か言い返したか？」

「……いえ、言い返しません。マスターはマスターですから。」

「そうかい、俺もそうするときがあるんだよ……たまにはな。ローザ、晩飯食べてくか？」

「あ、はい……ありがとうございます！」

ローザは俺よりも早めに入っていく、俺が最後に家の中にはいなかった。

そして、次の日……俺の元に剣治からの小包が届いた。俺は約束どおり瑞樹の部屋でそれを開けたのだが……

「うむ、かなり精巧な作りじゃないか？」

「……」

中に入っていたのはセレネ、ソーラ、ノワル……とローザのよく出来た机に飾るぐらいの大きさの人形だった。俺は瑞樹からそれらすべての人形を奪い、代わりに瑞樹に渡して欲しいと書かれている小包を渡した。それが何かは俺は知らない。

セレネ：私は諦める心を知らないわ！（挫折という言葉は知ってます。）

三十六、

俺はとりあえず目の前の状況に嘆いた。一言言わせてちょっと前に戻ろう。

「やれやれ、一体全体料理を作ろうとしてどうやったらテレビが爆発するんだ？」

さて、その日の朝、俺は小さくなったままの三人に朝食を作らせるのが非常に不安だった。母さんは既に会社に行ってしまったし、あまり料理が得意（目玉焼きは目玉が破けて黄色になってしまったりする。）ではないがとりあえずまじだろう。

「零時、任せておいて！ 私たちはウェイトレスよ！」

「あ、そうだったな。」

俺は包丁を持ったまま下を見て唸った。

「いや、それは知ってるんだが・・・今の状態で大丈夫なのか？」

「任せておいて！ この二人もいることだし！」

そういつてソーラとノ瓦尔を指差す。まあ、たしかに・・・

「それなら大丈夫だな。」

「むう、何よそれ！！ 私一人だったら不安だって言うの？」

「いや、自分から言っただら？それより、二人ともお願いするぜ？」

「まかせておいてください、零時君！」

「まかせといてっ、零ちゃん！！」

俺はそのまま台所を退散し、二階に上がったのだった。そして、それが間違이었다ということに気がついたのは俺が二階で機械のねじを磨いていたときだった……。

どーん！！

「な、なんだ？」

階下からなにやら爆発物が爆発したような音が聞こえ、俺は無様に椅子から滑り落ちて床に頭を打ちつけたのであった。俺は持っていたねじが折れていることに気がついた。

どーん！どーん！！

未だに爆発音が聞こえ、家が揺れているのがわかる。はて、家には武器庫も花火も置かれていないのだが……一体全体、この音の正体はなんなのだろうか？

慌てて一階へと転がるように階段を駆け下り、俺は信じられない光景を目にしたのであった。セレネが床に倒れており、残りの二人も近くに倒れていた。痙攣を起こしており、はたからみるとなにやら重苦しい空気が流れている。俺は近くに転がっていたセレネを起こしたのであった……。

そして、話は元に戻る。

「セレネ、一体全体何が起こったんだ？」

セレネは気まずそうに勝気な目を俺からそらしてあらぬ方向を見ている。むう、そこにい誰かいるとでも？俺には見えないお婆けか？

「……ごほごほ……セレネは自分の身長が足りないのに高いところの道具を取ろうとして魔法を使ってさ……魔法が暴発……とても強力な何かがテレビに当たり、近くにあった家電製品すべてを撲滅しちゃったんだよ。」

ノワルが真っ黒になって答えている。ソーラは未だにはいつくばって独り言を言っているようだ。どうやら脳にショックを与えられてしまったようだ。

「……とりあえず、誰か負傷者は？俺が包帯を巻いてやるぜ？」

「……なし……かな？危うく包丁が私を三枚ぐらいに卸そうとしたけどセレネの魔法で……ほら、あれ見てごらんよ……。」

俺は生まれて初めて壁に包丁が半分ほど埋まっている姿を目の当たりにした。

「あれ、ぬいたら勇者になれるかもよ？」

「……とりあえずならんでいい。セレネ、お前は今から掃除だ。料理は他の二人に任せろ。」

「え……。」

ぼさっと座っているセレネを押してとりあえず台所からセレネを追いやった。俺は床に落ちているテレビの破片をまじまじと眺めながらため息をついた。部分によっては消滅しており、跡形も無い。ううむ、すさまじいほどの破壊力だ。包帯が必要だな。

「……今更ながら恐ろしい威力だと思う。あんなに強かったっけ？」

「……零時君、悪いけど……そのなべ、取ってくれる？」

ソーラが指差す方向にいびつな形をしたなべが姿を見せていた。俺は使えるなべが無いか探し、何とか見つけた。さて、母さんが帰ってきたらどうやって言い訳しよう？

「……テレビ、直らないかな？包帯巻いて直るかな？」

「セレネに頼んでみたら？あのこ、責任感が強いから直せるかもよ？」

「……。」

不安だが……まあ、既にテレビはテレビではないので（冷蔵庫庫などは上半身が無い）いいだろう。失敗してももう何も失うものは無いはずだ。

「セレネ、悪いけどこのテレビを魔法で直せないか？」

「ま、まかせといて！！そのくらいなら大丈夫だから！！」

ホウキをおいてセレネはほとんど跡が残っていないテレビの前に立った。そして、右腕を振り上げる。その目は真剣そのもの……これは期待できるかもしれない。

「ええーい!!」

そして右腕を振り落とす。スクラップとなっていたテレビは……

「うん、完璧に消滅しちゃったな。」

俺の前から姿を消したのであった。さて、いよいよもってこれはやばいのではなからうか？失うものが大きすぎた。種火がなければ火はつかない。

「ああ……うそ……ううん!! 零時はそこで見てて!! 今すぐテレビを出して見せるから!! 私、がんばってみる!!」

両目に炎を宿し、セレネは俺の前に仁王立ち。にらむ視線の先には先程までスクラップのテレビがあった何も無い空間……今度こそ、本当に失うものはないかな？

「今度こそ……ええーい!!」

今度は両腕を振り落とし、まぶしさがあたりに広まっていった。俺はサングラスをとりだし、装着。

まぶしさは去り、俺はサングラスを取り外した。そして、目の前にはテレビが確かにあった。

「……白黒？」

「……………」

「マニアならうれしだろうな。」

「…………で、でも!! もう一回だけチャンス、ちようだい?」

「ソーラもしくはノワル……悪いけどちょっと来てくれないか?」

俺はこれ以上時間をかける気がなくなったのでソーラを呼んだ。
セレネは腐れてそこいらへんで地面に“の”の字を書いている。

「セレネ、腐っている場合じゃないぞ? 今度は冷蔵庫だ。」

「え、まだチャンスくれるの?」

「当然だ。お前が壊したものはまだまだあるからな。」

半壊している冷蔵庫の前にセレネを連れて行き、俺はセレネの後ろで応援することにした。がんばれ〜セレネ。いや、家を壊すようなことはさすがにやめてほしい。

「今度はがんばってくれよ? 消すようなマジックはなくていいから。」

「任せといて!!」

非常に不安だ……。ため息を一つ吐いて俺は淡い期待と絶大な絶望感に打ちひしがれていたのであった。ソーラが隣を通っていき、耳元でささやいた。

「・・・一応、やっておきました。あの、さすがに今度やったら駄目かと・・・。」

「ん、ありがとう・・・とりあえず朝食を急いで作って食べようか・・・。」

ソーラは静かに去っていき、セレネは既に三回ほど間違えている。もうぐだぐだだ。これも俺がセレネを信じたのが間違いだっただろうか？

「セレネ、小さいから駄目なのか？」

既にセレネは泣いている。負けず嫌いもここまでくれば見上げた根性だ。

「駄目な奴はどこまでやっても駄目だ。」

「がーん！！そ、そんなぁ・・・。」

「だからな・・・周りがいるんだろ？駄目な奴を助けるために。お前の失敗はソーラとかがバックアップしてくれる。今日は確かに失敗したが明日は失敗しないかもしれないだろう？（明日も失敗されたら困るがな。）とりあえず、冷蔵庫はあきらめてもうちょっと簡単そうなのをやってみようぜ？」

「ううー。」

セレネは泣いて俺に抱きついてきた。その目は当然のように悔し涙が覆っている。俺はかわいそうだとは思ったが泣いているセレネ

にもっとも簡単そうなものを与えた。

それは、先程ゆれたときに俺が折ってしまったねじだった。これなら、安心だ。

セレネ：私は諦める心を知らないわ！（挫折という言葉は知ってます。）（後妻

さて・・・まあ、余談ですが短編のある小説は・・・いや、余計ですね。今回の話はまた今度続きをかきます。次回予告は話的にノ
ワルでいききたいと思います。

ノワル：私は暑い日が大好き！（実は、嘘です。暑い日はだらけてます。）

三十七、

季節も夏になり、既に学ランを着ているような物好きもいなくなった。期末テストも近づいてきており、俺は憂鬱になるばかりだった。セレネ、ソーラ、ノワルもいろいろあったが徐々に成長しており、この調子で行けばあと一週間後には完璧に戻るのではないだろうか？もしかしたらそのまま成長していき、怪獣サイズになるかもしれない。

そんなくだらないことを考えていた昼休み・・・俺はしたじきで自分を扇いでいた。昼休みなのに生徒にやる気は微塵も感じられず・・・暑さに苦しんでいた。俺たちの高校には空調システムがあったのだが先日壊れてしまい、なぜか知らないが俺たちの学年だけ苦しんでいた。これはもしかしたら去年の冬に

「寒さなんていらねえ！！」と断言してしまった俺の責任かもしれない。生徒は素直に机に突っ伏すかしたじきで自分を扇いでいる。クラスの大気は歪み、みんなの殺気が高まっていくのがわかる。張り詰めた空気・・・何か小さい音がただけで喧嘩が起こりそうだった。このもやもやを誰かにぶつきたいのだろう。

「・・・・。」

俺の隣でも中学生ほどの体格のノワルが息絶え絶えでぴくりとも動かない。このままそっとしておけばゾンビ・・・いやミイラなんかになるのではないのだろうか？

「いやあ、みんなぴりぴりしているねえ。」

こんな最悪の環境状況の中でも例外というものは存在しており、

意外と近くにいたもんだ。

「そうね。」

しかも、二人。瑞樹と双三は元気そうに自学などをしている。

「……………」

「零時、目が死んでるぞ？」

「情けないわねえ。」

「…………お前ら、きつと俺たちと根本的に作りが違うんだろ？な……でも、どうやって…………うん、もしかしたら体の中に冷却ファンが増設されているのか？それとも、自分の周囲にだけ特別なフィールドを展開し、適温にするという……………」

「…………れ、零ちゃん…………大丈夫？」

むむ…………死にそうな顔をしているノワルにそれを言われたら大変だな。かなり伝えるのが遅れてしまったがセレネとソーラは学校にいろいろと適当な嘘をついてレストランに行って何かをしている。あの姿でウェイトレスは出来ないのできつと皿洗いだろう。

「俺は大丈夫だぞ？」

「そう？いつもよりおかしさに磨きが掛かってたって思ったけど……………」

失礼だな…………俺はため息をついて水泳道具をけった。既に使

用されており、今では不要なものだ。そのとき、廊下を乱暴に走る音が聞こえてきて、扉を誰かが開けた。皆の

「あちいんだよ！！黙ってはいってこい、この馬鹿！！」ということでも息の合った視線が向けられる。

「みんな、今日の五時間目は急に体育・・・すなわちプールになったぞ！！」

「「「うおおおお！！」」」

皆が騒いだことは間違いなかったと伝えておこう。それはもう、違われるかと思ったくらいだ。

さて、俺は再び水着を着用した。既に他の生徒は昼休みなのにプールに入って遊んでいる。

「れいちゃん！泳がないの？」

既にプールに入っているノワルが俺に尋ねてくるが俺は首を振った。

「まだ授業は始まってないぞ。」

「堅いこといってると・・・。」

ノワルはプールサイドにたって眺めていた俺に右腕を向け・・・水をぶっ掛けてきた。その水は俺の目に入り、一時的だったが俺の視力が奪われる。

「うわっ・・・。」

「そんでえ……ほらっ!!」

右足をつかまれてそのままプールにダイブ。途中プールサイドで頭を打ってしまった……よいこの皆、友達をプールに引きずりこむような友達を持つのはやめようね？

「ぶっはあ!!」

「あはははは!!」

俺は何とか息継ぎに成功し、ノワルをにらむ。まあ、そこまで効果は無いだろうけどな。

「……ノワル、危うく病院にいくところだったぞ？」

「大丈夫！れいちゃんに何かあったら人工呼吸は私がしてあげるからね？」

「そういう状況に陥りたくは無いぞ！」

「ほら、そんなことより一緒に遊ぼうって！」

そのまま俺は連れて行かれ、結局クラスの連中と昼休み中プールで遊ぶこととなった。そして、授業は開始され、男子は男子に、女子は女子に分かれて授業が始まったのであった。

「零時、次は君の番じゃないか？」

「あ、そうみたいだな。」

今日の授業は・・・五十メートルを息継ぎなしで泳ぐというものだった。勿論、それはあくまで目標であって別に達成しなくてもいいのだ。既に午前中に一度授業を行った挙句にお昼休みも無断でプールで遊んでいた俺たちの体力は赤ちゃんにもひねられるぐらいになくなっていたのであった。

「第一コース！剣山。」

「はい！」

いちいち返事するのは面倒でしょうがなく（はずかしい）俺はさっさとプールの中に入った。飛び込み台もきちんと備わっているのだが・・・俺は使用しないことにしている。あれは去年のことだ・・・飛び込み台から飛び込んだ俺は腹を強打そしてパンツが半分ほどずり落ちた挙句に水を思いつきり肺の中に吸い込んでしまったのだった。あれは正直言ってやばかった。

「位置についてえ！よいい！」

それ以降、俺はタイムはちょっと悪くなってしまうがプールの中に入ってスタートしている。ふ、誰にもパンツがずり落ちていたことをばれなかったことだけはラッキーだった。

「ドン！」

俺は壁をけり、一直線にスタートした。隣を泳いでいる誰かとは結構距離が離れたようだ。ちなみに俺は体育の成績なんて平均より下だったりするが水泳のみ、他人より秀でていると自負している。まあ、体力が無いのでそこまで長い間泳いでいると苦しくなってスピードが段々落ちていくのだが・・・

「……………」

さて、後半分だなんて思って俺はそのまま回って壁をけりリターン。既にゴールは約二十五メートル前（当然だな。）に迫っている。ここからが正念場だ。

「ぼはっ！！」

俺はわざと空気を吐いて正面を見据える。こうすることによって肺に空気が送られなくなってしまう。息継ぎをしていない俺は段々と苦しくなっていく……

「ぼはっ……ぼはっ……。」

もだえ苦しみ、いつもより必死で手足を動かす。人間は追い詰められたときに力を発するのではないかと考えている俺なりの戦法だ。

「ぼ、ぼはっ！！（も、もうちょ……）」

既に五メートルに迫る壁を目指して最後の一振りだと思って右腕を伸ばす……。が、壁に当たらずそのまま左手でタッチ。

「ぶはあああああ！！」

既に限界を超えて視界に霞が掛かっていた俺は海坊主のように水面に浮上。そのまま少量の水と共に空気を吸い込み（きつと微生物もすっただろうな。）吐き出す。（少量の微生物は飲み込んだだろうな。）

「零時、どうやら五十メートルを息継ぎなしで泳ぎきったみたいじゃないか？」

瑞樹がそういつてこっちに来ているがまあ、確かにそうなのだろう。

「しんどい。」

「とりあえず次の人の邪魔になるからあがってきたらどうだい？」

「……わかった。」

俺はまるで氷の上に上るセイウチのように両腕で上ったのであった。そこへ、ノワルがやってきて疲れている俺の頭を押す。

「うおっ！」

力を失い、ぼろぼろの俺は当然のようにプールの中に落ちた。その後も何度か繰り返し、いい加減俺はめまいがしてきたのであった。

「あ、やりすぎた？」

「……。」

結局俺はノワルに引きずりあげられてふらふらになりながらも待っている瑞樹のところに戻ったのであった。

久しぶりに普通の学校生活を送ったような気がして俺はその日なんとなく幸せだった。

ソーラ：私＋零時君＝動かない機械（前書き）

今回はほのぼのとしているような気がします。

ソーラ：私＋零時君＝動かない機械

三十八、

俺が寝ているとがたがたと音がした。今は何時かと目覚まし時計で確認。すると時間帯は午前十時……。だが、休日だったのでもう一度目覚まし時計を置き、俺はもう一度寝ようとしてやめた。そろそろ起きたほうがよさそうだ。

「零時君、朝ですよ？」

俺部屋の隣にもう一つ部屋があるのを覚えている方はいますか？さすがに四人で寝るのはきついので俺のみこの部屋で寝ている。しかし、この部屋は防音効果が施されているので叫んでも助けは来ないのではないだろうかと思う今日この頃だ。

扉を開けてソーラが顔を出したので俺は頷いた。

「今起きた。」

「目、赤いですけど？また何かしてたんですか？」

「ああ、ちょっといろいろと……。まあ、もうちょっとで成功するんじゃないかと……」

「とりあえず朝食が出来ますので降りてきてくださいね？」

「わかった。」

俺はベッドから落ち、そのまま匍匐全身のような感じで自分の部屋を通って一階へと向かう。さすがに階段をこの状態で降りるのは

無理だと思ったのであきらめて二足歩行へと変形？して降りることにした。

一階からは誰の声もしない。

「ソーラ、皆どこかに行ったのか？」

「ええ、お買い物に行きました。」

「ふうん？」

ご飯をソーラについてももらいながら俺は首をかしげた。買い物か・
・・・。

「なんでソーラはついていかなかったんだ？」

「ええと、ちょっと体調が悪くて行くのは遠慮したんですよ。」

「大丈夫なのか？」

「はい。」

ソーラがそういうのなら大丈夫だろう。セレネとノワルなら嘘をつきそうだったのだからその点ではソーラは信用できるからな。

「お昼も帰ってこないかもしれないと言っていました。」

「ふうん？それなら今日は静かにしようかな？」

朝食を食べた俺はソーラと共に学校の勉強をし（ソーラに数学、英語、古文、生物、e t cを教えてもらった。）気づいたときには

既に午後になっていた。

「お昼、どうしますか？」

「俺が作ろうか？」

「いえ、私が作りますよ。零時君は何が食べたいですか？」

「・・・それなら・・・オムライスがいいな。」

「わかりました。」

それからオムライスが出来る間までの時間、俺は未だに残っている曲がった鍋等（セレネが魔法を暴発させた奴）を戻していた。そういうばそろそろ期末テストだなあ・・・。

「できましたよ？」

俺はソーラの前に座り、おとなしくオムライスを食べ始めた。普段は騒がしい二人がいないので今日は至って静かだ。ソーラ一人しかいなかったのだが、こんな日もいいものだと思いつながら俺はオムライスをたいらげた。

「ソーラ、おいしかったよ。」

「そうですか、ありがとうございます。」

本当にうれしそうに言ってくれるのでなんだかありがとうとこちらがお礼を言いたくなるものだな。さて、昼からどうしようかな？
といっても既にお昼を過ぎてしまったのだが。

「零時君、今から魔法の勉強をしましょうか？ たまには机に向かうのもいいことです。」

「そうだなあ・・・ソーラが教えてくれるんだろう？」

「勿論ですよ。」

こうして俺の午後は決定。すんなり決まったので俺はとりあえず机に向かった。

「まず、復習ですが魔法使いは肉弾戦に弱いのは結構前に教えましたね？ ええ、主に飛び道具が得意です。しかし、接近されたら利き腕に魔力の結晶を作り出し、それで戦います。まあ、今となつては痴漢ぐらいにしか使わないと思いますがね・・・。さて、今日は召喚獣の話をしたいと思います。」

「召喚獣？ それって確か呼んじゃいけないんだったかな？」

ソーラは頷き、何かが書かれた紙を取り出した。結構古そうな一品だった。

「確かに召喚獣は呼んではいけません。なぜかというですね・・・過去に召喚獣を呼び出すようなことをしていたようですが事件が起こったのです。」

「事件？ 魔力が爆発したとか？」

「いえいえ、違いますよ。呼び出した召喚獣が暴れまくったそうです。未だに研究されているようですがまず、召喚した召喚獣を制御、

もしくは支配する方法がわからないのです。それさえわかれば魔法使いの歴史に名前を刻めます。」

「なるほど……。」

「ところで、零時君は近頃夜中になるといつも零時君が寝ている場所は何をしているのですか？」

「ああ？簡単だよ。俺がしていることは自分が設計してみた……といっても中身は考えてない見た目だけのロボットを魔法で作ってみようとしただけなんだ。」

そういつて俺は自分で描いたロボットをソーラに見せた。

「ふうむ、なるほど……なんだかなり立体的になってますね？」

「ああ、なんだかするたびにリアルになっているようでね……。」

「二人でやってみますか？」

「そうだな。」

とりあえず魔法の勉強をやめ、俺はその紙を俺とソーラの前に置いて二人で腕を構えた。まあ、別にこうする必要なんて無いのだろうがこっちのほうの息があいそうだったのでやってみただけだ。もしかしたら紙が爆発してしまうかもしれない。

「さて、いきますよ！」

「ああ。」

紙を中心として俺とソーラの魔法が集中していく。近頃夜遅くまでおきていたので体が持たないようだ。俺は気絶し、その後どうなったのかを知らない。

目が覚め、俺の横にソーラが座っていた。どうやら俺はベッドで寝ているようだった。体中が痛い。

「ソーラ、どうだった？」

「ええと、成功したみたいなのですが……」

そういつて俺に真っ白な紙を渡した。俺はそれを手に取り、まじまじと眺める。いや、眺めたところで何も浮かんできたりしないのだが……。あ、もしかしてこれは火に当てれば浮かんでくる奴かもしれないな。

早速試そうとしている俺にソーラは告げた。

「具現化した零時君のあの機械ですが……。どうにも動かなかったんです。ちょうど零時君が気を失ってすぐに具現化されたんですけどついでにローザちゃんが来たので渡しておきました。動かないから要らなかつたんですよね？」

君は要らないだろうなあ……。動かない機械に価値は無い。確かに、価値はないが……。それを基準にしているいろいろと考えたのだが……。いまさらローザに連絡とって返してくれって言っても返してくれなさそうだ。それに、もしかしたら食べているかもしれない……。頭から嘔み付いてオイルがどぼどぼってながれているかもしれん。

「あのく零時君？」

「……………」

「零時君？」

「……………」

「零時君？」

「…………あ、すまん。ちょっと心が傷心旅行に出かけていたようだ。とりあえず体の具合が悪い気がするから俺はちよつと横になってるよ。」

俺はそういつて久しぶりに自分のベッドに寝転がり、目を閉じた。

「…………私も疲れました。」

そういつてソーラも俺の隣に寝転がったのであった。俺はソーラに見られないように反対側に顔を持っていつて…………

「おお…………わが愛しの『メルナ』よ……………」

因みにメルナとは先程俺が書いて具現化しようとしたロボットの名前だ。小さいころに適当に書いてなかなか気に入っていた俺は日々、精進を重ねて作り（書き）上げてきたものだ。まあ、今となつてはしょうがない。我が子は静かに眠つたのだ…………

その次の日、風邪気味だったソーラが隣にいたからか俺は風邪になつてしまった。

ソーラ：私十零時君Ⅱ動かない機械（後書き）

お久しぶり？なのかわかりませんが中にはお久しぶりの方がいると思います。久しぶりの人は名前を教えてもらえとうれしいです。さて、冗談はそのぐらいにして今回の章のことをちよつと話したいと思います。前にデータが消えてしまったと話をしたと思います。ちよつど、今回の分ぐらいまで書いていたのですが綺麗さっぱり消えてしまったのです。その結果としてはなんですすがもうちよつとで剣山零時の物語も終わりです。予定的に五十話程で終わる予定です。それでは、また今度・・・何か質問したいことがあるのならメッセージをくれるとうれしいです。もしくは、激励の言葉も欲しいですね♪（欲張りだな・・・）

ローザ：私がマスターを治します！！

三十九、

風邪、二日目・・・俺はごほごほ言っで自室の隣の部屋で寝ていた。今日は平日なのでセレネ、ソーラ、ノワルは学校に行っている。外は小雨が降って物悲しい。

「げほげほ・・・。」

「マスター！どうしたんですかっ！！」

やってきたのはローザだった。おいおい、午前中なのにくるなんて相当暇なんだな・・・。もしかしたら友達俺以外いないんじゃないか？と心配してしまう。

「風邪・・・ですか？なにやら顔が赤いようですね。」

「ああ、そうだ・・・ごほごほ。」

「てっきりマスターは風邪を引かない特殊な体質だと思っていました。」

何とかは風邪を引かないといたいのだろうか？俺はこう見えてもバカではない。

「因みに『ひまわり』が好きだった絵描きさんは？」

「ゴッホ・・・ゴッホ・・・」

「まあ、冗談はそれまでにして大丈夫なんですか？」

「ローザが見て大丈夫だと思うならローザを眼科に連れて行かないといけないな。」

「むう、見て具合が悪そうだというのはわかります！とりあえず安静にしてください。」

しています。ローザが来てから咳がひどくなった気がします。ああ、時が見えるよ、ララ○。

「とりあえず、風邪は他人に移せば治りますよ。」

「単純だな、オイ。」

「ということで私に移してください。」

そういつてローザは俺のベッドに入り込んだ。

「人肌で温めます。」

「お前、機械だろ？風邪、引かないだろうし・・・人肌でもないぞ？」

「些細なことです。」

適当だなーおい。隣にローザは寝転がり、俺は何も言わずに静かにしておいた。ローザははじめのほうは俺にいろいろ（この前のメルナの末路を聞いてしまった。うう、可愛そうに・・・。）と話していたがそのうち本当に眠ってしまったようだ。

ローザに噛み付かれながらも俺は気合で寝ようと努力していた。生まれて初めて寝るのに努力した。その努力はなかなか報われなかった。

「ますたあ・・・おいしいです。」

「ぎゃああ!!」

「・・・えいっ・・・。」

「ぐはあああ!!」

「・・・とおっ!!」

「くうう・・・。」

「あたたたたたたたたたっ!! お前はもう、死んでいる。」

「あべしっ!! っってお前、絶対おきてるだろ!!」

ローザの顔をびーって伸ばしてやったのだがなかなかおきない。さらさらしている金髪をまとめてちょんまげにしてやろうかと思っただがまあ・・・俺が我慢すればいいことだ。

「せりゃっ!!」

「差! ;ばあおsぢらカだばkだらだ!!」

おいゝうゝく、股間にアッパーはなしだろっ!! ああああああ

あああああああ……目が涙で濡れちまうぜ……痛くて、涙が出ちゃう……男の子だもん！！この痛みは男にしかかわからんぜ……

「ローザ、静かに寝てくれ。これは命令だ。」

「……りょかいですっ……。」

本当に静かに寝てくれるのかとても心配だったが俺はとりあえず静かにして眠ることにした。ローザにきちんと毛布をかけ、俺も目をつぶる。今度こそ、俺は夢の世界に引き込まれていったのであった。

「お、帰ってきたかローザ？」

「はい、ただいまですっ！！」

ローザは自分を造ってくれた科学者の元へと挨拶をしていた。この男は彼女が

「マスター」と呼んでいる男の父親らしいが彼とは全く性格が違うのであった。

「全く、また零時の元に行っていたのか？」

「ち、ちがいますっ！市内をパトロールしていたんですよ！」

「ははっ、ちなみに君たちを造った理由は世界征服のためだったのだけだね……それより、零時はどうだったかな？」

「風邪を引いていました。」

「そうか・・・あいつも大変なんだなあ・・・ローザ、明日も
いってやりなさい。」

「はいっ!! 任せてください。」

男はローザの頭をなで、告げた。

「ローザ、嘘はついちゃ駄目だ。」

「え、嘘なんてついてませんよ?」

「・・・零時が風邪を引くわけないだろう?」

「いえ、私も確認しましたが風を引いていました!! 私も信じられ
なかったのですがそれは事実のようでした。」

そういつて本当に驚いたような表情を見せるローザ。彼の

「マスター」が見たら悲しむかもしれない。

「そうか・・・てっきり私の息子はおばかさんだと思っていたのだ
が違ったようだ。だが、これである意味私もうれしいものだ。」

そういつて本当にうれしそうにしている男。彼の息子が見ていた
ら怒り狂って強力な魔法をぶつけた挙句に甕棺墓に投入してしまう
可能性もある。

「あの、みんなはどこかに行ったんですか?」

「ああ、彼女たちはお使いに行ってるよ。」

ローザのほかにも似たようなものはおり、ローザがいないときは他の人たちがローザの本来の仕事など（家事）を行っているのだ。

「全く、愛娘を盗られたような気分だよ。」

男は呟き、置いてあったコーヒーに手をつけた。その姿を見ながらローザは珍しくため息をついた。

「・・・あの、なんでマスターの母上のところに戻らないんですか？」

「ん？それはね・・・戸籍上死んでしまっているんだ。さすがにそれじゃ、帰れないだろう？今更帰ったって何もしてあげることないからね。」

行方不明も七年経てば死亡扱い・・・ローザは悲しそうに顔を伏せた。

「・・・なあに、会おうと思えばいつでも会えるさ。」

男は呟いて天井を指差して肩をすくめたのであった。そして、その地下の秘密基地の基地の上では更に病状が悪化した零時が咳をしていたのであった・・・。

セレネ：私は桃太郎！（前書き）

お伽話です。頑張ってかいた奴なので感想を聞かせてもらえると嬉しいです。

セレネ：私は桃太郎！

四十、

ローザのおかげで風邪がひどくなった俺は唸っていた。夕方になっており、セレネが帰ってきたのであった。

「零時、朝よりひどくなってるない？」

「ああ、色々あってな……。」

俺はぐったりとしたような感じで呟いた。セレネはもじもじしながら俺に尋ねてきた。

「零時、聞いたんだけど……他人に移せば治るらしいよ？ええと、だからさ……。」

「それは嘘だと思うぞ？身を持って体験したからな。やめておいた方がいい。」

「え……あ、そうなんだあ……あははっ……。」

さり気無く俺から離れていく挙動不審なセレネに俺は流し目を見てやってもう一度寝ることにしたのだがさすがに寝付くことが出来ない。

「ええと、寝付けないみたいだけど？それはきちんとねたってことだよな？」

「そうだなあ……いろいろあったからな。疲れてて……でも、まだ寝たほうがいいな。」

「それなら、私が絵本を読んであげるね？そうすれば早く寝れるよ？」

こういうとき、セレネは本当にうれしそうに笑うな……。でも、それがなんとなく悲しくもある。普段から笑ってればいいのにな……。

「ご注文は？何でもそろってるよ？」

「じゃ、桃太郎で」

桃太郎 読み手 セレネ

昔々、あるところに仲良しのおじいさんとおばあさんがいました。
「爺の顔など見飽きたわ!! わたしゃ、ええ男を狩ってくるわい!!」

「勝手にせい!! わしも婆の顔なんて見飽きたわ!!」

おじいさんは山へ芝刈りにおばあさんは川に洗濯に行きました。

「山で熊狩用の罠にかかっちゃまいな! 今日の晩飯は爺じゃ!!」

「へ、そういうお前さんこそピラニアにでも食べられちまえばいいんだ!」

そして、おばあさんが洗濯をしていると

「全く、あの爺め・・・そうだ! 今日の晩御飯に下剤を仕込んでやろう!!」

上流の方から大きな桃がどんぶらこどんぶらこと流れてきました。

「むう、どこの桃じゃ? あれほどの闘気を見たのは初めてじゃ・・・」

・きつと中にはものすごいものが詰まっているに違いなし・・・あの桃を食べればもしかしたらあの爺に止めをさせるかもしれん!!
そして、天下統一じゃ!!」

おばあさんはその桃を持って家に帰りました。

「ふ、鍛え上げた私の肉体には運べないものなど・・・ないっ!!
爺! 今に見ておれよお!! ふひゃひゃひゃひゃ!! 今日が日を拝むことが出来る最後の日じゃ!!」

家に帰り着いたお婆さんはおじいさんが帰ってくるのを待つことにしました。

「・・・さあ、この桃を見せて爺をしとめてやろうぞ・・・」

夕方になり、おじいさんが帰ってきました。

「ばばあ! 今帰ってきてやったぞ! ほら、酒の用意をしろ!!」

「ふん、今日も生きて帰ってきたか・・・」

お婆さんは流れてきた大きな桃を見せました。

「ふはははっ!! この桃が目に入らんか?」

「そ、その桃は・・・」

当然のようにおじいさんは驚きました。

「伝説の『闘気の桃』……婆、お前とうとう……世界を手に入れようと考えたのか？」

「ふふふ、どうだかねえ？ 私の目的はあんたをしとめることだよ。」
おばあさんは包丁を持ってきてとりあえず桃を切ってみることにしました。

「……神聖なる我を守護する天使よ……私の望むべく力を我に与えよ！！その力、世界を制する力を持ちて……この剣にその力を与えよ！！『必殺！ 守喪藻モ喪藻モ喪藻乃宇血！！』（すもももももものうち）』」

切れた桃の中から可愛げな男の子の赤ちゃんが生まれました。

「こりゃまあ……可愛い女の子だな。婆、イリユージョンか？」

「……とりあえず、今更この娘を捨ててきても駄目じゃ。つかまるからなあ。」

おばあさんとおじいさんは桃から生まれてきたのでその男の子を桃太郎とつけることにしました。

「婆、このこの名前は『セレネ』にするぞ？」

「そだなあ……爺の言うとおりにしてやる。この子に天下をとってもらおう。」

おじいさんとおばあさんは桃太郎を手塩にかけて育てました。

「くおら！！このくらいもできんのかい、セレネは？」

「ご、ごめんなさい！！」

「セレネ！ 天下を取るには絶対的な力が必要なのじゃ！ 魔法も使えんのでは役立たずもいいところじゃよ！！ 力と言うものは世界の全て！！ わかったか？」

「す、すみません！！ 私、がんばります！！」

十数年後、桃太郎は立派な青年になりました。

「よし、お前も今年で十六じゃ。よくぞこれまでの修行に耐えたものだな。」

「ありがとうございます！」

そして、都で暴れまわっている鬼のことを聞きました。

「セレネ、まずは近くの都に陣取っている鬼軍を奇襲せよ。」

「わかりました！」

「兵は都へ向かう途中で志願兵を募れ。」

悪さする鬼を討伐するため、おじいさんとおばあさんの元を離れました。

「セレネ、我が娘として恥じるようなことはするな。そのような場合は切腹ものじゃ。」

「さ、この黍団子をもっとおいき……。食えば世界が変わる。」
「では、いつてきます！」

別れを惜しむおばあさんとおじいさんはずっと桃太郎を見送っていました。

「やれやれ、ようやくごくつぶしがいなくなってくれたわい。」

「婆よ、必ずやセレネは天下を取ってきてくれる。それはまちがいない。」

さて、都を目指してすすむ桃太郎は途中で野良犬に出会いました。
「あのう、すみませんがそこのお方……。悪いですけど何か食べ物をいただけないでしょうか？このところなかなか人が通らなくて……。」

「おなかすいてるの？それならこの黍団子をあげるよ（あのおばあさんがつくったものだからね……。何が入っているのかわかんないからなあ）。」

「ありがとうございます。」

桃太郎は黍団子を犬にあげて、その犬はお礼に鬼退治と一緒についていくことにしました。

「とても、おいしかったですよ。ええ……。てつきり危ない白い粉を吸ったときのような感じがしました。」

「……。やはり何かが入っていたのか……。よかった、食べなくて。」

犬と共に都を目指すことになった桃太郎は歩いていると雉にいま

した。

「セレネ、私おなかすいたからあの鳥落として食べない？」

「あ、ソーラまだおなかすいてたの？黍団子、まだあるけど？」

「いや、いいよ……。」

「そう？黍団子、雉にあげてみようかな？そおれ！！」

「あ、餌だ！！ありがたきたべさせてもらおうと！！……きやあ！！」

雉も黍団子を食べ、桃太郎と共に緒に退治をすることを決意しました。

「あははっ……なんだかい気分になってきましたあ……もつとください……。」

「……非常にやばい黍団子だね……。」

「そうね、これはちよつと危険だわ。」

犬と雉を連れた桃太郎は再び歩き始めました。

「セレネ、志願兵は募らないの？」

「そうですよお、なんで募らないんですか？」

「ふふ、二人とも私の力を馬鹿にしてるわね？普段はどじだけど今日の私は桃太郎！その力、一騎当千なのよ！！志願兵なんて足手まといは要らないわよ！」

そして、猿に出会いました。

「とりあえずこの黍団子を処理したほうがいいんじゃないのかしら？これ、もってたら警察に捕まりそうだし……どうしたらいいかな？」

「あ、あそこのお猿さんにあげたらどうかな？人のよさそうな顔してるし……。」

「すみませーん、そこのおさるさーん！！」

「ん？何かな？私に何かよう？」

「おなかすいてません？これ、よかつたらどうですか？」

「あ、黍団子か……ありがとう、じゃ、一つ失礼して……。」

猿も加わり、桃太郎は都を目指して歩き出しました。

「・・・あ、あそこにドレスを着たゆうれいがっ!!」

「だ、大丈夫ですかノワルさん？」

「・・・セレネさん、全部捨てましたか？」

「え、ええ・・・きちんと処理したわよ、ローザ。」

遂に都に辿り着く桃太郎一行でしたが既にそこは鬼が荒らして行つた後でした。

「いやあ、やっぱり都は華だねえ。」

「政治がうまいようですね、鬼軍は・・・皆生き生きしてますね。」

「そうね、とりあえず鬼軍の総大将に会いに行きましょう。」

「ねえ、あっちでりんご飴が売ってるよ!! 買ってよお!!」

鬼が住むといわれている鬼ヶ島に一人と三匹は向かいました。

「ここが・・・鬼軍の砦、通称鬼ヶ島・・・。」

「とても近代的ですね・・・あ、機械兵士が歩いてます!!」

「ううむ、機械で世界を統一しようとしているのか・・・すごいなあ。」

「へえ、さすがマスターですね。」

辿り着いた鬼ヶ島で桃太郎は戦い始めました。

「あ、あのう・・・。」

「What?」

「え、英語? 私・・・無理だよ・・・。」

現れた鬼の親分はとても強そうでした。

「零時、君に会いに来て城内で迷子になっていた四人組をつれてきたぞ?」

「お、ご苦労さん瑞樹。」

「今のところ待合室で待ってもらっているが?」

「そうだなあ、この書類を悪いけど双三に渡しておいてくれないか?」

「わかった。しかし毎日デスクワークなんて大変だな。」

「まあ、それが仕事だからな。仕事サボると町民がうるさいからな。今度の選挙もがんばらないと・・・。」

そして、桃太郎と鬼の親分は対峙しました。

「ん、君たちが俺に会いに来た人たちかい？」

「え、ええ！悪いけどここで朽ちてもらうわ！」

「兵量も私たちのものです！」

「観念するならいまのうちですよ、マスター！！」

「零ちゃんには悪いけどここで討ち取るわ！！」

「……そうか……（きっと、年貢が高いところの出身なんだろうな……）それなら要求に応じよう。困っている人は助けなさいといわれているからな。」

鬼を倒して貢物をえんやらや……

「……瑞樹、彼女たちを悪いが送ってあげてくれないか？女の子で旅行するのは危ないだろうからなあ。」

「わかった。」

こうして、桃太郎は故郷に凱旋しました。

「……まあ、色々もらえたからいいかな？」

「零時君、いいひとだなあ。」

「マスターはお人よしですねえ。」

「それに、他に何かあったらまたおいでって言ってくれたし……。」

その後、桃太郎は幸せに暮らしたそうでした……めでたしめでたし。

俺は桃太郎を聞き終わる前には既に寝ていたようだ。

「どうだった？私、読むのうまかったかな？」

「あーうん、うまかったぞ？」

おかげで少しだけ寝ることが出来た。ううむ、内容をよく覚えていないのでどのようなものだったのかちょっとだけ自信がなかったのだが……まあ、普段どおりの桃太郎だったのだろう……。

「そうだな、ちょっと思ったんだが桃太郎って何歳で鬼退治に行ったんだっけ？」

「十七ぐらいじゃないかな？」

「……。」

鬼ってそのぐらいで倒せるのだろうか？あと、犬はわかるが雉より鷹とか鷲とかをつかったほうがいいのではないだろうか？猿を連れて行くぐらいならゴリラをつれていったほうがいいのでは？

「セレネ、桃太郎すきか？」

「うーん、私は鬼のほうが好きかなあ？」

「……。」

まあ、好みは人それぞれだ。絵本に書かれている鬼はどれも可愛いからな……。でも、桃太郎ってたしかその鬼を全滅させたのではなかっただろうか？

「ま、時代が時代だったから桃太郎も大変だったんだろうなあ？」

「普通、桃から生まれた時点で人間じゃないよね？」

「ははっ、新人類だな。」

「そうだね。」

俺は笑いながらセレネの話を聞いていたのであった。熱があるせいでセレネが可愛く見えてしまうのがちよっとだけうれしかったと思っただけであった。

ソーラ：私はシンデレラ！！（前書き）

おとぎ話？ 第二弾です。

ソーラ：私はシンデレラ！！

四十一、

桃太郎を聞いた夜、俺は再び寝付けなかった。そんな俺の元にソーラがやってきた。

「零時君、まだ眠ってないの？風邪、よくならないよ？」

「ああ、ずっと寝てたからな……。ええと、もうちょっと寝るのにかかりそうだ。」

ソーラは何気に快調で俺に風邪を移しただけのようだった。

「ねえ、ちょうど面白い本が入ったから読んであげようか？」

ソーラはこの前共に寝転がってから俺への尋ね方がちよつと変わっていたのであった。

「そうだなあ、お願いする。」

「うん、じゃあ……。『シンデレラ』だけどいいよね？」

「ああ、構わないぞ。」

俺は枕にきちんと頭を乗せ、聞く体勢になった。

シンデレラ？ 読み手 ソーラ

昔々、あるところに継母などに虐げられながら生活している少女がいました。彼女の名前をシンデレラといいました。

「ソーラ！この埃がかんぺきにとれてないわよっ！！」

「すみません！セレネお母様！！」

「ここもよごれてますよお！因みにセレネさんの心も汚れてます！！」

「ごめんなさい！ローザお姉さま！セレネお母様の心は元からです！！」

「何だかこの味噌汁、塩が効きすぎじゃないか？」

「申し訳ありません！ノワルお姉さま！！！！」

毎日毎日いじめられてしまうシンデレラは悲しみに打ちひしがれ

ていました。

「……手を抜いてるはずは無いんだけど……もしかしてあの
人たちって潔癖症なのかな？ むう、お塩もそんなに入れてないし・
砂糖を間違えて入れたような気がするんだけどなあ……。味覚
障害かな？」

ある日、そんな家族のところにお城で舞踏会があるというお知らせがやってきました。

「これで内職生活とおさらばできるわ！！ あんたたち、必ず王子様のハートをつらぬくのよ！！ そうすればこの生活とおさらば！！」

「わかりました、悪役顔がとってもお似合いのセレネお母様。」

「おなじく了解しましたあ！ ニヤニヤ顔が私よりも似合うセレネお母様！」

「わかりました、実はどじなお母様！」

「ええい！ うるさいわあ！！ 真面目にやれえい！！」

でも、シンデレラが行くのは許しませんでした。

「ソーラ、貴女のドレスなんて買ってないわ。」

「な、なんで？」

「悔しいけど胸のサイズが私たちとは合わなかったのよ！！ 売ってないの！！」

「そ、そんなあ……。」

「まあ、お留守番をお願いするわ！ さあ、他の二人は王子様が喜びそうなくし芸を今から覚えなさい？」

「へえーへえー。私が手を叩いたら上から隕石でも落とそうか？」

「わかりましたよお。そんなの何か役に立つのかな？」

そして、舞踏会の始まる時間帯となり、継母たちは屋敷から出て行ったのでした。

「じゃ、行ってくるわ。きちんと屋敷の警護もしておくのよ？ 空き巣にも気をつけて。」

「はい、わかりました。セレネお母様。盗られるものは……無いか

と思いますがね。」

一人さびしく家に残ったシンデレラは泣いていました。

「・・・あゝあ、私も王子様に会いに行きたかったなあ・・・。」

嘆いている彼女の元へ一人の魔法使いさんが現れました。

「く、王子様は俺じゃねえのか・・・こほん、私は魔法使いの・・・」

「あ、零時君・・・。」

「・・・剣山 零時。普段からミス一つなく仕事をしているお前を見て可愛そうになった俺はそんなソーラを舞踏会に連れて行ってあげようと思う。」

魔法使いさんは魔法を発動させるために必要なものをシンデレラに告げました。

「あの、魔法使いならその必要なものもついでに出せないんですか？」

「いや、ぶっちゃけいって面倒だし・・・まあ、物語上はそういうことにしてくれ。」

必要なものはかぼちゃとねずみとイモリかヤモリかかべちよろでした。

「あ、かぼちゃはできればおおきな奴がいいな。ねずみもできればかっこいいやつが・・・。」

「どうでもいいんじゃないんですか？」

「ああ、別に構わんがな。なんとなくだ。」

用意してきた必要なものをシンデレラは魔法使いに渡しました。

「本業は学生だ。断じて魔法使いじゃないぞ？ 大体、魔法使いならソーラだっているじゃねえかよ！ 俺だって王子様、やってみたい！ 贅沢三昧最高！！」

「ほら、零時君・・・。」

「わかってるよっ！ ちちんぽい？ ほいさらさっら？ （こんな呪文だったかな？）」

魔法使いが杖を一振りするとそこに現れたのはかぼちゃの馬車と

使いの者、そして馬でした。

「あとう、なんですか・・・これ？」

「空を縦横無尽に翔るためにエンジンに違法改造を施した『ぽんぷきん号』だ。そして、使いの者はわざわざ別世界から召喚したメイド型ロボットだ。因みに執事とかもいるぞ？そして、この『ぽんぷきん号』のオブショナル・パーツとして今回選んだのは機械を超越した生命金属を用いて極秘裏に造られた『ペがさすう号』だ。これは非常に貴重なもので、俺の小さき夢の・・・」

「とりあえず、すごいのはわかったけど私の身なりじゃ・・・」

「そうだな。」

最後に、シンデレラ自体の姿を綺麗にしてあげました。

「ほら、この地味なスーツなんてどうだ？」

「嫌ですよ！」

「じゃ、このメイド服がいいんじゃないか？俺の予想では俺が王子さまではないという時点であいつが王子様だと思うから・・・」

「他のがいいです！！」

「じゃ、このブレザーは？いや？それなら・・・このチャイニーな服は？」

「それなら学校の制服でいいです！」

「はいはい、了解しました。」

最後に魔法使いさんは言いました。

「残念ながら魔法の効力は午前零時で消えるだろう。そうすることによってソーラは下手すれば城内で働かなくてはいけなくなるかもしれないな。」

「・・・ぷっ、零時でいいんですよ？零時君。」

「からかうのならさっさと行って結構だ。」

こうして、シンデレラはお城へ向かったのです。そして、お城では既に舞踏会が始まっており、王子様は自分の気に入った娘を探していました。

「どれもまじめにドレスを着てまじめにしている連中だけだな。双

三、意外性のある奴はいないのかい？僕としてはもっと変わった娘が好みなんだ。」

「いや、頭の中がまともな連中はそんなもんじゃないかと思うけど？」

「全く、コスプレ衣装で着てくれるようなサービス満点の心優しい姫君はいないのかねえ？双三、この際・・・適当に誰かにコスプレしてもらってそれを花嫁としていいんじゃないか？」

「いやいや、さすがにそれはどうかと思うけど？これならまだ剣山のほうがまともなこといいそうだよ。」

「ふん、やつが王子様でも似たようなこというんじゃないか？たとえば『○ラミちゃんはどこにいる！』とか『エルガイ○みたいな奴は！』などしまいにや、『ねじと結婚したほうがましだああああ』って言いそうなんだが？」

「さすがにそこまでおかしいとは思わないけど？」

継母たちが王子様に謁見しにやってきました。

「あ、お久しぶりね。」

「あゝ君たちか・・・しかしまあ双三、本当に期待できるような子がないね。」

「おーい、何か一言ないの？」

「いってくださいよお！！」

「零時に言ってもらえば？残念ながら、僕、疲れてるし・・・。適当に遊んで帰って結構だよ。」

王子様は見向きもしませんでした。

「双三、今日は『萌える心を解き放て！』の三巻が発売されると思うから買っておいで。」

「しょーがないなあ。」

そして、シンデレラがやってきました。城内は少しばかりざわつききました。

「何、あの・・・学校の制服なんて着てる！」

「ちよっと頭のねじがゆるいんじゃないの？」

「でも、萌えーってやつを狙っているのよ！」

シンデレラを見た王子さまはじきじきに彼女の元へとやってきました。

「ほら、双三・・・完璧なコスプレの女の子がきたじゃないか!! このとてもきらびやかな日にあえて学校の制服でやってくるようなぐつとくるようなメガネっ子が!!」

「・・・はあ、それってなんだけなしているような感じがするんだけど? で、王子さまはどうしたいんですか?」

「決まっている!」

王子さまはシンデレラのところまで辿り着くと右手を差し出してダンスの申し出をしました。

「・・・その君、僕と結婚してくれ!」

「って、ナレーションと全く違うぞ? 王子様?」

「双三、それをいうならこれまで一度もかすってないところもあったぞ?」

「いや、ほら・・・そこはきちんと話に筋が通っていたからいいと思うけど?」

「どうせ、王子様が踊り終わった後に『僕と結婚してくれ』っていうんじゃないのか?」

「シンデレラってそうだったっけ?」

ダンスを踊っていると午前零時を告げる鐘が鳴り始めました。シンデレラは慌てて言いました。

「あ、私はこれで・・・。」

「双三! お前が文句言っているうちに午前零時になっちまったぞ! 彼女、用事があるから帰っちまったぞ!!」

「はいはい、追えばいいんでしょ、追えば・・・。」

「そーそー、今日の僕は王子様だからね。因みに双三は防衛隊長さん。」

階段を駆け下りる途中、シンデレラのガラスの靴が取れてしまいました。シンデレラは気がつきませんでした。

「はあ、何でわざわざガラスの靴を階段のところに置いたんだろう？ 零時君がきちんとおいてくるようにって言ったからおいてきたけど……。」

それから数日後、王子さまはシンデレラのことを忘れられず、落として行ったガラスの靴を手がかりに探しだすことにしました。

「はあ、このガラスの靴の持ち主はどこに行ってしまったのだろう……。」

「私たちのクラスにいるんじゃない？」

「む、せっかく人がまじめに演じようと思ったのに……。」

「今更遅いと思うわよ？ それに、あのガラスの靴にはきちんと名前まで書いてありましたか？」

「話、変わっちゃうと思うよ？ クラスの女の子がシンデレラですか？ 話は変えない!!」

「いや、既に変わってると思うけど？」

そのガラスの靴は当然、意地悪な継母たちのところにもやってきましたが三人の中に該当者はいませんでした。

「え、ちよつとまだ試してないよ？」

「あんまりですねえ……強行する気です！」

「まあ、いいんじゃない？ ガラスの靴がわれても困るし……。」

そして、シンデレラの番になりました。するとどうでしょう、ぴつたりとあいました。

「あ、これは私のです。ほら、こここのところに名前が……。ほら、ここですよ、店長さん。」

「あ、本当ですね……。じゃ、王子様が呼んでいるんで来て下さい。」

こうして、シンデレラは王子様と結婚しました。

「待てーい!! 悪いがそのソーラは俺が頂いた!!」

「れ、零時!!」

「こ、ここでも強行する気ですか！」

「零ちゃん、それはどうかと……。」

「ふ、出番が少ない俺はなんでもするぜ!! ソーラ、ついてこい!」
「はいっ!!」

そして、幸せに暮らしたそうです。

「……って、それはずるいでしょう!!」

「たしかに……さすがに最後の零ちゃんはなしでしょ……」

「マスター! 帰ってきてください!!」
めでたしめでたし。

俺は話の途中から半分寝ていたのであまり聞いていなかった。

「あの、どうでした?」

「あ? ああ……よかったんじゃないのか? シンデレラは王道なストーリーだと思うからな。まあ、久しぶりに聞いて面白かったと思う。」

「そ、そうかな! 私、ちょっと心配だったから……」

何が心配だったのだろうか? ああ、意外と読むのが下手だったのだろうか?

「零時君、今日は聞いてくれてありがとう。」

「ああ、どっちかというと俺が世話になったようなもんだから気になくていい。」

そういうとソーラはほほを染めて去っていったのであった。いいことがあったのか?

ノワル：私は心優しいおばあさん！！

四十二、

そろそろ夜中の時間帯・・・よい子は眠る時間帯・・・草木も眠る丑三時・・・カーンカーンと神社の木から・・・って、この近くにそれはないな。

俺は散々寝ていたので全く眠れないでいた。夜空の月が綺麗だ・・・。

「零ちゃん、まだおきてるかなあ？」

扉をノックする音が聞こえ、ノワルの声が聞こえる。不審に思ったが俺は返事をした。

「ああ、おきてるぞ？まだ寝てなかったのか？」

「・・・うん、ちょっと眠れなかったからさ・・・あ、ちょうど面白い話を作ったんだ。えっとね、傘地蔵なんだけど・・・聞く？」

「ああ、傘地蔵か・・・って、なんだっけ？俺、詳しく知らないからな・・・。」

ノワルは本を取り出していった。本というよりもバインダーである。

「そう？それなら新鮮さがあっていいかもよ？」

「それなら、よろしく頼む。」

傘地蔵？ 読み手 ノワル

昔々、あるところに貧しいですがとても正直でやさしいおじいさんとおばあさんがいました。おじいさんとおばあさんはとても仲良しでした。

「零ちゃん、私たち・・・おじいさんとおばあさん役になっちゃったよ？」

「ううむ、いつの間にかおじいさんか・・・時間が経つのが早いなあ・・・。」

おじいさんとおばあさんは冬は雪をしのぐ頭に乗せる傘を手作りしていました。

「なあ、ノワル・・・二番機の調子が悪い気がするんだが？」

「あ、それなら油をさしておけば動くんじゃないかなあ？でも、機械が導入されて楽になったねえ。」

「そうだな、作業は今のところ管理だけでいいからな・・・。」

そして、手作りの傘を売って生計を立てていました。

「零ちゃん、楽な時代になったよね？インターネットで物を売買できる時代になるとは思わなかったよ。」

「そうだなあ、でも、今回は『傘地蔵』だからさすがにインターネットは駄目だと思うぞ？」

「そこんところは大丈夫だよ。」

「何でだ？」

今日もおじいさんは朝早く起きて作った傘を背負って都に売りに行きました。

「ね？売りに行くのはおじいさんなんだよ。」

「なるほど・・・。」

「零ちゃんが行っている間に私がインターネットで売るのが。」

「やるな、ノワル。」

「じゃ、いつてらっしゃい。」

都に行く途中、おじいさんは空を眺めて雪が降るかもしれないと思いました。

「雪崩にならなきやいいんだがな・・・近頃、雪男が山で大声出したりするからなあ。気をつけないと・・・。スキーヤーも多いからな・・・。」

そして、おじいさんが都に着いたときに雪は降り始めました。

「むう、降ってきたか・・・まあ、そのおかげで傘が多く売れるかもしれないな・・・。」

おじいさんは半日、いつもの場所で傘を売っていたのですが、雪が結構降ってきたので帰ることにしました。

「く、さすがに皆天気予報を見てたのか・・・五つ、あまっちまった・・・まあ、明日売ればいいか・・・。」

おじいさんは雪がもつと降ってくるまえに急いで帰り始めました。都ではいつもの華がなくなってしまう、どこともなく静かでした。

「なんとなくだがナレーションも暴走を始めそうな雰囲気もあるからさっさと帰るか・・・。できればタクシーを使いたいんだがさすがに余分に金をもってきてないからな。」

おじいさんは積雪三メートルを越すのではないかと思われるほどの量の雪の中を歩き始めました。

「お、遅かったか・・・ナレーションが暴走始めやがった！くそ、傘をかぶってもなんとなく意味が無いと思うぞ？ 新手の嫌がらせか？」

おじいさんがいつも都へと向かっている道は既に雪が五メートルほど積もっており、通行禁止状態になっていました。

「魔法を使えば早いんだけどな・・・。」

「まあ、零ちゃんがそんなことをしたら天罰が下るだろうけどね。」

「おい、ここでおばあさんは登場しないと思うんだが？」

「あ、そうだね。ごめんごめん、私は家で待ってるね！」

しかたなくいつもとは違う道を通って帰ることにしました。しかし、そんなことをしていたら夜になってしまいかもしれないと思っただおじいさんはおもむろに携帯を取り出してどこかに電話をかけようとしましたが電池が切れていました。仕方ないので違う道をまるで試験に落ちたかのような受験生のような感じで歩いて帰ることにしました。

「おいおい、俺は携帯なんて持ってきてないぞ？それに、結局違う道に行くのなら初めからそういえばよかったのにな・・・。」

歩いていくうちに売れ残ってしまった傘が重く肩に乗りかかっけます。これもおじいさんの商業能力が皆無だったからです。

「ぐ、それを言われるといたいな・・・。」

ああ、なんとふがないおじいさんなのでしょう・・・今頃、

家でおばあさんがふがない爺はいらないと思っているかもしれせん。

「零ちゃん、私は零ちゃんがいてくれるだけで嬉しいよ?」

「ありがとな、ノワル。だけど、馬鹿みたいに雪が降っているところにおばあさんは出てこないと思うぞ?」

「あ、そうだね。」

おじいさんは一人で妄想をし始めました。ああ、目の前には・・・

「零ちゃんはそんなことしません!」

とりあえず寒すぎたのでトイレに行きたくなったおじいさんは辺りを見渡して適当にチャックをおろして準備をしました。

「それもどうかと思うぞ?」

おじいさんはパンツをずらそうとして自分がかけようとした物がお地蔵さんだったことに気がつきました。

「・・・すんごい罰当たりなことをしようとしているな・・・俺。」

「全く、何をしようとしてるのよ!!」

「零時君、さすがにそれは・・・。」

「マスター、下品です。」

「そうだぞ、零時。」

「きたないわね、剣山はトイレに行くこともできないの?」

おじいさんが確認するとそこには6体のお地蔵様がいました。

「一、二、三、四・五・あれ? 6体いないと思うぞ?」

「まあ、そのところはいいんじゃない?」

「いっそのこと、マスターが最後のお地蔵さんになったらどうですか?」

「いや、そんなことをしたら誰がおじいさんになるんだ?」

「・・・おじいさんは天に召されたとか・・・。」

「それ、死んでるよね?」

お地蔵さんには段々と雪が降り積もってきており、おじいさんは

そんなお地蔵さんを見てとてもかわいそうになりました。そこで、自分が不甲斐無いばかりに売れ残ってしまった傘をお地蔵さんの頭に掛けてあげる事にしました。

「まあ、微妙に頭にくる台詞も含まれていた気がするが今回だけは見逃すとして……さて、お地蔵さんが可哀想だから傘でもかけてあげるかな？」

「いや、できればそのあったかそうなコートもかけてくれると私、うれしいなあ。」

「あ、ずるいです!! 私も!!」

「私も……寒い。」

「じゃ、僕も寒い。」

「そうねえ、私も寒いわ。」

「く、なんてがめつい野郎達だ……って、襲い掛かってくるなあ!! うわあ!!」

しかし、おじいさんがもっている傘の数では一人だけお地蔵さんの頭に傘を載せる事が出来ませんでした。

「俺が寒いわっ!! 既に下着だけだぞ!!」

「ま、心があたたかいことさ……ね？」

「マスター、あっためてあげますからこっちに來てください!!」

「ここに……寝てもいいよ。」

「ははっ、もてもてだねえ。」

「まあ、風邪を引かない程度にしておかないといけないわよ？」

おじいさんは自分の頭に載っている傘を最後のお地蔵さんにかけてあげました。

「因みに、俺の所持品は既に頭の上に乗っている傘だけです。これをあげたらさすがに……」

「じゃ、私たちの出番はこれでいったん終わりだから……」

「ばいばーい、マスター!!」

「気をつけて帰ってね？」

「零時、雪崩に気をつけろよ？」

「家に帰ったら復習するのよ？」

おじぞうさんを助けたおじいさんは家に帰り着きました。

「れ、零ちゃん！なんで下着姿で傘をかぶってるの？大丈夫？」

「・・・寒い・・・あたためてくれ。」

「零ちゃん！！ええと、もう・・・するの？まだ夕方だよ？」

「・・・妄想はいいからお風呂に投げ込んでくれ・・・。」

「うん！背中流してあげるね！！」

そしておじいさんはおばあさんにおじぞうさまのことを話しました。

「・・・とりあえず、ろくなお地藏様じゃなかった。うん、あんな性質のわるそうな連中を見たのは初めてだ。」

「・・・そうなんだ・・・。」

「追いはぎだな・・・俺の衣服を剥いでいきやがった。警察に通報したほうがいいかもしれん。」

「気をつけないといけないね。」

「そうだな・・・じゃ、そろそろ寝るか。」

「うん♪」

「・・・なんか、うれしそうだな。」

そして、おじいさんとおばあさんは眠り、その日の夜に・・・恐ろしいことが起きたのです。

「なんだか話が変わってきてる気が・・・。」

ごとつ・・・ごとつ・・・という音が外から聞こえてきており、おじいさんは目を覚ましました。そして、外を見て驚きました。

「くそっ！！後を付けられてたのか！！あの偽地藏達め！！」

「零ちゃん、あれが零ちゃんが言ってたお地藏さん？」

「ああ、そうだ。」

なにやらおじぞうさんたちは何かを運んできているようでした。

「はあ、疲れるなあ・・・。」

「まあ、これも人助けです。」

「零時君のためだからね。」

「ギブアンドテイクってやつだね。」

「傘のお礼がこれほどの野菜なんて馬鹿らしいわ。」

「・・・野菜を持ってきてくれてるのか？」

おじぞうさんたちは昼間のお礼として大量の野菜を持ってきたのでした。

「・・・零ちゃん、いいお地藏様たちだね？」

「・・・そうだな。俺が間違ってた。」

おじいさんはそんなお地藏様達を見て嬉しくなってきました。

「・・・でも、よくよく考えてみたら俺の財布が無いんだが・・・。」

おじぞうさまたちは家の前まで野菜を持ってくるとその野菜を置いて帰り始めました。

「いやあ、途中でひろった財布、結構入ってたよね？」

「これから朝まで飲み明かしますか？」

「二日酔いになるかもね？」

「僕の“ハニー”達のためにお金にすこし使わせてもらおう。」

「まあ、いまから分ければ十分よ。」

おじいさんとおばあさんはおじぞうさまに感謝しました。

「・・・貴様ら、許さん!!」

「れ、零ちゃん？」

「う、うわっ!! 零時がマジで怒ってる!!」

「じよ、冗談です!! マスター!!」

「本当だよ!! 嘘じゃないよ!!」

「・・・双三がやれて言ったんだ。」

「瑞樹! あんたなんて事を・・・。」

めでたしめでたし。

俺は本当に眠りかけていたまぶたを無理やり上に押し上げて、話し終えたらしいノワルを見やった。

「・・・ありがと、ノワル・・・俺、そろそろ寝そうだなわ。」

「あ、そう？それならよかった♪」

「じゃ、おやすみ……」

「最後に感想聞かせて。」

「……面白かったぞ。」

ノワルは笑って部屋を去っていったのであった。内容はよく覚えていないのだが……。

ノワル：私は心優しいおばあさん！！（後書き）

今回の話は傘地蔵でした。どうだったでしょうか？元は真面目に書くように思っていたのですが傘地蔵の話をあまり知らなかったので詳しく書くことができていなかったと思います。そろそろ、剣山零時の物語も終わりを迎えようとしており、先に言っておきますが『御注文は？』魔法使いで！』は終わりません。短編小説で出ていたのに出ていない登場人物もいたので出したいと思うし、他にも出したい人物もいます。では、また今度！！

ローザ／零時：私は鶴！／俺はナレーター！！（前書き）

今回でおとぎ話は終わります。どのおとぎ話？が面白かったか教えてくれたらうれしいと思います。

ローザ／零時…私は鶴！／俺はナレーター！！

四十三、

次の日の朝、俺は未だにベッドの上の人という奴だった。微妙に熱があり、誰も俺を学校に行かせようとはしなかった。暇なものだ。やることは特に無いし、かといって寝ようにも寝れない。このままではいけないと思ったが特に自分に出来ることはないようだ。

「マスター！お独りでは寂しいと思って私も参上しました！！」

「でたな、風邪の悪化菌！なにしにきた！」

俺は近くにあったドライバーをローザに向けた。せめてもの抵抗！気休めである。

「看病に来ました！大丈夫です！」

「何が大丈夫なんだ？」

「具合の悪いマスターなんて赤子も同然です！私に倒せない相手ではありません！！」

「……」

俺はため息をついてローザに言った。ドライバーは当然のように向けておく。

「結局、何しに来たんだ？本当に悪化させるようなことをしたらばらすぞ？」

「あ、ええとですね…この本を読んであげます！！」

そういつて取り出したのはなにやら『鶴に恩返し』という童話だった……？

「…ん？それって何か違う気がするぞ？鶴が恩返しを……」

「そうですか？とりあえず聞いてください。」

鶴に恩返し 読み手 ローザ

今は昔、あるところに貧乏爺さんが住んでいました。彼は暇人でした。

「まあ、どうせまた俺が爺さんだとは思ってたさ。へ、かまわねえよ。」

貧乏爺さんは今日も今晚のおかずを探しに山に行きました。勿論、徒歩です。

「さて、今日の晩飯は山鳥の目玉焼き・・・？じゃなくて山鳥の産みたてタマゴの目玉焼きを作るかな？」

そして、貧乏爺さんは罌に掛かった鶴を見つけました。痛々しうでした。

「そのマスター、私を助けてくれませんか？」

「あゝめんどくせえや。まあ、助けてやるよ。・・・お、怪我までしてるじゃないか・・・家にきたらどうだ？」

「はあ、ありがとうございます。」

貧乏爺さんは鶴を家に連れて帰りました。

「ほら、風呂にでも入りな。」

「重ね重ね、すみません。このお礼はいずれ、します。」

そして、鶴を騙して鍋に入れて鶴鍋にして食べてしまいました。

「うん、命はおいしく頂かないとね。所詮これが鶴に出来る最大の恩返しだ。」

おなかも膨れてめでたしめでたし・・・

俺は非常に首をひねることになった。まあ、確かにそうだろうが・・・

「ローザ、なんだか話が途中から違うぞ？」

「え？あつてると思いますよ？」

「いや、題名から間違えてるし・・・本当は『鶴の恩返し』だぞ？」

「・・・？どんな話ですか？教えてください。」

「じゃ、あんまり覚えてないけど静かに聴いてな。」

鶴の恩返し 読み手 剣山零時

今は昔、あるところにおじいさんがいました。

「はあ、私は女なのに・・・これも零時の所為・・・まあ、しょうがないわね。さて、今日も裏の山の畑に行って野菜を取った後は魔法で熊でも捕まえてこようかな？」

おじいさんは今日も山へ行き、自給自足の生活を送る為に必要なものを探しに行きました。

「よし、これだけあれば充分かな？」

そして、山を降りる途中に熊用の罠に引っかかっている鶴を見つけました。

「セレネ、悪いけどこの罠取り外してくれないかな？こけてひっかつたんだ。」

「あうう、うん・・・（その罠、私が仕掛けた奴だ・・・ソーラも引っかかるんだなあ。）」

おじいさんは鶴を助けてあげました。

「ええと、元気でね、ソーラ。」

「うん、じゃあね、セレネ。」

おじいさんは鶴を助けた後、家に帰り晩御飯を食べていました。

「まあ、結局野菜しかとれなかったけどね・・・はあ、お肉が食べたいなあ。」

すると、誰かが戸を叩きました。

「すみませーん、旅のものですが・・・。」

「あ、はい！今開けます！訪問サービスとかはお断りですけどね。」

扉を開けるとそこには白い着物を着た女の人が一人立っていました。彼女は・・・ええと・・・（しまった！何でおじいさんの家に住まわせて欲しいって言ったんだっけ？）とりあえず何か言いました。

「あの・・・この家に住まわせてください。」

「うん、別にいいよ。」

そして、その夜・・・お鶴と名乗った女の方は障子のある部屋

に入り、不思議に思っている貧乏なおじいさんに言いました。

「ええと、私がこの部屋に入っている間は決してこの部屋を開けないで下さい。もし・・・開けたら・・・。」

「あけない！絶対にあけないから！！そんなに怖い顔をしないで！目、光ってるよ！！！」

こうして、貧乏なおじいさんとお鶴の生活は始まりました。そして、お鶴が来た次の日の朝・・・お鶴は綺麗ないったんもめんを渡しました？

「どうぞ、私がお作りした木綿の布です。」

あ、いったんもめんじゃねえや・・・そうです、お鶴は木綿の布を作っていたのでした。

「ありがとう、ソーラ。」

「いえいえ、住まわせてもらっているのでこのくらい当然のことです。おじいさん、おじいさんはこの布を都で売ってきてください。」

「うん、わかった！！！」

その日の夜もお鶴は一人で障子のある部屋に入っていたのでした。次の日、おばあさんはいいました。

「あれ？ノワルがおばあさん役なの？」

「しょうがないじゃん！！文句言わない！それに、おばあさんは冒頭あたりで登場してないような・・・。」

「まあ、うろ覚えだからね・・・適当になってきたんだよ。」

「とりあえず・・・おじいさん、お鶴さんはなにをしているのですかねえ？」

「さあなあ？お鶴さんの布は高く売れるからなあ」

そして、ある日・・・好奇心に負けたおじいさんは障子に穴を開けて中を覗こうとしました。

「なんだか・・・覗き魔になった気分・・・。というより、覗くならいいよね？」

「こら！おじいさんが覗き込むんであっておばあさんは覗き込まないはずよ！！！」

「いいじゃん、硬いこと言わないでさあ？」

「むう、あんたがソーラの部屋を覗き込むのが気に食わないの！」

「へえ、セレネって・・・」

「そういう趣味でもありません！！あんたみたいなオヤジ性格の奴は撃退よ！！」

覗きこんだ部屋の置くには鶴が一匹いて、自分の羽で布を作っていました。

「やっぱりソーラって何をさせてもうまいんだねえ・・・。」

「因みにセレネは何をやらせてもだめだねえ。」

「むかつ・・・できるわよ！」

「へえ、どじっ娘のあんたに何が出来るの？零ちゃんに頼りっぱなしじゃないの？」

「むう・・・。」

「・・・お二人とも、そこで何をやってるんですか？争うと一発でばれますけど？」

鶴が覗かれていることに気づき、おじいさんたちに言いました。

「の、覗きなんて・・・私、もうこんなところで生きていけません！さようならっ！！」

「ああっ、違うのよ！！話も変わってるし！！おじいさんは犯人ではありません！！」

「そうだよ！おじいさんじゃなくて全部セレネが悪いんだよ！！」

そして、おじいさんたちの手元にはお鶴が最後に作った綺麗な布が残ったのでした。おじいさんとおばあさんはその布を大切にしました。

「セレネ、それさっさと売って何かおいしいものでも買ってきて。」

「ええ！何を言ってるのよ！！」

「だってさ、その布が売らなくてもお金くれるの？ごはん、私たちに食べさせてくれる？」

「・・・まあ、確かに・・・。」

「思い出？そんなものはアルバムで充分！金になるものは売っちゃ

え売っちゃえ。」

「うわ、冷たっ!!」
めでたしめでたし

俺は途中から調子に乗っていていたのでローザの状態をあまり確認していなかった。

「ZZZZZZZZZZ・・・」

「うお、寝とる・・・。人が折角、話をしてやったのに・・・まあ、いいか。」

俺のベッドにいつの間にか入り込んでいるので揺り動かし、ローザを起こしに掛かる。

「おおい、ローザ。おきろよ。」

「・・・ZZZZZZZZ」

「微妙に反応が変わったなあ・・・。」

めんどくさくなった俺はローザをそのままにして自分も寝る事にした。そして、事件が起こったのが夕方である・・・。

とてつもない衝撃を感じて俺はベッドの上から落ちた。

「ぐはっ・・・。」

「零時!!」

ぐいっとそのまま掴まれたかと思うと視線がふらふら・・・KO寸前のボクサーみたい。そして、目の前にはセレネのアップの顔が・・・しかも、微妙につり目がちの目は俺に言外での非難を行っている。

「どうしてローザが隣で寝てるのよっ!! しかも! さっきまでの体勢は何!!」

「ふあ? ええとだな・・・言ってることが・・・わからないのだから?」

がっすんがっすんと俺の体を前に後ろに振り回し、俺の視線は天井↓セレネ↓床↓天井といった感じに無限ループ・・・さて、誰かがこの膠着状態を止めてくれるような救世主などは異世界から登場

してくれないだろうか？いや、この際窓を蹴破つてでも登場して構わない。いっそ、召喚してみるか？

「どういふことなのよ！！あんた、ローザに触れてたわよっ！！え？どういふことなのよお！！」

「セレ．．．くる．．．し．．．ぐりや．．．世界が．．．まわ．．．」

「どうしてなのよお！！」

「説明．．．いできな．．．」

唐突にセレネが俺の手を離れた。当然、俺は慣性の法則に従い、ちようどセレネとは反対方向に降られていたのでそのままベッドにダイブ．．．よかった、死ななくて．．．。

「．．．セレネ、なんで零時君を振り回しているの？」

救世主はソーラだった。俺はさしずめヒロインか？ああ、ドラゴン（セレネ）に監禁状態のお姫様（俺）を助けてくれたのだ．．．ありがとう、勇者^{ソーラ}。

「だって！零時ったらローザに触ってたのよ！！しかも！！触れる面積が大きい！！」

「．．．！！！！」

こちらを見た勇者の顔は魔王だった。手のひらを返したように俺の胸座を勇者（いや、魔王だな。）は掴み、再び俺は前後左右に振られ始めた。心なしかセレネよりも激しい．．．。

「．．．．．どういふこと．．．ですか？」

「ソー．．．敬語は．．．やめたんじゃ．．．？」

「零時君が近くにいると思えるときはタメ語です。ですが、遠くに感じるときは敬語です。」

「こ、こんなに．．．近くに．．．いるのに．．．。」

「いえ、地球から土星ぐらいの距離を感じます。」

離れていても心は一つ。& amp; #25681；まれていたら心はばらばら．．．ってことなのか？たまにしか見ないからいいものなのか？同じ機械をずっと見ていたら確かに構造などを覚えてし

まうので飽きるだろう・・・そういうことなのか？新たな・・・勇者よ・・・この魔王から私を助けたまえ・・・。

「ただいま・・・って！ソーラ、何してるの！ご乱心？零ちゃんが苦しそうだよ！！」

再び俺はベッドに倒れ、新たな勇者は期待を裏切らずに助けてくれた！！おお、君こそわれわれの光だ！！希望だ！！全てだ！！目に映る真実だ！！

「ノ瓦尔さん、由々しき事態です・・・。」

「え？どうかしたの？零ちゃんの風邪が実はインフルエンザだったとか？」

「違います。」

「じゃ、何？」

「ローザに触れたんです！！あの！零時君が！！しかも・・・」

「いやらしい手つきでよ！！」

「それってどういう・・・」

ノ瓦尔の顔が実は裏面のボスの存在であろう物体に変わっていく。さて、ここに村人Aの前にいきなり実力なら

ドラゴン 魔王 裏面のボス

があらわたことになる。さて、こうなったら村人Aはどうするべきか・・・。

「あ、扉から逃げようとしてるわ！！」

「させませんよ！」

「逃がさないよっ！！」

「甘い！！」

俺は窓から飛び降りたのだった・・・てっきり一階だと思ったのだが・・・

「そうだ！！ここは二階・・・うわああああああ！！！！」

ローザ／零時：私は鶴！／俺はナレーター！！（後書き）

久しぶりになりましたが、どうも。今のところ、後、一回までがこの章です。次章は剣山零時の物語、エンド編です。

零時：よし、勉強をしよう！（前書き）

この話でこの章は終わりです。

零時：よし、勉強をしよう！

四十四、

風邪？はて、いつの話かな？俺・・・風邪なんてひいてたっけ？まあ、そんなことどうでもいいか・・・でも近頃の記憶が綺麗さっぱりない気がするんだよね。

「零時、そろそろ期末テストが近いわね？」

「そうだなあ、でも、俺のノートにはそこまで何も書かれていないんだが？どうも、授業の中身もかなり変わっているみたいだし・・・。知らないことのオンパレードだ。」

「それはそうでしょうね、飛び降りた後に記憶、なくなっているみたいだから。」

「え、誰の記憶が無くなってるって？」

「え！いやいや、独り言よ！気にしないで。」

「さて、お二人もお話をしていられる余裕はないと思うんだけど？」

「そうだね、二人とも・・・テスト、大丈夫？」

「任せてくれ、このまま行けば俺は間違いなく赤点をたたき出してしまい、拳句の果てに夏休みに補講がスケジュールに侵入してきそうだ。断言しても大丈夫だ！！」

「まあ、零ちゃんは当然だと思うけど・・・セレネは？大丈夫だね？」

「私？ええと、赤点になるのは国語ぐらいかな？あ、後は・・・他にも結構あるかな？」

「古文も？」

「そうね。ええと、他は平均的に解けていると思う。」

「今度のテスト、難しいよ？平均じゃ、まちがいなく赤点だろうね。セレネは諦めたら？」

「零時君、今から勉強すれば大丈夫かな？」

「大丈夫？そんな言葉は俺の辞書に載ってないよ。」

「私の辞書にも載ってないわ。」

「全く、そこまで薄い辞書を見たのは初めてだよ。」

「・・・とりあえず、覚えるべきところを紙に書いて、覚えたらその紙を食べるといいと思う。」

「それはちょっと・・・。」

「こういうときは・・・助っ人を呼ぼう。」

「助っ人参上！！マスターを助けに私、ローザがやってきました。」

「零時君、ローザを呼んでもあまり解決にならないんじゃない？」

「……そうだな、助っ人呼ぶなら瑞樹とかのほうがよかったかな？」

「ひ、ひどいです……。」

「とりあえずローザに問題を出してもらおうとして、セレネと零ちゃんの得意科目って何？明日あるテストは国語、保健体育、日本史だよ？苦手分野から勉強したほうがいいからさ。」

「俺の得意分野は国語だな。これなら別に勉強しなくても六十点以上は確定だ。因みに、苦手分野の数学は赤点を必ずとるだろうな。」

「じゃ、セレネは？」

「私は……数学かな？でも、明日数学無いから平均的に取れると思うけど？」

「はいはい、じゃ、ソーラの得意分野が零ちゃんの苦手な数学であることを祈ってソーラの得意分野って何？どう考えてもソーラに欠点はないと思うからね。」

「私？私は保健体育が得意。」

「へえ、珍しいな。でも、なんで得意なんだ？」

「それは……零時君のために……。」

「……ええと、とりあえず零時はソーラに勉強を教えてもら

うとして、私たちもそろそろ勉強したほうがいいんじゃないのかな？」

「そ、そうだね。じゃ、零ちゃん、がんばって！」

「ああ。じゃ、ローザは悪いけど問題を出してくれ。」

「てっきり帰れと言われるかと思いました。というより、なんだか出番が少ない気がします。もうちょっと私がマスターに引っ付いているような感じがよかったです……。」

「そんなことはどうでもいいからほら、日本史でも出してくれ。」

「零時君、日本史の覚え方はやっぱり書いて覚えるのが一番だよ？まず、その物事に関係してくるものも覚えられると効率いいんだけど……。」

「じゃ、問題を出しますね？第一問……あ、因みに答えるときは『ピンポーン』と頭を叩いて手を上げて答えてください。」

「わかった。」

「では、気を取り直して第一問！大化の改新で殺されたのは誰でしょう？」

「蘇我入鹿。」

「残念ながら『ピンポーン』が抜けていたので先ほどの答えはなしです。残念でしたね？」

「どうでもいいと思うんだが？」

「では、第二問！蘇我入鹿の父は？」

「『ピンポン』答えは……」

そんなこんなで勉強会は続いていった。そろそろ夜も明けようとするところで勉強会も終了した。

期末テスト当日。俺は愕然とした思いに駆られた。因みに駆られたのは今日のテストが終わった後である。

「……範囲、間違えてたな。」

「うん、全く違うところから出てきてたね？」

「俺が全く知らないところが出たんだが？」

「あ、零ちゃんは数日ほど休んでいたからかな？」

「とにかく、保健体育以外は赤点だな。」

俺は暗澹たる心持で家に帰ったのであった。

勿論、俺の頭の中をスキャンなどしてみればきつとお味噌が詰まっているに違いないとおもう。

しかし、その脳みそもそろそろ賞味期限が切れているのかもしれない。夏休みに入る数日前、俺は先生から呼び出され、夏休みの補講を言い渡されたのであった。今回のテストは簡単だったのにあれだけ点数をとれない人は二人目だといわれ、俺より前に先生に呼ばれたのはセレネだった。まあ、当然と言えば当然かもしれない。

零時：よし、勉強をしよう！（後書き）

前書きで宣言したとおり、今回でこの章は終わりです。次回はとうとう最終章！剣山零時の物語もENDを迎えます。因みにENDはそれぞれありますので、期待してください。

剣山終章 それぞれの終わり（前書き）

終章です。因みに、終わってもある程度は剣山零時達のメンバーで番外的なことをやっていきたいと思っています。勿論、次まで読んで読めるのをやめても大丈夫だと思います。

剣山終章 それぞれの終わり

四十五、

俺はその日、瑞樹達と共に買い物へとやってきていたのであった。

「いやあ、なんだか久しぶりのような気がしないかい？」

「しないぞ。」

「私もいるからね。ほら、さっさと用事があるのなら済ませなよ。

今日は三人が働いているレストランに行くんでしょ？まあ、冷やか
し程度しか出来ないだろうけどさ。」

「そうだな、用事はさっさと済ませるか・・・。」

俺たちは夏休み初日から遊びに出かけており、今のところ三人で
一緒に行動していた。

誰かに誘拐されることもなく、学校の屋上に幽霊が出るわけでもな
く、ローザと共に奪われた書類を取りに屋敷に行くことも無い。ま
あ、またこれからそういうことが無いとは言いつけないのだがとり
あえず今のところは安心して生活できる。まあ、この前の期末のテ
ストで俺は赤点をとってしまったので夏休み中に補講に行つて再び
テストを受けなくてはいけけないのだが……。しかも、補講対象者
は俺とセレネのみである。

「とりあえず三人で行動するよりもそれぞれがわかれて用事を済ま
せてこようぜ？」

「でも、そうしたら三人で来た意味が無いんじゃないの？」

「そうだぞ、零時。僕としては君たち二人にぜひとも見てもらいた
いもの・・・そして、出来れば共感してもらいたいものがあるのだ
よ。だから、三人で行動しよう！！」

「？瑞樹がそういうのなら見せてもらおうわよ。」

「・・・・・・。（ま、簡単にどういふところか想像出来るけどな。）
」

俺としてはなんとも言えないな。どうせ、瑞樹の“ハニー”を選

びに行くってことじゃないのか？ま、まあ・・・いいか。

そして、俺たちはカラフルな人形が並んでいる場所へとやってきた。人形というと瑞樹が非常に怒るのでどのように呼べばいいのか悩むものだ。

「ほら、双三、零時、輝かしい“ハニー”たちを見たまえ!!」

指差す方向にはやはり、美少女フィギュアが陳列されていた。いつも瑞樹が俺をひっぱってくる店とは違う。

「秘蔵の店だよ。」

「いや、どうでもいいんだが・・・。」

「そうよ、買うものはさっさと買いなさいよ。」

「くすん、零時が冷たいのは知ってたけど双三も冷凍食品みたいなんだね。」

意外なことに双三は平然とそれ（美少女フィギュア）を眺めていた。

「なあ、普通は女の子ってこういうの嫌いなんじゃないのか？」

「何？剣山みたいに例外って言うものもあるわ。私はそういうことは気にしないの。」

「へえ、そうなんだ・・・意外だな。」

「そりゃどうも・・・あら？可愛い猫ね・・・。」

店の中で瑞樹は出てきた店員さんとても親しそうに俺たちが全くわからない話をしている間、俺と双三は店の前にやってきた子猫（虎模様）を眺めていた。

「・・・懐かしいな・・・。」

「え？どういうこと？」

「ああ、少し前までこんな猫を飼ってたんだって言っても小学校の頃だな。」

「へえ、機械馬鹿の剣山が生物を飼っているなんて意外だわ・・・で、その猫はどうしたの？」

「ある日・・・いなくなっちゃった。帰ってこないからなあ・・・いなくなつて半年はずっと探してたよ。かなり礼儀正しい猫だった

のを覚えてる。」

「名前はとういうの？ラゴ○？それともバ○ウ？」

「……そんな名前じゃないぞ。名前は……」

店の中から瑞樹がこっちに両手を振って走ってくる。その結果、猫は瑞樹のことが捕食者に見えたらしい……。あつという間に姿を消してしまった。

「ほら、急いで次行こう？用事は済んだからさ……」

「そうだな。で、次は双三の用事を済ませるとするか。」

「そうね、じゃ、悪いけどついてきてもらうわ。」

双三の用事はゲームセンターにあるらしい……。おもにゲームセンターの不良がよくいる場所である格ゲーのところに消えてしまった。

「双三はきつとあそこでストレスを発散してるんだろうな……」
「……そうなんだろうな……」

時たま聞こえてくるギャラリーの歓声と先ほどまで一緒にいた人物の雄たけびが聞こえてくる。

「ああ、そうだ……。久しぶりに妹が零時に会いたがってたぞ？」

「そういえば瑞樹の妹の……。何とかちゃんとは別の高校に行ったそうだな？たしか、俺たちと一歳だけ離れてるんだっけ？最後見たときはメガネかけてめちゃくちゃ太ってたな……」

「あの頃が懐かしいものだよねえ……」

「まあな、中学の頃から全く見てないが……。いや、小学生の頃かな？」

瑞樹の妹の顔などほとんど思い出すことが出来ない。兄との折り合いが悪く、彼らの祖父が住んでいる場所へと引っ越して小学校の頃を最後に全くあっていないのだ。どこで何をしているのか知らない。

「名前はなんだっけ？」

「さあねえ、僕も忘れたよ。」

「……薄情な兄貴だな……。お前、妹好きだろ？」

「いや、義妹は好きだが妹は嫌いだ。」

「・・・大して変わりないだろ？」

「ふ、これだから素人は困る。」

「玄人も十分困るけどな・・・。」

俺たちが何もせずに話していると双三が帰ってきた。その顔は冷静沈着だった。

「さ、用事はすんだから次、行きましょ・・・。」

「・・・なあ、用事って結局なんだったんだ？」

「私に楯突く弱者がいたからちよつと遊んであげてたの。」

「そうなんだ・・・。」

帰り始めた俺の耳に聞こえてきた言葉は

「野郎！ノーダメで勝ちやがっただど！ありえねえ！！」というものだった。なんとなく、瑞樹の趣味を知っても引かなかった理由がわかった気がする。

「さて、次は零時の用事を済ませる番だね。」

「そうね、どこに行くの？」

「そうだなあ・・・とりあえず俺が行くところは何も無いんだが？用事って言っても特に無いし・・・昨日既に行ったからな・・・」

「本当に何も無いの？」

「そうだよ、なにかないのかい？」

俺は二人にそういわれ、頭の中に何か用事があったかどうかを思い出す。

「・・・そうだな、そういえばまだあった。」

「じゃ、そこに行こう。」

「そうね、さっさと行くわよ。」

俺が向かった先はとある本屋だった。そこには当然のようにさまざまな種類の本がおかれている。しかし、俺が用事があるのは本ではない。

「へえ、意外と読書が好きだったのね？」

「まあな、よく読むぞ。」

「零時、僕もここに用事を思い出したのでちよつと席をはずさせてもらうよ。」

「あ、私も欲しかった参考書があるから行ってくるわ!!」

そういつて二人は駆け出していった。俺は何も買わずにとりあえず暇そうにしている店員さんに話しかける。

「あの、姉さん……。」

「……お客さんにお姉さん呼ばわりされる言われは無いわ。」

「……そんなことを言わなくてもいいじゃないですか……。」

「零時、仕事の邪魔になるから相手してあげられないのよ。」

「店の中、がらがらですけどね。」

「……いい加減にしないと警察を呼ぶわ。今すぐにこの店から出て行くか警察と一緒に刑務所で同じ屋根の下で暮らすか選りなさい。」

「わかりました、帰らせてもらいます……。あの、誕生日おめでとうございます。」

俺はそういつて慌てて本屋から出たのであった。今日は彼女の誕生日である。

「はあ、姉さんの冗談はさすがにきついなあ……。」

「零時、姉さんがいたのかい？」

「初耳だわ。」

いつの間にか俺の隣には二人がいた。それぞれにそれぞれが持っていたような本（瑞樹はなんだか肌の色が多い本、全体的にピンク色で塗られていたりもする。そして双三のほうは数式がびっしり馬鹿みたいに書かれている本を持っている。）を掲げている。そんな、なんだかギャップが激しすぎて恥ずかしい。

「とりあえず……。俺の用事は終わったからレストランに行こう。」

「……そうね、とりあえずそうしましょ。」

「零時、面白くないぞ。」

「ま、そういうな・・・姉さんのことを詳しく話すと（俺が）危険だからな。」

俺たちは素晴らしいながらレストランへと向かったのであった。

レストランは結構人気だったらしく、時間帯も重なって人が多い。俺たちは待たされることになってしまった。

「剣山、ここで働いてるらしいからどうにかできないの？」

「下っ端に何ができる？ おしぼりをプレゼントするぐらいしか出来ないぞ。」

「僕としてはウェイトレスさんをずっと眺められるからね・・・頭の中に収めることが出来て本望だよ。」

馬鹿一人を除いて俺たちは静かに待つことにした。

「ところでさ、零時に聞きたいことがあるんだけど・・・。」

「何だ、瑞樹。」

「あの三人・・・いや、この前家にいたあの子もいれて四人とはとても親密そうだからね、ちょっと聞きたいことがあるんだ。」

あの子・・・？ ああ、ローザのことだろうな。

「そうね、私も聞きたかったわ。」

「何だ、二人して・・・？」

俺はなんとなく二人の目が怖かったので目をそらした。

「零時の中で一番親密だと思う人は誰だい？」

「ううむ、質問の意味がよくわからないんだが？」

そういう俺に双三はできの悪い生徒を見るような目つきをし、告げた。

「簡単に言うはずと一緒にいたらいいなあと思う人は誰ってことよ。」

「飽きない人物のことか？」

「そうじゃないけどね・・・とりあえず、誰が一番大切だと思ってるんだい？」

「それは・・・」

俺は頭の中でそれぞれのことを思い出す。セレネだろうか？ それ

とも……ソーラか？ノワルかもしれないし……ローザかもしれない。え？それってどういう……？

「瑞樹、零時が混乱しているわ。」

「うん、きつと自分に攻撃を始めるに違いないよ……零時、零時！！！」

「はっ！！な、何だ？」

「とりあえずこの夏休みにその人と話をするって言うのはどうかな？あ、因みにこの話をするのは零時とその人が絶対に誰にも邪魔されないような条件下でしないと意味が無いからね。」

「剣山のことだから朴念仁なことを言いそうだけどね……ま、そこまで鈍いってことじゃないと思うけどさ。」

「まあ、期待してるってわけなんだけどね……おっと、そろそろ僕たちの番のようだね。ほら、行くよ、零時。」

「そうよ、さつさとウェイトレスさんにご注文をとってもらうのよ。」

「あ、ああ……。」

ぐだぐだになりかけのこの状況下で二人は俺を引っ張ってテーブルに引っ張っていった。セレネがやってきて水とおしぼりをおいていった。俺は隣ではらはらしながらそれを見る。

「ご注文がお決まりになりましたら呼び鈴を押してください。」

「……。」

その後、俺はまだ決まっていけないのに二人が勝手に呼び鈴を押した。やってきたのはソーラだった。

「……かしこまりました、親子丼とハンバーグと……後は？」

「あ、ああ……じゃ、オレンジジュースで……。」

そういつて去っていき、今度はノワルがやってきた。

「はい♪おまちしましたぁ♪親子丼とハンバーグとオレンジジュースですね。」

「……。」

なんだかはめられている気がしてならないのだが……まあ、

それはいいでしょう。そして、食べ終え（飲み終え）た俺たちのテーブルに最後にローザがやってきた。

「はーい！ お皿をお下げしますねえ！」

「・・・いや、何でお前がここにいるんだ？」

会計はワリカンなのだが・・・なんとなく俺が一番損をしているような気がしてならない。いや、なんとなくではなく絶対に損をしている。

「零時、とりあえず今回はここまででいじるのはやめておくよ。」

「だけど、きちんと決めなさいよ？」

そういつて俺を残して瑞樹と双三は予定よりかなり早くに帰ってしまった。俺はバイトがあるのでそのままなのだが・・・。

俺は・・・俺は一人で考えるのが一番なのだろう。

その日の夜、俺は一人で帰り道を歩いていた。当然、心を占めるのは・・・。

「・・・決めろって・・・どういことだ？ 誰かに相談したほうがいいのかもな・・・。」

俺にとって、彼女たちは何なのだろうか？ それは・・・今の俺にはわからない。

剣山終章 それぞれの終わり（後書き）

結構前から行っていたとおり、終章となりました。なんだか思い返してみればあまり魔法は関係なかったような・・・そんな気がしました。それで、先に告げておきますが、続きの話は「If」でいきたいとおもいます。剣山零時だけではわからなかった部分（魔法使いなのに黒猫みたいな眷属がない！！）などというところも改善し、もうちょっとだけ魔法が絡んだ話にしたいと思っています。先に明かしておく、当然、零時が主人公です。ですが、もうちょっとだけまともな性格にしたいと思います。それでは、また今度！！

セレネ：終わりは月の下で！！（前書き）

えゝENDシリーズ第一弾です。どのENDがよかったか教えてください。またその人での続きのENDをもう一つ、書きたいと思っています。

セレネ：終わりは月の下で!!

セレネEND

夕方の海岸にはそこまで人がいなかった。既に月が出ているのでどっちかと言うと夜だろう・・・それなのにとある少年が未だに水の掛け合いをしているバカップルを眺めている。そんな彼に一人の少女が水をかけた。

「うわっぷ!!」

「ちょっと!きちんと人の話、聞いている?」

その場には不釣り合いな存在で彼らは制服を着ており、砂山を椅子に座っている。微妙に場違いである二人をカニが無遠慮に見上げて去っていった。

「ええと、なんて言ったんだ?」

「あのねえ・・・何で今日の補講が終わって急に海に行こうとか言い出してここに来たの?既に夕方だったのよ?よくよくみたら月が顔を出してるわ!」

「ほらまあ・・・月が綺麗だし・・・。」

「・・・これ、デートのつもり?」

「ええと、多分、デートだ。・・・なあ、セレネ・・・かけっこ、しないか?」

いきなり提案した少年に隣に座っていた少女は変な顔をする。

「何ですよ？デートでそんなことする？」

「ええとだなあ・・・結構前に負けたのが悔しかったから特訓したんだ。それを試したい。」

「砂の上を走るのは得意なの？」

「いや、正直初めてだ。デートも初めてだ。バカみたいに緊張して、苦しいものだ。」

「じゃ、なんでそんなことするのよ？」

不審者を見るような目つきで少女は少年を見やる。少年はためいきをつく。

「なんとなく・・・だ。」

「全く、今日の零時はどうかしたの？いきなりデートなんか誘って・・・」

「・・・ええと、ダメだったのか？」

「・・・ま、いいわ。で？どうするの？」

「勝ったら負けたほうの心の悩みの話を聞く。」

「何か困ったことがあるなら私が話を聞くわよ？当然のように無条件でね。だって私は零時の師匠だから。」

少女はそういつて胸をドンと叩いた。少年は先程より暗くなった気がする。

「ドジだけどな・・・。」

「何か言った？」

「いえいえ、何も言ってますん。」

「かけっこなしで構わないわ。早く話さない。」

「・・・師匠を弟子が超えたら・・・師匠は弟子からいなくなるものなのか？」

少年はそういつて傍らの少女を見る。少女は少しばかりぼうつとしたような感じでそれを見ていたが呟いた。

「そうね、いなくなるわ。教えられることがないからね。」

「・・・そうか。」

少女は肩を落とした少年に再び水をかけた。

「・・・うわっぷ!!・・・へへ、涙の味みたいだな。」

「零時、あんた少しばかり悦に入ってるない？」

「何でだ？俺がうれしそうにしているようにでも見えるか？」

「あんたが私を超えることなんてありえないわよ。なんでだって？
簡単なことよ……私が再び零時を越えてしまえばそれで構わ
ないからね……」

「……言ってることがわからんのだが？」

少女は再び涙の味がする水を少年の顔にかけた。その目は燃えて
いる。

「零時、あんたは私を超えることが出来ると思うの？」

「……うん……嘘嘘！！俺にはちょっと無理かな？」

「そうよね。」

「ああ、そうだ。……セレネ、悪かった。」

「わかればいいわ。さ、帰るわよ。デートなんて今度からいつでも
行ってあげるわ。」

「そうだな……ありがとうな。」

少年と少女は同時に立ち上がり、月の方向に歩き出した。いつも
より月を大きく感じた少年は隣の少女に尋ねた。

「なあ、月ってなんで綺麗なんだ？」

「簡単なことよ、大体の人は見上げてため息をつくわ。それで、今
見えるあの月のこと、好き？」

「まあな・・・。」

少女は月がバックになるように少年の前に走り振り返った。

「・・・それなら、今零時の目に映ってる月は・・・好き？」

少年は首をかしげ小さな声で言った。

「・・・俺はそんな風に輝いてる月が大好きだ・・・。」

「え？なんていったの？」

あからさまにからかい口調の少女に少年はそっぽを向いて黙って少女を追い越した。少女はそれを追いかけて、耳元で告げた。

「・・・弟子に師匠が甘えたって大丈夫だね？」

「・・・さあな？とりあえず弟子が師匠に甘えても罰は当たらないと思う。」

月光に照らされた影はいつの間にか二つではなく大きな一つになっていたのであった。

ソーラ：終わりは太陽の下で！！

ソーラEND

太陽が真上に輝く時刻・・・外にただで煮えたぎりそうなのは近年の地球温暖化の所為に違いないだろう。そんな日に好んで外の公園にいる子どもたちはいない。今頃クーラーの効いた涼しい室内でゲームなり何なりしているに違いない。アスファルトに卵を落とせばおいしい目玉焼きの完成が期待できそうな公園に二つの人影があった。

「・・・・零時君、どうかしたの？今日は暗いけど・・・・？」

「ああ、ちょっと聞きたいことがあるんだけどさ・・・」

二人して汗をかいておらず、この真夏の太陽も彼らを取り巻く景色の一つでしかなかった。太陽は静かに輝いているだけだ。

「言えないのなら話さなくても・・・・。」

「・・・・これをいえないとき・・・・俺、迷っちゃう気がするんだよ。」

少年はそう答えて座っていたブランコをこぎだす。まるで自分の考えを更に揺らしていくかのように・・・・。

「・・・・そう？それなら一緒に私も迷ってあげる。」

「・・・・いや、俺が迷ってるのは・・・・。」

少年は口ごもり考えをまとめる。それに共鳴するようにブランコも動きを止め、そして再び話は振り出しに戻った。少年はまた、黙り込んでしまったのだ。

「……二人で迷えば一人のときより早く答えに向かえると思う。私に話してくれないかな？私、何でも出来るよ！！だって、私は魔法使いだから……。」

ブランコに座る隣の少年を見て少女は告げた。その答えに少年の優柔不断な心は動きを止めようとしているブランコになっていた。

「……あのさ、ソーラは俺とずっと一緒にいてくれるのか？」

少年は隣に座る少女の顔を見ることが出来ないでいた。なぜなら、拒否されたときに自分の表情を相手に見られたくないから……

「……ダメって言ったら零時君、どうする？」

「俺は……さあ、わかんない。」

少年は再び黙り込んだ。そんな少年を太陽は明るく厳しく照りつける。

「でもさ、それって所詮はifの話だよ。」

「え……？」

ブランコから少女は飛び降りてゆつくりと少年の前に歩んできた。不思議そうな顔をする少年に答える。

「もしはないよ……今は今だから……零時君は聞いているんだから……私は答えなきゃいけないんだ。当然、私はずっと零時君の隣にいるつもり。」

はにかみながらも少女は少年に告げた。少年には赤く染まった少女の顔が暑さのためなのか恥ずかしさからくるものなのか判別できなかった。それほど、彼は混乱していたのだ。

「あ……俺……」

少年は普段は微妙に鋭い目を大きく開けて相手を今日はじめてはつきり見た。

「零時君がようやく見てくれてうれしいよ。朝から、目、あわせてくれなかったからさ。」

少女はその目をしっかりと見据えたのだった。その目が太陽のように輝いていたと感じる少年はしばし見詰め合って目を逸らした。

「別に逸らさなくてもいいのに。」

「い、いや……なんだか……昨日からおかしくなってさ……」

少年は首をかしげながらブランコから立ち上がり逃げようとした。勿論、少女がそれを許すはずも無い。

「ほら、詳しく話して？全部、私が聞いてあげるから……」

「……わかった。」

普段から真面目である少女の前では微妙にあきらめ気味の少年も素直になるしかなかった。言葉を多く知っているわけではないが少年は信じる事が出来ると思う少女に胸のうちを告げたのであった。

「・・・俺がまたそう思うようになるなんて思わなかったよ。」

「まあ、確かに・・・でも、私が初めて零時君に会ったときはそうだったよ。」

「・・・俺はもうあまり記憶が無いけどな。」

「そうだろうね、あの子・・・セレネももうほとんど覚えてないっていつてたから・・・でも、私は忘れることは無かったよ。だってさ・・・」

少女はふと見上げた先に輝く太陽を見つけ、目を細めた。少年は彼女の言葉を静かに待った。

「・・・あれから少し大きくなって・・・零時君を探すのをやめようと思ったことがあったんだけどさ・・・魔法使いならそんなことぐらいできると思ったんだよ。」

「・・・それで？」

少女はどこからか古ぼけた写真を取り出し、少年に見せた。そこには少年の幼き頃のあどけない微笑が写っていた。

「・・・あの時写真なんて撮ってたのか？」

「ううん、瑞樹君から譲ってもらったんだ。私、小さい頃の零時君を知らないからね。」

少年から大事そうに写真を返してもらい、少女は続けた。

「私さ、小さい頃は外を知らない子犬みたいだったんだ。太陽が出ている間は遊びまくって・・・といっても遊んでくれる相手は一人もいなかったけど。だからさ、独りで遊ぶの。勿論、一人で走り回るだけ・・・。」

暗い話だが微塵も感じさせずに少女は続けた。

「でも、それでよかったんだ。ずっと独りでいるうちに太陽を知らなくなつて夜中に遊ぶことが多くなつたの。だって、友達いてもいなくても、独りならいつでも遊べるよね？」

「・・・そうだったのか・・・。」

「それでね、泣き虫のセレネと遊んでいるときに瑞樹君にあつて・・・私、零時君に会ったんだ。私はさ、独りで遊んでいてよかったと思う。」

そう語る少女の瞳を少年は虚ろな自分の記憶の中のものと共有することが出来た。そして、呟く。

「ま、そのおかげで俺もソーラに会えたのかな？」

「・・・そうかもね？それでさ・・・今度、二人だけでどこかに行かないかな？こんな太陽の下でさ？」

少年は頷いていった。

「・・・ああ、でも・・・」

そういった少年の前で立っていた少女はふらりと倒れ、受け止めた少年の腕の中で眩く。

「・・・帽子は持っていないといけないみたいだね？へへ、受け止めてくれてうれしいよ。」

「このぐらいは当然だ。」

少年は笑い、少女も笑った。輝く太陽の下、幼き日々を思い出す二人がいたのであった。

ノワル：終わりは暗闇の中で！！

ノワルEND

豪雨が降り、外は真っ暗であった。学校の屋上には夏休みなのに二人の高校生が立っていた。片方は壁に引っ付いて震えており、もう片方はそんな真っ暗な世界を見渡している。

「うう、あいつがでてくるんじゃないのか？」

「大丈夫だって！」

震える少年の両手を握り、少女は苦笑しながら安心させるように告げたのであった。

その日の朝から少年は彼の苦手としているお化け屋敷なるものを三件ほど回っており、すでにグロッキー状態である。

それもこれも少年のお化けに対する恐怖を克服させる為である。

怯える少年を笑いながら励ましてここまでやってきた。

そして、彼のトラウマの元凶である学校の屋上へとやってきたのであった。

それまでは明るかった空は一転し、屋上に出た瞬間に豪雨が振り出した挙句に空を深夜のように闇に変えたのであった。目が慣れていない少年には何が起こっているのかさっぱりわかっていない。校舎内に戻ろうとしたのだがなぜか扉が開かないのである。因みに、それは少年が外側にしか開かない扉を内側におしまくっていたからである。それには全く気がついていない。

「ほら、立って？」

「うう、無理だ。」

その場に座り込み、少女のふともも部分にしがみつき、少年は再び震えだしてまた少女は苦笑する。

「はぁ、零ちゃん、怯えすぎだよ。」

「……いや、怖いものは怖いんだ。」

少女の太ももにしがみついて少年は少女を見上げて真顔で言った。
なんだか開き直ったような感じを漂わせる。

「全く、ちょっと立ってくれない？」

少女を軸にして少年は必死に立ち上がる。半ば抱きつくようにして少年は立ち上がることが出来た。だが、足はがくがくである。

「立ったぞ？」

「OK……。」

少女がそういうと同時に彼女の後ろから白刃が振り落とされたのであった。それまで震えていた少年はその白刃をとっさに右腕に魔力を込めて受け止める。

「……くっそお！！不意打ちか！！」

「……。」

相手の姿を確認することは出来ない。未だ目を完璧に慣らす事が出来ていない少年は白刃を持った相手を突き飛ばす。

「ノワル、怪我してないか？」

その姿を見て抱かれている少女は答える。

「当然、零ちゃんが助けてくれたから怪我なんてしてないよ？」

「だけど・・・また、あいつが？ええと、あのドレスの少女が連れて行ったかと・・・」

先ほどのまでの情けないところはなくなっており、猫に狙われた絶体絶命のネズミみたいな表情になっている。つまり、端的に表現するならかつこよくなっていた。（たとえを間違えた感じが否めない）少女に話しかけてはいるがそのまなざしは白刃を持つ相手へと注がれている。そんな少年に少女は答える。

「何だ、零ちゃんは普通にしていればかつこいいのにな・・・。」

少女はそういうと指を鳴らした。すると、白刃は消え、豪雨はやんだ。だが、闇はそのままである。少年は相手を見失って少しだけ気を抜く。

「ノワル、一体全体どういうことだ？」

「演技だよ？どうだった？」

「え？」

少年は呆けた言葉を出して左手でしっかりと抱きしめている少女を見る。

「ほら、荒療治だよ。ね、治ったでしょ？」

「・・・つまり、俺を騙したと？」

「人聞きが悪いなあ・・・それってどういうこと？私が零ちゃんを騙したことってあった？」

「いや、なかった気がする・・・？」

「私、犯罪起こしても嘘つかない自信あるよ？」

「質問だがあなたは過去に誘拐を実行したことがある。」

「NO！」

「・・・ノワル、俺とお前が会ったのはどこだった？」

「出会ったら必ず結ばれるといわれている校舎の裏に生えている桜の木（通称…イグドラシル）だったかな？」

「違うぞ？」

「ええと、出会ったら必ず抱きしめられる校舎のしよばい噴水？」

「それも違う。」

「それならどこだったっけ？」

「答えはお前が俺を誘拐しにきたときだ。」

「そうだったけ？」

少女は首を傾げて惚ける。少年はため息をつき少女に尋ねる。

「ノワルは記憶力が無いのか？」

「過去のことは気にしない♪気にしない♪過去に縛られているのならそれは嘘だよ♪だって、私は今こうしていられることが嬉しいからね♪」

微笑む少女に今度は少年が苦笑する立場になるのであった。

「はあ、やれやれ……。」

うれしそうな相手を非難するようなことができない性格の少年は途方にくれるしかないのであった。面白いと思ったことには笑い、面白くないと思ったときははつきりつげる少女に少年はただただ振り回されるだけであった。

「零ちゃん、私のこと好き？」

「ああ、好きだぞ？」

「友達として？」

「うん。」

「じゃ、恋人としては？」

「……まあ、な……でも、嘘つくときは嫌いだ。」

そう告げた少年に少女は呟く。

「だってさ、素直で騙されやすい性格の零ちゃんが他人に騙されるのは嫌だから私が先に騙しておいて他人に騙されないようにしてあげるんだよ？」

「そりゃどうも。」

少年はそんな少女の考えに理解できなかったのだが自分の事を考えてくれているに気がついた。そして、暗闇の中二人はようやく屋上を後にしたのであった。

ローザ：終わりはマスターと一緒に！！

ローザEND

少年と少女は特に何も無い空間にいた。二人とも相手を見据えている。

「何で相談しに来たらこんなことになるんだ？」

「マスターがマスターであるためにです。」

少女を電話で呼んだ少年だったのだが逆に呼ばれたのであった。そこは意外なことに彼らが一度来たことのあるトイレの地下だった。

「……とりあえず、マスターを本気で撃ちます。」

高らかに宣言し、少女は既に人の腕ではないそれを少年に向ける。少年は黙ってそれに呼応するかのように右腕にどこから取り出したのか知らないが透明な盾を取り出した。簡単な勝負となりそうである。

「いきますよお！！」

少女はその鋭く上がった龍の爪のような先端部分からゴム弾を発売し始めた。

少年はその射出された速さに当然のように反応することが出来ないが盾の後ろに体を画することぐらいは出来る。この勝負は簡単なものだった。少女の射撃性能が少年の盾を上回っていれば打ち砕きそのゴム弾は間違いなく少年に当たるだろう。そして、少年の盾が少女に完璧に近づくまで待てばそこで少女の負けは確定するのだ。

「へっ、そんなくらいで負けるかよ！」

少女に“マスター”と呼ばれている少年は珍しく目が輝いていた。それはただ単に久しぶりに燃えていたからである。

どんっ！どんっ！と音が続き、それをはじく音も聞こえてくる。そして、少年の透明な盾にもひびが入った。

「もらいました！！」

正確無比な射撃により一点のみに絞られた弾丸はようやく役目を果たすべく最後の盾を打ち砕く。だが、少年は既に次の行動に移っていた。盾を壊すことばかりに気を使っていた少女はそれに反応するのが遅れてしまった……

「もらいい！！」

「きやあああ！！」

少年は地をすべり、彼女の足に飛びつき、後ろに倒す。後ろへの衝撃に少女は足をつかまれているため踏ん張りも効かずそのまま倒される。そして、勝負は少女の負けで幕を閉じたのであった。

「……あいたたた……」

後頭部をさすりながら少女は上半身を起こす。

「ほら、手貸してやるからたてよ。」

少年は手を出して少女をつかませる。少女はそれに従い、おとな

しく立ち上がる。

「むう、私の勝ちじゃないんですか？」

「いや、倒されたお前の負けだろう？」

「でも、とどめは刺されてませんよ？」

負けず嫌いな性格なので少女はなかなか引き下がらない。

「はいはい、お前の勝ちでいいよ。」

「やった！ 負けた人は勝った人の言うことを聞かなくちゃいけないんですよ！！！」

「なんじゃそりゃ？」

少女の急な命令に少年は嫌そうな顔をする。少女はかなり悩んでいるような顔をして少年に尋ねる。

「あの、マスター・・・呼び名、変えてもいいですか？」

叱られたような表情でおずおずと尋ねてくる少女を見てよからぬ想像をしていた少年は笑う。

「ああ、いいぞ。」

「それならパーフェクト・マスター零時・・・略して“PM零時”って呼んでもいいですか？」

「ダメだ!! お前、バカにしてるだろ!!」

「うう・・・そんなあ・・・そ、それならアクティブ・マスター
零時・・・略して“AM零時”ってどうで・・・」

「ダメに決まってるだろう!!」

「・・・じゃ、最後にスペシャル・マスター零時を略して・・・」

「それも却下だ!! お前、いい加減にしないと解体するぞ?」

少年の表情はどんどん険悪になっていく。その表情を見て自分の
マスターがどれほど怒っているのかようやく理解した少女は表情に
影を落とした。

「零時って呼べばいいだろ?」

「えっ! それならマスターではないような気がします!!」

「・・・じゃ、とりあえずさん付けからはじめたらどうだ?」

少女はその一言が自分の世界を少しばかり壊したような気がした
のだが恐れず一步を踏み出した。少女にとって少年はそれだけ高い
ところにいて自分の手の届かない場所にいるのではないかと思っ
ているからだ。

「れ、零時・・・さん。」

「ん、合格だ。」

少年はそういつて自分よりも背の低い少女の頭をなでる。少女は顔を珍しく真っ赤にして目を伏せる。

「マスター・・ではなく零時さんはてっきり私にとってとても高い位置にいる人だと思ってました。」

「?なに言ってるんだ?俺はそこまで高い身長じゃないぞ?」

「違います。そういうことじゃなくて・・・私は零時さんの隣にいるだけの存在だと思ったのです。それだけでも構わないのですが・・・今、ようやく私は零時さんの隣に本当に立てたような気がします。」

少女はそういつて顔をあげた。感情豊かな機械が涙を流しても少年は不思議そうな顔をしない。

「ははっ、どういう意味かわかんねえけどさ・・・ローザのマスターがそれでいいって言ってるんだからそれでいいんだろうよ。それに、今までだって俺はお前と対等だと思ってたぞ? そうだなあ、友達って感覚だった。」

「でも、私的には上と下でした。」

「・・・そうかい、それなら今日からそれもしななんだろうなあ・・・。」

少年はそういつてなでる手を止めた。そして、少女を見る。

「・・・ローザ、お前が隣にいてくれるなら俺はうれしいぜ。」

「・・・私もです。あの、昔話を少ししてもいいですか？」

「ああ、構わない。」

少女は自分の事について少年に告げた。自分が試験的な役目をおっており、作られた当初は何も出来ず、なかば失敗作に近かったことを・・・そして、感情が生まれたと言うことを・・・。

「ま、今もあんまり出来てない気がするけどな？」

「ひ、ひどいです!!」

「冗談だ。でも、お前はがんばって今のお前になったんだろう？それならそれでいいんじゃないのか？」

手を乗せられている少女はそういう相手を見てたずねた。

「いつか・・・いつか私を完璧にしてくれますか？」

その問いに少年は笑って答えた。

「俺には出来ないね。だけどな・・・俺は中途半端で元気なお前が好きだ。」

ごまかすように頭をなで、少年はそのまま少女を抱きしめた。

「ローザ、これからも俺を守ってくれよ？」

「も、勿論です！私、どんなことがあっても・・・守ります!!」

少女はそういつて体から湯気を出したのであった。それを見て少年はうれしそうに微笑み、更に力を入れたのであった。

「マスター・・・痛いです。」

「ああ、すまん。」

そういつて少女から離れようとした少年に少女は再び告げた。

「零時さん、もっと強く抱きしめてください。」

「・・・わがままだな。」

少年はそういいながらも実行したのであった。そして、少女は幸せそうに目を細めたのであった。

外伝その一 満月：私のEND！（前書き）

これに登場している人物は前にでてきた人です。

外伝その一 満月：私のEND！

満月さんのEND

少年と少女はまだ少しだけ寒い海で遊んでいた。時間帯は既に、夜。空を覆う満月が二人を照らしていた。

「冷たいですよ！ かけないでください！」

「ほらほらあ！ もっとかけちゃうぞお！！」

嫌がる少年に少女は水をかける。少年はどうにも、嫌がっているのだが……。仕返しなど出来なかった。いや、見ているだけで飽きれるバカップルぶりである。

「じゃ、今度は『満月』をつかって、西瓜割りをしよう！！」

「え？ 西瓜は持ってきてませんよ？」

「勿論知ってるよ！ 西瓜の代わりに使うのは……」

「使うのは？」

「君のあたまだあ！」

「……え、ほ、本当ですか？」

少年は剣の腕の立つ少女がいつの間にか自分の剣を持っていることに気がつき、あせる。当然、彼女が冗談で言っているのはわかるのだが……。実際にやりそうで怖いのだ。

「勿論、嘘だよ？」

「よ、よかった。」

「じゃ、あっちの岸まで競争だぁー!!」

少年を置き去りにし、少女は走り出した。少年も当然、走り出す。たまに、波が襲う。

「私を捕まえてごらんなさぁーい♪」

「え・・・なんで水の抵抗ありでそこまで早く走れるんですか!!」

少年は少女にあっさりと負け、岸で両膝を突いた。そして、そのたれた背中に少女が乗る。

「負けた人は勝った人の言うことを一つ、必ず聞いてね？」

「・・・。」

「なによお、その不満そうな顔は？」

「ええと、とりあえず要望は何ですか？」

「勿論・・・ずっと私だけの騎士でいてくれるって誓いの・・・ス。」

「恥ずかしいです。あっちで高校生が見えますよ!!」

「いいじゃん!! どうせあっちも恋人同士なんだからさ!! 言った私の身にもなってよ!」

少女は剥れ、そっぽを向く。微妙にわがままなところがあるのだが、少年は返事を返した。

「……わかりました。お姫様。」

「ちえ、いつもそうやって私が剥れたときだけ言うこと聞いてくれるんだからなあ。普段からやさしいけど……まあ、たまにはもっとやさしくしてくれてもいいんじゃないかな?」

「そ、そうは言っても……ええと、その……周りの目がですね……気になるから……ほら、いやいやながらに言うことを聞いているってことにしておけば僕の恥ずかしさも減るって言うか……。」

少年は満月に照らされた顔を朱に染めながら上目遣いをしてくる少女に弁解をはかる。

「ふうん、それなら周りの目がないなら私がどんなことしようとしてもいいんだよね?」

「そ、それも……ええと……。」

優柔不断な少年はあたふたするしかなく、そんな少年に少女は体を預けた。

「別に体重をかけるぐらいならいいよね? 構わないよね?」

「え、まあ……。」

「じゃ、手を回すぐらいは……。」

「ま、まあ……。」

「……好き。」

「あ……はい。」

頭の後ろを掻きながら少年は目のやり場に困ったようにとりあえず満月を見ることにした。勿論、そこには照り輝く満月がきちんとあった。だが、この行動も少女の機嫌を損ねた。

「むう、私がいながら浮気？」

「ええと、空を見上げたただけですか？」

「満月、見てたでしょ？」

「え、ええ。」

「見るなら私でいいんだよ？」

「すみません。」

少年は少女を抱きしめ、今度は目の前の満月を見たのであった。

その話を聞き、俺は呆れた。場所は下校途中の普通の道路だ。

「……あの、その話をするためだけにここに来たんですか？」

学校の屋上であった少女が俺の目の前にいる。一人で下校としているといきなり背中を叩かれて振り返ったらそこに、ドレスを着た少女が立っていたのだ。あの時と違って空を飛んでおらず、きちんと足は大地に立っている。

「そうだよ？ 恩人さんにはきちんと経過を話しておかないといけないと思ってさ。うらやましいでしょ？ あ、そろそろデートの時間だから、またね？」

彼女はそういつて走っていった。本当に、何をしたかったのか不明だ。それに、土俵と言うものが違うと思うのだが？ 大体、あの人は何者なのだろうか？ 俺は一人で首をかしげていたのであった。

御注文は？魔法使いと機械で！！（前書き）

さて、今回から皆さんが待ち望んでいた？新しい話となります。まるつきり違っているというわけではありませんが・・・要所要所で変わっているところもあります。これまで明かされなかったこともこつちをみれば大体わかると思います。今回は小手調べ・・・あまり気にせず読んでください。では、次回から開始します！応援、よろしく願いますね！

御注文は？魔法使いと機械で！！

壹、

俺の名前は時柱ときはしら 零時れいじ。

まったりと高校生活を送っている二年生である。

あ、違うか・・・三年生だ。

そうだなあ、趣味はねじをながめたり、機械をいじったり、そういうことだな。

世間では魔法が主流となっている世界なのだが、どうにも、俺には不得意教科らしい。学校にも『魔法』という教科が入っており、俺は常に赤点を取っている。チームまで作られており、俺はいつも一人だ。まあ、誰だって不得意教科は存在するさ。別にこれで俺が落ちこぼれだと思ってもらいたくは無い。他の教科ならば平均的に取れていると自分では思っている。

そんな俺だったのだが、ある日、親友である後鳥河ごとりがわ 瑞樹みずきと共に一学期の初めにとあるレストランに向かったのであった。そこから俺の人生は百五十度（微妙だ。）変わってしまったらしい。それがいい方向であってほしいと願う日々である。

さて、どれを注文しようかなあ。いやあ、迷うなあ・・・お金、全然無いから迷う必要なんてないんだがね。

「・・・零時、先ほどから注文表を三十分ほど眺めていないか？お冷、何杯お代わりした？」

その質問はタブーである。実際、お冷だけでお腹が充たされてきたことは秘密だ。セルフサービスだったらよかったのに・・・。そろそろ、店員さんの視線が恐ろしく感じられてきたぞ・・・。

「しかしまあ、そんな零時のおかげで僕は美しいウェイトレスさんを眺められるんだからね。」

「・・・ああ、そうかい。」

さて、困ったものだ・・・オレンジジュースを頼むこととしよう。さて、どのウェイトレスさんに頼もうかなあ？

「お、決まったのかい？僕がウェイトレスさんと呼んであげようか？」

「結構だ。そのぐらい自分で出来る。」

「ほほう、それじゃ、これで零時の趣味の女の子が誰かようやくわかるよ。これは裏情報だ。学校の者たちに流せば意外と高値で情報を買ってくれるかもしれないな。」

「・・・勝手にしろ。」

「それなら勝手にさせてもらおうよ。」

手を上げて近くにきそうなウェイトレスを呼ぶ。その間、瑞樹は俺に尋ねてきた。

「・・・あのドジウエイトレスがないね？」

「知るかよ、別に俺たちには関係ないだろう？」

「まあ、確かに。」

やってきたウェイトレスは元気いっぱいそうな人物で、長い髪をリボンでまとめていたのであった。瑞樹はそんなウェイトレスさんを見上げてニヤニヤしている。

「御注文はお決まりでしょうか？」

「あゝ僕じゃないよ、その人。」

まるで他人扱いする親友だな・・・まあ、そういう性格なのは重々承知している。

「・・・・オレンジジュースをお願いします。」

「かしこまりました。すぐに運んできますのでしばし、お待ちしててください。」

こういう店員さんはいい店員さんだ。たまに注文を引っ張ってくると睨みつけてくるからな。

「・・・・零時、きちんと魔法の勉強はしているかい？」

「おいおい、魔法が使えない俺が勉強しても意味無いだろう？」

「でも、君の妹君は使えるだろう？」

「・・・・あいつと俺は血が繋がってないの！だから、あいつが使えても俺が使えないことに別に問題は無い。」

「劣等感を感じてない？」

「感じない感じない。」

「兄貴としての威厳は？」

「威厳？別に話さない相手に対して威厳もくそもないだろうに。」

「妹君は君と話したがっていたけど？」

「知らない知らない。」

全く、なんて野郎だ。

確かに俺には一歳年下の妹がいるが、俺にとっては邪魔・・・ではないが、あまりかわって欲しくない。

劣等感を感じているわけではないが、あの才色兼備な妹は（勿論、俺が苦手な魔法の科目も主席である。

）俺にとって爆弾の一つである。

先生からはからかわれ、母さんからはバカにされ、父さんには間抜けにされ、犬には嫌われる・・・というものだ。常に爆弾は爆発してる。だが、そんな俺にも唯一優しくはしてくれないが拒絶しない一人がいる。それは、俺の部屋に飾っている『メルナ』と呼んでいるロボットである。これは俺が廃工場で拾ってきた物である。

「・・・妹と最後に話したのはいつだい？」

唐突にそう尋ねられて俺は考えてみた。

「・・・・・・・・そうだなあ、小学生だったかな？」

それ以降、俺は視線を逸らし、廊下であつたらポケットから文庫本を出して無理やりそれを顔面にくっつけ、朝食の面では妹よりも

すばやく食べて逃げている。く、悔しくなんてないやい!!

そこまで話していて俺の元にオレンジジュースが運ばれてくる。

俺はそのオレンジジュースをすぐに飲み干して席を立った。

「帰るのかい？」

だって、俺は既に注文した品を食べ終えた（この場合は飲み干した。）のだから既にここにとどまる用事等無い。俺が帰っても構わないだろう。いや、むしろ邪魔になっているほうの可能性のほうがいい。

「ああ、帰る。だってここにこれ以上いても店の繁盛の邪魔になるだけだからな。それに、そろそろ家に帰って授業の予習をしないと。俺はお前みたいに頭の構造がすっきりしていないからな。」

「全く、僻みやだねえ。ま、何か授業でわからないことがあったら僕に聞いてくれ。何でも教えてあげるよ。」

そういつて頼もしい俺の親友は俺と同じく、席を立ったのであった。勿論、瑞樹はにやりとしている。そして、どこか名残惜しそうにウェイトレスの面々を見渡したのだった。

「・・・どうせ、家に帰ったらあのウェイトレスを人形で作るんだろう？」

「そうだね、何回か練習してみようかな？ 零時、この仲の誰かと仲良く慣れたらそのときは写真に収めて僕のところを持ってきてくれ。」

「・・・ま、仲良くなる機会なんてないだろうがな。」

そういってお互いに会計を済ませたのであった。そこでも、出てきたのはあのリボンをしているウェイトレスだった。先ほどからずっとこの人は俺たちを見ているのだ。まあ、それかもしれないことだろう・・・千円以下の注文で一時間近くいたのだからな。

「ありがとうございました。」

そういわれて俺たちはレストランから出たのであった。このレストランは過去一度、雇用としたのだがウェイトレスの不注意で小火騒ぎがおき、そのときはいけなかった。

「とりあえず、たまには妹さんと話をしなよ。」

「へえへえ、わかりましたよ。」

帰り道、近所ということなのでそのまま歩いて帰る事になっていた。勿論、これからは瑞樹の家に行かせてもらってパソコンでもさせてもらおうかな？ああ、家にパソコンほしいなあ。

「瑞樹、今日来ても良いか？」

「全く、先ほどの僕の話聞いていたのかい？たまには家庭サービスをしなさいといけないよ。」

「・・・へ、家に帰ったらサービスするぜ。それに、俺だって帰宅部だ。家に帰ってきたらきちんと洗濯物を入れてたんとんでるんだぞ？夕食だって母さんが前日に買い置きしているものを使って作ってるんだ。」

別に料理がうまいわけではないのだが（レシピはきちんと母さんがテーブルの上においてくれている。）そうでもしないと部活で遅くなっている妹と顔をあわせてしまう可能性だってある。

「やれやれ、でも・・・残念ながら今日は僕用事があるんだよ。」

「用事？」

「ああ、従姉妹がなにやらこの校区に引っ越してきたらしくてね、それで色々お手伝いに行かなくてはいけないんだ。そろそろ、時間だから僕はこれにて失敬するよ。」

そういつて既に見えてきている自分家に向かって走り始めたのであった。残された俺はなんともいえない感じにとらわれたのであった。

「・・・置き去りかよ・・・」

まあ、しょうがないだろう。奴はそういう性格なのだ。そして、残された俺としては奴との付き合いは長い。それに、確か小さい頃に瑞樹の従姉妹とも会ったことがあるような気がする。あっちが覚えていのか知らんがな。

「さあて、家に帰ってごろごろでもしましうかね？」

誰に問いかけるでもなく、俺は歩を早めたのであった。

勿論、今日の夕食は決まっております、それを作るのも良いかもしれない。
式、

人間、誰にだって予想できないことはあるものだ。いや、それが普通であって欲しい。その日の夕方、まだ妹が帰ってくる前のちょっとしたゆるりな時間である。

「あゝそうそう、そういえば今日、父さんが下宿人を連れてくるんだって。ほら、前に行つたでしょ？」

「・・・へえ、下宿人？それはまた・・・下宿人？そんなのいつ言つたっけ？」

自作のハンバーグ（微妙に形がずれている。）を器用に箸で掴みながら俺は首をかしげた。下宿人の話なんて聞いたことが無い。

「あ、そうか・・・そのとき・・・いや、いつも零時はすぐにいなくなるから聞いていなかったのね？実はね、父さんの親友の無奈月さん家の娘さんがこっちのほうに引っ越してきたらしいんだけど・・・それがまた大変らしくてね、ストレスで倒れたりしたんだって。」

ストレス？

「ああ、一人暮らししているから学校行つた後に放課後二つぐらいバイトをかけ持ちしているらしいのよ。それで、無理がたたっちゃってね。それで、その話を聞いた父さんがお人よしで生活費を出してもらわなくて結構な代わりに家事を手伝ってもらうようにしたのよ。ま、それだけじゃないんだけどね。」

「あ、そうなんだ。まあ、俺にはあまり関係なさそうだな。」

「そうね、そろそろ来る時間帯だから、挨拶ぐらいはしなさいよ？未だに雅とは話をしてないんだからね。女の子に優しくしないといけないわよ？」

雅とは俺の噂の妹である。まあ、どうでもいいことではあるが・・・。そういつて避難がましい視線を送ってくるので俺はさっさとハンバーグをいの中に押し込んで席を立とうとしたのであった。すると、玄関のほうからチャイムが鳴り響く。

ぴんぽーん

「あ、零時、見てきてくれないかしら？」

「へえへえ。」

そういつて食器を置いて俺は玄関のほうに歩き出した。別に急がなくても結構だろう。そう思つて玄関を開けるとそこにはどこかで見たことがあるようなリボンをした少女が重そうな荷物を持つて立っていた。

「あ、やっぱりあなただったんですね？」

「あ、ウェイトレスの……。」

そこに立っていたのは俺のオレンジジュースをにこやかに運んできたウェイトレスでそれに、会計時も俺達を見ていたウェイトレスで、更に、なにやらじろじろこちらを見ていたウェイトレスでもありますな。

そのウェイトレス少女（名前不明）は俺に頭を下げてきた。

「はじめまして！ 私の名前は無奈月^{むなつき} 瑠奈^{るな}です。これから、よろしくお願いしますね？ 私があなたを一人前にします。」

一人前に？ 誰を？ 俺を？ 何の？

考え込む俺だったが、ささいな問題だと頭の中の俺たち（重要な事柄については脳内にて、至急対策委員会が設置される。）は決定したようだった。

「あ、どうも……よろしくお願いします。」

物事をはっきりいうタイプなのだろう。きつと、俺より年上に違いないと思つて頭を下げて敬語で答える。だが、そんな俺に彼女は笑つて言った。

「私とあなたは同じ年ですからそんなにかしこまらなくてもいいですよ。」

言っている本人がかしこまっている。

「……そうか？ それなら……まあ、とりあえず、荷物を貸してくれ。俺が運ぶからさ。」

「あら、瑠奈ちゃん……うちの亭主と一緒に来るって思つてたけ

ど？」

母さんが出てきたので俺は引っ込むことにした。勿論、預けられた荷物はとりあえず、先ほどまで俺がいたりビングへと運んでおくきつと、ここで話をするだろうからお茶を残して俺は自室へと戻ったのであった。その後、雅の声がしてきたので危なかったといえるだろう。

自室にこもった俺は日記帳を見やる。

その日記帳は俺が妹と話さなくなった日から付けられており、主に何か面倒なことがあった日にのみ、書かれている。

最近会ったことといえば『今日、理科の小テストにて 人間の体の約六割を占めているものは何か？』という問題において回答は 何かよくわからない液体？ いや、体液？ と回答したところ、理科の担当の先生に呼び出され、叱られた。

『まあ、このくらいなら書くほどでもなかったのだが、この後のことを読めば俺が何故この日記に書いたのか理解していただけたとおもう。』

『……瑞樹に見せてもらったところ奴は 夢と希望 と書いていやがった。何故、あいつが呼ばれずに俺が呼ばれたのだろうか？ どう考えても、俺のほうがまともな回答を書いていると思うのだが……』そこまで読んで俺は首を振った。そして、久しぶりに日記の一番初めの欄を眺める。そこには、妹と遊んでいた……いや、最後に遊んだ日のことが書かれている。

『……今日、妹の雅に頼まれて拾ってきた本に魔力をそそぎこんでみた。その結果、俺はなにやら変なものに取り付かれてしまったようだ。魔法を使うことが出来なくなってしまった。じいちゃんに話したところ、』

「これは二人だけの秘密じゃぞ？ お前が魔法が使えなくてもけんかに勝てるようにじいちゃんが武術を叩き込んでやる。」という結果が返ってきた。』

この日記はまだ続いている。

『本日から妹と全く話すことの無い生活が始まった。原因はちょっとややこしいことで、じいちゃんが言うには

「魔力を打ち消してしまいかねんから、一ヶ月はあまり話すでないぞ？」といわれたからだ。とりあえず、一ヶ月の辛抱である。』

それから一ヶ月後の日付が掲載されている。

『本日、苦労の末あって魔法の代わりとなるらしいちょっと難しい武術を会得した。なんでも、相手の魔法を一度食らえばその分の力が戻ってくるそう。そして、手に入れた魔力はずっと維持されるそうである。』

それで、最後にこの妹がらみのことが一言で終わっている。

『話を雅にしたら

「変態みたいだね。」といわれてしまった。』

そう、これが未だに俺が雅と対等に話し合えない理由である。妹なんかこんなことを・・・いや、確かに一度食らわなくては俺の魔法は発動しないのだが（今のところ平和なために一度も魔法を己のみに食らったことなど無い。）それがまた、じいちゃんいわく癖になるといつていた。変態さんだ。

「・・・ま、しょうがないわな。」

そう思いながら俺は月が出ている夜空を窓から眺めたのであった。そして、頭痛が俺を襲い始める。

「あゝ頭が痛いぜ。」

これも妹が関係している。

というより、俺が魔法を使用できなくなった根本的理由の本質・・・いや、元凶の本の効果だ。

あの本は呪いを読み解いたものに与えるものだったのではないかと今の俺は考えている。

唯一、ひらがなで書かれていた部分には『ふくさようとしてこれはつきをみるとあたまがいたくなります。』

』とあったのだ。

つまり、あの本を読んでから俺は常に夜は頭痛が待っているのだ。

月なんて見なくてもいいと思うのだが、そうもいかない・・・窓から必ず俺の部屋は見えるようになっていいる。つまり、常に俺の頭の中では『脳内プロレス　お月様編』があっているのだ。ああ、なんだか俺も変な影響を受けてきているかもしれない。

そんなことを考えながら静かに顔を下に向けているとノックをする音が聞こえてきた。普段なら狸寝入りをしている時間帯である。

「ええと、瑠奈ですけど？　零時様、いますか？」

様？　様ってなんだ？

「あゝおきてるけど？　何か用事があるの？」

「今日の魔法の勉強をしましょう。」

魔法の勉強か・・・これも母さんに言われたことなのだろう・・・

いや、そういえばそんなことをいつていた気もしないでもないな。
「・・・あゝ残念ながら俺は魔法が全く使えないんだ。だから、気にしなくて結構だよ。じゃ、俺明日も早いからお休み・・・。」

そういつて俺は部屋の電気を消して本当に布団の中にもぐりこんだのだった。だが、今回やってきたという下宿人は一筋縄ではないか
ないような人だった。

「・・・本当に使えないんですか？」

寝たといったのに尋ねてくる。

「ああ、本当だ。」

これも事実だ。だって、俺を教えたじいちゃんが行っていた。因みに、きちんと魔法に成り代わるような体術だってじいちゃんから習っているの魔法を使ってくる相手でも勝つ自身はある。

「・・・昔は使っていたと雅さんがいつてましたけど？」

「昔の話。確かに、昔は使ってた。詳しくは雅に聞いてくれ・・・。」

そういつて俺はなんとなく嫌な予感がしたので窓を開けたのだった。別に、そう・・・不穏な空気を片付けようかな・・・と思っただけだ。

どごーん!!

いきなり、そう・・・『これより、攻撃を開始します。』

』などという台詞もなしに衝撃が走ったのであった。

その結果、俺は開けた窓から放り出され・・・家の庭に植えてある大きな木（この木何の木？木になる木・・・じゃなくて、気になる木。）に衝突。わらにもすがる思いで手を振り回すと偶然、木の枝を掴むことが出来た。背中には冷や汗がだらだら・・・そんな俺は出てきた窓のほうを見上げると・・・窓から誰かが俺をさがしているようだった。

「・・・零時様、まさか窓から逃げようとするなんて・・・そこまです・・・」

うわ、すんごく・・・悲しそうな顔をしないでほしいな。はつきり言うが、俺が悪いのではなく、君が悪い。俺がそんなことを思いながら相手を眺めていると・・・彼女はどうかやら部屋の中を見ている・・・と、一つのところで視線をとめた。因みに、そこには俺の日記が置いてあった。ああ、近くにあるのに遠く感じるぜ・・・うわあああ!! やめてくれえ!!

「・・・ふむ、ふむ・・・」

「あわわわ・・・。」

俺は木から自室に飛び上がろうとしたのだが・・・失敗。その結果、地球の重力に引かれて俺は落下・・・先ほどはかろうじて助けてくれた庭の木は助けてくれなかった。おもいきり、落下。下手したら死ぬんじゃないかと思った・・・のだが、一瞬だけ浮遊感があったと思ったら俺はゆっくりと地上に降り立つことが出来たのだが・・・

「うん・・・？」

首をかしげてみると体が動かなくなってきた。そして、眠くなってきたのだが・・・く、何故だ??俺は睡眠薬など飲んでいないぞ? ううん?

そのまま、俺は眠ってしまった。

夜空には月が出ていたので、彼は眠っていた。

「・・・雅、ごめんな。」

ピンク色のベッドに寝転がって彼はそんな寝言を口ずさむ。その近くには、彼の妹が座ってそんな兄を眺めていた。彼女は過去からなぜか話してくれなくなっていた兄に不満と疑惑、そして怒りを覚えていた。しかし、話しかけることの出来ない自分にも同じ感情を抱いていた。

「・・・兄さん・・・。」

動かない兄に近づく。兄はまたぶつぶつといい始める。

「・・・いや、正直言って恥ずかしいってもんで・・・あゝごめんな、ごめんな。」

寝ていることには気がついてるのだが・・・妹は首を振る。

「うん・・・うん、私も悪いんだ。」

「・・・あゝ、雅・・・そうだよな、やっぱり俺なんてお前の兄なんかじゃないよな。ああ、そうだよな・・・。」

夢の中で妹から嫌われてしまった兄に対して現実の妹は首を振る。

「ううん!! そんなことないよ!!」

彼女はそういつて兄の眠っているベッドにしがみついたのだった。

「・・・兄さんはいつだって私の兄さんだよ。に、兄さんが悪くないのはわかってる。」

それはもう、感動ものである。因みに、零時を眠らせたのは彼の義妹、雅であり、寝言で零時の心情を聞き出す魔法をかけたのも雅である。

「・・・私が悪いんだよ!!」

因みに、この魔法はかけた本人が解除しない限り、永遠に続く。

「・・・ご、誤解も解けたところで・・・兄妹のスキンシップを・・・初めての・・・」

そういつて寝ている兄貴のベッドに入り込んでいく義妹、雅。それ

に対して零時は全くの無反応である。まあ、しょうがないだろう。

「に、兄さん・・・私恥ずかしいから目を・・・瞑って？」

既に、目は瞑ってある。しかも、目を瞑らせたのは彼女だった。

「・・・に、い、さん・・・」

彼女はそういつて目を瞑り、寝ている兄貴の顔に近づいていったのであった。その顔は自分が悪かった・・・優しかった兄さんはやはりそのままの兄さんだったのだと再確認した表情をしていた。

身動き一つできない零時のまぶたが開いていき・・・目の前の雅と重なったのだが、雅はお構いなく彼の顔に迫っていく。

（END）

第一章 彼の夢（前書き）

さて、ここからが本編となります。詳しくは後書きのほうで書いておきますので、お暇な方は後書きのほうもよろしく願います。

第一章 彼の夢

一、

俺はそれまで読んでいた紙を引き裂いてやった。全く、これは・
・ヤギの餌に調味料（シャーペンの黒鉛）をかけた程度にしか
な
ら
ん
な。

「えゝなんでだい？これは完璧に義妹とのむすばれた愛を・・・」

「黙れい！」

俺はそういつて更に紙を引きちぎった。

「・・・実在の人名を使うな！！」

「いや、瑠奈ちゃんは僕の妄想の美少女さ。冗談だけどね。」

「・・・よく言うぜ。」

俺は今、部活にいそしんでいる。俺の今の肩書きは小説部部长だ。
今年で高校三年生。三年八組（特別クラス）の時柱^{ときばしら} 零時^{れいじ}だ。

「それに、俺は魔法を使えるぞ？確かに、高校一年までは使えな
ったが、きちんとあの本に載っていた呪いを解く方法も解決したか
らな。」

「そう？僕としては雅ちゃんとかについて欲しかったんだけど？」

「・・・お前の考えた美少女はどうするんだ？」

「勿論、この後は僕とくつつくのさ。いや、冗談だ。この後は零時
が苦しむ展開。」

こいつの名前は俺の昔からの親友と言う肩書きを所持している（
早く他人に譲^{ごとりがわ}って欲しい^{みずき}）。

）後鳥河 瑞樹^{みずき}という者だ。奴の趣味は妄想の少女を脳内に形成し、
紙に写し書きしてその後はフィギュアを作^{つく}って立体的にするという
ものである。ある意味、出来上がった時のそのフィギュアのオーラ
はすさまじく、魂が込められていた。作り終えたときの奴は今にも
死にそうな顔をしている。

「兄さん、私にも見せてよ！！」

そういつて小説部の一人、まあ、俺の義妹が手を上げる。

「……ダメだ。お前には見せられん。」

「いいもん!! 私に冷たい兄さんも好き! だから見せて!!」

よってきたので俺は手に持っていたヤギの餌を更に食べやすいように引き裂いてやった。そして、やはりヤギにやるには汚かったのでゴミ箱行きとする。

「……真面目にやってくれ。」

「むう。」

「零時、大体……小説部は人数が少なすぎるんだ。ここは明日やってくるという転校生を待とうじゃないか?」

瑞樹は首を振って俺に告げたのであった。

「……別に他の奴の力なんて使わなくても大丈夫だろ? 演劇部から渡された書類には『小説部の皆さんへ この前の予算のお返しとして筋のあるものを書いてください。出来れば、恋愛物をよろしくお願いします。』って書かれてたんだ。別に犬とかの話でも良いんじゃないか?」

たとえば、

「わんわん!!」

「わんわんわん!!」ってなもんでどうだろう?

「……やれやれ、雅ちゃん、君のお兄さんは脳内の中に何かが潜んでいるんじゃないかな? ワンちゃんじゃ話にならないよ。」

「……いや、そんなことは無いと思うけど……」

「今度、彼の頭の中を拠点とした悪役の砦でも作ってみようかな?」

おいおい、そんなことを言っている場合ではないだろう……そろそろ期限なのだ。その期限を破れば俺たちは生徒会長様に呼び出され(呼び出されるのは俺だ。)お叱りを受けた挙句に黙って金を借りていたので間違はなくこの弱小部は跡形も無く、消え去るに違いない。大体、部活には五人必要なのに俺たちは三人しかいない気がする……。

「零時、後二人は見えない幽霊だ。」

「・・・いや、無理だろう。」

「あくでもさ、私たちのところにも明日二人の転校生が来るって言っているからその三人を入れれば六人だよ？」

確かに、そうすればなんとなるに違いない。そういう会議を行ったところで俺たちは帰宅することにした。瑞樹の家は俺の家の隣なので結局のところ帰るときも一緒である。

夕日を眺めながら俺は部活の存続を考えてみた。いい案は浮かばない。

「・・・どうしたものかな？」

「別に小説部じゃなくてもいいんじゃないのかい？『シチュエーション部』とかどうだろう？」

「・・・それはどういうことをする部活だ？」

「・・・それはね、ニーソックスをはいた少女が夕日をバックに走ったところで・・・」

奴がそういうと目の前を誰かが走っていった。そのこはニーソックスをはいていた。

「・・・あんな感じか？」

「うん、それで・・・くるって振り返って『大好きです！』っていうやつ・・・」

走り去っていった少女は途中で止まってくるとこちらをふりかえった。

「・・・大好きです！！！！輝さん！！」

誰だろうか？輝さんって？

「・・・こんな感じだな？」

「簡単にいうと、そういうなんかぐつとくるような感じをどうしたらだせるのかということを深夜までかかってもいい人たちで考える部活。」

そういっていると反対側のほうから他の高校の男子生徒？らしき人物が声を張り上げる。

「俺もだぞ〜葵！！」

「・・・全く、恥ずかしくないのかね？」

「そうだね、あれはちよっと・・・」

俺と雅は首をかしげる。そういつて先ほど叫んだ女の子は俺たちの前を再び走って行ってその男子生徒に抱きついていたのであった。

「・・・やれやれ、なんだろうな？あの人たちは・・・」

「さあ？まるで竜のような少女だったね。」

再び静寂を取り戻した俺たちだったのだが・・・今度は背後から声が聞こえてきた。だが、俺たちに用事があるわけではなさそうだったので無視しておいた。

「・・・俺としては瑞樹の案は保留にしたい。正直、瑞樹らしいといえどそれらしい。」

「そうかい？それは喜んだほうがいいのかな？」

「雅、お前はどうか？」

高校二年生。俺の義妹時柱ときばしら 雅は首をかしげながらも考えている

ようだった。瑞樹がすきそうな女の子だと思っていたのだが、瑞樹は興味が無いといていた。不思議に思った俺は瑞樹にそのことを聞いてみたのだが・・・

「・・・兄貴の前で言うのは引けるけどね、雅ちゃんは中途半端なんだよ。僕の中では彼女の魅力を見つけ出すのは不可能だ。だって、彼女は僕が萌える様な眼鏡っ子じゃないし、どじっ子でもない。それに、お子様体型ではないからね。あゝてっきり教え込んだとおりに魔女っ子になってくれるっておもったのになあ。」

俺がそこまで思い出していると雅は俺に答えた。

「・・・私は『ヒーロー部』がいいなあ。」

俺の義妹はそういう性格だ。きつと、となりのかっこいいお兄さんに影響されたに違いない。さて、瑞樹に責任をとってもらうかな・・・

「・・・零時、彼女の趣味にとにかく君がいうことはいけなことなのだと僕は思うよ。」

「そうか？俺としてはお前が責任から逃げているような気がしてな

らないがな……。」

ちよつと、昔話をしよう。なに、ちよつとだから時間はとらせんさ……。」

「……雅ちゃん、近頃零時が君に冷たくないかな？」

「……うん、話しかけても無視するし……。」

「……それはね、君が悪の手先ではないかと疑っているんだよ。

なんせ、彼は正義のヒーローだからね。君がヒーロー物の……そうだね、正義の魔女っ子になれば……。」

「おにーちゃん！！私、正義の味方になるよ！！」

「あ、ちよつと話を……。」

「ありがとう、瑞樹さん！！」

「……どういたしまして……ちっ。」

めでたしめでたし……っていうことでヒーロー好きになってしまった。強引過ぎる。

「……なあ、雅……それはなにをする部活だ？」

「悪を滅する秘密基地をあの部室にして、基本方針としては悪を見つけて滅するの！」

嬉々としてそういう義妹を俺はかなり遠いところから見ていたかった。そうだな、地球の裏側なんていわないぜ？具体的に別の世界から眺めていたかった。

「……やっぱり、今のままで結構だ。お前たちに任せたら謎の部活になりかねんからな。そんなのは嫌だ。」

背後から聞こえてくる声はどうやら先ほどの男子生徒の声のようだった。

「……私のアイスクリーム食べたでしょう！！」

「加奈のアイスなんて食べてねえよ！！」

「うう……一口しか食べてなかったのに……」

「……あゝすまん！！買って来てやるから……」

そういつて雷の音が聞こえてきた。きっと、何かの事故だろう。そんなことはどうでもいいや。変な人物は両脇の存在だけで一向に

構わない。

「あ、そういえば今日はバイト先の店長さんが俺に用事があるって言ってたっけ？」

雷の音が終わって後ろから叫び声のような感じの声が聞こえてきた気がするのだがそこは無視だ。

「悪いけど、先に帰っててくれないか？」

「わかった、それじゃあ僕たちは我が『小説部』のこれからを詳しく決めていこうじゃないか！」

「うん！絶対『ヒーロー部』にしてみせるよ、兄さん！」

「いや、『魔女っ子部』にしてみせるさ！」

それぞれがそれぞれ、俺に親指を立ててくるのだが、俺はなんとも返答しがたい顔をしてその場を後にしたのだった。このまま『小説部』ではダメだろうか？

「加奈あ！俺が悪かったって！！」

「きえてしまええええ！！あのアイスは折角私が苦勞してかったのにいいい！！」

そんな声を聞きながら、俺は走り去ったのであった。

そして、バイト先である町の小さなおもちや屋さんにやってくる。ここは代々つぶれそうな店NO.1らしいのだが・・・噂では地下へと続く扉があり、そこで人には言えないようなことをやっているらしい。ここでバイトをしている俺の時間帯では誰も来たことが無いのだが一応、バイト代は貰っている。

「おや、よくきたねえ。」

そういつて俺を迎える店長（七十代？の老人と思われる。）はエッチな本を読んでいた。

「あの、用事ってなんですか？」

明日も英語の授業があるので予習はしておかなくては・・・それに今年は受験もあるし、魔法の勉強だってしなくてはならない。三者面談ではこのまま平均点を取り続けていても埒が明かないといわれてしまうに違いない。

「ああ、実は明日から君の時間帯に三人のバイト君がはいってくるんだよ。ちなみに女の子だよ。よかったねえ？」

この店主は助平だと有名で・・・これまで女の子以外のバイトを雇ったことが無いのだが、俺を雇ってくれた。理由は・・・実のところ、俺とこの爺さんは過去に一度会っており、そのときまたま店長が金を盗まれてしまって、愛読していたらしい本を買えずに困っていて俺がお金を出したのだ。もっとも、俺ははじめは出す気が無かったのだが・・・落としてしまったお金を拾うときに店長はこっちをみて

「ああ、あと千円あればのう・・・どこかに千円を貸してくれる学生さんはおらんかのう・・・」とこちらに近づいてきて、わざわざ座っていた俺に目線を合わせて言ったのであった。そこまで言われてはしうがなかったので俺がお金を貸したのが始まりだったというわけである。あんまりいい出会いではないね。店長と知り合いなので学校では比較的女子から避けられてます。

「バイト君にはきちんと仕事をするように言っておいてくれ。」

「わかりました。」

「とうとう君も先輩じゃな。ああ、そういえば一人は君の知り合いだと言っておった。」

知り合いの女子に・・・好き好んで変質者の爺に話しかけるとは思えないのだが・・・それに、大体俺の通っている高校ではバイトは禁止である。家庭の事情（母さんが三社面談のときに先生の前で嘔泣きをしてその権利を取得）にて俺はバイトを許されている。

「しかしまあ、ワシも堕ちたものじゃ。」

唐突にそんなことをいってため息を吐く店長。その目は本当に悲しそうだった。

「どうしたんですか？」

「実はな、零時君にしか話さんが・・・バイトは本当は零時君だけでよかったんじゃない。じゃが、どうにも弱みを握られてしまったのう・・・脅されるような形でバイトを許可してしまったんじゃない。あの小

娘、やり手じゃな・・・気をつけるんじゃぞ？」

そのときの店長の顔は本当に俺を心配するような目をしていたのであつた・・・はて？俺の・・・女の子の知り合いにそこまで裏があるような人はいたのだろうか？

「・・・よくわかりませんが、注意します。」

「・・・男の威信にかけて・・・」

真剣そのものの顔に俺はちよつと怖くなったのだが、頷いた。

「・・・あの小娘のパンツの柄を調査してくれ！！そうしないとワシは死んでも死にきれん！！」

「・・・」

そうですか・・・それはまた・・・安っぽいですね、店長さん・

・・・

「じゃ、俺は帰りますよ？」

「おお、明日からはサバイバルの始まりじゃ！！気をつけるのじゃぞ？」

こうして俺はよくわからない店長さんからのお知らせを受け、明日から来るであろう・・・転校生とバイトの新人・・・なんとなく、ここいらでつながっているような気がしないでもないのだが・・・まあ、気にせずがんばるとしよう。

夕日が沈んできている時間帯なので俺は慌てて家へと走り始めたのであつた。それに、早く家に帰らねば俺の夕食は義兄に食われてしまっているかもしれん・・・。

「・・・無事でいてくれよ？俺の夕食・・・」

この後家に帰宅するとすでに義兄は俺の食事を綺麗に平らげており、俺は白ご飯を泣く泣く食べたのであつた。黒いノートに復讐を誓つたのであつた。

第一章 彼の夢（後書き）

今回はまだまだエンジンがかかっていませんね。自分としてはまあ、はじめだからこんなものかといったところです。因みに、途中で登場していた方々は知らない方もいると思いますが・・・とりあえず、他の物語でがんばってた人たちです。この方たちを知っているという人はメッセーjukれると嬉しいです。次に、なんだかやけに新章出すの遅かったなと思った方もいると思います。そこで、今回はその言い訳をしたいと思います！はつきり言って、既に完成していたのですが、皆さんに受け入れられるかどうか心配で心配で・・・夜も眠れないといった夢を見ました。それは冗談として、登場人物などを考えていました。昔は強力な人たちが多かったのでよかったのですが・・・今回もできるだけ皆さんの記憶に残るような人たちを考えていたらこんなに遅くなってしまいました。長くなってしまいういけないので、次回にもちよっただけこの物語のことを考えたいと思っています。では、また今度・・・あ、そろそろ小説書き始めて一年かな？成長したと思っている自分ですが、これからもよろしく願います！

機械∞対俺一人の夜の鬼ごっこ♪

二、

夢の中・・・いつもと同じように俺の目の前にはテレビで見たこととしないビル街が広がっている。まあ、俺たちの住んでいるところが微妙に田舎なのかもしれない。とりあえず、俺は夜のビル街の近くの道路に一人たっている。ただ、それだけだ。

「・・・全く、毎日毎日・・・どうしたもんだろうな？」

この夢は怖い。

この夢は恐ろしい。

この夢は・・・危険なのだ。

この夢を見始めたのは雅が小さい頃にもってきた本がきっかけだ。それは英語で書かれており、当時の俺は英語の存在をあまり知っていなかったので宇宙人が書いたものかと思って眺めていたものだ。そして、ある日・・・俺は二人の少女が描かれているところを見つけた。一人は太陽を、そして、二人目は月を手にとって描かれていたものだった。近くにいた瑞樹はそれを見て

「名前でもあるのかい？」そんなことを聞いてきたことを覚えている。それに対して俺は首を振ったのだが・・・英才教育を受けていたらしい奴はそれを

「ソル」と

「ルナ」と呼び始めたのであった。結果、俺もその少女をそのとおりに呼ぶようになった訳だ。だが、これは所詮きっかけ・・・小さい頃の俺はその二人と遊びたいと思っていたのかもしれない・・・ある日、とうとう俺は夢の中でその少女に会うことが出来た。だが、そのときはルナのほうしかおらず、しかもこのビル街に彼女は走っていたのであった。俺はそれを追いかけていった。夕方だったビル街はあっという間に暗闇に包まれ、俺は独りしかいないことに気がついた。誰もいない、音もしない、風も吹かない・・・魔法を

使用することが出来ないことに気がついた。そして、ここには何かが潜んでいることにも気がついていた。何故なら、この世界では月が出ると・・・奴らが目覚めるのだ。

「・・・さて、おいでなされたかな？」

今日も夜が始まる。所詮、俺が夢を見る間だけの出来事・・・ある意味、ファンタジーな物語だ。

暗闇のビル街に月が出始める。これが戦闘の開始であり、この月が沈むまで俺は寝ることなどできず、ぼさーっとするのだってできない。

『キュイイイイイイン』

ビルの窓に反射するそこには大きな機械らしき者たちが機動を始める。大中小、さまざまな形をした者たちが月の光を浴びて立ち上がっていく。俺は彼らに対して背を向けて走り出したのであった。多分、彼らは月光をエネルギーにしているにちがいない。

背後から迫ってくる嫌な感じに対して俺は右によけ、更に右からやってきたとんがって危ないものを頭を下げてよける。

未だに、この世界では魔法が使用できないし、勇者が使ってそうな剣だって落ちてはいない。

この機械たちはなぜか知らないが俺を狙ってくるし、俺は逃げるしかない。

立ち向かっても構わないと思うのだが、どう考えてもあのごつかったりスマートだったりしている機械の体に生身の人間（装備 素手 学生服 靴）が勝てるとは思えない。コンクリートだって粉碎するパンチですよ？俺の頭なんて跡形も残らない可能性が高いってんですな。無駄なことはしてはいけないですよ。

とりあえず、追われる側としてはなるべく隅っこを走らないようにしている。奴らはミサイルを撃ってきたり、ビームを撃ってきたりもまれにあるのだが・・・狙いがたくそなのかロックオンシステムをつんでいないのか知らないが今まであったことは無い。だが、追い詰められてしまっただけは危ないので広い場所で逃げている

のだ。

「……ビルの中にはいるって手もあるんだけどな……」

最近になって気がついたのだが、ビルの中には人がいるようである。だが、ビル内部から見えるものたちの気配は普通の人間ではない気がする。目は紅かったような……それに、生々しい音まで聞こえてくるのだ。

「……ここはどこなんだろうな？」

とりあえずここは俺の夢の世界だ。どこかにセーブポイントでもあるのか知らないのだが、月が降りてしまったとき……そう、俺が夢からいなくなる時には場所は記憶されており、この数十年間……機械達から逃げてきた。走った距離はすごいことになっているに違いない。万歩計でも装備したほうが良いかも知れんな。

「……おっと！」

そして、どうやらこの機械達は学習能力があるようで小さい頃に比べると狙いが正確になってきている。そろそろ俺が討たれてしまう日も近いかもしれない……。

ま、ただでやられるのは俺の性分じゃない無いんでね。死ぬときはそこいらの機械に突貫して死んでしまおう。そんなことを考えながら今日も一人で道路を駆けるランナーとなる。ゴールはどこだろう？ 小さい頃はそう考えていた。だが、そんなものはないのだろう。終わるとしたら俺が死んでしまったときぐらいかもしれない……。

夜空に浮かぶものは満月だけ。他に星なんてないし、飛行機だって飛んでいない。UFOも見えないし……そういえば……空飛ぶ機械もまだ見たことは無いな。まだ開発されていないのかもしない。

満月もそろそろ眠たくなってきたのか段々と降下してくる。俺は走るだけだ。満月が沈んでしまえば俺はとりあえずおきることが出来る。起きれば機械達は追ってこないし、現実におってきても魔法ぐらいは使えるから悲惨なやられ方はしないと断言できる。

「……あと一、二分ぐらいかな？」

時間の感覚はこの世界では全く無く、疲れることも無い。まあ、それゆえにここまで逃げてこられたただけだな……。疲れないのならきつと現実世界では俊足のランナーとして役に立つかもしれない。それができれば苦労はしないのだが……。

もう少し、ほんのもう少しというところで俺の目の前に延々と続くはずだった道路が全て消えた。目の前に広がるのはたんなる闇だ。その先からは何も感じ取れないし、感じてしまえばあまりいいことはなさそうである。まるで、ニコチンの塊のようだった。諸君、タバコはやめよう！って言っている場合ではないな……

とまってしまつて俺は後ろを振り返った。

沢山いたはずの機械達は姿を消しており……。いや、自分たちの影に飲み込まれていつているところだった。

必死に手やアンテナを動かして脱出をはかっているのが俺にも見る事が出来る。

中にはまだ両腕が無事な奴は影に向かって銃を撃っているし、体が分裂するような奴は本体を犠牲にして小さい体で脱出をしている。

俺のことなど眼中に入っていないようだった……。だが、その小さい体も影の中から出てきた怨霊みたいな手が引き込んでいく。あつというまに飲み込まれてしまった。あゝあ、いじめっ子には制裁が下るものなのだ……。と、言っている場合ではない。完璧に敵も存在しなくなった俺に対して影は謎の存在である。

『……っあああああ！！』

背後の影からそんな声？が聞こえてくる。

俺は身構えることも無く……。かといってしりもちをつくでもなく、回れ右をして機械達が飲まれてしまったそれぞれの影をジャンプしながらその場から逃げ出したのであった。

これはあれだ、いわばラスボスの存在がその姿を見せるに違いない。ここで俺が何か戦う手段を持っていれば勝つことが出来ようが……。あいにくながら俺には両手と両足しかない。いや、もしかしたら

あそこから出てくるものは先ほど吞まれていった機械達が合体した姿かもしれないのだが・・・そのところだどうなのでしょう？
？気がかりで真面目に走れません。

勇気を出して振り返ってみるとそこには影から姿を見せる少女がいた。なあんだ、女の子じゃん・・・とそう思えない俺。彼女は間違ひなく痴漢撃退用スプレーよりも強力そうな重火器を装備していた。強そうですね・・・。

「・・・さて、逃げるか、戦うか・・・。」

俺の脳内ではこの緊急事態に対して各国の主が会議を開始した。

俺A

「あれは間違いなく危険なものだ。あの顔はルナそのもの・・・。」

俺B

「いや、あれは我々の救世主に違ひない。」

俺C

「それもどうかと・・・とりあえず、これまで続いてきていた伝説？を打ち砕くチャンスを握っていると思いますが？」

俺D

「破壊すべきだ！」

俺F

「構わんが、それはどうやって？」

俺A

「・・・危険だが、媚を売れば・・・。」

結局、俺の中での会議はまとまらず・・・その場に待機ということになった。空から月が降りてきて・・・この夢物語も終わるはずだったのだが、月は段々と小さくなってその機械の中にはいつていった。そして、俺の頭の中でも決着がついた。

俺A、B、C、D、F

「「「「退却！！！」」」」」

俺は再び回れ右して全速力で逃げ出した。突如、背後から爆発音が・・・俺の隣を駆け巡る。気がつく俺の目の前の道路に一本

のさびた剣が刺さっており、更にその先には先ほどの女の子が・

『武器不携帯 戦闘意欲零』

相手からはそんな声？らしきものが……いや、俺としてはどうしたらいいのだろうか？

『私と戦いたいのなら……剣を取って。』

夢の中で始めて声を聞いたのが機械の少女とは……なんだか悲しい気がしなくてもないが、どうやらこの人は俺が剣を取らない限り襲ってこないようである。いやあ、こんな人相手に暴力はいけないいけない。どんな理由があっても、そういうことはダメだ。

『この悪夢を終わらせたいのなら、この剣を取って私と戦って勝つて。』

俺は剣を黙って引き抜いた。よし、相手は機械だ。遠慮はいらねえ。剣を持つのを確認すると相手も銃らしきものを握り締める。だが、俺は剣を構えなかった。

「……君は誰だ？」

『私はルナ……あなたたちが付けた名前。この悪夢を生みし物……』

「君を倒してもいいのかい？」

『所詮、はかない夢の一説……現実には影響などしない。でも、ここはあなたの夢の中……あなたには影響がある。』

俺はそういわれて満月も何も無いただ、暗闇の広がる夜空を仰いだ。あーやっぱりそうだったのか……小さい頃にこけて機械達にやられなくてよかったぜ。

俺が黙っていると相手は俺に話しかけてきた。

『……他には？』

「ない。」

『私に勝ったら……いや、勝ってくれたら……なんでもしますよ。この夢を壊します。』

「……それはどうも……。」

俺は剣を構えた。まあ、現実世界じゃ使ったことのない代物なのだが・・・今の俺は夢の中の俺。現実世界で夢のことを悩んでいても仕方が無いと思って夢の中でのみ、この夢を走りながら考えていた。俺にとってこの夢は悪夢だったことは確かだ。

「・・・いくぞう!!」

剣の降り方なんて上からか横からか・・・どちらかかしらない。単調なものだし、この剣はぼろぼろだ。どこかにあたれば一発で碎け散ってばいばいな。

相手は大丈夫だと言ったので俺は相手の心臓を狙った。

いや、機械だからな・・・心臓があるかどうかは知らないが、効果的だと思われる。

よほど集中していたのか、もしくはこの世界での体の動かし方を知っている俺だったからかわからないが、相手よりも早く剣をつきつけたのが出来たと思ったのだが・・・いや、実際には相手に当たったのだが・・・剣の耐久度がガラスよりもひどくなっていたのだろう・・・見事に碎け散って俺の手には柄だけが残っていた。

『・・・損傷微量・・・』

いや、一応ダメージは与えていたらしい・・・ちょっとだけど・・・。碎け散った柄を俺はどうしたものかと眺めていたのであった。相手はそこまで待ってはくれない。レーザーブレードを出して迫ってくる。とても未来的な武器ですね・・・。

「どうせなら、それを渡して欲しかったものだな。」

悪態をつきながら俺は柄を持ったまま回れ右して逃げ出した。とりあえず、この世界で始めて手に入れたものが碎け散っている話にならない。この世界じゃ、魔法が使えないのだ。柄だって使えないようなものだが、無いよりはましかもしれない。

『・・・この世界で魔法を妨害していたものは消えた。』

俺の心でも読んだのかそう答えたルナに俺は振り返ろうとしてやめた。それならさっさと壊してしまおう。壊れた剣の柄に力を集め、兄貴から習った魔法の剣（元は雅の痴漢撃退用武器）を作り出す。

古い柄からは新しい刃が出てきて俺はそれをも握り締めて相手へと向き直る。

『・・・イージーモード解除、ノーマルモードへ移行』

これまでは難易度が優しかったらしい。相手の背中から生えている羽らしきバーニアから無数の武器が姿を現し、ルナの体を蒼い透明の膜が覆う。

『防御壁召喚』

「フアンタジーだ。」

俺は一言そういうと相手に向かって走り出した。そして、相手の全ての存在を壊すような感覚で狙いを付ける。当然、相手もそれなりに抵抗してきており、俺の急所へと狙いを定めている。

「うおおおおおおお！！」

意味無く叫んでみたのだが、兄貴から習ったときあの人は

「・・・気合だ。」それだけ言っていた。だから、まねしてみたのだが・・・あの寡黙の兄貴が叫ぶところなどみたことがない。

剣は見事に貫通し、俺はなんだかとても嫌な気分になった。勿論、相手の行動は停止・・・どうやらこの機械の少女の心臓もここにあったようだ。

「・・・終わったか・・・だけど、どうやってこの夢を壊してくれるんだ？」

これ本体だろ？これ？本当に壊してしまっただ丈夫だったのだろうか？そんな不安がこみ上げてきた俺に剣が刺さったままのルナは行動を再開し、話しかけてくる。グロイ。

『心配無用、これで私を捉えていた枷もなくなり、私とあなたは自由です。』

そういつて右腕に持っていたかっこいい銃を夜空に向ける。彼女の体は光って、俺はそれに驚いてしりもちをつく。ひやりとした感覚がお尻をなでる。

『・・・崩壊・・・』

たった一言の言葉で機械の少女・・・ルナは俺が今まで走ってき

ていたビル街を消した。そして、剣は消えることが無かったのだが・
・立ち上がって俺を見ながら言ったのであった。

『明日からよろしくお願いしますよ。』

「え？ ああ？」

そういつて俺の目の前から姿を消したのであった・・・。そして、その少女のことを俺は・・ちよっただけ怖く思ったのだった。そして、俺の意識も覚醒したのだった。

機械∞対俺一人の夜の鬼ごっこ♪（後書き）

今回の零時は色々と問題を抱えています。この夢の話も元は昔の零時に付ける予定だったのですが、めっちゃくちゃな話になってしまつて断念せざる終えませんでした。まだまだプロローグ的な扱いで登場人物があまり出てきていないのでこれからもまだまだ出していきたいと思います。そして、予告なのですが・・・もしかしたら自分が始めて書いた小説を再び書き直してまた出すかもしれません。あの頃は誤字が多かった・・・いや、今も何かするとあつたりするんですけどね。そのときはよろしくお願いします。

先生の事情と家庭の事情（前書き）

今回・・・シリアス傾向になってしまったような気がします・・・
たまにはこういうのもいいかもしれません。

先生の事情と家庭の事情

三、

あくる日の朝、気だるい雰囲気を所持したまま俺は学校へと向かったのであった。夢のことは毎日のごとく覚えており、終止符が打たれたことに少しだけ喜んだものだった。この夢の所為で俺は学校では絶対に居眠りをしない。まあ、それも今日から可能になるのだ。昨日の夢に出てきていたルナのことにも気になるし・・・さて、これからどうなるのかね？

「零時、今日は疲れているようだね？」

共に隣を歩いている瑞樹が俺に尋ねてくる。こいつには夢のことを話したことなどない・・・いや、誰にも話したことなど無い。だって、バカにされるだろうからな。まあ、こいつには信じてもらえろとは思うのだが、対処方法など無いような気がしたからだ。

「・・・まあな、だけど心象的にいいとは思ってる。悪夢は終わったからな。」

「ふうん？悪夢って言うのはそうそうなくなるものじゃないと思うけどね？」

嫌なことをいう親友だ。もうちょっと優しいことを言ってくれてもいいのだと思うぞ。

「まあ、そんな傷ついた顔をしないでくれたまえ。今日のうちに五人見つけないとそろそろ、生徒会長に呼び出されるんじゃないのかい？転校生をどうしても二人はゲットしないと・・・。」

俺の予想の中では転校生はルナであろう・・・まあ、瑞樹が持っている本を読んでもみるとこういうことが起きるのだと書かれていた。それが本当かどうか信じられないがな。

「じゃ、健闘を祈るよ。まあ、任せておいてくれよ。」

「・・・そうだろうな。噂じゃ、お前のクラスらしいし・・・がんばってくれ。」

そういってお互い別れてそれぞれのクラスへと向かったのだった。

はじめに説明しておくとするが・・・俺のクラスには悲しいことに事情があつて今は俺しか生徒がいない。これも二年の頃に色々いざこざを起こしてしまい、その所為なのだが・・・しょうがないのだ。人間にはできることと出来ないことがあり・・・（以下略）とりあえず、俺のクラスにはこの前ようやく先生になることが出来た若手の女性教師と俺しかない。

「・・・やれやれ、一ヶ月・・・経つてもついてないな。」

教室へと入った俺の目の前に机で突っ伏して眠っている若手の先生が映る。しかし、俺は敢えて無視して席に着いたのであった。勿論、席の数は他の教室と変わらないのだが・・・生徒の数は今のところ俺一人だけしかない。

キーンコンカンコン！

学校が運営を開始する授業が鳴り響く。

「くか・・・」

先生は起きない。

あれだけ大きな目覚まし時計がなれば誰でも起きると思ったのだが、先生はどうやらお疲れのようだ。他のクラスから歓声上がる。どうやら転校生がやってきたようである。俺は見に行くべきかやめるべきか考えて・・・とりあえず先生を起こすことにした。ここは先生を起こすべきだ・・・いや、ちょっとだけいたずらしちゃおうかな？

「せ・ん・せ・い？」

そういつて背中のでっぺんから人差し指をそのままツーとしたままで下ろしていく。

「ん・・・」

おや？それでも起きないとは・・・変わった先生である。面倒くさくなった俺は揺さぶって起こしたのであった。

「・・・先生？棚木 八重先生？」

ゆさゆさ・・・

全く動かないのでここはもう無視することにした。どうせ、よからぬ夢でも見ているのだろう。しまりのない顔はにやにやしている。幸せそうな顔だな。

「・・・やゝねゝゼロ君、こんなところで襲い掛からないでよ。」
「・・・。」

俺は右腕に魔力を集めて思い切り先生にぶつけた。怪我はしてはいないと思う。だって水をぶっ掛けてやったからな。

「・・・つ、つめたぁ!!誰?」

そういつて目を覚ます先生。ああ、もうちょっとだけでいいから先生らしくしてくれたら俺だって皆からバカにされずにすんだのに・・・。

ため息をついて先生の前に立つ。

「先生、そろそろ授業開始のチャイムが鳴りますよ?」

「・・・あ、ゼロ君・・・来てるのなら起こしてくれてもいいんじゃない?」

「・・・今、水をぶっ掛けておきましたよ?」

そういうと悲しそうな顔をする。

「えゝひどいな・・・もうちょっと優しく起こしてくれたらよかったのに・・・。」

「起こしました。だけど、先生がどうやら教育上よろしくなさそうな夢を見ていそうだったので実力行使で起こさせてもらいました。俺としてはこれでも譲歩したほうですが?」

先生はほっぺたをぷくりと膨らまさせて俺を見る。先生なんだからもうちょっとだけ大人げがあって欲しいものだ・・・

「・・・八重、先生なんだもん!生徒が先生に魔法をぶつけちゃ、ダメなんだよお?」

「・・・八重先生が悪いんですよ。起きないから・・・とりあえ

ず、一時間目がもう始まります。早く授業をして下さい。」

「ちえ、わかったよ。」

そういつて先生はよだれの跡をぬぐうことも無く、既に準備されていた古典の教科書を取り出す。そして、休み時間を失っていた俺はため息をつきながら自分の席に座るのであった……。

ちよつと、この先生のことを詳しく紹介しておこうと思う。

この先生はなんたることか……とても魔力がすごい人物なのだ。校内でも三本の指の中に必ず存在しているというほど強い。

そして、俺のことを『ゼロ君』と呼び、先生はこんな適当な性格だったり、新米教師だったりする。

先生事態、何かやらかしたらしく、問題児が多かったこのクラスに派遣されたらしいのだが、彼女についていこうとする生徒は今のところおらず、俺以外の生徒は全てサボリ。いや、既に退学届けを何人かは出したと言っていた。俺？俺は引き取ってくれた母さんが『留年してもいかなきゃダメよ？』といったのでこの先生でもついていかなくてもいけないのだ。まあ、それだけではないのだが……。

「……じゃ、この問題は？」

「……。」

まあ、生徒の間では完璧になめられているところが俺としては悲しいところがある。頼りなさそうに見えても先生は先生だ。俺以外の人物でこの人のことを先生と呼ぶ人はこれまで見たことが無い。

新生入生が一ヶ月ほど先生と呼んでいたが既に八重さんとなっている。

「ゼロ君？」

「……。」

まあ、何度かお世話になっているわけだし、俺としてもこの先生が実はとても優しいことは知っているのだし、からかわれてもいいだろう。弟的扱いをされているからなあ。

「おーい？」

「あ……。」

目の前に先生の顔があり、俺は先生に尋ねる。

「何か？」

「今、授業中で、八重は君にこの問題を当てただけどなあ？」

「そういつて黒板に書かれている『枕草子の作家は誰でしょう？』

という問題を指差している。いや、こんな問題は誰でもわかると思うのだが……。」

「答えは？」

「紫式部。」

「正解。よしよし。」

俺は頭をがきみたいに撫でられていたのであった。

そんなこんなで一時間目も終わり、休み時間がやってくる。

先生は職員室へと退散し、クラスメートもない俺だけのために開放されている教室に静寂が訪れる。

しかしまあ、転校生はこのクラスに来るべきじゃないのか？一人だぞ？一人の所為で俺は一番前の席に陣取っているのだ。授業だって、先生が一人で全教科ががんばっているし、正直言って、これは高校生活ではないのではないだろうか？大体、高校生活とは男子生徒と女子生徒というものがあるべきでは？いや、男子校ならば男子生徒しかないが、近頃は魔獣も学校に通っているそうなのだ……。

そんなことを考えていると二時間目を開始する鐘が俺の耳に入ってきたのであった。

「あ、やっべ！黒板消すの忘れてた！！」

その後、俺は黒板を消していなかったので先生に愛の鞭デコピンをもらったのであった。やれやれ、俺としたことが……。

放課後、一人で教室の掃除をしていた俺は（本当は帰りのHRの前にあるはずなんだが、教室を一人で掃除するなど無謀なことだったのだ。終わらなかった。）ため息をついていた。

「やれやれ、いつまでこんな生活が続くんだろうな……。」

そこまで言って適当に掃除を終わらせ、かばんを引っつかむ。帰るために教室の扉を開けようとして……。

「掃除、お疲れ様。」

先生がいつの間にか俺の席に座ってこちらを見ている。

「何か用事でもあったんですか？」

先生はそんなじゃそこらの魔法使いではないのでいきなり後ろに現れても別に不思議ではない。

「……まあ、私事だけど……。」

そういつて立ち上がる先生。しかし、立ち上がった後も俺のほうが今では身長が高い。はじめてあったときは俺のほうが小さかったんだがな。

「今日が何の日かわかるかな？」

「……今日ですか？何かの記念日でしたっけ？」

もしかして、初めて魔法使いが発掘された日だろうか？

「あゝわすれたんだなあ。先生、悲しい。」

「冗談です。覚えてます。」

俺が五歳だった頃の今日、俺は始めて先生と会った。場所は河川敷での俺たちが野球をしていたところである。まだ、その頃は俺にも“家族”がおり、今の家族のことをまったく知らなかったころの話である。

野球をしていた俺は始めてみる女の子が俺たちを楽しそうに眺めていたのを覚えている。俺たちより五歳年上の彼女、棚木 八重だった。

「ねえ、私も仲間に入れてよお。」

そういつて彼女は俺たちのところにやってきた。だが、俺たちをまとめていたリーダーはそれを足蹴にしたのであった。

「やだね。女なんかと遊べるかってんだ。」

そういつて彼女を突き飛ばしたのであった。

「ちよつと、それはどうかと思うけど？」

俺は意見したのであった。その結果、俺も彼女と同じように突き飛ばされて今後、二度と彼らと遊ぶようなことはなくなった。先生のせいではなく、俺の家の事情だ。

突き飛ばされて

「あっちいけよ、お前。」といわれてしまった俺は溜息をついて泣き出しそうになっていた少女に話しかけた。それ以外、するべきことがなかったからな。

「・・・追い出されちゃったから、あっちで遊ぼう？」

「・・・。」

そのまま俺は彼女の手を引いて河川敷を後にしたのであった。勿論、遊びにいけるような場所は限られており、やってきたのは家の近くの公園。そこには特に遊戯など無く、ブランコが二つだけあったのだった。

「・・・はあ、まあ・・・しようがないかな。」

「ごめんね？私の所為でしょ？」

「確かに。」

「・・・。」

正直に答えた結果、その女の子は涙をためる。

「・・・じよ、冗談だよ。冗談。それに、あんな連中なんてどうでもいいや。遊ぼうと思えば一人でも遊べるから・・・。」

母さんは

「絶対に女の子を泣かせてはダメよ？」と俺に言っていた。だから、俺は約束を守るためになかせないようにしたのであった。いや、既に泣いてるな・・・。

「ほら、まだお日様が沈んでないから遊ぼうよ？ええと、僕、来年から小学生なんだ。ええと、お姉ちゃんはまだ小学生なんだよね？」

そういうと、彼女は頷いた。

「じゃ、学校ごっこ、しよう？僕、生徒でおねえちゃんは先生役ね？」

「・・・うん！！！」

そんなことがあったのだ。これで、昔話は終わり。

「しかし、今年は本当に驚きましたよ。先生がその年で先生になれるなんて・・・。」

しみじみと俺は先生に答える。

「まあね、私は勉強したからねえ。でも、覚えていてくれてありがたい」といいたいよ。」

「・・・わすれませんよ。」

忘れられない、理由。それは確かに、先生との思い出もあるのだが・・・その日は俺の母さんの命日だ。つまり、今日。

「・・・今日、命日でしょう？」

「・・・はい。だけど・・・約束ですから・・・俺は母さんの墓には行けませんよ。」

あの日、俺の母さんは血を吐いた。そして、俺の目の前で息絶えたのであった。理由はわかっていない。だが、母さんは完全に死ぬまで俺に話をしてくれていたのであった。勿論、救急車が来る前までであるのだが・・・

「・・・零時、私が死んでも絶対にお墓参りはしないで・・・？約束破ったらおやつ作ってあげないわよ？」

「・・・う、うん！約束するから、死なないで！！」

そんなことを言っていた。俺としてはまことにバカらしいと今でも思っている。矛盾したその言葉に俺はこの日になると溜息がよく出るような体質になっていたのであった。

「・・・ゼロ君、ちよつと話したいことがあるからもうちよつと残ってくれないかな？」

その問いに俺は頷いたのであった。

太陽と月と・・・？

四、

お日様はあの日のようにまだ沈んではない。

「・・・ゼロ君、今は大丈夫なの？家庭とか・・・」

「ええ、六歳からは既に今の家族ですから・・・大丈夫です。」

「・・・そう、それなら・・・大丈夫ね。だけど、何かあったらお姉さんに話さない？私、あなたの先生になりたかったから教員目指したんだからね。」

そういつて先生は立ち上がった。その姿は夕日に映って綺麗だった。

「じゃ、気をつけて部活動にいそしむんだよ？」

既に軽いノリの先生になっていた。

「わかりました。先生、今日は部活に来ないんですか？」

「・・・仕事が大変でねえ。」

そういつて先生は教室を出て行ったのであった。一人、残された俺も教室を出ようとする。だが、また俺は誰かに呼ばれたのだった。やれやれ？今度は誰だ？

「・・・零時様・・・。」

振り返るとそこには夢の中にいた少女とその昔に雅がもってきた本の中に書かれていた女の子、ソルによく似た女の子が立っていた。「この前あったのは夢の中でしたね？」

「・・・まあ、私は会うのはこれで初めてなんだけどな。」

そういつてソルのほうはやれやれといった感じを見せる。ルナのほうはそんな彼女をたしなめるように見る。

「そんなことを言っではいけません。零時様のおかげで私たちは解放されたんですからね。」

「へえへえ。わかってますって。ありがとうございます、零時様。」
どうでもよさそうなにこっちに頭を下げている。口調が男っぽい

な・・・まさか・・・男？

「・・・よく話がわからないんだが？」

「まあ、その程度の男だろ？ほら、別に私たちがこいつの前にでてこなくてもよかったんじゃないの？」

失礼だな・・・いや、別にそんなことは言わないが・・・。

ソルのほうを無視してルナは一步前に足を出す。

「・・・零時様が知っていないこと、私が全て・・・いや今回はちょっとだけ話しますよ。」

「？」

「・・・あの本の中身が消えてしまったのは知ってますよね？」

俺は頷く。高校一年のときに中身が消えて、俺の頭痛などは去っていった。

「・・・あの本の中身は今、零時様の頭の中に全て納まっています。」

「」

「え？」

「全く、見た目もあんまりさえないと思ったら中身もさえないんだねえ。弱そうだし・・・。」

大きなお世話だ・・・と、言おうとして唐突に頭痛が始めた。誰かの記憶が俺に語りかけてくるような感じた。何を言っているのかはわからない。だが、俺の右手はソルを指差していた。びしり！とした感じだな。

「ん？あたしに何か用か？」

怪訝そうな顔をするソルに向かって俺の口は勝手に動いていた。

「・・・そう思うんなら、ここで闘ってみるか？」

完璧平和主義者のこの俺の口からそんな物騒な言葉が出ていた。意識は戸惑っているのだが、体は一種の喜びを俺に与えてくれている。

言われたほうのソルの目つきが鋭くなる。獣の目だ。

「・・・ほお、言ったね？人間が機械の私に？」

「ソル！やめなさい。」

「……」

ルナの静止も聞かずにソルは俺の目の前に立った。俺より身長の低い。だが、睨みつけてくるその目には一寸の隙など見当たらない。

「……」

「二人とも……」

その言葉がトリガーとなったのか知らないが、ソルは消え、俺はなぜかそこから飛びのいた。さっきまでたっていたところが何かの力を受けてえぐれる。俺はそれに目を見張った。そして、ソルの姿がえぐれた場所に浮かび上がる。

「へえ、やるね。だけど、次はそういかなと思うからな。覚悟、しといてくれよ。」

「……」

俺は再び何かを感じてその場でジャンプをしていた。

そして、相手の姿が確認できるようになってきたのであった。

何か、この広間に人間以外の（あと、ソルとルナの力）力が働いているといったほうがよさそうだった。相手の間合いと、強さ、狙いまでわかってくる。わかればあとは体を動かすだけ……だが、普段の俺だったらそこまで運動神経がよくないのでわかっていても無駄だっただろう。しかし、今の俺はあの夢の中にいた頃のように思ったとおり動いてくれるので楽だった。

「ちい、見た目が……だめなくせて!!」

そういった相手の右腕を掴んでそのまま投げる。しかし、相手は壁に足をぶつけて威力を吸収し、こっちにやってくる。静寂の教室はいつの間にか夕日が似合っってそんな番長たちの楽しい遊び場（主に校舎裏辺り）に変わっていた。

「これで……終わりだ!!」

やってきた相手の顔面に魔力をぶつける。相手はよろけ、そのまま地に膝をつける。かかった時間はそこまでないのだろうが、相手は目をぱちぱちしながら苦しそうにする。

「……嘘でしょ？ 私が……この私が？」

そんなことを言っている。

なにが嘘なのだろうか？俺のほうが嘘だと言いたい。大体、俺には戦う力など無い。この世界には確かに、魔獣を倒したりする人もいるし、そういう人たちは本当に強い。だけど、俺は・・・瑞樹に小さい頃に料理を叩き込まれたぐらいしか能が無いのだ。いや、機械をいじる能力もあると、自分では思っている。

「・・・零時様・・・」

ソルを立たせるルナの目には困惑といった視線が宿る。そして、俺はそんな光景を前にして再び痛みそが痛むのを感じる。何かを思い出そうとしているのだ。完璧に痛みが引くと俺はソルとルナを小さい頃に見たことがあったと思うのだった。

「・・・？」

一時期、俺は孤児院に入っていた。

理由は簡単だ。

母さんがいきなり死んで俺は独りぼっちになった。

父さんと母さんは駆け落ちしていたらしいので困ったことに親戚など俺を迎えに来てくれなかった。施設に入った俺は浮いた存在となっていた。それはなぜか・・・誰とも話さなかったからだ。元からその施設にいる連中は俺をのけ者のように扱うようになり、俺はよく一人だった。まあ、別に構わなかったのだが・・・一人遊びは慣れていたのだ。そうだな、主に一人で砂場で砂のお城を作っていた。

そこで、俺はこの二人に会った気がするのだが・・・でも、この二人はあの謎の本に描かれていた二人なのだ。どうにも、何か別の記憶が混ざっている気が・・・

「あいたたた・・・むう、見た目で人は判断しちゃダメってことだな。あゝあ、あたしとしたことが・・・。」

そういつて立ち上がるソルをルナは心配そうに見ている。

「・・・。」

俺は一人で先ほどの記憶を整理するかのように冷静に分析してい

た。そんな俺を二人は見ている。

「・・・こいつ、どうしちゃったのかな？」

「・・・零時様？」

そう呼ばれて俺は視線を前の二人に戻す。すると、やはり記憶が・

その日、僕はやっぱり一人でトランプをしていた。

「・・・。」

それを二人の少女が見ている。僕は黙ってそれを続ける。

「・・・。」

なんとなく、いづらくなつた僕は立ち上がってその場を後にしようとした。トランプはそのまま・・・

「あんた、トランプするんじゃないの？」

「・・・やるなら私たちも混ぜて欲しいんですけど・・・。」

見ない顔だった。僕がここにきて既に一ヶ月がたっているのだが、始めてみる顔だ。新入りだろうかと考えていると二人は更に問いかけてきそうな感じだったので先に答える。

「・・・やりたいなら、やれば良いよ。僕は他のところで遊ぶからさ。」

僕はそういつて歩き出した。だが、彼女たちは僕を追いかけてきているようだった。

「・・・何か用？」

「いや、あそぼうかなあって思ってる。」

「誰と？」

「あなたとですよ。」

胡散臭そうに僕は目の前の金髪と銀髪の少女を眺める。

「・・・なんで？」

「この建物の前をたまたま通りかかったら寂しそうにしているガキを見つけただけだ。こいつが寂しそうだといってたから来ただけ。ま、私たち魔獣は大変なんだからさ。」

「・・・大丈夫なんですか？」

「・・・僕は・・・。」

悲しいのだろうか？

「悲しくない。」

「そうかい、それなら行くぞ？あたしらは忙しいからな。」

そういつて金髪のほうは銀髪のを引っ張って去っていった。

「・・・なかなかでくださいね。」

そういつて二人とも消えてしまったのであった。

「お、どうした？あたしをそんな目で見つめて？」

不思議そうな顔をしてソルはこっちを見ている。同じく、ルナも不思議そうな顔をしている。

「いや、ちよつと記憶が混同しちゃって・・・ソル？だったかな？」

「・・・あんたらが付けた名前だろ？覚えとけよ。」

「その・・・叩いてすまん。」

「あ？」

変な顔をして俺を見るソルと嬉しそうな顔をするルナ。

「・・・二人とも、この高校に転校してきたんだろ？」

「ま、まあ・・・。」

「そうですよ。」

「それなら、俺の部活に入ってくれないか？」

俺の要求に対して不満そうな顔をするソルと無表情なルナ。

「へっ、どうせろくでもないクラブなんでしょ？」

「あの、できれば何をする部活なのか教えてもらえると嬉しいのですが・・・。」

「あ、そうだったな・・・『小説部』で、小説を書くところだ。今のところ、廃部に追い込まれているんだ。」

そういうとソルはにやりと笑った。

「へえ、それで・・・私が入らなかつたらつぶれるんでしょう？」

「・・・いや、ソルが入らなくても別にいい。ルナがいるし・・・。」

「ぐ……。」

「だけど、自信満々だった魔獣さんがたかが人間の俺に負けてしまったということ。校内放送でばらされなくなかったらはいったほうが良いのではないだろうか。俺は思っている。それで、勝手に決めちゃったけど……ルナのほうは大丈夫か？」

「ええ、大丈夫ですよ。」

ルナはそういつてにこりと笑ってくれたのであった。よかった。

「……しょうがない、あたしも入ってやろう。」

見た目文才ゼロの部員が入ったところで役に立つかどうか……よく、『初心者でも大歓迎です。』とか言ってる部活ほど、初心者が入るといじめるんだよね……。

「……君の文才には期待してるよ。」

「お、そうか？あたしに期待してくれて嬉しいぜ。」

おだてれば綺麗に乗る性格の人は使いやすいものだなあ。まあ、とりあえず部室のほうに連れて行かなくては……と思った俺だったのだが、唐突に校内放送が鳴り響く。

『ぴんぽんぽんぽーん……えー生徒会からの呼び出しです。三年生の時柱 零時君。今すぐ生徒会室まで行って下さい。生徒会長さんがお呼びです。繰り返します……』

「あーちよつと用事が出来たんで、俺は失敬するわ。部室は……」

俺がそういうおうとするのと瑞樹が教室を開けたのは同時だった。

「お、零時、放送聞こえてなかったのかい？生徒会長が今日もお呼びだぞ？」

「ちようどいい……ソル、ルナ……こいつは副部長の瑞樹だ。」

こいつに案内してもらってくれ。」

瑞樹のほうはなにやら二人のほうをじろじろと眺めており、品定めでもしているようだった。

「……まあ、いいや。二人とも、我が部活の新戦力だから期待し

ているよ。じゃ、ついてきてくれたまえ。」

「わかった。」

「わかりました。」

そういつて俺を残して三人は教室を出て行ったのであった。俺は勿論、生徒会室へと向かう。

「・・・あゝあ、失敗したなあ・・・」

俺は新しく決まった生徒会長が嫌いだ。理由は、既に三年生が生徒会から退いているので後任年下からいろいろと指図されるのは嫌いだから・・・ではなく、色々と問題があるような人物だからである。憂鬱になる自分の心を必死に慰めながら俺は日没が迫っている校舎を歩き始めたのであった。

太陽と月と・・・？（後書き）

近頃、マンネリ気味になっているのではないかと思っている作者、
雨月です。どうにも、インパクトにかけているようなので色々試
しているのですが、皆さんの心を揺さぶる（震度五強ぐらい？）ほ
どの衝撃を与えたいのですが、なかなかいい案が浮かびません。と
りあえず、地道に・・・いや、それじゃ、やっぱりマンネリしてい
ると思うので・・・今後は（六十ぐらいかな？）ストーリーを多様
化してみたいと思います。期待してくれると嬉しいです。マンネリ
気味の作者に何か言いたいことがあれば、言ってください。なんと
なく、愚痴っぽくなってしまことを謝って最後の挨拶に代えさせて
もらいます。

生徒会長（前書き）

マシネリを解消すると思われる画期的な？考えを思いつきました。
詳しくは後書きのほうに・・・

生徒会長

五、

生徒会室までやってくるとノックもせず扉を開けてみた。

「・・・全く、呼ばれてすぐに来ることもないうえに・・・ノックの一つも出来ないなんて・・・信じられませんわ。」

ふかふかの社長椅子みたいなのに座っている背の小さい生徒会長さんは俺を睨んでいる。

「それは失礼・・・ところで、生徒会長さんが『弱小部筆頭候補部長』になにか用事でもあるんでしょうか？（おかしい言葉だな・・・ですわって・・・何時の時代の人だ？）」

面倒なのでさっさと話題を終わらせてもらうことにした。

今回の生徒会長選挙は学校始まってのすごいことが起きてしまったのだ。二年生が二人、生徒会長に立候補し、珍しいことに一年生の一人が生徒会長に立候補・・・その結果、なんともまあ、一年生のこの女子生徒が生徒会長になってしまったのである。インテリっぽい眼鏡をかけているし、実際に頭もいい。飛び級ではいつてきたそうだ。実際は中学三年生ぐらいかな？

「・・・ええ、あります。これまで確証は無かったので黙っていたのですが、演劇部と裏で取引をしていたそうじゃないですか・・・」

そういつてにやりと笑う生徒会長。こういうところは美しくないのではないだろうか？

「してませんよ、生徒会長さん。俺は真っ白の人間です。」

「・・・では、これを見てもうそをつくとおっしゃるのですか？」
そういつて一枚の写真を見せる。そこには頭を下げている俺の手からエッチな本を貰っている劇団部の部長の姿が映ってあったのである。俺の名誉のために言うておくが、俺の本ではなく、瑞樹のものである。しかも、この本は別のものを隠すためのおとりだ。

「何か反論はありませんか？」

そういつて金色の自慢の髪を手ですいている生徒会長。しょうがないな……。

「……予算が足りなかったんです。」

そう、我らが『小説部』は予算が足りないのだ。この生徒会長に代わってからは俺たちの予算は千円である……って、ありえないだろう！ということであるのだ。（何がだ？）

「おや、ルールは守らないといけないんですよ？」

「……わかっています。（……いえ、ルールは破るべきものです。）」

「では、即刻ルールを破った『小説部』は廃部ですね。」

そういつて一枚の書類をゴミ箱の中に捨てる生徒会長。俺は言葉も出ない。

「では、これで今回の話は終わりです。」

そういつて立ち上がる生徒会長に対して俺はやれやれといった感じの表情を見せようと思ったのだが、諦めてすぐに回れ右をして生徒会室を後にしようとしたのであった。

「……何か意見があるのなら聞きますけど？」

後ろから聞こえてきた落ち着いている声に対して俺も勤めて冷静に答える。

「……いえ、何もあります。生徒会長さん。（あなたには何を言っても無駄ですからね。）」

そういつて俺は生徒会室を出て行ったのであった。くくく、悪いが俺をコケにくれたお礼は既に済んでいるから今回は大目に見てやろう。俺って根に持つタイプですもん♪

そして、部室へとやってきた俺は背部となったことを素直に告げた。

「やれやれ、とうとう『小説部』は廃部になってしまったのかい？」
廃部になった部室で俺たちは会議を行うことにした。勿論、これからどうするかということである。こいつらに任せておけばろくで

もない部活が出来そうである。

「まあ、しょうがない。どうせ、雅辺りが写真を生徒会室に送り込んでんだろうな。」

「え、ち、違うよ。」

家に新しい合体ロボットのおもちゃが置いてあったから間違いない、そうに違いない。やれやれ、裏切り者がこんなに近くにいたとはな・・・想像は出来ていたのだが・・・。

「え？じゃあ・・・今日入部したあたしたちはどうなるの？」

「そうですよ・・・私たちはどうなるんですか？」

それに関しては代案がある。

「瑞樹、説明してやれ。」

「了解・・・え、この学校では意外と部活を作るのは簡単なんだよ。別に集まるだけの部活だってあるし、意味不明な部活だって存在する。容認されてしまえば人数が一定数・・・そうだね、5人以下になるまでは問題が無い限り、誰にもつぶされたりはしないんだ。」

「だから、今からでも廃部されてしまった部活の名前と活動内容が同じでなければ新しい部活を作れるってことだな。活動は嘘偽りで結構だ。」

なるほどと感心している二人に対して、瑞樹は代案を発表することにしたらしい・・・なにやら文字がびっしりと書かれているノートを取り出している。

「じゃ、僕が作りたい部活は・・・」

『ぴんぽんぽんぽーん・・・三年生の時柱 零時君・・・三年生の時柱 零時君・・・生徒会長が呼びです。今すぐに生徒会室に行ってください・・・繰り返します・・・』

再び呼び出された俺にみんなの視線は集まる。見られて顔をしかめる俺。

「・・・俺、行って来るわ。みんなで適当に部活の内容と名前を書いてくれ。これで今日の部活は終了。みんな、気をつけて帰ってくれよ。おっと、瑞樹・・・一応俺の携帯電話の番号を二人に

渡しておいてくれないか？」

「わかった。しかしまあ、君も不便だねえ。相当、生徒会長に好かれてるのだねえ。」

まあ、一週間に必ず一回は呼び出されているのだ。すかれていますではなく、いじめだろ？」

「じゃ、雅・・・今度は裏切らないでくれよ？ つぶれた部活はもう、片手ではたりないぞ。」

「あ、も・・・勿論だよ・・・。」

しどろもどろになっている雅に俺は釘を誘うと思ったのだが、この調子では信頼することは出来ないと感じてしまった。裏切ること
は明白である・・・手にあるカメラは何だ？

「二人とも、明日の放課後からはこの部活に来て色々頼んだぞ？」

「あゝ面倒なことになったなあ。」

「意義あることが出来るようにがんばりますね？ 零時様。」

そういつて俺は部室を後にしたのであった。

面倒なのでノックもせずに再びはいる。

「何ですか、生徒会長さん？ 再び、誰かよからぬことを密告した人がいましたか？」

そこにはなにやらゆらりとした不穏な空気が流れているようだった。今の気分は鬼退治に間違っ
て一人でやってきてしまった哀れな桃太郎の心境である。そろそろ夕日も沈んできているというのに部屋は電気だ
ってつけられていない。かすかに見える生徒会長のシルエットからは邪悪とし
か表現できないものが沸いて出ている。

「・・・先ほど、匿名で・・・このような写真を貰ったのです
が・・・。」

その手には生徒会長のばんちらが写されているのであった。

「・・・それがどうかしたんですか？ 俺にそんなものを見せないで
ください。目に毒です。愛しの『機械部』『機械科学部』『森羅万
象部』・・・一番新しく『小説部』を叩きのめした仇敵のパンチ

うなんて見ても目が腐れてしまいます。」

そういつてわざとらしく首を振る俺。この生徒会長は男子に不評である。何故だろう？

「用事が無いのなら帰らせてもらいますけど？生徒会長。俺、家に帰ってガンダ○のDVDでも見たいんですけど？（あ、そういえば今日は部活だったな。終わってみるか。）」

回れ右をして帰ろうとすると後ろから男の声が聞こえてきた。

『・・・ほら、田中、約束の生徒会長のばんちらだ。これでなんとか・・・おっと、雅がなんかこっちを見てるからこの瑞樹からお前にと言われてる本にはさんで渡すからな・・・じゃ、予算の少し分けてくれよ？うんうん、もつべきものは友達だな。』

それは俺が少し前に劇団部の部長に言った言葉だった。

「・・・・・・・・」

背筋が凍るの感じ、俺は生徒会室を後にしようとした。逃げるのはいいことなのだ。

「・・・こんなことをするような生徒は一人しかいませんね。」

「・・・違いますよ。俺が生徒会長さんのばんちらなんて撮りません。得体の知れない一年生を撮るよりも毎日夢に出てきた機械を写真で撮る方が自分的に楽しいと思ってます。だ、だからその写真を俺は知りません。大体、生徒会長はもてま・・・失礼。」

「ほお、あくまで違う、自分が撮ってはいないというんですね。」

勿論ですとも・・・俺が撮ったのではなく、瑞樹が撮ってくれたんです。

ゆらりと立ち上がる生徒会長を俺は落ち着かせることにした。

「大丈夫です。俺は見えてませんし、劇団部の部長にしか渡していません。それに、部長の話では見る前に無くしてしまったと言っていたし、ネガは燃やしました。つまり、撮った人物しか見ていません。いえ、撮った人物も目隠しして撮ったという噂を聞きました。」

「本当にそうおっしゃるの？」

目が紅く光っているので怖い。逃げようか・・・だが、しかし、

高1のガキの前から姿を消すなど俺の中のプライドが許してくれそうも無い。

「・・・何か勘違いしていますよ、俺は違いますよ。生徒会長がそこまでもてるとも思いません。男子の間では『付き合いたくない女筆頭選手』として大会選手に選ばれてますから！それとええと、俺、生徒会長の下駄箱の中に女子がラブレターを入れるのをみました。」

その大会がどこで行われるのかは知らないがな。それに、女子にはモテモテ。

「か、仮にもですよ？俺が他の男子部長にその写真を持っていったも逆に金を払えといわれたことも無いとは言いませんよ？ええと、まるで罰ゲームですね・・・。」

いやあ、あの時はすごかったなあ・・・『ああ？そんな物を見せるんじゃない！！』と初めて言われたぜ・・・男ならだれでもいいと思っただが・・・間違ってたんだな。

「落ち着いて・・・そう、落ち着いてください。あ、だって・・・生徒会長の写真を演劇部部长に渡せたんだから・・・厄払いも出来たってもので・・・。」

「・・・これも匿名の情報ですが、『え、生徒会長って前生徒会長じゃないの？じゃ、いらぬや。』とのことをどこかの部長さんが口走っていたそうですが・・・？」

え、演劇部の部長め・・・今度あったら覚悟しておけよ・・・。

背中に扉が当たってしまい、これまでゆっくりと後退していた俺はどうとうチェックメイト・・・困ったことにもう打つ手が無い。投了寸前の三流棋士に奇跡は起きず、盤上をひっくり返したい気分・・・こうなったら・・・。

「ええとですね、これで生徒会長は夜道も安全ですよ。襲われないんですから！」

ぴりり！

完璧に凍ってしまった空気を感じて、俺は既に暗くなってしまった生徒会室の主を緊張した面持ちで見やる。そして、その生徒会長は俺を思いつきり睨みつけて・・・

「・・・う、ううう・・・そ、そんなに言わなくてもいいじゃない!!」

その場に泣き崩れたのであった。

「・・・わ、私だって好きでもてないわけじゃないのよ!こ、これは呪いなんだもん!仕方ないでしょ!一般的な魔法使いの人の魔力では上をいかなくては私のことを異性として見れないのよ!うう・・・い、虐めなくてもいいじゃない!!」

「そんな、虐めてるなんて・・・俺が逆に毎週毎週虐められているような・・・」

「・・・毎週毎週、呼び出して・・・確かに悪いと思ってるけど、悪いことをしているのはあなたなのよ!私、生徒会の仕事に忙しくてなかなか友達も出来なくて・・・それに、この学校は自治だから生徒会長の責任なのよ!私、どれだけあなたのことで叱られたか・・・」

「あゝそれは・・・すみません。」

後輩を泣かしてしまった俺は・・・どうしたら良いのだろうか?小さい子を泣き止ます方法なんて知らないのとおりあえず近くに行つて頭を撫でることにした。

「ええと、俺が悪かったんですから・・・泣かないでくださいよ、生徒会長さん。」

その手をはじく小さな手は震えていたような気がしないでもない。
「・・・いい加減、私の名前を覚えてくださらない?私の名前は・・・」

「わかってますって、パトリシア生徒会長。」

そういつて俺はパトリシア・T・ロードウェル生徒会長の頭を再びなで始める。

「・・・うう・・・」

「すみません、悪ふざけが過ぎました。だから・・・泣き止んでください。」

「泣いてなどいません！見てなさい、私を虐めた罪は大きいですよ！それに、私のパンツを見た罪も重いです！！」

そういつて顔を真っ赤にして立ち上がるパトリシア・T・ロードウェル生徒会長様。やれやれ、彼女は一体全体、どんな性格なのかね？

「・・・ほら、行きますわよ。」

そういつて鞆を掴んで俺の方を見やる。それに対して俺は別に返答とか出来ないから首をかしげたのであった。行くってどこに行くのだろうか？先生の所にお叱りを受けに？

「昨日、店長さんから言われたのでしょうか？」

「・・・あ、なるほど。」

どうやら俺の知り合いの中にこのパトリシア・T・ロードウェル生徒会長様が知らず知らずのうちに入っていたようだ。店長さん、この人に弱みを握られたんですね？

「今日からはバイト先の先輩になるのよ！だから、きちんとしてもらわないと私たちが困ってしまうわ。」

「・・・生徒会長の家って裕福じゃありませんでしたっけ？」

金持ちの家柄でたしか有名なところだったと思うんだけどなあ。もしかして、つぶれてしまったのだろうか？

「・・・時柱さん？」

「・・・パトリシア・T・ロードウェル生徒会長さん・・・あんたも大変なんだな。」

「何を考えていたのか知らないけれど、とりあえず、その名前で呼ぶのはやめてくだらないかしら？」

そういつて俺の目の前に偉そうに胸をそらす。

「・・・今後は呼び捨てで結構よ。仮にもバイト先の先輩でもありますからね。」

「・・・わかりました、生徒会長。（なんか、言葉がおかしいぞ？動揺しているのか？）」

ばしっ！！

珍しく生徒会長が俺の頭を叩いたのであった。これまで、こんなことは無かったはずなのだが・・・。

「・・・きちんとパトリシアと呼びなさい！」

なんとなく、俺は先生に怒られているような気分になってしまった。はぁ・・・。

生徒会長（後書き）

マannersを解消する方法が自分の中で決まりました。ずばり、もうちょっと話を広げてみるということです。それぞれの話をもっと詳しくかくことですね。できるだけ多くのキャラクターとの楽しいふれあい？を書いていきたいと思います。思いつきですが、がんばりますんで応援、よろしくお願いします。

暗い人と明るい夢？

六、

今日のバイトは俺とパトリシアだけだったのだが、明日からは他の二人も来るらしい。やれやれ、面倒なことはこれ以上増やしてもraithたくなのだが・・・それもまた、一興かもしれない。まあ、冗談はそのくらいにして・・・。

家に帰り着くと、兄貴が俺の分のとんかつを食しているところだった。

「・・・おかえり。」

「ただいまって・・・また俺の夕食食ってるの!？」

「・・・今日は自信作だったのにな。残念だったな。」

どうやら今日の料理の当番は兄貴だったようで・・・レストランで働いているだけの腕は持っている。前にも言ったのだが、寡黙な人物で何か用事があるときのみしか、口を開かないような性格なのだ。正直、小さいころからこの人は苦手である。

「・・・雅が何か言ってたぞ。」

そういつて俺の目の前にキャベツと白いご飯をおいて自室にこもったのであった。隣の部屋では母さんがテレビを見ながら笑っている。雅はどうやら自室にいるようだと思いつながらキャベツを食べることにしたのであった。くすん、おかずがキャベツだなんて・・・

「雅、はいるぞ?」

「うん、どうぞ。」

雅の部屋は俺の部屋の隣にあり・・・というより、仕切りが一つあるだけだ。

その仕切りは俺がおいたものであり、それはなぜかというとな雅の奴は俺の部屋を寢床にするときもあり、散らかしていたり、ものを破壊してしまうことがあるからである。仕切りがあれば変わるもの

か？とお悩みの人もいるのだろうが・・・そういう場合は実際にやってみればよい。たいした効果は期待できないというのが俺の答えだ。

「ごめん、今日もまたプラモの角、折っちゃった。」

おいおい、あの赤い奴の角を折るとは・・・三倍ほどかつこよさが下がってしまったぞ。

「ところで、そのことをわざわざ俺に言うためにお前はそこにいるのか？」

「ううん、違うよ。ほら、気がつかない？」

部屋をぐるりと雅は一瞥したので俺も真似してみると・・・
「うわっ！！」

暗い部分に一人の女の子がひざを抱えて座っていたのであった。
ゆ、幽霊だろうか？それとも、魔獣？かけているビン底眼鏡からその表情は読み取ることは出来ない。

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・こんにちは。」

「あ、こんにちは・・・。」

あちらが唐突に頭を下げてきたので俺も下げたのだが・・・誰だろうか？

壊れた赤い奴をいじっている義妹に近づき、耳打ちする。

「あれ、誰？」

「・・・わからない？」

どこかで見たような感じなんだけどなあ・・・暗い・・・眼鏡・・・

「・・・ああ、瑞樹の姉か・・・。」

「うん、正解。」

思い出した・・・そういえば瑞樹は双子だったのだ。だが、姉のほうは病弱でこれまでめったに会ったことが無かった。なんでも、

死の瀬戸際になったことも何度かあるらしい。俺は病院の一室に一人でぼつりと座っていたことを思い出す。そのときからぐるぐる眼鏡にめちやくちや長い髪の毛である。学校に来ても俺たち意外とはしゃべっていなかった。

「・・・ええと・・・名前は確か・・・瑞実さんみずみだったかな？」

「・・・うん。」

まるでお墓から出てきた未練たらたらのお化けみたいに俺を見ている。いや、よくよくその視線をたどれば俺の後ろのほうを見ているような感じがしないでもないのだが・・・そのぐるぐる眼鏡には何が映っているのでしょうか？とても気になるのですが・・・

「それで・・・なんで瑞実さんが・・・」

「・・・瑞実でいい。」

「・・・何故、瑞実がいるんですか？」

「・・・敬語、使わなくていい。」

「・・・なんで瑞実がいるんだ？」

不思議に思う俺に対して雅は部屋をこっそり出て行こうとしていた。向かう先はどうせ俺の部屋だろう。俺はこんな夜にお化けじみた人と一緒にいたくはない。

「・・・兄さん、掴まないでよ。」

「・・・にがさんぞ？」

「でも、瑞実さんは兄さんに会いに来たんだよ。」

「・・・そうなのか？」

振り返るとそこにいたはずの根暗少女はいなかった・・・と仕切りがいきなり外れて、そこから恨めしそうに・・・いや、ほっぺたが朱に染まっているということは恥ずかしがっているに違いない。何を恥ずかしがっているのだろうか？

「さすが、零時だね。姉さんの違いを的確に理解するなんてね。」

「・・・瑞樹、お前はいつ、俺の隣に沸いて出てきたんだ？しかも、何で腰にタオルなんて巻いてるんだ？パンツぐらいはけ。」

俺の親友は頭から湯気を出しながらコップに入った牛乳を握って

いたのであった。

「今日からお世話になることになったんだ。ほら、いつもの奴だよ。」

「・・・そうか・・・」

親御さんの事情により、瑞樹はたまに俺の家に泊まりにやってくる。まあ、それなら瑞樹の姉の瑞実がいても問題ではないな・・・？本当に大丈夫なのだろうか？

「けどまあ・・・こまったことに僕の寢床である零時の部屋が姉さんに占領されてしまった。いやあ、彼女も恥ずかしがっているだろうね。」

「む、どういう意味だ？」

「・・・おやすみ。」

そういつて仕切りから見えていた顔は引っ込み、俺は瑞樹のほうを見たのであった。

「つまり、彼女はどうかやら零時と共に夜を明かしたいと思っているんだよ。」

「・・・いや、俺はここで寝るから、雅、俺の部屋で寝て良いぞ。」

「そう？兄さんがそういうのなら・・・。」

「瑞樹、さっさと服を着ろ。」

「やれやれ、しょうがないな。」

こうして、俺と瑞実の今年のファーストコンタクト？はすれ違い気味に終わったのであった。そして、俺は雅の部屋で寝ていたのだが・・・

「・・・これは夢で良いんだかな？」

そんな俺の目の前には昨日と打って変わって・・・お昼のビル街が広がっていたのであった。夜空にお月様ではなく、お天気はバツグンで雲が存在している。唐突すぎ・・・。

「・・・で、機械はいないのか？普段ならそろそろ動き出すところあいないのか？」

これまでの戦友たちの姿を探してみるのだが、そこには誰もいな

かった。オフィス街の内部にも誰もおらず、この世界にいるのは俺だけのようだった。

「この世界、壊したっていったじゃないかよお!! ルナ!!」

俺の夢の世界を壊したといっていたルナだったのだが、どうやら・うそつきさんだったみたいだね♪困ったものだな。今度から可愛い娘と機械には気をつけなくては・・・。

「おうなんか騒いでるねえ、人の世界で・・・」

どこかで聞いたような声を聞き、俺は後ろを振り返った。そこにはルナのような機械の体を持っているソルが姿を現していたのであった。なんだかポーズを決めている気がする。

「ああん?ここはソルの世界かよ・・・てか、何で俺がここにいるんだ?」

「・・・プライベートの侵害だな。零時、覚悟は出来ているな?」

そういつてとても未来的な武器であるレーザーブレードを俺に向ける。それに対して俺は丸腰・・武器は敵に立ち向かうだけの心です。じよ、冗談じゃない!

「・・・ちょっとまで、お前は丸腰の相手にそのような武器を使用するのか?」

「問答無用。」

そういつて車も通らない道路の上を俺に向かって走ってくるのだった。それに対して俺は当然の行動を取る。強い奴に会ったときは・・・

「あ、逃げるなあ!」

「・・・ぐっばい!俺は不良ととともに戦うなんて考えたことはありません。」

すたこらさっさと目指すはゴール。どうせお空に輝くお日様が眠ってしまったえば俺は時間切れで夢の世界からさめますから、俺の勝ち逃げ♪所詮、機械は人間に勝てんのだよ。

「それに、ここは俺の夢の中でもあるのだから足は俺のほうが速いもんねえ。機械は最高だけど・・近づいてみるといけないんだぜ

？怪我しちゃう。」

ルナは近づいても大丈夫だとは思うのだが、ソルは第一印象が最悪だったのだから近づくなんて馬鹿な真似は馬鹿でもしません。つか、近づいちゃったら一刀両断の元、僕の体はすぱっといっちゃいます。いや、意外と手先が器用そうだから微塵切り？

「おらおらまてえ！！逃げないで制裁を受けろお！！」

この人が熱血主義者の上におばかで助かった。飛び道具なんて使用されたら間違いなく俺の命日はその日に確定されてしまいますがな。

「いや、熱血主義者は・・・卑怯なことはしないはずだと思ったんだが・・・それなら、対等の条件として俺は魔法が使用できるのではないか？」

ふとした疑問が勝手に口の中から出る。振り返りながら余裕をこまして走っているふりをしてソルの足元に・・・

「食らえ！！」

「うわっ！！」

ねばねばした物体（適当に作ったもの）を召喚させる。狙ったとおり、そして推測どおりにソルはその場にこける。これまで逃げてばかりの俺が反撃をしてこないと思ったのだろうか？

「あいてて・・・」

しりもちをついて痛がっている隙を俺は反撃の機会だと感じて一気に相手を動けないようにする。うーん、ルナに比べたら弱いような・・・

「そりゃ、そりゃ、そりゃあああ！！」

「ぐ・・・」

相手の四肢を氷で固め、おまけとしてイチゴシロップをかけて・・・『ソルのカキ氷イチゴ味』は完成したのであった。なんだか、ネーミングセンスが悪い気がする・・・。

既に動けなくなっているソルに俺は通告する。手には手製のメガホン。

「・・・おとなしく、負けを認めなさい。これ以上抵抗すると攻撃を開始しますよ?」

「誰が・・・負けを認めるわけないだろ!」

どうやら俺には交渉などという頭を使用する行動は向かないようである。やれやれ、こうなったら攻撃を開始するしかないな・・・。「最後通告です。今すぐに攻撃をあきらめ、両手をあげて『助けて、ママ!』』といって降参しなさい。悪いようにはしません。お母さんが悲しみますよお。」

「・・・な、なに言っただ、お前?」

俺はソルに近づいていき、床に落ちているレーザーブレードを拾い上げる。スイッチでもあるのか、今は電源が切れている。そして、それをソルの手に渡す。

「・・・えゝでは、捕虜を研究したいと思います。ていつ!!」

「うわっ!!」

そういつて俺はソルを拘束していた右の氷を壊してソルの手を触る。

「ううん? 普通の人間みたいな手をしてるな・・・普通にやわらかいわ。」

「あ、ちょ・・・こら、さわんな!」

「ちえ、固いのを想像してたのにな・・・じゃ、次は背中のバーニアを・・・」

そういつて俺は背中に回る。

「お、おい・・・誤作動するかもしれないんだぞ? 私、まだきちんと動いてないんだからな? 操作わからないんだぞ! 本当に怪我じゃ済まされないって!」

「構わない構わない・・・と、ここを触ったらどうだろうか?」

「うひゃあ! どこを・・・」

「すまん、じゃ、こつちを・・・」

「あわわわ・・・ちよっと!」

一生懸命いじくっていると・・・気がつけば夕方になっていた。

そろそろ夕日も沈んで俺にはようやく朝がやってくる・・・だろう。

「おーい、ソルって・・・」

ソルは目の前で悶えながら変な顔をして床に転がっていた。

「・・・何してるんだ、こいつは？」

なにやら幸せそうな顔をしているようだったので無視しておくことにしよう。俺はもと来た道を戻らずにそのままソルに追いかけて進んでいた方向に歩き出す。すでに空には月が出てきているのだった。おや？おかしいな・・・

そして、完璧に夕日が沈み、月も夜空に映える。俺の体もなにやら妙な浮遊感が訪れる。どうやら、この世界ともおさらばのようだったので最後にこのビル街を眺めておく。

「・・・もう二度と、きたくないんだけどな・・・」

ソルの世界なのか知らないが、人が誰もいないこんなところには来たくないものだ。やることは走ることだけ・・・それだけでは・・・
・退屈してしまう。

「・・・やれやれ、夕日なんてこの世界で見るのは初めてだな・・・
・朝日だって見たこと無かった気がするんだけどな。」

気がつけば朝になっており、夢の中での出来事は当然のように現実世界に影響を及ぼすことなく、俺の体は絶好調だった。

「・・・すう・・・」

いつの間にか隣の布団には瑞実が寝てるし、瑞樹が天井に貼り付けられている。

「・・・クモが・・・クモが・・・」

なにやら叫んでいるし、平和な朝だな・・・そう思って俺はいつもより早く起きて一階に降りていったのであった。

多分、平和な日常の最後の日（前書き）

次回から、それぞれの話に行くことにしている予定です。ものすごい量になるような気がします、のほほんとかんばっていききたいと思います。

多分、平和な日常の最後の日

七、

春の陽気に誘われて、俺はお昼休みを……。小テストのやり直して過ごしていたのであった。とても、有意義にお昼休みを使っているのは認めるが、なんとなく……。悲しい気がする。廊下からは高校三年生にもなってプロレスごっこらしきものをしている暇そうな連中の嬉々とした声が聞こえてくる。そのたびに、俺の心を台風が通過していく。

「……。やってられるかぁ!!」

「ダメよ、それをするまでゼロ君にはお昼休みはなし。いや、休みなし!」

どこから現れたのか知らないが、俺の後ろに八重先生が腕を組んで立っていた。

「……。先生、弁当の時間ぐらい、もらえないでしょうか?俺、新部活発足の書類を書かないといけないんですけど……。今日中に出すって生徒会長に……」

どうにかして昼休みをまったりと過ごしたいと思っていた俺だったのだが……。八重先生は首を縦には振ってくれず、俺がかわりにがつくりと首を縦に振ったのであった。

「ゼロ君、ゼロ君は今年受験なんだよ?受験生がよく意味のわからない部活を勝手に発足した挙句にそこで遊んじゃダメでしょ?有望な転校生を勝手に入部させちゃったって他の部長さんが嘆いていたわよ。生徒会長さんだってゼロ君についての処罰書をどれだけかかされたことか……。私だってゼロ君が毎日夢に出てきて眠れない毎日を送ってるのよ。本人がお昼休みぐらい勉強したって罰は当たらないわ。いや、苦しみなさい!」

そういつてその場に泣き崩れる先生……。俺、そこまで問題児だったのだろうか?別に何か騒ぎを起こしたり、暴力沙汰になって

停学にだってなってないぞ？

「あのー先生、俺がわるかったのならあやまりますから・・・その、顔をあげてください。真面目に昼休みの間は勉強しますから・・・はあ、やれやれ・・・」

そういうと先生はぱつと顔をあげて俺の両手を掴む。その力が異常に強くて痛い

「・・・わかってくれて、先生嬉しい！」

「・・・先生、顔が近いです。あと、手がめっちゃくちゃ痛いんですけど？」

「照れちゃって・・・可愛い！」

「・・・」

思い込みが激しい人だったなんてな・・・困ったもんだ。しかし、困ったところに意外な人物が俺を助けにやってきたのであった。

「あのう、八重先生・・・すみません・・・」

教室の扉を開けて俺を見ているのは瑞樹だった。俺がこの教室になってから・・・いや、八重先生がこの教室にいる間は一度たりともこの教室に来たことはなかった。まだ、一ヶ月ぐらいしか経っていないけどね。

「ん？何かな？瑞樹君？」

「ええと、僕のお姉さんが職員室で八重先生のことを探してきました。なんでも、話があるそうです。」

「そう？」

そういつて名残惜しそうに俺の両手を触って先生は旅立ったのであった。はやく、生徒離れして欲しいもんだな。いや、俺が出来ていないほうなのだろうか？

「ふう、やっぱり零時にはイロモノがお似合いだよ。うらやましい限りだよ。」

「おいおい、みんなに失礼だぞ！まあ、それはいいや・・・それでどうかしたのか？」

「おっと、そうだった・・・実はね・・・」

俺の近くまで来ると一枚の写真を伏せて俺に渡す。

「・・・この写真は？」

「これはね・・・生徒会長の例のあれだよ。」

「・・・なるほど。それはわかったのだが俺に渡す理由はわからんぞ？大体、その写真になんの価値があったんだ？いたずらに彼女を泣かしたただだったぞ。」

この前の生徒会長の泣き顔を思い出す。あれは正直やりすぎたと思う。

「・・・いや、それは零時が悪いと思うんだけどね。それさ、零時が処理するべきだと僕は思うよ。それ、確かに撮ったの僕だけど零時が使用しちゃったからね。言葉に力があるんだし、物体だってそれなりの力があると信じられているだろう？どうも、それをもっていたら僕が呪われてしまいそうなんだよ。実際、今だってきついぐらいさ。」

真面目そうにそういつている瑞樹。その表情が暗いのがこの写真がただものではなかったことを証明している気がする。

「昨日だって恐ろしい夢を見たし、刻々と体調が悪くなっている気がするよ。」

「・・・？でも、写真は全部処理しただろう？あるのは生徒会長が所持していた一枚だけだと思っただけけど？」

「勿論、世界にあの写真は一枚だけさ。僕はそれを生徒会長から返してもらっただけだよ。それが生徒会長のところにあるといろいろと面倒だろうからね。ま、そういうことがばれれば零時が退学になってしまう・・・それだけは避けたいのが僕たち、『シチュエーション部』の部員の本音だよ。」

いつの間にか廃部となった『小説部』の代わりに『シチュエーション部』がそのポストにおさまってしまっていたらしい。困ったものだ。

「俺に渡したところでこの写真が効力を発揮して俺の夢をぶち壊してくれたらどうするんだ？」

「そのときはそのとき・・・冗談だよ、握った拳を下ろしてくれ。その写真、とりあえず君が処理するのが一番だと思うんだ。なんとなく、それが僕にはわかる！」

いや、断言されたってな・・・しかし・・・まさかパンチラ写真に人を呪う力が出てくるなんてな・・・これはある意味価値のある写真なのかもしれない。

「まあ、何かあったときは僕たちに連絡してくれ。」

「・・・連絡して欲しいぐらいならこれを渡すなよ・・・」

「彼女のことを異性として見れない我が校のへたれ男子生徒は君を誇りに思う。では・・・おっと、時間だ。ばいばい、零時。」

そういつて瑞樹はその場からまるで魔法使いみたいに・・・いや、魔法使いなのだが、とりあえずそこからいなくなった。的確に言い表すなら忍者か成仏した怨霊だな。

「あれ？瑞樹君は？」

「ええと、帰りましたよ。多分、男子トイレにでも行ったんじゃないんですかね？」

戻ってきた先生にそう告げると微妙に休憩が出来たことを瑞樹に心の中で感謝しながら再び小テストのやり直しと向き合ったのであった。

放課後、俺は部室にて書類を書いていた。俺専用の机には角がついています。（自慢）

「零時様、代わりましょうか？なんだかとても疲れていますけど？」
瑞樹の一声によってリボン解いてさらさらの銀髪を揺らしながら俺に近づいてきたルナはそんな嬉しいことを言ってくれる。うん、こういうものもいいもんだな。

「いや、そろそろ終わるから大丈夫だ。」

集中している俺の耳に雑音が紛れ込んでくる。

「うーん、ソルは髪の毛が短いから・・・髪型と状況が限られてくるな・・・ツンデレキャラなのはそのまんまだし、ここは意外性を

もってしおらしいキャラで行ってみようか？」

「・・・？どうすればいいんだ？」

真面目に聞いているソルのおつむが心配されてしまう。大丈夫だろうか？

「雅ちゃん、やっぱり君は『魔女っ子』になるべきだと僕は思うんだ。僕が君の衣装を準備してあげるからさ。」

「えーっ！私、やっぱり『正義のヒーロー』がいいな。レッド役がいいー！！」

雅も雅だな。それより俺は一人でも欠けちゃったら廃部になる可能性が出てくるし、さっさとここはこの書類を提出してこよう。

「じゃ、書類を渡してくるから・・・問題を起こさないようにしてくれよ？」

「大丈夫、零時じゃないんだからだれもそんなことはしないよ。」

今、とても失礼なことを言ったのは誰だろうかと部屋を見渡したのだが、みんなはしれっとした表情で自分がしたいようなことをしていたのであった。

「・・・とりあえず、俺が一時間たっても帰ってこなかったら先に帰っててくれ。俺、今日もバイトがあるからな。」

「はーい。」

皆、返事だけはいいいんだよな・・・。

コンコン・・・

「ちよっと待ってください。」

怒っていない生徒会長、パトリシア・T・ロードウェルの澄んだ声が聞こえてくる。俺は言われたとおり、生徒会室前に立って待つことにしたのであった。

それから数分後、生徒会室の扉が開いて瑞実が姿を現した。

「あ・・・零時・・・。」

「あれ？瑞実？なんでこんなところにいるんだ？」

「・・・用事・・・先生が部活に入るなら書類を生徒会長に渡して来

いっていったから・・・。」

そういえば俺たちの学年の転校生って瑞実だったのか？それまで見たこと無かったし・・・いや、どっちかというと転校というより復学というものかもしれないな。

「ふうん？それで、これから部活？それならがんばりなよ？」

「・・・うん。」

そういつて瑞実は幸せそうな顔をして俺の前からいなくなったのであった。もしかしたら成仏したのかもしれない。さすがにそれはないな。

「どうぞ、はいつて結構ですよ。」

馬鹿なことを考えていると生徒会室の中から生徒会長の声が聞こえてくる。

「失礼します。」

「・・・とうとうノックすることを覚えてくれたんですね？私は嬉しいですわ。」

本当に嬉しそうな顔をするパトリシアに俺はため息をついたのであった。やれやれ、この小娘さんは・・・。

「それで、何か御用かしら？」

「ええ、新しい部活の発足を・・・きちんと書類に書いてきました。」

そういつて俺はパトリシアに書類を渡したのであった。以前は拒まれていたのだが今は拒むことなく、それを受け取って眼鏡ごしにそれを見ている。

「・・・今回もすごい発足理由ですね。」

苦笑するパトリシアに対して俺も苦笑するしかなかった。まあ、『ありとあらゆる状況において人間の心はどのような対応をするかを研究したい為に発足。』というものだ。

「それに、メンバーもぎりぎりですわね。もう一人、欲しいところですよ。」

「別に、パトリシア生徒会長の部活じゃありませんし、これが限界

です。我々のほかにも部員を欲しがる部活は掃いて捨てるほどありますよ。」

「そうなのですか？」

「ええ、そうです。」

生徒会長には内緒だが、雅を入部させたときは色々と裏工作をしたものだ。結局、瑞樹がヒーロー物のおもちゃで釣って入部させたのだ。まあ、他の部活ではお金を使用するところもあるくらいだからそれほど意味不明な部活も存在している。

「実際、俺たちは苦しいですからね。でも、書類に不備は見つけれないでしょう？」

そういつて生徒会長をじろじろと見ると、彼女は書類に未だに目を通していたのだった。

「しょうがないですわ。認めざる終えません。」

そういつて生徒会長の認可証を押して、俺に返す。書類は各自で保管しておかなくてはいけない。もしも、この書類を無くしてしまったら廃部確定である。

「じゃ、俺はこれで・・・ところで、他の生徒会員の方々は？」

「・・・この時間帯にはほとんどの人が帰宅していますよ。残っているのは私だけです。最終戸締りまで残ってするのが仕事だと・・・お姉さま・・・いえ、前生徒会長が申ししていたことですし、この学校は大体由緒正しき高校ですからね・・・私のように上のものがきつちりとしておかなくてはいけないのです。」

そういつて生徒会長であることを誇りにしているのかなにやら胸をそらしている。

「・・・まあ、あまり帰りが遅くならないようにしないと近頃は物騒ですからね。気をつけてください。じゃ、俺はこれで・・・。」

そういつて生徒会室を後にしたのであった。

「お待ちなさい。私もそろそろ出るころですので、バイト先までお供しますわ。」

「・・・？今日はバイトの日でしたっけ？」

「ええ、そうです。ほら、このとおり・・・」

似合いそうもなさそうなかわいらしい手帳を俺の目の前に突きつけて生徒会長は再び胸をそらしたのであった。なにかコンプレックスでもあるのだろうか？

「・・・本当ですね。」

「敬語を使わなくていいといっているでしょう？年下だから・・・」

「はいはい、わかりました。」

そういつて俺は首をすくめる。

廊下を共に歩いていると、校舎内から外の様子がよく見えていた。校庭の隅のほうを通って瑞樹達が帰っているところを確認できる。ここから見ると瑞樹のハーレム状態のようにも見えるもんだな。近くにいた男子運動部の連中が殺気を発しているな。

「しかし・・・なんであんな客が来ないところにわざわざバイトを雇うのかしら？」

「・・・。」

「ちよつと、聞いてらっしゃるの？」

「あ？」

「・・・もうっ！だから、何であなたのバイト先の助平なおじいさんは全く客が来ない店を閉めないで続けているのかしらって言っているのよ！」

両手を振り回してそう叫んでいる生徒会長だったが、俺はそれをちよろつと見ただけで再び瑞樹達のほうを向いている。

「おーい、瑞樹！」

窓から手を振っているとあっちも気がついたようで手を振りかえしているのだった。

「もう！」

「・・・さあね？なんだか裏でやってるって噂だけど？俺たち、バイト君が知ってはいけないことなんじゃないのかな？」

そういつて俺はお茶を濁してその裏で何かをしていると噂されて

いるバイト先へ向かうのだった。さて、今日から・・・バイトも更に増えるらしいし、大変になるに違いないだろうな。今日から何かが始まる気がする。

多分、平和な日常の最後の日（後書き）

まず、後書きの前に・・・この場を借りて感謝の意を伝えたいと思います。読んでくださった方、評価をしてくださった方、そしてわざわざこんな作者にメッセージをくれた方・・・本当に嬉しいです。名前を挙げていいかわかりませんが、伏せておきますが・・・何度かメッセージをくれた方には本当に下げる頭も無いくらいです。約一年ぐらい前に自分もこの小説を読んで、投稿することになりましたが・・・これを読んでくださっている作者の方々の中にもそういう人がいるのではないかと思います。（多分、百人に一人ぐらいかな？）そういう人にはこれからがんばってもらいたいと思います。

ルート零その一 隠れキャラ的扱いの零時の許婚（前書き）

始まってしまいました、ルートシリーズ第一弾！詳しくは後書きのほうで色々と書きますんで、よろしければ見てくださいね！

ルート零その一 隠れキャラ的扱いの零時の許婚

ルート 零

季節は夏、一人しかない教室で俺はやれやれとため息をずっと吐いていたのであった。無論、こんな暇なことをしているほど受験生は暇ではないのだが・・・待ち合わせ場所はここだったのしようがない。こんなことになったのもとある手紙が俺の机の中にはいつていたからであった。

その日、夏休み前最後の日だったのだが、どうせこの学校は受験生とかほとんど課外で夏休みの午前中がつぶれてしまうし、午後からだって体育祭の練習などでつぶれてしまうのだ。まあ、それはいいとして、俺の机の中に白い手紙が入っていた。他にクラスメートなどいない俺の教室を探してみてもごみは出て来るんだが犯人は出てこなかった。

「・・・？」

宛名はきちんと俺だし、『時柱 零時様へ』と達筆な文字で書かれている。

ラブレターではないのは感じ的にわかるし、別に危険物が入っている気配も無い。

どうやらただの手紙のようなのでそれを開けてみることにしたのだ。そこには、『夏休み初日、午後一時にてこの場所で待つ。』と達筆に文字が書かれていたのだ。しかし、それを完璧に理解したのはその日の夜だった。なんせ、達筆すぎて兄貴以外の家の連中は理解不能だったのだ。その点はある兄貴に感謝しなければならぬ。

そんなこんなで俺は暑い中、ここにいるのだ。魔法で涼しくしていいのだが・・・それでは夏ではないような気がしてそれをやめていた。

コンコン・・・

きっかり一時・・・教室の後ろのほうのドアを誰かがノックしている。

「・・・開いてますよ？」

どうやら待ち人が来たようで俺は立ち上がった。もしかしたら危ないような人かもしれないので身構えておくことにした。

スライド式の扉が開き、そこに立っていたのは黒い服を着た執事だった。別にこの学校では執事がいたって問題は無い。金持ちのお嬢様通っていたりもするし、この屋敷を管理している学園長もこういうお手伝いさんを仰山抱え込んでいたりもする。たまに、この学校の壊れた部分を直していたりもするのだが・・・三年間、この学校にいたのだがはじめて見る顔だった。

「・・・時柱 零時様ですね？」

慇懃な態度でそう尋ねてくる執事に対して俺は頷く。

「・・・どうぞ、ご主人様がお待ちでございます。」

廊下の先にでもいるのかと思ったのだが・・・そこには誰もおらず、変わりに黒塗りの縦長の車が廊下を占領していた。

「・・・。」

啞然としている俺に執事は黒塗りの車の一つのドアを静かに開ける。

「・・・どうぞ、別に誘拐でもありませんし、実験材料にしようとしているわけでもありません。どうか、我々を信じていただけると嬉しいのですが・・・。」

「・・・わかりました。」

そういつて俺はその車に乗り込んだ。

どこをどう通って学校内から出たのか知らないが、気がついたら山道を走っているようだ。外は緑と茶色の景色が後ろに流れていつている。他に乗っている人もおらず、どうやらどこかの屋敷に行くようだったので身なりを整えていると・・・とてつもなく馬鹿でかい純和風のお家が姿を現したのだった。

執事の顔はただただ、事務的であり、話しかけたらいろいろと答

えてくれそうなのだが……とりあえず、黙っておくことにしよう。下手に話しかけて厄介なことになってしまったら大変である。口は災いの門っていうからな。

「……つきました、ただいま扉を開けますのでそのままにしておいてください。」

執事がわざわざ俺の扉を開けてくれるのでそんな経験の無い（どちらかというと母さんが降りるときに俺があけていたりしていた気がする。）俺は恐縮しまくりで頭をさげまくっていた。

「……どうぞ、屋敷の中へ……。」

ここで鬼ごっこかくれんぼをしたら楽しいかもしれないな……って、そういうことをする歳でもないかな？

「あもう、俺は何でここにいるんですか？」

「……そのご質問はご主人様にお願いします。」

そういつて俺を屋敷へと連れて行く。

だが、これはちょっとおかしいのではないのだろうか？だって、学校に黒塗りの車を送り込んでくるようなやからがまともな奴だと断言できるのだろうか？いや、出来ないはずである。執事を使うような奴は要注意だ。とてもまともとは思えない。メイドを見て喜んでいる連中の脳みそを見てみたいと思った俺なのだが、やはり……。ここもそういう奴が住んでいる奴なのではないのだろうか？ううむ、絶対にここにはいけないと俺の中の心の俺がそう叫んでいる！

「……どうかなさいましたか？」

「……すみません、俺、用事を思い出しました。送ってくれなくて結構ですから失礼させてもらいます。」

返答を聞かずに俺は回れ右して走りだした。そこまで体力に自信は無いのだが、今から帰れば夜になるまでに帰ることが出来そうである。俺は一生懸命走ることにしたのだが……。どこからかとんできた何かが頭を直撃し、俺の意識は夜空のかなた？に吹き飛んでしまったのであった。く、無念……。

水の落ちる音が聞こえ、俺の意識は覚醒。

奇妙な浮遊感を感じながら目を覚ますとそこにあったのは石の壁・
・体を動かそうとすれば動かずにじらりとした鎖の縄が俺をがっ
ちりキープ。

ぐるぐる巻きにされているので首を動かすことぐらいしか出来ない。
辺りを見渡してみても、映るものは石の壁だけ・・いや、唯一と
ても重そうな扉が一つだけある。・・つまり、今俺は監禁されて
いるようだ。このまま、更に臓器を換金されちゃったりしてな?・
・冗談を言っている場合でもないな。

「・・・おい、誰かいないのかあ! 助けてくれ!」

動けない状況で大声を出してみるのだが、誰にも聞こえていない
し、自然現象でこんなことにはなるまい。困ったものだな。

ガチャリ・・・

とても重そうな扉があっさりと開き、そこから意外というかなん
というか・・・鬼面を付けたカグヤ姫みたいな人が出てきた・・
いや、入ってきた。

「・・・」

とりあえず、危なそうな人には話しかけてはいけません。目を付
けられればずっと付いてきますし、幽霊ならばきつと憑いてくるで
しょう。

「・・・おお、愛しの零時よ・・・わらわはおぬしにとっても会いた
かったぞ。」

鬼面が何を言おうが・・・俺は別に会いたくなかった。いや、む
しろ係わり合いにもなりたくなかった。

「・・・」

「ん? どうかしたのか?」

そういつて俺に近づいてくる鬼面。こいつは危険だ・・・ただモ
ンじゃないと俺の中の俺が心の中で叫んでいる。この叫びは近年ま
れに見る手ごたえである。

彼女はその透き通るような白い手を伸ばして俺の顎を掴む。

「……わらわが怖いのか？以前、あったことがあるだろう？」
それはもう……とてつもなく、怖いです。それに、鬼面の人にあつたことなんてこれまで一度だって無いぞ？

「……顔が見えない相手に対して、恐怖を感じるのは当然だと俺は思うけど？」

「それは悪かった。」

そういつて彼女は仮面をとった。そこには、ちよつとたれ気味でとても可愛い女の子の顔があつたのだが……角が生えていた。

「……わらわのことをこれで思い出したか？」

「ううん？ちよつと……待って欲しいんだけど……とりあえず、鎖をとってくれない？」

そういつて俺は鬼の角が生えた少女に頼んだ。だが、彼女は首を横に振つて俺のお願い事を退けたのだった。

「だめじゃ。そうしたらおぬしが逃げてしまうだろう？先ほど、竜山が逃げ出したといつておつたぞ。」

竜山つて言うのは間違ひなくあの執事に違ひない。く、やっぱり誘拐目的だつたんじゃねえのか？

「絶対に逃げないと約束するから鎖、といてくれないか？」

もう一度だけ、俺はお願い事をしてみた。

「ううむ、確かに鎖をしたままでは話し辛いとう。しょうがない、はずしてやろう。」

彼女は指を鳴らし、俺を拘束から開放してくれたのだった。

「……これで話ができるのう。」

嬉しそうに言つてくる女の子だったのだが……どうにも、俺の記憶の中には覚えが無い。とても特徴的だし、話し方だって独特だ。「……悪いけど、思い出せない。」

そういうとかなり悲しそうな顔をしてしまった。涙までためていたりもする。

「……そうか……やはり、二歳のころの記憶は人間の中では消えてしまうのだのう。」

「に、二歳？それなら覚えているわけじゃないと思うけどな。」

ううむと唸って彼女はうんと頷いた。

「・・・うむ、それならわらわのことを聞いたことは無いか？おぬしの母親、もしくは父親が知っていたと思うがの？」

「・・・俺の両親、小さいころに死んでいるから・・・」

やっぱりとても悲しそうな顔をして俺を見たのだった。

「・・・そうか・・・あの二人は死んでしまったのか・・・それならば、わらわのことをわらわ自身が詳しく話そうか？」

どうせ、ここから逃げるのは今のところ不可能だとわかっているし、約束まで破ってしまうのだろうからやめておこう。どうやら着物を着ている点でこの人はどこぞのお姫様だ。気をつけないと月が無い夜は外を出歩けなくなるかもしれない。

「うん、教えてくれると嬉しい。」

「そうか・・・実はな、わらわはおぬしの両親・・・そうだな、母親のほうに拾われた魔獣なのじゃ。そうじゃな、年齢的にはおぬしの二歳上ってところだろう。今、おぬしの成長した顔が見れて嬉しいものじゃ。」

「ふうん？でも何でこんなところにいるんだ？」

そういうとちょっとばかり悲しそうな顔をして俺に告げた。

「・・・本当の両親が見つかったんじゃ。だから、わらわを保護してくれていたというおぬしの両親のところからは退いてこんな人里はなれた場所に住居を構えておる。これもまた、わらわの運命と言ったところじゃろう。わらわ一人ではここから出ることが出来ないのじゃよ。それで、おぬしをここに呼んだ事情はのう、実はのう・・・」

そこまで言って歯切れが悪く、頬を朱に染める。

「・・・わらわはおぬしの許婚と決められておるのじゃ。」

「許婚・・・って何だっけ？」

「むう、許婚も知らんのか？」

がっかりしたような表情を俺に見せたのだが、こほんと咳をして

教えてくれた。

「……簡単に言うなら既に決められている婚約者のことじゃ。」

「……婚約者？」

「婚約者って……婚約者って……婚約者って……け、結婚？」

「……そんな、まだ……」

「大丈夫、法律上は何も問題もないし、両親の許可の下、清く正しく交際をわらわはしたいと思っている。ま、まあ……我が伴侶となる零時が望むのなら……その、そういう関係に今すぐなくても構わないと思っている。」

もじもじといっているその姿を俺は考え深げに見ながらどうしたものだろうかと悩む。まあ、このまま生活していたって彼女なんて出来ないのだろうが……

「……俺がここにずっと生活するってわけにもいかないと思うぞ？学校だってまだあるし、お金だって俺はまだ多く稼げてない。」

「大丈夫じゃ、今回、ここに来てもらった理由はおぬしの魔法でこの幻想の館を消し去ってもらうためじゃ。」

何も問題はいらんといった感じで俺を見る鬼姫さん。

「……そういえば、名前を覚えてくれないか？俺の名前を知られているのにあなたの名前を知らないのは礼儀上に問題があると思うし……」

「おっと、それはすまなかったのう。わらわの名前は“ヨシキ”じゃ。よろしく頼むぞ？」

そういつて俺にあたまを下げてきたのであった。

「あ、ああ……ところでヨシキ、俺はどうすればいいんだ？どうすればここを壊せるんじゃない？」

「それは……愛じゃ！」

高らかに拳を突き上げてそう呟く。

「……愛？」

「そう、わらわのことを愛している！この牢屋から解き放って見せる！という愛を持てばわらわは開放されるのじゃ。久しぶりの娑婆

の風をこの身に一身に浴びたいのじゃ！」

俺から見ればはじめてみたといっても過言ではない人を愛せるのかどうか・・・これまで誰とも付き合ってきたことの無い俺がそんなことをできるのかわからないが・・・がんばってみることにしてみました。ま、なんとかなるでしょ。

「わかった、やってみる。」

愛とは何か？新型AIのことではないのだろうか？というくだらないことを考えながら俺はこの場所が崩れるようにと心の中で祈る。目を瞑って祈ってみる。

「・・・おお！さすが零時じゃ！あっさりとこわしてしもうたわい。」

目を開ければそこには山の木々が広がっており、俺たち二人は広場のようなところに座っていたのであった。

俺の体にしがみつきながらヨシキは嬉しそうだった。

「最高じゃぞ、零時！これからわらのことをよろしく頼む！」

俺はというと・・・これが夢であつたらよかったかもしれないとひそかに考えていた。

ルート零その一 隠れキャラ的扱いの零時の許婚（後書き）

どうも、雨月です！とうとう、始まってしまいました・・ルートシリーズ。いやあ、これは書くのが大変だ！なんて思いながら書いていますが・・・これはちよつとつらいですね。なかなか時間が足りていませんし、てんやわんや状態です。さて、今回はこの程度にして、次は・・・ルートRと言った所でしょうか？ルートRではルナを主題として物語を書いていきたいと思っています。それでは、皆さん・・・また今度！

ルートRその一、ルナとのバイト・・・敵対するはいつかの人物！（前書き）

このルートでは主にルナの話になっていきます。

ルートRその一、ルナとのバイト・・・敵対するはいつかの人物！

ルートR 一、

季節は春・・・ルナたちが我らの部活に来て数日がたった。その日も新しく発足されてしまった『シチュエーション部』という意味不明な部活の中心地である生物室に暇人の部員たちが集まってくる。「じゃ、今日はポニーテールについての講義を行うから・・・みんな、ペンとノートの準備をしてね。そうそう、出て行くことは不可能だからそのところは気をつけておいてね？」

そういつて面白そうに黒板に板書していく瑞樹を熱心なまなざしで我が部員たちは自前のノートに書いていつている。ソル、瑞実、雅、そして一番熱心にがんばっているルナ。俺は別に関係がなさそうなので教室の隅っこのほうでそれを眺めていた。

「・・・ポニーテールとは・・・ここが重要で・・・心をわしづかみに・・・こういうことをすると・・・」

そういう講義を退屈もせずには皆は熱心に学んでいる。ソルは馬鹿なのだろう、瑞実は姉弟だから通じるところもあるのだろう、雅は何かにつられたのだろう、ルナは元々真面目でどんな人の話でも最後まで聞くのだろう。きっと、各々にそんな理由があるに違いない。

「・・・特に、ここが・・・」
キンコンカーンコン！

「あ、チャイムが鳴っちゃったか。じゃ、今日はここまでだから！今度はテストをするからね？きちんと復習するように。反復こそがいい点を僕から盗るための一つの方法だよ。」

下校のチャイムがなると同時に彼らは俺には理解できない授業を終了させた。しょうがない連中である。もしかして、俺は人員を間違えて選んできてしまったのではないだろうか？大体、なんで点数を盗るのかわからないぞ。

沈む夕焼けを眺めながら俺はため息をついていた。これから、バ

イトに行かなくてはいけない。どうせ、そこに行っても暇なのだが・
・今日は新しいバイト君が来るといつていたし・・まあ、パトリシアが今日はこれないって言っていたからな・・静かなのはいいことだ。

「零時様、帰りましょう？」

「ん？ああ、そうだな。じゃ、みんな・・ってあれ？」

部室である生物室を見渡してみるのだが、誰もいない。いるのはルナと俺だけである。

「あの、皆さん先に帰ってしまいましたけど？」

「え・・・。」

な、なんて野郎だ・・俺が部長なのに部長に挨拶もなしかよ？その点、ルナは真面目だから俺に挨拶をしに来てくれたに違いない。

「零時様、帰りましょう？」

「わかった。」

鞆を引っつかみ、その場で待っていてくれるルナと一緒に歩き出す。なるほど、確かに既に外には瑞樹達の姿がある。本当に薄情な野郎だな。

「零時様ってバイトをなさっているんですね？」

唐突にそんなことを聞いてくるルナ。

「ああ、そうだよ。まあ、元は今の母さんがしてこいって言ったからしてるっていいんだけどな。」

「私も、きょうからバイトなんですよ。それでですね、バイト先の店長さんが既にいるバイトさんがとても恐ろしい人なので気をつけなさいって言っていたのです。」

そういつてぶるつと震えるルナ。そこまで怖い奴がこの近辺に生息していたっけ？ううむ、どうだっただろうか？

「へえ、それって大変なバイト先だな。それ、どこ？」

「ええと・・店名がないと言われたんですけど・・おもちゃ屋さんのようでした。」

それは奇遇である。

「今にもつぶれそうなのにずっと続いているそうです。」

それも奇遇である。

「噂では、そこのおもちゃ屋さんは裏があるそうで……」

それまた、俺のバイト先と同じだなあ。

「店主のおじいさんがエッチだそうです。」

確定、俺と同じところに違いない。

「……ルナ、きっとそのバイト先の先輩のバイトはそこまで怖い奴なんかじゃないぞ。機械が好きでちょっとシャイな青年だ。」

「そうなんですか？」

「そうなんです……というより、俺だ。」

「え……」

驚きが隠せませんと顔に書かれているルナに対して俺は唖って見せた。

「……ううむ、まさかルナがここで出てくるとはな……どんな展開になるんだか……しかし、まあ、ルナなら即戦力になるだろうし、真面目にバイトやってくれそうだからな。」

「ま、任せてください！」

両手を胸の前でぐっと握るルナに俺は大いに期待してさて、これからたまにバイトをサボることが出来るぞと内心ほくそえんでいたりもする。くくく、完璧に善人ではないんだよ、俺は。

「……零時様、零時様って……機械、本当にお好きですか？」

心の中で一人悪代官を演じていると少しばかり心配そうな顔をしたルナが俺の顔を見てきた。

「機械？大好きだ。小さいころは機械と結婚したいって書いていたぐらいだからな。」

「そ、そうですか！それは嬉しいです！」

そういつて俺の手を掴むルナ。

「ま、まあ……喜んでもらったのならこちらも嬉しいぞ。これから後輩だからな。」

「はい！零時様みたいな人なら上司でも最高です！私、どこへでもついでいきます！」

トイレにはついてきてもらいたくないな。しかし、ここまで謙虚で素直なよいこだとはな・・・ソルとは大違いだ。

「・・・あの、それなら先にどのようなことをしないといけないのか教えてもらえないでしょうか？私、昨日からそのことで頭がいっぱいなんです。」

ものすごい情熱だ。眼の中には炎が渦巻いている。

「・・・あーそうだなあ、基本的には掃除かな？今にもつぶれそうな感じなんだけど、奥のほうにも部屋があつてそこを掃除しないとイケなかったりするんだ。これまで一人で店番やってたからそこを掃除する暇もないし、今日から人数が増えるだろ？だから、俺が今日は店番をするからルナがそこを掃除してくれたら嬉しいな。」

「任せてください！」

どんと胸を張るルナを俺は頼もしげに見ていた。うん、やっぱり機械だけに万能選手だな。

「あの、パトリシアさんに聞いたんですけど・・・あのバイト先は何か裏があるとか？」

とても興味があります！といった感じの顔で俺を見てくるルナだが、そのことは悪いが俺も知らない。

「そうだな、俺も詳しく知らないんでわからない。」

そのことを店長に深く追求をしてはならないような気がするので俺は一度もバイト先でそんなことを口走ったことなどない。

ルナと二人してバイト先にやってきたのだが、店長が今日は不在だった。

「あちゃ、今日は店長不在の日だったのかな？ま、いいや。ルナ、悪いけどさっき言ったとおり奥の部屋を掃除してくれないかな？掃除道具はここにあるから。」

「はい！」

そういつてルナは奥の部屋に入ってしまった。これから一時間という短い間の時間帯なのだが・・・これがまた、暇で暇で気をつけないと寝てしまう。

それから十分ほどが過ぎたのだろうか？やはりうとうとしていた俺の耳に“ドゴン！！”というすさまじい音が聞こえてきた。慌てて奥の部屋に行くとルナがしりもちをついていて彼女の広がっている足の間にはとても人がもてそうとは思えない物体が落ちていた。どうやら危機一髪でよけることに成功したようだ。

「ルナ、怪我はしていないか？」

「だ、大丈夫です。それより・・・これは何でしょうか？おもちゃ屋さんにしては物騒な代物ですね。」

そこに横たわっているものはどうやら背中につけるものらしい。まるでロボットにくつつけるみたいな物騒なものだった。ルナはそれを触っている。

「・・・これって・・・私、装備できるみたいです。」

「何だって？」

そういうと色々といじり始め、その装置も動き出して自らルナの背中に引っつく。

「・・・重くない？」

「大丈夫です。これ、一体全体なんなんでしょうかね？」

そういつて背中の中のものを見つめているが・・・その物体は光をはっして俺たちの前から姿を消してしまった。

「やれやれ、だからバイトは零時君だけでよかったんじゃ。」

「店長！」

物陰からいきなり現れた助平な店長に俺は当然のように驚く。勿論、ルナも驚いていた。

「私のリーダーに映らないなんて・・・」

それはいい。この際、つつこまないでおこう。

「どうということなんですか？」

「ここはのう、機械魔獣のパーツをつくったりする工場が地下にあ

るのじゃよ。以前からつぶれないでいたのも、このパーツが必要とされているからじゃ・・・ちよっと、地下にきてくれればわかる。」

地下は意外と広く・・・流れ作業のように機械が作り出されていた。

「・・・店長、でもなんでここを表でやらないんですか？」

「ま、そういうところは・・・」

ビーツビーツ！！

工場内が赤く点灯し、異常が発したことを告げる。俺は驚いて店長のほうを見るが、別に驚いているようでもなかった。

「いつものことじゃ。地下に作らないとお隣さんとかに迷惑じゃかな。」

そういつて走り出す店長。

「・・・ルナちゃんを連れて手伝ってくれ零時君！」

「よくわかりませんが、わかりました！いくぞ、ルナ！」

「はい！零時様！！」

なにやら焦げ臭いと思われる場所に向かって走り出した俺たちの前に誰かが姿を現した。

「・・・おっと、ここからさきはいかせませんよお！！マスターのお願いですからね。」

姿を現したのは黒いドラゴンの姿を模した機械の少女であった。

「く！とうとう・・・ゼロが動き出したか・・・」

「私の名前はローザです！以後、お見知りおきを・・・零時さん！」

そいつは小ばかにしたように俺に笑いかけて・・・なんと、ミサイルを撃ってきたのであった。

それをルナが打ち落とし、俺たちはローザと名乗った女の子とにらみ合いを開始・・・特に、ルナはものすごい勢いで相手を睨んでいる。こ、こええ！！

ルートRその一、ルナとのバイト・・・敵対するはいつかの人物！（後書き）

さて、ルートシリーズ第二段・・・正直、これはこれでこたえますね。『せつなのはざま！』もありますからね。さて、それはいいとして・・・次回は誰の話で行こうか・・・と悩んでいます。また、パソコンの調子が悪くてデータが消えちゃいました。結果、ほかのルートの話も消えてしまい・・・大変です。それで、今回はこのくらいでお開きにしたいと思います。

ルートS その一、その鉢巻は二人の絆？（前書き）

このルートではおもにソルが中心となっていく予定です。

ルートS その一、その鉢巻は二人の絆？

ルートS

俺たちの学校では三年生最後のイベント・・・体育祭。まあ、俺にはほとんど関係のないのだが・・・俺、今回はなんか知らないけど保険係の一番上・・・生徒会長に頼まれて今回はブロックの歴史の争いに巻き込まれないでよかったと内心思っている。

『えゝ次は徒競走・・・』

そんなアナウンスを俺は一人で聞いている。ほかの連中は包帯やらなにやらがきれたそうなのだ。この学校、毎年百人以上が怪我をしている。その瞳には何かが乗り移ったとは思えないほどの熱狂ぶりを見せて、使用禁止の魔法をばんばん使っていたりもするからだ。また、魔獣の生徒さんたちもマジヤル気・・・人間さんはぼろぼろですね。

俺はそういう争いをとっても安全なところで見ている。一応、赤ブロックに籍を入れているのだが、このまま何も種目には出ないでよくなりそうだ。暇そうに思いながら俺は先ほどと競争なのに上空から落ちてきて運ばれてきた女の子の手当てへと重い腰を浮かせて向かったのであった。

「・・・人間、ベッドの上が一番おとなしいものだな、ソル。」

「ふん！あれはあっちが魔法なんて使ってくるから！私がちよっと本気を出せばあんなやつら、蹴散らせる！」

巻いていた鉢巻はすでに使用不可である。よくもまあ、体のほうは元気だったと俺は思いたいね。救護班は念のために保険の先生を探しに行った。でも、確か・・・さっき救急車に同伴してしまったから近くの医者でも連れてきたほうがよさそうだな。

「それで、どこか体の調子が悪いところはないか？」

「・・・別に・・・でも、鉢巻が・・・」

鉢巻・・・ふむ。この学校では鉢巻を失った場合はほとんどの競

技に参加することができなくなる。つまり、参加条件が鉢巻で・・・予備を自分で準備するのが妥当なのだが、それをどうやらソルは知らなかったようだな。

「・・・このままじゃ、残りの競技に出れない。」

「・・・そうか、まあ・・・俺が同じブロックでよかったと思ってくれ。」

俺は自分の鉢巻をはずして簡易ベッドの上に体を起こしているソルの頭に鉢巻を巻いてやる。きよんとしているそのおでこに擦り傷を発見した。どうやら髪で見えなかったらしい。

「・・・ほれ、治療も完了。さ、本当に以上がないのならがんばって来い・・・応援してるからな。」

「あ、ああ・・・任せておけ！」

その目に舞い戻ったいつもの輝きを俺に見せてソルは元気よく立ち上がって去っていった。その後、ソルはどの競技でも一着をとり脅威の二年生として来年の赤ブロックの団長候補まだったのである。俺のほうは仕事が忙しかったので見ることはできなかったのがとても残念だ。

次の日の朝、振り替え休日ということで俺はいつもより早く起きていた。休日ならもうちょっと寝ているのだが、普段は学校にいつているのだ。

「・・・散歩でもしてくるかな？」

玄関を開けると、そこにはソルが立っていた。

「あ、ちようどよかった・・・これ、返す。」

差し出された紅の鉢巻に俺は首をかしげる。

「・・・？」

「借りたものは返すべきだとルナに言われてるからな。」

「いや、俺は貸したんじゃないくて、お前にやったの。」

「？」

「つまり、それはお前のものだ。俺からのプレゼントだ。」

「そうなのか？」

首をいまだに傾げているソルの顔を俺は眺めながらその横を通り過ぎた。しかし、いつの間に俺の家を知ったのだろうか？ 教えたことはないのだが……。

「ソル、お前はそういえば誰に俺の家の場所を聞いたんだ？」

「……ルナに決まってる。それより、これからどこかに行くのか？」

「散歩だ。」

「そうか、それなら私も行く。」

俺は新品同然だった鉢巻がいつの間にかぼろぼろになっており、いつ千切れてもおかしくない状態だったのでちよつと失敬した。

「あ……」

「……」

口の中だけで呪文を唱えてみたのだが……どうも、失敗してしまつたらしい。鉢巻自体はものすごく頑丈にできたのだが見た目がぼろぼろのままだ。

「すまん、新しくしようとしたんだが見た目はぼろぼろのままだ。」

頑丈にはなつたと思うんだがな。」

思い切り引っ張っても千切れないから大丈夫だろう。俺はソルにそれを渡す。

「……ありがとう。」

「なに、いいってことよ。」

二人して早朝に散歩をしていたのだが……ソルがいきなり俺を突き飛ばしたのだった。俺はそのままいまだにせみがなっている木に直撃……

「……乱心か、ソル？」

ソルのほうを見れば元俺がいた場所には穴が開いていた。

「……空から何か降ってきたぞ。危ないと思って助けたただけだ。」

「……それはありがたい……って、何が降ってきたんだ？」

ともに道がへこんでいるところを見てあわてて飛びすさむ。

「……こいつは……」

立ち上がった少女は赤い目をしていたのであった。格好は真っ黒の竜であるのだが・・・少女だ。ええと、簡単に言うなら少女が黒竜のぬいぐるみを着ている感じだな。

「・・・あいたたた・・・ターゲットをしとめ損ねてしまいましたね。やはり、マスターのコピーだけの实力はあります。」

そういつて立ち上がるなぞの襲撃者。

「・・・あんた、誰だ？」

ソルは警戒心むき出しでいつの間にか夢で見た剣を相手に向けている。周りにおまわりさんがいなくてよかったぜ。

「・・・私ですか？私の名前はローザとまあ、覚えておいてください。名乗りましたから、あなたの名前も教えてもらいたいものですね。」

そういつてローザと名乗った少女はソルのほうを見ている。

「・・・私はソル。」

「ソルですか・・・性格はセレネさんに似ているみたいですね。」

「セレネ？」

「いえ、こっちの話です・・・まあ、零時さん、ここで・・・」

そういつて俺の方に向いていつの間に取り出していたのか知らないが銃口を向けている。

「・・・消えてもらいますよ。」

しかし、いち早くソルが動いて助けてくれる。銃口はあっさりとソルが持っていた剣で切断されてしまった。ローザはその隙に飛びすさむ。唐突だな、おい。

「・・・あゝ失敗しちゃいましたか・・・まあ、今日はこの程度であきらめますかね。ソルさんは零時さんの魔獣ですか？」

そうだと答えれば・・・間違いなく、ソルも狙われてしまうことになるだろうから俺は違うというおうとしたのだが・・・

「そうだ！この鉢巻がその証拠だ。」

そういつて赤い鉢巻を頭に巻くソル。それをみてローザの表情はうれしそうなものになっていた。

「ふふ、それはいいですねえ。私もマスターに頼んで何かそういうものをもらおうかな・・・まあ、それはいいとして零時さん、いずれ私はあなたとある人の前につれていかなきゃならないんで、気をつけておいてくださいね。」

そういつてなにやら爆弾らしきものを俺に投げつける。

「させるか！」

その爆弾をソルはその場で迎撃・・・どうやらただの煙幕だったらしく、俺たちの視界は真っ暗になってしまったのであった。そして、ローザがいたところには何もおらず、気がつけば俺たちの体は真っ黒になっていた。

「・・・ちっ、逃げられたか・・・」

悔しそうにそういうソルと、俺は命を狙われているのか知らないのだが・・・首を傾げていた。

「・・・しかしまあ、なんだか大変なことに巻き込まれたな。」

「のんきなことを・・・巻き込まれたのは零時だぞ？」

「いや、ソルのことだ。別に違うといつてりゃよかったのに・・・」

「・・・鉢巻のお礼が済んでいないからな。それに私は『小説部』の部員だ。部員が部長を助けるのは当然のことだ。私に任せておけ。」

そういつて俺の近くに寄ってくる。

「・・・それと、今日の出来事は黙っておいたほうがいい。他人を巻き込むからな。」

「ああ、そうだな・・・二人だけの秘密ってやつだな・・・。」

「・・・二人だけの秘密か・・・」

その後はとりあえず家に帰って俺は体をきれいにしていた。寡黙な兄貴がシャワーを浴びてきた俺を不思議そうに見てきたのだが・・・その目はなにやら知っていそうな感じもしている。

「・・・これから楽しみだな。」

俺の隣を通っていき、兄貴はそんなことを口走ったのであった。「・・・ソルを常に自分の近くにおいておくんだな。危ないぞ？」

「え・・・」

「ま、そうなるだろうがな。」

そういうと外から消防車のサイレンの音が聞こえてきた。どこか、焼けているようで・・・妹は真っ先に玄関を飛び出し、遅れて俺が妹の背中を追いかける。兄貴は面倒くさいのか裏を知っているのか知らないが、出てこなかった。

「あ、あれってルナちゃんとソルちゃんじゃない？」

燃えているアパートの前で座っているルナと、唇をかんでいるソル・・・

「どうかしたのか？」

「私の部屋が・・・私のへやがあ・・・」

「大丈夫よ、ソルちゃん、ルナちゃん、私の家に来なさい。」

そこには母さんもいて二人に話しかけている。

「・・・まさか、嚴重に保管していた弾薬庫がやられるなんて・・・」

そんなことをいっているソル。よく、この程度の火災でことが済んだと思う俺である。しかし、彼女たちは家を焼かれてしまったのでそれどころではなさそうだ。

「お帰り。」

帰ってきた俺たちを眺めている兄貴の表情はいつものように冷徹だった。だが、続いて入ってくるソルとルナにを見てようやくその顔には興味というものが出てきているようだった。さて、これからどうなることかね？

ルートP その一 私にとって・・・（前書き）

さて、久しぶりの更新となりました。作者の雨月の言い訳が聞きた
い人はあとがきもご覧になってください。

ルートP その一 私にとって・・・

ルートP

気がつきゃ、俺も卒業・・・先ほど、俺は卒業証書を先生から渡されて今のところしまっているはずの屋上にやってきている。屋上からの景色を見るのがこれが最後なのかと思いつながら校庭を歩いていく同級生の驚くぐらいの小さい背中を見下ろしながら今の心境をふと、言葉で紡ぐ・・・

「・・・ふはは！人がまるでゴミのようだ！」

やれやれ、冗談はこのくらいにしてそろそろ俺も下に降りるとしよう。こんなところを先生に見られたら頭がおかしいと思われてしまうからな。さて、パトリシアのパンチら写真をぐちゃぐちゃにしてここで捨てるか。卒業して持っけていても意味がないからな。

「・・・零時さん、大丈夫ですか？」

気がつきゃ、後ろにはパトリシアが立っていた。その顔には

「とうとう、零時さんがおかしくなっちゃいましたわ。」と書かれている。俺は慌てて写真をポケットに突っ込む。

俺は懷から相手に見つからないように携帯を取り出して耳に当てる。

「・・・こほん、あーちよっと知り合いが来たから電話を切る。あ、さっき言った台詞が俺の心の中で一番の台詞だ。」

そういつて電話を切るふりをしてパトリシアのほうを見る。

「・・・誰かに電話をしていたんですか？」

「ま、まあ・・・ちよっと、中学の頃の友達にな。今度、同窓会をするそうでそのときに『人気の台詞TOP3』を発表するそうだから、全員に電話をかけていたらしい。校内じゃ携帯電話使用できないから屋上に来たってわけだ。」

ここまでの俺、完璧！

「・・・別にそこまでしてうそをつかないでもいいですよ。」

ぐはっ！ばれてる！

「・・・それはそうと、パトリシアはどうしたんだ？去っていく先輩の背中を見て『うふふ・・・これで完璧にこの学校は私の手に納まったわ！』とでも思うために来たのか？」

あながち、間違っではないはずだが・・・いや、よくよく思えば生徒会長だった。今日だって涙を流しながら卒業生に言葉を送っていたな。そこまでうれしかったのか？

「違います！尊敬する先輩がいたのでその方と別れるのがつらいんです！そのくらい気がついてください！」

起こっているのか知らないが、肩で息をしている。やれやれ、この子はこちらからいのある女の子だな。

「・・・冗談なのにな。ま、いいや・・・俺はこれから用事があるから・・・じゃあな。一年間だったが世話になったな。」

そういつて俺は生徒会長であるパトリシアの隣を歩いていく。一瞬、とても強い風が吹いて俺のポケットからはみ出していたのだろう・・・写真が舞ってパトリシアの足元に・・・光臨した。

「・・・！！！」

「これは・・・零時さん、まだ・・・持っていたんですね？」

ゆらりと何かが俺の後ろでオーラを発する。そのオーラは恨みがかもっているようだった。確かに、いまだに所持しているとは思っていないかっただろう。

「・・・いや、今日ここで処理しようと思ってたんだ。誤解じゃ・・・ない。」

「・・・いいですよ。」

「は？」

今日のパトリシアは俺にあまりつかかってこないようだった。

「・・・ところで、零時さん・・・私、あなたに聞きたいことがあったんです。」

完璧に怨嗟のオーラが立ち消え、今度は湿った目で俺を見てくるパトリシア・・・本当に今日はくるくる表情が変わるものだな。

「何だ？」

「・・・年下は嫌いですか？」

「ああ？年下って・・・嫌いなら雅やソル、ルナそしてパトリシアと話なんてしないぞ。」

「・・・。」

瞬く間に顔を真っ赤にしていくパトリシアの表情を見てちよつとだけからかってみたくなった。

「そうだなあ、でも、年上も好きだな。」

「・・・え・・・」

とたんに悲しそうな顔になるパトリシアの頭に手を載せて俺はにこりと笑う。しかしまあ、よくよく思えば・・・パトリシアとも会えなくなるのか・・・

「・・・なあ、パトリシア・・・俺の携帯電話のアドレス、持っているか？」

「え・・・私は持ってませんけど？でも、ここでお別れですね。」

悲しそうな顔をする彼女に俺は何か言ってやりたかった。

「そうか、なんだかんだ言って・・・お前ともお別れなんだな。だけどな・・・暇なときに俺に電話ぐらいしてくれよ。」

俺はそういつて電話番号の書かれている紙を渡した。

「・・・い、いいんですか？」

「ああ、失くさないようにしてくれよ？」

そういつて、俺とパトリシアは別れたのであった。無論、別に何かあったわけでもない。

そして、一週間後・・・俺の携帯が朝一になる。

「・・・相手は・・・パトリシアか・・・」

ここずつと、一週間・・・ぶっ続けで俺に連絡してくる。本当に、暇なんだな・・・あいつ、友達いた気がしたんだが・・・

『もしもし？零時さんですか？』

「ああ、俺だ。」

いつもこんな調子だ。

『実は、お話したいことが……』

「そうか……なんだ？」

そして、常にこんな感じで話が続いていく。どうせ、今日も飼っている犬のお話からすすむんじゃないのか？

『……今日こそ、決断しました！』

「ああ、何を？犬か？確か名前はフィーだったかな？新しい犬の名前か？」

「……私を、あなたの彼女にしてください！」

気がつけば俺の部屋の扉が開いて……そこにはパトリシアがたっていた。俺は持っていた携帯を落としてしまった。

「……朝っぱらから……冗談がすごいな。」

「……真剣に交際をお願いしているんです。私はあなた相手に冗談はいいません。」

確かに、その目は真剣だ。だが、何故……

「俺を彼氏にしてもいいことはないと思うぞ。」

「……そんなことはありません！私にとってあなたは……あなたは私のすべてなんです！」

その言葉に俺は固まった。ま、まあ……パトリシアに何かいいわないと……

ルートP その一 私にとって・・・（後書き）

さ、これから言い訳タイム・・・といきたいと思います。更新スピードが以前とは比べ物にならないくらい遅くなってしまう、読者の中には怒っている方もいるかもしれません。実は、（龍と書いてドラゴンと読む！）を書いていて遅くなりました！すみません！あと、他の短編だった作品（人類の・・・）を連載にしてほしいという声がちらほら・・・とあったので、それも書いていたらこんなに遅くなっちゃいました。当初、ルートシリーズはもうちょっとだけ多くしようと思ったのですが、今回はこの程度で抑えておこうと思っています。です。ですので、次回はルート零 その二になると思います。では、ごきげんよう！

ルート零その二 瑞樹が書く小説・・・の終わりと本当の始まり（前書き）

混乱している方には申し訳ないですけど、ルート零、その二です。

ルート零その二 瑞樹が書く小説・・・の終わりと本当の始まり

ルート零

ヨシキが来て何か変わったこと・・・それは、俺の全てだった。

「よし、零時・・・次に参るぞ。」

家の前まで帰ってきた俺だったのだが、唐突にヨシキに腕を掴まれたのであった。

「・・・どこに？」

「決まっておる！おぬしの家族の墓じゃ！」

「・・・墓？」

墓にいつてもいいことはないし、母さんから墓には来るなどいわれているし、約束もしてしまった。

そのことを告げると、確かに彼女はうなずいたのだが・・・

「大丈夫じゃ、私がそのためにいるんだからな。」

「・・・どういう意味だよ・・・」

とにかく行くのじゃ！といわれた俺はついていくしかなく・・・
本当に許婚かどうか疑わしい鬼のお姫様に従ったのであった。

やってきた墓地に俺は薄ら寒いものを感じながら辺りを見渡す。

視界を埋め尽くすのはねずみ色で四角の墓石だらけだった。ここに来るまでに相当、時間を消費しており・・・そろそろ日が沈むのではないかという時間帯である。

「・・・うん、これはさすがにやばいんじゃないか？」

「大丈夫じゃ。私がおるではないか！」

手を掴まれてそのまま歩き始めるヨシキに俺はうんざりしながらもついていった。

この墓地はとてつもなく、でかい。そして、あまりの大きさに迷子の子供が出たりして夏の暑い日には熱中症にかかったりするらしい。だから、たまに休憩場なるものが存在しており・・・

「・・・やはり、道に迷ってしまったのう・・・」

「そうだな、地図でも借りてくるべきだった。」

俺たちはそこで休憩もとい、遭難していたのであった。しかし、ここまで来ることができればこの墓場の地図が置いてあるのだ。

「とりあえず、この地図をみて脱出したほうがいいんじゃないか？」

「・・・そうかもしれないがのう・・・今日を逃したら私の・・・」

そこまでいってヨシキは黙った。続きが気になる俺だったのだが・・・休憩所の窓から覗く怪しい光に目を奪われていたのであった。

「・・・ヨシキ、あれ・・・」

「うむ、人外の者の光じゃな。さしずめ、帰ってきた心と息子に喜んでるのだろう・・・」

「・・・心？」

そう俺が尋ねるとヨシキはこちらを見た。

「・・・残念ながらのう、私はおぬしの母親の心の一部なのじゃ・・・」

「・・・・・・？」

「よくわからない・・・確かに、私だってよくわかっていない。しかし、しかしなあ・・・一応私は零時の許婚であった。それは間違いないんじゃない。」

ますますわからなくなるようなことを言い出すヨシキに俺は首をかしげる。もちろん、外の光は視界の端に捕らえている。

「・・・私がいらないとおぬしの母親は極楽浄土にはいけないんじゃない。」

「それなら、もどったほうが・・・」

続きを言おうとした俺だったが・・・

「・・・できないんじゃない。それをしたら零時は・・・体を崩してしまふんじゃない。」

「どういふことかわからないんだけど・・・」

いよいよ頭の中が混乱してきた俺に対してヨシキは目の端に涙をためながらも・・・再び口を開いたのであった。

「・・・じゃがな、私は・・・私はおぬしの母親に何度も助けられたんじゃ。私は・・・悪いがおぬしを選ぶことはできないんじゃ！すまん！零時！」

初対面で・・・今日しかあったことのないヨシキだったのだが、急にそんなことを言われても困るのだが、母さんのためになるのならしょうがないのかもしれない。それに、涙を流したということはそれだけ悩んでくれたのだろう。

「・・・わかった、初めて会ったヨシキとの短い一日は大切にする。母さんのためになるならそっちを選んでくれ。」

「悪い・・・零時・・・許してくれ・・・」

「いって、そんなことを言われても・・・」

「違う、そのことじゃない・・・」

「？」

そういうとヨシキは俺の背中に立った。そして、すぐに後頭部に何か鈍い音をきき、痛みを感じる。

「・・・じゃあな、零時・・・」

そういつて彼女は薄れゆく俺の意識の外に出て行ったのであった。

（終）

「・・・どう？最後のところが肝心なんだけど・・・」

俺は再び瑞樹の書いてきた小説を破り捨てた。

「ああっ！何てことするんだ！」

「・・・」

「きちんとここにほら・・・紙を細かくする機械買ってきたんだぞ！これを使いたまえ！」

怒るところはそこかと思いつながらも俺は咳払いをした。

「・・・いいか、お前の書いてくる小説はすべてどこかおかしいぞ？俺を主人公にしないで他の奴を主人公にしろよ・・・大体だな、誰のせいで俺たちが演劇部の約束を引きずっているのか考えても見

ろよ・・・」

「いいじゃん、それよりさ・・・実際零時は許婚いるんでしょ？」

ペン先で俺のほっぺたをぐりぐりとしてくる瑞樹に俺はうなった。

「ほら！いるんだ！僕は確信していたよ・・・あったのは確か・・・四歳ごろ・・・だったかな？」

「・・・否定はしないな・・・だけど、あいつはそんな性格じゃないぞ・・・この小説、あいつが読んだら間違いなく鬼になるだろうなあ・・・」

「いいじゃんいいじゃん！彼女は彼女で・・・僕にとっては別にどうってことはないさ！では、次回・・・『ルート零その三あの日』の思い出・・・みんなよろしく！」

「・・・いや、大体俺は許婚って認めたことないぞ・・・どこか、おかしいんじゃないか（以下略）・・・」

ルート零その二 瑞樹が書く小説・・・の終わりと本当の始まり（後書き）

さて、今回の話はどうかだったでしょうか？ルートシリーズが好評かどうかまだよくわかりませんが・・・うつとうしいんじゃ！という方がおられましたら教えてください。では、次回は・・・ルートRの続き・・・です！

ルートRその二、改名と能力！ゼロは絶対にあいつだ！

二、

結論から言おう、彼女は俺たちの目の前から姿を消した。いや、姿を消したというのは比喻で・・・

「やっぱり今日は顔見せです。さいなら！」

そういつて俺たちの目の前から飛び去ったのであった。何が目的だったのか俺にはわからない。

そして、俺は今日のことであって少々驚いているのだがルナと共に屋上で秘密の会議をしていた。

「・・・零時さん、あの少女は何者だったんでしょうね？」

「さあな？店長がいつていたとおり、何かを狙っていたんだろう？ゼロっていうやつが黒くというのは確定済みだろうよ。」

そういつて俺はイチゴジュースを飲み干す。彼女はとても心配そうに俺を見ているのだが・・・何をそこまで見ているのだろうか？「どうした、ルナ？」

「い、いえ・・・零時様に何か危害を加える気が相手にはあったようで・・・怪我していないようでよかったと思っているだけです。」

「何をいまさら・・・俺は小さい頃からルナ関係の夢を見てきて機械には追いかけれまくつていたぞ？大体、ルナがきちんと守ってくれたんだし・・・何も問題はないだろう？」

元氣のないルナを励ますために俺はそういつてみた。実際のところ店長が

「これからもよろしく頼みたい・・・きちんと報酬はあげるから！」といつていたので心配だ。

「あの・・・今後、私は零時様のことを“マスター”とお呼びしてよろしいでしょうか？」

「・・・呼び方は自由だ。勝手に呼んでくれ・・・」

「はい！わかりました！」

そうはいったものの・・・どうしたものだろうか？そう思った俺の耳に何かが聞こえてくる。

「・・・いやあ、若いていいですねえ・・・」

屋上の隅に立っていたのはローザだった。その目はニヤニヤしていてなんだか、俺としては落ち着かない心境だ。

「・・・マスターに触れるようならば覚悟してもらいます！今度は正確にあなたを射抜きますよ！」

警告しているのか、ルナは早速ローザへ銃を向ける。いつの間にその銃を取り出したのだろうか？

「おっと、そんな物騒なものを私に向けないでください。危なくしてようがないですよ。」

そういつて挑発するローザ。一触即発のこの状況に屋上の扉が開いた。なんとなく当事者の俺だが傍観者と化しているような・・・今の状況に一般生徒がやってきたらどうなるだろう・・・と考えた俺だったのだが・・・

『ローザストップ！』

現れたのはひょつとこの仮面を被った学ランだった。声を変えているのかとてもおかしい声だ。

その滑稽な人物を見て俺とルナは少々固まる。

「・・・マスター・・・」

『零時にかまっている暇はない・・・俺としてはもっと見たいんだがな・・・ローザ、お前が暴れなくても結構だ。俺たちは俺たちの場所があり・・・彼女たちには彼女たちの・・・おっと、ヘリウムが切れた・・・スーハー・スーハー・・・』

どこからかビニール袋を取り出してそれをすい始める。はたから見たら不良生徒がよく校舎裏でやっているようなちよつと危ないにおいのする光景だった。

「・・・発明者ならボイスチェンジャーぐらい作ってもってくればよかったのに・・・」

『まあ、そういうな・・・俺だって忙しいんだし・・・この前パーテ

イーをしたときのあまりがちようどあったから事足りると思っただけだ。そこまで気にするな。』

意外と面白い人物なのかもしれない・・・そう思った俺だが、まづルナのほうが彼に話しかけた・・・勿論、その右腕にはしっかりと近代的な銃が構えられている。

「・・・あなたが“ゼロ”と呼ばれているものですか？」

『ああ、そうだが？』

それを聞いてローザがあわてる。

「マスター！何簡単にばらしているんですか！」

『え？駄目だったの？あゝごほん、今のは忘れてくれ・・・いや、俺は断じてそのような人物ではないぞ？』

「・・・」

きつと、この人は少々天然が混ざっているような人物なのだろう。

・

「撃ちます！」

ルナはさっさと黒幕ともいえる人物に銃を向け発砲。

「く・・・マスター！」

そして、その発砲に人間とは思えないような・・・いや、ローザはロボットだったかな？・・・とりあえず、ものすごい反応を見せて何かを使って防ぐ。

『ローザ！それは俺の弁当箱じゃないか！』

「・・・すいません、マスター！」

その手に握られていたのはどこにでも売っていそうな見た目がアルミっぽい銀色の四角い箱だった。だが、その弁当箱には傷一つ入っていない。

「・・・マスターに手をあげましたね？」

「・・・私が零時マスターを守るにはしょうがないこと・・・それ以前に、やるべきことです。」

そういつて聞かないことはわかっているだろうに・・・ルナはゼ口に銃を向けた。

『はあ、こいつはいけないな。ローザ、帰るぞ。』

「で、でもマスター！」

『彼らは彼らの道を行くんだろう？そのための肉体だからな・・・俺が出てきたってここを混乱させるだけだ・・・とりあえず、もうちよっとしてから彼に会うことにする。ほら、行くぞ。』

わからずやの子供を引きずるようにしてゼロはあっさりとローザを引きずっていったのであった。

「・・・敵に背中を見せますか？」

「ルナ、やめろ・・・」

俺がそういう前にルナは銃を再び去っていくローザたちに向け・

『・・・かわわないさ、俺だって魔法使い・・・』

ドンドン！という音が聞こえたのだが・・・彼ら二人が倒れることなく、屋上から姿を消した。そして、俺はルナの銃を見た。

「・・・やられましたね・・・」

そこには魔法で消したのだろう・・・ルナの銃が別のものに変わっていた・・・なんと、ただの大きなねじに変わっていたのだった。あの人物は何をしたいのだろうか？俺はそんなことを考えていたのだがルナは別のことを考えていたようで・・・

「・・・すみません、撃つなどといったのに私は引き金を引きました。」

「・・・まあ、気にしないでくれ。どうやらあっちのほうが上手のほうだからな。」

正直、魔法でやっていても負けるに違いない。

「・・・ええ、彼はものすごく強いでしょう・・・」

そういつて既に使い物にならない銃をルナはどこかにしまった。

「・・・詳しくそうだな、ルナはゼロのことを知っているのか？」

「詳しくは知りませんし、顔も見たことありません。あのような仮面をつけるということは意外と面白い人物なのかもしれません・・・」

・

そういつて彼女はスカートを上げ始めた。俺はびっくりしながらその光景を見ていた。

「・・・ここ、見てください。」

指差すところには文字が書かれていた・・・それには『M—L U N A P』と書かれている。そして、その隣には数字のゼロが刻まれている。

「・・・どういう意味だ？」

「・・・私を作ったのは“ゼロ”だということです。」

「・・・それで？」

「私としてはおかしいのですが・・・私はすべてにおいてサポートなのですが『ゼロを倒す』というプログラミングがされているようなのです。先ほどあったゼロですが、私が作られる以前に生存していたようには思えないんですよ。」

そういつてスカートを下ろすルナ。

「・・・正直、迷ってます。」

「そうだろうな、でも・・・魔法で生きながらえたんじゃないのか？」

「・・・確かにそうかもしれませんが、魔法はそこまで万能ではないと思います。」

それは、確かにそうだろう・・・それではこの世界は人間であふれかえってしまう。

「とりあえず、今後も私はマスターに付き従います。これは安全上と私の感情・・・二つからの理由です。」

「あ、ああ・・・」

静かに闘志を燃やすルナに俺はしょうしよう驚きながらも尋ねる。「ルナ・・・という名前は以前に瑞樹がつけたものだったんだが？」「いえ、彼は私のことをじろじろと眺めていたのでしょう・・・注意を凝らしてみればルナ（LUNA）と書かれた部分は確認することが出来ますが・・・実際の私の名前は『メルナ』ということでしょう。ゼロという人物がそう読んでいたのか知りませんが・・・」

それなら・・・

「今後はメルナって呼んでかまわないんだろ？」

「ええ、そうですね。それが私の真名なのでしょうから・・・」

「メルナって・・・他にも量産されているのか？」

「どうでしょうか？確認しようにも拠点との通信機能を私は持っていませんし、通信機能自体を私とソルは持っていません。」

「なるほど・・・」

「私はプロトタイプ・・・つまり、試験機ということですね。」

「やっぱりそれなら量産されているんじゃないのか？」

「ええそうかもしれません・・・」

そういうながら弁当箱を広げるメルナ。

「試験機だからでしょうか？私の所持している能力には試験的なものがつまれているようです。」

「たとえば、こういうものが・・・いや、一番いい能力はどんな奴だ？」

どういふものがあるんだとメルナに問えばこの正直でいい娘さんは間違いなく自分が所持している能力をすべて披露してくれるに違いない。

「ええつとですね・・・まあ、みていてください。」

彼女は無造作にバナナの皮（どこから出したんだろう？）を放り投げる。そして、その投げたバナナの皮に思いっきり走っていき・・・

「・・・これです！」

バナナの皮のほんの数センチ前で急停止をした。

「・・・これって？」

「私には『バナナの皮の恐怖から必ず回避できる機能』がついています。これで、私はバナナの皮を踏んでまず、滑って恥をさらすことはないでしょう・・・この点には倒せと命令されているゼロに感謝したいくらいです。」

真剣にそう語っているメルナに俺は少々難儀であると思ひながら

も同意しておいた。まあ、メルナが必要だと感じているのなら必要なだろう・・・

「・・・マスター、これからは私に背中を預けてください。」

「え？ああ・・・俺はそのつもりだ。」

「任せてください！」

自信満々にそういう彼女に俺は少々不安を覚えながらも・・・結局頼むことにしていたのだが・・・うなずいたのだった。まあ、普段はいい子なんだし、あまりぼけたりできないところが欠点ってところだろうが・・・

ルートRその二、改名と能力！ゼロは絶対にあいつだ！（後書き）

更新が不定期な上に他の小説ともかけ持ちしている・・・となんとも、不安定な状況がいまだに続いています。もうちょつとがんばらないと・・・目標であったゼロを登場させる！ということには成功したので次回は早速メルナの能力？を使用したねたを使うかと・・・いえ、冗談です。今後は、ゼロとの戦いに移っていききたいと思います。とりあえず、次回は・・・どのルートで行こうかなあ？やっばり、順序良くしていききたいと思います。

ルートS その二、ソルの警護は完璧！予習、復習目に焼き付けて・・・

タマ（友達の猫）は股連れ、（アルコールが）弱い酒・・・もいい、旅は道連れ、世は情け・・・いや、どうでもいいか。

「零時、もっと酒をもってこーい！」

俺に命令するソル。こいつは何をしているんだ？

「こんなアルコールが弱いんじゃ、アルコールランプだってできねえぞ！」

よく言うぜ、お猪口一杯でここまで酔える人間がどこにいるんだ？俺はそんなことを思いながら一人で酒宴をしているソルを見ている。

「あゝソル、そんなに飲むときついんじゃないのか？」

俺以外にこいつを止める人材はいない。

ソルとルナの家が焼かれて一ヶ月が経った。

その間、変わったことは特になく、ソルと俺と一緒にいる時間が少々延長されただけだ。いまだに家が見つからないので彼女たちは俺の家にいるのだが・・・はつきりいつて大変だ。それに、今日から俺たち二人以外はいない。それにもきちんと理由があり・・・それは町内会の福引であたった温泉旅行が問題だった。

当初、全員で行く予定だったのだが・・・その権利は母さんたちが外れて俺たちの部活で行くことになったんだが・・・二人だけ、自腹だということになってしまったのだ。

ただ単に、これは人数がオーバーしてしまったということだったのだが、最終的にじゃんけんという形（言いだしっぺは俺とソル。）になった。結果、ここにいるのは惨めな負け犬二匹であり、ソルはそこまでしていきたかったのか知らないがとりあえず飲んで忘れるということになった。そのような横暴をとめてくれる父さんと母さ

んも今は家にはおらず……俺には打つ手なしだし、困ったものだな……ははは……

「……よし！」

「よしじゃないぞお！ほら、早く酒だ酒だ！浴びるように飲んだらあ！」

「これで……最後だぞ？」

一升瓶を渡す。それを開けてソルはそれを確かに、浴びるように……いや、実際は浴びているだけだが……からにしたのだった。そろそろ、夕日が傾き始めており、コイツハ本当に何をしているのだろうか。俺の頭の中では冷静にこの状況を判断しようとかんばっていた。

「あっはっはっはっは！」

そして、十分後……

「……ぐが〜」

「ま、こうなるってことは目に見えてわかってたんだけどな。」

テーブルの上を不法占拠している缶ビールの空を俺はまとめて片付け始めたのであった。今後、不法占拠を排除した後は夕食を置かなくてはいけない。第一に、この家にいるのは俺とソルだけなので……寝ているソルを除外すると、俺しか残らない。したがって、俺が夕食を作らないといけないし、家事もしないといけないのだ。

「零時〜」

「なんだ？」

「私に任せておけ〜」

「……」

よっばらいがほざく寝言には興味がない。どうせ、うそだろうかな……

「……ああ、お前に任せるよ。」

俺はテーブルに突っ伏しているソルを隣の部屋においてあるソフ

アーの上に抱え上げてもって行ったのであった。

「さて、今日の夕食は何にするかな？一応、献立どおりに進むなら今日は魚だ……」

俺、どちらかというと魚は駄目だ。ま、まあ……誰にだって苦手なものはあるんだし、これはこれでしょうがないから……一日とんで今日はお肉の日にしようかな？でもまあ、今日は魚にしよう。俺が苦手な魚だが、いたって食べることが出来る秋刀魚だ。

「塩焼きがいいかな？」

そう考えながら俺は料理の支度を始めたのであった。

「おっと、そういえばまだ洗濯物を取り入れてなかったな……」

俺が今頃一人で生活していたら挫折していただろう……ゲームの中ではよく一人暮らしをしているがそんなの、大変ではないのだろうか？俺としてはやはり、誰かと住んだほうがいいと思う。勿論、いまだにいびきをかきながら寝ている機械の少女ではないことは確かかなのだがね……

「……まあ、ソルはこんなもんだろうな……」

洗濯物の一つを手にとって俺は一人ため息をつく。俺が手に持っているものを勝手に想像するがいいさ……男って言うのは頭の中で想像を創造するような生物なのさ……

「わるかったな、こんなもんで……」

「ああ、そうだ……な……？」

振り返らずとも、そこに誰がいるのか、わかる。だって、俺たち心はつながっているんだもん♪

「さっさと、私のブラジャーから手を離せ、そうしないと今度は零時の首が飛ぶことになるぞ？」

「はい♪お任せくださいませ♪（ええ、別にこんな小さい奴に興味はありません♪）」

いや、別に俺が下着に興味を持っていると思わないで欲しい。別に、興味はないぞ。

夕食時、ソルは静かに俺の目の前で食事をしていた。

「零時、ご飯粒がついてるぞ？」

「あ？どこだ？」

「ほら、ここだ。」

箸で器用に俺のほっぺについていたご飯粒をひょいと摘み上げてそのまま食べる。

「零時、おかわり。」

「しかしまあ、よく食うな・・・」

機械だろうに、その胃袋はどうなっているんだ？

「ふ、食べておかないといざというときに動けないから・・・」

いや、逆に食べたらおなかいっぱいで動けなくなるんじゃないや・・・そんな俺の疑問は夜空に消えた。

「零時、そろそろルナたちは帰ってくるんだろ？」

「ああ、明日・・・いや、明後日だったかな？」

「そういうことはきちんと確認しておかないと後で痛い目を見るかもしれないぞ？」

「そうかなあ？別に俺はそう思わないんだが？」

「いえ、きちんとそういうことは把握していないといけませんよ。」

「・・・」

俺はいつの間にか俺の隣の席に座って秋刀魚を食べている・・・ローザを見ていた。ソルは既に戦闘体制に入っており、この場・・・一触即発のこの場で場違いなのは秋刀魚を食べているローザとしゃもじをローザに向けている俺だ。向けるべきものはしゃもじではない。

「・・・この前は逃がしたが・・・今回は逃がさん」

静かにそう言い放ち、いつの間にか頭には赤い鉢巻を巻いている。

「・・・夕食の席では暴れることは間違っているんですよ？私のマスターがそうしています。意外と、厳しい人なんですよ。零時さんはそう思わないんですか？」

別にそれは当然だと思うが・・・

「それに、私が襲うのなら既に襲っていますよ。ソルさん、あなた先ほど寝ていたでしょう？ よだれたらしながら・・・」

「ぐ・・・」

「いささか、緊張の糸も気がつけば途切れていたようですからね・・・ここを敵は狙ってくるんじゃないんですか？」

はつきり言うが、彼女言うことは正しい。

「さ、ソルさんも今一度席に座っておとなしく零時さんからおかわりを受け取ってください。本日、私はあなた方と争いに来たのではないのですよ。」

そういつて秋刀魚の骨を今度は食べ始める。

「・・・わかった、その話を聞こう。零時、やはり私にもお代わりついでくれ。」

「あ、わかった。」

俺は持っていたしゃもじが場違いではなかったことに・・・馬鹿らしかったが・・・感動したのであった。

夕食も終わり、普段だったらソルが風呂にはいつて俺と談笑するという時間は急遽、招かざる客であるローザの提案を聞く羽目になったのであった。

「・・・ええと、まとめると俺に来て欲しいと？」

「ええ、私のマスターがそれを望んでいます。別に零時さんを襲うようなことはありません。ソルさんは来なくてもかまいませんが・・・」

「何故だ？」

不満そうな顔を見せてローザに食って掛かる。

「それはですね・・・私たちは別に零時さんを襲う理由が既にあります。次に・・・いえ、こちらのほうが大きな理由なのですが・・・ソルさんは別に零時さんの魔獣さんではないでしょう？」

確かに、そうだ。これ以上はさすがに『部員』が『部長』を助け

る理由なんてないだろう。

「・・・十分にソルさんも零時さんにはお礼を終えたでしょうし・・・」

いや、それはどっちかというとお礼はしてもらっていないような・・・どちらかというと俺がこき使われているな・・・ビールは飲むし、俺が適当に料理を作れば文句は言うし・・・肩凝った、腰がこった、足がこった・・・機械の癖してこりやすい・・・微妙にわがままさんなのだ。

「た、確かにそうだが・・・魔獣じゃなくても構わないだろう？私がいっても別に迷惑になるわけがないだろう？」

「さあ、どうでしょうか・・・一つ、提案するならば自分のやってきたことをその胸に手を置いて考えてみたらどうでしょう？そうすれば零時さんに自分が何をしてきたかお分かりになるんじゃないんでしょうか？」

「む、むう・・・」

ローザに言われたとおり、ソルは手を胸において真剣に考え始めた。

「・・・さて、彼女はいいとして零時さんは私と一緒にきてくれるんでしょうか？」

「・・・そうだなあ、とりあえずこの前はローザに襲われたから・・・」

「あれはですねえ、正直恥ずかしいのですが・・・事故ですね。誤射です。」

「・・・もっと詳しく説明してくれ。」

そういうところもと咳をして・・・

「正確に言うと、私のマスターからは『空砲でちょっとだけおどしてあげなさい』といわれてたんですけど・・・何を勘違いしたんでしょうね？」

さあ？

「・・・『空間消滅砲（略して空砲）でちょっとだけ墜としてあげ

なさい』と勘違いしたわけです。」

「それはまた、撃墜王もびっくりの勘違いだね・・・」

そんなことを話していると・・・俺の肩を誰かが掴んだ。

「・・・ソルか？どうした・・・」

ソルの目にはめっちゃくちゃな炎が渦巻いていた。

「・・・すまん、零時・・・思えば私はさすがにこれはどうかという生活をしてきていた。」

「うん、ようやく気がついたか・・・俺はあえて、黙っていた。」

「む、やはり気がついていたのか・・・」

顔を真っ赤に染めるソルだが、そりゃまあ、あれだけ酒をかつくらってぐぐと寝ていれば、誰だって怠惰な生活だと気がつく。

「・・・言わなくてもわかると思うが・・・私が零時より先に入るのは零時が入浴している間は常に零時がお風呂に入っているのを天井裏から確認している。ま、まあ、念のため録画もしているし、後に零時が寝た後もそれをもう一度じっくり見ている。」

「・・・」

そ、そいつはびっくり・・・驚いた・・・

「それで、それを終えた後も零時の身边を護る為に私は零時の部屋に忍び込む・・・もとい、音もなくはいつてきて零時のベッドの中に入っていつでも護れるようにしているのだ。きちんと、零時の夢の中でも警護をしているぞ？」

「・・・」

それって、俺の隣で寝ているだけじゃないのか？いや、普通はそこまでしないだろう？

「・・・だ、だから・・・」

「だから？」

「私を零時のパートナーにして欲しい。」

「・・・」

ソルって、意外とまめなんだなあ・・・ではなく、どうやらルナよりすごいことをやってくれそうな人物だと俺は再確認できたかも

しれない。

「ああ、これからよろしく頼むよ……」

半ば疲れながら俺はソルにうなずいたのであった。

「私に任せておけ！」

どんと胸を叩いたソルを見ながら、俺は微妙にこれから先、もつとすごくなりそうだなと思いつながら……

「さて、それじゃあ行きますよ。準備はいいですか？ あ、荷物はいいらないんでそのまま……」

そういったローザをソルと一緒に追いかけ始めたのであった。

ルートS その二、ソルの警護は完璧！予習、復習目に焼き付けて・・・（後妻

久しぶりの更新ですが、いたって今回はすばやくかけたのではないかと思います。人数絞ることやっぱ詳しく話がかかりますね・・・いやはや、他の人物がでてきてないのはちょっとこまったことです・・・。ルートSではどちらかというと平和的にことが解決していくと思っています。できましたら、どの話が一番面白いか・・・はたまた、面白くなっていきそうか連絡してくれるとうれしいです。それでは、また！

ルートP その二 あなたの存在は・・・ (前書き)

今回は非常に短いですが・・・次回は長くなる予定です。

ルートP その二 あなたの存在は……

ルートPの2

固まった俺はとりあえず、パトリシアを座らせることにした。

「あゝなんだ、その……」

真剣そのもののパトリシアの瞳に自分が映るのが怖いのか知らないが、俺は彼女の目を見ることができないでいた。

「……駄目……でしょうか？やはり、私では駄目なんでしょうか？」

ちらちらと覗き見ていた彼女の眼が曇る。それに対して俺は首をぶんぶん振って否定していた。

「あゝっと、だな……そういう問題じゃなくて……その、俺も慣れてないから……」

慣れてないどころか、これが初めてだ。

「……なあ、聞きたいことがあるんだが……ちょっといいか？」

考えていてもしょうがない。ここはパトリシアに尋ねることにしよう。俺は決心し、彼女の目をしっかりと見ることにした。

「なんでしょう？」

「……俺のどこが気に入ったんだ？」

「すべてです！私はあなたのすべてが好きです！」

即答、それに拳を握り締めるまでの熱烈告白……圧倒された俺は何も言えないでいた。

「……こんな駄目な先輩を恋人にしてもいいことはないんじゃないのか？」

「いえ、たとえ駄目だとしても……」

うわ、そこは否定してもらいたかった……

「……私は零時さんと一緒にいたいんです！それでも、駄目でしょうか？」

その熱意はすさまじいもので・・・部屋の温度がちょうどいいくらいになっていた。まだまだ、最近（冬）は冷え込んでるからなあ・・・さて、ぼけるのもこれくらいにしてようやくまとまった俺の答えをこの子・・・パトリシアに伝えないといけないな。

「・・・パトリシア、俺はお前のことが好きだ。」

「そ、それなら！」

「まあ、待て・・・お前はまだ、若いだろう？」

いや、俺もまだまだ若いけどネ。

「まだ、あせらなくてもいいと思うんだ。だからさ、お前が高校を卒業した日・・・悪いけどまた俺に告白してくれないかな？」

「そ、それってつまり・・・」

そう、今は駄目ってことだが・・・

「私の体が幼すぎると？」

「違う！そういうことじゃなくて・・・まだ、パトリシアは若すぎるの！」

「そういうことですか・・・」

ようやくまともな反応を起こしたパトリシアに俺はため息をついた。

「・・・零時さん、今回は保留ってことですね？」

「ああ、そういうことだ。だから、お前が高校を卒業してもなお、好きな奴ができなかったら俺にまた告白してくれ。」

「そうですね・・・私はまだ若いですから・・・わかりました！」

彼女は立ち上がって・・・家に帰るようだったらしいので俺は玄関の前でパトリシアの小さな身長の上端である小さな頭に手を載せた。

「・・・悪いな、こんなことを言っさ・・・」

「・・・いえ、いいんです。今日はすみません。」

そういつてちょっと暗い雰囲気になったのだが・・・

「・・・あ、空に虹がかかってます！」

「へえ、どこだ？」

指差された上空を俺は見上げたのだが・・・そこにあったのは灰色の雲だった。

「おいおい、何も・・・んっ！」

目をつぶったパトリシアの顔が気づけば目の前にあり・・・彼女とはぱっと離れた。

「・・・予約・・・取り付けましたからね！」

そういつてパトリシアは去っていった。残された俺は何故か、あわてて空に虹がないのか探し始めたのだった。俺は何をやっているのだろうか・・・

その後、一度もパトリシアから連絡がなかった。毎日のように連絡があったのに来なくなったのに少々ばかり寂しいものがあつたのだが・・・俺がなんでもない下級生に連絡するのはどうかと思つて連絡するのはやめていた。（本当はすぐに連絡したのだが電話がつながらなかった。）

そして、それから一年が過ぎ、二年が過ぎて・・・俺はとある一つの魔法を仕上げていたのだった。その魔法は、俺が高校三年生から成し遂げて見せるという信念の元に作り上げたものだった。

「いやあ、俺も一人立ちして一年経ったか・・・」

その日は俺の独り立ち記念パーティー（出席一名のみちなみに俺だけ）を行っていた。今月はそろそろピンチなので道に生えていた草を煮込んでいる真っ最中だ。これに魔法をかけて後に味付けを行う。魔法って、こういうときにのみ、便利だな・・・

「さ、そろそろいい頃合になってきただろうな・・・」

煮えたであろう、雑草を自分のさらに載せる。

「いただきまーす！」

食べようとした瞬間・・・

ぴんぽーん！

「・・・客か・・・」

どうやらお客さんが来たようで・・・俺は立ち上がったのだった。

その日は朝から雪が降っていた。

ルート零その三 吉希は零時が大好きです (前書き)

ルート零第三話・ちなみに、ルート零はその四で終了です。

ルート零その三 吉希は零時が大好きです

ルート零

俺の彼女……御津波吉希みつなみよしきを呼ぶ方法は少しばかり、簡単だ。

「……どこに潜んでいるかわかんないからなあ……」

「いや、彼女って普通に零時が呼んだら出てくるじゃん？」

そう、確かにそれはあっているのだが……何故、俺が呼んでいるのかわからない。それに、一年前にあったときは近くのゴミ箱からその姿を現したのだ。確か、頭にはいわしの骨をつけていた気がする……

「……吉希いいい！」

「零時、何だ？」

「うわああああああ！」

どこから現れたかという……近くにあった電柱がしゃべったのだった。そして、布をはがして現したのは……

「……私を呼んだということはとうとう、結婚する気になったのか？」

黒髪を腰まで伸ばし、黒いロングコートに黒い服を着ている。靴だって黒いものを着用……そして、常に右腕を懷に忍び込ませているのは……なぜだろう？ 依然あったときもこんな感じだった。

「……零時、なんで彼女はいつも右腕を懷に忍び込ませているんだい？」

「それはな、吉希は色々人様にいえないような生活を送っているらしいからな……それで、何時敵が襲ってきてもいいように迎撃準備をしているんだと。」

「そうなんだ……」

「まあ、今日は大丈夫だろうからな……で、今日は何のために私を呼んだんだ？」

そういつてこっちに歩み寄ってくる吉希。さて、なんていいわけをしようか……

「む？ 零時……」

そういつてこっちに近づいてきておもむろに顔を俺に近づけて彼女は鼻を動かす。

「……零時、女のおいがするぞ？」

「おいおい、吉希……俺は男だぞ？ 別に女装も何もしてないし……」

「いや、そういうことじゃなくて……また、女の知り合いを作ったな？」

いつの間にか抜かれた右腕が俺のど元に……冷たいナイフが握られている……つけられていた。

「……な、何を言っているんだか……」

「……お前も十八になったと聞いたからな……私を婚約しても構わないだろう？」

どこの世に……許婚の命を狙うばかりがいるのだろうか？

「へえ、意外とクールじゃなくて嫉妬深いんだ？」

「瑞樹、この状況を打破する方法を考えようともお前はしてくれないのか？」

両手を上に上げ、俺は瑞樹のほうを見る。

「……いや、正直言ってそれは零時がこの子にきちんと自分の心を伝えないからじゃないかな？」

そうは言うが……

「なあ、吉希……」

「何だ？ 弁解なら一応聞いてやるぞ？ 私は零時の妻だからな。」

「……まあ、いい……お前は何かを誤解しているようだが……ほら、お前は俺の許婚なんだからあせらなくてもいいだろう？ だから、そのナイフを下げてくれ。」

「……いいだろう。」

そういつてようやく俺のど元から冷たいものを下げて……

向き直ったのだった。

「・・・ふう、死ぬかと思った。」

「さすがに彼女だって許婚を刺そうとはしないだろう？」

「まあ、な。だけど・・・事故って言うのがあるんだよ・・・吉希、めっちゃくちやまじめな性格だからな。さっきみたいなことになる・・・それはもう、ものすごいぜ？」

「それで・・・お前が本当に私のことを妻だと認めているのなら・・・キ

「さあ、瑞樹・・・そろそろ帰ろうか？」・・・おい、零時！
いきなり怒って俺をにらむ吉希。

「キ・・・キスぐらいしてくれてもいいだろう？」

「・・・吉希、お前は何を言っているんだ？」

「・・・小さい頃はいいしかったのに・・・や、やっぱり私のことが嫌いなんだ！」

「へえ、可愛いところもあるんだね？」

「おいおい、これから大変なんだぞ・・・とりあえず、瑞樹逃げるぞ！」

俺は瑞樹と共に走り出した。状況を理解できていない瑞樹は当然のように俺に尋ねてくる。

「何でだい？あそこで君が大丈夫、君の事を世界の誰よりも愛してる！と叫べば万事解決じゃないのかい？」

「いや、吉希の場合はその後がすごいんだ・・・その後はだんだんと行為が激しくなってる・・・最後のほうはもう、すごいことになるからな・・・ちょっと、危険だ。だから、逃げる！まあ、逃げたほうも大変なんだが・・・そら、来た！」

後ろを振り返った瑞樹が呆然としている。

「・・・何、あれ？あれは吉希ちゃん？」

「・・・違うな、あれはいわば“すくぱくもくど”だ。」

後ろに迫ってきている吉希の体からは・・・煙が出ている。

「・・・吉希ちゃんって鬼じゃないけど魔獣？」

「正解、しかも・・・」

俺の隣をビームのようなものが通り過ぎる。

「・・・銃系統のな・・・そりゃもう、暴れ始めたら大変なことになるぞ?」

近くの電柱が破壊される。カラスがお空に退避・・・

「魔法で撃退する?」

「いや、魔法が吉希にはまったく・・・通用しないんだ。正直、勝てる気がしない。」

瑞樹は後ろを振り返っているのだが・・・何か考えがあるとは思えない。

「いつも、こうなるんだろ?」

「そうだな、とめるにも近づかないとめられないし・・・普段は吉希が疲れるところまで逃げて逃げて逃げて・・・逃げまくった後に近づいて説得。一応、いっぱつでとめられるんだけどね。」

そういつて俺は再び逃げを開始・・・

「近づけばいいんだね?」

「ああ、後は俺が何とかできるからな。それができれば、何とかなると宣言しよう。保証書だってつけたっていいぞ?」

俺がそういうと瑞樹は指を鳴らす。そこに現れたのは透明な防御壁・・・

「これで、突っ込もう!」

「・・・さあて、その防御壁がどこまで持つか?以前、俺だって試してみたんだが・・・三発で終わりだった。」

「任せておいて!」

そういつた瑞樹は後ろに向かって走り出した。俺も瑞樹の後ろを追いかける。

「・・・零時、僕が叫んだらジャンプして!」

「わかった、お前に任せよう。」

そのまま近づいていき・・・あと二メートルというところで瑞

樹のシールドに吉希の攻撃が直撃。

「いまだ！」

「よっしゃ！」

ジャンプすると瑞樹が用意してくれたのか知らないが・・・階段が現れる。そのままそれを駆け上がり・・・吉希の背後に回ることができた。

「吉希！もらったぜえ！」

そのまま吉希を背後から抱きしめる。

「・・・落ち着け、吉希。」

「・・・はっ！」

ようやく吉希は活動を停止した。

「・・・れ、零時い・・・」

振り返って俺を抱きしめてくる吉希をそのまま好きにさせておいた。

「ふう、死ぬかと思った・・・まったく、それでとめられるなら初めからそうしておけばよかったんじゃないか？」

「まったく、そのとおりだな・・・でも、これって意外と恥ずかしいんだぞ？」

「ほら、ここで愛の告白をしちゃいなよ！」

「・・・もう、放さない・・・」

そういつてしがみついてくる吉希に・・・俺は・・・
「吉希・・・俺は・・・お前のことが・・・」

ルート零その三 吉希は零時が大好きです (後書き)

さて、ルート零は次回で終わりですが・・・とりあえず、ルートシリーズを終わらせた次は・・・『御注文は？』魔法使いで！』の最終章を書いていく予定です。

ルートRその三、買い物の話を変える日

三、

その日はたまたま、メルナと別に行動をしていた……

「おや、奇遇ですね……」

「ローザ……」

その日、頼まれていた買い物をしている途中、ちょうど俺がきゅうりをてにとったところで隣のナスを掴んだローザと目が合ったのだ。

「そんなに驚いたような顔をしないでください。別にスーパーで暴れたりしませんよ。そんなことをしたらマスターにどやされてしまいますからね。」

そういつて自分のかごの中にナスを入れる。俺もきゅうりを慎重に吟味しながらかごのなかに放り込む。

「へえ、意外だな……ローザだったらどこでも暴れそうな感じがするんだが……」

「いえいえ、そういうなら私よりもあなたのメルナさんのほうが大暴れを敢行するでしょうね。きっと、私とあった時点で撃ち合いを開始すると思いますよ。」

確かに、彼女の言うとおりに違いはない。俺だって彼女が間違いない暴れまわることを想像してしまう。

「じゃ、私はこれで失礼しますので……また、マスターをつれてきたときに会いましょう。」

「なあ、何で店長の……いや、工場なんて襲ってるんだ？」
俺はふと、そんなことを尋ねてみた。

「あゝそれはですねえ……本当は黙っていないとまずいんですけど……これもマスターのためなんですよ。」

「マスターのため？」

「ええ、メルナさんと同じように私もマスターを補佐するような存

在ですからね。マスターは非常に優れた魔法使いだったんですけど・
・少々、失敗してしまっただけです。」

失敗したって何をだろっか？

「・・・失敗したことはですねえ・・・とりあえず、マスターの
名誉のために伏せておきますが・・・一応、私を助けるためにマス
ターが魔法を使っただけです。そうしたら別次元にとばされてしま
ましてね・・・ここに来ちゃったんですよ。つまり、私たち二人は
この世界の生まれじゃないんです。」

そういつて俺に背中を見せるローザ。その言葉はまことに信じが
たかったのだが・・・嘘ではないようだった。

「それで、もうちょっとでもこの世界に帰ることができるとすけ
どね、少々、時間がなくなってきたんです。まあ、私に話せること
はここまでです。後はマスターに街中であつたときにでも聞いてく
ださい。勿論、そのときはメルナさんにマスターをうたないように
言っておいてくださいね。」

そういつてローザはレジに並んだのだった。俺は他にも話したい
ことがあつたのだが・・・

「ここにいましたか、マスター。外は危ないと思いますが？」

「あ、メルナか・・・」

メルナが現れた時点で間違いなく、聞くことは不可能だろう。こ
の子がいれば辺りは惨憺たる結果となって警察沙汰になるのは間違
いない。

「もう用事は済んだからそろそろ帰ろう。俺は別に安心だからな？」

「いえ、そういうわけにはいかないと思いますよ。暗がりが一番、
襲われやすいんです。夜だって満月が出ていなければ歩くことは禁
止されています。特に、マスターのような方は常に私が付き従って
いなければトイレにだって行ってはいけないんです。そうしないと、
私は不安で壊れてしまいます。」

「あ、ああ・・・」

顔を引っ付けられるような勢いでメルナは俺にそう語ったのだっ

た。

「これはもう、マスターだけの一存だけでは決められないことなんですよ！マスターに何かあったら大変です！」

辺りをきよろきよろと見回しており・・・これはもう、危ないスイッチが入ったに違いないだろう。

「む、このトマトが怪しいですね！」

「ほ、ほら・・・店員さんの視線が痛いからさっさと帰るぞ！」

メルナを引きずりながら俺はもう辺りにローザの姿がないことをきちんと確認してスーパーを後にしたのだった。

「全く、おしゃべりにも程があるんじゃないのかな？ローザ？」

「す、すみません・・・」

「あのなあ、俺たちだって泥棒のような真似をしたくはないんだぞ？元はといえばローザが親父の機械を触ったから誤作動を起こしたんだろうが？」

「あゝそうでしたねえ・・・あの頃が懐かしいです。だから、零時さんの手を借りたらどうですか？きっと貸してくれると思いますけど？」

「そうだろうがな・・・まあ、もうちょっとだけ待ってくれ。これができたら頼むことにしよう。」

家に帰りついた俺たち二人は夕食の準備に差し掛かる。

「・・・サラダの材料はきゅうりだけですか？」

「ああ、我慢してくれ・・・色々あってそれだけなんだ。」

「まあ、しょうがないですね。マスターの命ときゅうりはさすがにマスターの命のほうが大事ですからね。」

そういつてきゅうりをなれた包丁さばきでむいていく。

「なあ、メルナ・・・」

「何です？」

「さっきのスーパーにローザがいたらどうする？」

「そんなの、決まってますよ。その場で銃撃戦を展開して勝利を収めます！」

握りしめたきゅうりは途中からぼきりと折れてしまったのだった。はぁ、先ほどローザと一緒にいなくてよかったぁ……きっと、弁償しなければならなかっただろうからな。

その次の日、俺はローザの“マスター”と街中で出会ったのだった。勿論、そのときにメルナが傍らにいたことは間違いなかった……それが、少々ばかり話を進めることとなったのだが……

ルートRその三、買い物の話を変える日（後書き）

さて、ルートRは第五話で終了の予定です。予定ですから終わるかどうかもまだ、決まっていませんが……。さて、ようやく話が進展してきている模様で、次回の話で再びゼロが現れます。

ルートS その三、ソルは素直でいい子です？（前書き）

ルートS次回で終了です。今回の話で大体のことは終わったのでルートSの次回はエピソード的な扱いでいきます。

ルートS その三、ソルは素直でいい子です？

三、

俺の庭の先に移動したのであった。別に、そこに何があるわけではない。

「……おいおい、ここは俺の家の庭だぞ？」

俺がそういうとにやりとローザは笑うのだった。いったん笑うのをやめて真剣そうな顔をしたのだがふたたびにやりと……（なんだか、すごく似合っている。）笑ったのだった。

「……ここから先が私のマスターがいる場所なんですよ。今ならまだ引き返すことが出来ますけど？」

親切心からそのように言ってくれているのだろうが……

「そう思っているのなら、俺の手を掴んで引っ張らんでくれ」

「そうだ、私が零時の手を握る！」

そういつて割り込んでくるソルにため息をつきながらも、俺はこうしてローザのマスターに会いに行ったのだった。

中は何時の間に作られたのか知らないのだが、宇宙戦艦のように銀色の床や壁が目についた。

「……ああ、これはマスターの趣味ですので気にしないでください」

「あ、趣味なのか？実務的にはなんにもないのか？」

「……そうですね、一応侵入者を迎撃するようなシステムがあるって言ってましたけど？」

「ふうん？それはどういうことなのだ？」

「ああ、具体的には……」

唐突に俺らを赤い光が照らしたのだった。ビーコンビーコンと警報らしきものまでなっている。

「……俺たちがまさか侵入者？」

「いや、私がいいますからそれはないかと・・・そうですね、私の体から五メートルまでは安全区域です。ですから、五メートル以上私から離れた場合は侵入者と同じ感じになります。離れたら迎撃装置が働きますから・・・これは間違いでしょう。」

とりあえず身構えた俺たちなのだが、一向に重火器のようなものは出てこないし、ソルも辺りを見渡しているだけだ。

「のわあああああ！！」

奥のほうからそんな声が聞こえてきた。非常にまぬけのような声だな・・・きつと、珍しがってこの家に侵入したに違いないが・・・

「マ、マスター！」

そういつてローザは声のしたほうに走っていき・・・

「何だ？あの声の主がローザのマスターか？」

「そうだろうな、それ以外考えられないんだが・・・それより、零時・・・先ほどローザが言っていたことを覚えているか？」

俺たちの背後から

「キューーン」という音が聞こえてくる。

「・・・ああ、つい今しがたローザが言ったことだろう？」

エネルギーか銃弾を装填したのか知らないが、

「ガシャコン」という音が聞こえてくる。

「私たちは今、侵入者になったのだな？」

「そうだな・・・急いでローザを追いかけよう！」

ソルの手を取り、俺は走り出した。先ほどまで立っていた場所に床は既がない。

「ローザを確認できるか？」

後ろから飛んでくるミサイルなどをソルが正確な射撃で落としながら俺に答えてくる。

「・・・そこを右に・・・ああ、そしてそこを左に・・・そこで詰まってる。他の生体反応もあるから・・・それがローザのマスター

「なんだろう。」

薬莢をばら撒いているソルを引きずって、俺はようやくローザの後姿を確認することが出来た。そして、その奥には俺たちの学校の制服によく似た服を着た一人の男が立っていた。

「……あ、零時さん！」

「……お、ようやく来てくれたのか……やれやれ、これで何とか助かりそうだ……でも、その後ろの警備部隊をつれてきて欲しくなかったんだけどなあ……」

こつちを振り返らず、彼は何かをしていた。その右腕がひかり、彼の進行方向にいた機械を一撃で葬り去ったのだった。

「すげえ！」

「高度な魔法だな？ 零時は出来るか？」

「いや、正直自信がないな。」

そういつてこつちを振り返った彼なのだが……

「俺!？」

「……零時の生き別れの双子の兄か？」

その顔は俺だった。いや、俺には生き別れの双子の兄（もしくは弟）がいるわけではない。

「……頭下げてなよ！」

目の前に現れた俺に戸惑ったのだが、先ほどの魔力を見せ付けられたので俺とソルは頭を下げた。そして、その頭上をなんだかとても危ない何かが通り過ぎていった。そして、後ろの敵をすべてなぎ払った。

「あゝあ、せっかく作った警備兵器もこれで全滅か……自分で作って自分で壊すなんて世話ないわな。」

そういつてため息をついた相手を再び見ていたのだが、俺は素直に驚いていた。

「おっと、俺はお前さんの双子の兄でも弟でもないぞ？ 正確に言うならお前さんなんだが、身体的には一年後のお前さんだな。大体、俺はこの世界の人間じゃないから……君を襲ったのはこつちの

不手際だ。襲って何なんだが・・・ちよっと手伝って欲しいことがあるんだ。」

そういつて俺の前に手を差し伸べてきたのだった。俺はその手を掴む。こいつが俺なのなら、別に不振がる必要はない。だが、ソルはそう簡単にいけないようで・・・相手に銃を向けたのだった。

「・・・。」

「やれやれ、ええと、こっちでも名前は一緒だろうけど・・・苗字は確か・・・時柱だったか？」

うなづく俺に目の前の俺・・・ええい、ややこしいから零時Bとしよう。俺は零時Aね。

「撃たないように言ってくれ。このままこの土地で果てても構わないんだが・・・」

そういつて彼は手を動かしたのだった。

「・・・！」

ローザが向けている銃口に手を当てる。ローザはソルの脳天を狙っている。

「・・・この二人が争いだすのは本望じゃないんでね。早く言ってくれないとどっちかが誤射をおこしてしまうかもしれない。」

「あ、ああ・・・ソル、やめてくれ。」

「・・・聞けるわけないだろう？そんな命令・・・」

俺の頼みだったのだが、ソルはその銃口を向けたままだった。

「・・・機械としては役に立たないな。主人の命令に絶対服従が機械だろうに・・・」

「・・・まず、ローザの銃口を下ろさせろ！」

そういうソルに両手をあげて

「もう、お手上げ♪」という仕草を笑顔で作って零時Bはローザに告げたのだった。

「銃をおろせだってよ？」

「・・・ソルさんは信じられません。零時さんが争う気がないのはわかっていますが、たとえばマスターの命令でも私は私のわがまま

を通してでもマスターを助けます！」

言い切ったローザに目の前の零時Bはため息をついた。

「お互いわがままな相方を持つと苦勞するねえ？」

「え、ああ・・・」

「零時に何の用があるかここで言え！その話を私が信用したら銃を下げる！」

完璧命令口調でそうソルは述べると再び銃口を向けた。

「はいはい、はあ・・・どこの世界にもこんなのがいるんだな・・・よし、前に言ったとおり、俺らはこの世界のものじゃない。これは信用してくれなくても構わん。時柱にしてもらいたいことは俺たちを弾き飛ばして欲しいんだ。」

「弾き飛ばす？」

鸚鵡返しのように俺は目の前の零時Bに尋ねたのだった。

「あゝそうだな、この世界でも少しは魔法って奴がはやってるんだろ？」

「はやるも何も・・・個人差はどうあれ、みんな使えるぞ？それが普通じゃないのか？あんただって使ってたじゃないか？」

「いや、俺たちの世界じゃ魔法を使うこと自体が珍しいんだし、詐欺だって言われるだろうけどな・・・とりあえず、これからいく場所にある装置に俺たちが入った後、魔力をぶつけて欲しいんだ。」

そういつて奥の部屋を指差す。そこには黄色と黒のコントラスト美しい・・・

「危険！関係者以外は立ち入り禁止！」と書かれている文字が張ってあったのだった。

「・・・別に危険でもないんですけどね、マスターが『そっちのほうで雰囲気出るだろ？』っていつてめちゃくちゃ手の込んだ作りかたしたんですよ？他の扉は全部手動で開けないといけないのにあの部屋だけ勝手に扉が横に開くんです。」

「あはは・・・まあ、いいじゃないか。」

ぼやくローザに弁明を請うかのように零時Bは笑っていたのだった。

た。

「・・・まあ、ついてきてくれ。勿論、そっちの君は俺をきちんと銃口で狙ってもらっていて構わんぞ。」

「・・・わかった。」

四人でその部屋の前に行くと、なるほど・・・確かに手の込んだような作り方をされていた。カメラがついており、俺らの姿を確認すると・・・

「四名さまごあんない！ご注文は？」

と、ローザのかわいこぶっている声が聞こえてきたのだった。

「ありゃ？時柱とまっちゃった？やっぱり、ローザじゃ駄目か？」

「・・・むう、それは私に失礼なんですよ！やっぱりこんなの入れないほうがよかったです！」

「いやほら、題名があれだしさあ・・・念のため・・・」

言い合っている二人をよそに、勝手に扉は開いたのだった。中は・・・レストランだった。

「何でレストラン？」

「え？それは・・・まあ、題名が題名だし？」

「ごほん、とりあえず零時さんにはあれを・・・」

指差すほうにはそこだけレストランではなく、二人乗りの自転車があった。

「・・・こぐのか？」

「いえ、私たち二人が乗った後、あるものを押してもらいます。よろしいですか？」

いいも何も、簡単そんなことなのでほっと一安心を俺がしていると、零時Bはローザに続けていったのだった。

「そうだね、簡単に言うとき柱には起爆剤になってもらいたいんだ。」

「なるほど・・・」

零時Bはレストランにあるウェイトレスを呼ぶスイッチを俺に渡したのだった。

「これは？」

「準備がいいときに押してくれ。ああ、勿論俺たちが乗った後だぞ？ 今押したら自転車が無発射しちゃうからな。探査機でもなんでもないから、人が乗ってないと意味ないんだ。」

そういつて彼らは自転車にまたがったのだった。

「さ、押してくれ。」

「・・・え、いいのか？ この世界に誰かさよなら言う人もいないのか？」

「構いませんよ。私はあなたたちとしかあつてませんからね。あ、そうそう・・・ちょっと待っててください。」

ローザは立ち上がるといまだに銃を構えているソルの耳元で何かを言ったのだった。そして、顔を真っ赤にして煙をだしているソルを残して再び自転車にまたがった。

「・・・時柱、迷惑かけたな・・・」

「いや、特に俺には迷惑かかってないし・・・」

「そうかい、それなら・・・あばよ！」

零時Bは何故かサドルの上に乗っている。それを見てローザはため息をつきながら俺に視線を送ってきた。その目は

「・・・スイッチ、思い切り押してください。」といている。

「せりゃ！」

「のわあ！ ちょ、あぶないい」

スイッチを押すとそのまま加速していき、目の前に現れたブラックホールのようなものに二人とも入って消えてしまったのだった。

「・・・いっちゃったな」

「ああ、私としてはローザのマスターが逝ってしまったていないか心配だが・・・さ、帰るぞ、零時。」

「そうだな。」

俺はその場にスイッチを置いてソルと一緒に外に出たのだった。

「なあ、ソル・・・」

「何だ？」

「さっきローザからなんていわれたんだ？」

「・・・お前には関係ないだろ？私のことだ。」

「？」

「もっと素直になっていいんじゃないかだとさ？ははっ・・・」

そういつてソルは笑ったのだが・・・

「いや、元からソルは素直じゃないのか？」

「・・・そ、そうか？」

「ああ、やりたいことをやるのは自分に素直ってことだろ？」

俺がそういうとソルは難しそうな顔をして唸った。

「ううむ、どうやら私と零時が考えている素直という言葉には少々語弊があるようだな。まあ、いい。別に素直にならなくとも私と零時はこれからも・・・」

ソルは俺の腕に自分の腕を絡ませてきていったのだった。

「・・・ずっと、一緒にいることが出来るのだからな。」

ルートS その三、ソルは素直でいい子です？（後書き）

さて、ルートSの物語どうだったでしょうか？もつとぼしぼし暴れてもらいたかったのですがいかんせん、時間不足です。さて、以前にもこのルートの話が終わったら新しい物語を書くといっていました。が、そのときはまったく中身が出来ていませんでした。しかし、中身は短編のキャラを使っていく予定ですのでそのところはよろしく願います。

ルートP LAST 愛とはなんだ？ (前書き)

前回のルートPで言っておくのを忘れてました。今回の話でルートPは終了です。なんだかほかのルートと話が混同してきた！という人はもう一度ルートPを読み直していただくとわかるかと思います。

ルートP LAST 愛とはなんだ？

ルートPの三

雑草に後ろ髪を引かれつつ、俺はやってきたお客様を迎えるために玄関の前に立つ。相手が押し売りだったり強盗だったらの外れもいいところを選んだものだな。

びんぽーん

「はいはい、今あけますからね」

俺はドアノブに触れた・・・
ぽきっ

「・・・・・・・・」

ドアノブが音を立てて俺の手からすり落ちたのだった。ああ、そういう壊れてたんだったかな？

びんぽーん

チャイムもどこかおかしくなったのか、濁音が混ざってなんだか貧乏な感じがしてきたのだった。まあ、実際のところは貧乏なのでしょうがないな。

「ちよつとそこをどいてください。ドアノブが壊れたのでドアを押しますんで・・・」

片手をドアにつけて俺は思い切りドアを押した。ドアはぎーっと悲鳴をたてながらそのまま倒れたのだった。どうやらここにはもう住めそうに無いな・・・

「あゝドアが壊れたのは気にしないでどうぞ姿を見せて下さ・・・」

俺は固まった。外は吹雪が降っているから寒くて固まった・・・

からではなく・・・

「どなたでしょう？場所を間違えたんじゃないんですか？」

そういわざるおえない相手がいたからだ。その女性はダークスーツを着ており、伊達メガネをしている。一言で言うならやり手の社長といったところだろうか？

その女性はにこりと笑うと俺に手を差し伸べてきた。

「お久しぶりですね？」

「・・・失礼ながら・・・俺の知り合いに残念ながらあなたのような知り合いはいませんか？人違いじゃないんですか？」

「むう、それはありません。あなたの名前は時柱零時でしょう？」
驚いた、いつの間に俺はここまで有名になったのだろうか？

「・・・小学校の頃のお友達でしょうか？」

「違います」

あれ？違うのか・・・

「・・・それなら幼稚園？」

「何でそっちのほうに行くんですか！大体、零時さんはまだ幼稚園の頃の友達を覚えているんですか！」

「・・・花組のときの隣の席の子はラーディッシュ・ブングーレ君だったかなあ？」

「適当に言わないでください！」

ちっ、押し通せると思ったんだが駄目だったか？しかし、この女性是谁だろう？

「・・・パトリシアです。パトリシア・T・ロードウェルです！」

「あゝパトリシアか・・・いや、知ってたよ、うん。俺は初めからお前のことをパトリシアとわかってたよ？ちよっと冗談を言っただけさ」

「・・・その割には冷や汗が出てますけど？」

「こ、これはほら・・・寒いから・・・」

何故寒いのに汗が出るのか知らないが、とりあえず俺の体は特殊なんだ。一般的な人は暑いときに汗をかくけど俺は寒いときに汗が

出るの♪

「ま、いいですけどね……それより、何で家出なんてしたんですか？」

睨むように俺を見てくるパトリシアに俺は

「やっぱりそう来たか……」と思っただった。

俺はパトリシアの卒業式の日、家を出た。お金？お金なんてものは持たずにそのまま所持金でいけるところまで行って山暮らしさ。近所に住んでいる人には黙ってもらって俺は小さくてぼろいアパルト勝手に根城にしているだけだ。勿論、黙ってもらうために色々裏工作もしたもんだ。今の今まで、昔の知り合いに会うことは無かった。

「……ちょっとやることがあつてな。それで、パトリシアはこんな家出した男に何のようだ？見たところできる女社長に見えるんだが？」

「確かにそうですけど……私のことより零時さんのことを先に教えてください！私、ずっとずっと、眠れなかった日もあったんです！あ、そんなに心配そうな顔しなくても今は眠れてますよ？」

あゝそうなんだ。不謹慎だが俺の存在もそんなもんなのね……

「パトリシア、男にもてるようになったのか？」

「それは……あの時と一緒にですよ。何をしようと変わりません」

「そうか……そりゃよかった。せっかく作ったものが無駄にならなくてよかったぜ」

俺は奥の部屋から一つのフラスコを持ってきた。なんだか科学者のような感じだが、大目に見てもらいたい。ちなみにこのフラスコは近くの学校に忍び込んで失敬してきたものだ。

「……これは？」

蛍光ピンクの中身をまじまじと眺めながらパトリシアはたずねてくる。

「……これか？ああ、そういえば俺が家出した理由を教えてなかったな？これを作るためさ……合法でこれを作ることなんて出

来ないし、どこかで作ってたら一発でばれちまう。馬鹿な考えだと思っただが・・・まあ、それを飲めばお前は男にもてるようになるだろうよ。お前のように男にもてない美女に使用したところ効果はあったからな。さ、それをもってここから出たほうがいいぜ？最近じゃ俺のこともばれてるみたいだし・・・」

俺はそういつてパトリシアの背中を押した。ようやく、肩の荷が下りたような気がする。俺は振り返らなかった。

「・・・じゃ、じゃあ・・・あの時約束したことは？」

「・・・さあな？何のことか忘れちゃった」
とたんに背後から泣き声が聞こえてきたのだが、俺は振り返らない。

「・・・わ、私のことを好きだって言ったじゃないですか！」

「・・・言った・・・けど、今の俺に出来ることなんてそれぐらいなんだ。お前に迷惑をかけることなんて俺には出来ないんだよ・・・わかって欲しいなんていわない・・・」

俺はそこまで言って黙った。これから、二度とパトリシアには会わないことにしたからだ。会えば決心はいずれ鈍ってしまうに違いない。

涙をこらえている俺にパトリシアは同じように泣きながら聞いてきた。

「・・・零時さん、この薬って作るの大変なんですよね？」

「ああ、試験的に作ったものもあげちゃったからな、もう作れないんじゃないか・・・」

後ろのほうで何かが割れる音がした。

「・・・」

俺は振り向くのが怖かった。流れていた涙も止まった。

「まさか!」という気持ちがあふれてきた。

「・・・零時さん、私は・・・私はわがままなんです。昔はお嬢様で今は社長です。手に入れたいものはすべて手に入れてきました。が・・・昔と今は違うんです。昔はお金の力で何でも手に入れましたが、それが出来ないことを知ったある日、私は出来る限り努力をして欲しいものを手に入れてきたんです。今だって、そうです。私が欲しいものはこんな葉じゃなくて、あなたなんです。これでも・・・これでも駄目なら私はあなたをあきらめます!」

俺はどうするべきだろうか? この数年間は何のためにあったんだろう? 俺はこの責任を取ってもらおうべく・・・

「・・・パトリシア! お前のせいだぞ! この数年間は何のためにあったんだ?」

恥ずかしい顔を見られたくないので俺はパトリシアの手を一気に掴んだ。

「・・・零時さん?」

「ほら、今からデートに行くぞ! あゝあ、まさかこんなことになるとは思わなかった! ったく、こんなことなら犯罪覚悟で手を出しときゃよかったかな?」

「それって・・・」

「お前は俺の彼女なんだろう? それならさっさと遊びにいくぞ!」

顔を伏せたまま、俺はパトリシアと走り出す・・・

「・・・ちよつと待って、零時さん!」

「?」

立ち止まって俺はパトリシアのほうを見て・・・

「実はね、割ったのは私の鏡なんだ!」

勝ち誇ったような顔のパトリシアに俺は固まった。俺の心を満たしていくものは別の感情だった。

「・・・ほお、先輩をからかったのか・・・別に年上を敬えなんていわないが、そんな嘘をつくなんて・・・」

「あ、そ、そんなに怒らないでほしいんだけど・・・ええと、堅

苦しいって思われてたかなあ〜と思って冗談のわかる女になったんだけど？」

「問答無用じゃ〜！」

チョップを振り落とすとき、パトリシアは目を瞑った。その仕草を可愛いと思ってしまった俺は・・・

「・・・ま、今回はでこぴんで許してやるよ」
かる〜く、でこぴんをしたのだった。

「へ？」

「さ、行くぞ」

俺は再びパトリシアの手をとって歩き出したのだった。

「あゝお詫びの言葉を一言・・・」

「何だ？」

「零時さん、愛してます！」

〜END〜

ルートP LAST 愛とはなんだ？ (後書き)

ルートP、どうだったでしょうか？ルートPの感想をくれるとうれしいです。少々、短かった気がします、あまり長引かせると話がわからなくなってしまうと思って短くしてみました。読者の方にもパトリシアが好きな方がいるようで、うれしいですね。さて、次はルート零のラストを書く予定だったと思います。ルート零が好きだ！という人がいましたら感想などにかいてください。よろしく願います！

ルート零LAST 夢では寂しい 現実は騒がし(前書き)

ルート零はこれで終わりです。着々と終わっていつているルートシリーズ・・・

ルート零 LAST 夢では寂しい 現実は騒がし

ルート零

「……零時君、零時君！」

「……ん？」

目が覚めるとそこは部屋棟だった。既に外は夜になっており、俺以外に残っている人は誰もいないようである。そして、俺を起こしてくれたのはなんだか久しぶりに出てきたような八重先生だった。

「……あいたた……」

「まったく、零時君のお母さんから連絡があってあわてて探していたらまさかこんなところで夢見心地だったなんて……はぁ、何をしているんだか……」

動かぬ頭が八重先生を捕らえて俺の脳みそ内も活発に動き始める。

「……俺、寝ていたんですか？」

「ええ、寝ていたみたいだけど……もしかして、気絶してたとか？」

八重先生は

「誰かに殴られて気絶……？まさか、確かに日ごろの行いが悪いのは知ってるけど誰かしら？本命が生徒会長で次点が彼の妹さん……」と呟いている。

「……あゝ小説がちつとも進んでない……」

先ほどまでかいていた小説は当然のように進んでいなかった。

そして、その小説のおかげで自分が夢の中で瑞樹と小説の話の後に何をしていたのか思い出し……はぁ、俺ってなんて夢を見ているのだろうか？見知らぬ女の子に告白をしようとしてなおかつ、その女の子が自分の許婚なんてなぁ……今年は受験なのにそんなことにうつつをぬかしているほど俺の学力はピラミッドの頂上辺りに到達してはいないはずだ。まだまだ、下のほうだ。

「さ、とりあえずもう帰って。電気の戸締りとかはしておくからさ

あ……」

そういつて先生は俺の頭をくしゃくしゃと撫でると立ち上がって
出入り口のほうへと歩いていった。

先生は電気のスイッチに手をつける。

「ほら、何してるの？帰るわよ？」

「あ、はい！」

俺はあわてて立ち上がると書きかけの小説を乱雑に鞆の中に放り
込んでよだれのあとをぬぐいつつ、外に出たのだった。

ちよつと肌寒いと感じる季節だったのだろうか？とりあえず微妙
に寒気を感じながらも俺は八重先生と共に帰り道を歩いていた。

「夢を見るってことは相当爆睡してたってことね。で、どんな夢を
見てたの？」

「な、なんすか？別に面白い夢なんて見てませんよ。まあ、しいて
言うなら思春期の男が見るような夢です」

そういつて俺は歩を進める。先生は右手をあごに添えてなにやら
考える仕草を見せてにや〜と笑った。

「零時君って以外にスケベだったのねえ〜」

「何か勘違いしていると思いますけど、そういう夢じゃありません。
小説の話でしたよ」

その話をしたら彼女はさらに興味を持ったのか俺に近づいてくる。
「へえ、始まりはどんな感じだった？」

「そうですねえ……瑞樹が俺が主役の小説を書いて、俺はそれ
を読みました。そして、次にその話に出てきていたヒロインと夢
の中で俺の許婚が同じ名前……それについては夢の中の瑞樹が
勝手に設定したんですけどね。一言で言うともめちゃくちゃな夢でし
たよ……まあ、先生のおかげで最後の一言を言わずにすんでほ
つとしています。それについてはお礼を言っておきますよ」

先生は何か考えている。その顔は普段からは考えられないほどに
真剣だった。

「へえ、やっぱり女の子に興味を持ってる年頃なんだ？」

「ま、まあ・・・」

「で、どんな女の子、もしくは女性が好みなの？ん？お姉さんに言ってみて♪」

にこにこしながらそういつてくる先生。なぜだかあせり始めた俺はこほんとせきをして先生に告げる。

「あゝそういえば今日は僕の一番大好きなロボットが出るアニメがある日でした。」

「何？どうせガンダ○でしょ？」

「いいえ、違いますよ」

「それなら、何？エヴ○じゃないし、マジン○ー？いやいや、マク○ス？ううん、もしかして、ロボ○ン？」

「いいえ、違いますよ」

俺は先生の手をとって走り始めた。先生の家は俺の家の隣だからだ。

「ドラ○もんです！」

家に帰りつくときれまた久しぶりに見る感じの雅がたっていた。

「お帰りなさい♪」

「あれ？兄さんは？」

「仕事に行ったよ。今日は代わりに私が作ったんだ。たぁんと召し上げれ♪」

そのままキッチンに連れて行かれてアニメを見ることがままならずにさまざまな料理が前に出されていく。

「・・・珍しいな？こんなに作るなんてさあ？」

「ふふふ、いいじゃん♪大好きな兄さんにはおいしいものを食べてもらいたいからね」

にこにこしてそういつているので何か裏がありそうで怖いのだが・・・いや、ここで怖がっているはいけない、直接本人に聞いてみれば大丈夫だろう。

「・・・雅、ちょっと聞きたいんだが・・・」

「何？ すり～さいず？」

「いや、もしかしてこの料理の中に毒とか盛ってないだろうな？」

「盛ってない盛ってない！ 兄さんは私を何だと思ってるの？ 正義の味方だよ！ 正義の味方はそんなことしないし、相手を倒すときはきちんと正攻法で拳で叩きのめすの！ でも、たとえ兄さんが悪の組織の親玉になっても大丈夫！ 私が愛の力で正義の道へ連れて行くから！ あのさあ、聞いて聞いて！ この前私ね、村雨し・・・なんとかって悪の組織の親玉を倒したんだよ！ え？ どうやって倒したかって・・・（以下略）」

さて、この食事を平らげるのに何十分要するだろうかと思ひながら話半分、箸を動かすのに半分と意識を使っていた。

そこへ、誰か客が来たようでチャイムが鳴り響く。

「あ、はい！」

「待って、兄さんは愛妻料理を食べて構わないからね。私が代わりに行ってくるよ。じゃ、行ってきます！」

何故か敬礼のポーズをとって玄関へと向かっていった。

「まあ、雅の料理ってまずいと思ってたんだが意外にうまいもんなんだなあ・・・」

しみじみそう思いながらも箸を動かしていると雅が戻ってきた。

「誰だった？」

「いや、人違いだったよ。私と兄さんのひと時を邪魔するような奴なんて一人もいなかったよ」

俺は雅の足元をふと見たのだが・・・

「じゃ、邪魔するのかなんですか！」

「そうだぞ、私たちはただ単に遊びに來ただけだ」

右足にルナをひっつけ、左足にソルが引っ付いていた。

「・・・何してんだ？」

「くっ、零時様・・・お見苦しいところを見せて申し訳ありませんが、私たちをのけ者にしようとする雅様にばれないように潜入し

ているのです」

「いや、それ普通にばれるだろう？」

「なんの私らは新開発のステルス機能があるのだ！」

ステルス機能なんて関係ないだろう。ばれないようにもぐりこんだ割には背中に花瓶と電話帳をつけているだけなのだが・・・これがステルス機能だろうか？まだ風呂敷を背負っていたほうがばれないのでは？

「兄さん、誰と話してるの？」

「おいおい、気がついてないのかよ・・・」

「？」

どうやらステルス機能は雅にみごとに効いているらしい。そして、雅が座ったところで背中のステルス機能ははずして（ステルス機能だけに用が済んだら捨てるっす！）ルナとソルが立ち上がる。

「あ、あなたたち・・・いつの間に!？」

雅は驚いて椅子から立ち上がる。

「俺の義妹は馬鹿だろうか？」

「ふふふ、雅様・・・私たちに潜入を許しましたね？」

「どうだ？新開発のステルス機能！」

「足が重いと思っていたら引っ付いていたのね！」

気づくのがおせえよ。いや、既に何もかもがおせえよ！

「く、兄さんは渡さないわ！」

「何のことかわかりませんが、私たちと零時様は遊ぶのです！」

「おう、夢の中まできてくれる仲だからな！」

「な、何ですって！だけど、私の夢の中での兄さんは・・・」

「何言うんです！私たちの夢の中での零時様は本物ですよ！さらに・・・」

「わたしだってなあ・・・」

くだらない自慢大会が始まったので俺は食器を水につけると二階へと上がる。

「お帰り、零時君」

「のわっ！」

部屋の暗がりにはこれまた久しぶりに見る気がする瑞樹の姉、瑞実がこっちを見ていた。

「あゝただいま……ってなんでこんなところにいるの!？」

「趣味」

「趣味!？何の趣味なんだあ！」

「まあまあ、姉さんも疲れて帰ってきているんだよ。僕だって疲れ
ているんだ」

「瑞樹!お前まで……」

「そうですねよ、零時さん。汚らしい部屋を片付けている私は静かな場所を好むのです」

「パトリシア……お前もか？」

俺に彼女なんて出来ないだろう。

いや、これから先にもしかしたら出来るかもしれないのだが、まだ、こんなろくでなしがたくさんいれば寂しいって思わなくていいのかもしれない。きっと、夢では瑞樹と吉希以外登場していなかった……寂しかったのは夢の中の俺。寂しいとは思っていないのは現実の俺さ。だから、俺はこれからこの人物たちと歩いていきたいと思う。そこが、どんなに荒地であつたとしても……だ。

＼ルート零 END＼

ルート零LAST 夢では寂しい 現実は騒がし（後書き）

ルートシリーズが終わっていくことにちょっとでも哀愁を感じる方、ご連絡下さい。いえ、別に何かできるわけでもありませんけどね。すみません、役立たずで・・・さて、自虐しているならさっさと続きを書いたほうがよさそうですが、今回のルート零ではできるだけ多くのキャラクターを登場させたかったと思っていました。話がわかんなくなるかたもいるかもしれませんが、夢の中の零時は寂しいと感じていたのですが、改めて一緒にいてくれた友人や新たにできた友人とこれからも仲良くやって行きたいという誰もがもっているであろう夢を持っています。名前だけとなった吉希は見事に零時の心の寂しさを具現化できた人物だと思っています。さて、八重先生の零時への呼び方が代わっていたことに気がついた方はいたでしょうか？これも変化していく日常を表したつもりです。なんだかあつというまだったきがしますが、これにてルート零は終わりです。

ルートRその四、俺は零時、奴はゼロ（前書き）

ルートR第四話です。ちなみに、ルートRの物語自体はこれです。
んど終了です。

ルートRその四、俺は零時、奴はゼロ

四、

「・・・零時様、下がってください」

「おいおい、こんな街中でぶっばなすのかよ？ 周りの人のことも考えろよ！」

そういったのは俺ではないのだが、メルナは動きを止めて銃をおろす。あたりの人たちは

「魔獣が暴れだしたぞ！」

「警察を呼べ！」

と口々に言っている。

メルナの動きを物理的にではなく、心情で止めた相手は俺に手招きをした。

「わりいが、ここじゃ他の人に迷惑がかかる！ ほら、早くこっちに来い！ このままじゃ、お前もお前さんのあの大切にしている奴も捕まっちゃうぞ！」

「わかった！」

その声に聞き覚えがあった気がする俺は言われたとおりに走り出す。

「零時様！」

メルナも当然俺を追いかけてくる。

「なぜ、こんなことになったんだ？」

首をかしげる俺にローザと共に先陣を切って走り続ける男は首をすくめたのだった。

「さあね？ 俺はなにも悪いことをしてないんだけどなあ・・・」

話は数時間前にさかのぼる。

「零時様、今日はとてもいいお天気ですよ？ これはもう散歩をするしかありません！」

拳を握り締めてそう力説するメルナに俺は手を振って答える。

「いって、久しぶりにこうやって家でごろごろできるんだから・
・それに、これからまた勉強しないといけないだろ？俺、忘れられてるけど受験生だよ？一応大学行きたいとおもってんだからさあ・
・呼び方だってマスターから零時様になってるし・・・」

「いいじゃないですか！呼び方なんて・・私たちの仲ですし！零時様はこのところずっと引きこもっていたはずですので、そろそろ天日干ししなくては腐ってしまいます！現に、私のレーダーによりまずとあと数時間家の中に閉じこもっていれば体内に謎のきのこが発生するようです。既に、そのきのこの胞子が引っ付いている模様です」

「何だよ、それは？というより、それってでっち上げだろ？捏造なんだろ？」

俺がそういつて再びごろりと横になると今日のメルナはさらに食いついてきた。

「・・・私が嘘を言うような機械でしたか？」

「・・・いや、そういう子じゃないな・・・」

「・・・この前の問題の回答も間違っていたはずですけど？」

「・・・そうだな、あれは先生に見せたら完璧だって言われたし・・・」

「それで、これが最近発見された新種のきのこなのですが・・・
「さあ、散歩に行こうか？人間、家の中にいたらなんだか大変なことになってしまう気がするからな・・・」

俺はメルナを引き連れて散歩に出たのだ。そう、そこまでは間違いではなかったのだが・・街中でローザをメルナが発見したのが間違いだったのだ。そして、いつものように暴れ始め・・・そこへ、黒いフードを被った一人の男が現れた。俺より数センチほど身長が高かった。

「お、ローザ・・それがルナか？」

「あゝマスター！出てきちゃ駄目って言ったじゃないですか！」

「はあ？何言ってるんだ？出るもの出したらさっさと出ないと、ここは俺たちの家じゃないんだぞ？さっきだっておっさんが俺が出たらすぐにトイレに向かってっただぞ？俺が出てなかったらあのおじさんは間違いなく大人として間違いを起こすところだったんだ！」

そうやって俺のほうから顔が見えない立ち居地で彼は勝手にしゃべっていた。そして、メルナはローザのマスターを見つけるとそちらのほうに攻撃に入ったのだ……

とまあ、そうやって今に至っている。

「まあ、ここまで来ればいいだろう」

男は立ち止まって俺たち二人を見る。

「まあ、俺も数年前はこんなもんだったのかなあ？」

「記録にあるマスターの身長よりも数センチ、高いようです。あちらのほうがマスターよりもよい食事をしていたのでしょう」

「うるせえよ。一時期はほら、ダイエットって奴にはまってたんだ。雑草ダイエットだったか？あれだよあれ」

「いいわけですね。一時期はダイエットではなくて仕事に困っていたと思いますよ？」

「……とりあえず、こんなことしてたら意味がねえ……」

男はそういつて黒いフードを剥ぎ取った。

「……！」

「ほら、マスター……二人とも驚いてますよ？今更そんな面、相手も見飽きてるんじゃないんですか？」

見飽きてるも何も、その顔は……

「れ、零時様……零時様には……」

「な、何だ？」

「双子の兄がいたのですか？」

「さあな？それなら今、初めて知ったぜ？」

俺たちの目の前には不適に唇をゆがめている俺の姿があった。

「あゝこっから面倒だから俺のことはゼロって呼んでくれ。そっち

のほうがわかるだろ？」

「あ、ああ・・・」

男はそういつてにかりと笑う。

「こらこら、約束どおりたえモノログといえど、きちんとゼロって呼ばないと駄目だぞ？俺だって本名名乗りたいんだけどさあ、ほら、これはお前の物語ってことで・・・わかった？」

ゼロは再び笑ってそういった。

「そうそう、それでいいの」

「・・・マスター、それより零時さんに話したいことがあったんじゃないんですか？」

こほんとせきをしてローザがそんなことを言う。それについて思いついたのか彼は手をぼんとうって俺のほうを見る。

「そうだった！零時、悪いがお前の近くに・・・家とかないか？」
「家？」

俺は首を傾げるしかなかった。

「話しても信じてくれるかどうかは知らないが、俺はこの世界の人間じゃないんだ。まあ、ローザに至っては知っての通り、人間でもないんだが・・・この世界に住んでてわかったんだが、この世界では魔法は受け入れられているわけだし・・・その、なんだ、俺たちはこの世界を別に嫌ってはいないんだが別れの挨拶をし忘れた連中が結構いるんだ。だからさ、色々やって元の世界に戻ろうとがんばったんだが・・・ちよつとだけ時間が足りなかったみたいなんだよ。その間、俺たちはこっちで住んでた場所を追われちまってよお、代わりに場所を探してるわけだ。どうだ？こっちの世界じゃ、俺らは戸籍なんてないもんだから苦労するの何の・・・」

そういつてやれやれこまったねと呟くゼロ。

「でも、この前ローザが言ってたことは・・・？」

「ああ？あれ？あれはまあ、あってるんだけど、とりあえずエネルギーを溜めるって目的だったんだ。そこにいる・・・ルナだったかな？それに暴れてもらってローザの持ってるエネルギー吸収装置

を元に戻るために必要な機械に与えてたぐらいだな。このまえ屋上でも俺たちあったでしょ？ いやあ、あの後ものすごくローザにしかられたんだよねえ」

やれやれ・・・さて、これからどうしようか？

「メルナ、どうしようか？」

「・・・零時様に敵対するものはすべて敵です」

「いや、そりゃまあ・・・俺に敵対するものはすべて文字通り敵だろうよ？メルナ、何を言って・・・」

その言葉をさえぎってメルナは続ける。

「・・・ですが、例外として零時様が敵対する相手でも手を貸すというのなら私はそれに従います。背負うべき主君の友達が増えただけです」

そういつていつの間にか構えていた銃をおろす。

「よかったなあ、ローザ。これで平和に話が進みそうだぞ？」

「そうですね、これで一安心ですよ♪」

そういつて笑っているのだが・・・

「まことに申し訳ないんだが、俺が知ってる物件なんて・・・ないぞ？」

そう伝えたと彼らはあからさまに落胆したような表情になった。

「マスター、これで私たちはまた根無し草ですね？」

「なあに、またガムテープとダンボールで家を立て直せばいいさ・・・この前の突風で家が壊されたがな・・・」

そういつて二人して肩を落としている。

「色々と迷惑掛けたな・・・あの爺さんに『ごめんなさい』って伝えておいてくれ」

「待ってください！」

去ろうとした二人を止める。

「・・・私の家に来て構いません」

「メルナ？そんなことしたらソルだって黙ってないんじゃない？・・・？」

「構いません！私は零時様そばに一生仕えますから！」

「ひゅー零時の彼女はすごいねえ」

「マスター、あれが“らぶらぶ”って奴ですね？」

いつの間にかうれしそうな顔でこっちを見てきている二人組・・・
「住所どこ？後は俺らが何とかするからさ・・・」

ゼロとローザはメルナから住所を聞き出すとあっさりと消え去ったのだった。

「メルナ・・・」

「はは、勝手に私は何を言ってるんでしょうね？」

そういつてその場に崩れ落ちるメルナ。彼女は涙を流していた・・・

「所詮は主人の言うことを聞くための機械なのに、何を勝手なことを・・・」

「既に涙を流してる時点で機械じゃないと思うけどな・・・さ、さっさとたつて帰るぞ。散歩ももういいだろう？充分歩いたし、走ったりもしたからな・・・」

メルナをたたせて二人して歩き始める。

「・・・私、駄目ですね？時雨様を背負ってすべてをこなさないといけないのに先走っていつも零時様に背負われています」

「あゝ俺はメルナなんて背負ってねえよ。メルナ、お前も見たら？さっきの二人。あの人たちは支えあってる。背負って背負われてをずっと経験してきた仲じゃないのか？」

黙りこんでしまったメルナを見ることなく、俺は一方的に続ける。
「一生一緒にいてくれるんだろ？そんなら、支えあって生きていく・・・あの二人のように俺たちもなれないかな？」

俺は前だけを見ていた。

「・・・は、はい・・・ですが、私は機械です。機械は人じゃありません・・・これから先、私のようなものを背負っていても思っただけかもしれません。私は私を制御できないことだってあるかもしれません・・・」

「いや、メルナならできるさ・・・お前、前に言ってたろ？『ゼロ

を倒すようにプログラムされてる』ってさ？ だけど、今回は見事に制御できてたじゃねえか？」

「それは・・・零時様がしてくれたからです」

「そうだろ？ だから俺がずっとお前の隣にいればお前は自分を制御できるのなら・・・俺はずっとお前の隣にいてやろうじゃねえか？ ま、今日は俺がお前を支えてやってる立場だけど・・・」

あゝあ、こんなのは照れくさくていけねえや。

「・・・今度は俺を支えてくれよ？」

「・・・はいっ!!」

俺はしがみついてきているメルナを引きずるようにして家に帰ったのだった。

ルートRその四、俺は零時、奴はゼロ（後書き）

さて、どうだったでしょうか？もはやゲストと化している以前の零時・・・まあ、彼の物語ではないですからね。今回はこの御注文は？が何故、途中で主人公交代などがあるのか・・・いや、何故、話自体が変わっているのか伝えておきたいと思います。これは別に作者の思い付きではなく、もともと決まっていたことなのです。そうした理由は、最後に持ってくる話に繋ぎたいとおもっているからです。さて、次回でこのルートRも終了してしまいますが、嘆かないでくださいね？いや、嘆く人なんていないと思いますが・・・とりあえず、第三部は短編の零時を主人公にしたいと今のところ思っています。それでは、皆さんまた今度！

ルーツ LAST ある日の夕食（前書き）

これにて、ルーツS終了です。ルーツSをごらんの方、ありがとうございました。

ルートS LAST ある日の夕食

四、

「零時、夕食が出来たぞ」

「へーい」

ソルが俺を呼びにやってくる。今ではすっかりエプロン姿も板についてきている。

「今日は魚だ」

「・・・・・・・・いらね」

それが見た目だけではなく、ソルの料理の腕前はコックさん並なのである。

「む、私が作ったものが食えないと？味は保障するぞ？」

「・・・・・・・・いや、それは知ってるんだが・・・・・・・・というより、俺の嫌いなものぐらい知ってるだろ？」

俺がそういうとソルはにやりと笑いながら料理をわざわざ俺の元へと持ってきてくれる。

「ああ、知ってるさ。私が何年零時と一緒にいると思うんだ？それこそ、知らないものなんてないぞ？」

「ま、まあ・・・・・・・・お互い様なんだろうけどよ・・・・・・・・でも、魚なんてぜってえ、くわねえ！」

俺が魚を隣の第三の席に魚をよこす。

「「ただいま」」

「ほら、帰ってきちまったぞ。零時、親父として子供の前では苦手なものも食べるべきじゃないのか？」

「く・・・それが狙いか・・・」

俺たちのところへ、泥だらけになって一人の男の子と一人の女の子がやってくる。

「ソル、先にこいつら風呂に入れたほうがいいんじゃないか？」

「そうだなあ・・・よし、お前ら父ちゃんと風呂にはいつて来い！」

「「はーい」」

子供たちは先に風呂場へと向かう。

「零時、可愛いもんだな」

「そうだな、誰に似たんだろうか・・・まず、ソルじゃないだろうがな。きつと、あのけなげなところは大部分が俺に似たんだろうな」

ソルはちよつと考えて呟いた。

「・・・そうか？」

「おいおい、冗談だ。あいつらの素直なところはお前に似たんだよ。素直でいい子・・・これからが楽しみじゃないか？」

俺はソルの肩に手を回してそう呟いた。

「・・・手を回すのは構わないけどその裏で魚を子供たちの皿に入れるのはやめてくれよ？」

「・・・了解、俺は今後魚をきちんと食べますんで・・・」

「お父さん、まだ？」

「おうっ、今行く!」

俺はソルに右手を上げてその場を後にしたのだった。

俺は今……いや、隣にソルがいたときから幸せだったのだらう。

〔END〕

ルートS LAST ある日の夕食（後書き）

さてさて、どうだったでしょうか？若干少なめな感じだったと思いますが綺麗におえることが出来たと自負しています。さて、次回はルートシリーズ最後の最後・・・ルートRの最後の話です。

ルートR LAST 遊園地の観覧車は二人の空間（前書き）

ルートR最終話です。これで、すべてのルートシリーズが終わってしまいました・・・次回からどのようなようになるかはあとがきのほうにかいておきます。

ルートR LAST 遊園地の観覧車は二人の空間

五、

空というものについて、考えたことはないだろうか？俺はある。

それは小学校低学年ほどのことであり、そのとき、俺は鳥になることを夢見ていた。

そう、それは大空に飛ばたいという願望を持った一人の男の子の物語だった。そして、それを実行するために家の二階から飛び降りて・・・骨折して入院したのだ。それ以後、俺は世の中には出来ないことがあるということを知った。さらに、おまけとしてはまことに信じがたいことに・・・高いところが苦手になってしまった。「やだ！絶対にあんなのに乗ったら死ぬ！落ちる！墮ちる！墜ちる！」

「大丈夫ですって！そうそうすぐに墮ちるもんじゃありませんよ！零時様！」

俺は今、メルナと一緒に二人で遊園地に来ている。そして、午前中は二人でまったりとした雰囲気の中、色々な乗り物に乗ってメルナ特製のお弁当を一膳の箸で食べさせてもらい、午後になると・・・俺専用の地獄が待っていた。

ジェットコースターに乗ろうとメルナが言い出したため、俺は実力で近くのベンチにしがみついているのである。

「あれ、怖いって！落ちるような雰囲気わうもん！死ぬ！」

しかし、悲しいかな・・・機械のメルナには勝てそうにもなく、あっという間に引き剥がされてしまった。

「さ、行きましょう♪」

「・・・・・・・・」

青い顔のまま、俺はメルナに引きずられながら心の中で極楽浄土の片道切符を買うために並ぶことにしたのだった。

ぎやあああああああああああ！

「どうです？意外と楽しかったでしょう？」

そうやって尋ねてくるメルナの表情はともうれしそうだ。青空によく映えて可愛いものだなあ・・・そういう俺も

「・・・メルナ、俺の顔がどんな色しているかわかるか？」

「・・・真っ青です。そんなに怖かったんですか？」

今の俺なら太陽輝くこの青空と対等の関係を保つことが出来そう
だ。

「・・・あゝ小学校の頃に聞いた怪談話であつたような感じになつちまった・・・メルナ、次は絶叫系はやめよう？次乗ったら俺間違はなく体中の血が青色になっちまう・・・」

「そうですねえゝそれなら、零時様・・・観覧車ならば大丈夫でしょう？」

「いや、根本的に俺は高いところがだめだって言っているんだけどね♪」

「それなら、善は急げですね！」

この子は人の話を聞いているのだろうか・・・そう思いながら、俺は再びメルナに連れて行かれたのだった。

観覧車の中、当然、俺とメルナだけとなってしまう。俺はだんだんと上にあがっていく観覧車の中で小さな子供のように縮こまって震えていた。

「・・・零時さん、今日の朝のニュース見ました？」

「・・・いや、見てないけど・・・それがどうかしたのか？」

「実はですね、この遊園地の観覧車が整備不良だって内部告発があ

ったそうなんですよ？今日でここ、その疑惑を否定するために閉まるそうです」

彼女は話題づくりのためにそんなことを言ったのだろうか・・・

「・・・メルナ、ここ、これ、堕ちないよな？」

「ええ、堕ちないと思いますよ？」

「・・・さらに不安になってきた。ああ、俺の日ごろの行いが悪いのですか？神様、俺が何か悪いことをしましたか？」

夜空を見上げてそんなことを呟きながら俺はメルナと向かい合って座っていたのだが、不安で不安でその場に立ち上がってうろうろし始めた。その所為かどうか知らないが、急に観覧車が揺れ始める。俺はあわてて先ほどの席に座って固まった。

「・・・なんかゆれてないか？風が出てきてるみたいなんだが・・・」

「そういえば、お昼から暴風警報が出てませんでした？」

「・・・あ、そうだったな・・・」

「・・・最悪ですね」

メルナは移動して俺のほうにやってきた。そして、俺の手を握る。
「・・・へへっ、これで安心しましたか？」

「あ、ああ・・・」

と俺がいったところで俺たちのほうを下にして、観覧車のゴンドラが思い切り傾く。

「・・・メルナ、今から戻るか？」

「・・・はい、戻ります。どうしたんでしょう？」

メルナが這うようにして先ほどまで自分が座っていた場所に座ると、ゴンドラは安定したのかどうかよくわからんが・・・再び、重量が均一にされたのだろう・・・傾くことなく、普通になった。

「なあ、今から地上まで何分かかると思う？」

「ええと、あと・・・五分ぐらいでしょうか？」

五分か・・・普段はあっという間に過ぎ去る時間だと思うのだが、今日は格段に長く感じられるな・・・

「メルナ、死ぬ前にお前に伝えたいことがある……」

「まだ死ぬとは決まっていますよ！望みを捨てないでください！零時様らしくもありませんよ！」

「……そうだな、俺らしくない……って、俺は魔法使いだった！こんなことぐらい、空とびゃ、一発じゃんか？」

何が一発なのかわからんが、とりあえず今から外に出れば……

「あゝ零時様？」

「どうした？」

メルナは窓から飛び出ようとしている俺を制して再び座るように促す。

「……あのですね、もうちょっと一緒に座ってませんか？」

「おいおい、このままいたら間違はなく一緒にべちゃってなるぜ？まるで上空に放り投げたトマトよりも悲惨な結果になることは目に見えてわかってると思うんだが？」

物好きもいいところだと思いつながらも、俺は席に座る。

「ありがとうございます♪」

「いいよ、それよりなんか話でもするか？」

別に今じゃなくても話せる時間はたくさんあるのだが、しんみりとした空気がそこには漂っていた。

「……零時様、私といて楽しいですか？」

そろそろ地上が迫ってきているってところでメルナはそんなことを尋ねてくる。

「あ？何言ってるんだよ……そりゃ、楽しいぞ？」

「そうですか……私も楽しいです。ですが、それ以前に私は零時様が楽しんでおられるかどうかのほうが大切なんです。あなたが楽しいと思えば私も楽しい。逆にあなたが楽しくないと思っておられないのなら私は楽しくない……ここ最近、私はその事ばかりを考えていて仕事にミスしても気がつかない日もありました。これは私としては非常にいけないことだと自覚しています」

「・・・そうか、まあ、そこまで思ってくれてるのなら俺はうれしいぞ?」

「ええ、私もそのように零時様が思ってくれているのなら、いいんです・・・あの、零時様、零時様は・・・いえ、何でもありません。もう、地上ですからね・・・」

ゴンドラは無事に地上へと向かっていく。俺はメルナのほうを見ながら彼女に質問する。

「・・・メルナ、俺は何だっけ?」

「・・・魔法使い・・・ですか?」

「そうだ、だが、それだけじゃないんだ・・・俺はなあ・・・」

俺は右手を掲げ、それを振り下ろす。

「・・・お前の恋人だ!」

俺たちが乗っていたゴンドラは頂上まで戻っていった。気がついてみれば、他の乗客なんていやしない。皆この観覧車が危険であると早々に判断していたようだ。

「ほら、これでまだまだ地上にはたどり着かんぞ?メルナ、お前の言いたいことを言ったら俺はゴンドラから降りることにする」

そういうとメルナは目をぱちくりしたのだが不意に優しい顔になった。

「・・・零時様・・・私は・・・私は・・・」

彼女は目に涙をため、俺に飛びついてきた。

「のわっ!!」

「私も、私もあなたのことが大好きです!」

俺は言わなかっただろうか?彼女と俺の体重が均等になっているのか知らないが、それのおかげでうまくゴンドラが傾かないようになっていたということを・・・

「メルナ、俺たち新聞に載ってるぜ？」

「そのようですね・・・」

俺は今、病院のベッドの上にいる。メルナも隣でどこか、壊れたところがないかメンテナンスを受けていた。

「まったくよう、もうちょっと早めに魔法を使っとけばよかった」

「すみません、私の所為で零時様に怪我をさせてしまっ・・・」

「気にするな、メルナのおかげで俺は遊園地をつぶせるほどの力を所持していたことがわかったからなあ・・・」

遊園地は見事に閉鎖。まあ、俺がつぶしたわけでもないんだがなあ・・・

「メルナ、今度は他の遊園地にデートに行くか？」

「はいっ！そうですね！」

「今度、観覧車が壊れたら俺を支えてくれよ？」

「勿論です！」

俺は隣にやってきたメルナの微笑みかけてそれに答えるようにメルナは笑ってくれた。

俺たちは支えあうしかないな・・・と俺は思いながらも

「いや、やっぱり二度と観覧車には乗らないようにするか？」と思っただった。

（END）

ルートR LAST 遊園地の観覧車は二人の空間（後書き）

本当にルートシリーズ終わりましたねえー思えば更新スピードがめちゃめちゃでおかしいところもありながらも、なんとかここまでやってこれたと思っています。これもひとしおに読者の皆さんのおかげですね・・・じゃ、次からは本編なんかとはまったく関係のない話をしていきたいと思っています。それまでに何か皆様からご要望などがありましたそれをテーマにして書きたいと思います。ちなみに、予定では短編のキャラを少し使ってまた物語を作って終わりにしようかと思っています。それでは皆さん、ルートシリーズご愛読ありがとうございます！第一部よりもおもしろかったなどという感想を抱いている方はご感想よろしくお願いします！

零時・ア・カズキン（前書き）

さて、今回からちょっとした間だけ話は番外編的なものになっていく予定です。今回のお題は「赤頭巾」。話あんまりしりませんが、そこは無理やり進めていききたいと思います！

零時・ア・カズキン

赤頭巾

昔々、あるところに赤頭巾がいました。

「あゝおいおい、俺が赤頭巾か？何？名前設定は『零時・ア・カズキン』？そりゃ、怪しい外国人かなんかじゃないのか？」

赤頭巾は今日、おばあちゃんのお家に行くことになっていました。病院から退院したお祝いということになっているのです。

「零時様、今日はおばあちゃんにこれをもつていってもらえます？」
「あゝメルナがお母さん役か・・・それなら、ばあちゃんはさしずめ、ソルってところか？ちなみに何を・・・オイル！？オイルと電池！？しかも充電できる新型だよ・・・それと充電器・・・あ、きちんとワインもあるが・・・十本？どうやって持っていくんだ？」

中にはワインとおばあちゃんが大好きなチェリーパイが入っていました。

「おゝい、はいっているのは鉄板だけだぞ、メルナ？」

「え、あゝ現地調達でお願いしますね？」

「現地調達！？悪いが俺はチェリーパイなんて作ったこと無いぞ？」

「ほら、そこはもうノリでなんとか・・・」

「そうだな、チェリーをのつけて焼けばそれがすべてチェリーパイだ。失敗したってこげたってモザイク掛けられてもそれはチェリーパイ以外の何者でもないからな」

赤頭巾は元気に自分の家を出たのでした。

「気をつけていくのよ」

「おいおい、リヤカーでいくのかよ……何時間かかるんだ？」

森には危険がいっぱいあると、赤頭巾は幼いながらもとても利口でいい子でした。

「へえ、へえ……既に疲れたんだが？リヤカーで押していくのは利口な考えなのだろうか？そのところ、ナレーターさんに漠然とした不安を抱くぞ？まあ、こんな否定的な態度とってたら物語をまじめに進行させないんだろうがよ……」

ちなみに、利口といってもずるがしこいほうで、幼い頃から博打に火遊び、責任を問われても他人にその責任を擦り付けられていました。そして、そのはめられて怒られる他人を見てにやりと笑うその姿を『返り血を浴びた獣』に例えられて『赤頭巾』という名前で通るようになったのでした。

「おいおい、めっちゃ機嫌損ねてるな……もう、俺の知ってる赤頭巾ちゃんじゃねえよ。それ、ただの悪い少女じゃん？大体俺、男だし……」

さて、暗い森の中を歩いていく赤頭巾の右斜め四十五度、地上から百七十センチほど離れたところに二つの眼を持つ銀色に輝く毛を持った素っ裸の狼さんが現れました。それはもう、もじやもじやですごいのです！

「おいおい！そんなに詳しく言わんで言いし、狼さんが服着てたら逆に文明人だと思っちゃまうよ！それにもじやもじやなのは当然だろ？毛を全部そられた狼出てきても別にこわくねえよ！」

「やあゝそられて出てきても構わなかったんだがね♪」

「やっぱ、狼は瑞樹だったか・・・」

「そってくれるのなら女の子がいいなあ♪そのとき僕はオオカミになりましょう♪」

「いや、そんなことを言わんでいいから・・・もうちょい、まじめにやってくれよ・・・大体、ここで狼さんは出らんだろ？」

「あ、そうだった・・・ごめん、間違えた」

狼さんは赤頭巾ちゃんをみておいしそうに見えたのでずるがしこいことを考えた狼さんは彼女が目指すおばあちゃんの家に先回りすることにしました。

「いや、正直言ってあの赤頭巾ちゃんはおいしくないどころか、どぶに捨てたほうがいいと思うね・・・おっと、おばあちゃんはやっぱソルちゃんか・・・」

「む、私が赤頭巾になって皆のものから称えられるヒーローになれたかった・・・」

「いや、赤頭巾ちゃんを目指したかったの？別にあの子は食べられるだけだし・・・通りすがりのおっさんが倒したんじゃないかなかったですっけ？」

狼さんは見事におばあちゃんを腹の中に納めると自らがベッドの中に忍び込んで赤頭巾ちゃんがやってくるのを待ちました。

「ほら、早くしないと零時がきちゃうよ！」

「おいおい、俺もうついちまったぞ？どうすんだよ？」

「しょうがない、ソルちゃんは脇にどいてて。食べられたことにするから・・・」

「あれ？おばあちゃんって確か一番出番少ないな・・・私の出番はもう無いかも・・・」

赤頭巾はベッドに寝ているおばあちゃんに近づいて尋ねました。

「あり？なんて尋ねるんだったっけ？」

「あゝそりゃ、あれだよ・・・確か、『何でそんなに耳がとんがっているの？』っていうんじゃないか？」

「まあ、それでいいや。それでいいこう！おばあちゃん、なんでそんなに耳がとんがっているの？」

「・・・それはね、獣耳をつけているからだよ・・・これをつけることによって十人に最低一人は萌えるからだよ・・・」

「おいおい、そんな理由かよ・・・いまさら年増のばあさんに萌えてどうすんだよ・・・」

「む！私とその獣耳とやらをつけたら絶対に零時に鼻血を出させてやろう！」

「ソル、お前は食われたことになってんだからな？」

おばあちゃんとなった狼さんはもっとこちに来るように言いました。その低くてしゃがれた声を聞いた赤頭巾はびくりしたので尋ねました。

「・・・まあ、おばあちゃん！何でそんなに低くてしゃがれた声なの！？」

「そんなに低いかい？僕としては零時より声高いし、女性が歌っているアニソンだってカラオケって素で結構いい点取れるよ？」

「話すすすまねえよ！そういうことにしといてくれよ！」

「わかったよ、これはねえ・・・赤頭巾に恐怖を与える・・・冗談、冗談だからそのワインボトルを上にかかげないでくれ！ええと、この声は・・・風邪をひいているからだよ？」

さらに近づいた赤頭巾は布団のしたから突き出ている大きな口を

見て驚き、おばあちゃんに尋ねました。

「お、おばあちゃん！何でそんなに口が大きいの！？」

「それはね、ええと・・・実はおばあちゃんはワニさんだったんだ。あ、口が大きい理由だったね・・・あ、狼だった・・・まあ、いいや。それはね、お前を頭から飲み込むためさ♪一口でがぶりといくぜ♪」

「なんだかすげえ、陽気な狼だな・・・」

赤頭巾ちゃんが目を見開いたときに広がったのは狼さんの大きな口で、彼女は丸呑みにされたのでした。

「いや、正直無理だからね」

「わかってるって、俺はお前に食われたってことにしといてくれ・・・ところでお前、さっき口あけたときに虫歯があったぞ？」

「え？まじ？今度歯科医にいつてこようかな・・・」

狼さんは眠くなってそのまま眠ってしまいました。

「さて、グッドナイト・・・おなかかいっぱいだ・・・」

「可愛そうに・・・何も食べてないのに食べただなんてな・・・とうとう瑞樹もおかしくなったか・・・」

「そうだな、可愛そうに・・・」

「そこ、まじめに僕がやろうとしているんだから邪魔しないでよ！」

場所は変わって、赤頭巾の家・・・あまりにも帰りが遅い赤頭巾にお母さんは心配していました。

「零時様ったら・・・こほん、違った、赤頭巾ったら・・・また朝帰りかしら？」

「いや、そういう赤頭巾もいないと思うけどね・・・メルナさん、あまりにも兄さんの帰りが遅いので見に行きましよう！」

赤頭巾の家には知り合いの漁師がきていたので一緒に様子を見に行くことにしました。

「惜しい！漢字が違う！本当は獵師！網で狼捕らえて大漁っていうの？」

「雅さん、そんなこと言ったらまたナレーターさんが暴走しますよ・・・」

漁師とお母さんはおばあさんの家へと向かいました。

「どうやらこのまま通すみただね？」

「そうみたいですわ・・・大丈夫なんでしょうか？」

そして、おばあちゃんの家のベッドで寝ている狼さんを見つけたのでした。

「ありゃ？寝てないし、兄さんたち枕投げしてるよ・・・」

「まったく、めちゃくちゃにする気ですか？」

「いや、既にめちゃくちゃだよ・・・」

漁師は寝ている狼を網で捕らえました。

「あ、メルナに雅・・・おい、狼・・・さっさと寝ろよ？」

「そっちがやろうって言ってたくせに・・・」

「ところで・・・なんで漁師なんだ？獵師だろ？」

「いいんだよ・・・さ、狼を捕まえたぞ！大漁じゃあ！」

「・・・これでいいのだろうか？」

捕らえられた狼は外につるされました。

「さて、腹を裂くか・・・」

「裂いても飲み込んだはずの二人はそこにいるけどね・・・」

「まず、飲み込めてないから・・・」

飲み込まれた二人は無事に出てくることが出来ました。めでたしめでたし♪

「あ、そうか・・・別に赤頭巾ちゃんの話じゃ誰からも称えられないのか・・・」

「今頃知ったのか、ソル・・・」

「本当にもう、ぐだぐだだね・・・」

さあ、オリジナルの低年齢用の小説を書いてみよう！（BY 瑞樹）

オリジナル

その日、俺は瑞樹の家にやってきていた。

「零時、実は最近僕、子供向けの小説を考えているんだ」

「子供向けの小説？そんなのあるのか？」

「まあ、考えればあるんだよ・・・桃太郎とか、一寸法師みたいに冒険活劇もいいかもしれないけど、僕としては平凡な毎日の中を冒険させたいと思っているんだ。そうだね、君は小さい頃に一人で他の街にいったこととかあるかい？」

「いや、ないな・・・それを題材にするのか？」

「まあね・・・既に完成しているから零時、読んでみてくれないか？」

「わかった」

俺は手渡された紙に目を通したのだった。

『たーくんのいちにち』

ぺんねーむ たんすの角は魔の角度

（おいおい、ペンネームからおかしくないか？）

（気のせいだよ・・・こんなのは普通なのさ。それに、物語には関係ないだろう？）

（まあ、確かにそうだが・・・）

たーくんはしょうがくいちねんせいのげんきなおとこの・・・
まいにちをおもしろおかしくすごしていました。

（普通だな・・・面白おかしくってかわってるな・・・）
（ま、そうだね・・・）

しゅみは“いそづり”と“すきまをのぞくこと”です。

（前者は小学生にしては珍しいが、後者は嫌な趣味だな・・・こいつ、小学生じゃないだろ？）

（いや、意外とこの歳の男の子は隙間があると覗いてしまう年頃なのさ）

さて、そんなたーくんはきょう、となりまちにかつてもらったばかりのじてんしゃにまたがっていくことにしました。ちよつとしたたーくんのぼうけんのはじまりです。

さあ、みんなも血湧き肉踊るたーくんのぼうけんをみていきましょう。

（おい、何だよこれは？）

（これは彼の冒険さ・・・）

となりまちへとせいりよくをのぼすため、じてんしゃにまたがりたーくんはつぶやきます。

「さて、今日も相棒と共に新たな峠を攻めるか・・・今度は誰に会えるかな・・・」

（たーくんは何を求めているんだ？勢力伸ばすって・・・なんだよ？）

（ほら、風になりたいんじゃないのか？）

うごきだしたたーくんのじてんしゃ、なまえを“アヴァランチェ・ブラッド　　〽白き大地を血に染める”といいます。

（おいおいおい、めっちゃくちゃかっこいい名前だぞ？しかも、サブ

タイトルまでついてるし・・・」

（名前を考えるのにとっても苦労しているのを覚えてるよ。いい名前だろう？）

うごきだしたたーくん。そして、ペダルをふみしめ、すすみはじめます。うごきだしたころのなかのこどうをとめきれず、たーくんはさけびます。

「H A H A H A ! S H O W ・ T I M E ! !」

（最悪な男だな、たーくん。既にどっかの族にはいつてんじゃねえか？）

（ほら、そこは英語の教育を受けてるってことで・・・）

どろろこうつうほうをきちんとまもりながらたーくんはみちゆくひとたちにあいさつをつづけます。そして、じてんしゃにまたがってまた、たーくんはつぶやいたのです。

「・・・人にはルールってもんがある・・・それを守れねえで道路を走る？それはよお、悲しい奴が言う台詞・・・自分の存在を他者に気づいてもらいたいがために規則を破るのさ・・・早く大人になれねえと、後で自分の子供たちが泣くぜ？」

（言ってることが大人すぎだろ？）

（そうかい？いい台詞だと思っただけど・・・）

（いや、確かにそうだが・・・）

ようやく、となりまちとなるおうだんはどうへとやってきたたーくん。かれのめのまえに、くろいじてんしゃにのったおとこのこがあらわれました。

「・・・よお、王塚おうつか時伊勢ときいせ野宮明正のみやあきまさか・・・久しぶりだな？」

「なんだ、鐸堵たくつか・・・俺に何か用か？」

「どうだ、久しぶりについてこないか？」

「わりいな、これから俺はお袋から頼まれているカレーの材料をそろえてこねえといけねえんだ。またな・・・」

（おいおいおいおい！たーくんの本名って鐸堵って名前かよ！
？かつこよすぎだろ？それに、たー君の友達、めちゃくちゃ意味深
な名前だな・・・まあ、漢字は簡単そうだから読めなくもないが・
・鐸堵は無理だな）

（ふふ、すごいだろ？物語構成よりも考えたんだよ！）

あつくんとわかれ、ひとりですすむたーくん。みちをとおつてい
るとひとりのおんなのこがうずくまってないていました。

「どうした、譲ちゃん？何がそんなに悲しくて泣いているんだい？
金はねえが・・・自転車に乗ることが出来る俺だ・・・譲ちゃんの
相談にもものることが出来るぜ？」

（何かっこつけているんだろうか・・・）

（うまいこといつてるだろう？）

おんなのこはこたえました。

「・・・拙者、道に迷いて我が家に帰ることも出来ずじまい・・・
腹も空いてきてここで自らの命をこの身に着けている太刀で終わら
せようと思っているところでした・・・」

「譲ちゃん、命ってもんをそうそう捨ててはいけねえ・・・俺も一
緒になって探してやるから、あきらめるんじゃないやねえ・・・」

（何？何でこんなところに女侍がいるの？しかも、なんで切腹しようとしてるんだ？）

（彼女は非常にプライドが高いのさ・・・）

まいごのおんなのこをひきつれていろいろなところへとむかうたーくん。しずみゆくゆうひにあせりをおぼえながらもあせらずにさがすのでした。

「もうちよつとだ・・・もうちよつとでお前の家に着くぜ？だからさ、そんな心配そうな顔をするんじゃないねえ」

「すまぬ・・・このお礼は後日、必ず返そう・・・」

（もはやコメントも何もないな・・・）

（いいだろ？これ？）

そしてようやく、かのじょのいえへとぶじにつくことができたのでした。おんなのこははおやにできつくとうしろをふりかえりましたが、たーくんはすでにいませんでした。

「・・・あの方・・・いずれ、またあえるだろうか・・・」

たーくんはゆうひをせにじぶんのいえへとかえることにしました。

「今日もいい出会いをした・・・この出会いが俺を大人に変えていくってくれるのだろうか？へへっ、俺もまだまだがきだ・・・変えてくれるのを待つんじゃないかって自分から大人にならねえとな・・・」

（END）

「瑞樹、俺はものすごく、この物語を読んで頭にきたよ。うん、こいつはもうちょっと物語を変えたほうがいいんじゃないのか？」

「そうかな・・・まあ、今日は読んでくれてありがとう。雅ちゃんにも見せてあげようかと思うんだ」

「ああ、あいつなら人助けとか好きだからな・・・喜ぶんじゃないかないか？」

世の中には子供向けの小説を書くにはポテンシャルが高すぎる人物がいることを俺は今日知った。

さあ、オリジナルの低年齢用の小説を書いてみよう！（BY 瑞樹）（後書き）

さてさて、今回は瑞樹と零時しか登場人物が出てきてませんが・・・
いかがだったでしょう？こんな子供を見てみたいと思っている作者であります、あつたらんだか子供に対する考えを改めないといけないと思っている所存です。さて、予定としては80話から新たな物語を書いていこうと思っています。今回はやはり魔法を使う上では王道？の異世界に零時を送り込みたいと思っています。

一話限りのルートM：平凡な一日（前書き）

なんとなくですが、雅主体の話を考えていました。ああ、ついでに書いておけばよかったなあ・・・

一話限りのルートM：平凡な一日

とある日の俺と雅の話

「兄さん、久しぶりの買い物だね？」

「ああ、そうだな・・・まあ、めったに家族と買い物なんて俺はしないからなあ・・・」

今日は珍しく雅と共に近くのデパートへと買い物にやってきた。
理由は

「ああ、悪いけどデパートで安売りがあっているから今日の晩御飯の材料を買ってきてね。何でも構わないわ。どうせ、零時が作るんだし・・・」というものである。無論、こういったのは俺たちの母親なわけなのだが・・・

「兄さん、今日は何を作るの？」

「そうだな・・・面倒だからにんじんの姿煮なんてどうだろうか？」

「まじめに考えてる？」

「冗談、今日の献立は既に決まっている・・・煮込めば出来るおでんでいきたいと思う」

「めっちゃくちゃ単純な理由だね・・・」

「それににんじんも入れればあつというまににんじんの姿煮の完成だ！」

そんな話をしながら俺たちはデパートへとやってきた。

俺たちが向かった先のデパートは近隣の建物の中では大きいほうの部類に入り、ゲームコーナーやなんやら色々と詰め込まれているので学生が多く来ていたりもする。まあ、普段だったら俺は商店街のほうに向かうのだが、今日は母さんからの言いつけを守るためにデパートを利用しているわけなのだが・・・話が逸れたが、学生が多く来るということは俺の知り合いも着ているというわけであり、その日も久しぶりに高1の頃の友人とであった。

「お、時柱じゃんか？」

「ああ、お前は・・・吉沢じゃないか？」

「違うぞ」

「ええと、吉崎か？」

「ちがう！」

「・・・吉田！そうだ、吉田だ！」

「違う！いいかげん吉から離れろよ！俺の名前は高田だ！」

「おお、高田か・・・懐かしいな・・・」

「・・・いまさらかよ・・・ところで、そっちのかわいいこちゃんは
お前の彼女か？」

まったく、お前はどこに眼球つけて脳みそ備え付けてんだ？

「違えよ、俺の妹だ。名前は雅って言うんだ」

「はじめまして」

雅が挨拶をすると非常におどろいた顔になった。

「へえ、いいなあ。お前、妹いたのか・・・その性格、ぜんぜん似
てねえな素直でいい子みたいだし・・・おっと、俺、これから待ち
合わせだから・・・じゃ、雅ちゃん、ばいばい・・・」

去っていった吉田じゃなかった・・・高田を見送ることもなく、
俺たちは歩き出した。

「へへっ、彼女だって♪」

「はあ、何喜んでんだか・・・」

食品コーナーへとやってきておでんの中の具を考えていると脇に
いた雅の肩を誰かが叩いた。

「やつほ、みっちゃん！」

「なっちゃん！」

どうやら雅の友達だったようで、俺はそのまま無視して買い物
を続ける。

「ねえ、その人彼氏？」

「ち、違うよ！私の兄さんだよ！」

「ああ、なるほど〜これが自慢の兄さんか〜」

どうやら俺の話をしているようなので無視するのも限界が来たと
思い、顔を上げる。

「どうも、はじめまして・・・雅ちゃんの友達さわなみなつくの沢波夏暮です！名前はなんていうんですか？」

「え、ああ・・・俺は時柱零時って名前だが・・・」

「みっちゃんとは血がつながってないんですよね？」

「そうだけど？」

そういうとにこりとして笑うなっちゃんさん。何？この元気を大量生産して頭の中に詰め込んでいるようなはちゃめちゃガールは？

「よかったね、みっちゃん！」

「な、何が？」

「このこの！わかってるくせに！」

雅をついついている彼女はそんなことを言ってこっちに再び顔を戻してきた。本当に忙しい人だ。

「じゃ、私はこれでいきますね・・・せっかくの兄妹水入らずを邪魔してしまってますいません！それではっ！！」

こっちが

「さよなら」を言う前に彼女はまるで疾風のように去っていった。

「・・・雅・・・あの子、すごい子だな？」

「そ、そうだね・・・あはは・・・」

「？」

なにやら挙動不審な行動をとっている我が義妹に最大の疑問を抱きながら・・・俺は再びいい食品を探し始めたのだった。

ちょっと息抜きで屋上へと二人で向かうと今では非常に珍しくなった屋上でのヒーローショーがあっていた。

「兄さん！あれ見ていこうよ！」

「・・・はいはい、ところで今回出てくるヒーローをお前、知ってるのか？」

「大丈夫、どんなヒーローが出てきても私は彼らの味方なんだ♪」

まったくもう、こいつの家族、出てこいといいたいな。あ、家族は俺だ・・・なんてお約束はいいとして俺も子供たちに混じって席についた。

「あおっ、あおっ、あおっ・・・この世を青く染めてやるぜえ！」
出てきたのは普通のヒーローショーに出てくる戦隊ものの多くでサブリーダーという二番手の地位を多く獲得している人だった。しかし、いつている台詞が悪だ。

『待てーい！』

まだ悪人？が何も悪さをしていないのにヒーローの現れる声が聞こえてくる。

「なあ、雅・・・」

「しっ！いいところだから黙ってて！」

周りの子供たちも今にしては珍しいほど熱狂的な視線でヒーローの登場を待っている。

「組は赤組！」

「好物トマト！」

「血気盛んな！」

「赤き者！」

「我ら五人揃って！」

『本気で赤い（マジアカ）戦隊 アカインジャー！！』

俺の中では世界が止まったのだが、周りからは

「ひゅー！」とか

「さいこー！」などという声が聞こえてくる。特にすごかったのが我が妹・・・

「やれー！やっぱ、赤はリーダーだ！」

俺、めっちゃ恥ずかしいよ・・・穴を掘って自らその中に納まりたい・・・

「何！？何だ、貴様らは？」

敵であろう、青の人（仮名）は当然のようにいきなり現れた赤い人たちに疑問符を並べる。俺にはどれも真っ赤なのでさっぱりだ。

「月曜日リーダー、クリムゾン！」

「火曜日リーダー、ワインレッド！」

「水曜日リーダー、マゼンタ！」

「木曜日リーダー、スカーレット！」

「金曜日リーダー、フレア！」

そういつてそれぞれがポーズをとる。ああ、全員赤だから日によってメインリーダーが代わるのか・・・じゃなくて、それなら土曜日と日曜日はどうするんだ？今日は日曜だぞ！？誰だよ、リーダーは？

「むむ、ならば今日はお前らのリーダーはいないのか？」

「どうやら青の人（未だ仮名）も同じように不思議に思ったようだ。」

「ふふ、それは違う・・・」

一人が（どれも俺には赤く見えるのでどれがどれだか不明）呟くようにしゃべる。

「土曜と日曜・・・それは全員がリーダーなのだ！」

「むう、そうなのか・・・」

納得した！？

「我らの邪魔をするというのなら、消えてもらうしかないな・・・いけ、小さな青い人たちよ！」

そういつてわらわら現れたのは全身青いタイツを着た人たちだった。ああ、いわゆる雑魚ね・・・と思っていたのだが、赤い人たちはコブシを握り締める。

「馬鹿野郎！」

いきなり一人がそんな声を出す。青の人たちは固まった。

「そんな卑怯なこと・・・お天道様が許しても我らが許さん！勝負するのなら一對一だ！そっちで代表選手を選出しろ！こちらからも一人、選ばせてもらおう！」

「え、ああ・・・」

そうやって青の人たちはまとまって話し始める。赤い人たちも集まって話を始めた。

「・・・ここはリーダーの私が行こう!」

「いや、リーダーであるこの私が行く!」

「奴らの不正を暴き、正義の鉄槌を下すのは私だ!」

「甘いな、お前のコブシよりも私のコブシのほうが熱く煮えたぎっている!」

「今日のリーダーは私だ!」

今度は仲間割れを始めたらしく、青の人たちはどうやら代表選手を選出していて待っているようだった。しかも、怪人っぽい青の人ではなく、雑魚のほうだった。おいおい、どうなってんだ?

「えゝそれでは今から人気投票による代表選出をお願いしたいと思います。では、多数決で・・・」

赤い人たちがそのようなことを言い出した。子供たちはえらく喜んでいようで・・・

「じゃ、まずは『赤いコブシは返り血さ・・・』がキャッチコピーのクリムゾン・・・はい、十票。次は・・・」

いや、返り血って何!? 子供が聞いててそんなのいいの?

「・・・『ほろ酔い気分で戦場へ・・・』がキャッチコピーのワインレッド・・・十票」

ほろ酔い? それもう酔っ払いだろ?

その後も意味不明な(マゼンタ・テレビの色素の一つ・・・フレア・・・意味は赤々とした・・・)キャッチコピーで手をあげてもらった結果、すべて十票で同数だった。

「あれ? きちんと皆手をあげましたか?」

どうやらこれは赤い人たちにも想定外の出来事だったようだ。そこへ、雅が手をあげる。

「いえ、ここに手をあげていない人がいます!」

「ん? 君か?」

「いえ、私の兄さんです!」

そういえば、手をあげてなかった・・・

「む、それならば誰がいい？」

「いや、聞かれてもどれも一緒だし・・・それに、合体技とか見てないので、悪者とか普通は合体技で倒すのが常道じゃないんですか？」

「なるほど・・・みんな、合体技だ！」

俺の適当な一言で合体技へと移行した赤い人たち・・・それに見るからに狼狽したのは青い人たちである。

「え、まじ？」

『喰らえ、赤赤赤赤まっかつかばずかか！』

合体技を喰らった人（代表で選出された雑魚）が飛んでいった。

ありゃ、魔法を使ったな・・・いや、やりすぎだろ、完璧に・・・

「く、なかなかやるな・・・今日は撤退だ！」

雑魚一人がやられたのにあわててその場から逃げ出す青い人たち・

・

「・・・ありがとう、名前はなんど？」

「時柱雅って言います！」

「君じゃなくて・・・」

「サインください！」

俺に何かを言おうとしていた赤い人たちは雅の熱烈なお願いに断りきれずにサインを書き出す。そして、それを切り口に

「ずるいぞ」

「ぼくも！」とかいって子供たちがヒーローに向かっていったのだった。どうやら悪者には勝ても子供たちには勝てないようで、サインをもらった雅（既に五人分もらっている）をつれて俺はその場から去ったのだった。

「「ただいま」」

「おかえり」

家へと帰ってきた俺たちに何故か、いないはずの母さんが返事をしてくれた。

「あれ？今日はどうしたの？」

「ふふ、たまには兄妹でデートするのもいいかと思ってね・・・」

「なるほど、それなら狙ったようなタイミングでヒーローショーがあるのも頷ける・・・」

「どうやらこの買い物自体が母さんの考えだったようだ。」

「ま、今日は疲れているみたいだから私が夕食を作るわ。あんたたちは部屋を片付けてきなさいな」

風呂から上がって部屋にいと雅がやってきた。

「兄さん、今日は楽しかったよ！」

「ああ、そうだな・・・まあ、たまには騒がしいのもいいもんだなあ・・・」

「今度もまた、ヒーローショーと一緒に見に行こうね♪」

「・・・ま、まあ、たまにならな・・・」

雅は笑って俺の部屋を出て行ったのだった。

兄には兄のわけがある？ (前書き)

今回はかなり存在感が薄い零時、雅のお兄さんの話です。

兄には兄のわけがある？

兄貴の秘密！？

俺としては非常に納得いかないことが起きた。家に帰ってきたら以下の状況になっていたのだ。

「……兄貴、何でこんなところで寝ているんだ？」

「……偶々だ」

いや、俺としては非常に納得いかない奴が起きた。

「なあ、説明して欲しいんだが……俺の布団が見事に避けているのはなぜだ？」

「……いつものことだ」

そういつて寡黙な兄貴は立ち上がる。

「……何が起きたんだよ？」

「……俺が起きたただけだ……」

「違う、俺が聞きたいのは事象のほうだよ！なんで布団が見事に裂けてんだよ？子供二人がぬいぐるみを取り合って見事に真っ二つ！みたいな状況じゃねえか！」

「……みればわかる。ちょっと寝相が悪かったみたいだな……」

「

寝相が悪い……ただ、それだけの理由で布団は見事にここまで綿をぶちまけるという状態になるのだろうか？どういった寝相で？

「……ほら、俺の頭もすごいことになっているだろう……」

そういつて自らの髪の毛を指差す。兄貴は長髪で、普段はさらさらとした髪の毛をしているのだが、今日は何かを頭につけたのか知らないが、すべてそれが逆立っている。それはもう、天井に当たりそうなほどだ。

「……ま、まあ……さすがにその髪形を見れば俺もこの布団が裂けたほうが普通に見える」

「……そうか、わかってくれたのならそれでいい……」

のっそりと起き上がって兄貴は去っていった。そして、残されたのは裂けた布団とほうけたような俺の姿だったのだが……

「ちょ、ちょっとまってーい！」

あわてて部屋を飛び出したのだが、既に兄貴の姿はない。くそ、どこに逃げたんだ？

「あ、兄さん……どうしたの？ものすごく怖い顔してるけど……？」

そこへ、階段を上がってきた雅の姿を見つけた。

「なあ、兄貴見なかったか？」

「……大兄さん？それならいつもと同じようにさっき窓から飛び降りたけど？」

いつもと？あの兄貴、いつも飛び降りて出てっていったのかよ……

「珍しくあせってるようだったけど……何かあったの？」

「俺の布団が奴に殺られた……」

雅に事のしだいを告げると

「ああ、なるほど……」となにやら普通の態度を見せたのだった。

「兄さんもやられたんだね？」

「……雅もか？」

「うん。見事に布団がまっばつに裂けてたなあ……」

しみじみとしたような表情でそんなことを言っている。

「とりあえず、いいんじゃない？まだ予備の布団はあるんだし……」

「そうだなあ……そうだ、そういや今日は瑞樹の家に行くって言ってたんだ……俺、行ってくるわ」

今はそんなことより瑞樹の家に行くことを先決にしたのだが……

「いやあ、零時……今日はすごいことがあったんだ！」

「ど、どうした？」

まるで何か面白いものを見たような表情を見せる瑞樹。

「この布団を見てくれよ！」

「・・・げ!？」

干してあった布団を引っ張ってくるとそれを俺に見せる。それを見て俺は固まった。

見事に布団が真っ二つに引き裂かれていたからである。

「・・・あれ?なんだかぜんぜん驚いてないようだけど・・・?」

「いや、そんなことはないと・・・うん、一体全体、これはどうしたんだ?」

まさかとは思うのだが、我が家の長男の仕業だろうか?

「えっとね・・・母さんの話によると髪を逆立てた仮面(ひょうめん)をつけている男がまるでサルのように僕の家から飛び降りてきたんだって。そのまま走り抜けていったから二階に強盗が入ったのかと思ってあわてて男が出てきたと思われるベランダにいったんだけど・・・そこには真っ二つに裂かれている僕の布団があったんだって・・・どうしたの?なんだか顔が青いけど?」

俺は瑞樹のそんな不思議そうな表情をぼさっと見ている場合にはなかった。

「・・・すまん、ちょっと用事が出来たわ・・・俺、ちょっと会ってこないといけない人がいるんだ・・・すぐ帰ってくる」

「ん、そうなのか・・・彼女が出来たのか・・・しょうがない、それなら雅ちゃんを呼んでヒーロービデオでも見ているからゆるりとしてきても可能だよ」

瑞樹に片手を上げてさよならを告げると俺は急いで兄貴が勤めている先のファミレスに走って向かったのだった。

「いらっしやいませ〜って、零時君じゃない?どうしたの?」

「あの、兄貴もう来てますか?」

乱れた呼吸を整えながら俺は知り合いのウェイトレスさんに話しかける。相手は俺の表情から見てただ事ではないことが起きたと思

ったのだろうか・・・？

「・・・ええと、裏側の扉から入ってくれば誰かが対応してくれると思うわ。ここの店長をしていてたまにバイトしに来る零時君のこと、皆知ってるからね・・・」

そういつて俺は裏方のほうに向かったのだった。

「・・・ああ、店長ね・・・店長、弟さんが血相変えて来てますよ！」
裏方のほうから店の中に入るとやはり、知り合いのコックさんが掃除をしているところだった。そして、事情を伝えぬまま俺は兄貴を呼んでもらったのだが・・・

「あれ？店長いないのかな？悪いけど、ここで待っててね？」

コックさんは奥のほうへ歩いていくと、数分で戻ってきた。

「・・・なんだか、さっき来て一品客の品を作ったら窓のほうを見ていて急に血相変えて逃げ出したんだって・・・しかも、着替えたのはいいけど・・・帽子は被ったままだったそうだよ？何かあったのかい？」

「この事情はおいおい・・・ありがとうございました！」

窓のほうを見た・・・つまり、俺の存在に気がついたのだろう。
我が家に住んでいながらも俺たちとは起きている時間帯が逆の兄貴だ・・・何を考え、どのような行動をしているのかさっぱりである。
髪の毛を茶髪に染めることもなく、ピアスをつけることもなく、タバコをすることさえない謎の兄貴・・・酒を飲めばすぐさまいびきをかくといわれている兄貴は何を考えているのだろうか？

街角で一つの白い帽子が見えた。どうやらそこに隠れているようだったのっで捕まえてやろうと慎重に近づいていくと・・・

「・・・おとなしく鞆の中に入ってる・・・」

「嫌だあ！私もてんちよく一緒に景色をみたいのっ」

何やら誰かと言いつているようで・・・俺はこっそりと覗き込

んだ。

「あ、てんちよく弟さんがいるよ！」

「・・・また、そうやって嘘をつく・・・」

「む、嘘じゃないもん！そういうえば誰かに見つかったら結婚してくれるって約束したよねえ？」

「・・・ああ、したぞ。だが、それは俺がお前と一緒にいるところを見られたときの場合だ。零時はここにはいない・・・」

鞆に黒い羽根を生やした手のひらサイズの女の子をどのようにして入れようか考えている様子の兄貴には俺が見えていないようだ・

・
「あそこにいるもん」

「・・・何度、それで騙されたことか・・・」

いや、俺は本当にいるんですけどね・・・

「本当は私と結婚する気がないんだあ！うえくん、泣いちゃうぞく！」

俺はどうするべきかと悩みながらその様子を見てみると、兄貴がふと、少女を詰め込む手を止めた。

「・・・何を言っているんだ・・・とりあえず、俺がもうちょっと稼げるようになったらきちんと結婚してやると約束しただろう？お前がどんなにいたずらしても家族にはばらしてないぞ？今日の布団だってお前がやったんだろ？隣の家にも迷惑を掛けて・・・俺だってなあ、お前から呪いを掛けられていなかったら今頃短髪だったんだぞ？今日の朝だってお前が魔法を使って髪の毛を逆立てたろ？」

すいません、兄貴・・・俺、あなたのことを誤解していました。

「うっぐ、ごめんなさく・・・」

「はいはい、嘘はもういい・・・」

「でも、弟がいるのは本当だよ」

俺はやばいと思ってそこから逃げ出したのだった。魔法を使って歩を早めて姿を消した。

「? いないじゃないか・・・また嘘かよ・・・」

「本当だよぉーいたんだよぉー」

「はいはい、さあ、家に帰るぞ・・・」

夜、俺の部屋に兄貴が急にやってきた。

「!？」

「・・・今日は迷惑を掛けた・・・」

「布団のこと? それなら・・・」

「違う、よくあそこから静かに出て行ってくれたことだ。ああ、安心していいが、今あの小悪魔はいない・・・」

そういつて床に胡坐をかいて兄貴はため息をついた。

「・・・あいつと会ったのは俺が働き始めてすぐだった。当時、色々問題を抱えていた俺はいじめられていた悪魔を助けたんだ。まあ、そのときは助ける気なんてなかったんだがな・・・こいつがまた、助けたら助けたで『一回助けたならこれからも助けてよぉー』なんてふざけたことをぬかしてな・・・嫌だと答えたら魔法を俺に掛けようとしてきたんだよ。それで、その魔法は見事避けれたんだが・・・それが一人の女の子に当たってなあ・・・その子、可哀想に異性にもてないようになっちまったんだ」

どっかで聞いたような話である。

「・・・それで、あの小悪魔が言うには『今回はわざとはずしてあげたけど、次はお前の家族に当てるからなあーどうだあ?』っていつてきたんで・・・」

「いつてきたから・・・それで承諾したの?」

「・・・いや、そいつをぶん殴った・・・」

普段は糸目で瞳を見ることができない兄貴の目を見たのだが、その目はマジだった。

「・・・それで?」

「ああ、そうしたら・・・『えーん、いたーい! 私を傷物にしたあ

！』って大声で騒ぎやがって・・・近くを通った警察官にまで近づかれてよ・・・俺はもう、アドリブで何とか切り抜けたね・・・」

「なんて？」

「・・・ほら、さっさと家に帰るぞ！ってね・・・そしたら、まあ・・・現金な野郎だ・・・さっきまで泣いてたくせに笑って『うん♪』って言いやがったんだ・・・それで、気がつけば奇妙な間柄になっちまったってわけだ・・・」

その話を終えると兄貴は立ち上がった。

「ねえ、兄貴は今、その悪魔について楽しい？」

「・・・さあなあ、小さい頃からお前たちの成長する姿を見てきただけだったが・・・まあ、俺はみているだけでも楽しかった。既に一緒にいるやつがいなくなったら寂しくなるから、俺は今、楽しいんだろうよ・・・」

そういつて兄貴は部屋を出たのだった。

その後、いつものように無口に戻った兄貴だったのだが、最近俺の部屋に小さな変な奴が現れるようになった。主に、兄貴が疲れて眠ってしまっているときである。

「ねえ、弟さん」

「・・・何？」

「あの時一緒にいるの見たんでしょ？」

「みてない」

「むううそだあ」

「嘘じゃない、嘘ついたって何も利益ないだろ？」

「確かに・・・」

主に話すことは彼女が知らない兄貴のことなのだが・・・俺もまあ、兄貴のことを知らないで意味がない。

「結婚式のときは仲人さん役やってねえ」

「・・・まあ、頼まれたらね・・・」

俺としてはこんな人が姉さんになるのか・・・まあ、それもいいかとあきらめていたのだった。

終わりは終わりでグダグダに！（前書き）

今回で第二部であるこの物語も終わりです。ですが、御注文は？
魔法使いで！は終わりません。良ければ第二部の感想をよろしく
お願いしたいと思います。

終わりは終わりでグダグダに！

最後の仕上げ 卒業式

進学先の大学も決まり、卒業式がやってきた。

「・・・ああ、今日でこの校舎ともお別れなんだな・・・」

哀愁を漂わせながら俺は学校の門をくぐる・・・いつもと違うシリ阿斯展開・・・

「いや、派手にいきましょう、零時様！」

そんな声が後ろから聞こえてきて隣にあった校門が見事に破壊・・・破片が俺にぶち当たる。

「・・・メルナか・・・」

吹き出る血をものともせず俺はあくまでシリ阿斯展開を続けることを宣言する！さあ、誰でもいいから俺にかかってきなさい！

「む、零時様・・・ケチャップがついてますよ？」

「ああ、まあ・・・この校舎との付き合いも長かったから・・・血の涙も流したくなるもんだ」

「くう、まともに返しましたね・・・でも、まだ負けません！」

ふ、残念だが俺も負ける気はないね・・・

「はい、零時様・・・トマトジュースです」

「悪いな・・・ちょうど、のどが渴いていたんだ・・・」

俺はそのトマトジュースを一気飲みした。メルナの表情はこわば

っている。

「う、嘘です！零時様が・・・零時様がそんな・・・いつもだったら『お、サンキュ！これで輸血が出来るぜ・・・』って言うのに！」

「・・・ああ、今の俺はもう燃えた後なのさ・・・」

「うう・・・『んなことするかあ！』って普段だったら突っ込むのに！うわぁーん！」

危なく突っ込みそうになったのだが、俺は今、シリアスモードさ。去っていった初めの危機、メルナを見事に退けた俺は校庭へと進む。さて、そろそろ奴が出てくるに違いない・・・

「お、零時・・・頭から血が出てるぞ、このハンカチで拭けよ」

やってきたのはソルだ。ふむ、メルナと違って落ち着いて行動を開始したか・・・俺たちとあって冷静になり始めたな。

「おお、サンキュ・・・」

手渡されたハンカチ（いまどき古いフロップीडィスク）をあえて何も言わずにそれで血をぬぐった。

「・・・」

ソルはそれに対して何かを求めているようなのだが・・・ふ、甘いな・・・

「ああ、きちんと洗って返すから大丈夫だ」

「ちくしょーこいつ、気づいているくせに無視する気だ！」

「ああ、気がついてるって、きちんと除菌もしておくから・・・この学校との思い出は洗い流すことは出来ないけどな・・・」

「くそ！徹底的にとぼける気だ！ちくしょー覚えてろよ！」

二人目の刺客も見事に撃退完了。

さて、お次は誰が来るだろうかと予想をしていると教室にて、先生がやってきた。

「・・・によほ♪二人きりだね？」

「先生、そういえば校長先生が呼んでましたよ？」

「またまた！そうやって嘘を・・・」

ぴんぽんぽんぽーん！

『八重先生、至急校長室へと向かってください。校長先生が呼びです・・・』

「え、本当だったの!？」

先生は俺に何か仕掛けようとする前にさようならだった。ちなみにこの放送は放送委員と校長先生にお願いをして仕上げたものである。どのようにして校長先生を説き伏せたかというものは後ほど教えたいと思う。放送委員はお金を握らしたら

「まかせておけ！」と胸を叩いてくれたから良かったものだなあ。

さて、卒業式が開始されるまで後十分。あとはこのまま式を順調にこなしていき、そうすれば俺は完璧なる勝利をこの手に収めることが出来るのである。ほら、たまにはシリアス展開とかを期待している人もいるだろうから、そのための練習をしておかないとやばいからなあ・・・

式場である体育館に俺は八重先生と共に入場した。既に先生は涙ぐんでいる。校長先生には

「八重先生にこれを渡しておいてください。あの、恥ずかしいので名前は伏せてもらえとうれしいんですけど・・・」といって時計をプレゼントしたのだ。

「うう・・・先生間違ってた。無理やりコメディーに持っていこうとする自分が悪いことに気がついたよ・・・感動だね？感動系を目標しているんだね？」

教室に戻ってくるなり、そういつて俺に謝ってくれたのだった。よかったよかった。

式は厳かに始まり・・・

「兄さん！兄さん！ほら、私空飛べるんだよ！」

「・・・」

「兄さん？」

「ぐう」

「シリアス目指してるのに眠ってるよ・・・」

雅が仕掛けてきても寝たふりをしてしのいだ。

「零時、よだれが垂れてるぞ・・・八重先生がハンカチをまわしてくれた」

「あ、すまん、瑞樹・・・」

手渡されたハンカチでよだれをぬぐう。決して寝ていたわけではない。これは“りありてい”を出すためにわざと垂れたよだれである。重ねて言うが、夢まで見ていたわけではないのだ。

「・・・って、瑞樹、お前は何で俺の隣にいるんだ？俺のクラスは俺一人だぞ？」

「まあ、そう怒るなよ。寂しいだろうと思ってほかのみんなも君と同じクラスということで行こうじゃないか？」

「はっ、わかったよ・・・」

どうやら俺にはシリアス展開が似合っていないようだったのであきらめることにした。一同が俺の近くに座っているのだが・・・二人の影を見ていなかった。

「えゝそれでは、これで式典を終了したいと思います」

きよろきよろしていた俺の耳に校長先生の言葉が入ってきて・・・
「零時、前を向いておきなよ？」

隣からそんな声が聞こえてきたのでおとなしく前を見る。

「・・・さて、ここで生徒代表のメルナさんから一言あるそうなので代わります」

「！」

メルナが現れてなにやら手にスイッチを持っている。

「・・・えゝ皆さん、ご卒業おめでとうございます。今回、この卒業にあたって、皆さんにプレゼントがあります。後十分で爆発するように校舎に爆発物を仕掛けてきました。命が惜しい人たちは今すぐ、校庭に出て逃げてくださいね♪」

そういつて真っ先に逃げ出すメルナ。言った本人がそんな行動を

とり始めたもんだから卒業式どころではなくなってしまった。

「零時、ぼーっとしてるけど丸焼けになりたいのかい？ きっと彼女たちが仕掛けた爆弾はすごいと思うけど？」

「いや、跡形すら残らないんじゃないのか？」

そんなことを言いながら俺たちも外へと出て行く。

そして、十分後……

「あれ？ 何も起こらないな？」

「あ、すいません、零時様……スイッチを押すのを忘れてました。これ、十分たったら自分で押さないと発火しないようなんだから……」

「手動かよ！？」

「ていつ！」

カチッ！

屋上が七色の光に光った。

「ん？ 誰がいる？」

「はい、双眼鏡です」

「あ、サンキュ……」

双眼鏡に飛び込んだのは『着火係』という札をつけたソルの姿だった。そして、彼女は上空に向かって何かを発射した。

『卒業おめでとう！ 時柱れい時！！』

俺はそれを見てなんとなく、そう、なんとなく突っ込みたかったのだが……あえて何も言わないようにした。なぜなら、今回はシリアスに話をまとめようと思ったからだ。結局、いつもと同じようにグダグダになってしまったことを否めないのだが……これも俺らしくていいでしょう！

御注文は？ 機械と魔法使いで！

——樂屋裏的な話——

「さあ、第二部が終わってしまいましたか・・・瑞樹、既に次の話の準備は出来ているのだろうね？」

「・・・いや、わかんないな零時。あとがきとかで色々いつてたんだが結局、どうなったんだだろうね？」

「やっぱりぐだぐだじゃんか？」

「次は予定的に師匠となって弟子を持つ話にしようかなあと思ったらしいだが・・・まあ、どっちかというと異世界にいくって話も捨てきれないらしいんだよねえ・・・」

「いや、ほんとどうなるんだろ？」

「何か希望は？」

「そりゃ、あれだ・・・ロボットのパイロットになって戦う奴なんてどうだ？」

「既にそれは魔法使いじゃないからね♪・・・却下だよ」

「やっぱり駄目か・・・」

「さて、今後どのような展開が予定されているのか僕たちも知りませんが、期待して待っていてください！」

「では、また今度！」

「・・・ところで、この樂屋裏的な話って続くの？」

「さあ？要望あったらまたあるんじゃないのか？」

「ああ、なるほど・・・」

御注文は？ゝ1パーセントの魔法使いで！ゝ（前書き）

さて、今回から新しく始まる話です。既に魔法使いになっている零時ですが、今回は異世界に旅立つことになりました。

御注文は？！1パーセントの魔法使いで！！

オープニング A

—————王都ソードシアター郊外の森

「ここなら誰も来ないよね？」

一人の少女がなにやら釣竿を取り出して呟いている。辺りに人はおらず、代わりにいるものとしたら樹齢百年以上の未知の木だけだろう。

「やっちゃいけないっていわれるとやっぱりやりたくなるもんなんだよ……」

顔を上気しながら近くの木に話しかけるちょっと危なそうな少女。その顔はまさに今からいたずらを行う前の子どもの顔をしていた。その瞳は違った世の中を見てみたいということ静かに物語っている。

「……さ、ここからは真剣にやらないと……」

ずっと表情を切り替えて大きい瞳を細める。その目に映るものは昨日のうちに彼女が準備しておいた魔方陣のようなものだが、中心には水を張った器がおかれており、夜空に移る星や月を映し出していた。辺りには霧も立ち込めてきて幻想的な景色を作り出していたのだった。

—————同時刻、ファミレス
つるぎやまれいじ

俺の名前は剣山零時。半年前程に分け合って世間でいう魔法使いとなったのである。まあ、今はそんなことどうでもいいんだがな……

一人でお冷を飲みながらぼやいていた俺はようやくやってきた親友に視線を送る。

「よっこいせつと……もう明日になりかけてるよ……」

「おいおい、高校生が深夜にこんなところ来てもいいのかよ？」

「僕は問題ないけど・・・零時は何か家庭教師とのお勉強があったんじゃないの？」

「え、ああ・・・今日はちょっと用事があるらしいから家庭教師（やたらと強気できびし）はいねえんだよ」

「そうかい、それなら計画は順調に進めそうだね・・・」

俺たちのところへ一人のウェイトレスがやってきた。

「・・・御注文はお決まりでしょうか？」

どことなく暗いイメージのウェイトレスだった。

ここのウェイトレスを全部知っているとこのわけではないが、大半を知っている俺でも知らないような人だった。

まあ、人がいなかったからそこらへんからつれてきたのかも知れんな・・・それに、この時間帯にはおれたち以外の客としたら奥さんに家から閉め出されたのか知らないが、顔に引っかけ傷と殴られた後のあるおじさんとカップルぐらいか？前者はやけ食いついてるし、後者はイチゴパフェ一つでかなり粘っていると思われる。

「じゃ、俺はお冷のお代わりを・・・」

今月はもう硬貨の中で一番権力を持っている額しか財布に入っていないのだ。何か頼んだらすごいことになる・・・というより、ここが俺のバイト先なので後で色々と減らされるに違いないだろうが・・・

「ふ、零時・・・そういうものを注文とは言わないね・・・」

かけている眼鏡をついと押し上げながらポーズを決める。

「なら、何が注文って言うんだ？」

「それはね・・・」

無口のウェイトレスのほうに向き直って指をぱちんと鳴らした。

「僕は君が焼いたアップルパイが食べたいな♪」

「・・・ご注文承りました」

おおっ！そのまま受けるのか・・・呆然としている俺に親指を突きつけてくる。ううむ、意外と成功するもんだなあ・・・

「では、注文された品を確認します。“……な水”お一つと“料理が下手なウェイトレスが焼いたアップルパイ”がお一つですね？」
「え、その前者の“……”って部分、声が小さくて聞こえなかったんだけど？」

「いやいや、後者の“料理が下手”って……」

「ちなみに、アップルパイのほうは“炭化”と“跡形なし”が選べますがどちらにしますか？」

「……あの、もう一回オーダーを決めなおしますから待っててください」

俺たち二人は再びメニューを眺め始めたのだった。

「俺、オレンジジュース」

「じゃ、僕はコーヒード……」

「かしこまりました」

今度は注文を聞きなおすことなく去っていったウェイトレスの後姿を眺めながら親友、瑞樹みずきは俺に尋ねてくる。

「……無口の割には面白いウェイトレスだねえ」

「ああ、そうだな……瑞樹、俺ちよっとトイレに行ってくるわ」

「まったく、行儀が悪いな……」

「む、まだ注文したものが来てないから別に悪いってわけじゃないぞ」

トイレに向かって俺は歩き出した。

ちりーん

「？」

なんとなく鈴の音が響いたような気がしたのだが、どうやら新しい客が来たところのようだ。まあ、そんなことは関係ないのでトイレの扉に手をかけたのだった。

—————王都ソードシアター郊外の森

「よし！うまくつながった！引っ張るぞー！」
彼女が使った魔法は成功率1パーセントのものだった。

———同時刻、ファミレス

「？」

俺はなんだか違和感を感じながら・・・いや、尿意を感じながら”扉”を開けたのだった。

A..世界が”嘘”を見せる日（前書き）

えゝ前書きでは人物紹介みたいなことを簡単にしていきたいと思ひます。では、まずは主人公である零時から。 剣山零時・基本的には面倒くさがりな性格であり、機械好き。半年前に魔法を習得して現在では実力高位だけど知識が少ない魔法使いの端くれ。魔法が今まで出会った中で驚いたことなので何があってもとくには動じたりしない。

A…世界が”嘘”を見せる日

一、

「……あれ？」

トイレの扉を開けたと思ったらいつの間にか目の前に大きな湖がひろがっていた。いや、もしかしたらあのファミレスではいつの間にかトイレをこのような湖にしたのかもしれない……。まあ、それはないか？ いやいや、そういえばこの前店長が言ってたっけなあ？ そのときそこに俺もいたしなあ……。幻覚じゃないし……

「おっと、それどころじゃなかった」

既にイエローゾーンからレッドゾーンまで移行しかけていた俺の我慢メーターをグリーンゾーン（安全圏）まで戻す作業をするためにいそいそと湖に歩を進める。

俺はそのまま湖のほとりに立って用を足したのだった。

「……ふく間に合ってよかった」

そんなことを思いながら後ろを振り返り……

「……」

「……」

黙ったままの俺より頭一つ分ぐらい小さいだろうか？ そのぐらいの少女がぎょっとしたような表情でこっちを見ていた。その顔は微妙に赤くなっており、俺と目を合わせるとあわててさらに赤く染まったその顔を隠すようにそむけたのだった。そして、その少女を見た俺のほうも勿論、ぎょっとしている。誰だって用を足していたところを見られればぎょっとするのは当然のことなのである。

それから何分が経過したのだろうか？ 俺にとっては一日ぐらいたったんじゃないかってぐらい長い長い沈黙があったのだが、実際は一分にも満たないところだったのだろう。

後ろから不意に水がかけられたような感じがしたのだ。

ギシャー！！

「うおっ！」

後ろのほうからそんな声がしたのであわてて少女がいるところまで飛びのく。安全圏だと自分で決めた少女のところまで移動してすばやく後ろを振り返る。広い広い湖の中から姿を現したのは深い青色で金色の目を持つ蛇っぽい生物。辺りに霧が立ち込めてきて正確な身長がわからない。その霧が余計俺に不安を与えてくれていた。

「サ、サーペント！？」

「サーペント？」

隣の少女は目に映る蛇がなんだか知っているようなのだが、俺にはわからない。わかることといえばこの女の子は間違いなくこの生物に恐怖を感じているということだろうか？俺は

「すげえ！でっけえ蛇だ！」としか感じていなかった。

「と、とりあえず逃げるぞ？」

「う、うん！」

俺は隣にいる見ず知らずの少女にそういった。

普段だったら不審者（この場合俺）の言葉に耳を貸すことなどありえないのだが、今のほうがその状況よりひどいようなのでこの場合は同じ人間の言うことを聞いてくれたようだ。だが、相手（鰓がついてて蛇っぽい生物）は尻尾が器用だったらしい・・・湖から尻尾を出すと俺のほうが近かったにもかかわらず目の前を走る少女をあっさりと捕まえたのだった。

「きゃ〜」

そのまま少女は湖に浮かぶ形で今にも蛇に食べられそうになっていた。あのサイズならすぐさま飲み込めるに違いない。そういえば蛇って丸呑みしてゆっくりと消化するって生物の先生が言ってたかな？

「・・・さて、どうしたものだろうか？」

俺としては逃げたい。逃げて生き延びたい・・・というより、何

でこんな状況になっているのか知りたいのだが・・・いや、あの蛇が怒ったのは大体見当がつく。そのこと自体は構わないのだが・・・なぜに俺はこんなところにいるのだろうかという疑問が先に浮かんでしまうのだ。

ぎしゃー！

もつとも、そんなことを考えている間にも彼女は現在進行形で食べられそうになっており、蛇のほうは彼女を極上の獲物だあ！と思いつつ食べようとしているにちがいない。そして、俺はここにぼさっとつたっているだけか・・・

「なんともまあ、なさけねえ話だなあ・・・俺の師匠が聞いたらどうなるか・・・」

その場合は張り手の一つ・・・いや、火の玉ぐらいは飛んできそうである。きっと

「この馬鹿！」とののしってくるに違いない・・・

「まあ、そういうわけで・・・」

誰に話しかけるでもなく、しいて言うなら自分自身の不安に話しかけるようにして俺は右腕を上げる。動物をしとめるなら・・・あれが動物かどうかはわからんが・・・残酷な話だが首と胴体を切り離せば問題なく倒れてくれるだろう。この前テレビでライオンがシマウマをハンティングしている映像を見たばかりだ。

「陽動作戦が勝手に発動しているようだし・・・」

勝手に四役となってくれた女の子に当てては本末転倒のこの一発勝負・・・俺は全身系を集中して相手ののどを狙う。俺って実はチャンスに弱い人間だったりするのだが・・・今回失敗したら相当やばいことになるそうだ。

「おとなしく逝ってくれ！」

そして俺は右腕を振り下ろしたのだった。

振り落とした右腕の少し前の空間から見事に研ぎ澄まされた刃が蛇

の頭と胴体を見事に切り離したのだった。

別のものも切れたような気がしたのだが、女の子には当たっていないようでほっとしている。

尻尾も指令を出していた脳みそがやられたためか、女の子を拘束していた力をあつという間に失い、離れた頭は・・・なんと、そのまま消滅してしまったのだった。同じようにして胴体も時間差で消えていき・・・当然、宙に浮いていた彼女は湖に落ちたのだった。まあ、あの距離から水の中に落ちても大丈夫だろうと思う。もしかしたらあの蛇みたいな生物が他にもあの中にいるかもしれないという可能性が捨てきれないというわけではないのだが・・・

「まあ、その可能性を気がつかなかったことにしよう♪」

後は彼女が岸に来るまで神に祈るばかりである。

沈んでいた彼女はようやく浮かんできたのだが・・・

「がばっ！ごばっ！」

どうやらおぼれているように見える。もしかして・・・カナヅチ？
「あわわわ！そ、そりゃ無いだろ！」

あわてて衣服（学ラン）を脱ぎ捨ててパンツのみで得体の知れない水に飛び込む。ああ、将来の夢はライフセーバーだと決めておいて人命救助のための何かを知っていればよかったなあと思いつつ、クロールでおぼれている（既に沈みかけている）女の子の体を掴む。
「ごはっ！」

一瞬、ものすごい力で掴まれて俺も同じようにおぼれそうになったのだが・・・相手のほうが体重が軽く、既に力がいっていなかったで難を逃れることが出来た。そのまま引っ張るようにして二人して岸からはいでる。神様に祈ったからか、はたまた俺の泳ぎのセンスが良かったからか知らないが、とりあえず人命を救助することが出来た。

「げほ・・・げほ・・・」

隣でむせながらも辛うじて気絶していない女の子の背中をバンバン叩きさすりながら

「さて、これからどうすればいいのだろうか・・・人工呼吸はなくていいようだ」という考えを頭の中で“第一回 水に濡れた女の子をどうするか？の議会”を開いて意見を募る。結果、濡れた服を乾かしたほうがよい！との結論が脊髄反応で決まった。

「ちよつと待ってる。すぐにあったかくしてやるからな！」

落ちている一本の大きな木を引っ張ってきてそれに火をつける。女の子を引っ張ってそこに連れて行き、俺も学ランを拾ってきてパンツを乾かすことにした。女の子には学ランを渡して濡れている衣服を乾かしてもらい（勿論、彼女が脱いでいる間俺はパンツ一つで森の木に隠れんぼのオニ役を無言でしていた）それがそろそろ終わりそうになって・・・

「・・・ありがとう・・・」

「ん？ああ・・・」

初めて聞いた・・・いや、まあ、さっき逃げようとしたときに

「う、うん！」とつかまったときの

「きゃー」という声は聞いたのだが、それ以外の言葉を彼女の口から聞いて俺はなぜだかほっとした。俺的の考えなのだが、きっとあの化け物は俺が湖で用を足したので怒り狂ったので姿を現し、罰として彼女を捕まえたのではないか・・・という結果に至っている。つまり、これは俺のせいなのではないのだろうか？立ちしよんは犯罪だからだろうか？なんともまあ、法律に詳しい蛇野郎だ・・・だが、少女を襲ったら間違いない立ちしよんより重罪確定に違いない・・・

そう考えていた俺の耳に彼女の声が聞こえてくる。

「今日、“贄の日”だったの忘れてて・・・」

「・・・贄の日”？なんだ、それ？」

言葉から大体想像がつくのだが、ほら、あれだ

「物語性を崩さないのが主人公の王道」って奴だから聞いたほうがいいに決まっている。

「昔に残ってた風習で・・・“午前零時過ぎに森の泉に行くとそ

こだけ日が変わり、生贄が最後に過ごす一日となる”って話で・・・そのことを忘れてたんです・・・」

くすんと鳴いているようにも見えるその横顔に別に俺は感想など抱いておらず（実は嘘だ。ちなみに

「ああ、なんだ、俺の小便のせいじゃなかったんだ。よかったよかった」と思っていた）、それより大変なことを思い出した。

「というより、ここどこ？」

「あ、ここは王都ソードシアターってところの近くの森です。あの、あなたは私が召喚した人ですよね？」

「召喚？」

「ええ、あの魔方阵から出てきましたよ？覚えてますよね？」

俺が出てきたと思われる場所を指差す。

なるほど、確かにそこには魔方阵が描かれており、さらに中心には役目を終えたためか壊れているおぼろしきものがあつた。近くには杖らしきものが置かれていてなんともまあ、魔法使いらしいといえど魔法使いらしいと俺は思った。やっぱり杖か何か持っていないと魔法使いに見えないよなあ。俺も何かそういうの持とうかな？教師が授業に使う棒なんていいかもしれない。あれってどこで売っているんだろうか？

「・・・なら、俺を召喚したのはあんたかよ？」

「はい♪以後、お見知りおきを！」

ちなみにそういう台詞は召喚された側が言うのが理にかなっていると思われる。

「なあ、俺を帰してくれよ・・・いや、還してくれよか？」

「えーせっかくものすごく強い魔法使いを呼び出したのに・・・」
「か・え・し・て・く・れ！」

もてるほどの眼力を最大限に酷使して俺は相手に懇願した。さすがにびびったらしく、彼女は目を泳がせながら口を何度かパクパクして俺のほうを今度はきちんと見てきた。だが、未だにその目には恐れがあるようで少々やりすぎたかもしれない。

「え、えーっと、本当のところはその・・・先ほどあなたが放った魔法の刃のせいであなただを釣り上げた道具が見事に真っ二つにされてですね・・・湖の奥底に沈んじやいました。召喚してあなたをきちゃんと還そうと思っていたんですけど・・・それが無いところの召喚魔法って成功しないんですよ・・・」

「にや、にやにい」

あれ？じゃ、これって自業自得？でも俺、人助けしたよね？ギブアンドテイクでもこの世界に帰してくれてもいいんじゃない？あ、駄目？

「・・・・・・・・」

真っ白に・・・ただひたすら真っ白に染まった俺の代わりか知らないが辺りに漂っていた濃厚の霧がはれていく。

「あ、よ、よかったあ・・・霧もなくなったからこれで“贄の日”は終了です♪」

ぎこちなく・・・ただひたすらぎこちなく女の子はそんなことを言っ俺を元氣付けようとしてくれたのがわかったのだが・・・俺、これからどうしよう？今からでも湖に入って沈んでしまった釣竿らしきものを探してきたほうがいいのかもしれない・・・いや、そうしないと還れないのだろう。それならば、それならばいくしかあるまい！男はあるとき、決断せねばいかんのだ！（例…限定版を買うか通常版を買うか）

立ち上がって湖に突っ走り始めた俺を後ろからぶつかろうにして女の子が止める。後ろからの一撃に俺はパンツいっちょのままで地面にキス。鼻から流れる血や、体中をすりむいて（パンツをはいていたので最重要部分は無事）出てくる少量の血を痛むまもなく、女の子の声が聞こえてくる。

「だ、駄目ですよ！“贄の日”が終わったので湖には新たな生物が息を潜めています！今そんなことしたらきつとお口を開けてあなたを待ってるに決まっています！」

慌てたようにそんな感じでいってくる。ううむ、確かにそういわ

れると飛び込んだときに化け物の口が出てきたら俺、避けきる自信が無いんだよなあ・・・

「ほ、他にも還る方法がありますよ！ああ、家に帰りたくなつたなあゝって思つたときにはちゃんと私が責任もって還る方法を考えておきます！」

「・・・本当に大丈夫？」

「勿論です！」

「・・・あんた、両親いる？」

「ええと、お母さんならいますよ！」

「・・・わかつた。とりあえず真面目な話、保護者と話すことにしよう。悪いけど家に連れてつてくれ・・・」

「はい！」

とても元気よく返事してくれたのでヨカッタヨカッタ。こんな世界にいたらやけになつて

「ハンター零時」って自称にしちゃうところだった。

学ランをきちんと着て女の子と一緒に夜明けとなり始めた空を眺めながら森の道を進む。本当にこの道は大丈夫だろうか・・・熊と出ないよね？いや、状況的にもっとやばそうなのがでてきそうだけどさ。不安を消すためにどうしたらいいかわからなかったのと、りあえず俺は女の子のほうを向いて彼女の名前を尋ねることにした。

A..世界が”嘘”を見せる日（後書き）

さてさて、どうだったでしょうか？面白かったならば幸いです。しかしまあ、零時も異世界デビュー（？）ですよ。別に何かあるってわけでもありませんけどね・・・今回の話では予定としてはAとBに分けられており、Aでは王道を・・・Bではちょっと変わった話にする予定です。今のところはずっとAを通していききたいと思っていますので、皆様、応援よろしくお願いしますね？何か聞きたいことやよくわからないところがあれば感想、メッセージのどちらでもいいので送ってください。というより、送ってくれるとうれしいのですが・・・それでは、皆さん、また今度！

A..”真”と”偽”（前書き）

さて、今回は主人公の親友、瑞樹の紹介です。瑞樹…成績優秀、運動神経抜群、顔よし・・・と、基本的には欠点がないような人物だが、ちよつとマニアックな性格であり、零時の幼馴染でもある。

A…”真”と”偽”

二、

「なあ、あんたの本名はなんて言うんだ？」

「え、な、名前ですか？」

きよとんとした表情でこっちを見てくる。そして、少しばかり顔が赤い。

「ああ、名前……もしかして名無しさんか？」

「あ、あのう……あなたの世界じゃ、偽名とか使わないんですか？こちらの世界じゃ、基本的に偽名を使っているんです……」

「偽名？ああ、使う人もいるかなあ？瑞樹がラブレターをもらったときは相手の女子生徒が瑞樹の反応を確かめるために他人の名前を偽ってたっていつてたっけなあ？とりあえず、基本的には本当の名前を相手に教えるぞ？」

「あ、そ、そうなんですか……あのですね、それならあなたの名前を教えて欲しいんですけど……それがこの世界での礼儀なので……」

この世界では礼儀としては名前を聞いたほうから名前を名乗らなくてはいけないらしい。いや、そういえば俺たちの世界でもそんなもんだけどよ……

しかしまあ、さっき話したときはきちんと伝わっていると感じたのにやっぱり文化とかそういうのが違うもんなんだなあ……これも一種の旅行かもしれないな。

「俺の名前は剣山零時だ」

「ツルギヤマ？剣山さんって呼べばいいんですか？」

「……やっぱり、零時でいい」

「わかりました。零時さんですね？その、ご趣味は？」

ぽーっとした表情で俺のほうを見てくる。趣味か……

「趣味は機械いじりだ……」

「キカイ？キカイって奇怪ですか？」

「あれ？この世界に機械って言葉無いのか？あゝわかんないのなら・
・そうだなあ、機械って・・とりあえず、“人が造ったもの”
をいじることだ」

「ひ、人が造ったものをい、いじること！？」

ぼんという音が隣から聞こえてきたのでそちらのほうに目をやるとめちやくちゃ顔を真っ赤にして目を瞬かせている女の子の姿があった。

「何？どうしたの？」

「あ、い、いえ・・その、い“ぢ”ることが好きなんですよね？」

口に右手を添えて上目遣いでこちらを見てくる女の子・・いじるのアクセントがい“ぢ”ると何故か聞こえてしまった・・

「・・いや、その言葉だけ聞くとなんだかおかしいぞ・・それより、こっちの名前を教えただから偽名じゃなくてきちんとした名前を教えてください」

「だ、誰にもこの世界の誰にも私の名前を教えないですよね？」

そりゃ、教えるにもこの世界に知り合いは目の前の女の子しかない。初めてこっちに來たのに俺のことを知っている奴がいて俺が知っている奴がいたらこの異世界との交流が発展するかもしれない。

だが、俺の知り合いにはまだ

「異世界に引越した」というひとはいないなあ・・

「教えない。約束する・・」

「約束ですよ？」

「わかってる」

息を何度か吸ったり吐いたりを繰り返して顔の温度を下げると潤んだ瞳を俺に向けて言った。ここだけだとなんだか告白シーンみたいだな。

「あの、やっぱり恥ずかしいんで耳を貸してくれませんか？」

「・・・ああ・・・」

この世界では名前を告げるのがそんなに恥ずかしいのだろうか？そんなことだったらきつとテストの氏名の部分で制限時間が間に合わなくなってしまうに違いない。先生に渡すときは皆して顔を真っ赤に染めるという奇怪な現象が毎回起こるに違いない・・・

さて、馬鹿な考えはこのくらいにして俺はかがんで女の子の口当たりに耳を持っていた。

「大声で叫ぶとかそういうことはなしな？」

「わ、わかりました・・・」

以前友達から

「ちよつと耳貸して」といわれたので耳を持っていたら大声で叫ばれたことがある。そのときはその相手を我を忘れてボコボコにした思い出があるのだが・・・まあ、あれだ。この子はきつとそんなことしないだろうが念のためだと思って告げたのである。皆、そんなことしちゃ駄目だぞ？

「・・・アイ・・・」

「アイ？アイーン？」

「も、もう一度いきますね？」

「ああ・・・」

「・フ・・・シャ・・・ン・・・」

「・・・わからねえなあ・・・」

俺の頭の中では

「ふはははは！シャイニン○・フィン○ー！」という意味不明な文字が出てきたところだった。

「もう！フレア・シャイン！フレア・シャインですっ！」

「ぬがあ！」

思い切り耳元でそういわれたために俺はにげるようにして女の子・フレア・シャイン・・・から離れたのだった。

「いったたた・・・大声で叫ぶのなしっていっただろ・・・」

「あ、す、すみません・・・約束破っちゃいました」

「まあ、聞き取れなかった俺も悪いんだけどな・・・」

耳をさすりながら立ち上がってフレアの方を見る。

「フレアか・・・いや、フレアちゃんか？」

「い、いえ・・・フレアと呼んでください・・・お願いします」

「わかった」

未だに顔が心なし赤い女の子を促すようにして森の道を歩き始める。フレアのおかげで不安は既になくなってはいないが、かなりな
くなった。

「フレア、王都までどれだけかかるんだ？」

「ええと、一時間ほども歩けばもんにたどり着けます。それから役
三十分ほど歩けば私の家にたどり着けますよ？」

一時間三十分も歩けるだろうか？俺、眠いんだけど・・・と思い
ながらも隣にいるフレアがまったく眠そうにしていなくてところを見
るとなんだか年上として情けない気が・・・

「なあ、フレアって何歳だ？」

「え、ええっと・・・高位学校初年ですけど？あ、高位学校初年っ
て言うのはですね・・・低位学校って言うのがあって、次に中位学
校って言うのがあって・・・（以下長いので省略）・・・そんな
もんです」

つまり、そういうことなのである・・・簡潔に説明するなら高
校生ってことにしておこう。わかりづらい。歳は十六歳だそうだ。

「ああ、そうなんだ・・・それより、この世界について聞きたいこ
とがあるんだが一ついいか？」

「ええ、なんですか？わかる範囲なら教えてあげますよ？」

「あの蛇っぽい生物を倒したときに血が流れたりしなかったんだが
あれ、何でだ？」

もしかして連中は血も涙も無いような生物なのだろうか？

「ああ、あれは・・・きっと誰かが召喚して放置したものか・・・
もしかしたらの可能性なのですが、幻覚の可能性だってあります」

「幻覚？でもフレアは現に尻尾で掴まれていたし、尻尾がなくなつて湖の中に落ちたじゃないか？」

まだ名前を呼ばれるのに慣れていないのか少々顔を赤く染めながらも彼女は考えをまとめるように静かに口を開いた。

「ええっと・・・零時さんの世界ではそうなのかもしれませんが、私たちの世界では自然現象とかにも誰かの魔力がこめられているんです。その結果、自然現象それ自体が現実を見せ始めたりするんです。ええと、わかりません？」

いや、わかるも何も・・・俺にはそういうことは理解できない。というより、まだこつとに来て一日も経っていないのである。われといわれようが理解しろといわれてもわからないものはぜんぜんわからないのである。

その後、ずっとそんなよくわからない話を聞きながら・・・俺らはようやく王都の門までやってきた。

「すいません、門番さん！もう、起きてますよね？」

「ああ、シャインの娘さんか・・・」

一人の門番（無精ひげにバンダナ。そして、短パン）が姿を現してそんなことを呟いた。

「で、そっちの御仁は誰だい？」

「えっと、こちらは私を“贄の日”から助けてくれた・・・えっと、レンジ・D・チンさんです♪」

わかってる。俺はわかってる・・・この世界じゃ、偽名を名乗るのは当然ってのはわかってるけど・・・なんだろう？無性にフレアのそのにこやかな顔を引っ張りたくなった。

「・・・ああ、チンさんか・・・この前も似たような人が来たなあ・・・」

「ええ、チンさんです。ええっと、愛称はチンチンです」

ああ、まるでパンダみたいな愛称だな・・・

「何も、初対面の人に向かってチンチンはないだろ？」

「・・・まあ、いいや。シャインの娘さんがなついているのなら大

丈夫な人なんだろう。ほれ、通行許可証」

「あ、どうも・・・」

渡された紙には

「つゝこゝきよかしよ」とかかれているだけだった。ああ、なんて下手な字なんだ・・・と思う前に俺は自分がこの世界の文字をきちんと読んでいることに気がついた。まあ、そんな些細ながらも重大なことはどうでもいいや。

「さ、行きますよ、零時さん♪」

「はいはい・・・」

フレアに手を引かれながら俺は少しばかり小走りをしながら大きな門を抜けたのだった。既に太陽は空に浮かんでおり・・・門から先には大きな石畳の道が待ちの中央に聳え立つ大きな城の入り口までひろがっていた。

「はあゝすごいなあ、俺、城なんて松山城ぐらいしか（写真で）見たことが無かったよ」

あと、オダギリ◯ヨをテレビで見たぐらいだろうか？

「すごいですよね？あれが王都の心臓部となっているジョーキャツスルです」

自慢げにそんなことを教えてくれているフレア。ジョーキャツスル↓城城？

「なあ、そんなことよりフレアの家はどこだ？」

「えっとですねえ・・・こっちです、ついてきてください」

再び手を握られながらそして、街の人たちに挨拶しながらフレアは裏道を通っていく。表街道ほどの華やかさがなくなってきて、目つきの悪そうな人たちが並々ならぬ視線を俺に向けてきたりもしたのだが・・・フレアが知り合いだと言げると

「あんちゃん、何か入用になったら俺たちに相談しな・・・」と瞳に危なさそうな光をたたえて俺に告げてくれたのだった。その申し出は気持ちだけもらいたいと思う。

「つきましたよ！」

「・・・」

フレアに引っ張られて約三十分ぐらい・・・目の前に現れたのは空き地のようなところだった。公衆便所らしきものが建てられているぐらいだろうか？

「つきましたよって・・・ここ、空き地じゃんか？」

「いえ、違います・・・あそこが入り口となっているんです」

そういつて公衆便所を指差す。

「地下に私の家はあるんですよ。ええと、別の中はすごいんですよ？ 例え雨が降ってきてても流れ込んできて溺死するってわけじゃないんです」

そりゃ、まあ・・・すごいね。建築物に対して疎すぎる俺にはまったく理解できないのでとりあえず、フレアの後が続いて公衆便所の扉をくぐる。そこからは下にはしごがおいてあり、はしごを下りた先には鉄の門が俺たちの行方をさえぎっていた。

「ええと、これはノックすればあきます」

かわいらしくノックしているフレアの隣で俺は

「あなおかし・・・なんで地下に家なんか作ってんだ？」と考えていた。

「あきましたよ？」

フレアが俺の手を引いて・・・ようやく、何故地下に家を作ったのか理解できた。

そこには、かなり広い大広間が広がっていたのだ。

「えっと、あと・・・両手で数え切れないほど部屋があります」

「はあ・・・でかいな・・・こりゃ、地上に作るのも無理か・・・」

「とりあえず、お母さんを探してきますね？ 寝ていると思うんですけど・・・」

ちよっと待っててくださいねといわれたので大広間に置かれている椅子の一つに腰掛ける。フレアは部屋の脇に置かれている階段を

下に降りていった。

大広間の天井を色鮮やかにしているのは電気らしいが・・・そうでもないようだった。何か明るい玉が天井に当たりそうであたらないうという微妙なところに浮かんでいてそれが部屋を明るく照らしていた。そのほかには会議用にでも使われるのか知らないが、大広間の中央に巨大なテーブルが置かれている。椅子は左右に分かれて十個ずつあり、俺はその右の一番手前に座っている。

「なんだか自分がすぐ場違いな場所にいるような気がする・・・」

ああ、そういえばフレアはいまさら気がついたのだが、金髪だったなあ・・・この世界じゃ、金髪が常道なのだろうが・・・俺は未だに黒髪・・・ううん、街を歩いていた人たちも心なしか、違う色の髪の毛だったような・・・

「零時さーん、つれてきましたよ！」

間の抜けた声が聞こえ、何故か上に行く階段からフレアは降りてきたのだった。

A：“真”と“偽”（後書き）

さて、今回のお話はどうか？じっくり進んでいっているもので物足りないなあと感じている人もいるかもしれません。それと、題名がなんとなく、コメディーっぽくないと思っている人もいるかもしれませんが・・・実は、最終部には表と裏の話をつけたいと思っているのです。つまり、AとBの話を考えているので（勿論、主人公は零時ですが、登場キャラは変わります）一応、両方とも同じ名前にしておきたいと思ったからです。あとがきでかいているのかわかりませんが、この小説を読んでもくださった作者のかたがたがどのような小説を書いているのか少し、興味があるのでメッセージなんかを送ってくれたときに小説名も一緒に書いてくれませんか？そうすればそれを読んで評価したりメッセージを送り返したりとできると思いますので・・・それでは、次回はフレアの秘密とフレアの母親を登場させたいと思っています。

A::帰るべきとなる場所（前書き）

さて、今回からちょっとした小話をあとがきに書きたいと思います。
この物語にはほとんど関係ないですが、お暇な人は見てください。

A：帰るべきとなる場所

三、

「・・・お客さんかい？フレア？」

ぼさぼさの長い髪の毛をまとめようともしせずにそのまま腰まで伸ばしている女の人が現れた。

歳は俺より二三歳ほど上ぐらいではなかろうか？フレアも可愛いほうの部類に入るが、この女性も綺麗だった。まあ、フレアのお母さんだろうからそれは当然だろう。ものすごく眠そうな表情で目は半分死んだような感じである。着ている服は作業着のようなものなのだが、彼女が着ると完璧に着こなしているのがわかる。

「ええとですね、この人は私が召喚した人なんですよ？すごいでしょう？」

俺に母親を、母親に俺を紹介せずにフレアは胸をそらして母親に自慢している。ああ、そういう子もいるなあ、たまに・・・

その言葉を聞いたフレアの母はものすごく驚いたような表情をしたのだった。先ほどまで死んでいた瞳は目の前に半漁人が現れたような顔をしていた。

「・・・なんだって？誰が誰を召喚したって？」

「え？私がこの人を召喚したんですよ？」

そういったフレアのほっぺたを両方からつまむ。

「・・・いひゃあいれす！（訳・・・いたいです!）」

「・・・あんた、あたしの部屋にあるあれをつかったのかい？」

「ひゃい、ふあれをしゅかえばしゃうかんひゅふぎゃふひゃへるとひひました（訳・・・はい、あれを使えば召喚術が使えると聞きました）」

さらにほっぺをつねる力をあげながら今度はこっちに視線を這わせた。その目はものすごくかわいそうなものを見る目をしていたのだった。なんだ？どうしたんだ？

「・・・はあ、あんた、名前は？」

「え、俺ですか？・・・零時ですけど？」

「零時か・・・悪いね、このおばかが迷惑を現在進行形で掛けているそうじゃないか・・・とりあえず、フレア・・・あんたはもう寝なさい」

ようやくほっぺつねりから抜け出すことに成功したフレアは

「おゝいたっ・・・」と呟きながら自分の母親を見る。

「・・・でも、昼ですよ？」

「寝てないんでしょう？」

「まあ、そうですね・・・言われて見れば・・・眠いれす・・・」

おやすみなさいといいながら去っていったフレアに

「ああ、おやすみ」と二人で返事をしていて俺とフレアの母親がその場に残された。

「・・・こつちの世界にフレアに呼ばれたんだって？」

「え、まあ・・・」

「おっと、名乗るのが遅れたねえ・・・あたしの名前はネリユっていうんだ。フレアから偽名の話は聞いたのかい？」

「ええ、まあ・・・」

「そうかい、これはあたしの本名だからな・・・」

そういった後にため息をついてネリユさんは俺に頭を下げた。

「・・・うちの娘があんたに迷惑を掛けちまってすまない！」

「え？」

突然のことに俺は驚いてぎょっとなって眼をぱちくりと四回ほど繰り返したのだった。

「・・・えっと、とりあえず・・・頭を上げてくれませんか？未だに状況がつかめてないんですけど？」

「・・・そうだね、詳しく説明したほうがよさそうだからね・・・まあ、娘が出来が悪けりゃ、母親の私も出来が悪いつて事だけだね」

そういつて俺の目の前の椅子に座り、彼女は

「ふっ」と自嘲気味に笑ったのだった。そして、今度はかなり真剣な顔となって重苦しそうに口を開いたのだった。

「・・・結果から言うけど、今のところ一度召喚しちまったものをもとの世界に戻す方法なんて見つかったじゃない。だから、零時、お前は元の世界に帰れない・・・」

「あゝやっぱりですか・・・」

「あれ？反応薄いな？」

彼女は

「シリアス顔が足りなかったかな？」と呟きながらも俺のほうを見たのだった。

「・・・普通この場合はがっくりときたり、激怒したりする場面じゃないのか？」

「んゝそうなんですか？でも、フレアが必ず俺を戻すっていつてくれませんでしたからね・・・」

俺がそういうと彼女はかなり驚いた顔となったのだった。美人さんが驚くと非常に面白い顔になることを俺ははじめて知ったのだった。

「見ず知らずのどこぞの馬の骨ともわからない娘を信じるのかい？」

「いえ、そういうわけじゃありません。俺が信じているのはこの世界では今のところ俺だけです。この世界のことを詳しく知る人の近くにいる損にはならないと思います。損得勘定で今のところは動いているだけですよ・・・」

途中、言っていてなんだか恥ずかしくなってきた顔がちよつとだけ赤くなるのを感じてしまった・・・

「へえ、あんたも大概のお人よしか・・・フレアがなつくぐらいだからねえ・・・」

そういつてしばしば考えるような仕草を見せて

「うん、そうだな・・・」と頷いた後に俺に立つように促したのだった。

「さ、迷惑を掛けた側だ・・・宿と食事ぐらいは提供させてもら

うよ」

「え、いいんですか？」

「いいものにも、この家にはあたしとフレアしか住んでないんだ。しかも、あたしや、夜に仕事に行っているからね・・・フレアはずっと一人で泣きながら夜を過ごしてきたんだ」

遠い目をしてそんなことをネリュさんは呟く。しかし、俺が瞬きを一回したら既に笑っていた。

「さ、こっちだ」

「どうも・・・」

フレアが上がっていった階段をネリュさんと共に上がり、彼女は数ある部屋の一つを指差した。その隣の部屋には“私の部屋”と書かれており、さらにその隣には“あたしの部屋”と書かれている部屋があった。

「ここ」

「ここですか？」

「ああ、そうだ。部屋が隣になってりや、何かあったときにも大丈夫だろう？なんなら、フレアかあたしの部屋のどっちかに一緒に住むかい？その場合は同じような生活をしてもらわなきゃ、困るけどね」

「たとえば？」

「そうだね・・・寝食を共にする・・・つまり、寝るときや、あたしの隣かフレアの隣だ。どうだい？悪い話じゃないと思うけど？」

なんだか非常に意地悪そうな表情でそんなことを言ってくる。むう、初対面の俺にそんなことを聞いてくるなんて・・・

「じゃ、ネリュさんの部屋で・・・」

「そうかい、それなら寝ようと思ってただけど・・・」

俺を後ろから抱きしめるような感じで引っ付いてくる。あわてた俺は声を張り上げたのだった。

「じよ、冗談ですよ！」

離れようにも引っ付いて離れてくれなかった。

そのまま俺の部屋となった部屋を彼女は開けて中に入り、入ってすぐ近くにあった電気のスイッチらしきものを押して部屋の中央の天井辺りについていて電氣をつけ、ようやく離れてくれて近くにあったベッドに座ったのだった。

俺はなんだか自分が壊れたような感じがしたので螺子を頭に思い浮かべている途中だったのだ。ううむ、この人ってかなり他人のペースを崩すのが得なのかもしれないな……。俺ってよくマイペースだって言われてるんだけどなあ……。少しばかりへこんでいる俺の耳に彼女の声が聞こえてきたのだった。

「ここはホテルじゃないから鍵は無いけどね……。まあ、わかんないことがあったらあたしかフレアに聞いてくれ……。ああ、そうそう……」

ちよつと声を潜めて俺に隣に座るように言った。

「……。なんです？」

アーティファクト

「人工物って話、フレアから聞いた？」

「人工物？それって何ですか？」

「んー聞いてないか……。ちよつと、話していいかい？」

「ええ、構いません。静かに聴いてますよ」

「……。そうかい、人工物って言うのは“人が神様になるための試練”の一つってこの世界では言われているものさ。“完璧なる人間を作る”ってことをコンセプトにかなり前……。数千年前ぐらいから行われているものさ……。しかし、これまで一度も“完璧なる人工物”は作られなかったんだよ。その結果、人は神になることをあきらめ、その“人工物”もあきらめたんだ。何で出来なかったのかわかるかい？もとより“完璧なる人間”なんて一人もいなかったんだ。人間ってのは大半が欲の塊さ。確かに、中には欲を持っていな人もいるけど……。そうしたら別のものが足りなかったりするんだ。だから、いつの間にか歴史の山に消されるところだったんだけど……。一部じゃ、やっぱり“人工物”を歴史の裏で作っている連

中もいたのさ・・・実はあたしの家系もずっとそれでね・・・小さい頃から両親は人工物をずっと作ってたんだ。そりゃもう、何かにとりつかれたように毎日毎日“人工物”を作っていた。そんなある日、両親は私を置いて消えてしまった。まあ、よくはわからないけど誰かと協力してそれを作るんだとさ・・・まあ、その頃にはすでに私は一人で生活できるまでになっていたから、親に反抗するつもりでもあった。まあ、そのままここに住み着いて生活してたんだ。で、親の背中を見て育った私だったからねえ・・・私も“人工物”を作ったんだ・・・他人に迷惑を掛けないようにして生活しようにも、やっぱり寂しいって気持ちにはあったんだ。だけどまあ、まさか他の世界の男の子に迷惑を掛けるようになるなんてうちのフレアも成長したもんだ」

話し終わってそんな複雑な表情を見せたのだった。

「え？フレアって血がなくなっていないんですか？」

「ああ、そうだよ。だけどまあ、あたしとは血がなくなっていないけど・・・最低でも血がなくなっている連中並の絆があるって自負するね」

そういつてにやりと笑うネリュさん。その瞳は静かながらも、絶対的な自信を持っているようだった。

「さて、ご自慢話はこのぐらいにして・・・この世の中って言うのはどう転ぶかわからない・・・この世界じゃ、別に“人工物”がどうかと言われてないからね・・・だけど、この世界には魔法がある。間違っても信頼できない人物に名前を教えたりしちゃ、駄目だよ？あんたみたいなおせっかいが一番危ないからね・・・」

少々とがめるような視線を俺に送ってネリュさんは笑ったのだった。それを言うなら、見ず知らずの俺を拾ってくれた子の二人のほうか（一人は原因だが）よっぽどお人よしではないかと俺は思うのだった。

「じゃ、私は眠いから寝る・・・寂しくなったらあたしの部屋に来るといい」

「ええ、話に来ますね」

ネリユさんは

「じゃ、またね」といって去っていかうとした。なんとなく、俺は彼女を呼び止めたのだった。

「あ、そういえばネリユさんって何歳ですか？」

「・・・な、何歳に見える？」

恐る恐るといったような表情で俺を見たのだった。

「・・・二十一ですかね？」

「残念。私は二十歳だ。あゝあたしはふけて見えるのか」

がっくりと来ているネリユさんにあわててフォローをいれることにした俺。

「ええと、その、大人びてるって感じたんですよ」

「それって裏を返せば実年齢の割にはふけてるってことよね？」

「うぐっ、た、確かに・・・」

彼女の反乱に何もいえなくなった俺だったのだが、ネリユさんはそんな俺の表情を見て笑ったのだった。相当、困ったような表情をしていたのだろう。なかなか笑うのをやめてはくれなかった。

「まあ、あながち間違っても無いから構わないからね」

「というど？」

「ま、後でのお楽しみってことで・・・じゃあね。悪いけどこれからはフレアの面倒をみてくれよ？」

「わかりました」

ネリユさんはそういつて完全に出て行き、残された俺はベッドに倒れこんだ。

「・・・疲れた」

見知らぬ世界、立ちしよんの現場をおさえられた、化け物に襲われた、美少女にあった、城がでかかったなどなどといろんなことをあつという間の期間に体験してしまったのはさすがにまずかったらしい。俺の体は既につかれきっていたのだった。

「・・・ちょっと、眠るか・・・」

先ほどのネリユさんの言葉（寝食を共にする）を思い出したのだが、そういう考えを捨てて眠ることに専念する。

「……羊が……」

羊でも数えようかと思いつながら寝返りをうつ。

「羊が……一……匹……羊肉が……二割引……」

「零時さん、いじられにきましたよ」

「……フレアが……一人……」

あれ？ぼやけてきた視界にフレアの姿が映ったような……う

うん、そんなことよりかなり眠くなってきたなあ……

「ありゃ？もう寝るんですか？」

「……」

「返事ぐらいしてくださいよ？」

「ぐが」

「む、完璧に無視する気ですね？それなら、私も共に寝ます！」

フレアはなにやら俺の隣にやってきてそのまま寝転がったのだ。まあ、既にそのときには俺の意識はあっちの世界（夢の世界）に旅立ったのだった。

A：帰るべきとなる場所（後書き）

ようやく本腰が入ってきた・・・といいたところなのですが、実質問題、まだまだ登場人物は出てきます。では、ちよつとした小話を・・・あれは高校二年のときだったでしょうか？作者の高校ではマラソンがあり、女性の先生が教えてくれました。生徒たちの「寒い！」「疲れる！」との言葉に先生が返した言葉がこれでした・・・「男はたくましくないとね！」とのことである。さらに、おしゃべりが続いていると「男はクールじゃないとね！」といったりしました。まあ、ちよつとした小話なんでここまでにしておきますね。評価（この話についてでも結構です）してくれるとうれしいです。

A…危険な魔法の使用法（前書き）

登場人物紹介フレア・シャイン…零時を釣り上げた張本人。魔力によって作られた人工物の魔型で性格はいたって温厚。今まで広い家に母親と二人で生活していたので零時がやってきたことを非常にうれしく思っている。ちよっとおばかな天才肌。

A…危険な魔法の使用法

四、

目を覚ますと可愛い女の子が隣に眠っていた……。という状況があったらどうするだろうか？ いや、女の子の場合は逆だ。可愛い男が自分の隣に眠っていたらどうするだろうか？ 俺の隣に女の子が寝ていたら俺は別に何もしない。だが、男が隣に寝ていたらそいつを二階の窓から簀巻きにして落とすこと確定だ。

「……………」

視界に映る少女が誰だったか脳内ネットワークが検索を始める。
てーん！ 一件のヒットです♪

「ああ、フレアか……………」

「すぴ〜」

非常に良く寝ていてぷにぷにしていそうなほったをつねろうか、鼻に指を突っ込んでやろうかと悩んだのだが…………

「額に肉とでもかいてやるか？」

いやいや、やっぱりそういうことはよそう。自分がされたときは得も言わぬ敗北感を味わってしまいうだからな…………

「にゃふ……………」

「おい、フレア…………朝だぞ」

肩を掴んで左右に振ってやる。うるさそうに整った顔が歪み、両手を挙げて揺らすのを邪魔しようとする。しかし、目を瞑っているので結局、目を開けたのだった。

「…………誰ですか？」

「そうだろうな、そういうと思ったよ。誰だ？ 昨日、俺を釣り上げたどこぞの魔法使いは？」

「…………あ、すいません…………寝ぼけてました」

目を眠たそうにこすりながら彼女はあくびをかましていた。母親と同じように腰まで伸ばしている髪の毛はぼさぼさになっており、

寝起きだから知らないが、かなりボーっとしている。

「起きたか？」

「いえ、眠いです・・・まだ、お母さんは寝てる時間帯ですね・・・そろそろ、学校に行かないと遅刻になってしまいます・・・」

部屋に備え付けられていた時計らしきものをちらりと見てベッドから降りる。ピンク色の枕はそのままここに忘れていつている。

「・・・朝食はパンですね・・・着替えてきますんで、昨日の大広間に先に行ってください・・・」

「わかった」

部屋を去っていったフレアを追いかけるように俺も部屋を出て大広間にある大きなテーブルの一つに俺は腰掛ける。

待つこと三十分ぐらいだろうか？眠気がぶり返してきた頃合だったので剣を持って睡魔と頭の上で戦っているところ世界の彼女が通っている学校の制服に着替えたと思われるフレアが階段を駆け下りてきたのだった。

「お、思った以上に時間を食っちゃったみたいです！遅刻です！」

「・・・ああ、そうか・・・」

朝食はまだだろうか？と俺は思いながら地団駄を踏んでいるフレアを他人事のように見る。いや、まあ、他人事なのだが・・・

「感心してる場合じゃありませんよ！」

「してねえ・・・眠い・・・」

そんな俺の右腕がいきなり掴まれたのだった。

「こうなったら走るしかありませんね！朝食は学校で食べることにします！行きますよ、零時さん！」

「お・・・？」

あれ？俺も？という考えを俺に持たせる前にフレアは

「いってきます！」と大声で叫んで家を後にしたのだった。当然、俺もつかまれたまま・・・一緒に道を駆けていたのだった。

「おはよう、シャイン」

「おはようございます、リーディさん！」

「おはよう、遅刻じゃないのかい？」

「まだ間に合います！」

道の途中で会う人々に挨拶をされてそれをまじめに返しているフレア。どうやら、町の人からは結構好かれている人のようだ……。しかしまあ、何で俺も一緒になって走っているのだろうか？何？マラソン大会でもあるの？

寝ぼけた俺がようやく平常時の思考回路になると、近くから鐘が鳴るのが聞こえてきた。

「が、学校の鐘です！あれが鳴り止んだら遅刻です！もう、駄目です！」

そう叫ぶが、まだあきらめていない様子のフレアに俺は尋ねる。

「それなら歩いたほうがいいだろ？」

「何を言っているんですか！根性さえあれば何でも出来ますよ！」

「・・・根性論かよ？」

しかしまあ、どうやら根性でどうしようにもこの距離はいかんせん、駄目のようだ。門の前に先生が待っており、その先生は

「残念でしたあゝ」という顔をして門に手をかける。どうやら、根性が負けてしまう瞬間に立ち会ってしまったようだ。

「零時さん、魔法でどうにかありません？」

「え、ああ・・・わかった」

俺は右腕を振ってフレアに魔法をかける。

「素早く（四倍速）なれ♪」

自分にも魔法をかけるのを忘れていた俺はやばいと思ったのだが・・・遅かった。残像を残しながら走り始めたフレアの手を握っていたので・・・

「腕があゝ腕があゝ千切れる！千切れる！」

「おお、ぎりぎりセーフです♪」

気がつけばフレアは止まっており、先生は啞然として俺たちを見ている。

そして、俺は校門から引きずられた挙句にフレアから約一メートルほど前に転がっていた。

ついでに言うなら、何かと校内にいる人たちが俺たちを見ている。そりゃそうだ、生徒がいきなり目にも止まらないスピードで駆け抜けたのだから・・・先生が門を止める手を止めてしまったのでこっそりと本当は遅刻してしまった連中が何人か入ってきている。うむ、今思いついたのだが、別にフレアの足の速さを上げなくても先生に魔法をかければよかったのではないだろうか？

「フレア、今度からは遅刻には気をつけような？」

肩が外れていないか確認しながら俺はよろよろながらも立ち上がった。擦り傷に切り傷、それと精神的な傷がなんだか以前より増えた気がする・・・人はこうして強くなっていくのだろうか？

「すいません、以後、気をつけます♪」

そんなに楽しかったのか、ものすごくうれしそうな顔をしながら俺にそう告げたのだった。もしかしたらわざと遅刻しそうな時間帯に出てくるかもしれない・・・くれぐれも、そうならないように努力しよう。

「そういえば、俺が学校来てなんになるんだ？」

たずねてみると彼女は

「うーん、とりあえず、お母さんが校長先生に会わせてきなさいって言ってましたから・・・」とのことである。まあ、ネリユさんの意向ならそれに従うほか、無いのできちんと従うことにしよう。

「じゃ、校長室はどこだ？」

「ええと、あそこですね・・・」

フレアは俺が見ていないのに適当に指差している。そういえば、せっかくの学校を良く見ていなかったな・・・と思いながら隣で「迷っちゃわないように気をつけてくださいねー零時さん・・・それと・・・」としゃべっているフレアを軽く無視して学校を見て・・・

「でかいな、学校・・・」

五階建てぐらいの学校がそこには建っていた。いや、こりやまた、王都の中心にあったお城よりは小さいとはいえ、学校所有地を入れたら意外と王様が住んでいると思われるお城よりも上なのではないだろうか？

真っ白なレンガ造りの学校は中世の古城を思わせるものがあったのだが、屋上となっていると思われる場所にはなにやら丸い球体のようなものがあった。あれだけいやに近代的で七色の光をまるでクリスマスツリーのように発光させている。

一風を成すあの球体の存在を聞くために隣を見たのだが……。「あれ？フレアがいねえ!？」

俺の周りにいつの間にかフレアが消えており、先生や生徒たちも既に姿が見えなかった。あれ？何で？俺ってもしかして置き去りを食らってしまったのだろうか？

普通だったら異世界に来てしまった挙句に置き去りを食らっててんやわんやで侵入者とかと間違えられておじやんなのだろうか、そうはいかない、いや、いくものか！

「というわけで、俺はこれよりフレアの学校に侵入し、自分のその目である学校の屋上にある謎の球体の正体を突き止めたいと思います!」

テレビの突撃リポーター風に自分でそう告げて走り始める。別に障害物など何もなく、俺はすんなりと校内に進入成功したのだった。まあ、最近は何かと物騒だから事務室かどこかで誰々に用があって何々のために来ましたと告げないとはいれないからなあ……

「さて、あれは屋上だからとりあえず階段を駆け上がればそれでいいかな？それなら別に誰かと会ってわけでもないし……」
階段を探すことにして俺は辺りをうろろとし始めた。

そして、十分後……

「ここはどこだあ!？」

いつの間にか居もしないミイラを探してミイラ取りになってしまったような心境にかられてしまっている俺、剣山零時……この歳で迷子になるとは思わなかった。ここどこ？僕は誰？

「さて、どうしたものだろうか？」

未だに階段を見つけ切れていない俺はもう面倒になったのでフレアの家に戻るとうと思ったのだが、おかしなことに外に出れないのであった。いや、まず……さっきからずっと同じところを回っている気さえするのだ。ああ、そういえばフレアが

「迷わないように」といつていた気がしないでもないなあ……いや、いまさら言っても後の祭りなのだが。

「今手元にあるものでこの奇奇怪怪な状況を打破するしかない！」

まあ、俺は尊敬する万能青猫機械じゃないので出来ないことが多いのだが……さて、俺のポケットから出てきたものは次のものである……生徒手帳、ハンカチ、ポケットティッシュ、シャーペン、メモ帳、螺旋、写真……と、どこの高校生だって持っているものしかない。

「じゃ、これを使って状況を打破するか」

いつの間にか十字路に立っており、俺はその十字路の中央に座ってシャーペンを立てる。そして、シャーペンが倒れた方向に進むことにしたのだが……

「あれ？シャーペンがたおれねえな？床に突き刺さってんのか？」

立てたまではいいのだが、シャーペンは待てど暮らせど、倒れることは無かった。

あれ？普通はシャーペンって床に刺さるのか？と首をひねっていると座り込んでいる俺の視界に誰かの靴が目に入ったのだった。

俺が目を見るとその相手は驚いて俺から数歩飛びずさった。

目の前に映り込んできたのはこの学校の生徒と思われる人物であり、なんだかとてもびくびくしているような人だった。目が悪いのかぐるぐる眼鏡を掛けてあたふたとしている。俺を変質者か何かと勘違いしているのか、俺が一步踏み出すと彼女も一步後ろに下がり、

俺が二歩目を踏み出すと彼女は四歩も後ろに下がったのだった。何もそんなに離れなくてもいいだろうと目の前の女の子を見た俺だったが……

「えええええ、ええっと、あ、あああ、あの！こ、この学校の生徒じゃないですよねっ？」

おどおどしながら俺のほうを見てくる。一応というより……着の身着のままこの世界にやってきたのだから必然的に着ている服は俺が通っていた高校の学ランである。

「まあ、そうですが？」

まるで反応をうかがうように俺を上目遣いで見てくる相手にそう告げる。告げるとすぐに彼女の顔がかなり怯えているような表情になった。

「こ、ここは部外者立ち入り禁止の場所ですよ！そ、そんなことはこ、この学校の生徒会長であるわ、私が許しません！」

この学校の生徒会長と思われる人物が声を大きくしてそんなことを言ってくる。いや、生徒会長うんぬんより正直俺だってこんなところに来たくもなかったわい！

「ええっと、俺も別に来たくなかったんだが……それよりあんた、生徒会長なんだろ？ちようどよかった。俺、校長先生に用事があるんだが……」

「み、身元不明の人をこ、校長先生様にお会いさせるわけには行きません！」

思い切り俺を拒絶するかのように両手を振り回す。

「あゝええっと、住所は……」

フレアとネリュさんの家の住所を言えればいいのだろうか……残念なことに昨日の今日でそんな住所を聞いているはずが無い。相手は掛けている眼鏡をつまんで待っている。

「……とりあえず、地下だ」

「そ、その間が怪しいんです！」

俺がそう告げると彼女はさらに怪しげな……いや、それより

俺を完全なる

「変質者」として認識してしまったようだ。懷から杖を取り出して俺に向ける。おお、やはりこの世界では杖を使って魔法を出すのか・
・やっぱり俺も杖を探そうかな? と思っている場合でないことを俺は悟った。あわててその場から飛びのく。

「あぶねえじゃねえか!」

「あ、危ないのはあなたです! こ、こうなったらこの学校の中でも
っとも強い私があなたをこ、ここから追い出します!」

かわいらしく言葉をかみながらそう俺に断言してきた彼女はどうか
やら有限実行派のようだ。杖を俺に向けて彼女はなにやら呪文をす
ばやく呟いた。そして俺はというと、肉食動物から逃げるような気
分で走り出した。相手はいきなりのことと判断し切れなかったらし
く、魔法を別の場所にぶつけ、その後には俺を追いかけてくる。鬼ご
っこの始まりである。

A…危険な魔法の使用法（後書き）

今回ははちゃめちゃんな人物が現れました・・・いや、まあ、色々あるんですけどね。さて、今回の小話は作者が経験したことですが・・・夜、木刀をふっているのですが、そのときに西の方向を向いていたら・・・金色に輝いている星のようなものを見つけたのです。それを見ながら振っていると、なんともまあ、それが不規則な動きをして動いていたのです。最初はなんだろうかと思ったのですが、今のところ自分の中ではUFOではないのか！？という結論に至っています。読者の方が信じる、信じないは別なのですが・・・まあ、去年の今頃にあった出来事です。UFOみたいなものを見たことがあるよぉ〜というひとがいましたら信じてもらえenと思います。とまあ、今回はこんなところで終了です。次回は生徒会長との対決と校長との邂逅です。

A::正しき義(前書き)

登場人物紹介 ネリユ・シャイン…零時を快く迎え入れてくれた女性。フレアの母親だが、感じ的には姉に近い存在である。両親に構ってもらえなかったので家出をして今では地下に巨大な家を造ってフレアと生活している。すぐれた人工物製作者だが実際に作った人工物は片手で足りてしまうほど少ない。フレアには内緒にしている職業がある。

A…正しき義

五、

「まちなさーい！」

できることなら立ち止まって誤解を解きたかったのだが……あの目は

「あなたを成敗します！」という正義の目をしていた。

「待ってもいいけど、その杖をあんたから約十メートル後方に投げてくれ！そうしたら立ち止まる！約束しよう！この命を懸けてもいいかもしれない」

俺は一応そう相手に告げる。あんまり走っていないのだが、緊急時は疲労が二倍にでもなるのか知らないが、そろそろ息が切れ始めている。

「悪者はそうやって騙すっておばあさまがい、言っていましたからあなたを信用できません！」

なんつゝ野郎だ？俺のこの瞳のどこが穢れているというのだろうか？悪者は力が弱いから知恵を絞って姑息な手をいやいやながらも使っているのに対して正義の味方は力でねじ伏せてきやがる！少数精鋭は機動力などを生かせるから有利なのだ！

「おい、あんたは正義の味方を気取ってるのか知らんが、相手を信じることから正しい道は始まるんじゃないのか？」

「悪者のくせしてよくしてますね……」

あれ？俺、悪者確定？

「確かにそうですが……私は思うんです……」
「何を？」

「悪者に説得をして相手がその話に乗ったとしても悪の組織は正義の味方を騙して姑息な手を使って勝ってしまいます」

「ああ、そりゃそうだろうよ……」

弱いもののほうが手を出しやすいのだ。やられる前にやれって言

葉の通りである。

「だから、私は思ったのです」

「何を？」

「……まず、悪者をぼろぼろにした後に話をする。動けない相手が完全に話を理解してくれてそれで悪者は正義の使者になつてくれます」

「まあ、そりゃ一理あるだろうけどよ……」

放たれた魔法をジャンプして避ける……が、完璧には避けきれない。

「へえ、そこまで理解してくださっているのなら、い、いつそのこと私の部下として働きますか？」

「そりゃ、いい話だな……」

「でしょう？そのためにもあなたをぼろぼろにして根性を叩きなおすことにします！だから、待ちなさい！」

「そりゃ、いやな話だな……じゃ、逃げるわ」

おどおどとしていた今までの表情はどこかに消えており、彼女は嬉々として俺に魔法を放ってくる。なるほど、確かに彼女は強力な魔法を使ってくるようだが実践で使ったことが無いのか、俺にはまったく当たらない。しかし、あたらないからといって余裕を見せていると後で俺が馬鹿を見てしまう。

「……あった！階段だ！」

追いかけられている状況でようやく階段を見つけた。授業が終わったのか、生徒の姿が廊下に現れ始めた。どうやら、状況は後方へぴたりとついてきている彼女のおかげで打破されたようだ。しかも、生徒が現れるようになったので下手に魔法は使えないようである。そりゃそうだ、生徒会長が生徒を傷つけちゃ、本末転倒だからな……

「ちよつとごめんよ！」

「まちなさい！」

人の隙間をぬって走りまくる。

既に心臓はそろそろ黄泉の国へと旅立とうとしているところであり、心臓が昇天してしまったら俺の命も危ないのだが・・・時折生徒にぶつかってその生徒にいちいち止まって謝っている生徒会長に捕まっても結局は同じ末路をたどるのである。幸い、既に残り一階分の階段しか残っていない。先ほど階段を駆け上がった上から生徒たちがいっせいに降りてきていたので彼女は下に流されたに違いない。必死の

「まちなさーい！」という声だって聞こえなくなった。

目の前に現れた球体の扉に向かって一直線に向かおうとした俺の目の前がいきなり爆発した。

「おわっと！」

あわてて飛びすさみ、姿勢を低くする。思わぬ攻撃にあわてて右手で防いだため学ランが少々黒く焦げてしまったが・・・いや、もとから黒いか。とりあえず、直撃しなかっただけでもよしとしよう。

「・・・そ、げほっ・・・そこまでですよ！」

黒煙がたち消えぬ中から先ほどの生徒会長が現れた。

その姿はあったときとは違って制服はぼろぼろでちよつとウェーブしている深い青色の髪の毛は爆発したようになっていた。肩が露出しているところなんて黒い炭がついている。挙句に掛けている眼鏡はずれていてパッチリとしたおめめが俺を睨んでいる。なんともまあ、恐ろしいほどの追跡者である。ふと思ったのだが、

「世界を征服する」という悪者の執念よりも

「悪者を一掃する」という正義の味方の執念のほうが強いのでいつも悪者は負けるのではないのだろうか？信じる心は救われるとは、このことをさすのかもしれないな・・・いや、ささないか？

さて、絶体絶命というこの状況・・・どうしようか？白旗掲げて命乞いでもするか？何事かと思ってこの学校の生徒たちがわらわらと俺たちを囲んでいるが・・・

「あれ、零時さん？」

「あ、フレ・・じゃなかった、シャイン！」

そういえば、偽名で呼ばないといけなかったなあということを思い出してそっちの名前を出す。そんなことより、ようやくここで知り合いであるフレアに会うことが出来た。

「さあ、ギャラリ―も集まってきたので悪者の最後ですね・・・」

静かに

「ふふふ・・・」という笑いを見せながら俺に接近してくる生徒会長。むう、俺よりあんたのほうが悪者に見える・・・というより、俺は断じて悪者ではない。ついでに言うが、正義の味方でもない。

「待った！」

「何でしょう？悪者らしく悪あがきですか？」

「違う！こっちのシャインが俺がお世話になることになった家に住んでいる女の子だ！彼女が俺の無実を証明してくれる！」

「がんばります！」

腕をぐっと握り締めてそういったフレアだったのだが・・・

「・・・シャインさん、私はとても悲しいです。いつの間にあなたのあの地下ハウスは悪者の拠点となったのでしょうか？」

「「え？」」

「しかし、安心してください。私が魔に堕ちてしまったあなたとその彼を助けてあげます！」

なにやら呪文を唱え始める。その呪文は相当危ないものなのか知らないが、ギャラリ―であるこの学校の生徒は身の危険を察知して逃げ始めた。中には生徒会長が現れた穴から飛び降りている人たちもいる。俺だって逃げたいが・・・あいにく、逃げ場がない。

「れ、零時さん！何とかしてください！生徒会長が大変なことをしようとしています！」

「何？何しようとしてるの？」

「最低で、この学校自体が吹っ飛びます！」

最低で吹っ飛ぶ？って、あんな・・・学校吹っ飛ぶならさっきから彼女が作った穴にはまって抜けなくなってる太った男子生徒なん

ていましていることが無駄になっちゃうじゃねえか！

「何、どうすりゃいいんだ？」

「とりあえず、“－”の力を彼女が放った“＋”の魔法にぶつけてください！大きくても小さくてもいけませんよ！弱ければ学校が、強ければ彼女が吹っ飛びますから！」

「そりゃ、まじか!？」

気がつけば目の前の生徒会長は杖を嬉々として俺に振り下ろすところだった。

「ええい！そんな難しいこと言われてもわかんねえよ！」

俺も右腕を相手に突き出す。

ぶつかり合った正反対の力は一瞬だけ火花を散らせてその瞬間に真っ白な光を生み出したのだった。ぶつかった衝撃で生み出された風が黒煙を完全に吹き飛ばし、逃げ遅れた生徒数名があたりを食らって屋上の端まで飛ばされて、生徒会長が出てきた穴にはまっていたおでぶさんは下に降りることが出来たようだ。それ以後もだんだんと力は増大していったのだった。

光が完全に消えて辺りに静寂が訪れる。立っているのは俺と、俺を盾にするようにして立っていたフレアだけだった。

「おいおい、屋上にいる全員が倒れてるぞ？」

屋上には逃げ遅れた生徒たちの倒れた姿がたくさんあった。奇跡的に、誰も外傷はないようだ。目をまわしておまけとして頭の上にはお星様がまわっている。この元凶の生徒会長もスカートを大胆にめくりあげて同じようにして目をまわしているのだった。

「とりあえず、終わったな・・・」

「そうですけど、さすがにやりすぎじゃないんですか？校長先生にも被害があるかも・・・」

「・・・フレア、俺は今から証拠隠滅をはかるから校長先生に事情を説明してくれ」

校長先生がいると思われる球体につけられている扉が開けられようとしているが、倒れこんでいる生徒が幸か不幸か（俺には幸だが）扉が開けられるのを防いでいたのだった。とりあえず、何とか自力で目を覚ました連中に

「授業が始まってるぞ！」と騒いで屋上から追い出した。そして、今度は衝撃を食らって未だに目をまわしてしまっている残りの人たちを引っ張って生徒会長登場時に彼女が開けた穴を使って残りの生徒たちを落としたのだった。事前に床にはマットが敷かれており、これなら落としても大丈夫そうだったので足からおろす作業に移行。誰が下にマットをしてくれたのかはわからんが感謝しよう。

「さて、どうしたものだろうか？」

目を開けてくれない元凶にどうしたものかと悩んでいたのだが・・・フレアがやってきた。

「れ、零時さん！騒動がばれてます！騒動の発端となった者たちをつれて来いって言われました！あれはおならの音なんですっていったけど駄目でした！」

「そりゃ、そうだろうよ・・・どこの馬鹿だってあれだけ派手に騒げば気づくぜ？」

「でも、隠蔽工作にまわってくれて言いませんでした？」

「言ってない、俺はフレアに時間稼ぎをして欲しいと思ったただだ。そこまで期待してないし、どんな詐欺師だってこの状況じゃ無理だろう？」

ため息をつきながら生徒会長のめくりあがったスカートを戻して背中に背負う。一応、騒ぎの元凶の片棒を担いでいた俺なので校長先生に会って謝らなくてはいけない。勿論、その場合は背中に背負った眼鏡娘も怒られるのが筋というものだろう。

開け放たれている校長室の扉に向かって一步を踏み出すとフレアも一緒についてこようとしていることに気がついた。

「フレアは授業に戻ってろ」

「え、でも・・・」

「いい。これ以上お前に迷惑を掛けるわけにもいかん。そんな見ず知らずってわけでもないが、昨日今日ので出会った人物に俺は迷惑をかけたくない」

「……」

ちよつと言い方が悪いような気がしたが、事実だ。だが、フレアの顔に影が落とされてしまったのであわてて言い添える。

「……お前まで校長にしかられたらネリュさんに俺まで怒られる。できればあの人の耳には入れたくないんでね……あの人の怒ると怖そうだ」

「ああ、なるほど……」

フレアは

「わかりました」といって俺に背中を見せて去っていったのだった。その後ろ姿に

「絶対に夕食の席なんかで大暴れしたってことばらすなよ!」と叫んでおくのを俺は忘れなかった。

「さあて、いきますか……」

既に開け放たれているのでノックのしようも無い。部屋に入る一歩手前で

「失礼します!」と叫ぶとしわがれた声で返事が返ってきたのではいることにした。

「……ほお、おぬしが先ほどの騒ぎの元凶者かね?」

中は外と違って茶色っぽかった。そうだなあ、火がついていない暖炉に、高級そうなじゅうたん、果ては揺れるタイプの椅子に腰掛けた眼鏡を掛けて白ひげを蓄えたおじいさんだった。このイメージが俺の中でのサンタさんに合致してしまったので

「ああ、後は赤い服だけなんだけどなあ……」と思いながらも差し出されたソファーに腰掛ける。

「……さっきの言葉ですけど、俺だけじゃなくてこの学校の生徒会長も片棒を担いでます」

「ほお、それはまた……本当かね?」

「ええ、3分の2は間違いなく担いでます」

隣に生徒会長をおろして座らせる。言い知れぬプレッシャーを相手から感じてなんだか知らないが焦燥感にも似ていた。俺は隣の生徒会長を揺り起こすことにしたのだった。

「……事実かどうかはこの人を起こすんで直接聞いてください」
「……どうかのう、起きるのかい？」

「無論です。俳句にも起きぬなら 起こしてみせよう 眼鏡っ子っ
てありますからね……」

「……それを言うなら鳴かぬなら 鳴かしてみせよう ホトトギ
スじゃろうに？」

突っ込まれたので

「そうですね」と告げて俺は生徒会長を再び起こす作業に没頭し始めたのだった。

十分経過

「起きんな？」

「起きませんね……」

気がつけば俺の手には黒のマジックが握られており、いつの間にか隣に来ていた校長先生の手にも黒のマジックが握られている。そして、目の前で静かに眠っている生徒会長の顔には落書きが施されていたのだった。

A::正しき義（後書き）

今回現れた生徒会長、実はかなりの実力者です。一応、名家の跡取り娘という設定です。さて、ここで皆さんにちょっと質問ですが、まだおわりませんがAルートの終わり方をどのようにするか悩んでいるところです。個別に終わらせるか、一人に絞って終わらせるか・・・迷っているところなので希望があればメッセージなどで教えてくださいると非常にありがたいと思っています。さてさて、今回の小話ですが・・・今回は作者が何故、小説を書くようになったのか教えておきたいと思います。その昔、小説を読んだとたまに自分が期待していなかったような結末を迎えてしまう物語がいくつかありました。例を挙げるなら主人公が犠牲となって世界が残ったとか、登場人物の誰かが犠牲になって終わったとか、はたまたいい終わり方なのだがぼかしてこれからも似たような日常が続いていくといったようなものです。続編が出るならまだしも、そういう小説を作者は嫌う傾向にあるので自分なりに終わらせるような形にしていたのです。だから、登場人物の個別エンドがあったりするのもそういう理由なのです。誰かがあきらめて誰かが幸せになるのはどうかなあと思ったので個別エンドを書いています。さあて、今回はこのくらいにして、また今度お会いしましょう！

A..お話（前書き）

さて、今回の登場人物ですが・・・校長先生・・・全校生徒から恐れられている校長先生。本名は不明。実のところは意外な人物の祖父である。サンタさんと思えない格好で的を射たような意見を言う人物でもある。人をこき使うのが大好きな性格で、悪い結果になるということでもさえも、黙っていたりするちょっと変わった人物。

A..お話

六、

皆は寝ている奴のまぶたに目の落書きをしたことがあるだろうか？俺は何回かある。そして、そのたびに思うのだが・・・

「これってどこまでリアルにできるのだろうか？」ということを皆も思わないだろうか？誰かやってくれないだろうかと俺は思っている。

「起きんの」

「ええ、そうですね。俺に任せてください」

鼻の中に細くしたティッシュを突っ込んでくすぐる。

「はつくしよん！」

大声で叫んだ彼女の反応に

「これは起きたのかもしれない！」と思った俺だったのだが・・・彼女らにはむにゃむにゃといって再び夢の世界に行ってしまった。

「じゃ、次はわしの番じゃな」

校長先生はおもむろに椅子に座って今はいていた脱ぎたての靴下を自分の鼻をつまみながら生徒会長の鼻に持っていく。ものすごくいやそうな顔をして右のほうに顔を背けるが、顔が動いたたびに校長が巧みに鼻の近くにまで持っていている。これはさすがに起きるだろう・・・だが、彼女は我々の予想をはるかに超えていたのだった。

「ふんっ！」

「・・・なんとう！？」

鼻息だけで靴下を吹っ飛ばしたのだった。吹き飛ばされた靴下は俺らが今いる場所の反対方向にある開け放たれた窓の外へと消えたのだった。鼻息だけで吹き飛ばすとは・・・なかなか侮れない人物だ。

「・・・さて、お遊びはここまでじゃ・・・おぬし、名をなんと

言う？」

「零時です。剣山零時・・・」

ソファーに座って校長先生を見る。俺は相手に一分の隙も突かない様に心がけていた。

「・・・ふむ、噂はかねがね・・・異世界の人らしいな？大丈夫じゃ、この老いばれは別にお前さんが警戒しなくてもいいほどよっぽじゃからな・・・」

「わかりました。信用します。ええ、釣り上げられてこちらの世界にやってきました」

「・・・なるほど、ネリュの娘の仕業か・・・」

ネリュさんの本名を知っているということは結構な知り合いなのだろう。蓄えられた白ひげを触りながら校長は何かを考えているようだった。

「とりあえず、俺が何故ここに来ているのかわかりますか？」

「そうじゃのう、“ツリマ”という魔法の杖のようなものがあってのう、それは低確率だが異世界のものを釣り上げるという効果があるのじゃ。ネリュの家にもそれが一つだけあったの」

校長は隣で寝ている生徒会長をじろりと見ながら・・・ここで生徒会長は

「んがっ！」といてびくりと動いた・・・ため息をついた。

「その、道具を俺、壊しちゃったんですけど？」

家に帰れなくなったことに対して、悪いのは確かにフレアかもしれない。だが、その道具を壊したのは俺だ。自業自得な部分もあったのだが・・・そのことについても言ってみることにした。すると、次のような返答が返ってきた。

「それはお前さんのせいで壊れたわけではないじゃろう。代々、“ツリマ”は彼女の家系が使ってきたものだったそうなのだが、残り一、二回となっていたそうじゃ。見た目と違って強固な道具でのう、使用回数が残っている間は絶対に壊れたりはせん。じゃが、壊れてしまったということはもう既にぼろぼろに成り果てていたのだろう」

しょうがないという風に俺はため息をついた。さて、これからどうしようか？

「あの、元の世界に戻るにはどうしたらいいんでしょう？」

思い切って怖かったが校長に聞くことにしたのだった。しかし、校長は違う話をし始めたのだった。

「・・・さあのう？それはわからんが・・・別に前例が無いわけではない。この学校はほかの町や王都などから学生がやってきたりする大規模な学校じゃ。図書館にも過去の事例が多く載っておる。少々大人びたような面をしておるようだが、おぬしもあちらの世界では学生だったのだろう？」

大人びている面↓老けてる・・・まあ、それはいいや。俺は素直に頷いた。

「ええ、そうです」

「それならば、この学校への留学生として迎えよう。おぬしが異世界から来たということが知れば危険もあるかも知れんが多くの情報が他の町などから来るに違いないだろう。どうじゃ？」

なるほど、それは確かにいい話だ。

「でも、この世界の勉強なんて俺はしたことありませんよ？」

「なあに、お前さんには勉強ではなく図書館の管理を任せる。あの一帯は少々危険だからのう・・・誰も管理をやりたがらないのだ。これが条件だといえれば割りに合うと思うがの？」

校長先生は既に書類を用意しており、書類には俺の名前が書かれている。経歴などのところには『特別留学』とかかれた大きな判子が貼られていたのだった。

「わかりました、これからお世話になりたいと思います」

「ふむ、なかなかいい学生のようにじゃ。頭のほうがどうかはわからないのう・・・」

む、なんだか無性に頭にくる言い方である。そりゃまあ、悪いといえは悪いなあ・・・過去に

「すずめの○」という問題が出されたので俺は

「すずめのサンバ」と入れてやった。一度は丸にされていたのだが・
・その上からばつがつけられていた。先生に答えを尋ねると

「すずめの涙」という答えが返ってきたのだった。そのとき、コメントを聞くと

「いや、個人的には丸にしてあげたかった」とのことである。

閑話休題、俺は頭を下げて未だに気絶している生徒会長を背負って校長室を出ようとしたのだが、そんな俺の背中に校長の呼び止める声が返ってきた。

「・・・すまんが、生徒会長を外に出してこっちにきてくれんか？」
「?わかりました」

屋上に寝かせて俺は校長室へと再び戻ってくる。校長先生はいたずらを思いついた子どものような顔になっており、とても面白そうにしていたのだった。

「・・・すまんが、あの子を補佐してくれんか？」

「と、言うത്？」

「あの子・・・生徒会長じゃが、わしの孫なんじゃ」
「・・・」

「強情なところもあるが一生懸命なところもあつての・・・それがいいところなんじゃが、お熱が行き過ぎるところもあるんじゃ。だから、あの子を補佐して欲しい。本当は生徒会長補佐官というものがあつたんじゃが・・・これがまた、問題児で別の王都に留学という名目でこの学校から追放されたんじゃ・・・いつも、というわけじゃなくていいから彼女を見てくれんかの？生徒会長補佐官になつてくれんか？」

「え、ええっと・・・」

「老いぼれの最後の頼みじゃ」
「う・・・」

「ごほごほ、ああ、今そっちに逝くぞ、マリナ・・・」

「わかりました・・・生徒会長補佐官になります」

「おお!そうか!」

返事をするにあつちにいってしまいそうになってしまった校長先生はあつという間に戻ってきた。てか、マリナってだれ？

「じゃ、よろしく頼むぞ！彼女を保健室に連れて行ってくれ」

「はあ、わかりました・・・」

校長室を後にし、次に向かうのは保健室・・・背中に生徒会長を背負って俺は保健室へと向かったのだった。

「さあて、保健室はどちらかねえ？」

誰に言うでもなく、俺は呟いた。いや、このままでは先ほどまったく同じ状況に陥ってしまうだろう。

「・・・保健室なら一階にあります」

「あ、生徒会長、起きてたのか・・・」

「ずっと起きてました」

「なんか、わからんが俺はあんたの補佐官となったようだ・・・」

「聞いてました。まったく、校長先生もうれしいことをしてくれますね・・・」

そういつてため息を吐いている生徒会長なのだが、いい加減俺の背中から降りてくれれば良いのに・・・というより、生徒会長が目覚めたのなら保健室に行く意味ないんじゃない？

「生徒会長、降りてくれよ」

「零時といたしましたね？私は生徒会長ですが、その前に本名があるのですよ？」

初対面のときのか弱そうなイメージとは百八十度転回した性格が現れた。調子に乗っているというのはいくつかのことを知っているのだろう。

「ああ、そう。それで？」

「わ、私の名前はフェイル・デイ・ハイムです」

「偽名？」

「いえ、本名です。これから信頼関係を気づいていくべき相手に偽名を名乗るなんて失礼ですからね・・・これ以後、よろしく願います・・・ああ、呼ぶときはフェイル会長と呼んでください」

そういつて生徒会長……フェイル・ディ・ハイムは脱力したのだった。

「しかしまあ、異国の世界の魔法使いと魔法をぶつけ合うなんて思いもしませんでした。校長が特別留学を認めたのですからさぞ、あなたの世界でも重宝されていたのでしょうか？」

根本的に俺の世界には魔法使いが大手を振って歩いているというわけではないので説明することにした。

「……なるほど、異世界には私の世界とはぜんぜん違う世界が広がっているんですね……ぜひ、見てみたい気がします」

きらりと目を光らせてそんなことを言っている。知的欲求を求めているようでもあった。

「そりゃ、まあ、フェイル会長の夢ならそれでいいけどさあ……まあ、願いはいつかなうんじゃない？」

「そうですね！私、知らないことがあると非常に気持ち悪いんです……この世界をもしも去ることになったら私もつれてってくださいね？」

「いや、戻れたとしても今度はフェイル会長が戻ってくるって保証はないぞ？」

背中であつとりとしているフェイル会長にそう告げるのだが彼女は何も聞いていないようだった。やれやれ、この人はどうやら自分の世界にはいっちゃやうような人なのだろう。だから、さっきだって彼女に追いかけられたのだ。

石造りの階段を下り始め、俺はふと疑問に思ったことを彼女に伝えた。

「フェイル会長……さっきの魔法の衝撃でどこか怪我したりしてないか？」

「いえ、どこも怪我なんてしてません……それがどうかしたのですか？」

本当にどうでもなさそうにたずねてきたので気に病むことはないのだろう。それならばと、俺は彼女に提案してみた。

「それなら、俺にこの学校を案内してくれないか？」

「なるほど、思えば零時補佐官は今日特別留学してきたばかりでしたね。シャインさんと一緒にいたようなのですが、彼女に案内してもらわなくていいのですか？」

彼女なりの配慮なのだろうが、今フレアは授業を受けているから邪魔してしまうだろう。

「いや、いい。今頃授業を受けているだろうし・・・性格的に一緒に迷子になっちまうだろうから・・・その点、この学校の生徒会長にお願いしたほうが適材適所ってところだろうなあと思ったんだ」

ちなみに、フレアの適材適所はトラブルメーカーだろう。

「一理ありますね・・・いいでしょう、生徒会長である私が新任の零時補佐官を案内します。では、まずは近くの場所から行きましよう」

四階の踊り場に出て彼女に尋ねる。

「この階には何が？」

「ここでは主に行事を行います。それ以外では生徒が騒いでいる場所の一つでもありますね。特に大切な場所などはありません。下の階に行きましょう」

そんな風に彼女は言ったのだった。そして、降りてきた三階は授業をしている生徒たちの姿がちらほらと見えている。

「ここは？」

「三階には主に教室が集まっています。特別教室も多いですからね・・・頭のよい人たちが多くいて覚えておいてください。ここに構えているのが最上級生の者たちです」

「なるほど・・・」

その後、下に降りていったのだが二階にはいわば二年生、一階には一年生がいるとのことだった。

「ざっとみてこんなところですよ。正直言って、一日そこらでこの学校を案内する自信など私にはないんですよ。見た目も大きいですが、それ以上に内部は複雑奇怪になっており、生徒たちが魔法で作りの出

した場所もあるとのことですよ」

「なるほど、学校兼秘密基地か・・・」

「ええ、校内には悪者もいますので零時補佐官も気をつけてくださいね」

彼女はそうように俺に忠告してくれたのだった。

「そういえば・・・」

「どうかしましたか？」

「・・・いい加減、俺の背中から降りてくれ」

「・・・そうですね」

すいませんといいながらフェイル会長は俺からようやく降りてくれたのだった。やれやれ、そこまで重くはなかったのだがさすがに時間が時間だからなあ・・・つらかった。

「零時補佐官は特別留学ですので私のクラスに来てください」

「はあ・・・いや、場所おしえてもらってないんだが？」

「大丈夫、私があなを明日迎えに行きますから・・・待っていてください。明日の昼休みは学校の案内を私が再びしますので今後予定を入れないでくださいね？今日は一度家に帰るといいでしょう。シャインさんには私から言っておきます」

わかりましたかと念を押してくるフェイル生徒会長に俺は頷いてみせ、その日は帰ることにしたのだが・・・ちょうどいい機会だ。

俺は城下町を歩くことにしたのだった。俺は後にそれが間違いだったことに気がつく。

A..お話（後書き）

どうだったでしょうか？ふと、疑問に思いましたが・・・何故、生徒会長よりも校長先生を登場人物紹介に書いてしまったんでしょうか？自分でも不思議です。まあ、いいですね。さて、今回の小話は作者の実際にあったとある日の平和な話です。その日は愛用の自転車に空気を入れてちよつと遠出をしようとしていました。家を出てすぐに一回目、車にはねられそうになり・・・不幸は続くもので、家に帰りつくまでに五回ほどはねられかけました。これはもう、平和な話ではありませんね・・・皆さんも、車にはねられないように努力しましょう！

A::迷子（前書き）

登場人物紹介…フェイル・ディ・ハイム。フレアが通っている学校の生徒会長で学校一魔法がうまい人。人見知りするタイプだがなれるのが早いところもある。正直に生きている人間でお人よし奈挙句におせっかいをやく傾向がある。ちょっと融通も利かないところもある。あつて仕事には厳しい人である。

A::迷子

七、

自分が迷子になっている。俺がそれに気がついたのは辺りが完璧にどこだかわからんとところに来たときだった。気づくのが遅すぎである。

「……ここ、どこ？」

いいや、どこかの建物に入っているのはわかる。たぶん、結構高貴なところだろう。床は赤いカーペットが覆っているし、部屋を明るくするためにたいまつがついている壁にはとても高そうな絵が飾られている。ちなみに廊下の幅は車が二台は楽勝で通るのではないかと思われるほど大きい。天井は俺が立っても余裕が七メートルほどだろうか？

「おっかしいなあ、迷わないように城を目指して歩いてきたつもりなんだが？」

困ったことにはじめてきた場所なので帰り道どころか、進むべき場所させ覚えていないのだ。これは本当に困ったぞ！この焦りは間違って女子トイレに入ったとき以来だ。

「ああ、そういえばこの建物の高いところにいけば自分がどこにいるかわかるだろう！」

俺は寂しさから一人でぶつぶついいながら歩くことにした。はたから見たらどう見ても危ない人なのだが、いいのだ。俺一人しかないのだから……

「階段階段……会談、怪談、戒壇、解団？いいや、階段階段！」

なんとなく、既視感を感じたのだが、フレアの家帰り道に迷っているのだが、同じところをぐるぐる回っているみたいではないので道に迷っているというわけではないだろう。なんだか、ややこしいな……

「しかし……本当に誰もいないのか？すいませーん！」

叫んでみるものの、俺の声は誰にも聞こえていないらしい。返事をしてくれるものなど一人もいなかった。

「・・・？」

あれほど騒いでいた城下町とは思えない場所に来ているかもしれないと思った俺は足早に階段を見つけてそれを駆け上がる。勿論、人も探している・・・と

「あ、人だ・・・」

恐ろしいスピードで後ろ向きに俺に迫ってくる人を見つけた。あわてて俺はそれを避ける。

「ぐはっ!!」

階段の壁に当たり、その人物はようやくスピードを緩めたのだった。

「あ、すいません・・・あの、ここってどこですか？」

「・・・」

相手の意識はどこかに飛んでいってしまったようで、見たところお城にいなそうな兵士だった。

兵士が飛んできた方向に歩いていくと、なにやら血なまぐさい雰囲気を感じ取れた。

「ききっ!!」

物音を感じたのだろうか？建物内を徘徊していたと思われ、ついでに言うなら先ほどの兵士をぶっ飛ばした存在であろう、俺の身長は二倍はあろうかというくらい歩いてこちらに近づいてきた。

「!？」

実に歩きづらそうにしているとこの建物内に入ったのはいいのだが、出ように出られなくなってしまったようだな。

相手は口を開ける。

「・・・光線か?? いや、超音波だったかな？」

俺は耳を押さえて相手からの攻撃に備える・・・

「ききっ!!」

相手は叫んだだけで、何もしてこない。俺は相手に恐る恐る近づ

いていくと・・・

「ききっ!!」

「あいたっ!」

目の前に見えざる壁があり、それに頭をぶつけてしまった。そして、気がつけば自分が今いると思っていた場所から数メートル後ろのほうに吹き飛ばされていたのである。

「なるほど・・・さっきの兵士もこれのせいで気絶したのか・・・」

つまり、怪物を見つけた兵士は剣を抜いて踊りかかり・・・その結果、相手の見えざる壁に阻まれて見事に吹き飛ばされたということなのだろう。実に、かわいそうな結末である。そういえば、反対方向の壁には結構な量の兵士が倒れていて目をまわしていたような・・・

「なるほど、この建物内にいた兵士たちは皆やられちゃったのか?」

しかも、壁に当たった自分の力で・・・?

巨大こうもりは俺を恐れているのか必死に威嚇しているようである。

「ききっ!!」

「・・・」

「ききっ!!」

くっちゃんぞうみたいな顔をしてその大きな口を開けるのだが・・・
・牙がめっちゃくちゃ小さく、そもそも、こうもりとは血をすうものであって相手を丸呑みするような存在ではないはずである。

「そういえば、光に弱かったっけな?」

「ききっ?」

俺はポケットに入っていたペンライトを取り出して相手の目の部分に向けて電源を入れる。

「ふらっしゅ!」

「ききいいいい!!」

めっちゃくちゃ苦しんでいるようだったのでさすがに可哀想になっ

てきたのでそれをやめる。

「ききい!!」

「どうやら怒っているみたいだな？」

そりゃそうである。誰だって寝耳に水みたいなことをされれば怒るに違いない。

「ここを出たいのか？」

「ききい？」

話しかけてみるのだが、相手は首を傾げるばかりである。どうやら、言語が通じていないようである。誰か、このこうもりの言語を訳せる人はいないだろうか？

「だから、こうやって・・・羽で・・・空を飛びたいのか？」

ジェスチャーをこうもり相手にするのもなんだが、言語がつうじないのならこうやって地道な作業をするしかないだろうが・・・

「ききい？」

奇妙な言葉をはっして首を傾げるだけである。

「ああ、もう!! 面倒だ!!」

俺は右手を掲げ、振り落とす。

振り落とした結果、俺の右隣の壁は見事に大きな穴を開け、外の冷たい空気が石で作られている廊下の隅々までに行き届く。壊れた窓からは城下の様子がよくわかり、ここから見ると改めてこの王都が大きいということがよくわかった。

「ききっ!!」

こうもりはその巨体を唸らせながら開いてしまった大穴へと向かって歩いていく。そして、飛び立とうとしてその大きな羽を広げる・・・

「ききっ!!」

別れを言うように俺に視線を向けるとこうもりは去っていった。まった。

「・・・世の中には馬鹿でかいこうもりがいるんだなあ・・・」
俺がそう思っていると後ろから人がやってくる音が聞こえる。

「こっちだぞ!!」

「けが人の状態は……」

「王様たちは……」

たぶん、誰かが呼んだ増援部隊の人たちなのだろう……と俺は一人で考えている暇などなかった。なぜなら、俺の目の前には巨大な穴が開けられており……この穴を開けた犯人は俺だ。

「……やばいかな？」

俺もこうもりのように飛ぼうかなあ……と思ったのだが、ちょうど壊れた壁の近くに木があったのでそっちに飛び移ってそのまま降りていく。

上のほうでは俺が空けた大穴をぎよっとしてみている兵士たちがおり、そして、俺は自分がどこにいるのかようやく理解できたのだった。

「ここ、城だ……」

俺の目の前には白くて威厳のあるお城がその姿を惜しげもなく広げている。

「しっかしまあ……これは急いでここから離れないと冗談じゃなくて本当に首が飛ばされるかもしれないなあ……」

俺はその場からは急いで離れたのであった。

無事に家に帰りついた俺なのだが、非常にネリュさんが心配していたのだった。ちなみに、俺が帰り着いた頃には既に民家には明かりがつけられて俺はいわゆる不審者みたいな感じになっていた。正直に泣きそうになっていたことを伝えておこう。

「まったく、悪者にでもつれさらわれたのかと思ったよ」

「すいません、面倒をかけて……」

「フレアの話じゃ学校でも何か早速やらかしたそうじゃないか？」

「いや、あれは生徒会長が……」

「生徒会長？ ああ、フェイルか……」

「知ってるんですか？」

「ん？ああ・・・まあ、そりゃ生徒会長だからねえ・・・」

なにやら苦笑しているところを見るとあのフェイル生徒会長とネリュさんはどうやらお知り合いということらしい。

「さ、夕飯を運ぶのを手伝っておくれ」

「わかりました」

「この家にいる間は客といえどもこき使うから覚悟しておくように！」

「了解しました！」

しっかしまあ、いい人に俺は拾われたもんだ。

夕飯を食べ終えて俺は分け与えられた部屋に戻っていた。無論、勉強するつもりなど毛頭なく（基本的には一緒だったのだが面倒だ）もっぱら、かっこいいというか、魔法使いの必需品と思われる杖を作ることにしていたのだった。

「零時さん！」

そんな俺の元へフレアがやってきた。

「どうしたんだ？」

「いやあ、皆すごく噂してましたよ？暴走状態の生徒会長を止めたすごい人だって！私は鼻高々ですよ！」

「ああ、そうか・・・」

なんだか非常に機嫌がいいらしい。俺の部屋でびよんぴよんと跳ね回っている。そして、机に座って何かをしている俺の元へとやってくる。

「・・・何しているんですか？」

「ん？ああ・・・杖みたいなものを作ろうと思ってさ？」

「杖・・・零時さんは杖を持っていないんですか？」

「ま、まあ・・・」

根本的に必要ないとは魔法使い素人の俺が断言して良いのかわからないので曖昧に答えておくことにした。

「・・・んゝそれなら、私があげますよ」

「本当か？」

「ええ、構いませんからね」

そういつていったん自分の部屋に戻ると何か棒状のものを持ってきた。

「先生からもらったものですけど・・・」

「・・・」

フレアの手から受け取ったものは教師が黒板の文字をさすときに使われる棒（名前不明）だった。

「・・・ええと、これは？」

「教師棒です。ああ、そんな遠慮なくて良いですよ。まだありますから」

そのまんまじゃねえか！？しかも、まだ持ってるの、これ？

「あ、ありがとよ・・・」

「いえいえ、気にしないでくださいね」

嬉しそうにしているフレアに俺はどうしたものだろうかと考えながらフレアの手から自分の手に渡った教師棒（命名・・・フレア）を眺める。先っちょの赤い部分を引っ張ると約二メートルほどまで伸びたのだった。

「・・・」

「どうです？よく伸びますよね？」

いや、特に感想は無いけどさ・・・

「いやあ、本当に今日は疲れたんで・・・おやすみなさい」

そういつてフレアはそれが当然であるかのように俺に用意されているベッドに入り込んであっという間に寝息を立てて眠ってしまったのだった。

「・・・はあ・・・」

さて、教師棒はどうしようかと悩みながら・・・俺は誰かに呟いたのだった。

「この世界に呼んだやつ、俺の苦勞を見てきつと笑っているんだろうな？」

そして、俺をこの世界に呼んだやつの寝顔を見て俺が笑ったのだ
った。

「すぴ」

「・・・まったく、ぶにゃつとした面して幸せそうなやろうだなあ・
・・・」

静かにお休みと告げて俺はフレアの部屋に行き、ベッドに入って
目を閉じたのだった。

次の日に目を開ければそこにはぶにゃつとしたような顔がひろが
っていたというわけな

のだが・・・どうしたものだろうか？

はあ、いつになったら帰れるんだろかなあ？

A..迷子（後書き）

今回、零時が迷い込んでいた場所は王宮でしたが、今のところ王様を登場させる予定はありません。王様ってどんな人なのか真剣に悩むときがきたら書きたいと思っています。アメノツキのほうではこれから……そうですね、竜と書いてドラゴンと呼ぶ！のIF版を考えています。

A..夜のお仕事………（前書き）

さて、今日の登場人物は………おっと、誰もいねえ………じゃ、ち
よつとしたお願いを………誰か零時たちの絵を描いてくれるような
人はいませんかね………書いてもいいって人がいましたらご連絡
ください。

A…夜のお仕事……

八、

人間というものは約一ヶ月もあれば大抵の状況に慣れてしまうらしい。その環境が安全でかつそれまでの生活と変わったところといえは寝るところと自分の場所ぐらいなものならばなおさらである。

もっとも、なれない部分も結構ある。いや、どちらかというと困ったことなのだが。この世界には風呂というものがなく、シャワーである。これはまあ、いい。別にいい。どうせ風呂にはいつでも十分ほどで俺はあがってしまう。

困ったこと一つ目、

「零時さん、もう寝ましようよ？」

これだ。これである。そろそろ寝ようかな？という俺の波長でも感じるのだろうか？気がつけば同じ部屋で机に向かい合うようになってしまっている状態に陥っている。

「……ああ、そうだな」

ここは確かに俺に分け与えられた部屋なのだろう。だが、フレアにとってはこの家のどこでもが部屋みたいなようであまりに廊下に転がって寝ていたりもしている。しょうがないので寝る準備を始める俺。

そして、困ったこと二つ目

「ふあ、そうですね……私も睡眠をとることにします」

これだ！何故か……そう、何故かここはフレアたちの家なのにフェイル生徒会長が普通に居座っている！なぜだ！？

「……」

「ん？零時補佐官、顔色が優れていませんがどうかしたのですか？」
「……なあ、フェイル生徒会長？何故、あなたがこの家にいるのでしょうか？」

「え？一週間前からこの家に住んでますけどいまさらそれを聞くん

ですか？」

何をそんなに驚いたような顔をしているのだろうか？フレア、前はお前で一人でねてんじゃないよ。

「家の人とか心配してないか？」

「ええ、実は家族が他の王都に行ってしまったのでここにきたのです……」

ああ、それならしょうがないか。どうやらネリュさんと知り合いのようだったからなあ……

「ということにしておいてください。あのわからずやなお父様にはいい薬だと思われます」

「つてちがうんかい！」

「まあ、そんなことより早く寝ましょう。明日も学校ですよ？」

「……そうだな」

がつくりと肩をおろしては俺は眠りに入ったのだった。

「すぴ〜」

「……ぐう……」

しかしまあ……この人たちは本当におかしな人だ。

俺は今日も眠ることが出来なさそうな夜を一人で過ごすのだろうかという夢を見ながら寝てしまうのか？と思ったのだった……が、

「零時、どっちかにもう手、つけちゃったのかい？」

「ネリュさん？」

気がつけば俺の枕元にはネリュさんが立っていたのだった。暗闇なので声でしか判断できていないが間違いないだろう。

「あの、どうかしたんですか？」

「ん〜ちよつと零時に頼みごとをしたくてさあ〜今、暇かい？」

「ええ、昼間寝ていたのどうせ眠れないから大丈夫ですけど？」

左右の二人が今日も幸せな夢を見ていると思われるので邪魔をしないように静かに返事をしてとりあえず部屋から出たのだった。

「……その服、仕事の服ですか？」

ネリユさんが着ている服は体に張り付くような黒い服だった。

「そうだよ、似合ってるかい？」

「ええ、似合ってます……で、俺に何を頼みたいんですか？」

尋ねると相手も尋ねてきた。

「……今、杖を持ってきたかい？」

「杖？」

腰にはフレアからもらった教師棒がきちんとつけられている。途中、フェイル生徒会長に改良してもらったこの杖は今ではすっかり相棒となっている。だが、今も、これが杖なのか疑問に思っている。

「……一応ありますよ」

「そうかい、それならついてきてくれ」

そういつて彼女は長い髪を背中ですとめて廊下の暗闇に向かって歩き出した。少々不思議に感じた俺だったが、黙って彼女の後についていくことにした。

「……んゝそこにおくんじゃありませんよ、零時補佐官……へつくち……」

「零時さん、おいしいお菓子が湖に……ぎゃゝ蛇ですう……むにやむにや……」

二人の幸せ者を残して……

「へえ、まだまだこの地下にはさまざまな場所があるんですね？」

「どうだい？すごいだろ？」

歩いてやってきた場所にはちよつと変わった場所があった。その部屋の中央には紫に点滅している大きな魔方陣が描かれていたのだった。

「ここ、何をするとところなんですか？」

「ここはね、世界を旅する者の出発点さ♪この魔法人に乗れば世界の各地に行くことができる。まあ、基本的には人気のないところにつくように設定されてるし、どこに出るかはわからないけどね……」

・」

そういつてネリユさんはすばやく魔方陣の上に乗る。

「さ、行こう」

「・・・・・・どこですか？」

「あっちで話す」

腕を掴まれてそのまま俺は彼女と共にミステリーツアーを開始したのだった。

「あっという間についたんですけど、ここはどこですか？」

目の前に広がっているトイレ壁に俺は首をかしげる。

「んゝさすがに一人用で二人を運ぶのは大変だったか・・・失敗失敗」

個室に二人でぎゅうぎゅうにつめられている状態は色々と危険だったのでさっさと出る。

「ここ、どこです？」

「ここ？ここは世界に広がる王都の一つ・・・・・・名前はちょっとわからないけどね・・・」

そういつて辺りを油断なく見渡すネリユさん。

「・・・・・・で、これから何をするんです？」

「ど・ろ・ぼ・う♪きゃは♪」

「ど、泥棒!？」

びっくりして相手に尋ねると

「そうよん♪」と目をぎらぎらさせながら答えてくれている。

「片棒担げっていうんですか？」

「そうだねえ・・・・・・そうでもしないとこの国の食物連鎖の一番下にいる人たちが困っちゃうからね・・・・・・」

何やらわけありのようだ。その目には憂いの色が浮かんでいる。

「まあ、どうしても零時が駄目だっていうのならいいんだけどね・・・今日はちよっと相手が悪そうだから・・・・・・もしかしたらって思っ

て頼んだの」

そういつて肩をすくめるネリュさんに俺は頷いた。

「わかりました、何をやればいいんです？」

「とりあえず……ここを護衛している人工物の相手をしていて欲しい。破壊するのなら破壊しても構わないけど、できれば穏便に済ませて欲しいわ」

外に出れば目の前は既に大きな屋敷が約九割の面積を占めている。

「……いくわよ？ 零時はここで待機しておくように」

「……ええ」

彼女は丸い玉を取り出してそれを庭の中に放り込む。その玉は何も音を発したりせず静かに破裂した。

「……？」

「じゃ、何かあったらさっきのトイレで待っててね」

そういつて彼女は闇夜に消えてしまったのだった。俺は手持ち無沙汰に辺りをきょろきょろと見ているとなにやら二つの赤い光を放つものが屋敷内の木からこちらを見ている。

「？」

よく見ようとしてはつとなり、俺はあわてて後ろに飛んだ。

「!？」

先ほどまで俺がいた場所は見事に穴が開いていた。うわ、なんだか過去にもこんなことがあった気がするなあ……いつだったわけ？

「……侵入者、排除します」

煙が上がる穴の近くに人影が立っている。

「……こいつか……」

俺はこの相手が人工物なのだろうと思った。筋骨隆々の男だ。別に目が光っているわけではなく、暗視スコープと思われるものをつけている。

「……というより、俺はまだ正確に言うなら侵入してないぞ？」

俺の足はまだ屋敷の門の外側にある。

「……あなたが何故、今ここにいるかは私には理解できないの

だが・・・あなたの言っていることも理解できない。この国はすべて領主様のもの・・・」

「え？じゃあ・・・既にここにいる時点で侵入者！？」

「そうだ。だから、消す！！」

相手は巨体とは思えないほどのスピードで俺に突っ込んでくる。

俺も腰から杖を取り出そうとしたのだが・・・

「・・・」

「くっ！」

教師棒を吹き飛ばされてしまった・・・だが、俺は基本的に杖を必要としないので相手の懐に魔力のこもった一撃を加えてやった。

「ぐっ！！」

相手はその場に倒れてしまった。

「・・・こんなものだろうか？」

倒れてしまった相手に吹き飛ばされた教師棒を再び手に取り・・・

・さて、これからどうしたものだろうかと思って空を見上げると・・・

・

「・・・侵入者、発見！」

月をバックに羽を広げた相手がたくさんいる！マジか？全員が同じ顔だ！怖い！

トイレに戻ってこれたのは幸いだった。きっと、トイレの前にはものすごい数の人工物が気絶しているに違いない。

「はあ、これはしんどい話だな・・・」

「どうも、ご苦労さん♪」

ネリユさんは小さな窓から入ってきて俺の頭に手を置いたのだっ
た。

「陽動ありがとさん」

「いえ、これでいいんですよね？」

「さ、戻るかぁ・・・よくがんばってくれたわね」

なんだか普段よりも女性的な部分のネリユさんにちょっとどきどきしながらも俺はネリユさんと共にその場を後にしたのだった。

「うわあああ!!」

目が覚めたら自分がとても情けない声を出していることに気がついていた。

「……ん？ああ、零時か……くあ……」

自分は今、何故かネリユさんを抱きしめるようにして寝ていたのだ。しかも相手は薄いTシャツ一枚だけである。

「ああ、とうとうあたしを選んだのかい？」

「ええっ!!？」

辺りを見渡すが、フレアとフェイル生徒会長の姿は確認できない。

「にしし……あの二人がこの光景を見たらどうなるだろうねえ」

「……」

あれ？昨日は……ネリユさんのお仕事を手伝って、帰ってきて、それから……き、記憶がにやい!？」

「ん」昨日はよくがんばってくれたねえ」さあて、あたしのお仕事はどうなったか結果を見てこないとねえ」あそこの新聞は情報が早いからねえ」

ネリユさんはそういつて部屋を出て行き、残された俺は頭の中が何故か真っ白になっていたのだった。

真っ白になっていた俺にすぐに戻ってきたネリユさんは告げた。

「零時、たまにはお前の寝顔が見たいなあ」可愛かったからねえ」
今後は、ネリユ姉さんと呼ぶようにね……呼ばなきゃ、ばらしちやうからねえ」

「……りよ、了解しました」

俺はぎこちない動きで相手のほうを見て頷くことしかできなかったのだった。

余談だが、隣の領主が村民に倒されたらしい。領主は逃げたそう
だ。無血で終わったその争いを聞いてネリユ姉さんは
「これも零時のおかげだねえ」と呟いていた。

A::信頼は見えないもの(前書き)

今回の登場人物紹介…教頭先生…とても皮肉めいた人なのだが、いい人である。現実主義者でお化けの存在を否定している人物である。

A…信頼は見えないもの

九、

さて、この世界での学校の仕事は

「生徒会長補佐官」なのだが、今のところきちんとした仕事は図書館の管理だけだ。めったに人が来ないそこは非常に静かで、たまに気配を感じて振り返ってもそこには誰もいなかったりする。お化けでもいるのだろうか？そのためか、肝試しコースの一つとなっているらしく、夜な夜な生徒たちがそこに忍び込んで叫び声をあげるそうだ。そして、俺たちがしなければならぬ仕事は基本的には夜な夜なやってくる生徒を捕まえて指導することらしい。お化けのほうではなく、生徒のほうを罰するのは当然だが……別ににお化けがいることを否定しなかったところがやけに怖かった。

そして、これはフェイル生徒会長から聞いた話である。

「だから、私たちが解決します！」

「ああ、そうっすか……」

と俺は答えた。いや、答えるしかなかった。頭が動かなかったからだ。場所は男子トイレ、俺は用を足している真っ最中……何故、このようなことになったかという……

学校に慣れてきた俺はようやくどこに何があるのか覚えることが出来始めていた。今日もこの学校では毎日行っている生徒会に行く前に俺は男子トイレに向かったのである。そこでは生徒たちがたむろしていて話をしている。俺はそれを避けて用を足し始めた……

「零時補佐官！」

そういつてフェイル生徒会長が普通に入ってきたのである。男子トイレにたむろしていた生徒たち（勿論、男子）はぎょっとしていたのだが、一番ぎょっとしたのは俺だ。

そして、今に至るのである。

「今日、早速調べましょう！」

「……はあ、わかりました」

「本当にわかってるんですか？」

何に興奮しているかわからないが、この学校の生徒会長に俺は冷静に告げる。

「……フェイル生徒会長こそ、自分がどこにいるかわかってるんでしょうか？」

「あ……これは、失礼しました……」

顔を真っ赤にして彼女は去っていったのだった。

やれやれ、あの生徒会長にも困ったものだなあと思いながら、俺はやるべきことをやって外に出る。

「お待たせしました」

「……さ、先ほどは失礼しました……その、いいです」

「……」

ぽっと顔を朱に染めているのだが、何がいいのかさっぱりだ。微妙に視線が危ないところを見ているような気もする……っと、馬鹿なことを言っている場合じゃないな。

「それより、話がまだ終わってないんでしょう？」

「ああっ！！そうでした！今日からはじめますよ！まずは校長室に行きましょう！」

俺はフェイル生徒会長と共にとりあえず、屋上にいるであろう、校長先生に会いに行くことにしたのだった。勿論、夜に生徒をぼこぼこに……もとい、指導するためである。

校長室に行く途中、やはり黙っていくというのもおかしいので二人で話しながらいくことになる。それは当然だろう。

「そういえば、フェイル生徒会長って変な部分があるよなあ……」

「……変ですか？どこが？全部？」

「全体的ではなくて、一生懸命なところがあるというか・・・他のものが見えなくなるというところですね♪」

「むう、いけないことなのでしょうね？」

軽く言ったつもりなのに、彼女は相当気にしているようだった。

「ほら、そういうところだよ」

「・・・私のことをからかってません？」

「いやいや、別に・・・そういう真剣に悩むところはいいいよなあ・・・俺もそうやって真剣に悩めることがあればいいのになあ・・・」

「

「・・・あの、零時補佐官、やっぱり私をからかっていますか？」

「いやいや、本当にからかってないが？」

「それならいいのですが・・・」

校長室の扉の前に二人で立ち、フェイル生徒会長が扉を叩く。

「すみません、フェイルと零時です」

「どうぞ、お入り」

まるでサンタのような姿（遂に来た！赤い服を着ている！）で俺たちを出迎えてくれた校長先生は始めてあったときと変わらず隙を見せることはなかった。

中に入れてもらおうと教頭先生（俺は初めて顔を見る）が先客としていたのか眉をしかめて俺たち二人を見てくる。

「何事かね？」

実に仕事が出来そうな人でまだ若そうだった。しかし、その目つき鋭い視線はどちらかというと先生になるような人ではなく、やり手の社長だといわれたほうがしっくり来ると思われる。生徒には人気がないと思われる。

「・・・え、ええと・・・夜に生徒会の仕事がありますから・・・その許可をもらいにき、来たんです・・・」

かなり緊張しているのか、はたまた目の前の教頭先生が怖いのか知らないがフェイル生徒会長は非常に答えに窮しているようだった。

「ほっほっほ、いいでしょう」

「校長、理由も聞かずして許可を与えるなどと……気がつけば生徒会長補佐としてどこの馬の骨ともわからない者に任せたのですか？」

それは俺のことをさしているのだろう。

「……お、お言葉ですが、教頭先生……零時補佐官は私をきちんと補佐してくれています！」

「……ふん、私はあなたに答えを求めているわけではありませんせん、ちよつと黙っていなさい……いえ、その前に一つ……その様子だと、本名までこの馬の骨に教えたようですね……」

「……も、勿論です！上に立つものが下のものを信頼もせずにいられますか！」

「……まあ、そうやって騙されてしまうのでしょうがね……決めたのは間違いだったということだと私は思いますけどね……」

「ちなみにだが、生徒会長の本名は全校生徒が知っているのだが、全員がそれを偽名だと思っている。その事実を知っているのは俺だけだろう。」

「教頭先生、決定は軽々しく覆せません。彼女たちがここにきた理由もわかっていますし、教師側の意見としても生徒の自立を促し、正しい道を進まなくてはいけないのです……生徒が正しい道だと思っただけ間違った道を進んだときは私たちが責任を見ないといけないのですよ」

「……わかりました」

校長がそういうとあっさりと教頭先生は引き下がった。その顔には何も浮かんでおらず、俺たちのことをどう思っているのかさえ、わからない。誰も何も言わない状態で、俺はすぐにでもこの部屋から立ち去りたかった。

「校長先生、では俺たち……いや、僕たちは今日の晩から校内を巡回します。無論、他の生徒会員にも協力を仰ぎたいと思っています」

す……では、失礼します」
フェイル生徒会長を引きずって俺たちは校長室を後にしたのだった。

「零時補佐官、ああいわれて悔しくないんですか？」

校長室を出てきて図書館へと向かった後に突然、彼女は俺に噛み付いてきた。

「いや、悔しいも何も、事実だろ？ 実際、俺は馬の骨だし……俺が死んだらその骨できつと馬頭琴だって作れるぞ？ たぶん。」
そういつてため息をつく。

「今はそんなことよりも仕事のほうが優先に決まってるさ」

「け、けど！」

なおも食い下がってくるフェイル生徒会長。成る程、人の上に立つ人はこのくらいしつこく無いといけないのか……いい勉強になった。

俺のことは見てくるフェイル生徒会長に俺はこの話にけりをつけるためにまとめにかかる。

「いって、俺がどこぞの馬の骨じゃないってフェイル生徒会長がわかってるのなら……まあ、一人でも俺のことを信じてくれる人がいるのならめっけもんだろう？ フェイル生徒会長が俺のことを信じてくれるんだろ？」

「も、勿論です！ あなたのようないい人が面倒を起こすとは思いません！」

それも事実だろう。厄介ごとを起こすのはフレアとフェイル生徒会長。厄介ごとを持つてくるのはネリュ姉さんの所業だろうな。

俺はポケットに何かないか探して思い当たったものを隣を歩くフェイル生徒会長に渡す。

「これは？」

「螺子っていうもんだ。お守りとして持っていてくれ」

「……わかりました」

「失くさないでくれよ、大切なものだから……」

「なら、何故こんなものを私に？」

「俺もフェイル生徒会長のことを信じているからな。失くさないっと思うから……」

そういつて俺は小走りで走り出す。

「さ、急ごう、フェイル生徒会長様？」

「も、勿論です！」

螺子を急いでしまつて彼女は俺の隣を一緒に走り出した。

図書館にやってきた俺たち二人はどうするべきか話し合った。図書館には他の生徒会員がおり、厳しい顔をしてテーブルを囲んでいた。

「案としては二つあります」

フェイル生徒会長はそう言つて他の会員を見渡す。俺はなぜだか、フェイル生徒会長の右斜め後方に控えている。

「え？見回りするんじゃないのですか？」

早計な一人の生徒会役員が手をあげて質問をする。

「それは最後の切り札です……。そんなことをして生徒会役員に被害が出ては意味ありませんからね……。まず、立ち入り禁止の札を掲げて一週間ほど様子をみてみましょう」

これは普通に一般常識なのだが……

「それで通用するのか？」

「まずは、試しです」

俺が質問をした後に他の生徒会役員が手をあげる。

「……。その案には賛成なのですが、規律を破って入ったものがあるかどうかはわからないのではないのでしょうか？」

「そうですね、確かに、札をかけておくだけではいけないのかとおもいます」

一時、がやがやとうるさくなる図書館にとても聡明そうな顔で生徒会長は告げた。

「私たちは何ですか？魔法使いですよ？侵入者撃退用の魔法を仕掛けておけばいいでしょう？」

とても簡単なことなのだが・・・このくらい、楽な考えだろう。

「これより、侵入者撃退用の魔法を皆で考えます！！」

フェイル生徒会長はそういつて辺りを見渡したのだった。なぜだか、俺はいやな予感がしたのだった。

「現時点で最高の魔法使いの影をつくってそこにおいておきます！」

後日、俺が自室で教師棒の手入れをしているところにフレアがやってきた。いつものことである。

「零時さん、学校での噂聞きました？」

「何を？」

「図書館に無断で入ろうとした生徒が影の魔法使いにぼこぼこにされたそうなんですって！今度一緒に倒しに行きませんか？」

その目がきらきらしていても面白そうにしている。今日はフェイル生徒会長がこの家にいない。ちょっと用事で出ているそうである。彼女が聞いたらどうなるだろうか？

「あゝフレアが行っても怪我して戻ってくるだけだろ？」

「それでもありませんよ！零時さんならきっとその影を倒せます！」

「いやだぞ、俺は」

「えゝなんでですか？」

今日は珍しく食い下がってくるフレアに俺は告げた。

「・・・どんな相手だ？それで決めるから」

「えっとですね・・・私たちが通っている学校の先生だという噂があります。教師棒を持っていて非常に強いそうです」

「ああ、それなら却下だ。教師棒を持っている時点で既に先生が相手だろうからな。俺は先生に顔を見られるようなまねはしたくないんだからな」

そういつて俺は教師棒をそそくさと戻したのだった。

「それより、今度おいしい店にでも何か食べに行こうぜ？」

「そうですねゝたまにはいいかもしれないですからね・・・ああ、それならいい店がありますよ！！」

ころっと忘れてしまったのを俺は感謝するしかないだろう。今頃も不埒な学生が図書館に侵入しようとして俺の影に撃退されている時間帯なのだろう。

「まったく、何かあの図書館にあるのかな？来るなら昼間こいつの！」

「え、何か言いましたか？」

俺は首をひねってしらばっくれたのだった。

A..信頼は見えないもの（後書き）

さて、今回は九話めですね。これからの予定としては、ちょっとした仕掛けをまた取り入れたいと思っています。

A…嵐と海と魚と俺と？

十、

ずっと部屋の中に塞ぎ込むのは非常に良くない。

身体的にも悪いし、精神的にも悪い。たとえ運動神経が鈍かろうが外に出るのが面倒だろうが、人間、一日に十分ほどは外に出て歩べきだ。そして、思い切り体を動かして体と心にたまっている鬱憤を外にぶちまけてリフレッシュするのがいいことだろう。外の天気なんて関係ない！それが雨でも風でも嵐でも……

「零時さん、遊びに行きましょう！」

外ではものすごい風が吹いて雷が鳴り響いているだろう。

「無理だ。どう考えても嵐に外に出ようとする奴は外に出る前に病院に連絡を入れるべきだろうな」

俺はそういつて教師棒の手入れをしている。

「えー！遊びに行きましょうよ！」

麦藁帽子に水着を着ていて虫取り網を持っている。お前はどこに行きたいんだ？

「そうですよ、零時補佐官！」

「フェイル生徒会長、お言葉だが君たちの世界には嵐のときに外に出るような習慣でもあるのですかね？私の世界ではそんな風習はこれっぽちもありませんでしたか？」

こちらは水中眼鏡に何故か日焼け止めを塗っている。この世界に日焼け止めがあるのが驚いたのだが、塗るところを間違っている。

「あ、真っ白！」

「そりゃ、そうだろ……」

「いつも部屋に閉じこもってばかりでは体を崩すとおもうぞ、零時？保護者側の私としてもお前たちには充分元気に遊んでもらいたいもんなんだがね？」

ネリユ姉さんもそんなことを言っているのだが・・・

「ネリユ姉さん、そんなことを普通は言うでしょうが、この状況を考えてくださいよ・・・さっき外に行ってきましたけどすごいことになってましたよ？」

その光景は惨憺たるものだった。牛は空を

「も〜」といいながら舞い、洪水が起きていたりしていた。俺の目の前を王様らしき人が転げて行ったのが記憶に残っている。

「はぁ・・・遊びになんて行けませんよ・・・」

俺はそういつて三人を説得したのだが・・・

「「「そんなの、零時（さん、補佐官、呼び捨て）がどうにかすればいいじゃない（ですか、でしょう、の）」「」」

という鶴の一声ならぬ、彼女たちの声で決定されたのだった。やれやれ、どうしたもんだろうか？

目の前に広がるものは単なる海原・・・

「あいたたた・・・」

「わーい！海だ！」

「さぁ、泳ぎましょうか！！」

「酒だ酒だ！」

散々こき使った挙句に彼女たちは俺に礼の一つも述べずに去っていった。何？この不当な扱い？

この世界にも浮き輪があるなんて意外なのだが・・・とりあえずそれをもってフレアは浮いている。それにビーチボールを投げておぼれさせようとしているフェイル生徒会長。そして、砂浜でグラサンかけて何らかのアルコールを口に含むネリユ姉さん・・・

「はぁ・・・疲れた」

ここまで俺は三人をワープさせた。この前使った魔方陣を使って移動したかったのだがネリユ姉さんが無言で

「あれはこの子たちには秘密だからなぁ」というアイコンタクトをしてきたのでご破算となった。

その結果、俺はひいひいながら彼女たちをここまでつれてきたのである。おぼれていないかどうかフレアのほうを見るとあいつはこっちのほうを見てきた。

「零時さん！一緒に泳ぎましょうよ！浮き輪貸してあげますから！」

残念ながら浮き輪をつけて泳ぐ歳はとつくの昔に卒業している。

「いや、いい……」

「そうですかあ？」

俺は次にフェイル生徒会長のほうを見る。

「零時補佐官、一緒に砂山でも作りませんか？」

「……会長が作ったやつを壊す役をさせてもらうからいいやれやれ、海って奴は罪作りな奴だな……」

「おい、零時、一緒に酒でも飲まないか？」

「俺、未成年だから駄目ですよ。それに、酒には弱いですからね」

「ああ、欲望のままに襲っちゃうのかあ、なるほどなあ……」

「違います、寝ちまうんです」

この人たちはそれぞれで海を満喫しているところを見るとつれて着てよかったということなのだろう。

しかし、俺はちよつと疲れたので休憩させてもらおうと陰ができている木陰に休ませてもらおうことにした。

ちよつと休んでいるとフレアの声が聞こえてきた。俺はまだ目を開けていないのだが、遠いところから叫んでいるようだ。

「零時さん！」

「どうした？」

「とても大きなお魚さんですよ！」

「へえ〜どんなのだって……」

目を開けてその大きさを確認すると……

「でかすぎじゃねえか!？」

フレアの縦五倍、横七倍の大きな魚がいた。あわてて駆け寄る俺。
「逃げろ！フレア！」

途中、立ち上がったネリユさんが俺に告げる。

「零時、あの魚が今晚のおかずだ！」

「あれ、食えるんですか？」

「コックネリユをなめんじゃないよ！さあ、買出しだ！」

その前に漁師さんが必要だ！

「会長、あれをしとめよう！」

俺は器用に砂の城を作っていた会長のもとへとやってきた。

「……何を言っているんですか？無益な殺生をしてはいけませんですよ？」

「で、でもフレアが……」

「大丈夫でしょう……」

「あ、そっちに攻撃がいったぞ！気をつけろよ！」

目の前の砂の城がいきなり崩れた。どうやら、ネリユさんの忠告が遅かったようだ。

「……い、いいでしょう！私の力を貸してあげます！け、決して砂のお城を破壊されて頭に來たものではありません！」

そのまま立ち上がってすいか割りように持ってきていた棒に魔力を包ませ特攻していく。

「プリンセスキャッスルの敵」

「はぁ……」

俺はその後ろを追いかける羽目となったのだった。

暴れまわる魚の頭のとっぺんでどこから取り出したのか知らないが、銚子を魚に刺しているネリユさん。

「うはははははは！大漁じゃあ！」

「……」

「くぬ！くぬ！くぬ！くぬおおお！！」

何かに取り付かれたのか涙を流しながらフェイル生徒会長は木の棒で魚に攻撃を繰り返している。このままでは今晚の晩御飯は魚の

たたきに違いなだろうな・・・

「ていっ！ていっ！」

フレアはフレアで浮き輪を使って魚の唇を叩いている。

「・・・効果はあるのだろうか？」

どうやら、全員で襲い掛かったのが吉と出たのか魚は目をばってん印にして倒れてしまった。

「ふう、やっと倒れてくれた……………」

「よっしゃ、今日の晩御飯は魚だねえ」

「…………敵は討ちましたよ、砂のお城……………」

そういつて全員が全員、それぞれの感想を述べているのは結構なのだが俺は黙っていた。

「で、これをどうやってもって帰るんです？」

「ああ、そうだったな」

今頃思いついたのか、ネリュ姉さんはそういつて首をかしげている。

「…………考えてなかったんですか？」

「まあ、零時に頼るしかないなあ」

「…………まだ、ネリュ姉さんって元気ですよね？」

俺が尋ねると彼女はおなかを押さえます。

「あいたたく急に腹がくせくしくな水着をきていたから問題があったのか？」

「お、お母さん大丈夫!？」

「だ、大丈夫ですか？」

俺は人を疑うということを知らないであろう、この二人組みを見た。そして、人を騙して生きるのが人の道だ!と思っているであろう一人の人物を見た。まず、二人の信頼を勝ち取ったために流れる「にやり!」という表情が俺の頭にはりつく。

「零時さん!お願いです!」

「零時補佐官、頼みますよ」

そして、この二人はおせっかいを焼くのが好きだ。

「……………わかったよ、もっていきや、いいんだろ？俺が！」

そして、俺はここまで騙されている二人を可哀想には思えなかった。おながが痛いといっていたネリュ姉さんはこっちを見ている二人の後ろでにやにやしながら俺を見ている。俺はこのとき

「この人には勝てない」と思ってしまった。

「ただいまぁ！」

家に帰りつく。勿論、誰もそこにはいないし、いつてくれるであろう人物たちは俺が背負っている魚の上に乗っている。正直、ここまで運んでくるのはしんどかった。

「ただいま〜」

「帰ってきたぞ〜」

「ただいま戻りました」

魚の上に乗っている人物たちはそういつて入ってくる。

「むう、家にいるんだから零時さん、きちんとおかえり〜って言ってくださいよ〜」

「……………はいはい、お帰り、フレア」

「フレアだけかい？」

「お帰りなさいませ、ネリュ姉さん……………」

「私は？」

「……………お帰りなさい、フェイル生徒会長……………」

俺はそういつて魚をおろすと体を動かした。見た目よりもめちゃくちゃ軽い魚で助かったな……………

「さぁ、今から晩御飯だ！役に立たない零時はそこに座ってな！二人は私のサポートだ！」

「「了解っ！！」」

戦力外通告を言い渡された俺は近くの椅子に座って目を閉じたのだった。

「零時さ〜ん、起きてください」

「ん？ ああ、寝ちまったのか……………」

目の前にはとてもおいしそうに焼かれた魚の姿があった。

「さあ、食べようか？ 零時、今日は本当によくがんばってくれた」

「あ、どうも……………」

俺はネリュ姉さんにねぎらわれて頭をかくしかなかった。

「見直しましたよ、零時補佐官？」

「……………そんなら、今まで俺はなんだったんだ？」

「冗談です、頼りにしている補佐官ですからね」

フェイル生徒会長はそういつて首をすくめる。

「零時さん、いつもありがとうございます！」

「ああ、ありがとな、フレア」

フレアは非常にニコニコしながらそんなことを言ってくれる……………

…ふう、こんなことをいってもらえるなんて思ってもいなかったな

あゝ

「さあ、食べるか！」

「いただきます！」

「いただきます！」

「……………ふう、いただきます」

俺は体をもう一度だけほぐしてから手をつけ始めたのだった。ま

あ、あまり手をつけようとは思わないが……………

「これ、あげるよ、零時さん！」

「ささ、もっと食べてください！」

「もっと男は食べるもんだよ！」

「は……………どうも」

皆はニコニコしながら俺に魚を渡してくれるのだが……………

ごめん、俺実は魚が苦手なんだわ……………

A：嵐と海と魚と俺と？（後書き）

いやあ、第九十部分となりました。あと十回で百回記念ですね、百回記念ではいつもより結構長い話にしたいと思います。

A…彼の心情

十一、

「ねえねえ、フレアの家にいるあの居候さんって物凄い魔法使いなんだよね？」

フレアのクラスの友達が近づいてきてそんなことを尋ねてくる。

「何の話しているの？」

「私たちも混ぜてよ！」

続々と集まってくる人たちにフレアは驚いているようだったのだが、先ほど質問してきた人物に対して、フレアはまるで自分のことのように自慢げに答える。

「うん！すごい人だよ！私が知っている中で一番頼りになる人なんだよ！」

「へえ、すごいね、でも、人間的にはどうなのかな？ほら、自分の力を過信している人って結構いるよね？それで身を破滅させちゃう人なんて五万といると先生も言っていたし？」

「うーん、そこまではわかんないなあ……」

「意外と臆病だったりして？」

「なら、零時さんに聞いておくね？」

「はあ、今日も終わった終わった……」

俺はゆったりとした夜の時間を満喫していた。

「けど、やっぱり図書管理は大変だな……蔵書の管理、点検、発注、処分……あと、年内計算とかもしないといけないのが面倒だな……大体、フェイル生徒会長の仕事だったみたいだし……」

「そのようにぼやいていると隣から槍が飛んできた。」

「まあ、補佐官なのですからその位して当然ですよ」

「確かにそうだけだよ・・・たまには暇も欲しいものだな」

「なら、教室に行って授業を受ければよろしいでしょう？」

まるで詐欺師が詐欺を働いた後に見せるような笑顔を俺に向ける。きつと、この人物は俺が自分のクラスをどこだったか忘れてしまったことを覚えていいるのだろう。それに、いまさら授業などに出ても内容など分かりなどしない。

「・・・」

「でしょうね、いまさら授業など受けてもわからないと思いますけどね？」

「・・・」

さらに無言となって目をつぶって首を振るフェイル生徒会長・・・ふ、やはりお見通しというわけか・・・

「ま、それなら個人的に教えてあげてもいいですけど？」

片目を開けて俺のほうを見てくる。

「零時補佐官、そこはそうじゃありませんよ？もうちょっと事務処理関係の書類を任せたほうが良かったのでしょうか？」

ああ、一瞬だけ教えてくれているフェイル生徒会長の勇姿を垣間見たような気がするぜ。

「・・・ああ、今度教えてくれ」

「わかりました」

遠慮しておこうとしてもこのおせっかい好きのことだ・・・絶対に強固な態度で迫ってくるに違いない、俺はとりあえずあいまいにしておくことにした。

「零時さーん！」

「ん？」

扉をばたんと開けてはいってきたのはフレアだった。本日は皿洗いをしていたので部屋にいなかったのである。

「どうした？なんだかおかしい顔をして・・・」

「ちょっと聞きたいことがあるんですけど？」

この前そういつて持ってきたものはこの世界の歴史の問題だった。新参者の俺に解けるはずなどなく、二人して悩んでいた結果……。見かねたフェイル生徒会長がぼしつと答えに二人を引きずっていつてくれたのである……。後に、俺とフレアは生徒会長にみつちりと歴史を叩き込まれた。そのおかげである程度までならこの世界の歴史について知っている。

「悪いが、この前みたいに問題を持ってこられても答えられないぞ？俺はもう、徹夜で勉強なんて嫌だからな？」

「大丈夫ですよ、今度から一週間で十四時間ほどみつちりと歴史を頭に入れ込んで上げますからね」

にやりと笑っているフェイル生徒会長を俺は一瞥してフレアに文句を言うことにした。

「……。ほら見ろ、生徒会長さんが本気になっちまったぞ？ふらふらで倒れても今度は俺は知らんぞ？」

「いえ、勉強のことではないんです」

首を振っているフレアに俺とフェイル生徒会長は首をかしげた。

それなら……。何かフレア関係の話なのだろう。

「なんだ？明日の晩御飯の献立会議か？」

「それも違いますよ」

「じゃ、明日の弁当の中身予想か？」

「違います」

「それなら……。ああ、明日の朝食のことか？ネリユ姉さんは確か・
・・」

「違いますっ！！」

「あれ？てつきり食事のことかと・・・」

「なんで私は食事のことしか頭になさそうなんですか！」

珍しく怒りながらそんなことを言ってくる。

「ああ、すまんすまんこれが違うなら・・・なんだ？」

「当ててみてください」

「……すまん、わからん」

「早すぎです!」

「……おやつのことか?」

「だから、違います!!」

フェイル生徒会長に視線を送る。ここで生徒会長が当てればお怒りも収まるだろう。がんばれ、生徒会長!

「……フレアさん、私はわかってますよ」

フェイル生徒会長はちゃんと俺のアイコンタクトを理解してくれらしい。いかにも

「私、頭がいいんですよ」みたいな表情をしている。

「本当ですか?」

「ええ、本当です……」

少し間をおいて答える。

「今、おなかが空いているのでしょう?」

「だから、違いますってえええええ!!」

ぐう

「あ……」

音がしてきたのはフレアの方だ。

「ほら、そうなんですよね? どうです、私はお見通しなんですよ」
♪

得意げに俺に片目をつぶってくる。ううむ、今おなかが空いていたから怒っていたのか……。やはり、生徒会長というだけあって違うな……。いずれ、国を治めるほどまでに成長するかもしれん。

「さ、ネリユさんには後で話しておきますのでお菓子をどうぞ?」

「ああ、すみません……」

おとなしくお菓子をもらって食べ始める。先ほどまでの大騒ぎはどこに行ってしまったのだろうか? フレアは静かになってお菓子を食べている。

「んーじゃ、そろそろ寝るかあ」

俺は立ち上がったって体を鳴らす。

「そうですね・・・フレアさん、きちんと歯磨きをしないと虫歯になっちゃいますよ？」

「ええ、わかってます」

「じゃ、おやすみ」

「明日も学校ですねー」

「じゃ、明かり消すぞー」

ぱちっ

「・・・ぐう」

「すー」

俺も目をつぶって寝ようとして・・・

「って、違います！」

隣のフレアが立ち上がった。既にフェイル生徒会長は眠ってしまったっているらしい。切り替えが早すぎる・・・

「・・・どうした？またトイレについてきて欲しいのか？」

「まだいいですって！いえ、そんなことより・・・零時さんに聞きたいことがあるんですけど？」

暗がりなのでどんな顔をしているのかわからないが・・・フレアはどうやら何かを考えているようだった。

「何だ？」

「ええつとですね、今日、学校で友達と零時さんのことについて話し合ったんです」

「何？俺についてのことを何について話し合ったの？」

他人が俺の何を話し合うんだ？・・・まあ、過去に一度そんなこともあったなあ、そういうやー螺子のことについて話し合ってたな・・・

・・・

「ええつとですね、零時さんは自分の力を過信したことがありますか？」

「……は？よくわからんのだが？」

「ええつと、ちょっと待ってくださいね、今まとめてますから……」

そうですねーと少々唸ってからフレアは続ける。

「……零時さんが魔法の力を使っていて自意識過剰になったことってありますか？」

声には真剣なものを含ませている。これはまじめに答えたほうがいいのだろうが……

「……うーん、どうだろうなあー過信したことはないと思うな……ほら、フレアを助けたときのこと、覚えてるか？」

「勿論です、あれからうねうねするのは苦手になりました……」

「あの時、俺は自分の力のことを過信したということはなかったな……逆に助けられるか不安だった」

「え？」

ぎょつとした表情でこっちを見てくる。

「祈りながら戦ったな。出来るだけフレアにあたらないようにしようとかんばったっていったほうがいいだろうなあ……会長と戦った時だってそうだった。正直言ってあれはやばいと思ったなあ……だって、俺まだ魔法使いになって一年にも経たないからな」

「そ、そうなんですか？」

「ああ、まあ、魔法使いになること自体、事故だったわけだし……・とりあえず、俺は自分の力を過信したことはまだないな……自分の力を信じるのが逆に出来ていない、不安な気持ちと共に使っているのが現実だな」

なんともまあ、理解しがたい話となってしまうたが……これが今のところの正直な話だろう。

「で、でも……他人が零時さんを頼ったら零時さんは絶対に成し遂げてますよね？」

「うーん、正直、どうなんだろうな？まあ、これまで大事に至ったことはないからそれもじじつなんだろうなあ？」

「やっぱりそうですよね？私には無理ですよ。零時さんみたいに一人で何でも出来ません」

「どうかな、俺だって他人を頼ることなんて多くあるよ？たとえば、どんなに小さいことでも成し遂げることが出来るのなら、フレアだって大きなことを成し遂げることが出来ると思う。今は自分のことで手がいっぱいなんだけどさ、余裕が出来たときに他人を手伝ってあげるのがいいと思う」

そういつて俺はフレアの頭を軽く叩いてやった。

「だからさ、お前が思っているほどに俺はまだまだ、至っていないと思うぜ？俺はこの誰かもわからない俺を拾ってくれたネリユ姉さんにフレア、友達になってくれたフェイル生徒会長の頼みだったら何が何でも成し遂げて見せたいと思ってる。それに、俺だってフレアを頼っている部分もあるからな」

「そ、そうだったんですか？私・・・気づきませんでしたよ？」

「ま、これからもよろしく頼む・・・ああ、さっきの話、恥ずかしいから話すなよ？」

「わ、わかりました！」

「さて、明日も早いから早く寝ないときついぜ？ああ、明日俺を起こしてくれ、頼りにしてるぜ？」

「は、はいっ！おやすみなさい！」

そういつてフレアは静かに寝息を立て始めたのだった。

「ったく、フェイル生徒会長並に寝るのがはやいな」

俺はそういつてフレアの隣に寝転がって目を閉じたのだった。

「ね、どうだった？」

フレアの近くに友達が集まってくる。それに対してフレアは笑って答えた。

「内緒！教えちゃ駄目だって言われましたから♪」

A..根性のお話

十二、

根性さえあれば、何でもできるのだろうかと俺はたまに思う。つまり、あきらめない心というものが存在すれば出来ないことだっていずれ、できるようになるということなのだろうか？とりあえず、俺が言えることは唯一つ……。

世の中にはそういうことだってあるということだ。

「零時さん、今日の晩御飯は私が作りました！」

「ああ、そう、フレアが？」

「ええ！一人で作っただけです！」

「へえ、フレアさんはいつの間に料理ができるようになったんですか？」

「ええっとですねえ……」

俺は話しはじめた二人をおいてその場から逃げ出したのだった。

「……………」

無論、黙って。フレアには悪いが、フレアは食べたらもだえてくたばるといような料理は作らないのだが、まずい。気絶してしまうほどのまずさなんてこの世にはないだろう。あの世にあっても食べたくはない。以前、ちょっとしたことがあってフレアの料理を食べたのだが……。

「うっぷ！」と俺は言いながらも最後まで完食した。それ以後、俺はフレアの料理は絶対に手をつけないと決めたのである。

「さて、どこに逃げるべきか……」

逃げれるかどうか、わからないが……どうにかして今日の犠牲はフェイル生徒会長だけにしていただきたい。

「零時、どうした？」

こそこそと逃げようとしていたのだが……そこへ、ネリュ

姉さんがやってきた。

「あ、いえ・・・ちょっと今日は久しぶりにネリュ姉さんの仕事をお手伝いに行こうかと・・・」

今日は珍しくまだ仕事に行っていないらしい。彼女は義賊もやっているのだが、基本は農業をやっている。畑などは別の場所にあつて彼女は夜通しそこで働いている。

「ああ、そうかい？手伝ってくれるって言うのなら連れて行くけど・・・まだ、夕食食べてないんだろ？」

「いえ、食べました！」

「そうかい、それなら・・・きちんと二人には言ってきたのかい？」

「いや、まだですけど？ちょっと、言いづらい雰囲気ですて・・・」

なんともいえない臭いが俺の鼻を刺激している。きっと、そろそろ料理が完成するのだらう。

「それなら、置手紙を残してきな・・・」

「はい、おいてきました！」

「早いな・・・まあ、いいか、それなら行くぞ？」

「ええ、逃げましょう・・・じゃなかった、行きましょう」

こうして、俺は逃げたのだった。

「うぐ・・・じ、実に独創的なお料理ですね？」

「えへへおいしい？」

「ま、まあ・・・と、ところで零時さんは？」

「ああ、置手紙が残ってたけど一身上の都合で今日は帰りませんってかかれてましたよ？」

「く・・・に、逃げましたね、零時補佐官・・・」

「ささっ、どうぞどうぞ!!」

「こ、この蛇の生殺しの味加減がなんとも・・・ぶふっ！」

「まあ、フェイル生徒会長なら大丈夫だろうな」

「ん？フェイルがどうかしたのかい？」

「いえ、気にしないでください……ところで、今日も農作業で
すか？」

「いや、今日は……」

そういつて俺たちは二人で魔方陣に乗ったのだった。

「今日はこの森の果実をとる作業だ」

目の前に広がったのは緑色の景色。そこにあるものは見たことも
ないような果物だった。

「へえ、ここはどこっすか？」

「ここ？ここは王都とは殆ど無縁の場所だな。島国って奴さ。一応、
人が住んでいるから無人島じゃないんだけどな」

そういつて背中にかごを背負って歩き出すネリュ姉さん。俺は始
めてくる場所なので彼女についていくしかない。

「ああ、ここには凶暴な動物とかは一応、いないと思うから暴れる
んじゃないぞ？」

「暴れませんって……」

俺は暴れ牛か何かと勘違いされていないだろうか？

木の上になっているりんごみたいな果物やレモンっぽい果物を石
や魔法で打ち落としながら回収していく。

「うーん、今日はこのくらいかな」

「……重たい……」

かご一杯の果物を抱えて（俺が当然かごもち）俺は立ち上がった。

「こ、これでおわりっすか？」

「いや、まだある」

「まだあるって？」

ネリュ姉さんは立ち上がって近くの木を叩いた。

「まず、ここの果物を採っていくには超えねばならぬ壁がある」
「壁？」

「そう、この……」

ネリュ姉さんが手を叩くと、上空から一つの物体が落ちてきた。それは巨大な音を立てながら俺たちの前に立ちはだかった。

「……森の主を倒して初めて、家に帰れる」

「……うほっ！」

その物体はゴリラだ。体長五メートルほどの化け物ゴリラ……

「いや、正直勝てる自信がありません」

「甘いな、お前は自分自身に壁を作ってしまったている……いいか、こういうものはやる気と根性、勇気と希望さえあれば例え無理だと知っていてもなんとかなるものだ……確かに、実力はこの世界で一位か二位を争うほどの実力者だが……」

「いや、それって完璧にこの森の主どころか世界の主レベルじゃありません？」

「話は最後まで聞け……いいか、勝てる方法を今から教える……」

なるほど、例えどんなに強い相手でも弱点を突けば俺でも勝てるということか？

「……いいか、一回しか言わないからよく聞けよ？」

「え、ええ……」

「相手の攻撃を一度も食らうな！！以上！」

「え？」

「戦闘前のブリーフィング、終了！がんばれ、零時！」

ネリュ姉さんは俺からかごを取るとあっという間に姿を消した。そして、ゴリラは

「もういいのか……やれやれ、物好きな連中もいるものだ。俺様の森に入って果物を勝手に取ろうとした罪はおもいぞ」と地面に書いて俺に伝えた。

「じゃ、行くぞ？」

「いや、普通にしゃべれるんなら普通にしゃべれや！！」

こうして、俺対ゴリラの仁義なき戦いはその火蓋を切って落とされたのだった（無理やり）。

「うほーっ!!」

「のわっ!!」

ゴリラは立ち上がり、近くの木を引っこ抜くと俺に叩きつけてくる。それを間一髪で避けながら森の中を疾走することにする……いや、正直、今すぐにでも失踪したい。

「待てー!」

「へっ、誰がお前みたいな奴に捕まるかっての! こう見えても俺は走るの早いんだぜ? パワーファイターである自分を呪うんだな」
後ろを振り返りながら相手を挑発する。

「ほお、貴様……どうやら、ばななジュースの原材料にされたいみたいだな?」

ゴリラはあっさりと挑発に乗った。そもそも、挑発というのは相手の調子を崩して隙について反撃するという作戦に用いられたりするのだが……

「残念ながらあの巨体を一撃でしとめる自信はないな」

ゴリラは頭にお怒りマークを浮かべながら未だに追いかけてきている。先ほどよりスピードが2倍ほどになっているような気がしないでもないが、甘い。

「俺が魔法使いだっただことに後悔するんだな!」

俺は右手をゴリラに振り落とした。すると、ゴリラの足元にいきなり落とし穴が出現する。

「うほっ!」

ゴリラは一瞬だけそんな鳴き声を残して落ちていった……俺はそう思って穴の中を覗き込んだのだが……

「嘘だろ!」

ゴリラは壁に引っ付いており、こっちを見ている。

「おのれ、小僧!」

「うわっ! 落ちろ! このやろう!」

俺は思いつくものすべてをゴリラに落とした。岩、氷柱、受験生、タライ、etc……しかし、どれもゴリラを完璧に穴のしたには落とすことが出来ていない。

「くくく……もうおしまいかな？」

「くっ……ならば、これが最後だ！」

とっさに思いついたものを穴の中に落とす。

それは、巨大なバナナだった。

「うほっ!!」

ゴリラは巨大なバナナに引っ付いてそのまま穴の中に落ちていった。

「いや、正直な話もう戻ってこないよな？」

心配で心配で下のほうを見てみるのだが、やはり暗すぎてどうなのかわからない。

「とりあえず、今のうちに帰るぞ、零時？」

「あ、ネリュ姉さん……どこにいたんですか？」

「その木の辺り……怪我がないようで結構結構……どうだい？あたしの言っていたことは間違っていないかっただろ？」

「ええ、まあ……」

ま、あんなゴリラのパンチにあたったら怪我どころじゃなくて内臓が飛び出たりしてそのままモザイクつけられるんだろうな、俺。

「今日は正直疲れました」

「だろうね、さて……そろそろあっちじゃ夜更けだろうな……」
ネリュ姉さんと俺はその後、ゴリラが穴から這い上がってくる前にその場を後にしたのだった。

「ふうやれやれ……今回はやられるかと思った……」

「何を男の子が情けないことを言っているんだい？大丈夫、人間、根性とやる気さえあれば大事をなすことが出来るんだよ？」

「本当にそうですかねえ？」

「じゃ、私は寝るから……ふあああ、零時、一緒に寝るか？」

「いえ、いいです……」

一抹の不安が拭えないまま、俺は自室に帰りついたのだが……そこには、ゴリラよりも怖い表情のフェイル生徒会長がいた。フレアは布団に入って寝ている。

「……朝帰りとはいいいご身分ですね、零時補佐官？」

目の下にはくまが出来、暗いオーラを漂わせている。

「ど、どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたも……フレアさんの料理のことを知っていたのでしょうか？」

「え、ああ、まあ……」

「何で正直に教えてくれなかったんですか！」

どうやら、フレアの料理について文句を言いたくて残っていたらしい。

「あんなもの、食べれる代物じゃありません！」

「だろうな、フェイル生徒会長……ところで、腹、大丈夫か？」

「ほう、零時補佐官には今の私の状態が大丈夫な健康体だと思いますか？」

頬はやせこけており、青白い。うん、こりゃ健康体とは本当に言いがたいな……

「ま、あれだ……お休み、生徒会長？」

さっさと自分の布団にもぐりこんで眠ることにしよう。

「まあ、今のうちに至福のときを感じているがいいでしょう……おやすみなさい、零時補佐官」

フェイル生徒会長は意味深な言葉を残して同じく布団に入ったのだった。

こうして、俺の長い長い一日が幕を閉じたのだが……

「なんだこりゃ？」

「何って………目玉焼きですよ」

そこにあったのは黄色いはずの目玉焼きが緑色になっているという怪奇現象だった。

「……ああ、今日はフェイル生徒会長は早番とかでもう行っちゃいましたよ？」

俺は自分のさらに乗っている卵焼きをどのように処理するべきか悩んだのだった。

A..根性のお話（後書き）

さて、そろそろ第百回記念に向けての準備をしていきたいと思えます。第百回目は刀の話にする予定です。期待して待っててください。

A…冷たい心の裏側

十三、

まあ、ちよつと前の話だ。俺はたまたまネリュ姉さんと話していた。

「そーいや、零時は何か物を作ったりするのが好きなんだろう？」

「ええ、まあ……ネリュ姉さんほどじゃありませんよ。俺には一発でフレアのような人工物を作りきる自信はミジンコほども持ち合わせてませんよ」

そういうと彼女は笑った。

「おいおい、誰も一発でフレアを作ったとはいってないぞ？」

「え？ そうだったんですか？」

「ああ、そうだとも……あたしの娘たちは片手で数えられるしかないが……フレアは四番目だ。ちなみに教えておくがフェイルの奴もお前はもう知っているようだがあたしが作った二番目の人工物だぞ」

フェイル生徒会長が人工物ということは知っていたのだが……フレアが四番目だとは知らなかった。

「じゃ、一番目と三番目はどうなったんですか？」

そういうとちよつと悲しそうな顔になってネリュ姉さんは俺に告げた。

「一番目の奴とはけんかしたんだ」

「けんか？」

「ああ、そいつはめっちゃわがままな奴でな……どうにも、作る過程で人の心をあたしが入れ忘れたらしい。いずれそんなものは勝手に出来るんだが……些細なことではけんかしちまってそれっきりさ。きつと今頃はあの世で暮らしてるだろうよ」

「と、止めなかったんですか？」

「ああ、あたしのおやつを盗むような奴は反省するまで家に入れないうさ」

ちらりと垣間見たネリュ姉さんの鋭い眼光……この人はあれだ、肩をわざと当ててけんかを売るようなあたりやよりもたちが悪い。

「ま、本当のところはあたしを倒すために修行に行ったきりさ。あたしに対して反感をもったってことは心が出来た証拠だからね。人の心が出来ていることは確認できたからいいんだけど」

「……」

色々なことがあるのだなあ……俺はそんなことを考えながらそのときはそのままで会話が終わると思った。俺がこっちにいる期間が後どのくらいになるか知らないがその相手とは会うことはないだろうと思っていたのである。

そして今、俺は磔の刑にあっている。ああ、ちなみにこれをちょっと変えろと今、俺は貼り付けの圭に会っているとなる。どういう意味になったのか知らないが、めっちゃくちゃな状況なのはどちらも一緒だ。しいて言うなら俺のほうがちょっとつらい目にあっていると思っただけ。

「さて……零時君、異世界人のその体をわしに献上してくれたまえ……この世界の発展のためになあ……」

そして、目の前にいるのは私はマッドサイエンティストですと語っているような爺さんだった。紫の髪の毛にリーゼント。そしてまあ、白衣を着ている。その目に輝いているふちなし眼鏡がきらりと光って落ち窪んで生気を失っている目を隠している。

俺が何故、こんなところにいるのかちょっとばかり説明しよう。

今日も学校に行こうとして、校門を過ぎるとそこに一つのねじが落ちていた。

「珍しいな……」

この世界にも機械を造ったりする習慣があったのだろうか……そんな感じでそれに近づいて拾おうとすると、見事に俺は設置されていた落とし穴に墜ち。いや、今頃こんな古典的な方法をしてくるような人がいるのか？そして、そんな古典的な捕獲方法に引っかかる

ってしまった俺が古い人間なのは間違いないだろうな…………

『これよりあと二秒で睡眠爆弾が破裂します』

「無駄に近代的だ！」

俺の目の前に一つの丸い弾が現れてそんなことをしゃべっている。液晶ぶぶんには次のような数字が表示された。

『式、壱……………』

「そしてどことなく文字が堅苦しくて古い！」

睡眠爆弾は見事に破裂……………空気より重いそれは見事に穴の中にたまり…………睡眠ガスに対抗するすべなど持たない俺はそのまま眠りこけてしまったのだった。

そんなんでまあ、気がつけば自分が十字架に磔にされており、近くには怪しい液体やら謎の骨やらなんやらかんやら……………まさしく悪の科学者の砦だった。

「異世界人の体を隅々までじっくりと調べるのがわしのゆめじゃった」

「まあ、俺もあなたの立場だったら喜んでやりそうですけど……………こんな若造の体を調べても面白くないと思いますよ」

まあ、さらに付け加えて置くなら相手が機械だったら俺も問答無用でばらばらにしていたかもしれないがな……………

「そうじゃのう、もうちょっとぴちぴちの娘じゃったら色々といじってからしらべるところじゃったんじゃがのう……………ひひひ……………」

無駄にぎらぎらと光る眼鏡をずらして俺のほうを見る。目がいやらしいところを見ると心底嫌な爺さんだと思ってしまう……………

「なあ、解放してくれよ」

「嫌じゃ……………おい、フリーズ！」

「はい……………マスター」

「!？」

爺さんがそう呼ぶと後ろのほうから青い髪に青い目、青白い肌の女の子が姿を現した……………しかし、見た目はフレアそのものである。

「おや、こいつを知っているのか？坊主？」

「いや、よく似てるのは知ってるが……」

考えればフレアは人造人間のようなものである。ネリュ姉さんは腕がいいといっていたのだが……ああ、つまり……この人がフレアとフェイル生徒会長の姉……一番目に作られた人工物……その子……フリーズといったか……は白い服を着て爺さんに付き従っている。白い服とはいってもかなりぼろぼろの布を纏っているだけだ。そして、その頭にはなにやら怪しげな装置がつけられている。

「なあ、爺さん……」

「なんじゃ、坊主？」

「その子、あんたの孫か？」

「いいや、違うぞい？行き倒れていたところを装置を使ってわしの助手にしたんじゃ。ふふ、わしの言うことだったら何でも言うことを聞くぞい？」

「何かこの子にしたか？」

「したって……何をじゃ？」

少々にやけながら爺さんは俺に尋ねてくる。

「それをいったらこの小説、年齢制限もうけないといけねえからな……いわねえよ」

「ああ、そうじゃったら……まあ、いいわい。さすがにこの歳になるとわしの伝家の宝刀もさび付いてしまったからのう……もう無理じゃ」

「ふうん、そうか……まあ、実際のところはいつでもいいんだが……その子をさ、俺にくれないか？」

俺は相手に対してそんなことを口走っていた。爺さんはなにやら不思議そうな顔をする。

「なぜじゃ？そもそも、お前は今……囚われの身じゃが？そんな自分の身分をわきまえてからそんな口をきくんじゃな」

「うーん、じゃあ……交換条件、俺が今から出すものを爺さんが

気に入ったらそれとその娘、交換してくれるだろ？」

「……………」

爺さんは黙って考え事をしているようだった。ううむ、このままいつても埒が明けねえか？

「爺さん、異国のものが欲しいんだろ？」

「ああ、そうじゃ……………じゃが、わしが興味を抱くようなものじゃないと駄目じゃぞ？」

その答えを俺は待っていた。だから先ほどわかる人にはわかり、わからない人にはわからない質問をしたのである。

「ああ、勿論だ……………後悔はさせないぜ？」

――

そして、今、俺の隣にはすべての事情を話した。俺がこの世界にやったこともきちんと教えたのである。ああ、それと……………信じてもらうためにネリユ姉さんから聞いた話も彼女に伝えておいたのだ
が……………

「……………嘘だわ……………」

死んでしまったような目をしていたフリーズの目には冷たい光があった。どうやら、俺の話を信じてくれないようである。

「何がだ？」

「……………私はネリユには負けてないもん……………」

「は？」

そこか？そこを信じないのか？

「ええと、一体全体どういうことだ？」

「引き分けだもん！あれは私があと一歩先に踏み込んでネリユを吹き飛ばせていたら勝てたの！勝負じゃ負けちゃったけど……………戦術的には私のほうが勝ちだったわ！見物人がバナナの皮なんて投げちゃったから私が滑っちゃったのよ！」

ヒステリックにそんなことを叫んで俺の胸倉を両手で掴んだ。

「ねえ、あなたネリユの家にすんでるんでしょ？」

「え、ああ……………あんたの妹さんたちも一緒に住んでるぞ？」

「フェイルとフレアのことね……そんなことはどうでもいいの！私に協力して！私と一緒にあの悪魔を倒して！」

前に後ろにゆっさゆっさ……力は強いのか、俺を難なく振り回している。そ、そろそろ限界かも知れんな……それに、服がきわどい。見えちゃいそうだ……

「待て待て、お前のお母さんだろ？お母さんを悪魔呼ばわりするのは良くないぞ」

「何いってるのよ！自分のおやつを取られたから仕返しに一週間分のおやつを食べるのって悪魔がやることじゃないの！さらにこれ見よがしに私の目の前で食べたのよ！悪魔を通り越して魔王の所業だわ！」

「ああ、確かにそりゃそうだな……」

子どもが一日のうちに至福のときを過ごすのは静かな時間を過ごすことができるおやつの時間だ……その時間をとられ、まるで何かの刑罰だな。

「けどなあ、修行してきたんだろ？それなら別にいいじゃないか」

「嫌よ！もう負けたくないの！」

「でもなあ……」

ネリユ姉さんは俺のこの世界での保護者的存在であり、今では血のつながらない兄妹のような存在となっている。まだ一年も経っていないのに見ず知らずの男を弟扱いしてくれる人はそうそういないはずだ。そんな恩人に対してそんなことはできないんだが……

「どうしても駄目？」

「駄目……だなあ」

「私をあげるって言っても？」

目の前のフリーズはセクシーなポーズをとっているが……

「いや、要らないから……とりあえず、ネリユ姉さんのところに
行こう」

「いゝやゝだゝ」

嫌がるそんなフリーズを引きずるようにして俺はネリユ姉さんの

もとへと向かって歩き出したのだった。

「途中何か食わしてやるからよ」

「本当!？」

そんなことを冗談で言ったつもりだったのだが、フリーズは現金にも歩き出した。

「ほら! 遅いよ! なにしてんの!」

「まったく、なんて野郎だ……フレアは素直ない子なのにな」
ちよっとおばかだが……

「零時はいい人だね」

遅れてきている俺の手を掴んでそんなことを言う。

「はあ? お前初対面じゃねえか? そんなお前が何で俺のことをいい人だと認識できるんだよ?」

「だって、あのネリユが信じる相手なんでしょ? それなら私が心底信じることなんてたやすいわ」

「お前の基準がよくわからん……」

腕にすがり付いてくるフリーズに離れるように言ったのだが当然聞き入れてくれることはなくて……

「すう……」

「ま、これまでずっとあの爺さんにこき使われて疲れてたんだろうなあ……」

「母さん……ごめんなさい」

「……」

やれやれ、素直じゃない子も夢の中じゃ素直になれるんだねえ……俺は背中に背負った女の子を起こさないように静かに彼女の母親が待つ家に向かって再び歩き出したのだった。

「ううむ、実にすばらしいものを手に入れたものじゃ」

余談だが、俺がフリーズと交換したものは……ちよっと俺には刺激が強すぎる大人の本だった。

「これがあと数年分……実に興味をそそられる……」

まあ、詳しいことは聞かなくてくれると嬉しい。

誤解しないで欲しいが、この本は俺のものではないと最後に付け加えておこう。

A..冷たい心の裏側（後書き）

久しぶりの更新となり、読んでいる方にはご迷惑をおかけしました。
次の更新もどのくらいあとになるかわかりませんが、これからよろしく願います。

A..Aの終わり(前書き)

サブタイトルの通り、Aはこれで終わりです次回からはBが始まりますので期待しててください。あとがきのほうでBについて少しだけ書いておきたいと思います。

A..Aの終わり

十四、

俺がこっちに来て約半年が過ぎていた。笑えないことに俺はまだ自分がどのようなにしたらもこの世界に帰れるか知らなかった。

「フレア」

「何ですか？」

「ホームシックになった」

「……………あ、ああ……………それならこれをどうぞ」

フレアにそのように言ってもフレアは俺の目の前に工作キット（自分の手で家を建てよう！）をおくだけなのだ。

そしてまた別の日は……………

「……………はあ、いつになったら帰れるんだ？」

このように一人で生徒会室に残って呟いていると

「零時補佐官、早くレポートを提出してください」

「わかってるって」

フェイル生徒会長に日々、そんなことを言われたり……………

「零時、また行くぞ！」

「連日連夜っすね……………」

家にいればネリユ姉さんにこき使われる日々である。フリーズはフリーズで

「修行のたびに出るから何かあったら助けてね」といって姿を消したのだ。

――

そんなこんなで夜空が綺麗なとある日、俺は夜道を歩いていた。

「ふう、疲れるぜ……………」

歩いている理由は学校の消灯時間を過ぎても学校で寝ているところを誰にも見られなかったからだ。

つまり、誰にも起こされなかったからこのような時間まで眠っている

たのである。正直に言って、俺としてはやっちまったとしか思っていない。授業に出てもないし、図書館には人が来ない……暇つぶしに読んでいた小説は途中までは面白かったのだが、終わったときに主人公以外のことがかかれていなかったりと物足りなさが否めなかった。

ぶっちゃけ、こうなったら学校に止まろうと思ったのだが……さすがに夜の学校に一人でいることは恐すぎて出来なかったので俺は泣く泣く学校を出て家へと向かったのである。学校には校長先生が住んでいる例の部屋があるのだが……あのサンタのような校長先生と一緒にいたいとは思えない。いずれ子どもたちのプレゼントとして白い袋に入れられるかもしれないからな。

冗談はそのくらいにして、俺は街明かりを抜けて暗めの裏路地に入る。

こちらのほうを通ったほうが家に近い殻もあるのだが……この時間帯ともなるとこの城下町では逆に表通りのほうが危ないそうなのだ。表通りには悪人などがおり、この前のように捕獲されかねないので裏路地には森を徘徊していたりするモンスターが混ざったりする程度らしい。いや、正直な話門番さんはモンスターが来ても

「どうぞどうぞ、よくおこしかったですね♪」と言ってそのまま通してしまうそうだ。今までで一番強そうなモンスターは異国の土地から来た人型の魔法を使うオスのモンスターだそうだ……今頃気がついたのだがどうやらこちらの世界では俺はモンスター扱いされているみたいなのだ。

ぶつぶつと文句を言いながら俺が歩くべき町を闊歩していると……急にトイレに行きたくなった。

「……まだ家まで距離あるからな……」

夜になると前述の通り、外から出ると危険なので人々は家の中にいる。つまり、基本的には外に人はいないのである。

「……そ、そこで済ましちゃうかな……」

ちやうど建物のくぼみがあり、そこにしてしまえば終わってしま

うだろう……

「だ、駄目だ！そんなことしてしまったら俺の名声が汚れてしまう！」

もとから名声なんてこれっぽっちもないが、たっしょんをするのはどうかと思ったので俺は走り始めた。勿論、家でする為だ。

疾走する俺を誰もとめるものはいない。そりゃそうだ、一人も家から出てないんだから……

見えてきた家の明かりに一直線。階段なんて飛び降りて、俺は重たい扉を開けて……強烈な光が俺の目の前に現れたのだ。

——エピソード

目が覚めればそれは夢だった。そんな一般的なことで俺は物語を終わらせたくない……

「……………もう朝か」

窓の外には太陽がさんさんと輝いており、静かな俺の部屋には誰もいない。二階に向かって誰かがやってきているらしい、誰かの足音が聞こえ始めた。

「零時！いつまで寝てるのよ！」

扉がぱたんと開き、そこには俺の師匠であるセレネが立っていた。

「もうお昼よ！」

「ああ……………すまん」

「朝食、せっかく作ってあげて待ってたのに……………め、目を覚ますのが遅すぎなのよ！」

「？」

セレネは涙を流しており、俺はそれを不思議に思ったのだが……次の瞬間にはセレネの普段の表情である強気の表情になっていた。ああ、てっきり見間違えてしまったのだろう。なんせ、久しぶりに面を合わせるんだからな……？

「セレネ」

「何よ？」

「俺、どっか行ってたっけ？」

「……………行ってないわ。ただ、ちょっと昨日珍しく私の一撃が零時の頭に直撃したぐらいだわ」

「ああ、そうか……………」

俺にはよくわからない、あの出会いが夢なのか、本当なのか………ただ、ただ……………俺は目の前のセレネまでもが夢でなくて良かったと思った。だって、彼女は未だに起こったような表情をしているのだから……………でも、いつか……………いつか、また違う世界に行くのかもしれない。　　（END）

A..Aの終わり（後書き）

さて、Bの話しなのですが……Bでもやはり異世界での話しとなります。勿論、始まりはレストランで始まる予定です。Aとの話しも勿論関わってくる予定ですので待っていてください。まあ、いつになるかはわかりませんけどね。

B::プロローグ(前書き)

さて、新たな？冒険の始まりです。まあ、冒険はしませんけどね♪
勇者も魔王も出てきませんが、たまにはそんな話しいいんじゃない
んでしょうか。

B..プロローグ

B..プロローグ　（これまでの日常）

誰にだって克服できないものは存在する。たとえば、お化けだったりピーマンだったり人と人それぞれなのだが、俺の場合は他人だったりする。

俺が他人を苦手とする理由は

「相手のことが恐いから」だとかそういった対人恐怖症ではなく
「他人に触れられたくないから」という理由……………つまり、俺は
「潔癖症」なのである。

以前から他人に触れられるだけでぞぞっと……………その部分が感じてかゆくなってきたて頭の中がショートしてしまうのだ。

誰か、これを治してくれるような人はいないかどうか探してきたのだが、ありとあらゆるお医者さんにみてもらったのだが、誰一人として治すことは出来なかった。まあ、ある程度まで症状は治まってきたており、今のところは直接肌に触れない限りはぞぞっと感じることは無くなった。つまり、素手で握手などは駄目なのだが、手袋なんかをつけて握手すればいいと言うことである。

それ以降、俺は常に白い手袋をしており、好きな色も白色になった。

しかし、こうなってもやはり不便なものは不便であって一度じかに触れられると急いで洗い始めてしまうことが多々あるのである。これでは何も出来ず、いつの間にか学校にいくこともなくなってしまう……………今では完璧な引きこもり状態となっており、めったなことでは外に出ることはなくなってしまっている。

まあ、引きこもりといえは暗くて汚い部屋でパソコンをいじっているという印象が俺は強いのだが、俺の部屋には散り一つ、おいていない。これも潔癖症から来るものか知らないが、モデルルームとして写真を撮っても構わないというぐらい部屋は綺麗にしている。ち

なみに俺が部屋を汚くしていたら俺の夢に汚泥がおでい（おで）ま
ししてしまうからなのだが……

こほん、話を戻そう。

引きこもり状態となってから結構な日数が経っているのだが、それ
でもたまには学校に顔を出さないといけない。いや、既に高校三年
生には出席日数が足りないために進級は不可能なのだが、テストの
ときなどはきちんと顔を出していることは確かだ。そのたびにあた
りの連中は顔見知りが多いからちよっかいを出してきたりもするの
だが、そういうものを跳ね除けながら俺はテストを受けている。

「体にはノータッチでお願いします」

そういったたすきを友達にプレゼントされており、それは俺の部
屋の一角に置かれている。たんすの中にしまいこんでも構わんのだ
がそれはそれでなんだか悲しいのでいつか使う日が来るかもしれな
いという理由でおいているのだ。

そして、ここからがちよっとした本題なのだが……ああ、さっき
までの俺のことについての予備知識として知っておいてもらいた
いぐらいだ。心の隅っこにそっと転がしておいて欲しい。

レストランから戻ってきた俺は自室にちよっとした穴が開いてい
ることに気がついた。俺はその穴にまるで狼を恐れてあるくかわい
いかわいい子羊のように近づいていった。そして、そんな可愛くて
哀れな子羊の足に二本の腕が絡みついたのだった！

B：プロローグ（後書き）

前書きで言っていたこと、あれはあまり気にする必要はないと思います。目指すはとりあえず十五連作ですね。百回目はどういったことをしようか悩んでいるのですが……まあ、これもまた何か適当なものを考えたほうがいいでしょう。

A :: Aの始末1 (前書き)

いまさらですが、Aの話にちょっと戻りたいと思います。

A..Aの始末1

十五、

零時

「いや、まだAはきちんと終わってねえから」

フレア

「ああ、そうでしょうねー意味がわからない終わり方でしたから……」

零時

「ま、もうちょっとだけ俺に付き合ってくれ」

俺が元の世界に戻ってきて数日たったある日、俺の家のポストには古ぼけた手紙が入っていた。

「？」

裏側を見てもみるのだがそこには名前が書かれていない。俺宛の手紙に不安がよぎる。

「まさか……爆発か？」

開けた瞬間にドーン！これは大変だ！ペーパーナイフではなく爆弾処理班がこの手紙には必要だ……………

「なわけないか……」

馬鹿な考えはゴミ箱に捨て、俺は古ぼけた手紙を開ける。そして、その場で内容を確認めることにした。

「…………手紙の書き方なんて知りませんが、今、この手紙が零時さんのもとへ届いていることだけは知っています。ああ、そういうば零時さんがこちらの世界からいなくなって、数年が過ぎました。私も今では成人して母さんの手伝いをしていたりします。フェイルさんもフリーズ姉さんも元気で、ネリュ母さんはいつもどおりです。あのあと、ネリュ母さんからフェイルさんとフリーズ姉さんが私にしていることをして、私は嬉しかったです…………ちよつと寄り

道しちゃいましたね。あの時は私のわがままでこちらの世界に引き込んでしまって非常に迷惑なことをしてしまったと思っています。こんなことを言ってしまったら怒るかもしれませんが、零時さんをこちらの世界に引きずり込んだことを私は正直言っただ後悔してません。一方的に自分は帰ってしまったと思っているかも……いえ、零時さんはそこまで神経が細かい方じゃありませんね。とりあえず、私は何とか零時さんをもとの世界に戻す方法を見つけることが出来たのです。サプライズとして零時さんに渡したかったのでこれは見事に成功したといっているでしょう。あの時、フェイルさんも私たちの世界に行こうとしていたのですがそれも見事に押しとどめられて私はほっとしました。もう、二度と会えることなんてないと私は思います。だから、私はこの手紙にだけ、正直に零時さんのことをどう思っていたのか伝えたいと思います……私にとって零時さんは……」

俺はそこまで読んで手紙をぐしゃぐしゃにした。

「……ま、もう会えない奴にどう思われていようが構わないか……」

そして、それを魔法で燃やして散歩に向かうことにしたのだった。未練が無いといえは嘘になるし、もう一度あいたいという気持ちもないでもない……いや、ないほうが大きいかもしれんな。俺はそんなことを考えながら歩を進めたのだった。

A::Aの始末2（前書き）

さてさて、Aの始末第二段です。めちゃくちゃ短いですが、これもまた考えあつてのことなのでご了承下さい。

A..Aの始末2

十六、

「はぁ？ 異世界に行く方法？」

俺は魔法の師匠にそんなことを尋ねていた。ただいま、師匠はエプロンをつけて料理をしている真っ最中だ。

「ああ、どうしたらいけるんだ？」

「行っってどうするの？」

「それは……………」

行っってどうしたいということがあるわけでもない。俺はそんなことを理解していたので黙りこくってしまった……………

適当な言葉を思いつくことも無く、俺が黙ったままにしていると師匠は続ける。

「……………理由はいいいたくないのなら言わなくていいわ。それで、異世界にいききたいんでしょ？」

「……………ああ、いけるのか？」

「勿論よ、行ったことがあるのならいけるに決まってるでしょ。異世界の魔法がこちらの魔法と違っていてもこっちからあっちへの扉を開けちゃえばいいのよ……………」

師匠は立ち上がってエプロンをはずす。

「さ、行きましょ？」

「……………どこへ？」

師匠は黙ったまま俺の手を掴むとその場を静かに後にしたのだった。勿論、料理後の消火作業もきちんに行われていたりする。

家の庭で師匠は笑う。

「さ、行っってらっしゃい」

「は？」

師匠は指を鳴らした。

気がつけば俺の体は徐々にその姿を薄くしていくようであったのだが…………

「ええっ！まだ心の準備が…………」

ほら、いるだろう？飛行機が離陸するときは今までの罪を懺悔しとかないといけないとか…………とりあえず、そんな準備だ。

「…………零時、あっちに行っても体に気をつけてね？」

師匠はそういつて俺に手を振る。

「……………すまん」

「いって……………」

そして、俺の見ていたこれまでの景色は吹き飛んで…………

「れ、零時さん!？」

そこには数日前に見たことのある女の子の成長した姿があったのだった。

A..Aの始末3

十八、

果てしなく続く、砂の世界……そこには俺とフレアだけ、つまり二人だけの世界が広がっている。改めて気づく、これは緊急事態なのだ。

「いやあ、困っちゃいましたね」

「お前のせいで緊急の事態だと今まで気づかんかった自分が悲しいぜ……」

さて、これからどうしようか？確か、師匠は魔法で開けたのだろう。それならば、その弟子である俺に出来ないはずがないというのはちよつとした自意識過剰だろう。でもまあ、やってみる価値はありそう。

「フレア、ちよつとどいてくれ」

「え？」

扉を想像し、それをいかにしてこの世界に扉として創造するか考える……扉の形、色、重さにドアノブ……使い込まれ、想像しやすいものを俺の頭の中では製作していたのであった。

「出ですよ！異世界の扉！」

俺がそう叫ぶと俺たちの目の前にその扉が現れた。

「零時さん……これは？」

「扉だろう？」

そこに現れたのは非常口だった。上のほうで緑の人が走っているのが定番といったところだろう。

「ここを通ればこの世界から脱出できるんですか？」

「ああ、多分な……でも、どこに着くかはわからんぞ？だって、行き先なんて考えてもいなかったから」

失敗したのは扉だけを想像してしまったことだ。

この扉を開けたら別になんとも無いただの扉の可能性は否定できな

い。そして、それだけならしらけた空気で終わるのだろうが、行き先が化け物の目の前とかだったら先にこの扉をくぐった奴がぱくっ♪とその化け物に食われるだろう。フレアを先に行かせるわけには行かないだろう。俺はフレアにきちんと伝えてどうするかどうかたずねた。

「フレア、俺が先に行ったほうがいいか？」

「…………大丈夫です、私も少々なら魔法を使えるようになりましたからね♪大体、零時さんがそんなへまをしちゃうとは考えられません」

「フレア……………」

本当に精神面でも強くなったのだろう、フレアは屈託無くそう笑って俺より先に非常階段の扉を開けてその姿を消したのだった。

「……………」

どこにつながつているかわからないが、俺もフレアの後が続いてその扉をくぐることにしたのだった。意外とトイレとかにつくかもしれない。

A..Aの始末 終了(前書き)

なんとなくBADENDな感じだったA編の別の終わり方を書いてみました。フレアしかでてこなかったですが、これはこれでよかったと思っています。さて、次回はとうとう記念すべき第百回目！

A..Aの始末 終了

十九、

行き着いた先、そこはきちんとしたフレアの世界だった。

「…………ふう、戻ってこれたようだな」

「まあ、零時さんにとってはそうなりますね。私だってそうなんですけど……………」

俺はほっとしてその場にへたり込んだ。俺だけが冷や汗をかいていたところを見るとフレアは本当に俺のことを信じてくれていたのだろう。まったく、馬鹿な話だ。自分で自分を信用できないなんてな……………」

「零時さん、大丈夫ですか？ やっぱり、ワープの魔法ってそんなに疲れるんですか？」

「ああ、結構疲れるぞ」

気苦労のほうでは言わずに黙っておこう。せっかく戻ってこれたのだ、この世界にな……………」

「少し、お願いしたいことがあるんですけど……………いいですか？」

へたり込んでいる俺の隣にフレアは座る。フレアはどこを見るでもなく、上空を見ているようだった。

「ああ、何だ？ もう一度他の世界にいききたいとかぬかしたら逆さづりにしてやるぞ」

「いえ、そんなことは言いませんよ……………以前、零時さんがこちらの世界にやってきてきてもとの世界に帰るときはちょっとした道具を使ったんです。ですけど、あの道具がもう壊れてしまっ……………今度は絶対に私が私自身の力で零時さんを元の世界に戻したいんです！ だから、だから私が零時さんを戻せるようになるまでこの世界にいてくれませんか？」

「……………」

俺は口を閉ざして亀のごとく黙っておくしかなかった。そしてふ

と、誰が出したかわからなかったあの手紙のことを思い出した。

「お願いします！この世界にいる間だけ、私だけを見てください！」
「……………」

そう、最後までその手紙を読んでいない俺は月並み言葉ながら私にとつて……………という部分がいまさらながら気になっていた。

「……フレア、お前にとつて俺は何だ？」

たまらなくなって俺は自らその言葉を尋ねた。フレアは即座に答えることにしたらしい、口を開けて俺に告げる。

「私にとつて零時さんは私が間違つて召喚してしまった異世界の魔法使いです」

「……………そうか」

「でも、今回もそうであるように、私は責任を持って零時さんをもとの世界に戻したい……………そして、もっと、もっと零時さんに一緒にいてもらいたいし、わがままですけどもとの世界に還してしまつた事を酷く後悔していました。だから、だから今度は後悔しないように零時さんと一緒にいたいんです！無くちゃならない人なんです！もう、体の一部なんですよお！！」

涙を流しながらそんなことを言う。むう、まったく、いつの間に関フレアの中ではそこまで俺は崇高な存在になっていたんだ？

「……………ふう、それなら一緒にいてやるよ。まさか、そこまでの存在になつてるとは思わなかった」

「……………ふえ？」

「俺の中じゃフレア、お前は駄目な部分が多い奴だが……………いつかはお前をすごい魔法使いにしてやるよ。だから、俺の弟子になつてくれ！」

俺は頭を下げた。何故こんなことをしたのかわからないし、したかったのかもわからん。

「……………勿論です」

フレアは顔を上げてそんなことを言ってくれた。だから、だから俺はありふれたことなのだがこれが一番あつているだろうという行

動をとった。

「フレア、目、つぶってくれ」

「……………はい」

恥じらいながらも目をつぶったフレアの顔に俺は顔を近づけた。

そして――

「痛いですよお！」

「ばーか、目つぶっても攻撃避けるぐらいにならなきゃすごい魔法使いにはなれないぞ」

俺はフレアのデコにデコピンをしてやったのだった。不意打ちを食らったフレアはしりもちをついておでこをさすっている。

俺はそんなフレアの手を掴んで立たせてやったのだった。

「すいません……………けど、零時さんって空気読めませんよね？」

「……………ああ、よめないねえーま、明日からしごいてやるからきちんと覚悟しとけよ？」

「……………はいっ！！」

いずれ、もとの世界には戻ることが出来るだろう、だから、だからそれまでの間フレアをきちんとした魔法使いにしてやることが俺がやるべきことなのだろう。

明日から始まるであろう、フレアとの生活を俺は待ち遠しく思ったのだった。 (END)

御注文は？　　～一夜限りのパーティーで！～（前書き）

零時「お、百回記念だってよ？」瑞樹「まったく、作者の優柔不断さには舌をまくしかないね」零時「そうだよなあ、実際のところはさっさと百回記念を出そうとしたんだそうだがずるずる引き伸ばされたらしいからな」瑞樹「一年ジャストで百回目か……」零時「とりあえず、今回で百回記念です、皆さん。今回の話は独立した話なんで……」瑞樹「楽しんでもらえるとうれしいですね」零時「ちっ、途中からとられちゃった……百回続けられたのも皆さんの……」瑞樹「おかげです。僕のファンの皆、ありがとう！！」零時「しっこいわい！」

御注文は？　　～一夜限りのパーティーで！～

プロローグ

一人の男がいつも愛用している拳銃を取り出す。一般的に普及しているようなものでもないようで、他の拳銃に対してどこか似ているような特徴がないでもない。

必要の無い拳銃を懷に収め、彼は椅子から立ち上がる。

どこと無くかび臭い部屋を出て、めったに着ることの無いパーティー用の服を鏡の前で着てみる。

どうにも、こっけいな姿であって彼は首をすくめる。

相方は既に準備が終えていたようで、外のほうから彼を呼ぶ声が聞こえてくる。

これから行く予定となっているパーティー会場に何も起こらないという保障をしてくれるものなどないだろう。

保障をしてくれるという者がいたとしたら神様か超能力者………
…残念ながら、彼にはどちらの知り合いもいなかった。

一、

華やかなパーティー会場、どうやら誰かの長寿を記念して開かれたもののようだったが彼………剣山零時には関係の無いことだった。
「ふう、まったく………飯はうまいが話は長いな」

「おいおい、零時………そんなこと言ったらここから放り出されてしまうよ？」

隣に立つのは彼の親友である後鳥河 瑞樹はそういつて首をすくめる。

「わかってるって………だから他人に聞こえないようにして言うてるんじゃないか？」

「おいおい、僕に聞こえてるって」

そんな彼らにとってはいつものやりとりをしているといかにも貴

婦人といった感じの人たちがやってくる。

やってきた貴婦人に対して礼儀を知らない零時のほうは瑞樹の影に隠れるようにして後ろのほうに移動してしまった。

どうにも、こちらと話したがっているように見えたので瑞樹に零時は耳打ちする。

「瑞樹、ちよつと俺はトイレに行くから……………」

「はいはい、わかったよ……………僕がこの麗しの貴婦人たちと話をしておくよ」

瑞樹はそんな親友の逃げるための口実に対して苦笑しながらも承諾してくれたようで、自ら貴婦人たちの相手を買って出てくれたのだった。

「すまねえな」

そういつて零時はトイレへと向かうふりをしてパーティー会場から出たのだった。

今回、零時がこんな場違いな場所に來ていたのは彼の友人の女性が風邪を引いてしまったからだだった。

どうしても外せないというほどのパーティーだったそうで、その女性の代わりとして零時がいくことになる、補佐として瑞樹を連れてきたということである。

やはり、來たところでろくに話すことも出来ないので時間を潰すために庭に出た零時だった。

裏庭で殆ど人が來ない上に太陽が昇る頃になってもここには日の光は届かないだろうというぐらい暗い場所へとやってきたところ、やはり人は一人もいなかった。

冷静に何かを考えるのならこれほど都合よい場所は他にないだろう。

他にあるとしたらトイレの個室ぐらいなものか？

「ふう……………」

成人はしているが、酒が飲めない……………グラスを片手に上品におしゃべり……………とは到底いきそうにもない。

もっとも、彼の友人の女性がこのパーティーに出席していても同じことにはなっていただろうが……………

金ぴかに輝く像に噴水……………形作られた上に無駄に贅沢な庭を眺め、その端に要人警護にやってきたと思われるサングラスに黒スーツの男たちをちろりと眺める……………

「仕事、大変そうだよなあ……………」

彼も一時期はそんなことをしていたのだが、なんだか面倒になったのでやめてしまっていた。

正確に言うと色々と問題を起こしてしまい……………やめさせられたといったほうがいいだろうが、もともとやめる気でいたのでどちらでも良いのだろう。

そして、今はフリーターでいずれは就職したいと思っているのだがさて、どうしたものでしょうか……………と彼が考えていたところで人々のはなす声が聞こえていたはずの建物はちよつとした騒ぎ声となつて急に静かになってしまった。

「どうしたんだ？」

再びあの長寿のじいさんの話でも始まったのか？と思ひさらに知り合いの友人にパーティーがどうだったか尋ねられたときのためにスピーチを聞いておかないと思って彼は建物内部へと戻ることにしたのだった。

二、

建物内部へと戻った零時の目に廊下に倒れている人を確認する。

姿を確認したところ要人警護の人のようだった。

「どうしたんですか？」

触って確認してみるとどうやら眠っているだけのようで、怪我などとはしていないようだった。

「とりあえず、警察に連絡したほうがいいな……………」

零時は携帯をおもむろに取り出して人目につかないところを探して見つけられず……………いったん庭に出て連絡しようとしたが外へ通

じるはずの扉は何故か開くことがなかった。窓から出ようとしたのだが窓は壊れない。

何気なしに携帯をみてみれば……………

「あれ？あ、そういや携帯の電池充電してくるのを忘れてたぜ」

やれやれ、どうも調子が狂っていかんかと呟いて零時は誰も立っていない廊下を歩き出したのだった。

零時は廊下を歩きながら少しの時間懐に手をつっこんでいたが次の瞬間にはその手には既に短銃が握られていた。

短銃を握り締めながら零時は何者かによって電気を消されてしまった廊下を静かに歩く……………零時の表情はこれが余興だったのならどれほど面白いかと思ひながら不謹慎ながらもこの状況を楽しんでいるようにも見えた。

そんなことを考えている彼の耳に誰かが走ってくる声が聞こえてくる。

「さあて、ゾンビが出るか吸血鬼がでるか……………」

零時はそのまま廊下の脇にあった大きめの植え込みに隠れる。

「はあ……………はあ……………」

相手は誰かに追いかけられているのか、既に息が上がっているようだった。

零時に気がついていいるわけではないようで、植え込みに隠れている零時はその相手の視線がまっすぐ向いておりこちらに気がつくようではないようだを見て取れた。

「ていつ！」

「きゃあっ！！！」

零時は何を思ったのか植え込みの前を駆け抜けようとした相手を転ばせる……………

「あいたた……………」

「おい」

倒れた相手にたって話しかける。

「うう……………」

相手は心底おびえているようで今にも泣きそうな顔をしているし、腰が抜けてしまっているようだ。

「そうおびえるな、あんた、パーティーの客か？」

相手は薄緑色のドレスを着ており、その姿を見ればパーティーの客だということが一発でわかるだろうが、零時は確認したまでである。

「そ、そうよ……そ、それ以上近寄らないで！近寄ったら噛み付くわよ！」

「わかった、近寄らないから騒ぐなって！」

零時は近寄らずに相手に話しかける。

「……………とりあえず、落ち着け……………俺はあんたの敵じゃない、俺もパーティーに来てた客だ……………それで、何があったんだ？」

「……………敵じゃないって……………その手に持つてるものは何よ？普通はそんなものを持ってないわ！あんた、顔が悪人面してるもの！」

拳銃を震える指先で示して少女は尋ねる。

零時は少女が言ったことに対してむっとしたが、自分はこの娘よりも年上なのだ、だから大人の態度をしないといけないとがんばって自制したのだった。

「これか？これは……………ほら、のどが痛いときにのどに撃っていがをおさめる奴だ」

「嘘言いなさいよ！それが銃ってことはわかってるんだから！」

「騒ぐなっての！」

零時は拳銃を懷に戻して無抵抗であるとポーズで示した。

「あんた、何に追いかけられてたんだ？」

「……………黒服の男よ……………今に追いついてくるわ、あんたの仲間でしょ？」

「ちげえっての……………そう思うのなら逃げろ、ちなみにこの館からは逃げられんようだがな……………」

「そういつて後ろから撃つんでしょ？」

女の子は零時のほうを向いたままゆっくりと立ち上がる。

「撃たない」

「撃つ」

「撃たない」

ダーン！！

女の子の足元に弾丸がのめりこむ……

「ほら撃った！」

「おいおい、俺じゃねえって……」

少々表情を強張らせながら零時は後ろを振り向く。

そこには彼女が形容した黒服の男と思われる人物が黒光りする拳銃を手に月光に照らされて立っていた。

「……まさか、たかが小娘一人だと思っていたが仲間を呼んでいたとは……」

「ほら見ろ、俺が撃ったんじゃないだろ？そもそも、拳銃も持たないのにどうやって弾丸を撃つんだよ？」

「そ、そんなことを言ってる場合じゃないでしょ！」

確かに、そんな状況ではなかった。

零時は両手を挙げて無抵抗のポーズを維持していた。

「無抵抗、なにもしません……その娘は勝手に何か引っかけたのかけたのを見たんで通りすがりの一般人が気まぐれで助けただけです」

「な、何よそれ！あなたのせいでしょ！！」

気がついてたか……と零時は思ったのか舌を出してだんまりを決め込む。

「……………」

男は零時に銃を向けて注意しながらも徐々に娘のほうに近づいていき、女の子は銃に恐怖したのか動けないであっという間に縄で縛られてしまった。

「ちょ、ちよつと痛いじゃない！」

「黙れ……………」

静かに女の子に銃を向けたのがこの男の命取りだった。

バキッ

というなにやら不穏な音がして男はその場に崩れ落ちた。

「……………ま、日ごろからきちんと練習してた甲斐があったな」

零時は首をぐりぐりと動かしており、両手を挙げたままだった。

「……………」

縄に縛られたまま、女の子はそんな零時を見ていた。

「さあて、どうしよっかなあ……………俺のことを信じてくれないような悪い子はこのまま放置していつちゃおうかなあ？」

零時はにやけた笑みを女の子に向け、首をすくめる。

それに対して女の子はキッと零時を睨みつけて告げる。

「勝手にどこにでも行けばいいじゃないの！」

「あっそ、それならそうさせてもらうわ……………いやあ、どこに何がいるかどうかさえわからないのに残念だなあ」

零時はそういうと男がやってきたほうに歩き出す。

「ちょ、ちよっと！」

「何だ？」

「縄ぐらい解いていきなさいよ！」

顔をしかめながら零時は振り返る。

「……………なんでだ？何であんたに目の敵にされている俺がわざわざあんたの縄を解いてやらないといけないんだ？」

「あんたじゃないわ！私はきちんと律咲^{りっさき}鈴^{すず}って名前があるもの」

「ああそうかい、それじゃ鈴ちゃん、俺は残念ながら俺のことを眼の敵にする鈴ちゃんの縄を解いてやるほどやさしくお兄さんじゃないんでね……………白馬にまたがった王子様が鈴ちゃんを助けに来ることを祈るんだな」

右手を軽く上げて零時は階段のある踊り場へと移動しようとして

……

「わかったわよ！あんたのことを信用するわよ！」

「やれやれ、早くそう言っておけば助けてあげたのにな」

回れ右をして零時は一瞬にしてとらわれのお姫様を助けてあげたのだった。

「これからどうするのよ？」

「さあな、それをこれから考える」

「何よ、その答え」

「鈴、ちよつと黙っててくれ……明日の晩御飯を考えてるから」
少々残った縄の跡を気にしながら零時は隣を歩いている鈴を相手にしようもしない。

「何よ！その態度は！」

「何で？真剣に考えてるんだからな……とりあえず、鈴、お前はさっさとこの館から出ろ……さもないとなあ……」

「いたぞ！」

ダーン！！

「こんなことになるぞつと……」

「きゃああ」

零時は鈴を巻き込む形で近くの開いていた部屋に隠れる。

「おいおい、鈴が騒ぐから見つかっちゃまったじゃねえか……」

ダーン

「つと、そんなこと言ってる場合じゃないな………鈴、ここにいろよ？お嬢様が出てくるもんじゃないからな」

黙りこんで睨みつけてくる鈴に念を押して零時は短銃を取り出して部屋の外に出て行った。

零時が出て行つてすぐに相手の放った銃声がとどろいたが、次の瞬間には騒ぎ声が、そして瞬時に断末魔のめちやくちゃ短い叫びに変わつて数分後、零時は戻つてきた。

「ふう、二人だったか……これで今のところ三人はおしおき完了つてところだな……鈴、怪我はないか？」

「……あんたが部屋の中にいろつて言つたから怪我なんてしてないわよ……怪我があるとしたらあんたが私をこの部屋に押し込んだときに足をひねつたぐらいだわ……」

鈴がぶすつとした調子でそう告げると少々あせつた感じで零時は鈴のドレスを上上げる。

「な、何するのよ！」

「……わりい、ったく……やっぱりあの仕事やめといてよかったな……こんなんじゃない仕事にならねえからなあ……鈴、ちよつとその椅子に座ってくれ」

頼んでいるような言葉だが有無を言わさぬものがあつて鈴は不機嫌な表情ながらも黙つてそれに応じたのだった。

「……名前、なんていうのよ？」

「あ？」

足にテーピングをしている零時に鈴はそう尋ねる。

部屋はほのかな明かりがちよつとだけともっているだけで何かが動けばわかる程度で色などは判断できないだろう。

「名前、あんたの名前よ」

「……いわなかったか？」

「いってないわ」

「そうか……俺の名前は零時だ……剣山 零時……タダのアルバイターいや、フリーターだな……これでよし……まだ痛むか？痛むならこの部屋に隠れていいぞ？」

跪いているような姿勢で零時はしたから鈴を眺める。

「こ、こんな暗い部屋にいろつていうの！？」

「ああ、悪化するかもしれないからな」

「……………誰が私を護るのよ？」

その言葉に不思議そうに首をかしげる零時。

「何だ、それ？」

「縄を解いてくれたでしょ？私を助けてくれたじゃない！首をつつ
こんだら最後までやるのが人の道ってものじゃないの？」

鈴はそう言うが零時は首をすくめる。

「何いってんだよ……………お前の足を心配してんだよ、俺は」

「私が死んじやったら足の心配したって意味ないでしょ！」

もつともなことをいう鈴に対して零時は再び首をすくめる。

「……………足は大丈夫なのか？」

「大丈夫よ」

「そーかい、それなら一緒に来るか？それなら絶対にお前を護れる
からな」

「……………ついていくわよ」

ぶすつとした表情のまま鈴は零時よりも先に部屋を出て一人でず
んずん進んでいったのだった。

それを後ろから眺めている零時は一言、

「まったく、素直じゃないのがあの年頃か？」

と呟いて鈴を追いかけていったのだった。

――

慎重に二人して歩いていくと厨房らしきところにやってきた。

「……………鈴、ちょっと俺の後ろに隠れるような形でついてきてくれ」

「わかったわ」

腰を低くして厨房内の様子を確認するとどうやらコックたちが捕
らえられているようだった。

先ほどのような男たちの姿を探してみると一人、銃を持っている
男が食事をしている最中のようなようだった。

警戒しているのかやはり左手には銃を持っており、右手にフォーク
を持って肉を食べている。

「……………隙だらけだよな」

零時は瞬時に相手の隣に立って口を開くと共に引き金を引く。
相手はそのまま倒れて動かなくなり、零時は首をすくめる。

「……………死んだの？」

「いや、寝てるだけ……………信じてくれないならためしに撃ってやろうか？」

そういう零時の腰辺りを鈴ははたく。

「冗談だよ、冗談……………本当は人数とかを聞きたかったんだが……………どうにも危ないまねはしたくないんでね……………」

「そんなことより、今はコックたちを助けるほうが先決でしょ？」

「はいはい、わかってますって……………ほら、ナイフ……………人質を間違えて切るなよ？」

「そんなへまはしないわよ！」

近くに縛られているコックを縄から解放するために零時と鈴はそれぞれ近づいていって猿轡や縄を解いていく。

ざっと二十人ぐらいのコックを助けて零時がコック長と思われる人物に話を聞き始めた。

「この場所にやってきたのは何人ですか？」

「さっきの一人だ」

「そうですか、それならこの中に怪我をしている人とかはいますか？」

「いねえ、皆あんたたちのおかげで助かったぜ」

「それはどうも……………一階の正面玄関からは多分もう逃げ出せると思いますので速やかにここから退去して警察を呼んできてもらえないでしょうか？途中、この男たちの仲間たちがいるかもしれないですが放っておいてもらって構いません」

「わかった、それに従う」

コックたちはそのまま（中には先ほど銃を持っていた男に対しての復讐なのかその顔面にキーキをぶつけるコックもいた）零時がいったところへ向かってフライパンやらフライ返しやらで武装して廊下を駆け抜けていったのだった。

「鈴、お前もいなくていいのか？」

「……………いいわ、正面玄関ってここから結構距離があるから疲れるもの……私、疲れるのは嫌いだわ」

「そうかい、それなら足元に気をつけてついてきてくれよ」

零時はそういつて再び廊下に出て歩き始めたのだった。

廊下を歩き始めてすぐに鈴は零時にたずねる。

「……………ねえ、なんでそんなに強いのか？」

「強い？何のことだ？」

後ろを振り返ることもなく、ぎりぎりで声が聞き取れるほどの大ききで零時は話しながら廊下を歩いていく。

「零時よ、零時」

「俺？ま、運が強いってことにしといてくれ……………俺は類まれなる幸運の男だからな」

「ふん……………」

「あ、その声は信じてないな？食玩で狙ったおまけを当てれるほどの強運の持ち主なんだぞ、俺は」

本当だぞと念を押しながら零時は歩いていたのだが途中で鈴に声を出す。

「鈴、ちょっとここで座って待ってろ」

「え？」

そういうが早いか零時はあっという間に走り去っていき、何かを背負って戻ってきた。

「救助」

背負ってきたのは少年で、鈴よりも年齢が一つか二つほど低いだろう。

「少年、大丈夫か？」

零時はその少年に話しかけると、少年は目をゆっくりと開けていたのだった。

「ん……………」

少年の名前は田中 太郎だそうだ。

どうやら鈴の知り合いのようだった。

「僕が目覚ますとあなた方がいたというわけです……………それ以前はパーティーで誰かと話していたような記憶があるのですが、覚えていません」

「太郎君は田中グループの御曹司なのよ」

「そうかい、怪我が無くて何よりだったな……………田中君、君はパーティー会場にいたんだろ？」

その問いかけに首を縦に振る太郎

「ええ、いましたよ」

「何人ぐらいの犯人たちが入ってきた？」

「合計で十人ですね」

「そうか……………」

なにやら思うところがあるのか零時は頭の中で計算しているようだった。

「……………残り六人って所か？とりあえず、パーティー会場を覗いてくるから鈴、お前は太郎君を連れてひとまず安全なところに行け」

「安全なところって？」

「そりゃ、この建物を出ることだな……………俺、わりいが方向音痴でな……………どっちが出口か良く知らん」

「それならまずあなたがパーティー会場についていけないじゃないの……………」

鈴がそういうと太郎が口を挟む。

「道がわからないのなら任せてください。ここ、僕の父が立てた建物ですから内部は熟知しています」

「そうかあ……………うん、それじゃ太郎君に悪いが道案内頼むとするか……………」

こうして、太郎、零時、鈴の順番でひとまずパーティー会場に向かうことになったのだった。

パーティー会場の扉は締め切られており、太郎が率先して中を見たのだが身長が届かないのか中をよく見ることはできないようだった。

「……………」

「零時、ちょっといい？」

なにやら様子のおかしい鈴を零時は見る。

「何だ？誰かいたのか？」

「いや……………トイレにいきたいんだけど？」

「……………いつて来い、できればそのまま戻ってくるな」

鈴はそういつて近くのトイレを探しに旅立ち、太郎と零時がその場に残る。

「……………太郎、お前嘘ついてるだろ？」

「はい？何についてですか？」

首をかしげる太郎に対して零時は視線を注ぐ。

「お前の身長じゃ見えなかったかもしれないが、俺の視点からじゃちょうど窓があつてそこを介して廊下の鏡に当たって中が見えたんだよ……………それと、だ……………」

零時は懷から何かを取り出すとそれを太郎に見せた。

「これ、お前の手下が持ってたぜ？」

零時がその手に握っているものは『偉大なるボスのために』と書かれている太郎の写真だった。

「……………やれやれ、まったく、使えない上に僕の足を引っ張るとはね……………あの連中には失望したよ」

「お前、何が目的だ？」

ゆっくりと歩きはじめる太郎に零時は尋ねるが、既に拳銃を握っていた。

「……………意味がわからないだろう？」

「あ？」

「意味がわからなくて結構さ……………それより、一つだけ聞かせて欲しい」

「何をだ？」

「鈴さんがいるところでも充分話せたと思うんだが何で話さなかったんだい？」

「……………あいつがいるとややこしそうだったから……………ちょうど似たような友人を一人もっているんでね」

「そうかい……………それじゃその氣遣いに感謝して今日のところは素直に引き下がることにするよ……………零時君、次を楽しみにしてくれ……………次はこうもあっさりと引き下がらないから……………」

太郎はそういうと近くの窓から脱出し、闇夜にまぎれてしまった。「つたく、この町も安全じゃねえな……………さてと、瑞樹を拾って今日のところは帰るとするか」

零時は聞こえてきたパトカーのサイレンに顔をしかめると扉を静かに開けて中に入ったのだった。

「瑞樹、帰るぞ」

返事の無い友人を肩に担いで零時はパーティー会場を後にしたのだった。

そして、零時と太郎がいなくなったあとに鈴は戻ってきたのだが

……………

「君、大丈夫か！」

「被害者確保！！怪我などはしていないようです！」

「え、あれ？零時は？零時！零時どこにいるの！」

—————

エピソード

「謎の襲撃者、田中グループの御曹司行方不明！！だってさ」

飄々とした男が新聞を傍らの男に見せる。

「だってさってなあ……………俺たち貧乏人にはどうでもいいことだろ」

「おいおい、社会性が無いなあ……………ところで、学校で寝てて寝言で言っていた鈴ってどんな娘さんだい？」

「ちっ……………また余計なことを……………大学で寝るもんじゃないな……………そんなときの事件の被害者の一人だ」

「ふうん」

「ま、どっかのお嬢様かも知れねえな……おっと、携帯に電話がはいった……」

男は携帯を手にして……新聞を未だに読んでいる男にいやそうな顔をして告げる。

「……まったく、お前の探知能力には脱帽だぜ……」

「そうかい？」

電話の相手は男が受話器から耳を話したのを悟ったらしい。

『ちよつと零時！ちゃんと聞いているの？今、この前のお礼をしにきてあげたわよ！』

〈Fin〉

B..エピソード（前書き）

さて………今回で終わりとなりましたが、ちょっと違う終わりしたいと思います。

B…エピローグ

B…エピローグ

瑞樹

「どうも、零時の親友の瑞樹です」

セレネ

「こんなにちは、忘れられている可能性が高いセレネです」

瑞樹

「さて、今回で終わりとなってしまいました……………これも作者の不手際という奴でしょう」

セレネ

「……………いや、零時は確か闇に飲み込まれているところじゃなかった？これからなんだか新しい話しが始まりそうだったんだけど？」

瑞樹

「……………残念ながら零時は作者がAの始末だとか百話記念だとかやっていくうちに飲み込まれたってことになってますね（手元の書類を見ながら）」

セレネ

「ああ、なるほど……………って主人公不在で終了!？」

瑞樹

「そうなるねえ……………」

セレネ

「飲み込まれた零時は？」

瑞樹

「さあ？どこかで生きていくんじゃない？零時の動向が気になるって人がいたら零時の死に様が見たいと感想くれたら作者が書くかもよ？」

セレネ

「……………そのときは私も出たいなあ……………」

瑞樹

「作者しだいだねーま、それはさておき、今回で本当に終わりになりましたが……」

セレネ

「本当に終わるの！？作者の冗談じゃないの！？」

瑞樹

「おいおい、作者は非常に優柔不断なんだよ？確かに終わらないって可能性もあるかもしれないけど、終わりは終わり」

セレネ

「何それ？意味わかんない！」

瑞樹

「じゃ、あっち行ってなさい………さて、それでは改めまして、これまでこの小説を応援してくださった方、感想くれた方、短編から読んでくれている方とはええと………」

セレネ

「私を応援してくれた方」

瑞樹

「えっとああ、そうだった………評価してくれた方、ありがとうございます」

セレネ

「機会がありましたらまた会いましょう！」

瑞樹

「やれやれ、君はもう出ないかもしれないんだけどね………」

セレネ

「おーまいがーっと」

（END）

B..エピソード（後書き）

今回で終了とさせていたことになるました。本文にもあるとおり、誰か零時の消息を知りたい方がいた場合 continué を書きたいと思っています。それではみなさん、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6009b/>

御注文は？～魔法使いで！～

2010年10月15日06時55分発行